高松市埋蔵文化財調査報告　第137集

木太鬼無街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊

北　山　浦　遺　跡

2012年3月

高松市教育委員会

木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第2冊　北山浦遺跡

二〇一二年三月

高松市教育委員会

1　北山浦遺跡遠景（南西から）

2　北山浦遺跡と石清尾山古墳群（南から）

450
332
314
449
456
325
331
284
719
586
448
836
283
457
447
464
589
174
582
302
476
877
867

北山浦遺跡出土土器

1　弥生時代前期土器

2　粘土塊

3　大型粘土塊

1　壺形土器の文様

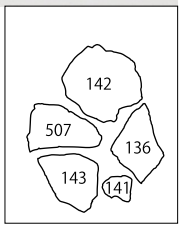
2　突帯文土器の文様

1　石鏃　　2　石剣

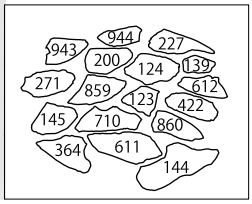
3　石鏃　　4　石包丁

1　スクレイパー①

2　石鏃および剥片



3　スクレイパー②



1　磨製石斧　　2　磨石と台石

3　様々な石材　　4　班レイ岩

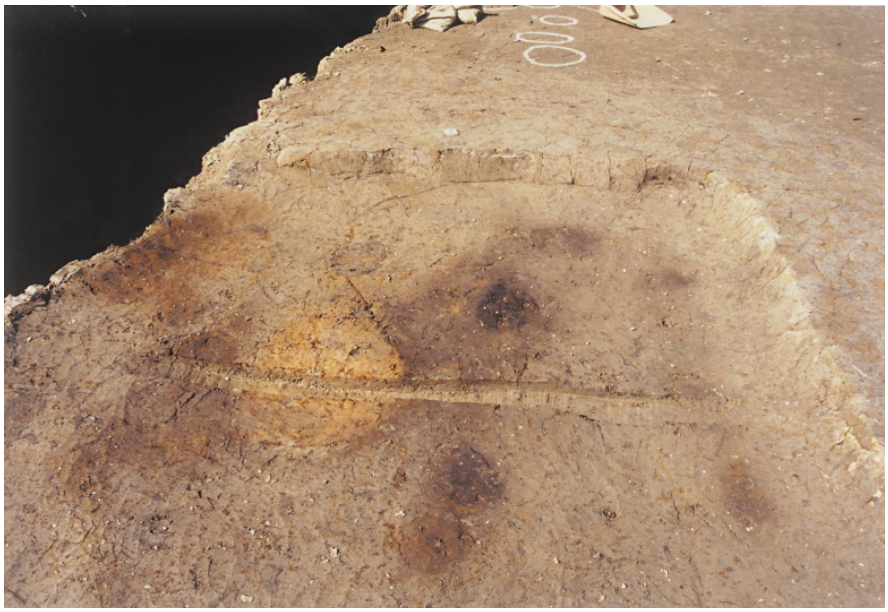
1　SX19 焼土検出状況①（南から）

2　SX19 焼土検出状況②（西から）

3　SX19 焼土検出状況③（北から）

1　SX19 焼土堆積状況（西から）

2　SX19 硬化面検出状況（北から）



3　SX19 床面検出状況（東から）

1　SX20（南西から）

2　SX06・08（北から）

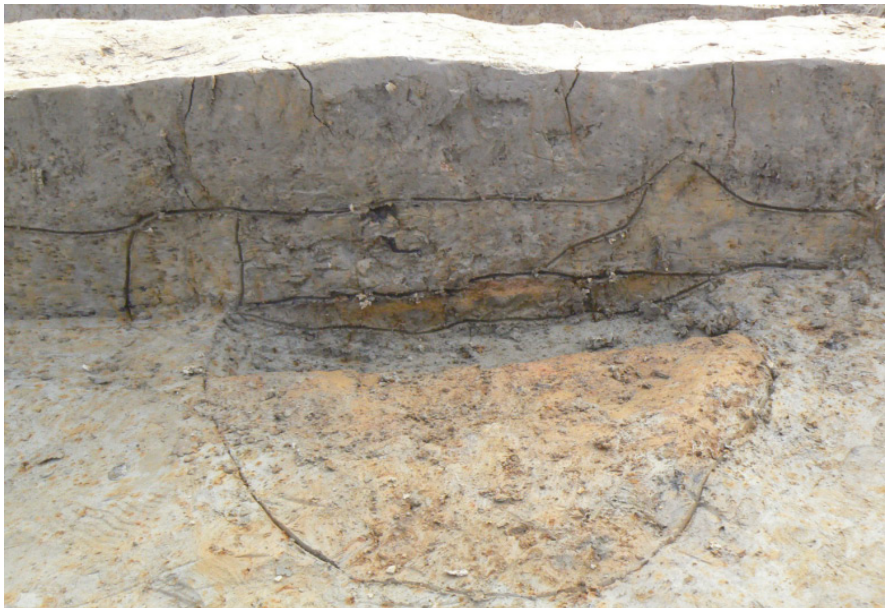
3　SX21 検出状況（南から）

1　SX03（南から）

2　SX03 焼土（北から）

3　SX09（北西から）

1　SX09 焼土①（北から）



2　SX09 焼土②（北から）

3　SX13 焼土（北から）

1　SX11 焼土検出状況（東から）

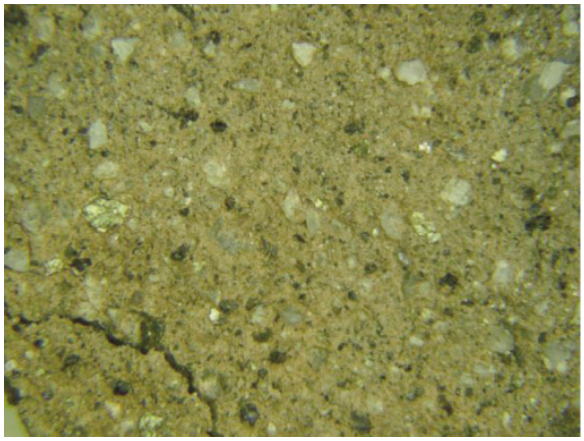
2　SX11 堆積状況（南から）

3　SX11 柱穴堆積状況（南から）

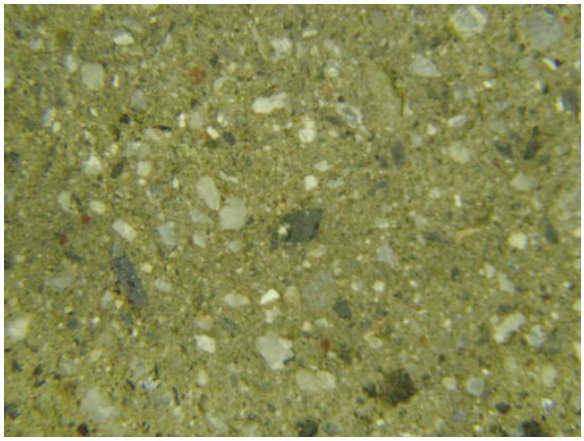
1　SX05 焼土検出状況

2　SK11 土層堆積状況（北から）

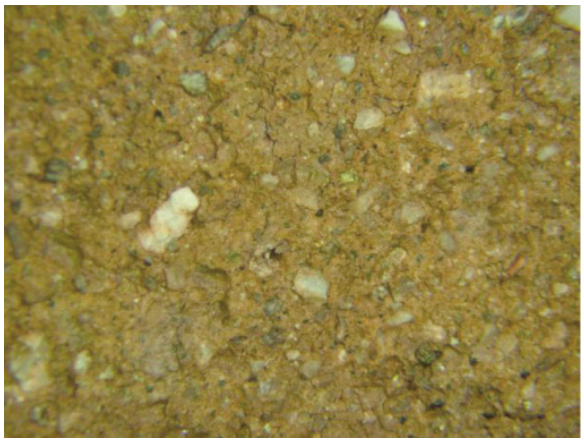
3　SK21 土層堆積状況（南から）



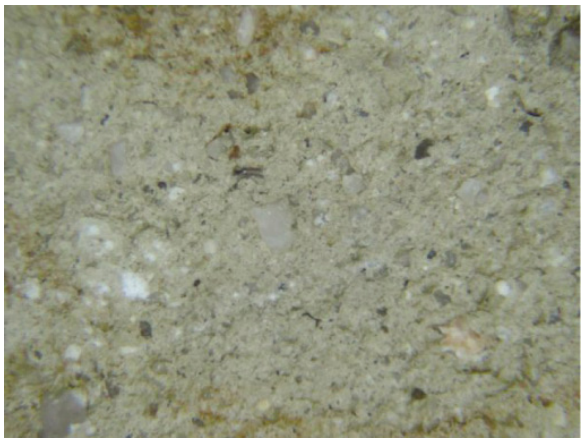
1　B 群，1 類（試料番号 33）



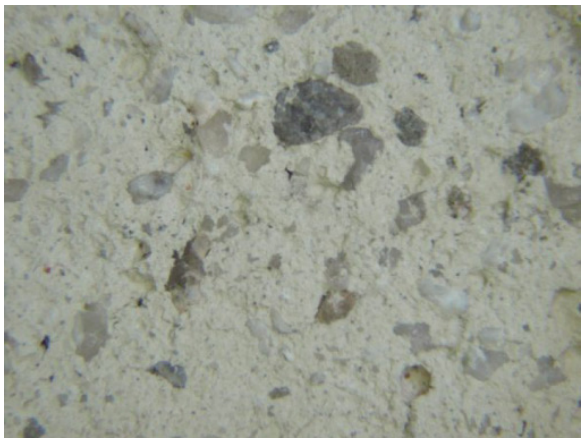
2　B 群，1 類（試料番号 5）



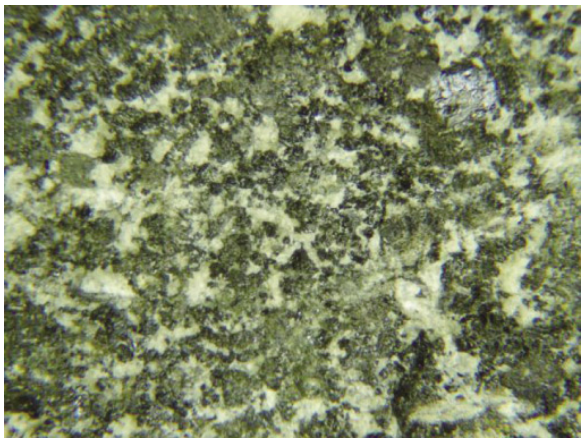
3　B 群，1 類（試料番号 7）



4　A 群，2 類（試料番号 29）



5　A 群，3 類（試料番号 17）



6　斑レイ岩原石

0　3mm

高松市埋蔵文化財調査報告　第137集

都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊

北　山　浦　遺　跡

2012年3月

高松市教育委員会

例　　言

1　本書は，都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第２冊で，北山浦遺跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本報告書の執筆は，渡邊誠が第１～３章(石器を除く)および第５章，船築紀子が第３章の石器および第５章，池見渉が第５章を執筆し，第５章については文責を文末に示した。編集は渡邊が行った。なお，第４章は岡山理科大学白石純氏より玉稿を賜ったほか，パリノサーヴェイ株式会社，吉田生物株式会社の報告書を編集し，掲載した。

3　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々から御教示および御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである（五十音順，敬称略)。
岡山理科大学，瀬戸内海歴史民俗資料館，香川県埋蔵文化財センター，信里芳紀，乗松真也，長井博志，徳澤啓一，渡部明夫，深澤芳樹，菅榮太郎，濱田充延，河合忍，平井典子，米田克彦，森下英治，古野徳久

4　本報告の高度値は海抜高を表し，方位は座標北を示す。

5　出土遺物の実測図は，土器・木製品は1/3，1/4，1/6，1/8，石器は2/3，1/2，1/3，遺構の縮尺については図面ごとに示している。

6　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　　次

第 1 章　調査の経緯と経過 …… 1
第 2 章　地理的・歴史的環境 …… 4
第 3 章　調査の成果 …… 9
第 4 章　自然科学分析 ……155
第 5 章　考察 ……179
遺物観察表 ……207

挿 図 目 次

第 1 図　木太鬼無線街路事業に伴う試掘調査箇所 … 1
第 2 図　高松市および市域における位置図 …… 4
第 3 図　北山浦遺跡周辺の遺跡分布図 …… 6
第 4 図　調査区の区割り図 …… 9
第 5 図　弥生中期土器分類図 ……10
第 6 図　石鏃分類図 ……12
第 7 図　遺構配置図 ……14
第 8 図　WN･WS区遺構配置図 ……16
第 9 図　EN･ES区遺構配置図 ……18
第 10 図　調査区西側 北壁土層 ……20
第 11 図　調査区東側 北壁土層 ……22
第 12 図　SH01 炭化材等検出状況 ……24
第 13 図　SH01 平･断面図 ……25
第 14 図　SH01 断面図 ……26
第 15 図　SH01 出土遺物① ……28
第 16 図　SH01 出土遺物② ……30
第 17 図　SH01 出土遺物③ ……31
第 18 図　SH01 出土遺物④ ……32
第 19 図　SH01 出土遺物⑤ ……33
第 20 図　SH01 出土遺物⑥ ……34
第 21 図　SH01 出土遺物⑦ ……35
第 22 図　SH01 出土遺物⑧ ……36
第 23 図　SH01 出土遺物⑨ ……37
第 24 図　SH01 出土遺物⑩ ……38
第 25 図　SH01 出土遺物⑪ ……39
第 26 図　SH01 出土遺物⑫ ……40
第 27 図　SH02 平・断面図 ……41
第 28 図　SH02 出土遺物 ……42
第 29 図　SH03 平・断面図 ……43
第 30 図　SH03 断面図 ……44
第 31 図　SH03,SX10 出土遺物① ……45
第 32 図　SH03 出土遺物② ……46
第 33 図　SH03 出土遺物③ ……47
第 34 図　SX10 平・断面図 ……48
第 35 図　SH04 平・断面図 ……49
第 36 図　SB01 平・断面図 ……51
第 37 図　SB02 平・断面図 ……52
第 38 図　SB03 平・断面図 ……53
第 39 図　SB01・03 出土遺物 ……54
第 40 図　SX03 平・断面図 ……56
第 41 図　SX03 出土遺物 ……57
第 42 図　SX06 平・断面図 ……58
第 43 図　SX06 出土遺物 ……59
第 44 図　SX07 平・断面図 ……60
第 45 図　SX07 出土遺物 ……61
第 46 図　SX08 平・断面図 ……62
第 47 図　SX08 出土遺物① ……63
第 48 図　SX08 出土遺物② ……64
第 49 図　SX08 出土遺物③ ……65
第 50 図　SX09 平・断面図 ……67
第 51 図　SX09 出土遺物① ……68
第 52 図　SX09 出土遺物② ……69
第 53 図　SX13・14 平・断面図 ……71
第 54 図　SX13 平・断面図 ……72
第 55 図　SX13 出土遺物① ……73
第 56 図　SX13 出土遺物② ……74
第 57 図　SX14 平・断面図 ……75
第 58 図　SX14 出土遺物① ……76
第 59 図　SX14 出土遺物② ……77
第 60 図　SX13・14 出土遺物 ……78
第 61 図　SX15 平・断面図 ……79
第 62 図　SX16 平・断面図 ……81
第 63 図　SX16 出土遺物 ……82
第 64 図　SX17 平・断面図 ……83
第 65 図　SX17 出土遺物① ……84
第 66 図　SX17 出土遺物② ……85

第 67 図　SX18 平・断面図 ……87
第 68 図　SX18 出土遺物① ……88
第 69 図　SX18 出土遺物② ……89
第 70 図　SX19 検出状況図 ……90
第 71 図　SX19 平・断面図 ……91
第 72 図　SX19 出土遺物① ……92
第 73 図　SX19 出土遺物② ……93
第 74 図　SX20 平・断面図 ……95
第 75 図　SX20 出土遺物① ……96
第 76 図　SX20 出土遺物② ……97
第 77 図　SX21 平・断面図 ……98
第 78 図　SX21 断面図 ……99
第 79 図　SX21 出土遺物 ……100
第 80 図　SK01・04・05・06・09・
11・14・16・24 平・断面図…102
第 81 図　SK30・31・32・34・37・
39・42・43 平・断面図…103
第 82 図　SK01・04・05・06・09・16・24・
30・31・39・42・43 出土遺物…105
第 83 図　SK21 平・断面図 ……107
第 84 図　SK21 出土遺物 ……108
第 85 図　SK26 平・断面図 ……109
第 86 図　SK26 出土遺物① ……110
第 87 図　SK26 出土遺物② ……111
第 88 図　SK27 平・断面図 ……112
第 89 図　SK27 出土遺物① ……113
第 90 図　SK27 出土遺物② ……114
第 91 図　SP 平・断面図 ……116
第 92 図　SP 出土遺物 ……118
第 93 図　SD01・03・05 平・断面図 ……120
第 94 図　SD08～11 平・断面図 ……121
第 95 図　SD12 平・断面図 ……122
第 96 図　SD01・03・05・07・08・10・
11・12 出土遺物①…124
第 97 図　SD01・03・05・07・08・10・
11・12 出土遺物②…125
第 98 図　SR01 平面図 ……126
第 99 図　SR01 木製品出土状況平面図 ……127
第 100 図　SR01 断面図 ……128
第 101 図　SR01 出土遺物① ……129
第 102 図　SR01 出土遺物② ……130
第 103 図　SR01 出土遺物③ ……131
第 104 図　SR01 出土遺物④ ……132
第 105 図　SX01 平・断面図 ……134
第 106 図　SX01 出土遺物① ……135
第 107 図　SX01 出土遺物② ……136
第 108 図　SX02 周辺平・断面図 ……137
第 109 図　SX02 平・断面図 ……138
第 110 図　SX02 出土遺物 ……139
第 111 図　SR02 平・断面図 ……141
第 112 図　SR02 出土遺物① ……142
第 113 図　SR02 出土遺物② ……143
第 114 図　SX04 平・断面図 ……144
第 115 図　SX05 平面図 ……145
第 116 図　SX05 断面図 ……146
第 117 図　SX04・05 出土遺物 ……147
第 118 図　SX11 平・断面図 ……148
第 119 図　その他の出土遺物① ……151
第 120 図　その他の出土遺物② ……152
第 121 図　その他の出土遺物③ ……153
第 122 図　その他の出土遺物④ ……154
第 123 図　北山浦遺跡内出土土器の胎土比較 ……156
第 124 図　高松市内出土土器と北山浦遺跡
出土土器の胎土比較…156
第 125 図　北山浦遺跡出土土器試料① ……157
第 126 図　北山浦遺跡出土土器試料② ……158
第 127 図　樹種調査写真No.1～No.3 ……163
第 128 図　樹種調査写真No.4～No.6 ……164
第 129 図　樹種調査写真No.7～No.9 ……165
第 130 図　調査地点の位置および模式柱状図 ……168
第 131 図　花粉化石群集の層位分布 ……171
第 132 図　植物珪酸体群集の層位分布 ……173
第 133 図　花粉化石写真 ……176
第 134 図　植物珪酸体写真 ……177
第 135 図　建物規模分布図① ……180
第 136 図　建物規模分布図② ……181
第 137 図　北山浦遺跡遺構変遷図 ……186
第 138 図　高松平野弥生時代中期～古墳時代
前期初頭主要遺跡位置図…190
第 139 図　高松平野弥生時代中期～古墳時代
前期初頭における「建物群」累積状況…191
第 140 図　坂田廃寺下層遺跡出土弥生土器 ……196
第 141 図　石器の遺構別出土量と石器組成 ……200

挿 表 目 次

第 1 表　試掘調査一覧 …… 1
第 2 表　整理作業工程表 …… 2
第 3 表　遺構名対照表 …… 3
第 4 表　北山浦遺跡周辺遺跡一覧表 …… 7
第 5 表　弥生時代中期土器の作業分類基準 ……11
第 6 表　北山浦遺跡出土遺物の胎土分析一覧表 ……159
第 7 表　樹種同定結果一覧 ……161
第 8 表　測定試料および処理 ……166
第 9 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果…167
第 10 表　花粉分析結果 ……170
第 11 表　植物珪酸体分析結果 ……173
第 12 表　支柱穴配置と竪穴建物規模(㎡)の相関表 …182
第 13 表　高松平野における「建物群」形成状況 …192
第 14 表　出土石製品組成 ……201
第 15 表　土器一覧表 ……207
第 16 表　土製品一覧表 ……214
第 17 表　木製品一覧表 ……214
第 18 表　石製品一覧表 ……215
第 19 表　未掲載石製品一覧表 ……219

巻 頭 図 版 目 次

図版 1-1　北山浦遺跡遠景（南西から）
図版 1-2　北山浦遺跡と石清尾山古墳群（南から）
図版 2　　北山浦遺跡出土土器
図版 3-1　弥生時代前期土器
図版 3-2　粘土塊
図版 3-3　大型粘土塊
図版 4-1　壺形土器の文様
図版 4-2　突帯文土器の文様
図版 5-1　石鏃
図版 5-2　石剣
図版 5-3　石鏃
図版 5-4　石包丁
図版 6-1　スクレイパー①
図版 6-2　石鏃および剥片
図版 6-3　スクレイパー②
図版 7-1　磨製石斧
図版 7-2　磨石と台石
図版 7-3　様々な石材
図版 7-4　班レイ岩
図版 8-1　SX19 焼土検出状況①（南から）
図版 8-2　SX19 焼土検出状況②（西から）
図版 8-3　SX19 焼土検出状況③（北から）
図版 9-1　SX19 焼土堆積状況（西から）
図版 9-2　SX19 硬化面検出状況（北から）
図版 9-3　SX19 床面検出状況（東から）
図版 10-1　SX20（南西から）
図版 10-2　SX06・08（北から）
図版 10-3　SX21 検出状況（南から）
図版 11-1　SX03（南から）
図版 11-2　SX03 焼土（北から）
図版 11-3　SX09（北西から）
図版 12-1　SX09 焼土①（北から）
図版 12-2　SX09 焼土②（北から）
図版 12-3　SX13 焼土（北から）
図版 13-1　SX11 焼土検出状況（東から）
図版 13-2　SX11 堆積状況（南から）
図版 13-3　SX11 柱穴堆積状況（南から）
図版 14-1　SX05 焼土検出状況
図版 14-2　SK11 土層堆積状況（北から）
図版 14-3　SK21 土層堆積状況（南から）
図版 15-1　B群,1 類（試料番号 33）
図版 15-2　B群,1 類（試料番号 5）
図版 15-3　B群,1 類（試料番号 7）
図版 15-4　A群,2 類（試料番号 29）
図版 15-5　A群,3 類（試料番号 17）
図版 15-6　斑レイ岩原石

図 版 目 次

図版 1-1　SH01 周辺完掘状況（北東から）
図版 1-2　SB03 周辺完掘状況（北東から）
図版 2-1　SH01 炭化材検出状況（北から）
図版 2-2　SH01 炭化材撤去状況（北から）
図版 2-3　SH01 完掘状況（北から）
図版 3-1　SH01 中央土坑半截状況

図版 3-2　SH01-P3 半截状況
図版 3-3　SH01-P6 半截状況
図版 3-4　SH01-P1 完掘状況
図版 3-5　SH01-P3 完掘状況
図版 3-6　SH01-P4 完掘状況
図版 3-7　SH01-P5 完掘状況
図版 3-8　SH01-P6 完掘状況
図版 4-1　SH02 完掘状況（北西から）
図版 4-2　SH03 完掘状況（南から）
図版 5-1　SH01-P1　柱材①
図版 5-2　SH01-P1　柱材②
図版 5-3　SH01-P6　柱材①
図版 5-4　SH01-P6　柱材②
図版 5-5　SH01-P2　柱材①
図版 5-6　SH01-P2　柱材②
図版 5-7　SH01-P3　柱材①
図版 6-1　SH03 床面検出状況（南から）
図版 6-2　SH03 中央土坑・柱穴半截状況（南から）
図版 7-1　SH03 中央土坑半截状況(北西から)
図版 7-2　SX10（南から）
図版 7-3　SX10 完掘状況（北西から）
図版 8-1　SH03-P1 半截状況
図版 8-2　SH03-P2 半截状況
図版 8-3　SH03-P7 半截状況
図版 8-4　SH03-P8 半截状況
図版 8-5　SH03 土器出土状況
図版 8-6　SB01-P1 半截状況
図版 8-7　SB01-P2 半截状況
図版 8-8　SB01-P3 半截状況
図版 9-1　SH03 土層（南東から）
図版 9-2　SB01 完掘状況（北西から）
図版 9-3　SB02 完掘状況（北西から）
図版 9-4　SB03 完掘状況（北東から）
図版 10-1　SX03（北から）
図版 10-2　SX03 完掘状況（北から）
図版 10-3　SK09 石包丁検出状況（北から）
図版 11-1　SX08 完掘状況（北から）
図版 11-2　SX07 完掘状況（東から）
図版 11-3　SX08 土器出土状況（西から）
図版 11-4　SX08 完掘状況（北から）
図版 12-1　SX09 周辺状況（北から）
図版 12-2　SX09 完掘状況（北から）
図版 12-3　SX09 完掘状況（北西から）
図版 13-1　SX13・14 完掘状況（南から）
図版 13-2　SX09 土器出土状況（北から）
図版 13-3　SX13・14 周辺状況（南から）
図版 14-1　EN区完掘状況（南東から）
図版 14-2　SX19 周辺完掘状況（南から）
図版 15-1　SH04 中央土坑（西から）
図版 15-2　SX16 中央土坑(南から)
図版 15-3　SX14 中央土坑（東から）
図版 16-1　SX17 完掘状況（北から）
図版 16-2　SX17 土器出土状況（北から）
図版 16-3　SX18 土器出土状況（北から）
図版 17-1　SX15・16 完掘状況（南から）
図版 17-2　SX20 土器出土状況（西から）
図版 17-3　SX15・16 周辺・EN区北壁土層（南から）
図版 17-4　SX20 完掘状況（東から）
図版 18-1　SX11 最下層状況（北から）
図版 18-2　SX17 土器出土状況（東から）
図版 18-3　SX18 土器出土状況（東から）
図版 18-4　SX19 検出状況（南から）
図版 18-5　SX19 焼土検出状況（北から）
図版 18-6　SX20 検出状況（南から）
図版 18-7　SX20 検出状況（北から）
図版 19-1　SK21 土器出土状況（南から）
図版 19-2　SK21 土器出土状況（南から）
図版 19-3　SK26 土器出土状況（西から）
図版 19-4　SK26 完掘状況（南から）
図版 20-1　SK27 土器出土状況（南西から）
図版 20-2　SK27 土層（東から）
図版 20-3　SK27 完掘状況（南から）
図版 20-4　SK32 完掘状況（北から）
図版 21-1　SK32 半截状況（西から）
図版 21-2　SK32 土層（南から）
図版 21-3　SK32 完掘状況（北から）
図版 21-4　SX05-P05（南から）
図版 22-1　ES区SR01 南側完掘状況（北東から）
図版 22-2　ES区SR01 北側完掘状況（南東から）
図版 23-1　ES区SR01 南側全景（北東から）
図版 23-2　EN区SR01 北側全景（南東から）
図版 24-1　EN区SR01 完掘状況（南から）
図版 24-2　SR01 西岸断ち割り状況（南から）
図版 24-3　EN区SR01 土層（南東から）
図版 24-4　SR01 中州断ち割り状況（南から）
図版 25-1　ES区SX01 南側木製品等検出状況(南東から)
図版 25-2　ES区SR01 南側土層（西から）
図版 25-3　ES区SX01 南側木製品等検出状況（南から）

図版 25-4　WS区SR02 土層（北から）
図版 26-1　ES区SX02 検出状況
図版 26-2　SR01 木製品出土状況（南から）
図版 26-3　SR01 土器（715）出土状況
図版 27-1　ES区東側完掘状況（北西から）
図版 27-2　ES区SR02 完掘状況（東から）
図版 28-1　SX05 完掘状況（南西から）
図版 28-2　SX05-SK12 完掘状況（北東から）
図版 29-1　SX05-SK14 周辺完掘状況
図版 29-2　SX05-SK12 周辺（南から）
図版 29-3　SX05-SK14 詳細状況
図版 29-4　SX04 周辺土層EN区西壁
図版 30-1　WS区東側完掘状況（北から）
図版 30-2　WN区東側完掘状況（南西から）
図版 31-1　SX19 周辺完掘状況（南西から）
図版 31-2　EN区SR02 周辺完堀状況（南東から）
図版 32　SH01,SH03,SX08 出土遺物
図版 33　SX09,SX10 出土遺物
図版 34　SX13,SX17 出土遺物
図版 35　SX18,SX19,SX20,SX21 出土遺物
図版 36　SR01,SR02,SX01,SP31 出土遺物
図版 37　SK21,SK26,SK27,SD08,SP31 出土遺物
図版 38　SX04,SX05-SK02,遺構検出時 出土遺物
図版 39-1　SH01,SX06・08 出土遺物
図版 39-2　SH01 出土遺物
図版 39-3　SB01,SB03 出土遺物
図版 39-4　SX07 出土遺物
図版 40-1　SX08 出土遺物
図版 40-2　SX09 出土遺物
図版 40-3　SX19 出土遺物
図版 40-4　SX20 出土遺物
図版 41-1　SK21,SK26 出土遺物
図版 41-2　SK27 出土遺物
図版 41-3　SR01 出土遺物
図版 41-4　SR01 出土遺物
図版 42-1　SR01,SR02 出土遺物
図版 42-2　SX01 出土遺物
図版 42-3　SR02 出土遺物
図版 42-4　その他 出土遺物
図版 43-1　その他 出土遺物
図版 43-2　SH03,SX13・14,SX16,SX20,
SD08・SK30,SD11 出土遺物
図版 43-3　粘土塊
図版 44-1　SH01 出土遺物
図版 44-2　SH01,SX06 出土遺物
図版 45-1　SH01 出土遺物
図版 45-2　SH01,SH03 出土遺物
図版 45-3　SH01,SH03,SX05-SK10,SX08 出土遺物
図版 45-4　SH01,SH03 出土遺物
図版 46-1　SH02,SH03 出土遺物
図版 46-2　SX02,SX03,SX05-SK18,SX05-SK19,SX07,
SX13,SX14,SX13･14,SX16,SX16･17 出土遺物
図版 47-1　SX06,SX07,SX08,SX13,SX14,SX13・14,
SX16,SX20 出土遺物
図版 47-2　SK04,SP31,SP31･32･33,SD05,SD07,
SD08,SD11,SD12 出土遺物
図版 48-1　その他 出土遺物
図版 48-2　SH01,SH02,SH03,SX13,SX13･14,SK26,
SD07,その他 出土遺物
図版 49-1　SK01,その他 出土遺物
図版 49-2　SX08,SX20,SD07,その他 出土遺物
図版 49-3　SH01 出土遺物
図版 49-4　SX14,SX13･14,SK26 出土遺物
図版 50-1　SX06,SX08,SX09,SX13,SX19,SP 45,
SD07,SD11,SR01,その他 出土遺物
図版 50-2　SX06,SP31,SP45,SD07,SD11,SR01 出土遺物
図版 50-3　SH01,SX03,SX18 出土遺物
図版 50-4　その他 出土遺物
図版 51-1　SX13,SX14 出土遺物
図版 51-2　SX07,SX13･14,SK21,SK26,SK27,SR01,
SR02 出土遺物
図版 52-1　SH01,SX06,SK27,SD03,SR01,
その他 出土遺物
図版 52-2　SH01,SH02,SH03,その他 出土遺物
図版 52-3　その他 出土遺物
図版 52-4　SH03 出土遺物
図版 53-1　SX08,SX13,その他 出土遺物
図版 53-2　SR01 出土遺物
図版 53-3　SH03,SX14 出土遺物
図版 54-1　SX01,SR01 出土遺物
図版 54-2　SH01 出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

高松市では木太町と鬼無町を東西に結ぶ都市計画道路木太鬼無線を計画しており，既に西ハゼ地区では発掘調査が実施されていた。そのため，継続して西春日地区においても，担当課である当時の都市開発部都市計画課（現都市整備部都市計画課）と事前協議を行い，下記のとおり，用地買収完了地から順に対象範囲 60,200㎡において３度に及び合計 32 箇所で試掘調査を実施した。

第１表　試掘調査一覧

期　　間	対象面積	担　　当	調査結果
H.13.3.5.～12	6,000㎡	大嶋和則	北山浦遺跡確認
H.15.3.10～20	53,000㎡	小川　賢	包蔵地なし
H.19. 9 .11	1,200㎡	渡邊　誠	包蔵地なし

上記の結果，対象範囲のうち平成 13 年に実施した約 3,000㎡が埋蔵文化財包蔵地であることが判明し，事業に先立って記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成 19 年 11 月 14 日から平成 20 年３月 24 日にかけての期間に実施し，業務は小川賢が総括し，渡邊，中村茂央（現財団法人鳥取県教育文化財団）が補佐した。

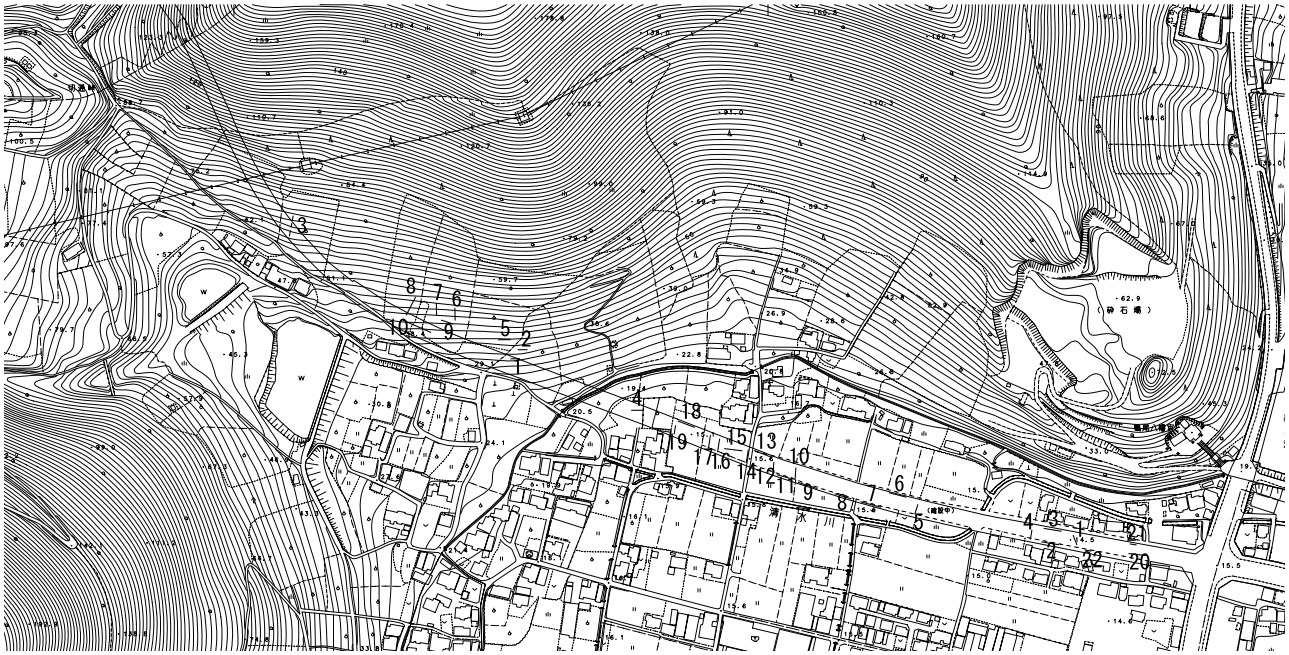
なお，調査に係る業務は下記の通り委託した。

工事委託業務：　大一工業株式会社
写真測量業務：　株式会社四航コンサルタント

調査時の諸事情により，調査区を南北に細長く分割し実施し，南側から調査を開始し，平成 20 年１月 27 日に航空写真測量を実施した。北側は平成 20 年２月６日から掘削を開始し，３月 14 日に航空写真測量を実施した。３月 24 日に調査を終了し，撤収を行った。

調査期間の前半は雨天が多く，加えて地下水脈（香東川の支流である旧河道）の影響で調査区が水没することが度々生じ，排水処理に多くの時間を割くこととなり，予想以上に調査が進展しなかったが，多くの関係者の協力により工期内に発掘調査を終了することができた。

発掘調査によって，弥生時代前期，中期中葉前後の数棟の竪穴建物跡をはじめとする集落跡が良好に残っていることが判明し，高松平野の弥生時代を考える上で非常に重要な成果を得ることができた。このような遺跡の状況に加え，調査中にも近隣の住民の方々が訪れるなど，



第１図　木太鬼無線街路事業に伴う試掘調査箇所

発掘調査に対する関心も高かったため，現場説明会を平成 20 年 2 月 11 日に実施した。当日の参加者は 350 名を越え，近隣住民のみならず，多くの人々に参加していただき，大盛況に終了した。

第 2 節　調査および整理の方法

調査は調査地を南北に分け実施し，調査区を南北に横断する道路を境にして，4 分割して，EN，WN，ES，WS区と呼称することとした。遺構名は調査順に付与したものの，整理作業の段階で統一性を鑑み，調査終了後に第 3 表のとおり，調査区西側から再度，付与しなおした。遺構名の対応関係は以下のとおりである。

SH：竪穴建物
SK：土坑
SB：掘立柱建物
SP：柱穴
SX：方形の竪穴遺構および不明遺構
SD：溝
SR：旧河道

第 3 節　整理作業の経過

整理作業は，平成 20 年度から 4 ヵ年計画で実施し，渡邊が担当し，小川が補佐した。経過については，下記の第 2 表のとおりである。

具体的には平成 20 年度に出土遺物の洗浄および接合を実施し，分類作業および選別作業を行った。21 年度に遺構図面の整理，出土遺物の実測および拓本作業を行った。22 年度は出土遺物の製図および図面のレイアウトを行い，23 年度に執筆および編集作業を実施した。

整理作業にかかる業務の一部については下記のとおり委託して実施した。

遺物実測（拓本作業）
　国際文化財株式会社西日本支店（平成 21 年度）
出土木製品の保存処理および年代測定
　株式会社吉田生物研究所（平成 20・21 年度）
自然科学分析
　パリノサーヴェイ株式会社（平成 21 年度）
写真撮影
　西大寺フォト（平成 20・21 年度）

第 4 節　その他

この他，出土資料の重要性から，整理期間中には北山浦遺跡出土資料を主要な展示資料として，平成 21 年度には高松市歴史資料館では「弥生土器に見るムラの暮らし」と題し，第 10 回高松市内の埋蔵文化財展および讃岐国分寺跡資料館企画展では「弥生土器のいろいろな顔」と題した企画展を開催するとともに，『むかしの高松第 23 号』では北山浦遺跡を特集した。また，鶴尾コミュニティーセンターでも北山浦遺跡の講演を行うなど，広く市民の方々への教育普及に努めた。

（渡邊　誠）

第 2 表　整理作業工程表

	洗浄	接合	選別	分類	写真撮影	実測	拓本	トレース	レイアウト	執筆編集
平成 20 年度	■	■	■	■	■					
平成 21 年度					■	■	■			
平成 22 年度								■	■	
平成 23 年度										■

第３表　遺構名対照表

遺構名				地区
新		旧		
種類	番号	種類	番号	
SH	01	SH	01	ES
SH02SK	08	SK	08	ES
SH02SP	04	SP	19	ES
SH03SK	01	SH03SK	01	EN
SH03SP	01	SH03SP	01	EN
SH03SP	02	SH03SP	02	EN
SH03SP	03	SH03SP	03	EN
SH03SP	04	SH03SP	04	EN
SH03SP	05	SH03SP	05	EN
SH03SP	06	SH03SP	06	EN
SH03SP	07	SH03SP	07	EN
SH03SP	08	SH03SP	08	EN
SH03SP	09	SH03SP	09	EN
SH03SP	10	SH03SP	10	EN
SH03SP	11	SH03SP	11	EN
SH03SP	12	SH03SP	12	EN
SH04SP	01	SP	08	EN
SH04SP	02	SP	09	EN
SH04SP	03	SP	40	EN
SB	01	SB	01	WS
SB	02	SB	02	WS
SB	03	SB	03	ES
SX	01	SX	05	WS
SX	01	SX	05	WN
SX	02	集石		WN
SX	03	SX	11	WN
SX	04	SX	20	EN
SX05SK	01	SK	15	EN
SX05SK	02	SK	11	EN
SX05SK	03	SK	12	EN
SX05SK	04	SK	13	EN
SX05SK	05	SK	14	EN
SX05SK	06	SD	13	EN
SX05SK	07	SK	16	EN
SX05SK	08	SK	29	EN
SX05SK	09	SK	17	EN
SX05SK	10	SK	54	EN
SX05SK	11	SK	23	EN
SX05SK	12	SD	08	EN
SX05SK	13	SK	47	EN
SX05SK	14	SK	46	EN
SX05SK	15	SK	27	EN
SX05SK	16	SK	18	EN
SX05SK	17	SD	16	EN
SX05SK	18	SX	22	EN
SX05SK	19	SD	10	EN
SX05SK	20	SD	12	EN
SX05SK	21	SK	10	EN
SX05SK	22	SK	28	EN
SX05SK	23	SD	09	EN
SX05SK	24	SK	24	EN
SX05SK	25	SK	25	EN
SX05SP	01	SP	17	EN
SX05SP	02	SP	26	EN
SX05SP	03	SP	27	EN
SX05SP	04	SP	18	EN
SX05SP	05	SP	28	EN
SX05SP	06	SP	29	EN
SX05SP	07	SP	23	EN
SX05SP	08	SP	30	EN
SX05SP	09	SP	19	EN
SX05SP	10	SP	20	EN
SX05SP	11	SK	30	EN
SX	06	SX	06	ES
SX	06	SX	07	ES
SX	07	SX	01	ES
SX	08	SX	02	ES
SX	09	SX	04	ES

遺構名				地区
新		旧		
種類	番号	種類	番号	
SX	10	SX	12	EN
SX	11	SX	10	ES
SX	12	SX	18	EN
SX	13	SX	16	EN
SX	14	SX	17	EN
SX	15	SX	19	EN
SX	16	SX	15	EN
SX	17	SX	08	ES
SX	18	SX	09	ES
SX	19	SX	13	EN
SX	20	SK	01	ES
SX	21	SX	14	EN
SX	没	SX	09	ES
SK	01	SK	09	WN
SK	02	SK	08	WN
SK	03	SK	07	WN
SK	04	SK	06	WN
SK	05	SK	05	WN
SK	06	SK	02	WN
SK	07	SK	03	WN
SK	08	SK	04	WN
SK	09	SK	01	WN
SK	10	SK	09	WS
SK	11	SK	05	ES
SK	12	SK	11	ES
SK	13	SK	19	EN
SK	14	SK	26	EN
SK	15	SK	53	EN
SK	16	SK	20	EN
SK	17	SD	05	ES
SK	18	SK	55	EN
SK	19	SK	48	EN
SK	20	SK	21	EN
SK	21	SK	22	EN
SK	22	SK	34	EN
SK	23	SK	35	EN
SK	24	SK	51	EN
SK	25	SK	50	EN
SK	26	SK	07	ES
SK	27	SK	02	ES
SK	28	SK	10	ES
SK	29	SK	52	EN
SK	30	SK	03	ES
SK	31	SK	04	ES
SK	32	SX	03	ES
SK	33	SK	36	EN
SK	34	SK	43	EN
SK	35	SX	21	EN
SK	36	SK	37	EN
SK	37	SK	45	EN
SK	38	SD	14	EN
SK	39	SK	01	EN
SK	40	SK	13	ES
SK	41	SK	40	EN
SK	42	SK	41	EN
SK	43	SK	44	EN
SP	01	SP	16	WN
SP	02	SP	07	WN
SP	03	SP	06	WN
SP	04	SP	05	WN
SP	05	SP	04	WN
SP	06	SP	03	WN
SP	07	SP	02	WN
SP	08	SK	10	WN
SP	09	SP	01	WN
SP	10	SP	02	WS
SP	11	SP	13	ES

遺構名				地区
新		旧		
種類	番号	種類	番号	
SP	12	SP	16	ES
SP	13	SP	14	ES
SP	14	SP	15	ES
SP	15	SP	18	ES
SP	16	SP	17	ES
SP	17	SP	22	EN
SP	18	SP	32	EN
SP	19	SP	21	EN
SP	20	SP	42	EN
SP	21	SP	33	EN
SP	22	SP	12	ES
SP	23	SD	07	ES
SP	24	SP	34	EN
SP	25	SP	35	EN
SP	26	SP	37	EN
SP	27	SP	36	EN
SP	28	SP	41	EN
SP	29	SP	11	ES
SP	30	SP	10	ES
SP	31	SK	08	ES
SP	32	SP	08	ES
SP	33	SP	09	ES
SP	34	SP	07	ES
SP	35	SP	05	ES
SP	36	SP	04	ES
SP	37	SP	03	ES
SP	38	SP	06	ES
SP	39	SP	02	ES
SP	40	SP	12	EN
SP	41	SP	13	EN
SP	42	SP	39	EN
SP	43	SP	14	EN
SP	44	SP	01	ES
SP	45	SP	11	EN
SP	46	SP	10	EN
SP	47	SK	38	EN
SP	48	SK	39	EN
SP	49	SP	15	EN
SP	50	SP	38	EN
SP	51	SP	16	EN
SD	01	SD	04	WN
SD	01	SD	06	WS
SD	02	SD	06	WN
SD	03	SD	05	WN
SD	04	SD	07	WN
SD	05	SD	04	ES
SD	06	SD	17	EN
SD	07	SD	01	ES
SD	08	SD	06	ES
SD	08	SD	01	EN
SD	09	SD	03	ES
SD	10	SD	03	EN
SD	11	SD	02	EN
SD	12	SD	15	EN
SD	12	SD	02	ES
SR	01	SR	02	WN
SR	01	SR	02	WS
SR	02	SR	01	ES
SR	02	SR	01	EN

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松平野は，香川県のやや東寄りに位置する沖積平野である。北縁は瀬戸内海に臨み，東部は海岸に突出した屋島・立石山，前田丘陵によって画される。西縁部は大きく備讃瀬戸に張り出す五色台・堂山，平野南部の台地に限られている。

平野南縁では，讃岐山地が階段状に高度を減じて，北麓に小さな山塊を点在させつつ平野部に移る。南辺中央に由良山・日山・上佐山とそれらの台地が張り出し，その東西で山地間を下刻しつつ春日川・新川水系と香東川・本津川水系とが北流している。讃岐山地から瀬戸内海に注ぐ香東川を主な営力とし，これに春日川・新川をも加えた沖積世の堆積作用によって形成された平野域には，およそ 180㎢にわたって条里型地割が展開している。

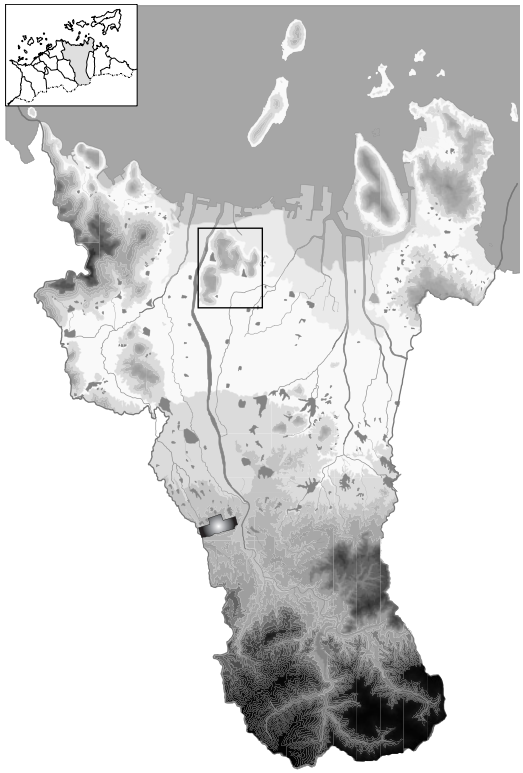
北山浦遺跡は，高松平野の中ほどやや西寄りに位置する独立丘陵，石清尾山山塊の南麓に位置し，南に開けた標高 14ｍ前後の平野部に所在する。調査地から鶴尾神社４号墳を見あげることができる。地形および上天神遺跡西側における既往の調査成果（香川県教委 2004）から，調査地の南西から北東にかけて香東川の旧流が流れていることが判明しているほか，それから派生する御坊川等の現河川のほかに複数の旧河道が存在していることが明らかにされている。その一部が，松並・中所遺跡（香川県教委 2000），西ハゼ土居遺跡（高松市教委 2005）や既述の試掘調査等でも確認されている。また，調査成果でも後述するように，今回の調査でも２つの旧河道の存在が明らかとなった。そのうちの一つは調査地南側を流れる清水川の旧流と考えられ，現在も一定量の水量があり，伏流水が確認できた。このように，集落が営まれた周辺は旧河川によって囲まれた自然環境によって非常に影響を受けやすい立地と言える。

第２節　歴史的環境

高松平野では，とりわけ「高度成長」期以来の大規模な区画整理などの土地開発に伴って発掘調査が引き続いており，多くの地点で各時代にわたる遺跡が確認され，周辺での様々な調査情報が知られてきている。

【旧石器時代】

高松平野とその縁辺部での初例となった雨山南遺跡の「国府型ナイフ形石器」発見の報告（1983 年）以後，本



第２図　高松市および市域における位置図

遺跡周辺でも，AT火山灰上層でナイフ形石器の出土をみた中間西井坪遺跡や中森遺跡，香西南西打遺跡等では，接合資料や大形石核類，石器ブロックの存在を含む旧石器例が知られるようになってきている。市域各地にかなり「普遍的」分布がみられる可能性を示唆するものであろう。

【縄文時代】

まだ類例が多いとはいえない高松平野の縄文時代遺跡は，表採資料とはいえ大池遺跡にて有舌尖頭器が２点確認されている。それ以後は，西打遺跡で早期の押型文期異形局部磨製石器や前期末の岡山･里木Ⅰ式の特徴をみせる土器群と石匙など多数の石器や遺構が出土している。既述の香西南西打遺跡でも，埋没流路では摩耗の少ない有舌尖頭器がみられ，鬼無藤井遺跡でも，晩期中葉の鉢類が自然流路から出土している。また，高松東道路建設に先行した一連の調査を通じて，井手東Ⅰ遺跡では現地表下約 70㎝でアカホヤ火山灰堆積層を検出して，中期における平野域の地形の一端が知られることとなった。

さらに晩期には林坊城遺跡，さこ・松ノ木遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡，東中筋遺跡等で多数の土器が出土しており，晩期段階には平野部にも人々が居住空間を求めて進出している状況がうかがえる。

【弥生時代】

さこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡で県内でも先行的な前期小区画水田が確認されており，当該期に早くから稲作文化を受容し，新たな土地開発が進んだことを，平野部各所で発掘された遺跡が物語っている。また，これらの周辺に位置する汲仏遺跡や鬼無藤井遺跡，松並中所遺跡などに，環濠を伴う集落が認められる。

中期には，多肥松林遺跡，日暮松林遺跡，さこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡等で前代に引き続き集落が営まれている。また，今回報告する北山浦遺跡は，中期中葉を中心として集落が旧河道に挟まれた微高地上に展開し，一定期間居住していた状況が確認でき，その後，中期後半になると，平野東部に位置する久米池南遺跡で象徴されるように，丘陵などの高地に集落が営まれるようになる。同時に鉄製品の存在も注意される。石清尾山の頂部・緩斜面でも，中期後半に摺鉢谷遺跡や御殿貯水池南遺跡の存在が知られている。また，銅剣が出土した下山遺跡が石清尾山の北側に所在する。

本遺跡周辺の地域には，松並・中所遺跡，摺鉢谷遺跡，南山浦遺跡，坂田廃寺下層遺跡などが点在しており，前期以降，居住環境の悪化や社会構造や集団間関係の変化などに伴って，小規模な移動を繰り返しながら，集落が営まれた様子を窺い知ることができる。

後期には香東川下流域産土器，いわゆる下川津B類土器を集中的に製作する地域に該当するが，上天神遺跡以降の実態を示す集落はいまだ確認されていない。平野部全域の動向としては，後期後半から古墳時代初頭にかけて爆発的な集落の増加が認められる。

【古墳時代】

石清尾山古墳群（国指定史跡）は高松平野の古墳時代前期を象徴する存在である。特異ともいえる積石塚築成の古墳群は，鶴尾神社４号墳の出現後，前方後円墳９基，双方中円墳（猫塚古墳，鏡塚古墳）２基，円墳 10 基以上，方墳１基の大型古墳が尾根に累積的に造営され，高松平野で勢力をもった首長層の墓域である。これらと対峙するかのように平野東縁部，久米池周辺の丘陵上に展開する小規模古墳や畿内的色彩の強い高松市茶臼山古墳が造営される。詳細な検討を要するが，石清尾山古墳群と併行して墓域を累代的に造営した可能性が想定される。ただし，造営集団の居住域についてはいまだ不明である。

中期には平野南端に割竹形石棺の主体部をもつ県内有数の前方後円墳である三谷石舟古墳，平野西部に組合せ式箱形土製棺で特徴づけられる今岡古墳が造営される。加えて，埴輪製作遺跡である中間西井坪遺跡等が確認されているが，明確な中期集落は不明瞭である。

後期には，初頭に相作牛塚古墳等の首長墳と考えられるような古墳が平野部に造営される。

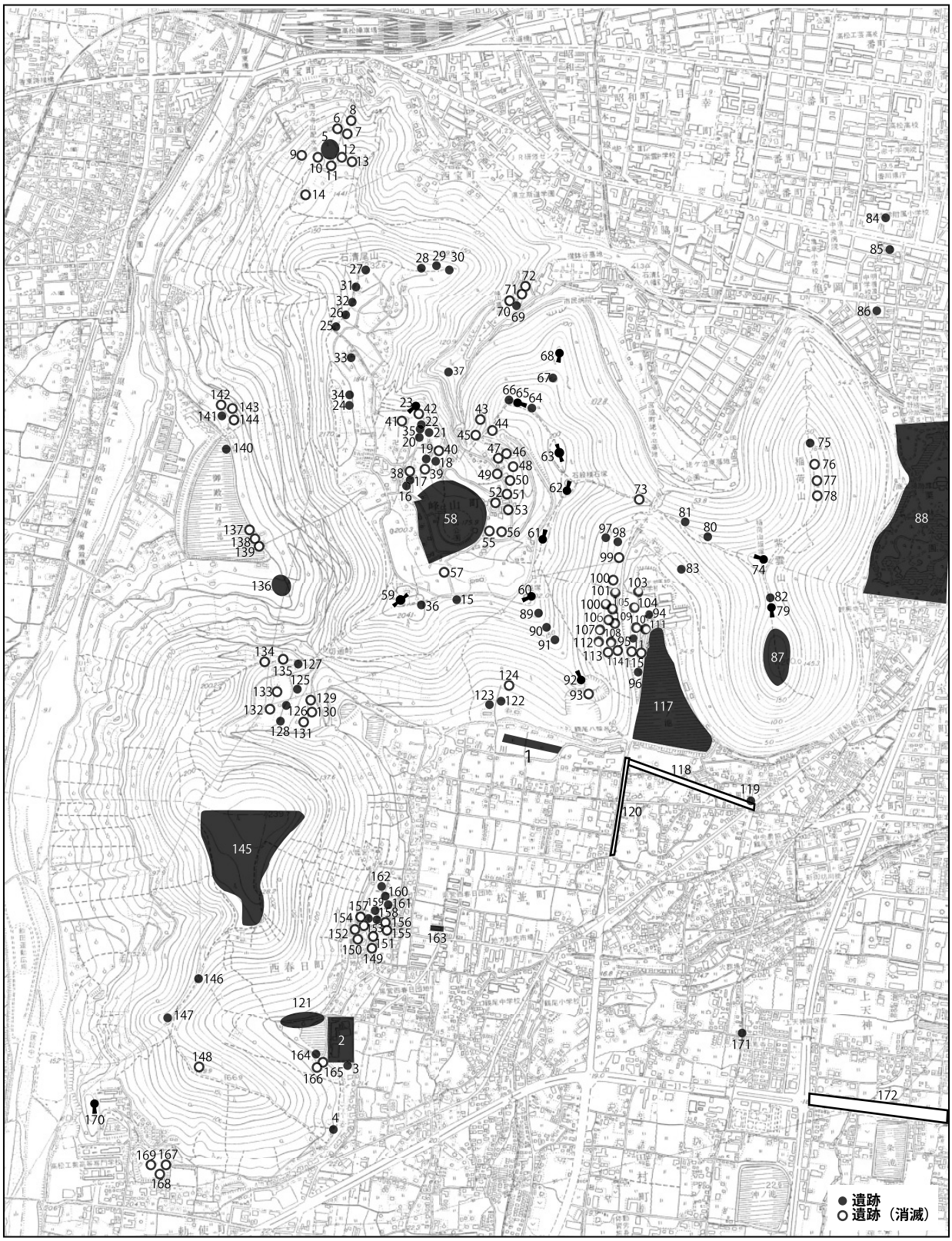
その後，再度，石清尾山山塊の山上，山麓に石清尾山古墳群，西方寺古墳群，木里神社古墳群，御殿貯水池古墳群，峰山墓地内古墳群，摺鉢谷西／東斜面古墳群，奥ノ池古墳群，北山浦古墳群などの横穴式石室の群集墳が山系各所に営まれる。同じく，浄願寺山山頂，山麓にも浄願寺山古墳群，片山池古墳群，南山浦古墳群，野山古墳群，をはじめとして多くの後期古墳が多数造営される。加えて，高松平野縁辺とその周辺丘陵地にも，各地域において古墳造営が行われ，群集墳が形成される。なお，当該期の集落遺跡は太田下・須川遺跡，兀塚遺跡，萩前・一本木遺跡等が知られるのみである。

一般的に後期群集墳に近接して古代寺院が造営される場合が認められるが，浄願寺山東麓にある坂田廃寺もその例に該当するものと言え，上記のいずれかの古墳群を造営した集団が氏寺としての坂田廃寺の創建に関わったものと考えられる。

【古代】

高松平野には，条里地割がみられ，条里坪界線の径溝網が広く確認されている。これらの遺構では，平安～鎌倉時代の遺物を含む例が多いが，奈良時代の遺物の出土する遺跡もあり，条里地割の施行・存続期間を示唆している。また，奈良～平安時代に，条里地割と方位を同じくした掘立柱建物群が数次にわたり建てられた集落として，正箱遺跡，薬王寺遺跡がある。

石清尾山の南東麓に広がる一帯は『和名抄』にみる香川郡坂田郷（現在の西春日町，松並町等）に比定されており，郷名を冠した坂田廃寺は，これまでの調査で基壇跡や白鳥廃寺と同型式の円形柱座をもつ礎石，礎石列などが確認されているほか，坂出市開法寺跡，同市鴨廃寺跡と同一文様系譜の軒丸瓦が出土しており，綾氏との関連が想定されている[註1)]。この他にも寒風窯系の鴟尾や水路改修工事時に「金銅誕生釈迦仏立像(県指定有形文化財)」が出土しており，讃岐の古代寺院を考える上で



第３図　北山浦遺跡周辺の遺跡分布図（Noは第４表と対応）

第４表　北山浦遺跡周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　代	性格	No.	遺　跡　名	時　代	性格	No.	遺　跡　名	時　代	性格
1	**北山浦遺跡**	**弥生**	**集落**	61	小塚古墳	古墳	古墳	122	北山浦１号墳	古墳	古墳
2	坂田廃寺	白鳳～室町	寺院	62	石船塚古墳	古墳	古墳	123	北山浦２号墳	古墳	古墳
	坂田廃寺下層遺跡	弥生	集落	63	鏡塚古墳	古墳	古墳	124	北山浦３号墳	古墳	古墳
3	坂田廃寺南窯跡	平安	瓦窯	64	北大塚東古墳	古墳	古墳	125	野山１号墳	古墳	古墳
4	南山浦１号窯跡	白鳳～奈良	瓦窯	65	北大塚古墳	古墳	古墳	126	野山２号墳	古墳	古墳
5	下山遺跡	弥生	埋納	66	北大塚西古墳	古墳	古墳	127	野山３号墳	古墳	古墳
6	西方寺４号墳	古墳	古墳	67	北大塚北方１号墳	古墳	古墳	128	野山４号墳	古墳	古墳
7	西方寺５号墳	古墳	古墳	68	北大塚北方２号墳	古墳	古墳	129	野山５号墳	古墳	古墳
8	西方寺６号墳	古墳	古墳	69	峰山墓地内１号墳	古墳	古墳	130	野山６号墳	古墳	古墳
9	木里神社１号墳	古墳	古墳	70	峰山墓地内２号墳	古墳	古墳	131	野山７号墳	古墳	古墳
10	木里神社２号墳	古墳	古墳	71	峰山墓地内３号墳	古墳	古墳	132	野山８号墳	古墳	古墳
11	木里神社３号墳	古墳	古墳	72	峰山墓地内４号墳	古墳	古墳	133	野山９号墳	古墳	古墳
12	木里神社４号墳	古墳	古墳	73	石船塚東方古墳	古墳	古墳	134	野山10号墳	古墳	古墳
13	木里神社５号墳	古墳	古墳	74	稲荷山姫塚古墳	古墳	古墳	135	野山11号墳	古墳	古墳
14	木里神社６号墳	古墳	古墳	75	稲荷山北端１号墳	古墳	古墳	136	御殿貯水池南遺跡	弥生	集落
15	石清尾山１号墳	古墳	古墳	76	稲荷山北端２号墳	古墳	古墳	137	御殿貯水池１号墳	古墳	古墳
16	石清尾山２号墳	古墳	古墳	77	稲荷山北端３号墳	古墳	古墳	138	御殿貯水池２号墳	古墳	古墳
17	石清尾山３号墳	古墳	古墳	78	稲荷山北端４号墳	古墳	古墳	139	御殿貯水池３号墳	古墳	古墳
18	石清尾山４号墳	古墳	古墳	79	稲荷山１号墳	古墳	古墳	140	御殿貯水池４号墳	古墳	古墳
19	石清尾山５号墳	古墳	古墳	80	稲荷山２号墳	古墳	古墳	141	御殿神社１号墳	古墳	古墳
20	石清尾山６号墳	古墳	古墳	81	稲荷山３号墳	古墳	古墳	142	御殿神社２号墳	古墳	古墳
21	石清尾山７号墳	古墳	古墳	82	稲荷山４号墳	古墳	古墳	143	御殿神社３号墳	古墳	古墳
22	石清尾山８号墳	古墳	古墳	83	稲荷山５号墳	古墳	古墳	144	御殿神社４号墳	古墳	古墳
23	石清尾山９号墳	古墳	古墳	84	雑賀城跡	中世	城郭	145	浄願寺山古墳群（１～55号墳）	古墳	古墳
24	石清尾山１０号墳	古墳	古墳	85	藤井城跡	中世	城郭				
25	石清尾山１１号墳	古墳	古墳	86	中ノ村城跡	中世	城郭	146	浄願寺山56号墳	古墳	古墳
26	石清尾山１２号墳	古墳	古墳	87	室山城跡	中世	城郭	147	浄願寺山57号墳	古墳	古墳
27	石清尾山１３号墳	古墳	古墳	88	特別名勝栗林公園	近世	庭園	148	小山山頂古墳	古墳	古墳
28	石清尾山１４号墳	古墳	古墳	89	鶴尾神社１号墳	古墳	古墳	149	南山浦１号墳	古墳	古墳
29	石清尾山１５号墳	古墳	古墳	90	鶴尾神社２号墳	古墳	古墳	150	南山浦２号墳	古墳	古墳
30	石清尾山１６号墳	古墳	古墳	91	鶴尾神社３号墳	古墳	古墳	151	南山浦３号墳	古墳	古墳
31	石清尾山１７号墳	古墳	古墳	92	鶴尾神社４号墳	古墳	古墳	152	南山浦４号墳	古墳	古墳
32	石清尾山１８号墳	古墳	古墳	93	鶴尾神社５号墳	古墳	古墳	153	南山浦５号墳	古墳	古墳
33	石清尾山１９号墳	古墳	古墳	94	奥ノ池１号墳	古墳	古墳	154	南山浦６号墳	古墳	古墳
34	石清尾山２０号墳	古墳	古墳	95	奥ノ池２号墳	古墳	古墳	155	南山浦７号墳	古墳	古墳
35	石清尾山２１号墳	古墳	古墳	96	奥ノ池３号墳	古墳	古墳	156	南山浦８号墳	古墳	古墳
36	石清尾山２２号墳	古墳	古墳	97	奥ノ池４号墳	古墳	古墳	157	南山浦９号墳	古墳	古墳
37	石清尾山２３号墳	古墳	古墳	98	奥ノ池５号墳	古墳	古墳	158	南山浦10号墳	古墳	古墳
38	摺鉢谷西斜面１号墳	古墳	古墳	99	奥ノ池６号墳	古墳	古墳	159	南山浦11号墳	古墳	古墳
39	摺鉢谷西斜面２号墳	古墳	古墳	100	奥ノ池７号墳	古墳	古墳	160	南山浦12号墳	古墳	古墳
40	摺鉢谷西斜面３号墳	古墳	古墳	101	奥ノ池８号墳	古墳	古墳	161	南山浦13号墳	古墳	古墳
41	摺鉢谷西斜面４号墳	古墳	古墳	102	奥ノ池９号墳	古墳	古墳	162	南山浦14号墳	古墳	古墳
42	摺鉢谷西斜面５号墳	古墳	古墳	103	奥ノ池10号墳	古墳	古墳	163	南山浦遺跡	弥生	集落
43	摺鉢谷東斜面１号墳	古墳	古墳	104	奥ノ池11号墳	古墳	古墳	164	片山池１号墳	古墳	古墳
44	摺鉢谷東斜面２号墳	古墳	古墳	105	奥ノ池12号墳	古墳	古墳	165	片山池２号墳	古墳	古墳
45	摺鉢谷東斜面３号墳	古墳	古墳	106	奥ノ池13号墳	古墳	古墳	166	片山池３号墳	古墳	古墳
46	摺鉢谷東斜面４号墳	古墳	古墳	107	奥ノ池14号墳	古墳	古墳	167	がめ塚２号墳	古墳	古墳
47	摺鉢谷東斜面５号墳	古墳	古墳	108	奥ノ池15号墳	古墳	古墳	168	がめ塚３号墳	古墳	古墳
48	摺鉢谷東斜面６号墳	古墳	古墳	109	奥ノ池16号墳	古墳	古墳	169	がめ塚４号墳	古墳	古墳
49	摺鉢谷東斜面７号墳	古墳	古墳	110	奥ノ池17号墳	古墳	古墳	170	がめ塚古墳	古墳	古墳
50	摺鉢谷東斜面８号墳	古墳	古墳	111	奥ノ池18号墳	古墳	古墳	171	斉藤城跡推定地	中世	城郭
51	摺鉢谷東斜面９号墳	古墳	古墳	112	奥ノ池19号墳	古墳	古墳	172	上天神遺跡	弥生	集落
52	摺鉢谷東斜面10号墳	古墳	古墳	113	奥ノ池20号墳	古墳	古墳				
53	摺鉢谷東斜面11号墳	古墳	古墳	114	奥ノ池21号墳	古墳	古墳				
54	摺鉢谷東斜面12号墳	古墳	古墳	115	奥ノ池22号墳	古墳	古墳				
55	摺鉢谷東斜面13号墳	古墳	古墳	116	奥ノ池23号墳	古墳	古墳				
56	摺鉢谷東斜面14号墳	古墳	古墳	117	奥ノ池遺跡	古墳	集落				
57	摺鉢谷東斜面15号墳	古墳	古墳	118	西ハゼ土居遺跡	弥・中・近	集落				
58	摺鉢谷遺跡	弥生	集落	119	坂田城跡推定地	中世	城郭				
59	猫塚古墳	古墳	古墳	120	松並中所遺跡	弥生	集落				
60	姫塚古墳	古墳	古墳	121	片山池窯跡群	平安	瓦窯				

重要な遺跡である。また，創建当初の軒瓦ではないが，片山池窯跡群１号窯跡で出土した瓦が出土しており，北東約 2.5㎞付近の西ハゼ土居遺跡，勝賀廃寺などでも同笵の軒瓦が確認されている。また，東寺長者でもあった真言の高僧観賢[註1)]はこの地域を本貫地としており，平安時代中期の坂田廃寺との関連が想定される。寺院自体はその後，室町時代まで維持管理が行われており，地域の名刹として古代から中世にかけて存在し，地域の仏教文化の核として機能していたと考えられる。

本遺跡の南方約４㎞余には，六ツ目山北麓から平野東端の白山南麓を見通して設定したと考えられる古代南海道が東西方向に走っていた。高松平野の条里地割はこれを基線とした阡陌線によって区画されたものである。これら方格地割は，中世以降にも農地の径溝網として，また西打遺跡，香西南西打遺跡，鬼無藤井遺跡等の軌を一にした各種溝跡や城館の周囲を画する区画施設等として確認されている。

【中世～近世初頭】

中世から近世における遺跡の調査は，石清尾山山塊の北東部に位置する現在の市街地の再開発等に伴い近年増加している。平安時代後期には，現在の高松城跡周辺から市街地にかけての地域は野原郷と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に比定されている。野原庄は白河院の勅使田が応徳年間頃（11 世紀末葉）に立券荘号されたもので，康治２年（1143）８月 19 日の太政官符では野原庄の四至が条里により表記されていることから，条里地割または条里呼称がこの地に普及していたと考えられる。また，中世に入ると荘園以外にも，文安２年（1445）の「兵庫北関入船納帳」に船籍地としてあるように，港の機能を有していたことを示している。近年の発掘調査の成果においても，高松城跡西の丸地区，東町奉行所跡での調査で中世前半期の港湾施設が，浜ノ町遺跡でも 13 世紀末から 15 世紀末の集落跡などが確認されている。このような点からも，既に中世には港湾施設が整備され，瀬戸内海の海運における重要な拠点としての機能を果たしていたものと考えられる。

県内有数の古刹，無量壽院は天文年間に野原郷の八輪島に移転したとされているが，その前身は坂田郷にあったとされており，現状では坂田廃寺の移転が想定されている。

本遺跡周辺では，近年，中世前半に屋敷地と考えられる区画施設としての溝などが松並中所遺跡で確認され，中世末から近世初頭においては，坂田城跡の候補地とされる西ハゼ土居遺跡で区画施設を伴った屋敷地が確認されている（大嶋 2005）。また，野原から坂田郷にかけて雑賀城跡，藤井城跡，中ノ村城跡，斉藤城跡，片山城跡などの香西氏の配下にあった武家の居館が点在し，室山の山頂部には最終防御施設としての室山城跡がある。非常に断片的な資料ではあるが，中世後半の高松平野，特に，坂田郷周辺の景観と社会の復元が今後期待される地域である。特に西ハゼ土居遺跡で確認された区画施設は，小比賀氏の屋敷跡として坂田城跡と想定されている（大嶋 2005）。

【註】

１）日本霊異記の 16 巻１条に「富者，貧しき老爺・老婆を恵む」の中に聖武天皇の時代に讃岐国香川郡坂田郷に綾氏という富者がいたという記載がみられる。

２）『今昔物語』の中に登場する坂田郷出身で平安時代中期の僧侶である。空海の弘法大師号の付与に尽力したことでも有名である。

【主要参考文献】

大嶋和則 2002「北山浦遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 13 年度国庫補助事業』高松市教育委員会

大嶋和則編 2005『西ハゼ土居遺跡』高松市教育委員会

小川賢 2004「御殿貯水池南遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 15 年度国庫補助事業』高松市教育委員会

香川県教育委員会 2000『松並中所遺跡』

香川県教育委員会 2004『中森遺跡　林･坊城遺跡　東山崎･水田遺跡』

川畑聰 2003「西春日町北山浦地区」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 14 年度国庫補助事業』高松市教育委員会

川畑聰 2004「南山浦遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 15 年度国庫補助事業』高松市教育委員会

小竹一郎編『高松市文化財（史跡）分布調査報告書』

高松市教育委員会 2008『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 19 年度国庫補助事業』

寺田貞次 1941「香川県坂田の廃寺址」『史蹟名勝天然記念物調査報告（下巻）』香川県史蹟名勝天然記念物調査会

山本英之 1995「片山池瓦窯跡」『香川県埋蔵文化財年報　平成６年度』香川県教育委員会

渡邊誠編 2009『片山池窯跡群』高松市教育委員会

（渡邊　誠）

第３章　調査の成果

第１節　調査成果の報告にあたって

本調査は，既述のとおり，調査地の土地区画，調査条件などから第４図のように４つの区画に分割し，実施した。そのため，報告にあたっては遺構名を振り直している（第３表）。

遺構の報告は基本的にSH，SB，SX，SK，SP，SD，SRの順序で行う。ただし，この中で，SXについては居住に伴う施設と，それ以外のものという大きく２つに分類し報告を行うため，いくつかの箇所に分かれて報告しており，やや煩雑になっている。

出土遺物については，弥生時代中期の土器および石器が主な出土品であり，土器は第５図，第５表の高松市教育委員会 2007 年刊行の『日暮・松林遺跡』の器種分類をもとに選別を実施した。さらに下位の分類基準となる口縁部の細部の形態については，本来であれば分類改定を行い，それに基づき記述を行うべきであるが，本書では分類の改定は行わず，抽出および図化に努める形で実施し，今後改めて整理したいと考えている。そのため，上記分類に該当するものについてのみ，分類名を既述している。時期比定については下記の論文を使用した。

【引用文献】

信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『弥生時代前期から中期前半の様相』

信里芳紀 2004「讃岐地方における弥生中期の土器編年」『弥生中期土器の併行関係』埋蔵文化財研究会

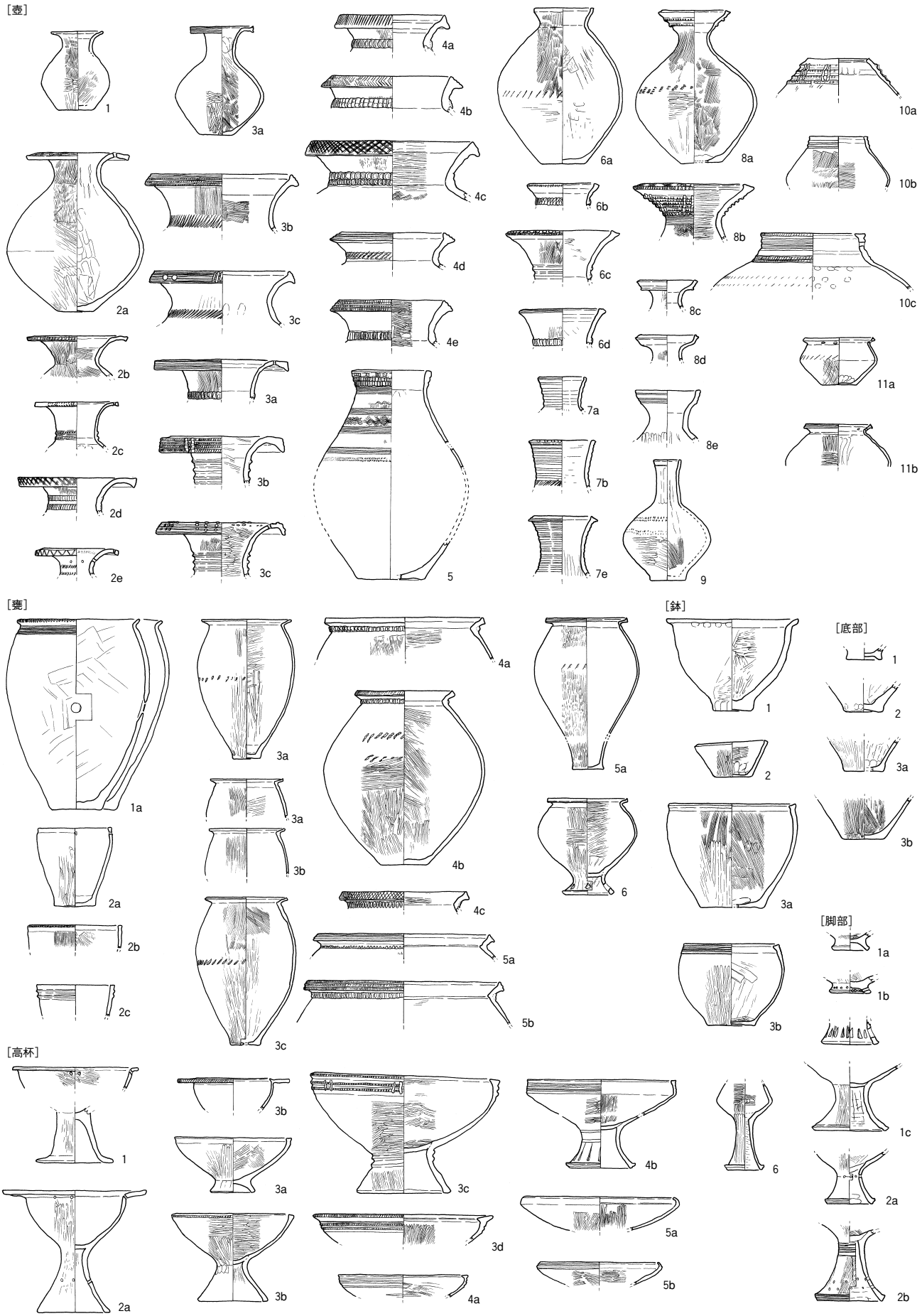
森下英治 2000「讃岐地域の突帯文系土器」『突帯文と遠賀川』

石器については，製品および未成品を抽出し，図化に努め，石器製作に関わる事象については第５章で再度整理している。なお，石鏃については第６図の分類図をもとに記述を行っている。

第２節　遺構の概要

調査区は東西に長く，その両側で流れの異なる２つの旧河道に挟まれた微高地に居住域があり，EN，ES区を中心に円形の竪穴建物の他に多数の方形の竪穴建物状遺構が展開する。試掘調査の成果を踏まえると，これらの旧河道が東西に延伸しており，東西方向には居住域は展開していないが，本調査区北側および，旧河道から外れた微高地には同様な集落が営まれた可能性が高いと考えられる。

第４図　調査区の区割り図



第５図　弥生中期土器分類図（渡邊誠編 2007『日暮・松林遺跡』より転載）

第５表　弥生時代中期土器の作業分類基準

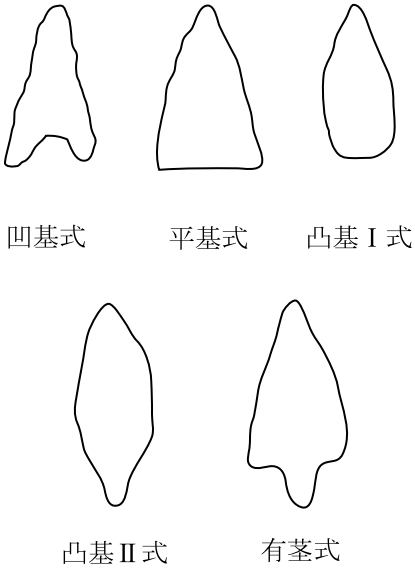
レベル A 胎土等の精粗	B 大別器種	C 細別器種	D 細部分類	矢ノ塚遺跡の分類との対照
精製土器	壺	壺1　広口壺①（口唇部を丸くおさめるもの）		
		壺2　広口壺②（口唇部が面をもつもの）（垂下口縁のものも含む）	a 口唇部は無文	壺A1
			b 口唇部に刺突文	壺A2
			c 口唇部に綾杉文	壺A2
			d 口唇部に斜格子文	壺A2
			e 口唇部にV字文	壺A2
		壺3　広口壺③（口縁部に凹線文を施すもの）	a 凹線文のみ	壺A3-2・3，B3-1・2
			b 凹線文＋刺突文	壺A3-1，B3-1
			c 凹線文＋浮文	壺A3-1，B3-1
		壺4　直口壺①（口頸部が逆ハの字状に直線的に伸び，口唇部を拡張して文様を施すもの）	a 口唇部に刺突文	壺C2
			b 口唇部に綾杉文	壺C2
			c 口唇部に斜格子文	壺C2
			d 凹線文のみ	壺C3-2～3
			e 口唇部に凹線文＋浮文	壺C3-1
		壺5　直口壺②（口頸部と胴部の括れが不明瞭のもの）		
		壺6　直口壺③	a 口唇部は無文	壺C1・E1・F1 ・F3-3
			b 口唇部に刺突文	壺C2，E1
			c 口唇部に浮文	壺E1
			d 口唇部に凹線文	壺C2
		壺7　直口壺④（口頸部に凹線文を施すもの）	a 口唇部が平坦で無文	壺F4
			b 口唇部に浮文	壺F4
			c 口唇部に凹線文	壺F4
		壺8　細頸壺①	a 逆ハの字に直線的に開く口縁で突帯を1～2条	壺E1・E3
			b 逆ハの字に直線的に開く口縁で突帯を3条～	壺E1～2
			c 袋状口縁で突帯を持つ	壺E1・3
			d 袋状口縁で突帯なし	壺E1・3
			e 凹線文	壺E4，C4
		壺9　細頸壺②		
		壺10　無頸壺①	a 口縁部が内傾し，突帯を付す	壺H1
			b 口縁部が内傾し，外面に凹線文を施す	壺H4
			c 口縁部が直立し，外面に凹線文を施す	壺H4
		壺11　無頸壺②（小形）	a 口縁部が無文	壺D3-3
			b 口縁部が凹線文	壺D3-3
粗製土器	甕	甕1　明確なくの字にならないもの		
		甕2　バケツ状	a 無文	鉢1
			b 口唇部に刺突文	
			c 突帯をもつもの	
		甕3　くの字甕①	a 丸くもしくは平坦におさめる	甕1a・b
			b 摘み上げるように跳ね上げ口縁になるもの	甕1b・c
			c 拡張した口唇部に凹線文状の沈線が施されるもの	甕1c
		甕4　くの字甕②口唇部を拡張して，文様等を施す。ただし凹線文は施さない。頸部に押さえ文様を持つ突帯を貼り付けるものが多い。	a 無文	壺D1
			b 刺突文	壺D2
			c 斜格子文	
		甕5　凹線文	a 凹線文のみ	壺D3-2・3，甕3-2
			b 凹線文＋刺突文	壺D3-1，甕3-1
		甕6　甕3に脚のつくもの		
	鉢	鉢1　緩やかなくの字状の口縁部		
		鉢2　坏形		鉢1
		鉢3　やや口縁部が窄まり，口唇部は平坦	a 口縁部外面は無文	
			b 口縁部外面に凹線文	鉢4-2
	高坏	高坏1　やや緩やかに口縁部が折れるもの		
		高坏2　L字もしくは鋤先状	a 口唇部が無文	高坏D3-3
			b 口唇部に刺突文	高坏D2
		高坏3　深い鉢形の坏部に脚がつく	a 口唇部が平坦で，外面は刺突文か無文。短脚	高坏A1
			b 口唇部が平坦で，外面は刺突文か無文。長脚	高坏A2
			c 口唇部が平坦で，外面に多数の刺突文を施す突帯を貼り付ける	高坏A4-1
			d 内外に口唇部を拡張し，外面に刺突文	高坏A2
		高坏4　口縁部外面に凹線文	a 坏部が丸みをもって立ち上がる	高坏A4-2
			b 坏部が直線的に内傾しながら立ち上がる	
		高坏5　坏部が直線的に立ち上がり，口唇部を内面に折り曲げる	a 無文	高坏B1
			b 凹線文をもつ	高坏B4
		高坏6　小形の椀状の坏部をもつ		高坏C1
	底部	底部1　脚部状底		
		底部2　上げ底		
		底部3　平底	a 括れ部が存在	
			b 直線的に立ち上がる	
	脚部	脚部1　端部は平坦か丸	a 短くハの字に開く	高坏脚部1-3
			b 短くハの字に開き，文様などを施すもの	高坏脚部1-3
			c 長い	高坏脚部1-3
		脚部2　端部を拡張し，凹線文を施すもの	a 脚部外面に何らかの文様（凹線文や透かし）を施すもの	高坏脚部3-2・3
			c 脚部外面に凹線文に加え複数の文様を施す	高坏脚部3-2・3

＊分類の土器図面については下記の報告書より引用し，スペース等の都合上，図面の一部分を取り出したものもある。その後，すべてにおいて再トレースしている。各図の引用元については下記の通りである。

【引用文献】
國木健司 1990「西又遺跡」『香川県埋蔵文化財調査概報集』香川県教育委員会
笹川龍一編 1985『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会
真鍋昌宏編 1987『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会
藤井雄三編 1989『久米池南遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕編 1993『さこ・長池遺跡』高松市教育委員会
山下平重編 1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会
大嶋和則編 2003『日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会

【図版出展】

【西又遺跡】高坏１【矢ノ塚遺跡】壺２d・２e・３a・４a・４d・４e・７a・７c・８d・10b・10c・11a・11b，甕５a，鉢２，高坏２b・３d・５a・５b，６【彼ノ宗遺跡】甕５a【久米池遺跡】壺７b，高坏４b，脚部２a・２b【さこ・長池遺跡】壺８e，鉢１，高坏２a【多肥松林遺跡】壺１・２a・２b・２c・３a・３b・３c・４b・４c・５・６a・６b・６c・６d・８a・８b・８c・９・10a，甕１・２a・２b・３a・３b・３c・４a・４b・４c・５b・６，鉢３a・３b，高坏３a・３b・３c・４a，脚部１a・１b・１c【日暮・松林遺跡（済生会）】底部１・２・３a【日暮・松林遺跡（共同住宅）】甕２c



第6図　石鏃分類図

本遺跡は中期中葉を中心として集落が形成されるが，その後は，旧河道が埋没するとともに中期後半以降は集落は移動し，生活痕跡は認められない。これは旧河道の埋積作用による周辺の湿地化等が影響した可能性があり，その後は居住地として利用されることはなく，生産域としての土地利用がなされていたようである。

遺構埋土等から焼土が多数認められ，なんらかの焼成行為が行われたと考えざるを得ない遺構も複数確認した。竪穴建物では多量のサヌカイト製品および未成品，剥片，石核などが出土し，石器製作の状況を留めた良好な資料と言える。

詳細については下記に報告していく。

第3節　基本層序

現地表面の標高は約14.5mで，遺構面は表土から0.7～0.8m掘削を行った標高13.7m前後で確認できる。地表面の微細な起伏が確認でき，遺構面は比較的良好に残っていた。

遺構面を覆っていた土層は上層から現水田に伴う耕作土，床土（以上がA層）があり，その下には浅黄色極細砂（B層），褐灰色シルト質粘土（C～D層）が堆積している。

これらの比較的単純な堆積層の下位に黄色系粘質土（E層）で構成される地山面があり，そこから遺構が掘り込まれている。地山面より上位層では遺構の掘りこみが確認できないことから，既述のとおり，生産域等としての土地利用のあり方が想定される。また，後述するように，今回の調査では縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺構が確認されており，いずれも地山起源の埋土であり，掘り方の平面把握が非常に難しく，苦慮した経緯があった。調査時は遺構面が複数存在する可能性を想定したが，明確な遺構面の確認には至らなかったため，掘り込み面は同一遺構面（地山）と考えられる。

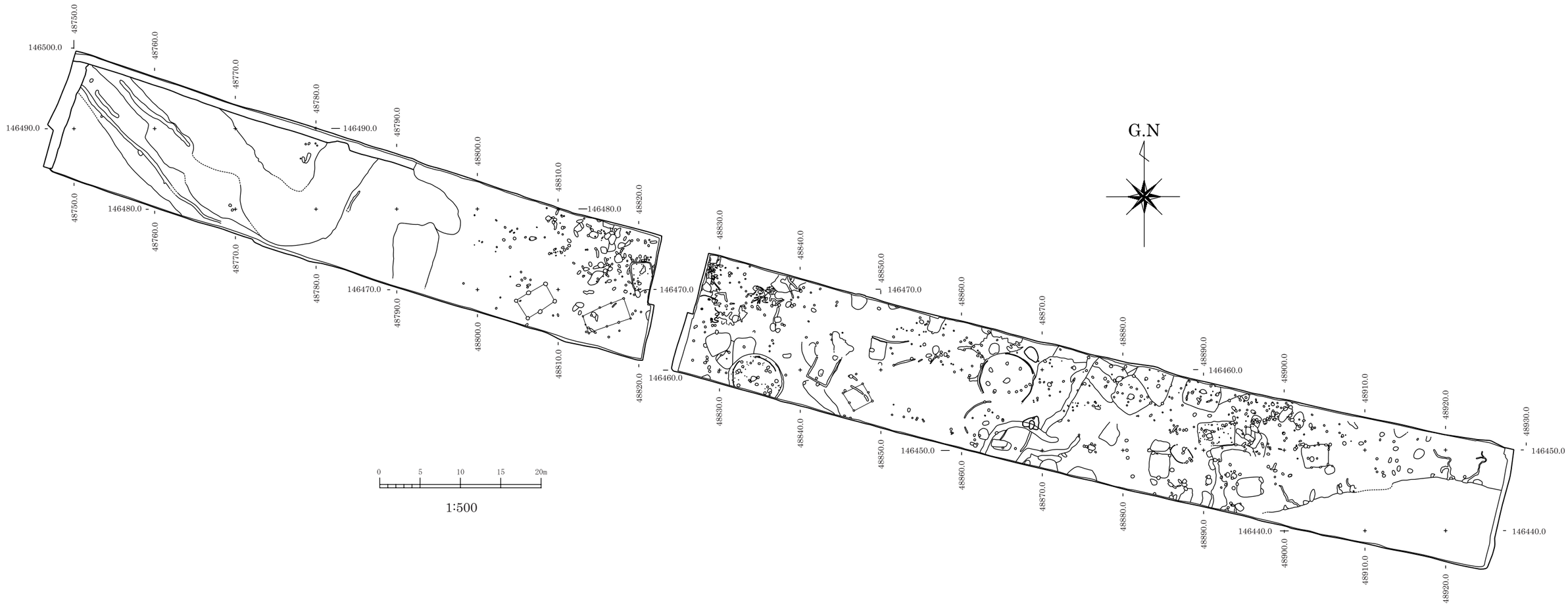
また，旧河道の東側周辺では地山面に褐鉄鉱の沈着が多量に認められ，地山に鉄釘が刺さっているかのように高師小僧が認められる範囲があった。

調査地は既述のとおり，東西の旧河道に挟まれた微高地であり，東西へと地形が低くなる。そのため，特に西側は，緩やかに旧河道に向かって傾斜しており，褐灰色シルト，褐灰色シルト質粘土等が薄く複数の層で堆積している。

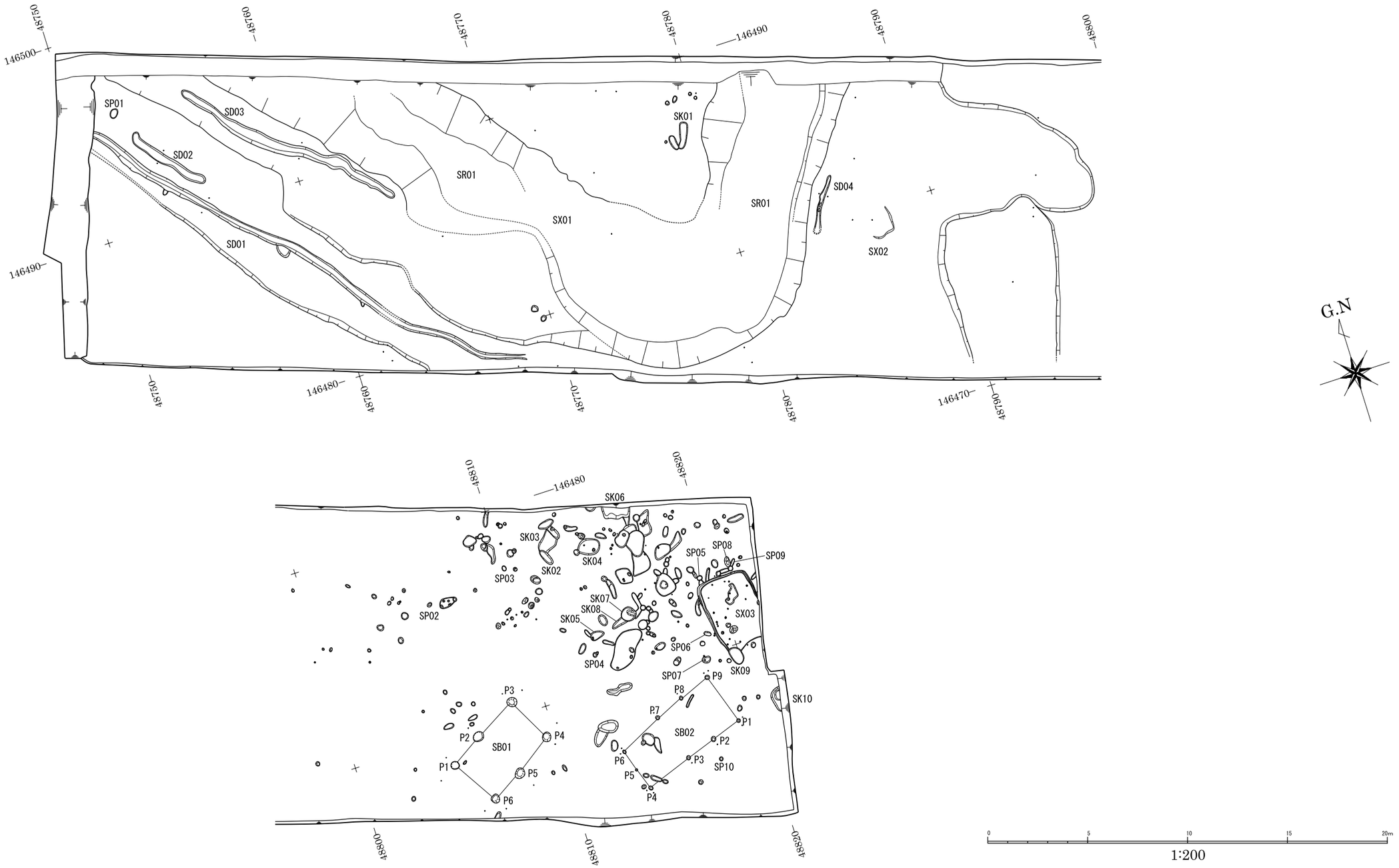
後述する旧河道SR01には中州状部分があり，この中州はグライ化した非常に極めの細かいオリーブ灰色粘土で構成されている。既述した古い遺構面の存在の有無等を確認するために，断ち割り調査を実施した。その結果，旧河道は数度におよぶ堆積作用で形成されているものの，明確な遺構面は確認できなかった。ただし，中州の構成土が見られなくなる深さ3.05m（標高約11m）で，黒色シルト質粘土の面的な広がりを確認するとともに，多量の流木や木の葉等を含む層を確認した。このような状況からさらに古い段階の旧河道はさらに低い箇所を流れており，幾つも流路を変えながら埋没した後，当調査で確認した流路が形成されたことが明らかとなった。なお，黒色シルト質粘土の上に中州が堆積していると想定されるが，確認はできなかった。

以上のことから，石清尾山から発する谷川の堆積作用によって数度にわたり地形を変化させていたことが判明した。これらの堆積作用は今回の調査によって縄文時代以前とそれ以降の大きく2回生じていたことが明らかとなり，この谷川に加え，旧河道SR02の氾濫が居住環境を悪化させ，移住を促すとともに，異なる脈絡での土地利用が成される経緯となったと考えられる。

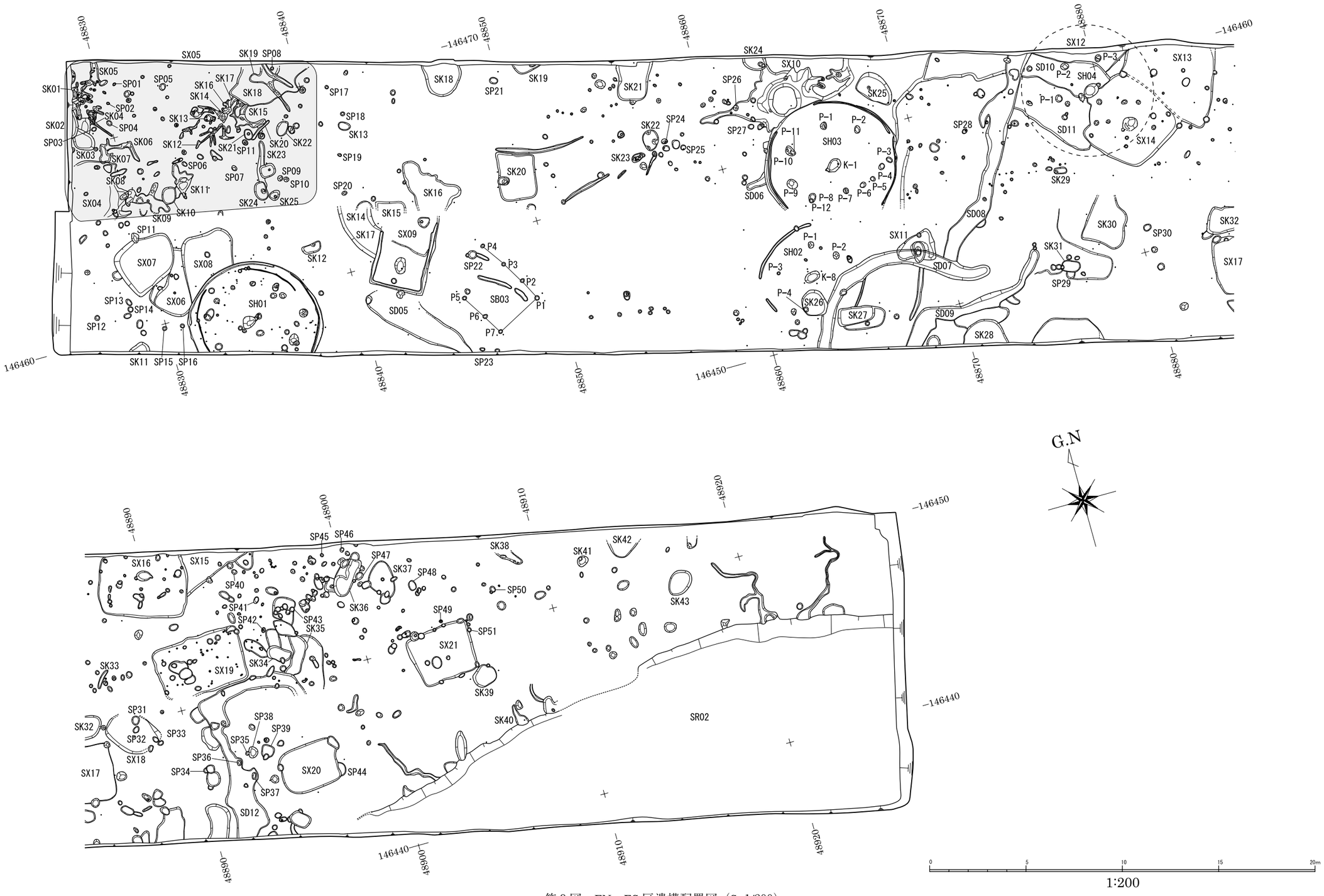
また，調査区東側も次第に地山面が傾斜していくものの，西側のような細かな堆積状況は確認できず，基本的には上述の層位が東へとやや層が厚くなりながら伸びていることを確認した。



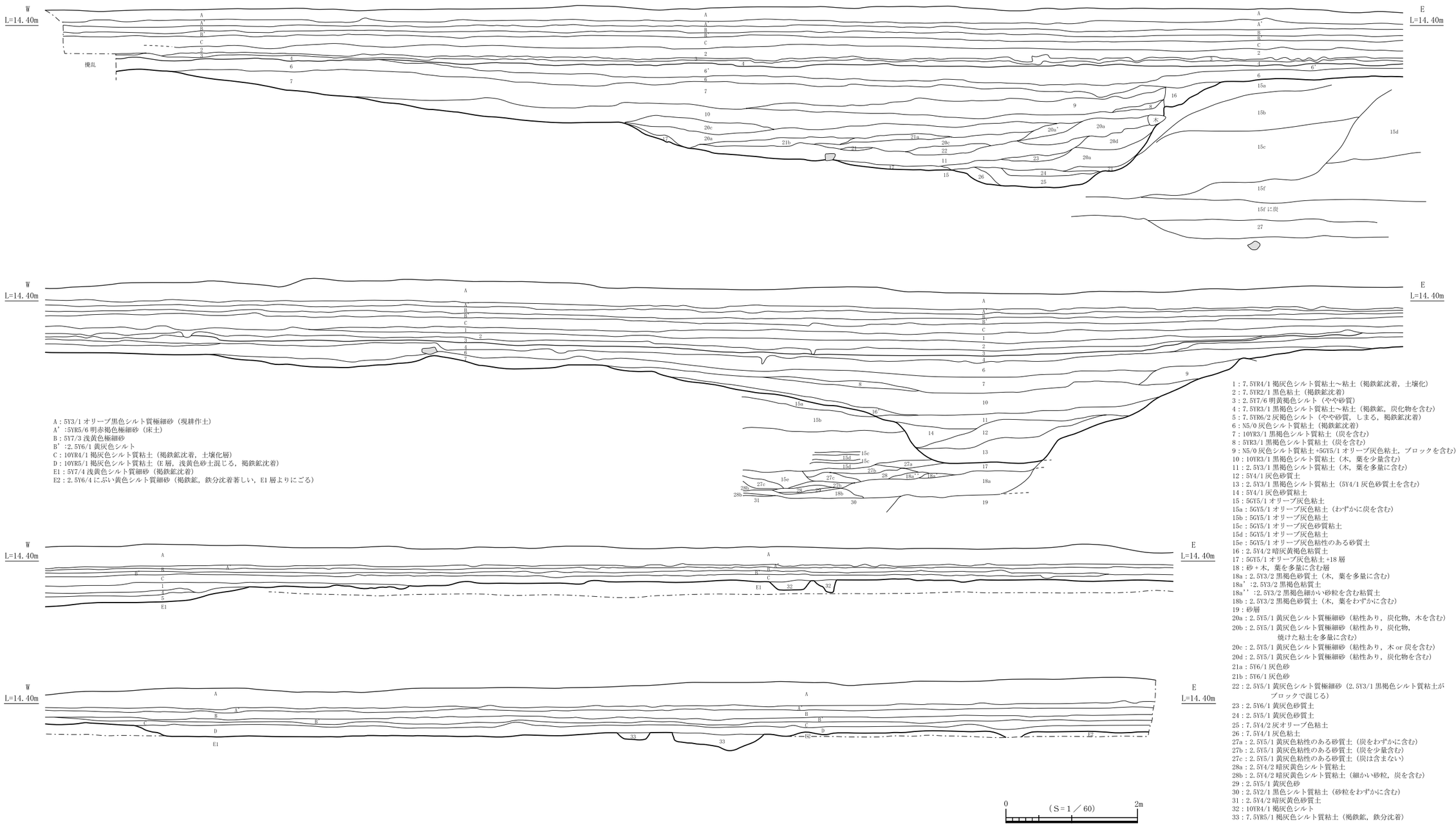
第７図　遺構配置図（S=1/500）



第８図　WN・WS 区遺構配置図（S=1/200）



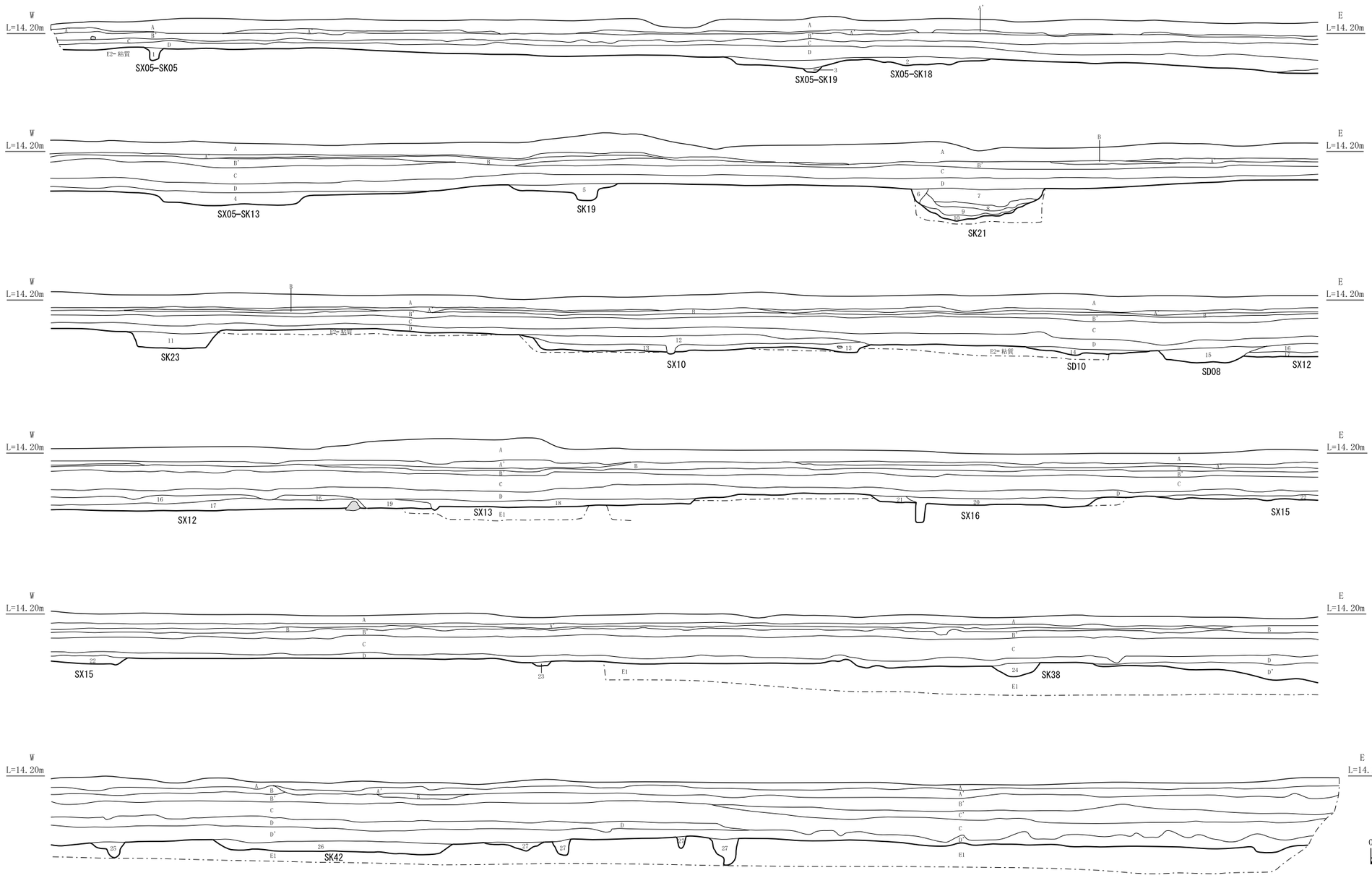
第９図　EN・ES 区遺構配置図（S=1/200）



A：5Y3/1 オリーブ黒色シルト質極細砂（現耕作土）
A’：5YR5/6 明赤褐色極細砂（床土）
B：5Y7/3 浅黄色極細砂
B’：2.5Y6/1 黄灰色シルト
C：10YR4/1 褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着，土壌化層）
D：10YR5/1 褐灰色シルト質粘土（E 層，浅黄色砂土混じる，褐鉄鉱沈着）
E1：5Y7/4 浅黄色シルト質細砂（褐鉄鉱沈着）
E2：2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質細砂（褐鉄鉱，鉄分沈着著しい，E1 層よりにごる）

1：7.5YR4/1 褐灰色シルト質粘土～粘土（褐鉄鉱沈着，土壌化）
2：7.5YR2/1 黒色粘土（褐鉄鉱沈着）
3：2.5Y7/6 明黄褐色シルト（やや砂質）
4：7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土～粘土（褐鉄鉱，炭化物を含む）
5：7.5YR6/2 灰褐色シルト（やや砂質，しまる，褐鉄鉱沈着）
6：N5/0 灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着）
7：10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（炭を含む）
8：5YR3/1 黒褐色シルト質粘土（炭を含む）
9：N5/0 灰色シルト質粘土＋5GY5/1 オリーブ灰色粘土，ブロックを含む）
10：10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（木，葉を少量含む）
11：2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土（木，葉を多量に含む）
12：5Y4/1 灰色砂質土
13：2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土（5Y4/1 灰色砂質土を含む）
14：5Y4/1 灰色砂質粘土
15：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
15a：5GY5/1 オリーブ灰色粘土（わずかに炭を含む）
15b：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
15c：5GY5/1 オリーブ灰色砂質粘土
15d：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
15e：5GY5/1 オリーブ灰色粘性のある砂質土
16：2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘質土
17：5GY5/1 オリーブ灰色粘土＋18 層
18：砂＋木，葉を多量に含む層
18a：2.5Y3/2 黒褐色砂質土（木，葉を多量に含む）
18a’：2.5Y3/2 黒褐色粘質土
18a’’：2.5Y3/2 黒褐色細かい砂粒を含む粘質土
18b：2.5Y3/2 黒褐色砂質土（木，葉をわずかに含む）
19：砂層
20a：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物，木を含む）
20b：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物，焼けた粘土を多量に含む）
20c：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，木 or 炭を含む）
20d：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物を含む）
21a：5Y6/1 灰色砂
21b：5Y6/1 灰色砂
22：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土がブロックで混じる）
23：2.5Y6/1 黄灰色砂質土
24：2.5Y5/1 黄灰色砂質土
25：7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
26：7.5Y4/1 灰色粘土
27a：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭をわずかに含む）
27b：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭を少量含む）
27c：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭は含まない）
28a：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土
28b：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土（細かい砂粒，炭を含む）
29：2.5Y5/1 黄灰色砂
30：2.5Y2/1 黒色シルト質粘土（砂粒をわずかに含む）
31：2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
32：10YR4/1 褐灰色シルト
33：7.5YR5/1 褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱，鉄分沈着）

第 10 図　調査区西側　北壁土層（S=1/60）



A：5Y3/1　オリーブ黒色シルト質極細砂（現耕作土）
A'：5YR5/6　明赤褐色極細砂（床土）
B：5Y7/3　浅黄色極細砂
B'：2.5Y6/1　黄灰色シルト
C：10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着、土壌化層）
C'：7.5YR6/1　褐灰色シルト（やや砂質、褐鉄鉱沈着）
D：10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（E 層、浅黄色砂土混じる、褐鉄鉱沈着）
D'：10YR5/1　褐灰色シルト（やや砂質、浅黄色土・地山混じる、炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）
E1：5Y7/4　浅黄色シルト質細砂（褐鉄鉱沈着）…遺構ベース
E2：2.5Y6/4　にぶい黄色シルト質細砂（褐鉄鉱、鉄分沈着著しい、E1 層よりにごる）…遺構ベース

1：10YR4/1　褐灰色シルト（炭・焼土粒を若干含む、浅黄色土・地山塊を含む、褐鉄鉱沈着）…SX05SK05
2：10YR6/1　褐灰色シルト（炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SX05SK18
3：10YR5/1　褐灰色シルト（炭を若干含む、浅黄色土混じる、褐鉄鉱沈着）…SX05SK19
4：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SX05SK13
5：10YR5/1　褐灰色シルト（炭を含む、褐鉄鉱沈着）…SK19
6：N4/0　灰色シルト質粘土（炭を含む、褐鉄鉱沈着）…SK21
7：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を多く含む、焼土粒を含む、浅黄色土塊を含む、褐鉄鉱沈着）…SK21
8：2.5Y7/1　灰白色シルト質粘土（炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…貼床？…SK21
9：5YR1.7/1　黒色シルト（炭層）…SK21
10：5YR7/4　にぶい橙色粘土（焼土）…SK21
11：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SK23
12：7.5YR5/2　灰褐色シルト（褐鉄鉱マンガン沈着）…SX10
13：7.5YR3/1　黒褐色シルト質粘土（明黄褐色土を塊状に含む、褐鉄鉱沈着）…SX10
14：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着）…SD10
15：10YR4/2　灰褐色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着）…SD08
16：7.5YR4/2　灰褐色シルト（浅黄色土・地山混じる、褐鉄鉱沈着）…SX12
17：2.5Y6/2　灰黄色シルト（炭を含む、褐鉄鉱沈着）…SX12
18：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SX13
19：10YR6/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山混じる、炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SX13
20：10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山混じる、炭を含む、褐鉄鉱沈着）…SX16
21：10YR6/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山混じる、やや砂質、褐鉄鉱沈着）…SX16
22：10YR5/1　褐灰色シルト（炭・浅黄色土・地山が若干混じる、褐鉄鉱沈着）…SX15
23：10YR5/1　褐灰色シルト（地山混じる、炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）
24：10YR5/1　褐灰色シルト（炭を若干含む、浅黄色土・地山を塊状に含む、褐鉄鉱沈着）…SK38
25：10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（ややグライ化、炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）
26：7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭・浅黄色土・地山を若干含む、褐鉄鉱沈着）…SK42
27：10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山混じる、炭を若干含む、褐鉄鉱沈着）

第 11 図　調査区東側　北壁土層（S=1/60）

第４節　遺構と遺物

本節では遺構および遺物について詳述する。その順序は，竪穴建物跡（SH），掘立柱建物跡（SB），方形竪穴建物状遺構（SX），土坑（SK），ピット（SP），溝状遺構（SD），旧河道（SR），不明遺構（SX）である。

【竪穴建物跡】

SH01（第 12～14 図）

SH01 はES 区の南西隅部に位置する。直径約 6.9ｍの円形の竪穴建物である。一部は調査区外へとのびる。掘り方は非常に良好に残っており，SX06・08 を切っている。

中央に土坑があり，周辺に小規模なピット（P23・26）が配置されている。この中央土坑は炭および灰の堆積が認められ，東側には掻き出しの痕跡が認められる。

支柱穴は調査区外も含めて６本で，六角形に配置されていたと考えられる。掘り方は深く 54 ～ 70㎝で，第 14 図のように柱材が残っているものもあった。柱の材質は第４章第２節を参照されたいが，コナラ属のものである。支柱穴は切り合いのあるものはほとんどなかったものの，同一箇所で複数の柱穴が集まるものもあり，建て替えもしくは一部改修を行ったことを示すものと考えられる。

壁溝も２ヶ所で見つかり，竪穴建物の掘り方に沿うように掘られているものと，やや径の小さなものとがあり，建て替えによって規模を拡大したものと考えられる。

床面では明確な貼床は確認できなったが，第 12 図４・５層が対応する可能性が考えられる。

SH01 は掘り方の検出時に第 12 図のようにピット状に焼土が分布していたことから，慎重に掘り下げたところ，柱が焼け落ちた状況や炭化材が中央部を中心に円形に広く分布しており，廃絶時もしくはそれ以後に焼失したことが明らかとなった。土器や石器など生業に関わる道具の多くは小片であり，持ち出されていたと考えられる。また，柱材が抜き取ったと考えられるもの等があることから，上屋部材をある程度抜き取った状況で移住時に意図的に焼いた可能性が想定でき，住居の廃絶を考える上で重要な資料である。

遺物は土器片のほかに，斑レイ岩の叩き石，台石などが床面で出土したほか，石鏃等の小型の石製品の製作時に生じたと考えられる剥片およびチップが多数出土している。床面検出時に多数認められ，石器製作を考える上で非常に良好な資料群といえる。

なお，出土遺物は第 12 図の炭化材等検出状況の畔で東西南北に地区割りをし，概ね遺構検出時，炭化材検出までの埋土，炭化材撤去時，床面別に取り上げを行っており，遺物一覧表を参照いただきたい。

出土遺物から時期は弥生時代中期後葉（信里編年Ⅲ-1 ～ 2 期）で建て替え前はそれ以前（Ⅱ-2 様式？）と考えられる。

出土遺物（第 15～26 図）

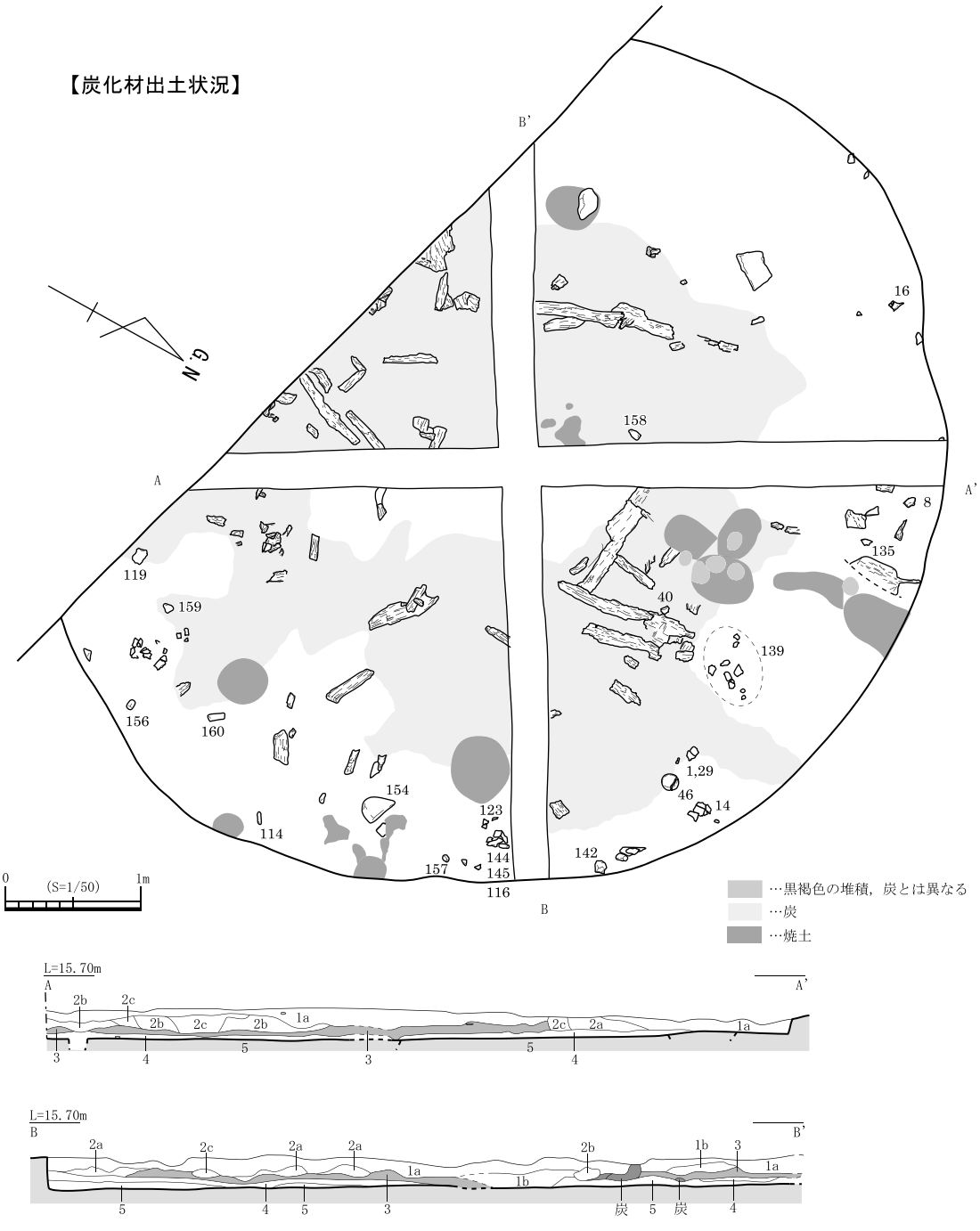
１ ～ 62 が土器もしくは土製品で，63 ～ 160 が石製品，161 ～ 164 が柱材である。このうち１，８，13，14，16，17，27，29，40，44，46，114，122 ～ 123，139，142，144 ～ 146，154，156 ～ 157，160 が床面から出土したもので，１ ～ 61 は弥生土器，62 は土製品である。１ ～ ７が壺形土器で，８は蓋形土器，９はバケツ型の鉢形土器で，10 ～ 46 は甕形土器で，47 ～ 61 は高杯形土器で，62 は紡錘車である。

１は口唇部をやや拡張し，凹線文を施すもので，頸部に断面三角形状の突帯をもつ。２は頸部の先端に粘土帯を貼り付けることで口縁部を袋状に作りだし，その外面に凹線文を施すものである。口唇部の先端を肥厚させる。頸部には５個を一単位とする刺突文を施す。頸部外面には口縁部成形時の指押さえが残る。内面には横方向の刷毛目調整が施される。３は口唇部を強いヨコナデによって整形するものである。４は頸部の押圧文の貼り付け突帯である。５，６はヨコナデ調整によって口唇部をやや肥厚させる壺の口縁部である。７は体部および底部で外面を縦方向の磨き調整によって仕上げる。

８は椀をひっくり返したような形状で，内外面ともに板ナデによる調整を施す。

９は口唇部を強いナデ調整によって仕上げる。

10 ～ 35 は甕の口縁部 ～ 体部にかけての破片資料である。口縁部形態からおおよそ３種類に分類できる。18 はナデ調整によって丸くおさめるもので，10 ～ 12，16，19 ～ 21，23 ～ 25 は甕 3b で，強いナデ調整によって口縁部をややつまみ上げるもので，13 ～ 15，17，22，26 ～ 29 は甕５aでさらにつまみ上げた口縁部に１～２条の凹線文を施すものである。断面形状にはヴァリエーションが認められる。頸部内面には口縁部整形に関わるヨコナデ調整による帯状の窪みが認められる。底部付近は縦方向の磨き調整，上部は縦方向の刷毛目調整によって外面を仕上げ，内面は刷毛目調整後にナデ調整を施し

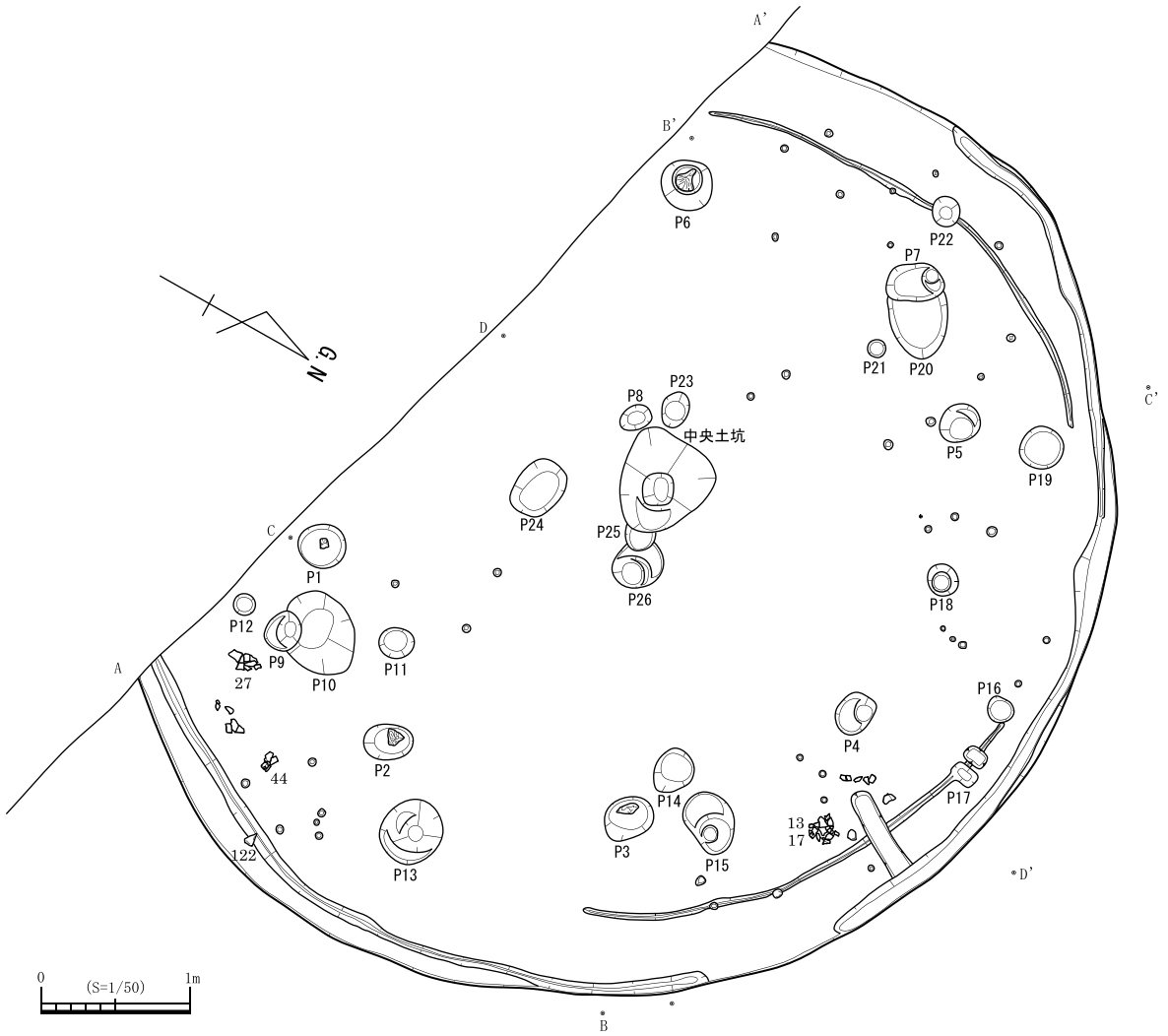


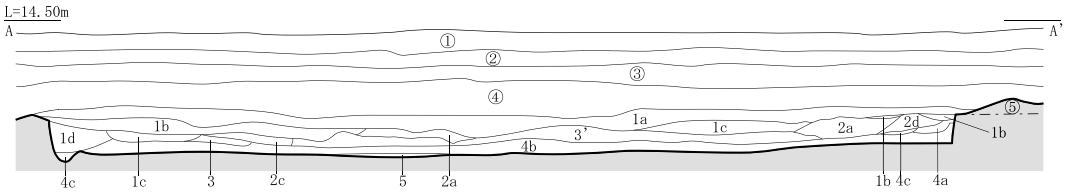
1a:10YR7/1　灰白色粘質土（炭・遺物含む）
1b:10YR7/1　灰白色粘質土（炭・遺物含む，褐鉄鉱含む）
2a:7.5YR4/6　褐色粘質土（粘土が赤く焼けている，
　炭化物と 2c 層ブロック含む）
2b:5Y8/3　淡黄色粘質土（2a 層のブロック含む）粘土が焼けた層
2c:10YR4/2　灰黄褐色粘質土←粘土が焼けたと思われるが酸化はしていない
3: 炭化物（材）支柱などが焼けて堆積した層
4: 炭化物と床面の間に堆積した層；10YR6/1　褐灰色粘質土（炭化物・床面ブロック含む）
5: 床面；10YR7/2　にぶい黄橙色粘質土（褐鉄鉱・炭化物を含む）

第 12 図　SH01 炭化材等検出状況（S=1/50）

ているものと考えられる。

47 ～ 50 は杯部片で口唇部を肥厚させ，杯部途中で折れるものである。51 ～ 53 は高杯 4 aで，杯部から脚部にかけての破片で，円盤充填の痕跡がみとめられる。54 ～ 61 は脚部片で，端部を丸くおさめるもの（56，57），強いヨコナデ調整によって肥厚もしくはややつまみ上げるもの（54，55，58 ～ 60）がある。特に 54，55 は外面に細い沈線で斜格子文，櫛描き状文を施し，端部に放射状に刺突文を施す。外面は丁寧なナデ調整によって仕上げるが，内面はヘラ削りによって仕上げる。





①:2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質極細砂
②:2.5Y7/2　灰黄色シルト質細砂…床土
③:2.5Y7/1　灰白色シルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
④:7.5YR3/1　黒褐色シルト質粘質土（褐鉄鉱を含む）
⑤:2.5Y6/6　明黄褐色粘土（褐鉄鉱を含む）

1a:10YR7/1　灰白色粘質土（炭・遺物含む）
1b:10YR7/1　灰白色粘質土（炭・遺物含む，褐鉄鉱含む）
1c:1a 層に 2a 層を含む
2a:7.5YR4/6　褐色粘質土（粘土が赤く焼けている，炭化物と2c層ブロック含む）
2c:10YR4/2　灰黄褐色粘質土
2d:2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質土
3：炭化物（材）支柱などが焼けて堆積した層
3':7.5YR6～4/1　褐灰色粘質土に３層の炭を含む
4a:炭化物と床面の間に堆積した層；10YR6/1　褐灰色粘質土（炭化物・床面ブロック含む）
4b:2.5Y4/2　暗灰黄褐色粘質土（地山が汚れた土）
4c:2.5Y5/2　暗灰黄褐色粘質土（壁溝の埋土）
5：床面；10YR7/2　にぶい黄橙色粘質土（褐鉄鉱・炭化物を含む）

第 13 図　SH01 平･断面図(S=1/50)

62 は土器片を転用した紡錘車である。半分が欠損しており，両面ともにナデ調整によって仕上げる。

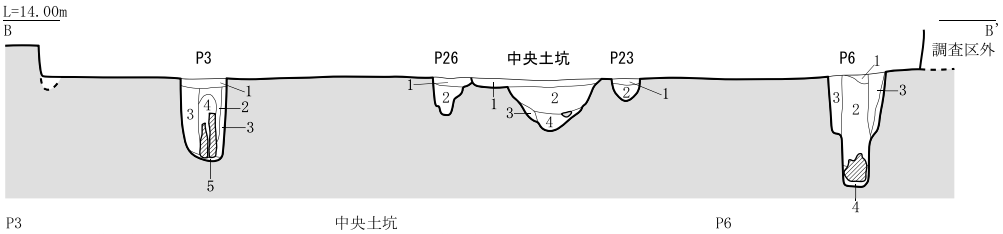
土器等の胎土および色調は，６種類に分類できる。

６，12，16，19，22，49 は黄白色を呈し，石英，長石を含む胎土で，個体でやや異なるが，精良なものが多い。

56，57 は橙褐色を呈し，石英，長石を含む。

２，５，７，15，18，20，33，46 は褐灰色を呈し，長石，石英を含む胎土である。

１，42，47 は茶褐色を呈し，長石，石英，雲母，角



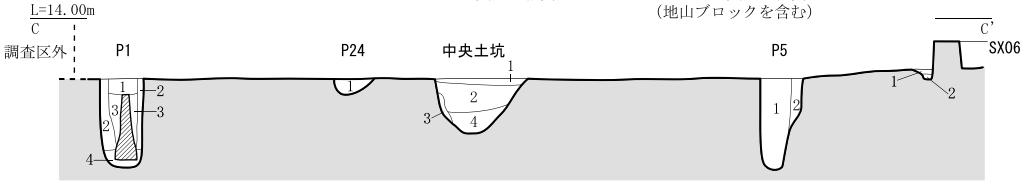
P3
1:2.5Y4/1　黄灰色粘質土（炭を少量含む）
2:2.5Y4/2　暗灰黄褐色粘質土
（炭を多量に含む）
3:2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
4:焼けて腐った木材
5:5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土

中央土坑
1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを少量含む，褐鉄鉱含む）
2:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを多量に含む，褐鉄鉱含む）
3:2.5Y4/1　黄灰色粘質土（地山ブロックを含む）
4:10YR4/1　褐灰色粘質土（地山ブロックを含む）

P6
1:10YR7/8　黄橙色粘質土（焼土）
2:2.5Y4/1　黄灰色粘質土（炭をブロックで含む）
3:2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
（地山が汚れた土）
4:5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土

P26
1:10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土
2:2.5Y5/1　黄灰色粘質土

P23
1:10YR2/3　暗褐色粘質土
2:2.5Y4/1　黄灰色粘質土
（地山ブロックを含む）



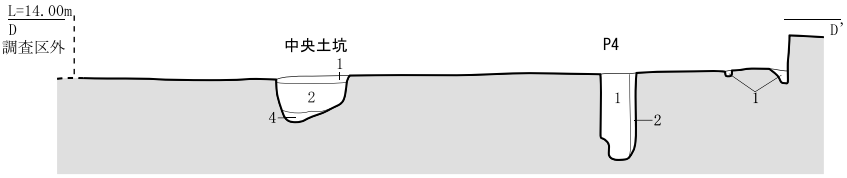
P1
1:2.5Y3/2　黒褐色粘質土
（炭を多量に含む）
2:2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
（地山ブロック含む）
3:10YR4/1　褐灰色粘質土（本来のピット埋土，炭を少量含む）
4:5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土

中央土坑
1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを少量含む，褐鉄鉱含む）
2:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを多量に含む，褐鉄鉱含む）
3:2.5Y4/1　黄灰色粘質土（地山ブロックを含む）
4:10YR4/1　褐灰色粘質土（地山ブロックを含む）

P24
1:10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
（焼けている）

P5
1:2.5Y4/2　暗灰黄褐色粘質土
（炭を含む）
2:2.5Y5/2　暗灰黄褐色粘質土

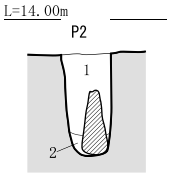
壁溝
1:2.5Y5/2　暗灰黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む）
2:2.5Y5/3　黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む）



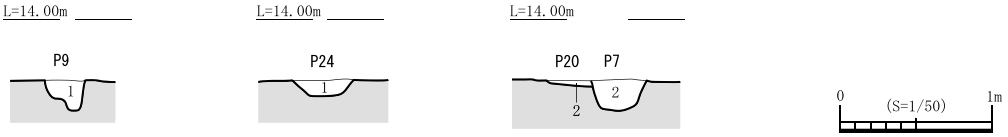
中央土坑
1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを少量含む，褐鉄鉱含む）
2:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭・地山ブロックを多量に含む，褐鉄鉱含む）
4:10YR4/1　褐灰色粘質土（地山ブロックを含む）

P4
1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土
（炭を多量に含む）
2:10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
（炭をわずかに含む）

壁溝
1:2.5Y4/2　暗灰黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む）



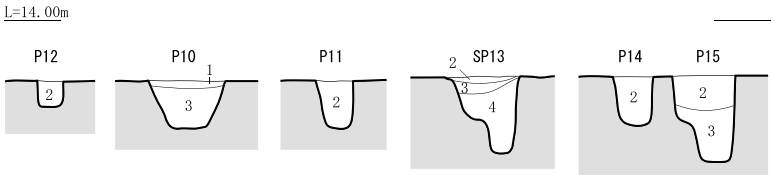
1:2.5Y4/1　黄灰色粘質土
（炭をブロックで含む）
2:5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土



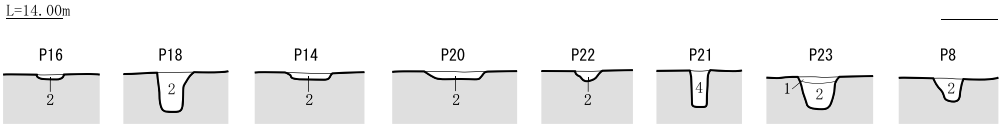
1:10YR4/2　灰褐色粘質土
（わずかに炭を含む）

1:10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
（焼けている）

2:10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む場合あり）



1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む）
2:10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
（わずかに炭を含む場合あり）
3:4+（炭を含む）
4:10YR4/1　褐灰色粘質土
（炭をわずかに含む）



第 14 図　SH01 断面図(S=1/50)

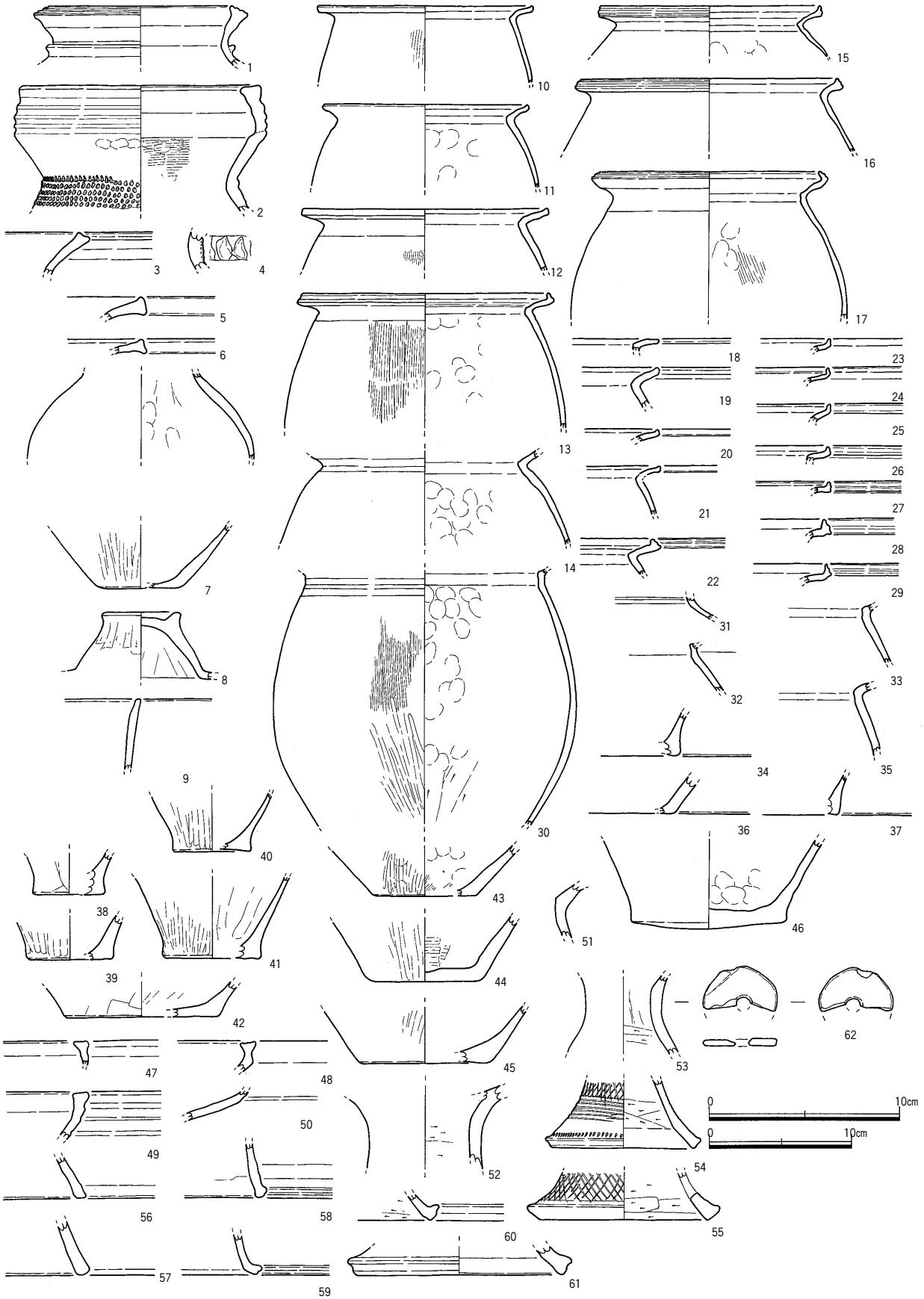
閃石を含む胎土である。

それ以外の主体を占める一群は褐灰色を呈し，長石，石英，雲母，角閃石を含む胎土である。その中でも特に，23，28，29，34，41，52，54，60 はいわゆる香東川下流域産土器(大久保 2003)の胎土（胎土１類）に近いものである。また，24，40 は明茶褐色を呈する。

石器は石鏃，石鏃未製品，打製石剣，石錐，石匙，石小刀，打製石斧，打製石包丁，スクレイパー，微細剥離痕のある剥片，二次加工のある剥片，楔形石器石核，楔形石器，剥片，石皿，敲き石，素材が出土している。

63 ～ 82 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。63 は切先と基部を一部折損しているが，凹基式の石鏃と考えられる。調整は背面側から腹面側の順に深形細部調整を施す。64 は平基式の石鏃である。調整は背面側を深形細部調整したのち，背面側に浅形 ～ 深形細部調整を施す。腹面側の一部に自然面を残す。65 は凹基式の石鏃で，切先を折損する。両面に深形細部調整を施す。66 は平基式の石鏃と考えられる。先端部と基部の一部を折損する。67 は平基式の石鏃である。背面側に深形細部調整を，腹面側に浅形 ～ 深形細部調整を施す。68 は平基式の石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施すが，背面側の基部の調整は浅く，素材面を大きく残す。風化が著しく，稜線などは不明瞭である。69 は平基式の石鏃である。調整は背腹両面を交互に浅形細部調整を施す。70 は平基式の小型の石鏃である。素材剥片の周縁に鈍角の剥離角をもつ極浅形細部調整によって成形する。71 は平基式の大型石鏃である。調整は腹面側から背面側の順に，背面側に深形細部調整を，腹面側は浅形細部調整を施し，一部未調整である。72 は平基式の大型石鏃である。調整は腹面側から背面側の順に，両面とも先端部は深形細部調整を，基部は浅形細部調整を施す。基部の調整が粗いことから，石鏃未製品の可能性も考えられる。73 は平基式の大型石鏃である。背面側は浅形 ～ 深形細部調整を施し，基辺の一部は未調整である。腹面側は側辺部分に調整を施す。74 は凸基Ⅰ式の石鏃である。両面に深形細部調整を施し，中央に稜をもつ。75 は凹基式の大型石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。76 は凸基Ⅰ式の大型石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施し，背面側先端部には稜を形成する。77 は凸基Ⅰ式の石鏃である。調整は腹面側から背面側の順に，背面側に深形細部調整，腹面側は浅形細部調整を施す。切先を折損する。78 は凸基Ⅱ式の石鏃である。調整は背腹交互に，背面側は浅形 ～ 深形細部調整，腹面側は浅形細部調整を行う。79 は凸基Ⅱ式の石鏃である。背腹両面とも極浅形細部調整を施し，大きく素材面を残す。基部は先端部と違い鈍角の剥離によって成形される。80 は凸基Ⅱ式の石鏃である。背面側を浅形細部調整によって成形するが，腹面側は粗く調整する。基部は先端部と違い鈍角の剥離によって成形される。切先は欠損している。81 は有茎式の石鏃と考えられる。切先と茎部は折損する。茎部は一撃の大きな剥離によって形成する。82 の背面側は切先は深形細部調整を施すが，基部には大きな剥離面を残す。腹面側は深形細部調整を施す。基端部を折損する。

83 ～ 104 は石鏃未製品で，石材はすべてサヌカイトである。83 の背面側に極浅形細部調整を施すが，切先は作り出していない。背面側はほぼ未調整である。84 の背面側は極浅形細部調整を施し，腹面側は側辺の一部に極浅形細部調整が確認できるほかは，未調整である。１側辺を折損しており，折損によって途中で制作を中止したと考えられる。85 は背面側に切先 ～ 側辺にかけて極浅形細部調整を施すが，腹面側は未調整である。86 は背面側の一部に極浅形細部調整を施すが，腹面側は未調整である。基部と１側辺を折損する。87 は背腹両面とも浅形 ～ 深形細部調整を施すが，一部に素材面を残す。１側辺を折損し，先端部は割れており，折損時に生じた可能性がある。88 は両面の片側に鈍角な極浅形細部調整を施す。切先は折損している。89 は腹面側から背面側の順に浅形細部調整する。基部は素材剥片の鋭利な端部と折損面で構成される。切先を成形していることから，石鏃の可能性もある。90 は両面に浅形細部調整を施し，体部に素材面を残す。切先の調整はやや粗く，基部は折損している。91 は背腹両面の片側側辺に浅形細部調整を施す。基部は折損している。92 は両面に極浅 ～ 浅形細部調整を施すが，全体に調整が粗いことから，石鏃未製品と考えられる。切先は折損している。93 は背面側は基部に浅形 ～ 深形細部調整を施し，腹面側は側辺 ～ 基辺にかけて極浅 ～ 浅形細部調整を施す。切先は折損している。94 は背腹両面の一部に鈍角な極浅形細部調整を施す。切先は折損している。95 は浅形 ～ 深形細部調整を背腹両面交互に施す。切先の調整はやや粗いことから，石鏃未製品と考えられる。基部は折損している。96 は両面の一部に浅形細部調整を施す。先端部は折損している。石錐の可能性も考えられたが，作用部が薄いため，石鏃未製品とした。97 は厚みのあるやや大型の剥片素材で、両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。切先の調整はやや粗く，厚みが薄いことから，石鏃未製品と考えられる。基部は折損している。98 は背面



第 15 図　SH01 出土遺物①（1～61：S=1/4，62：S=1/3）

側に浅形 ～ 深形細部調整を，腹面側に浅形細部調整を施す。切先の調整がやや粗いことから，石鏃未製品とした。基部は折損している。99 は大型石鏃の未製品と考えられる。両面に浅形細部調整を施す。切先の調整が粗いことから，石鏃未製品とした。調整途中で先端部が薄くなりすぎたため，制作を途中で中止した可能性がある。100 は背腹両面に粗い交互調整を施す。大型石鏃の未製品と考えられる。切先と基部は折損している。101 は横長剥片素材の石鏃未製品と考えられる。背面側は粗い調整と切先部分に極浅形細部調整を，腹面側は素材剥片の鋭利な端部に極浅形細部調整が，打面側には浅形細部調整を施す。背面側に階段状剥離が顕著に確認できることから，この部分の厚みを除去できずに，途中で制作を放棄したものと考えられる。基部は折損している。102 は背面側に粗い調整が，腹面側に浅形細部調整が施される。先端部は折損している。103 は厚みのある横長剥片の両面にやや粗い浅形 ～ 深形細部調整を施し，側辺部は鋸歯状を呈する。基部は折損している。打製石剣か尖頭器の未製品の可能性も考えられる。104 は石鏃未製品と考えられる。両面に浅形細部調整を施すが，大きく折損しているため，全体の形状は不明である。

105 ～ 109 は打製石剣で，石材はすべてサヌカイトである。105 は素材剥片を粗く調整したのち，一部に浅形細部調整を施す。107 は 105 と同一固体と考えられる。大型の横長剥片素材で，両面に浅形細部調整が施される。基端部は折損面を打面に調整が施されている。106 は両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。108 は 106 と同一固体で，両側辺とも端部を潰しており，打製石剣の基部と考えられる。自然面のある素材剥片を粗く調整したのち，浅形細部調整を施す。109 は打製石剣の体部と考えられる。背腹両面とも粗い調整のち，浅形細部調整を施す。両側辺とも端部を潰している。

110，111 は石錐で，石材はすべてサヌカイトである。110 は頭部と石錐部の境界を明瞭に作り出している。１側辺は自然面で構成され，自然面を打面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。錐部は折損している。111 は頭部と錐部の境界を調整によって明瞭に作り出している。錐部の一部を折損する。

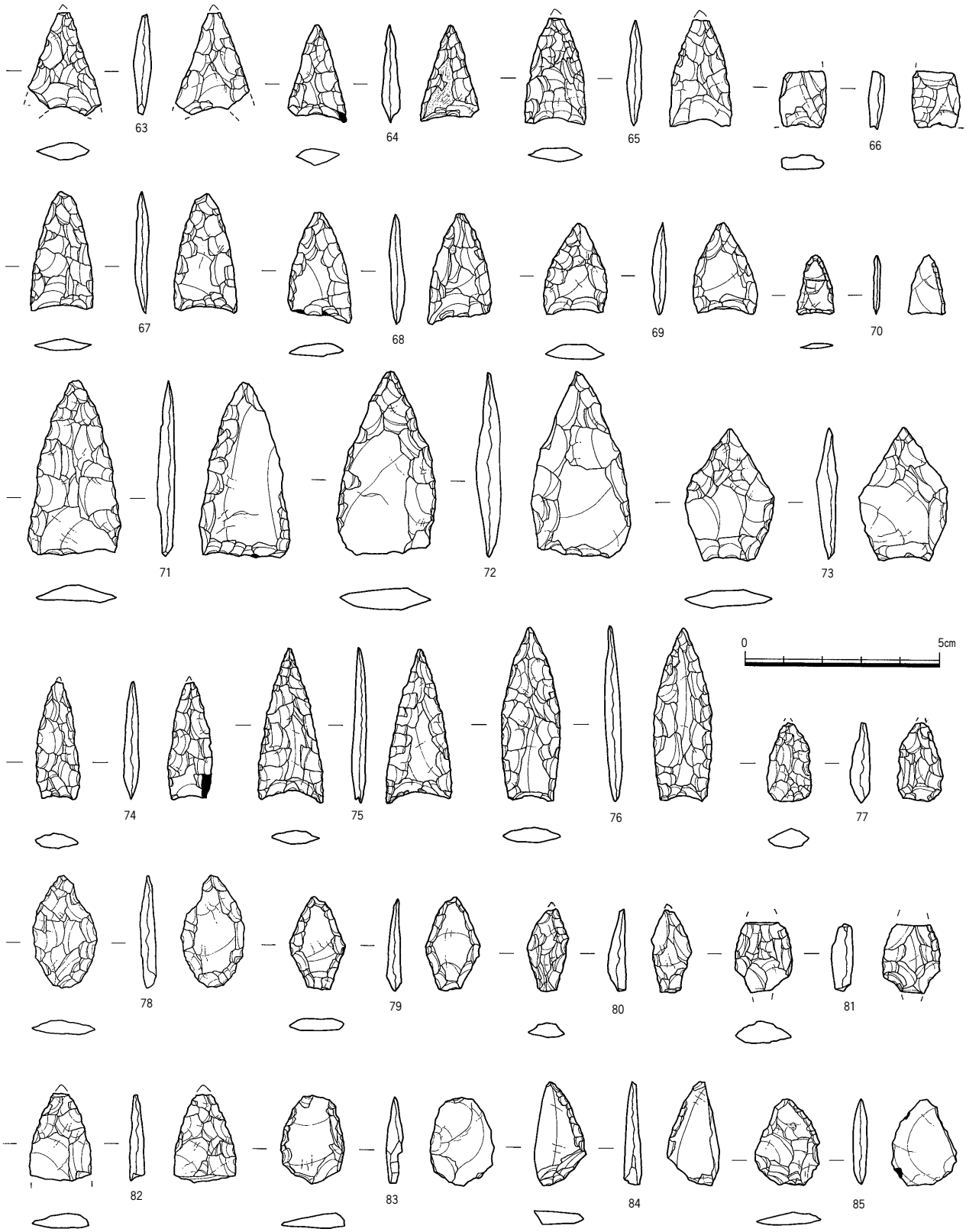
112 は石匙と考えられる。素材剥片の鋭利な端部に，調整を施し刃部としている。つまみは数回の剥離によって形成されている。石材はサヌカイトである。

113 は石小刀と考えられる。両面を粗く調整したのち，両側辺に浅形細部調整を施す。先端部は折損しているため，全体の形状は不明である。石材はサヌカイトである。

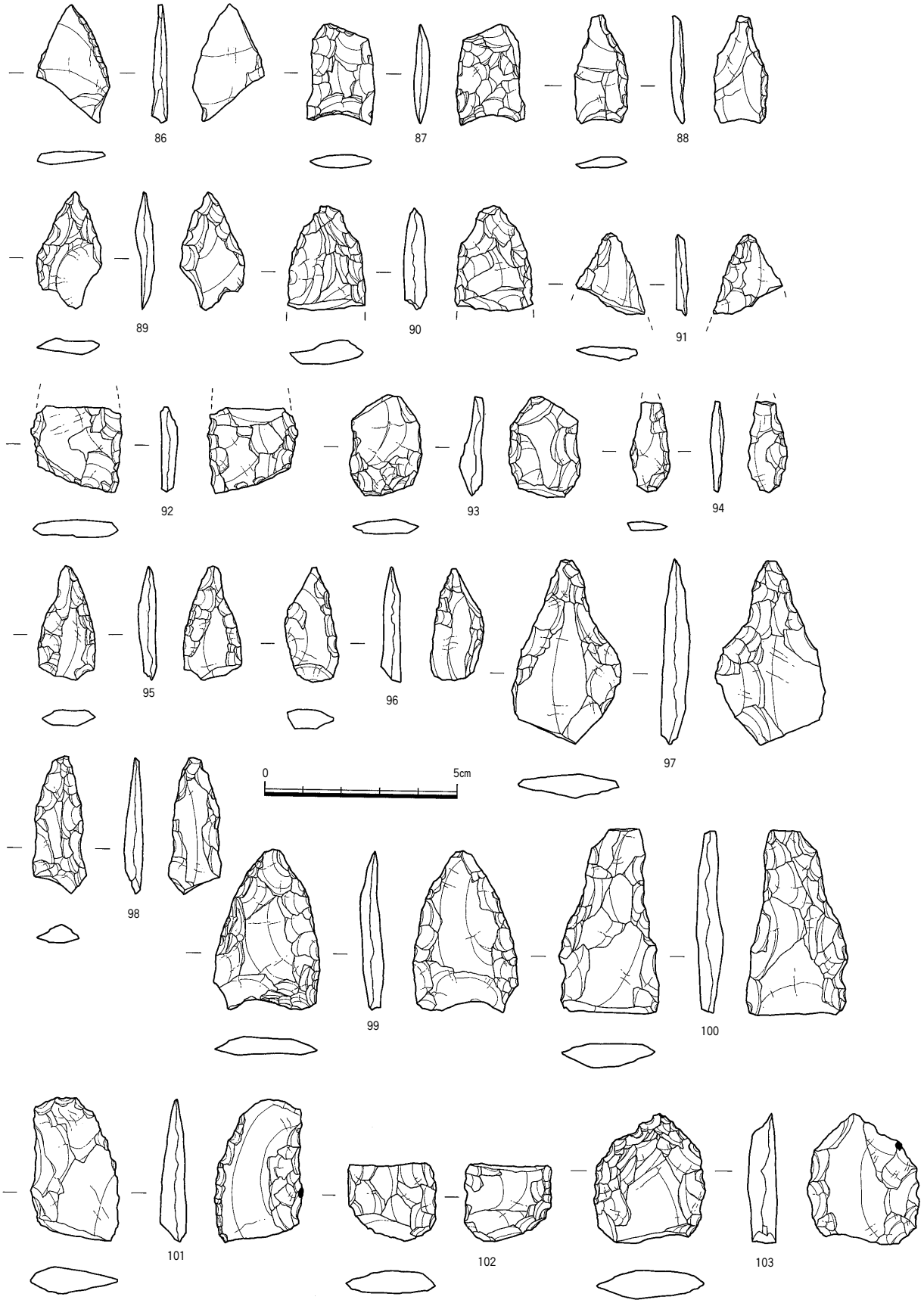
114 は打製石斧である。自然面を有する縦長剥片を素材に，両側辺に粗い調整を施す。側辺の一部に潰れが，刃部には使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

115 ～ 118 は打製石包丁で，石材はすべてサヌカイトである。115 は抉りのある打製石包丁である。１側辺を折損しているため，全体の形状は不明である。横長の大型剥片素材で，背部には背潰加工が確認できる。刃部は主に腹面側に極浅形 ～ 浅形細部調整され，刃部末端はやや摩滅している。また刃部と背部 ～ 体部にかけて使用痕が認められる。116 は抉りのある打製石包丁である。１側辺を折損しているため，全体の形状は不明である。背部には背潰加工を施す。刃部はやや摩滅しており，刃部から体部にかけて使用痕が認められる。117 は片方に抉りのある打製石包丁である。１側辺を折損する横長剥片素材で，折損面を打面にした調整が確認できる。刃部は片刃で背面側に調整を施し，弱い微細剥離痕が認められる。背部には，明瞭な背潰加工は見られず，鋭利なままである。スクレイパーの可能性も考えられる。118 は１側辺を折損しているため，全体の形状は不明であるが，打製石包丁の未製品と考えられる。大型の横長剥片を素材とし，側辺側に抉りを作り出す。刃部には剥片の鋭利な末端に粗い調整が認められる。

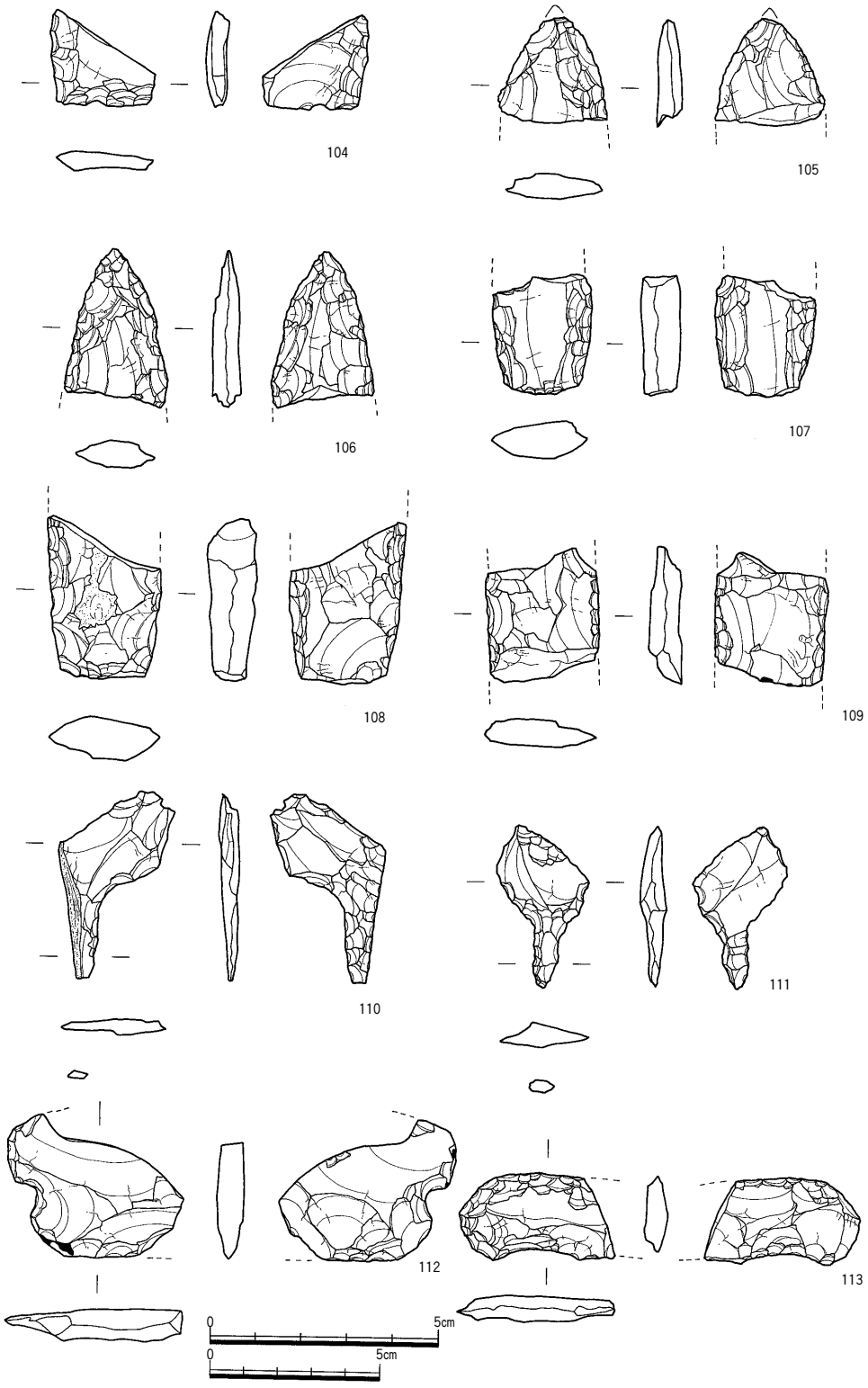
119 ～ 123，125 ～ 131，133 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。119 は大型の横長剥片素材で，１側辺を折損し，もう片方の側辺は自然面で構成される。背部は背潰加工を，刃部は背面側に調整が認められ，腹面側に微細剥離痕が確認できる。120 は大型剥片素材のスクレイパーである。背部には一部に背潰加工が認められ，刃部は剥片の鋭利な側辺から端部の一部に粗い調整を施し，微細剥離痕が確認できる。121 は１側辺を折損する，不定形な剥片素材のスクレイパーである。背部には背潰加工は認められず，刃部は剥片の鋭利な端部に若干の調整と微細剥離痕が確認できる。122 は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部と両側辺は折損している。刃部は剥片の鋭利な端部に両面調整して成形し，弱い微細剥離痕が確認できる。123 は両側辺を折損しており，全体の形状は不明である。刃部は粗い両面調整する。刃部の末端には弱い微細剥離痕が確認できる。風化がやや強い。125 は刃部を残し，大部分を折損しているため，全体の形状は不明であるが，スクレイパーと考えられる。刃部は両面調整するが，摩滅が著しい。126 は両側辺を折損しているため，全体の形状は不明である。刃部は両面調整し，一部摩滅している。127 は横長剥片素材のスクレイパーである。１側辺を折損す



第 16 図　SH01 出土遺物②（S=2/3）

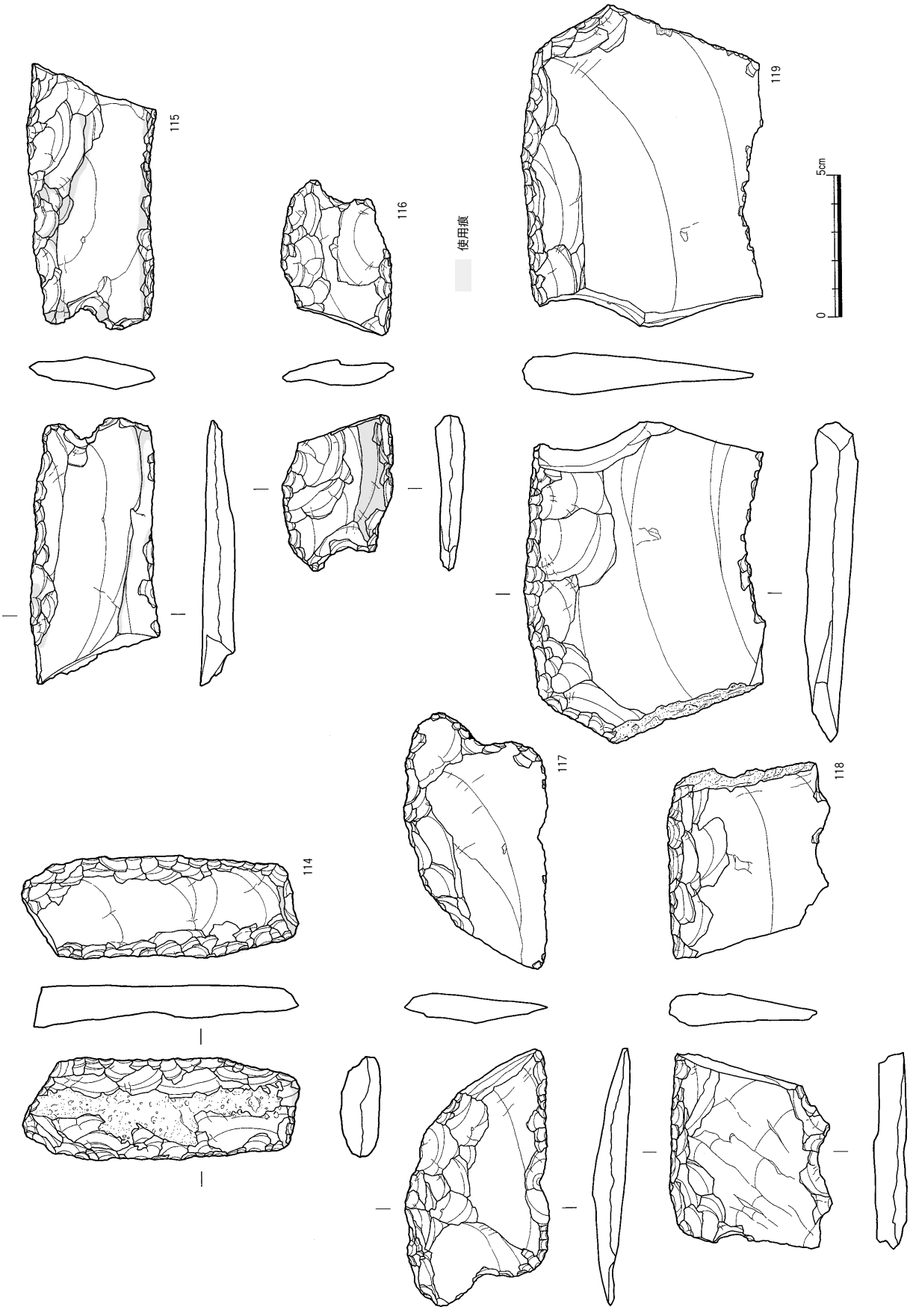


第 17 図　SH01 出土遺物③（S=2/3）

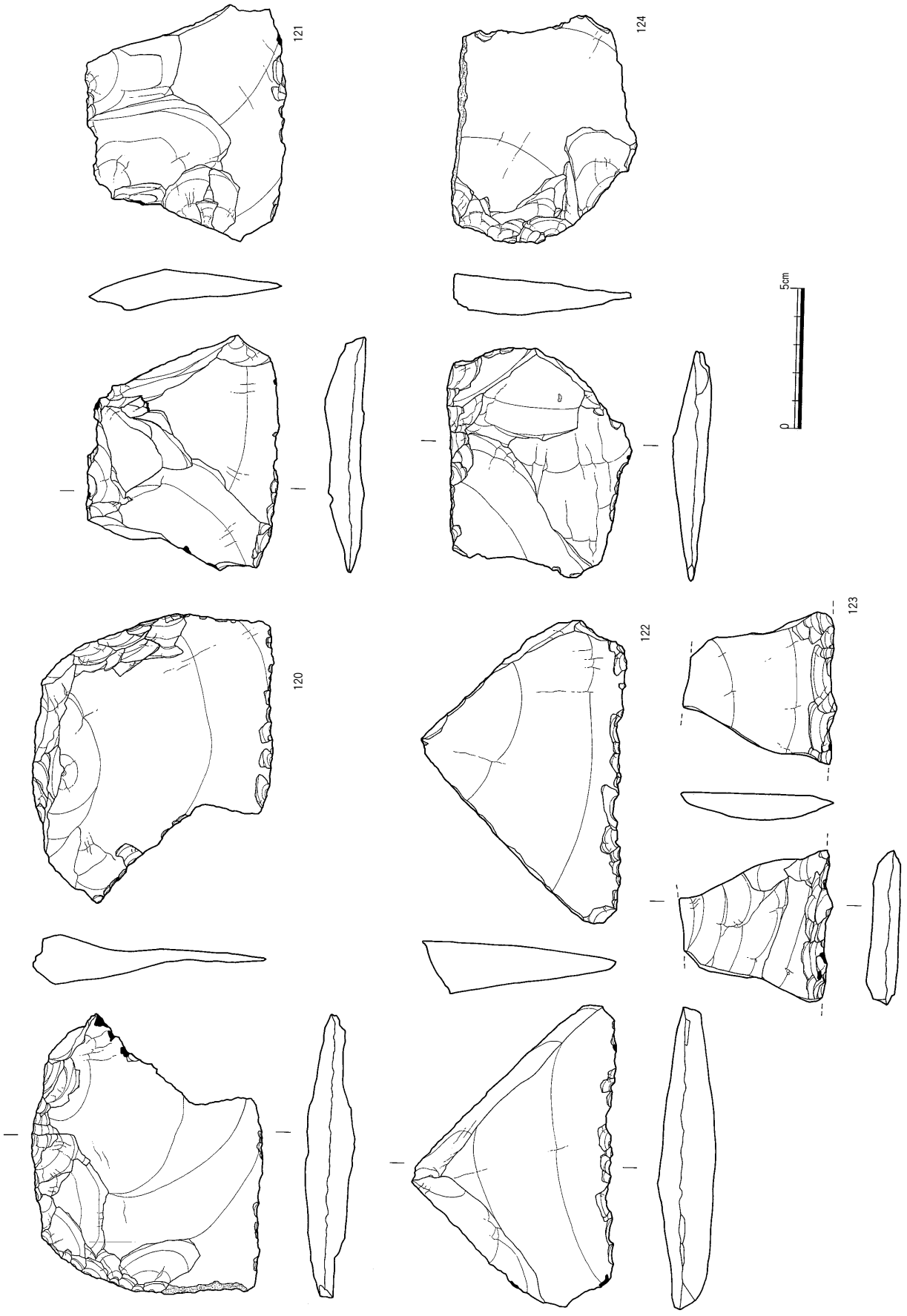


第 18 図　SH01 出土遺物④（104～111：S=2/3，112,113：S=1/2）

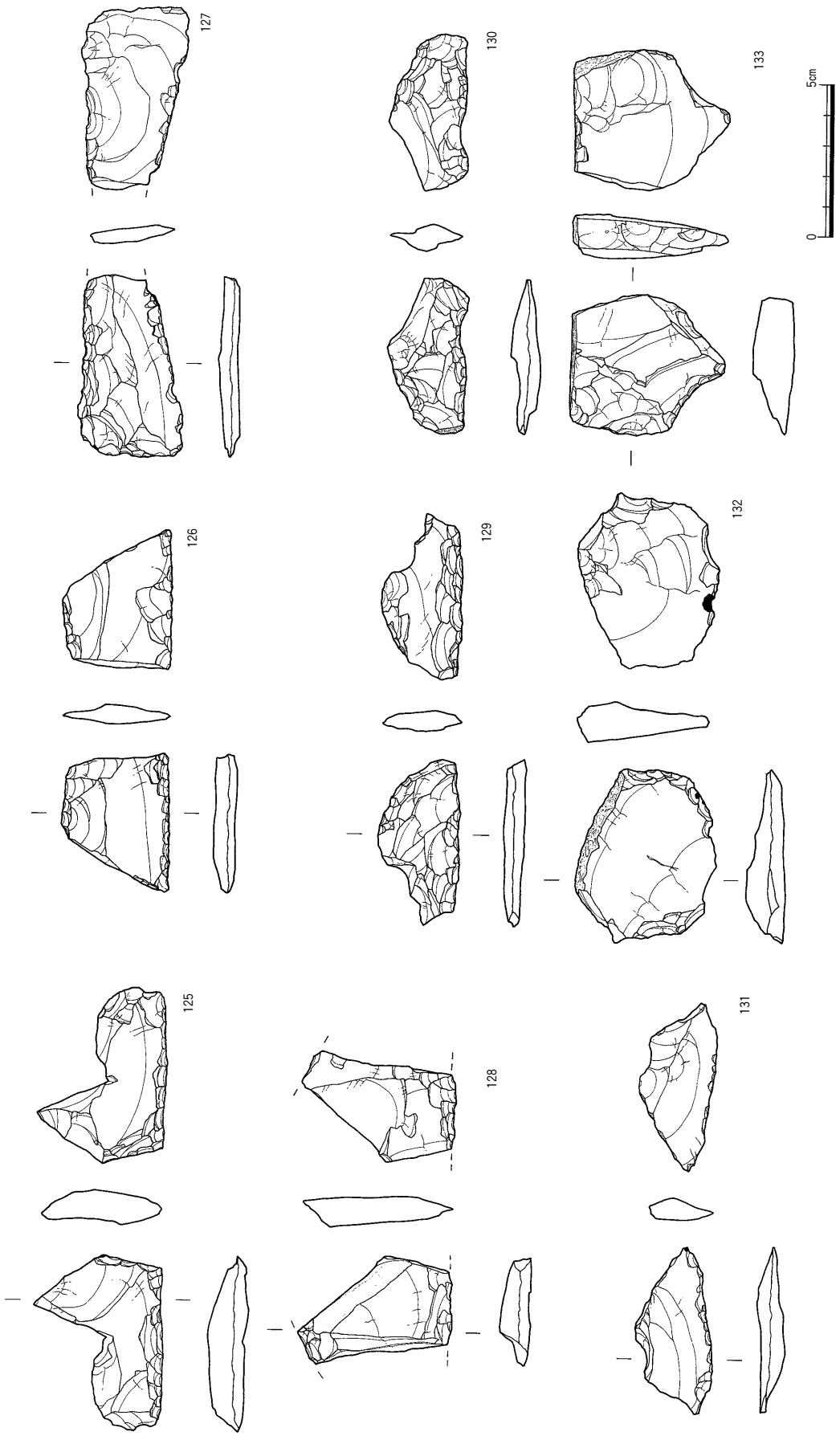
る。背部は，粗い調整のみで背潰加工は認められない。刃部は両面調整し，微細剥離痕が確認できる。128 は大部分を折損するため，全体の形状が不明であるが，スクレイパーと考えられる。刃部は両面調整し，微細剥離痕が確認できる。129 は横長剥片素材の小型のスクレイパーである。1 側辺を折損し，もう片方の側辺は自然面で構成する。刃部は粗い両面調整を施し，摩滅している。130 は小型のスクレイパーである。背腹両面とも両



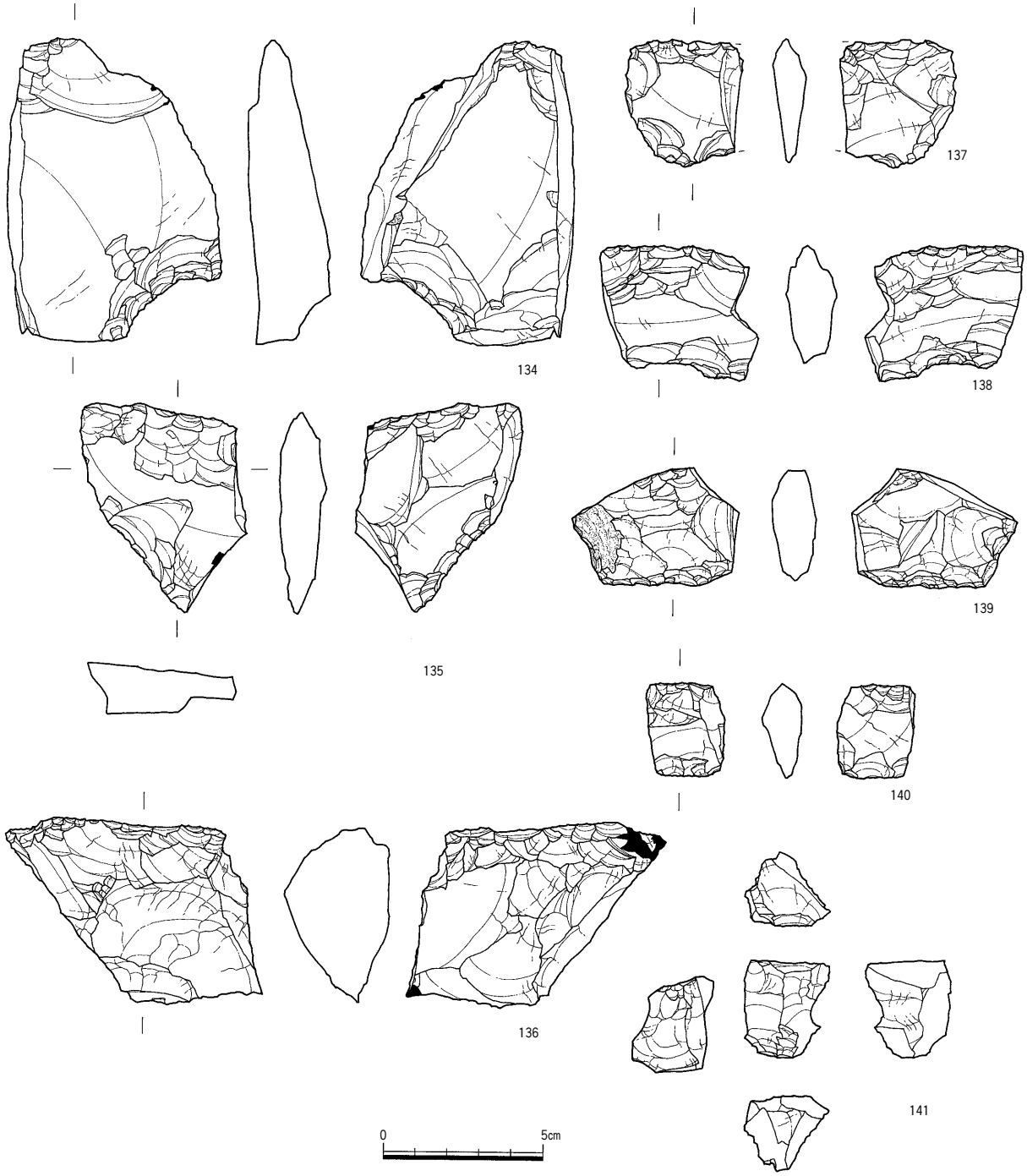
第 19 図　SH01 出土遺物⑤（S=1/2）



第 20 図　SH01 出土遺物⑥（S=1/2）



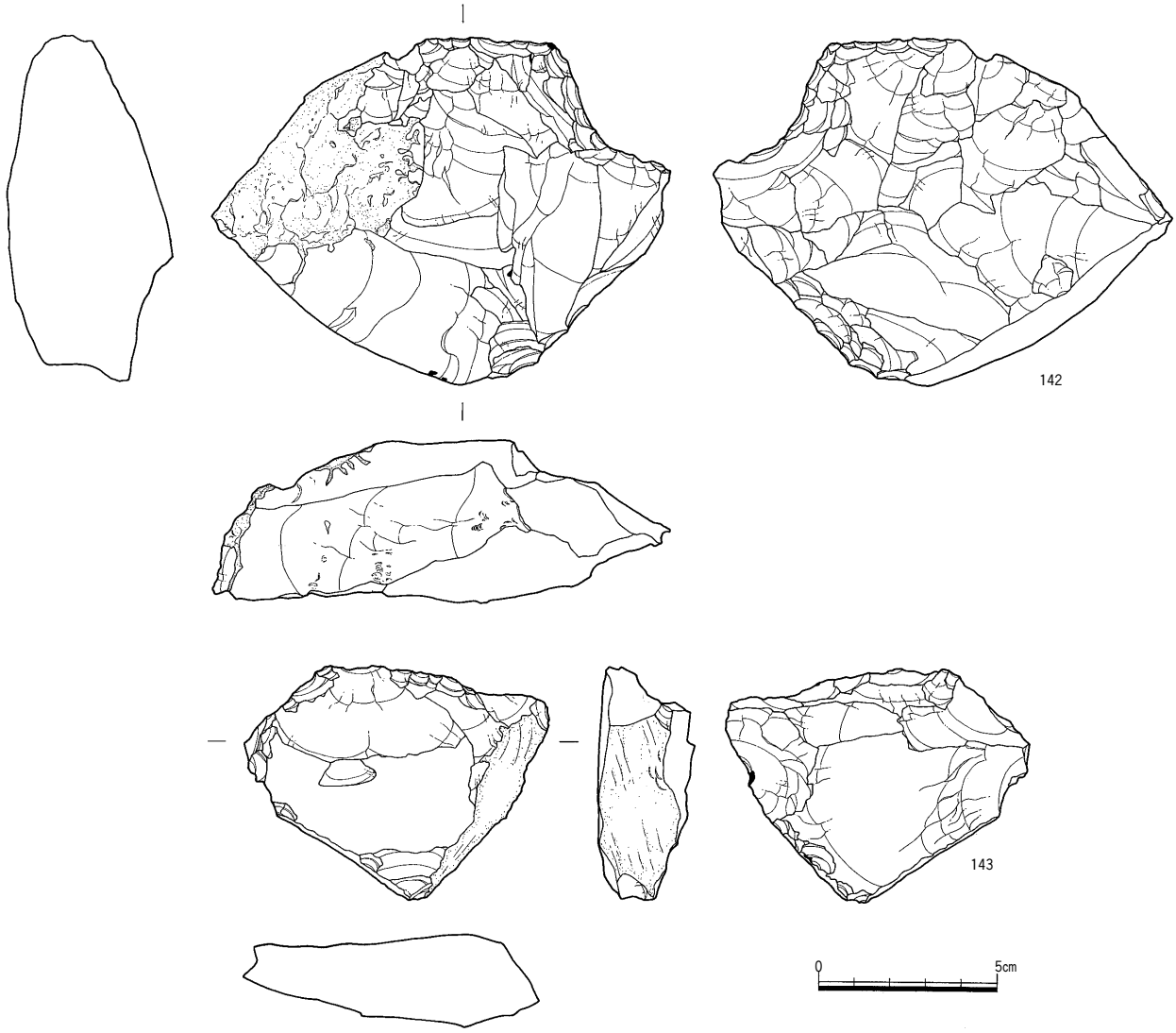
第 21 図　SH01 出土遺物⑦（S=1/2）



第 22 図　SH01 出土遺物⑧（S=1/2）

面調整を施し，刃部は両面調整によって形成し，摩滅が認められる。131 は横長剥片素材の小型のスクレイパーである。刃部は背面側の剥片の鋭利な末端に調整を施して形成し，微細剥離痕が確認できる。133 は自然面打面の剥片の端部に片面調整を施して刃部を成形する。刃部には強い摩滅痕が認められる。

124，145 ～ 147，149 は微細剥離痕のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。124 は縦長剥片素材で，剥片の 1 側辺の一部と剥片の端部の一部に微細剥離痕が確認できる。145 は剥片の鋭利な側辺部に顕著な微細剥離痕が，もう片方の折損している側辺部に二次加工が確認できる。146 は剥片の鋭利な端部の一部に微細剥離痕が確認できる。147 は剥片の両側辺を折損し，剥片の末端は蝶番状に剥離している。腹面にはツインバルブが認められる。微細剥離痕は，剥片の端部と打面側側辺の一部に確認できる。149 は縦長剥片の 1 側辺部に微細剥離痕が確認できる。もう片方の側辺は折損している。



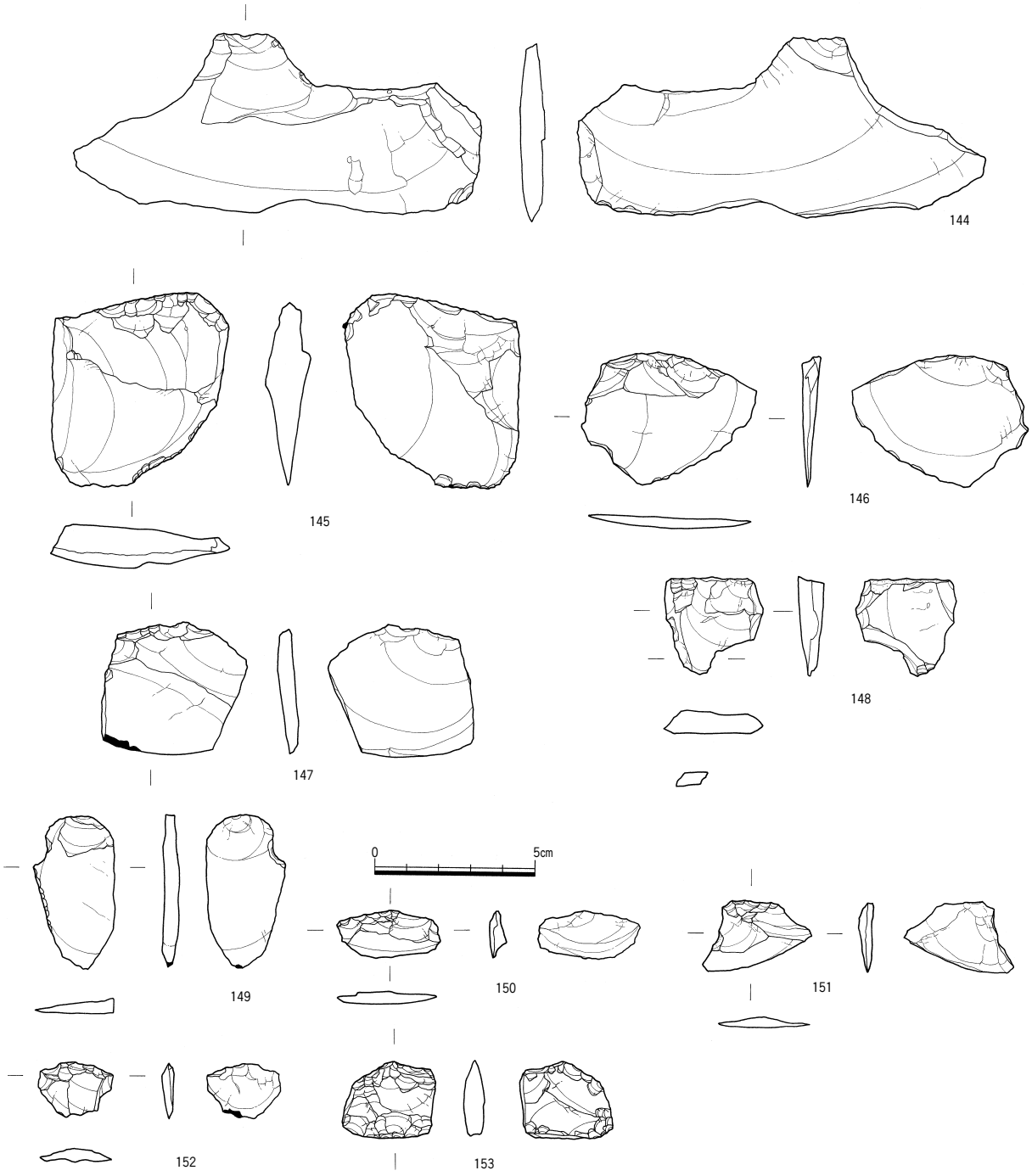
第 23 図　SH01 出土遺物⑨（S=1/2）

132，137，148 は二次加工のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。132 は自然面を打面に剥片を剥離した剥片の一部に二次加工が確認できる。137 は 1 側辺を折損するが，それ以外の側辺に二次加工が確認できる。1 側辺は折損している。148 は剥片の折損面の一部に二次加工が確認できる。

134，142，143 は楔形石器石核で，石材はすべてサヌカイトである。134 は分割した板状剥片から両極技法によって小型の剥片を剥離している。142 は自然面を大きく残す板状石材素材で，両極技法によって小型剥片の剥離を試みている。143 は両極技法によって薄い小型の横長剥片を剥離し，この剥片の剥離後さらに両極技法によって剥片の剥離が試みられている。腹面側からも薄い剥片を剥離しているが，階段状剥離が顕著であることから，剥離された剥片は，加撃と同時にばらばらに破砕した可能性が考えられる。

135，136，138 ～ 141，153 は楔形石器で，石材はすべてサヌカイトである。135 は分割して小型になったと考えられる板状石材を素材で，上・下端部に潰れが確認できる。136 は上端部に著しい潰れの痕跡が確認できる。両側辺は折損している。138 は横長剥片素材で，両側辺を折損している。上・下端部とも潰れの痕跡が確認でき，特に上端部の潰れは著しい。139 は上端の折損面と下端部に顕著な潰れが確認できる。140 は両側辺を折損しているため全体の形状は不明であるが，楔形石器と考えられる。上・下端部に潰れが確認できる。141 は全面を折損面で構成し，サイコロ状を呈する。153 は小型の楔形石器と考えられる。両側辺を折損し，上・下端部に顕著な潰れの痕跡が確認できる。

144，150 ～ 152 は剥片で，石材はすべてサヌカイト



第 24 図　SH01 出土遺物⑩（S=1/2）

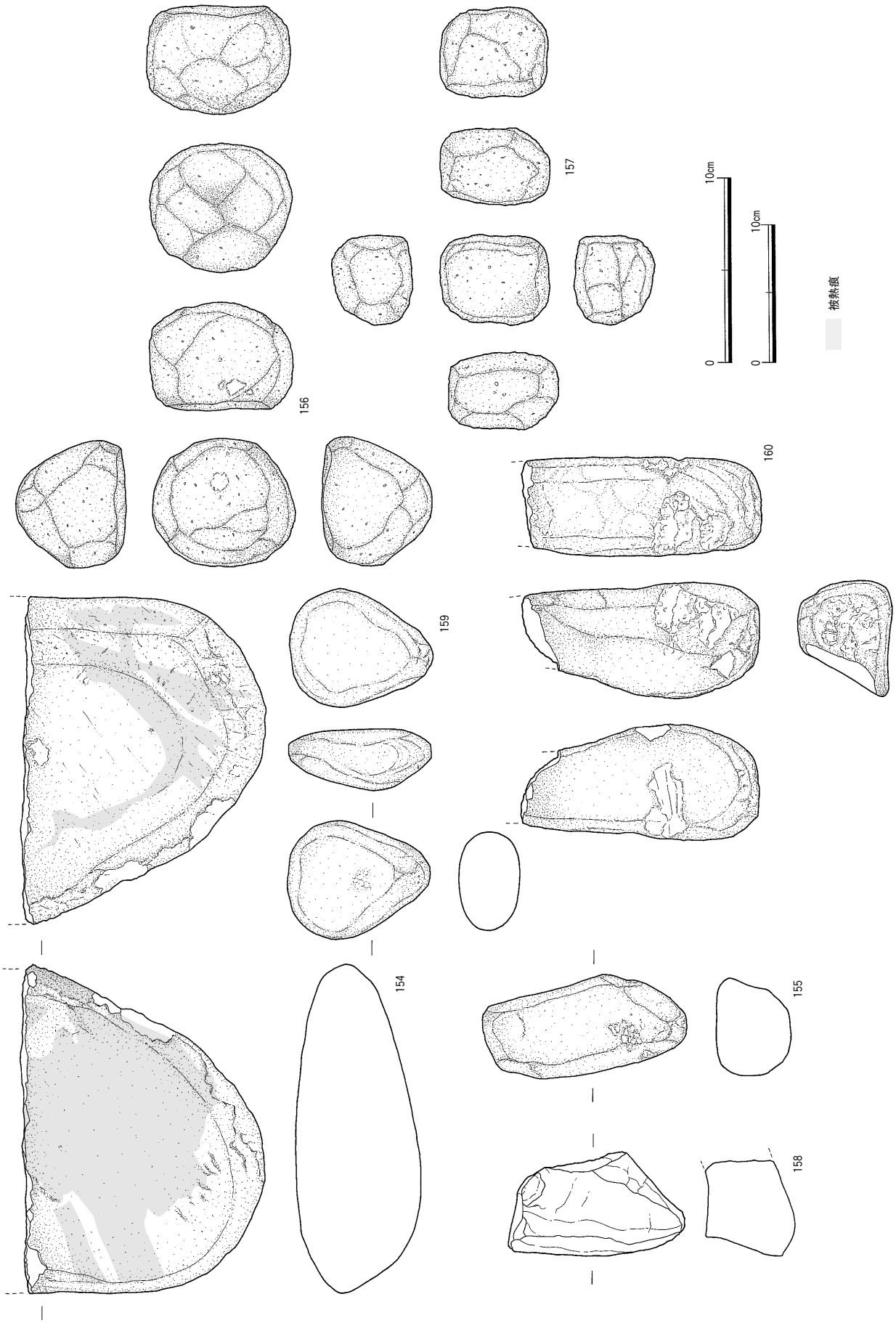
である。144 は大型の横長剥片である。剥片の端部と 1 側辺は折損している。150 は小型の横長剥片である。剥片の末端は蝶番状に剥離している。151 は小型の剥片である。152 は調整剥片と考えられる。

154 は砂岩製の石皿である。両面に作用面が認められ，一部に被熱が見られる。

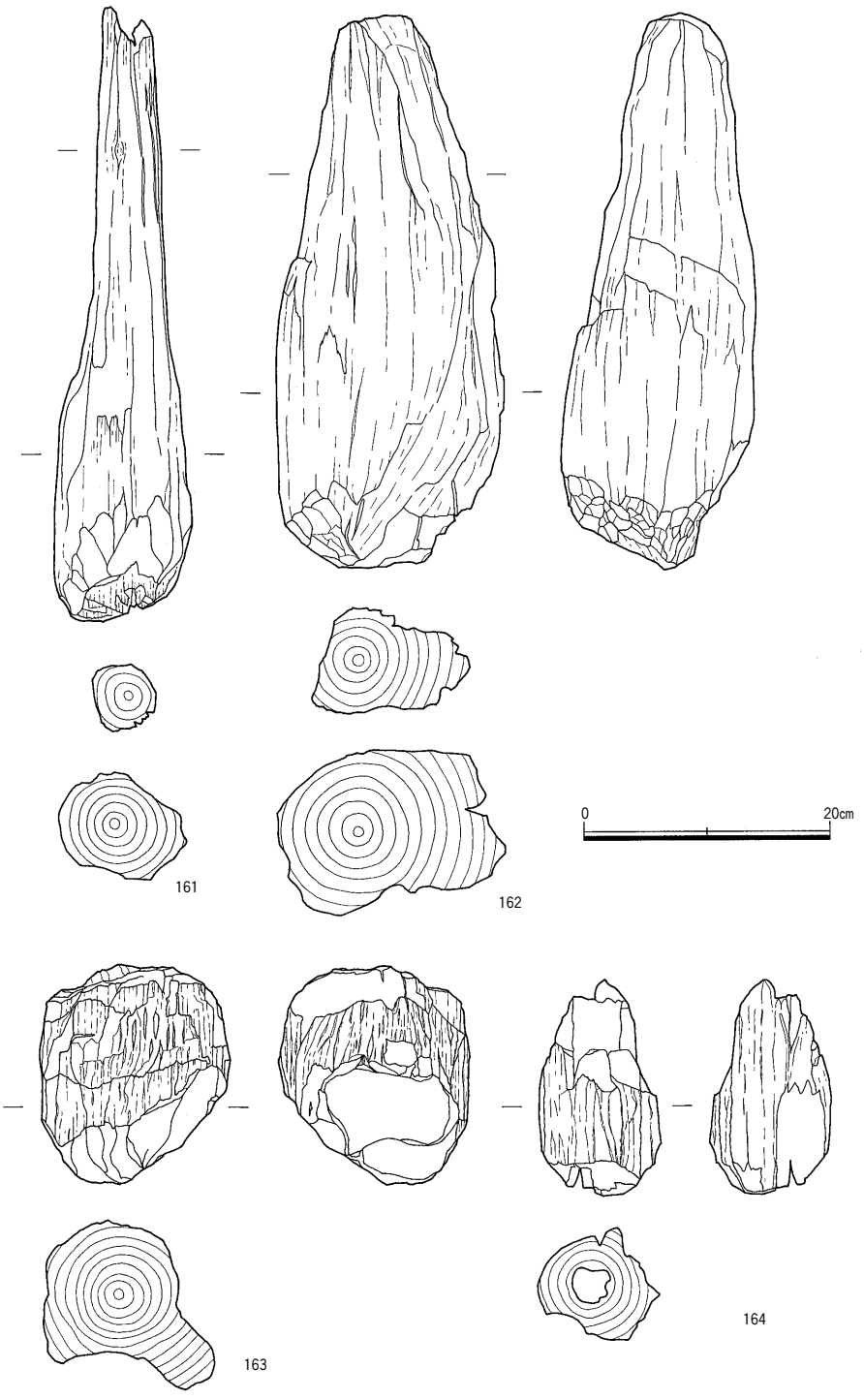
155，159，160 は敲き石である。石材はすべて砂岩である。155 は石材の側辺部と体部に敲打痕が確認できる。159 は石材の体部に弱い敲打痕が確認できる。160 は石材の端部と体部に敲打痕が確認でき，また一部被熱の痕跡が認められる。

156 ～ 158 は素材と考えられる。石材は 156，157 が斑レイ岩，158 は流紋岩である。156，157 には敲打痕などは確認できない。158 は一部に剥離痕が確認できる。

161 ～ 164 は支柱穴の中で遺存していた柱材である。



第 25 図　SH01 出土遺物⑪（154：S=1/4，155～160：S=1/3）

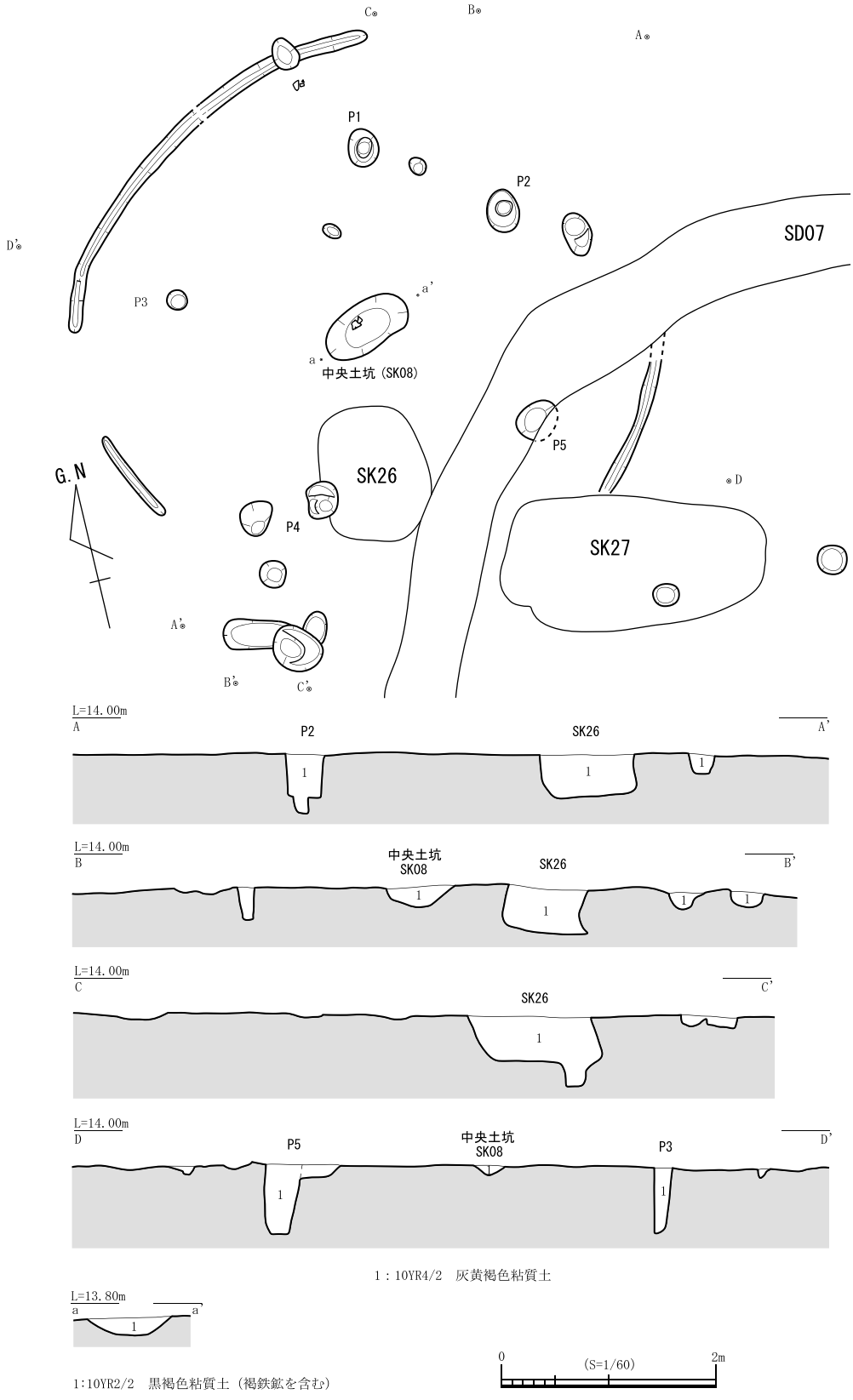


第 26 図　SH01 出土遺物⑫（S=1/6）

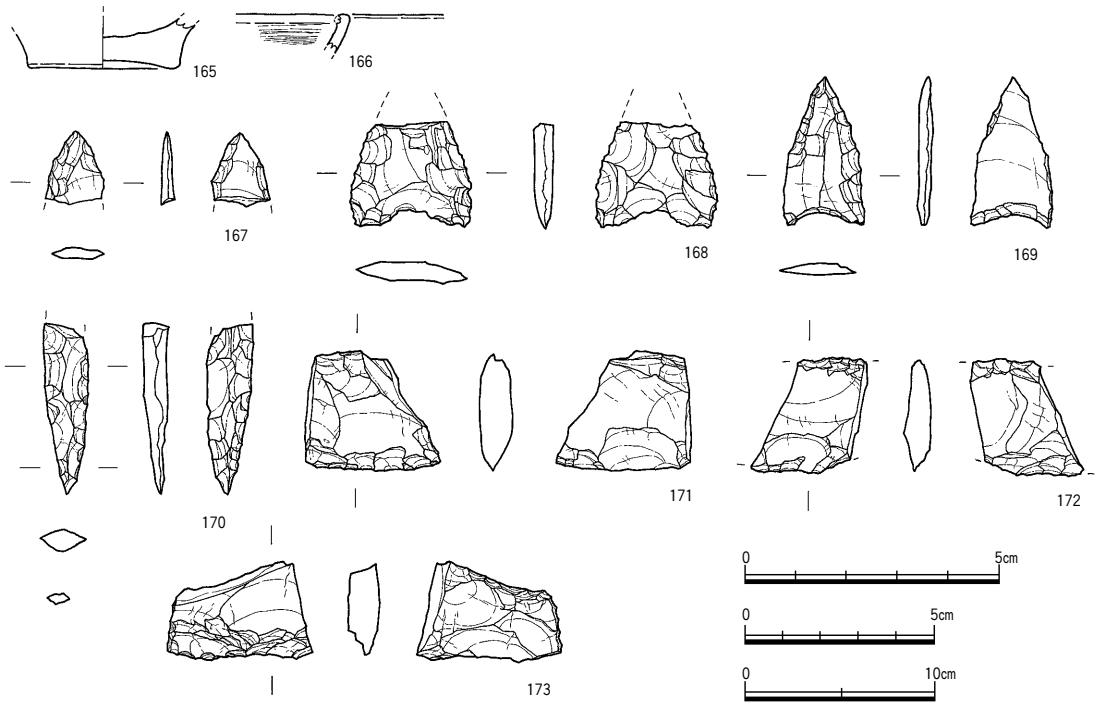
樹種はコナラ属，エノキ属，ニガキ属で，樹種の選択は認められない。残存状況はよくないものの，一部端部を削って据え付けやすくしている。

SH02（第 27 図）

ES 区の中央部やや西よりに位置する。直径 5.4ｍの円形の竪穴建物である。周辺は地山が汚れており，全体的に下げて掘り方の検出を試みたが掘り方は確認できず，中央土坑，支柱穴，壁溝のみの検出であり，床面が検出面となった。これらの要因としては，周辺が本来的に一段高く，後世に削平をされ，掘り方の土が周辺に堆積していたものと考えられる。また，検出時にはSH01と同様にサヌカイトの剥片およびチップを多量に採集した。



第 27 図　SH02 平・断面図(S=1/60)



第 28 図　SH02 出土遺物（165,166：S=1/4，167～170：S=2/3，171～173：S=1/2）

支柱穴は 5 本で，五角形に配置されている。P5 はSD07 に切られている。掘り方は個々で異なっているものの 50 ～ 65㎝と比較的残りが良い。壁溝は北西と南東で確認したが，全周はしない。出土遺物が少なく，詳細な時期は不明であるが，SK26 を支柱穴が切っていること，壁溝がSK27 に切られていることから，中期中葉，信里編年のⅡ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 28 図）

165 ～ 166 が弥生土器，167 ～ 173 が石製品である。

165 は甕の底部で，上げ底である。白色を呈し，大粒の石英，長石を多量に含む。166 は高杯の杯部で，内面は刷毛目調整が施される。灰褐色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

167 ～ 169 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。167 は切先のみで，全体の形状は不明である。両面に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。168 は凹基式の大型石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。先端部を折損している。169 は凹基式の石鏃である。両面に極浅形 ～ 浅形細部調整を施すが，腹面側は基部を浅形細部調整するほかは調整が少なく，素材面を大きく残す。基部は背面側から腹面側の順で調整する。

170 は頭部と錐部の境がなく，棒状の形態の石錐である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。頭部の一部は折損している。石材はサヌカイトである。

171 はスクレイパーである。両側辺を折損しているため，全体の形状は不明である。刃部は，背面側は浅形細部調整し，腹面側は粗い剥離面で構成される。石材はサヌカイトである。

172，173 は楔形石器で，石材はすべてサヌカイトである。172 は薄い剥片素材で，両側辺を折損している。上・下端部に潰れが確認できる。173 は 1 側辺を自然面，もう片方の側辺は折損面で構成し，上端部は折損面に潰れが確認できる。

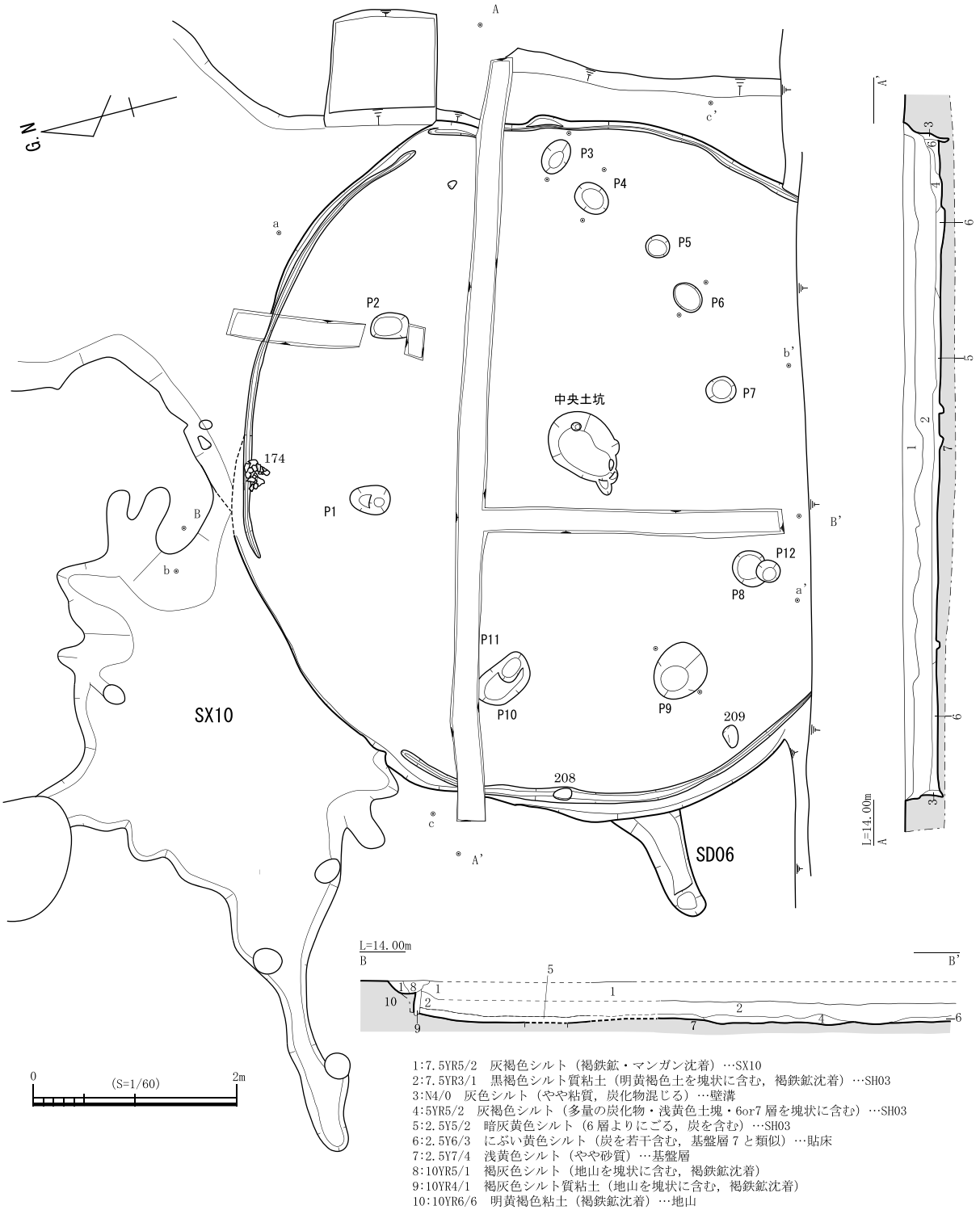
SH03（第 29・30 図）

EN 区のほぼ中央の西側に位置する。一部は調査区の反転のため，調査できなかったが直径 7.0ｍの円形の竪穴建物である。

検出時は周辺も含めて全体的に地山が汚れており，掘り方の検出が困難であったため，全体的に 15㎝程度一段下げた位置で掘り方を検出した。

一部で厚さ 5 ㎝の貼床を確認したが，面的には確認できなかった。中央には炉である土坑があり，南西方向に掻き出しの痕跡がある。

支柱穴は 7 本（P1，2，4，7，8，9，11）で，ややいびつな七角形に配置している。深度はおよそ 55 ～ 70㎝で，同様な深さのあるP6 も柱穴である可能性が



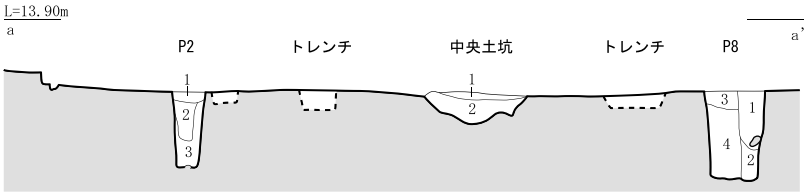
第 29 図　SH03 平・断面図（S=1/60）

高い。壁溝は２ヶ所で途切れるものの，掘り方に沿って設けられている。北西側に後述するSX10 があるが，この部分で壁溝が途絶えており，出入口である可能性が想定されるが断定はできなかった。

床面出土遺物は 174，208，209 のみであり，他の竪穴建物同様に，石器の出土が目立つ。出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階 ～ Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 31 ～ 33 図）

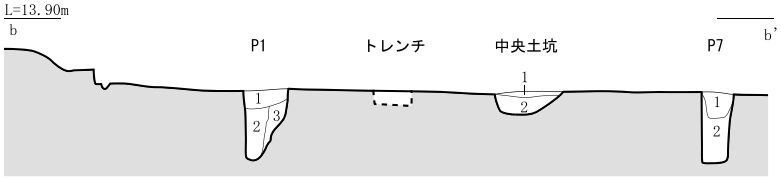
174 ～ 182 は弥生土器で，183 ～ 188 は土製品，189 ～ 209 が石製品である。



P2
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着多い）
3:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山を塊状に含む）

中央土坑
1:7.5YR2/1　黒色シルト（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む，ややしまる）
2:N2/0　黒色シルト質粘土（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む）

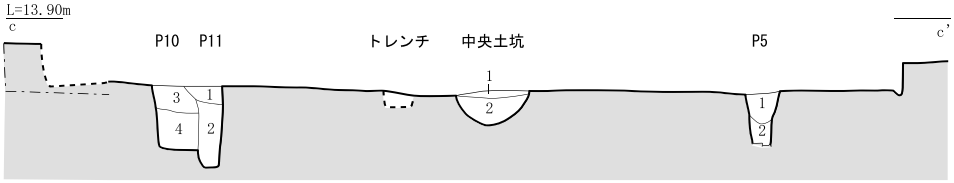
P8
1:10BG5/1　青灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（炭を含む）
3:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）
4:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山混じる，炭を若干含む）



P1
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着多い）
3:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山を塊状に含む）

中央土坑
1:7.5YR2/1　黒色シルト（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む，ややしまる）
2:N2/0　黒色シルト質粘土（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む）

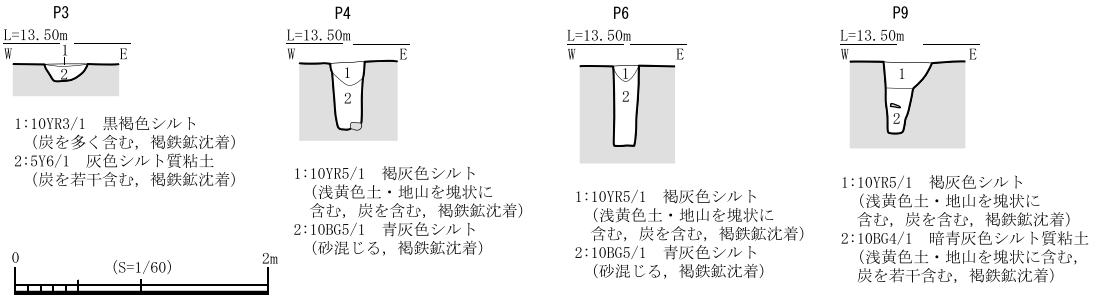
P7
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に多く含む，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（浅黄色土・地山混じる，炭を若干含む）



P10・11
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）
3:2.5Y6/2　灰黄色シルト（浅黄色土・地山を塊状に多く含む，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）…P11 掘り方埋土
4:10BG5/1　青灰色シルト（砂土を塊状に含む）…P11 掘り方埋土

中央土坑
1:7.5YR2/1　黒色シルト（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む，ややしまる）
2:N2/0　黒色シルト質粘土（炭を多く含む，浅黄色土・地山を多量に含む）

P5
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（砂混じる，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）



P3
1:10YR3/1　黒褐色シルト（炭を多く含む，褐鉄鉱沈着）
2:5Y6/1　灰色シルト質粘土（炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）

P4
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（砂混じる，褐鉄鉱沈着）

P6
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG5/1　青灰色シルト（砂混じる，褐鉄鉱沈着）

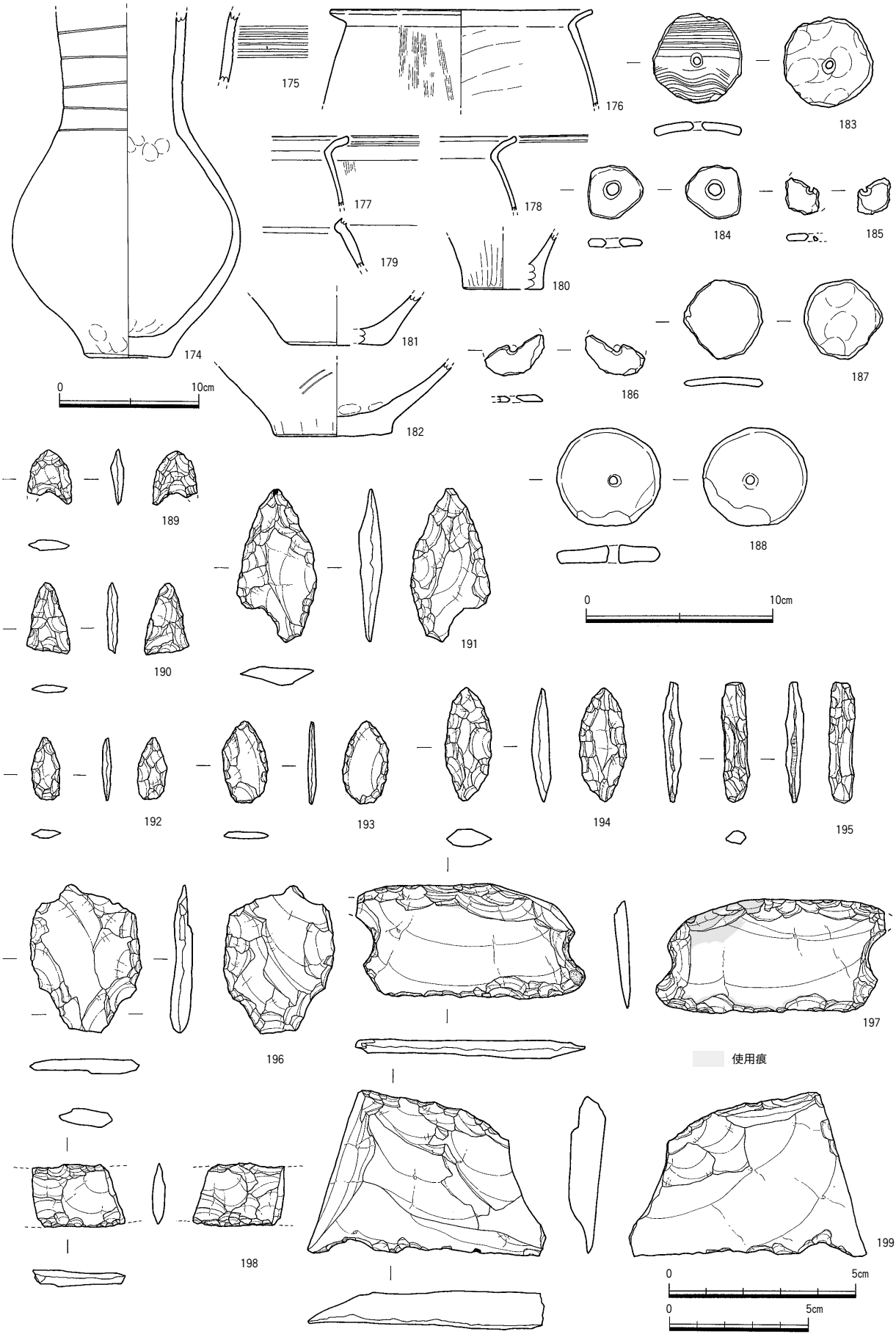
P9
1:10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を含む，褐鉄鉱沈着）
2:10BG4/1　暗青灰色シルト質粘土（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）

第 30 図　SH03 断面図（S=1/60）

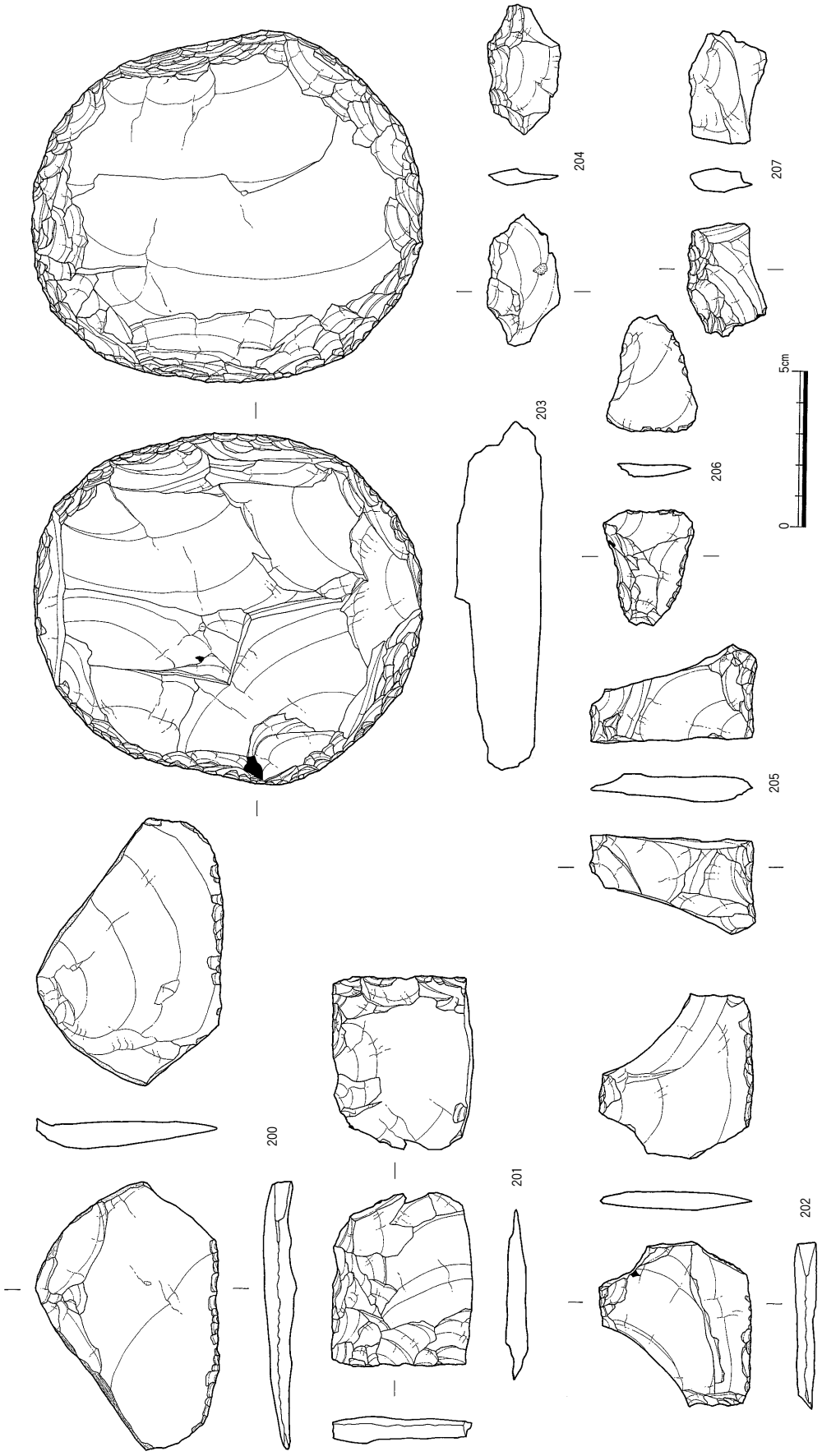
174 ～ 175 は壺形土器である。174 は長頸壺で，頸部に細い沈線を一定間隔で 5 条施す。形態および頸部への沈線は中期後半の要素と言える。底部付近は指押さえが認められるが，内外面ともに磨滅が著しく，詳細は不明である。175 は形状は不明であるが，外面に 6 条の凹線文を施す。

176 ～ 182 は甕形土器である。176 ～ 178 は甕 3 a もしくは 3 b で，口縁部から体部にかけての破片で，口縁部をヨコナデ調整によって整形し，口唇部を平坦もしくはややつまみ上げたような形態に仕上げる。外面は縦方向の刷毛目調整によって仕上げ，内面は板ナデ調整によって仕上げる。181，182 は底部 3 で，181 はいずれもナデ調整によって仕上げる。

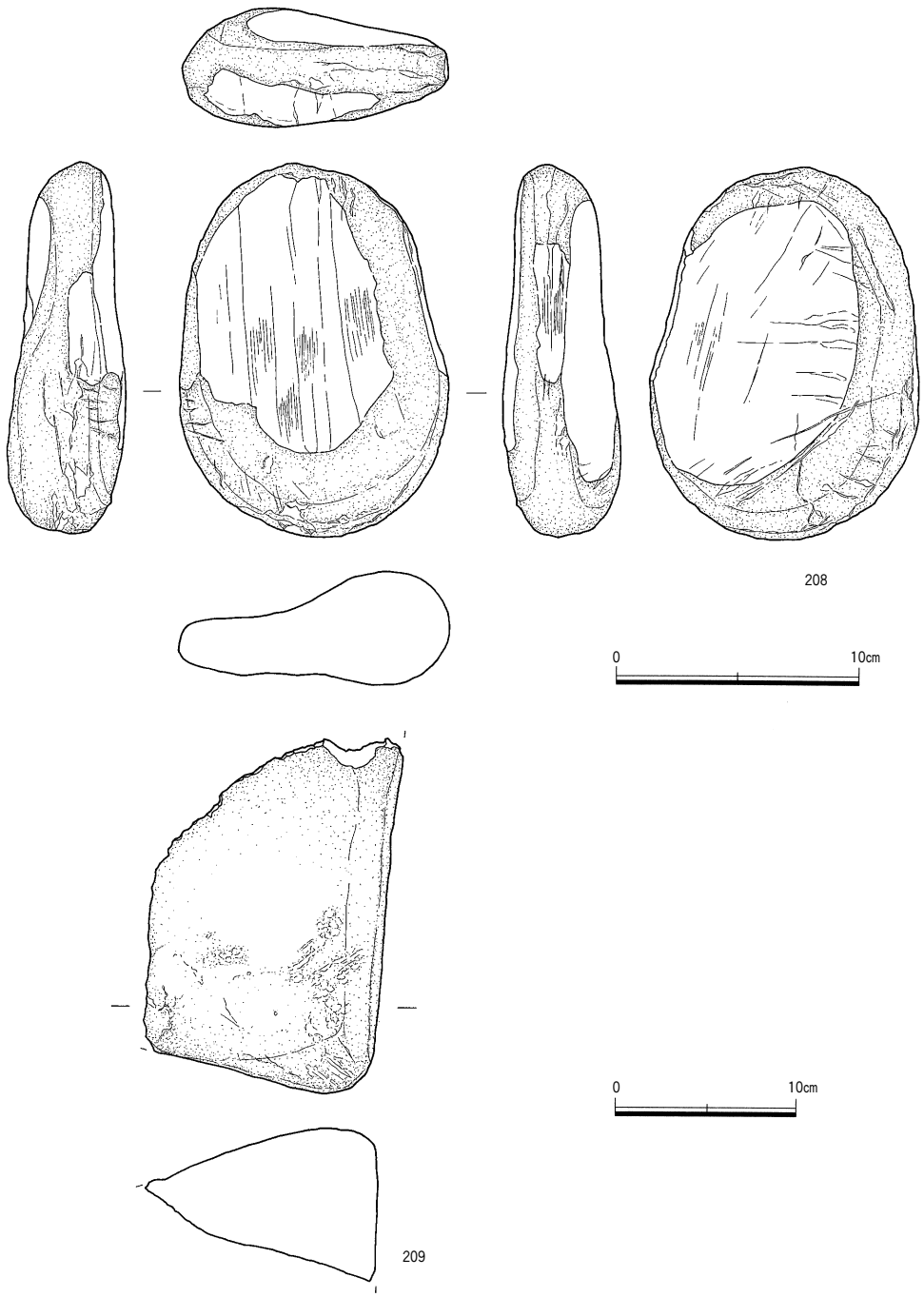
183 ～ 188 は土製の紡錘車である。183 は甕形土器の転用品で，外面に櫛描き直線文および櫛描き波状文が施されている。184 ～ 187 も土器の転用品と考えられる。



第 31 図　SH03，SX10 出土遺物①
（174～182：S=1/4，183～188：S=1/3，189～196：S=2/3，197～199：S=1/2）



第 32 図　SH03 出土遺物②（S=1/2）



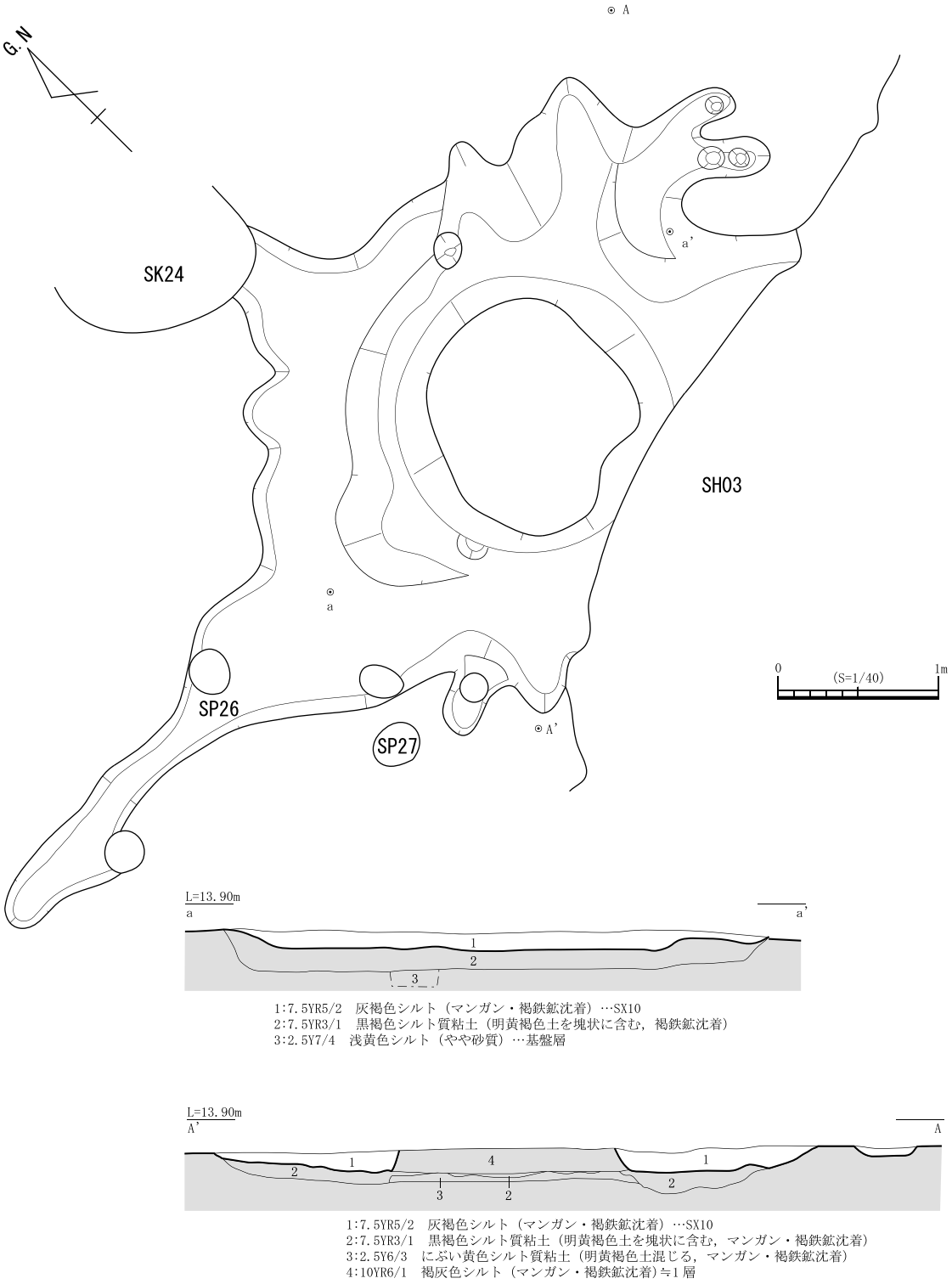
第 33 図　SH03 出土遺物③（208：S=1/3，209：S=1/4）

187 は穿孔が成されていない。穿孔は両面からなされている。188 は紡錘車として作られたものである。

土器等の色調および胎土は，５種類に分類できる。180 ～182，188 は白色胎土で石英，長石を多量に含む。184 は黄白色で長石を少量含む。175，185 は褐色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。174，176 ～ 178，183 は褐色を呈し，石英，長石，雲母もしくは角閃石を含む胎土で，179 は同様な胎土では茶褐色を呈するものである。186，187 は褐色胎土に角閃石を多量に含むいわゆる香東川下流域産土器(胎土１類)に近い胎土である。

石器は，石鏃，石錐，石錐未製品，打製石包丁，石小刀，スクレイパー，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，石皿，台石が出土している。

189 ～ 194 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。189 は凹基式の小型の石鏃である。基部の一部を折損する。背面側を浅形細部調整，腹面側は深形細部調整を施す。190 は基部の一部を欠損しているが，凹基式の石鏃と考えられる。背面側を深形細部調整，背面側はやや粗い浅形細部調整を施す。稜線は摩滅によりやや不明瞭である。191 は凹基式の大型石鏃である。両面とも先

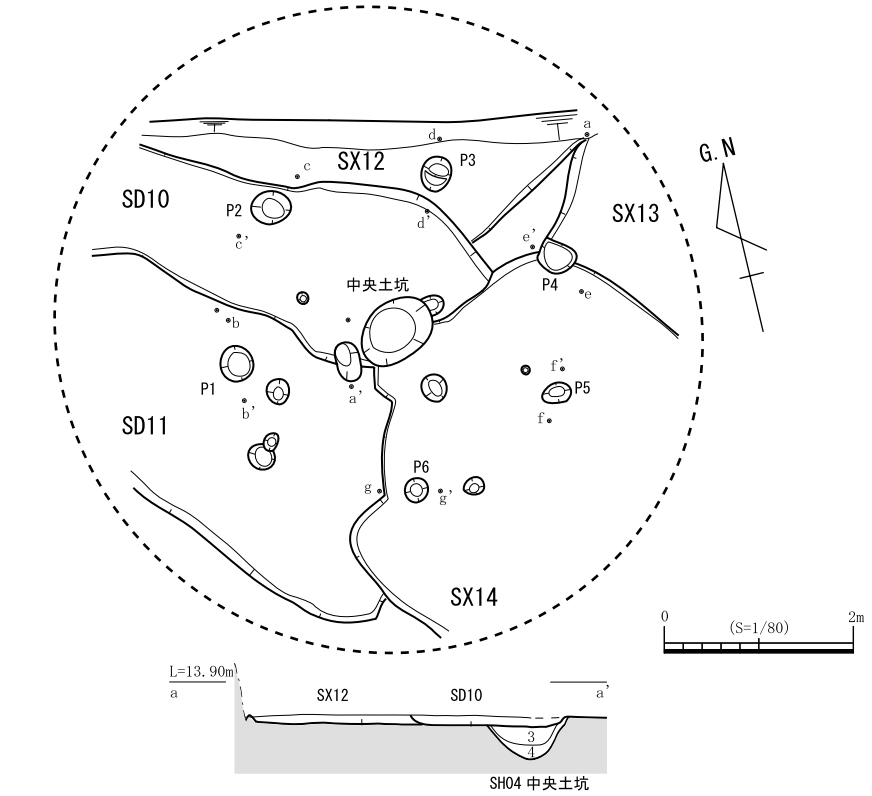


第 34 図　SX10 平・断面図（S=1/40）

端部を深形細部調整し，基部は極浅形細部調整によって成形するため，体部に素材面を大きく残す。192 は凸基Ⅰ式の小型石鏃である。背面側は浅形細部調整を施し，素材面を大きく残す。腹面側は深形細部調整を施す。193 は凸基Ⅰ式の石鏃である。両面とも素材剥片の周辺部に極浅形細部調整を施す。194 は凸基Ⅱ式の石鏃である。調整は背面側から腹面側の順に，浅形細部調整を施す。

195 は棒状の形態を呈する石錐である。側辺から先端部にかけて，使用痕と考えられる擦痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

196 は石錐未製品と考えられる。先端部の調整を途中



第 35 図　SH04 平・断面図（S=1/80，1/40）

で中止している。石材はサヌカイトである。

197 は打製石包丁である。大型横長剥片素材で，両端に抉りを作り出す。背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，微細剥離痕が確認できる。背部と刃部の周辺に使用痕が認められる。石材はサヌカイトである。

198 は石小刀と考えられる。両面調整したのち，外内刃部に浅形細部調整を施す。刃部には微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

199 ～ 202 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。199 は両側辺を折損するが，１側辺には折損面に二次加工が確認できる。背部は背潰加工が，刃部は剥片の末端の一部に両面調整を施す。200 は横長剥片素材で，背部 ～ 側辺は自然面で構成される。刃部は剥片の鋭利な末端に両面調整によって形成し，微細剥離痕が確認できる。201 は横長剥片の側辺部に両面調整によって刃部を成形する。背部は背潰し加工は確認できない。剥片の末端は折損している。202 は両側辺を大きく折損する。刃部は剥片の末端に両面調整によって作り出し，摩滅が認められる。

203・205 は楔形石器で，石材はすべてサヌカイトである。203 は大型の板状石材素材と考えられる。剥片の周囲全体に潰れの痕跡が確認できる。205 は楔形石器と考えられる。両側辺を折損しているため，全体の形状は不明である。上・下端部に潰れが確認できる。

204・207 は二次加工のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。204 は小型の横長剥片に二次加工を施している。207 は 1 側辺を折損する小型の横長剥片の背面側の一部に，二次加工が確認できる。

206 は微細剥離痕のある剥片である。小型の横長剥片の鋭利な側辺部と端部に微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

208 は砥石・台石である。砂岩製で，両面に研面が確認できるほか，両極技法を用いた際にできたと考えられる線状のくぼみが確認できる。

209 は台石である。石材は砂岩で，敲打痕のほか，線状のくぼみが確認できる。

SX10（第 32 図）

EN 区のほぼ中央の西側に位置するSH03 に隣接する不整形遺構である。切り合い関係から考えると，SH03 に伴う出入口状の窪みと考えられるが，直径 1.5ｍのステージ状の高まりが形成されており，これが本来的にSH03 に伴うものであるかは不明である。そのため，不明遺構としている。出土遺物は第 31 図の 180，182 であり，楔形石器，微細剥離痕のある剥片が出土している。これらからは限定することができないが，SH03 との切り合いからSH03 より以前である。

出土遺物（第 31 図）

180 は外面を縦方向の磨き調整，内面をナデ調整によって仕上げる。182 外面をナデ調整によって仕上げ，内面に指押さえが残る。

SH04（第 35 図）

EN 区の中央やや西側，SH03 の北東側に位置する。SD10・11，SX12 ～ SX14 に切られていることに加え，切り合い把握のための畔の下から中央土坑が畔撤去時に確認されたため，当初は竪穴建物の存在を認識できていなかった。そのため，中央土坑を手がかりに周辺の支柱穴の把握を行った。以上のような経緯から本来の規模および掘り形も不明であるが，一部は調査区外へとのびると考えられる。

炉跡である中央土坑は 2 層に分層でき，炭を多量に含み，掘削中にはサヌカイトの剥片も出土した。

支柱穴は 6 本（P1 ～ 6）で，六角形に配置されている。掘り方は個々で異なっており，浅いものから深いものまであるが，おおよそ 24 ～ 62㎝である。埋土は黒褐色もしくは褐灰色のシルトである。壁溝は確認できなかった。

出土遺物は先ほども述べたように，柱穴や中央土坑からサヌカイトの剥片類が出土しているものの，それ以外にはなく，時期を決定することはできない。SD10・11 に切られているという周辺の状況から中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式古段階の可能性が想定される。

【掘立柱建物跡】

SB01（第 36 図）

WS区の南東隅部に位置し，SB02 と併存する。主軸を北東方向にとり，1 間が 2.25ｍ，1.9ｍの桁行 2 間，1 間が 2.1ｍの梁間 1 間の掘立柱建物である。床面積は 8.7㎡である。

柱穴の掘り方は円形で，平均 35㎝と比較的大きく，掘り方の検出面からは 212 が出土している。遺物はいずれも検出面で確認している。特にP3 は方形の石と土器が埋戻し後に置かれたような状況で出土している。出土土器から中期後葉，信里編年Ⅲ-1 様式と考えられる。

出土遺物（第 39 図）

210 はP2 から出土した弥生土器の壺 3 aである。口唇部をやや上下に引き伸ばし，2 条の凹線文を施す。口縁部内面には沈線文を放射状に施すとともにその内側に連簾文を施す。外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げ，内面はナデ調整によって仕上げる。

212 はP3 から出土した台付鉢の鉢部である。口唇部を左右にやや引き伸ばし，2 条の凹線文を施す。体部の外面にも 3 条の凹線文を施す。

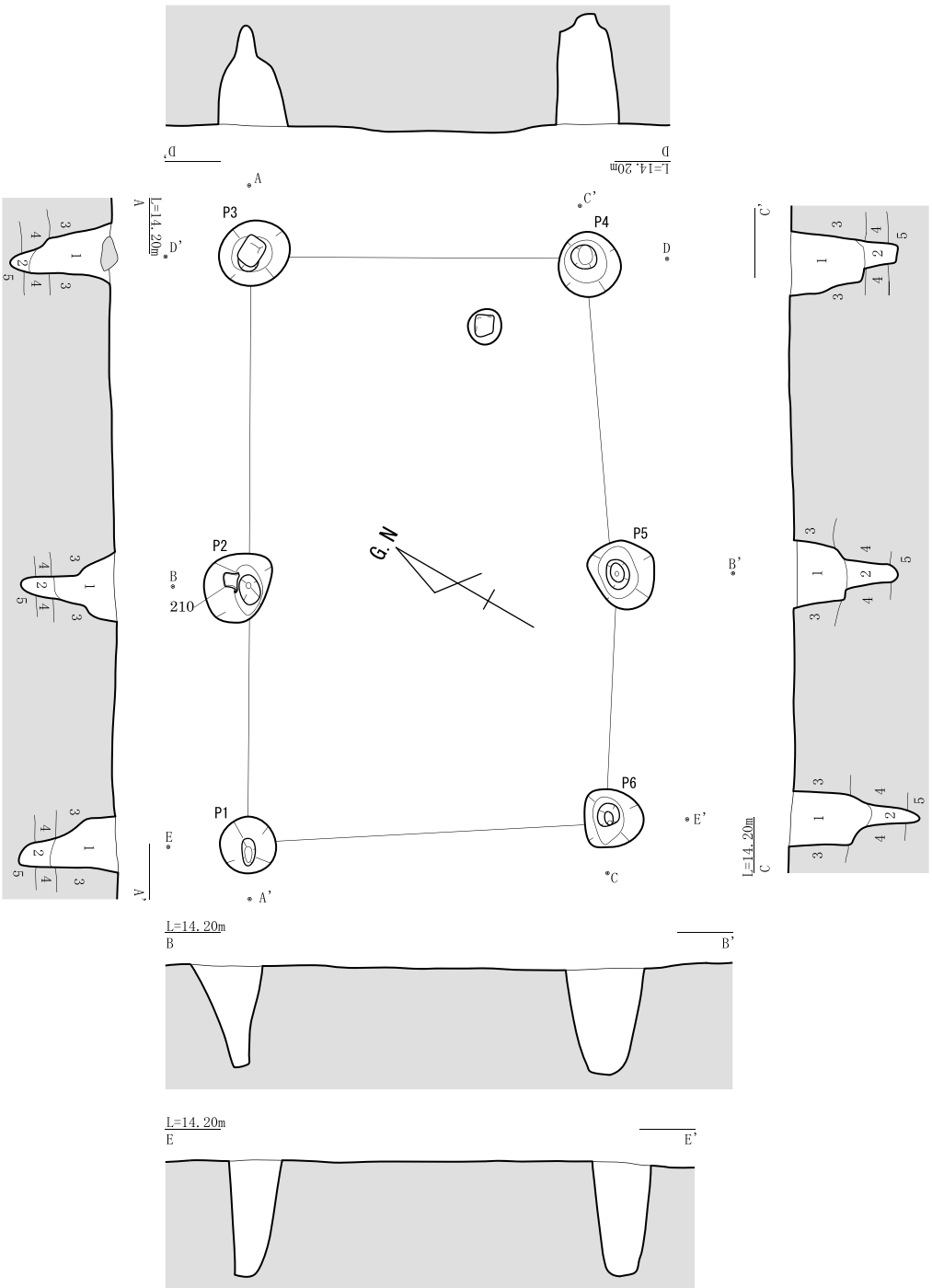
いずれの土器も褐灰色を呈し，石英，長石，雲母もしくは角閃石を含む胎土である。

213 はP1 から出土している打製石斧である。これは，折損しているが，打製石斧の先端部と考えられる。先端部には，顕著な潰れの痕跡と，非常に強い使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

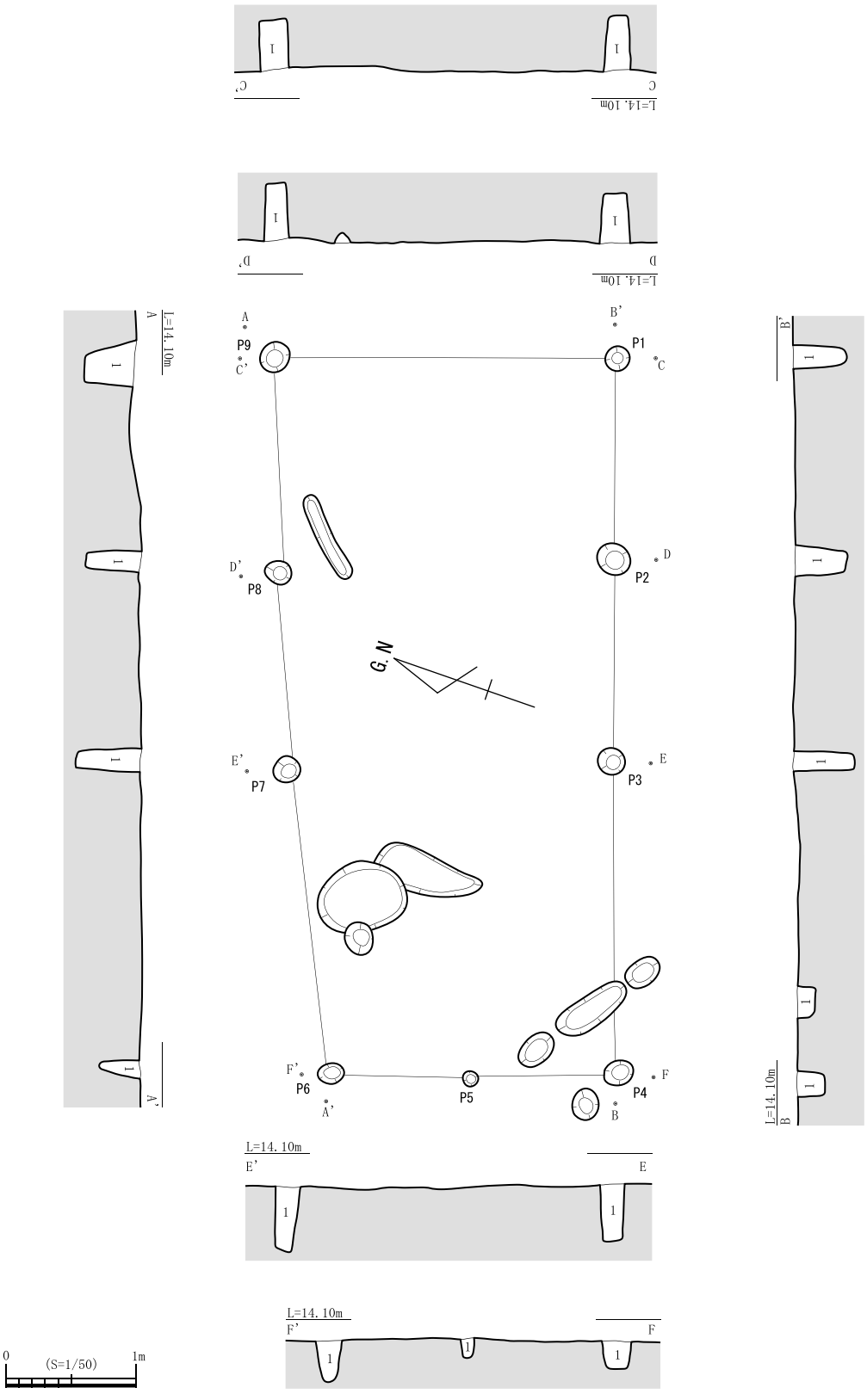
SB02（第 37 図）

WS区の南東隅部に位置し，SB01 と併存する。主軸を北東方向にとる，桁行方向が 1 間が西から 1.6，1.6，2.1ｍ，梁間方向が東から 1 間 2.2，2.5，2.6，2.6ｍの桁行 3 間，梁間 1 間の掘立柱建物である。床面積は 18㎡である。

柱穴の掘り方は円形で，平均 20㎝と比較的小さい。

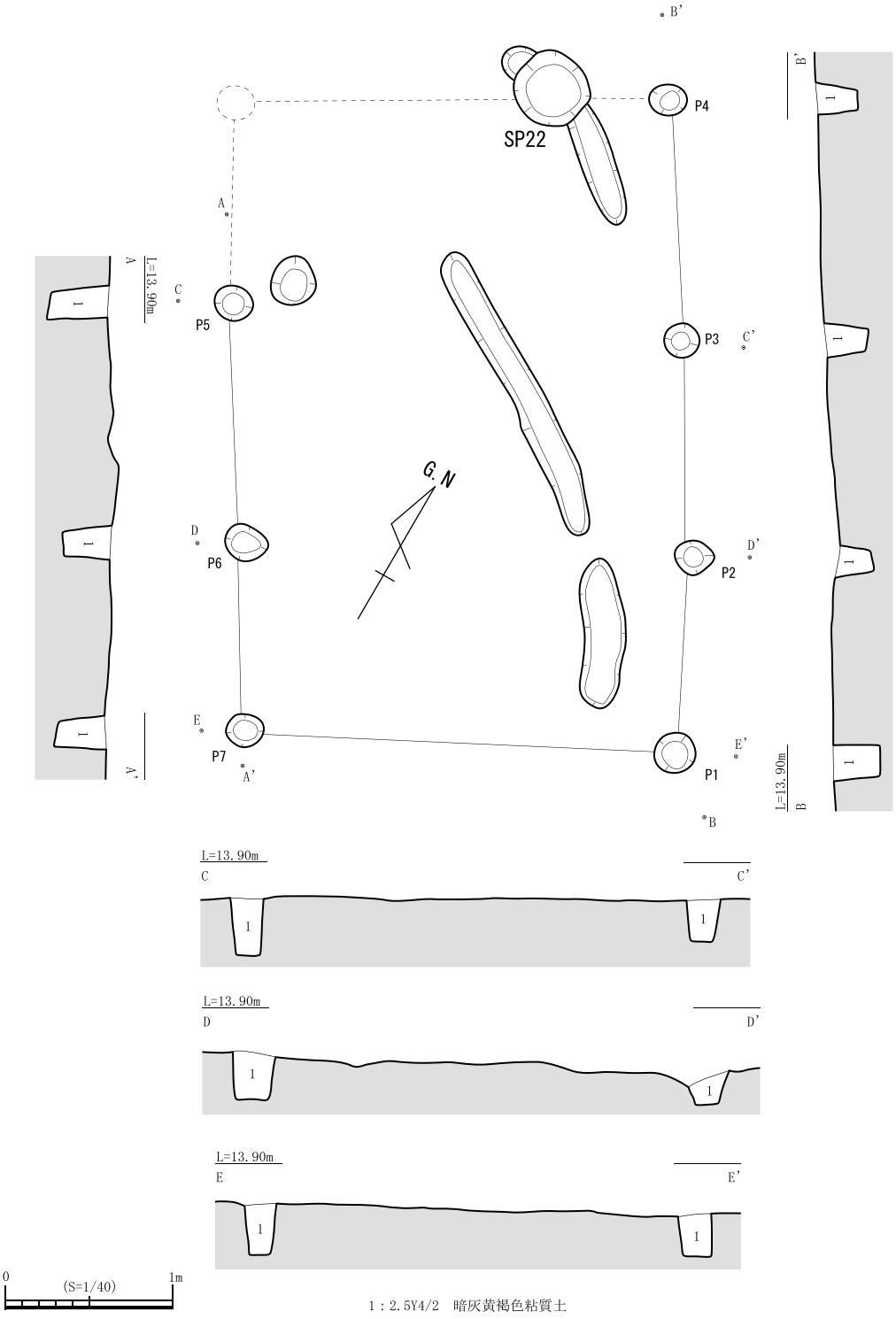


第 36 図　SB01 平・断面図（S=1/50）

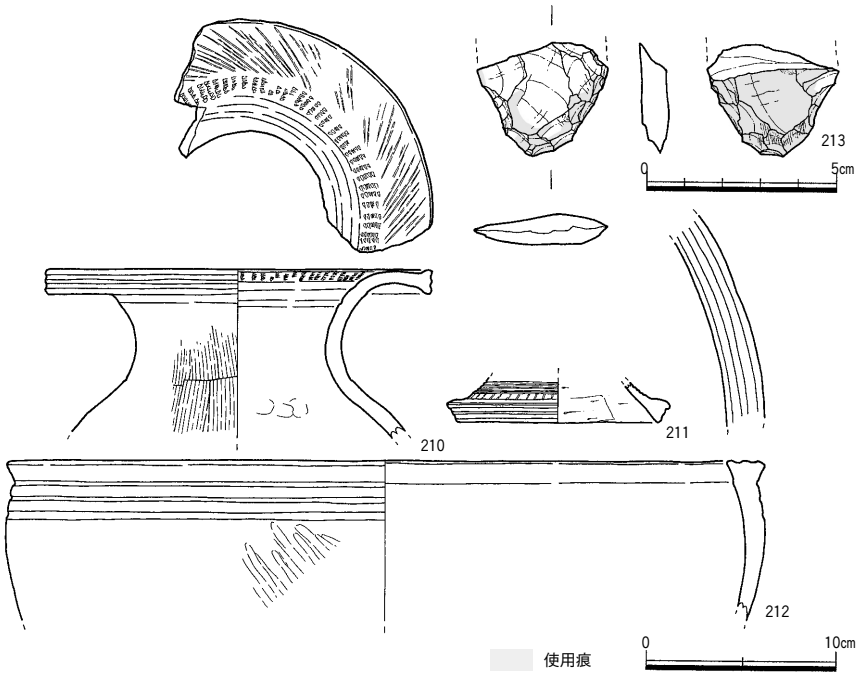


1：10YR4/2　灰黄褐色粘質土

第 37 図　SB02 平・断面図（S=1/50）



第 38 図　SB03 平・断面図（S=1/40）



第 39 図　SB01・03 出土遺物（210～212：S=1/4，213：S=1/2）

SB03（第 38 図）

ES 区の西側に位置し，SH01 の東側に位置する。主軸を北西方向にとる，桁行方向が北から 1 間 1.5，1.3，1.2m，梁間方向が 1 間 2.6mの桁行 3 間，梁間 1 間の掘立柱建物である。床面積は 10.4㎡である。

柱穴の掘り方は小形の円形で，平均 22㎝である。掘り方検出面からは 211 が出土しており，中期後葉，信里編年Ⅲ-1 様式以降と考えられる。

出土遺物（第 39 図）

211 は弥生土器で，高杯の脚部である。端部をやや引き伸ばし，2 条の凹線文を施す。脚部の外面には 5 条の沈線文による直線文，さらに下位に沈線で放射状に文様を施す。内面はヘラ削りによって仕上げる。

黄白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

【方形竪穴建物状遺構】

以下に報告する方形竪穴建物状遺構は非常に共通性の高い構造をもつ。掘り方が明瞭で，隅丸の長方形を呈し，長軸方向に，中央ややどちらかよりに地床炉と考えられる楕円形に赤く焼けた範囲を有する。明確な支柱穴はなく，上屋構造は不明確である。

SX03（第 40 図）

WN区の南東隅部に位置する。ほぼ北に主軸をとる長軸 3.7ｍ，短軸 2.6ｍの隅丸方形を呈する。一部は調査区外へとのびる。深さは 30㎝と浅いが，掘り方は明瞭であった。埋土は地山起源のやや汚れた黄灰色粘質土で埋まった後，幾分の期間を経て上層部分に炭を含む土が堆積している。一定期間放置された後に窪地を埋め戻した，もしくは埋まった可能性が想定される。

地床炉と考えられる楕円形に赤く焼けた範囲が，中央やや北よりにあり，その周辺は不整形であるが一段掘りこんでおり，床面よりやや低くなっている。

柱穴と想定されるものが３ヵ所で確認できたが，位置関係から本来の支柱穴とは考えられず，明確な上屋を想定することが困難である。これらの柱穴からは炭が出土している。掘り方の外側に柱穴の存在を想定したが，確認することはできなかった。

壁溝は西側から北側にかけて巡るが全周はしない。

床面から土器（215，218，219，220，221），台石と考えられる大型の砂岩が出土した。これらの出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ－２期と考えられる。

出土遺物（第 41 図）

214 ～ 225 が弥生土器で，216，217 がサヌカイト製の石器である。

214，215 は壺８ａで，口縁部を「ハ」の字状に開き，頸部に突帯をもつものである。214 は口縁部が段を設けるように成形するもので，215 は２条の貼り付け突帯に刺突文を施すものである。

216 ～ 222 は甕形土器である。216 ～ 219 はいずれも口縁部先端をヨコナデ調整によってややつまみ上げるものであるが，やや内面に窪みが認められる程度である。220 ～ 222 は頸部から肩部の破片である。いずれも，表面が剥落しており，調整については不明である。

223 は器種不明で，甕の底部状にすぼまるもので，底はない。ただし，上下が逆で，壺形土器の可能性もある。

224，225 は台付鉢などの脚部と考えられるもので，やや裾部先端が肥厚する。内外面はナデ調整によって仕上げる。

土器の色調および胎土は，４つに分類できる。

214，225 は橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

215，220 は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

216 は黄白色を呈し，長石，石英を含む胎土である。

それ以外の主体を占めるものは，褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含むものである。

226 は平基式の石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施し，一部に素材面を残す。石材はサヌカイトで，風化がやや強い。

227 は横長剥片素材のスクレイパーである。背部は折損面に調整を施す。刃部は，背面側の一部と腹面側全体に細部調整を施し，微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

SX06（第 42 図）

ES 区の南西隅部に位置する。東西をSX07，SH01，北側をSX08 によって切られており，全体の形状および規模はかろうじて分かる程度である。北西方向に主軸をとる長軸 3.4ｍ，短軸 2.3ｍのやや小規模な隅丸方形を呈する。深さは 20㎝と浅いが，掘り方は明瞭であった。埋土は地山起源のやや汚れた黄褐色粘質土で埋まった後，上層部分の炭を含む土が堆積しており，SX03 同様に，一定期間放置された後に窪地を埋め戻したもしくは埋まった可能性が想定される。

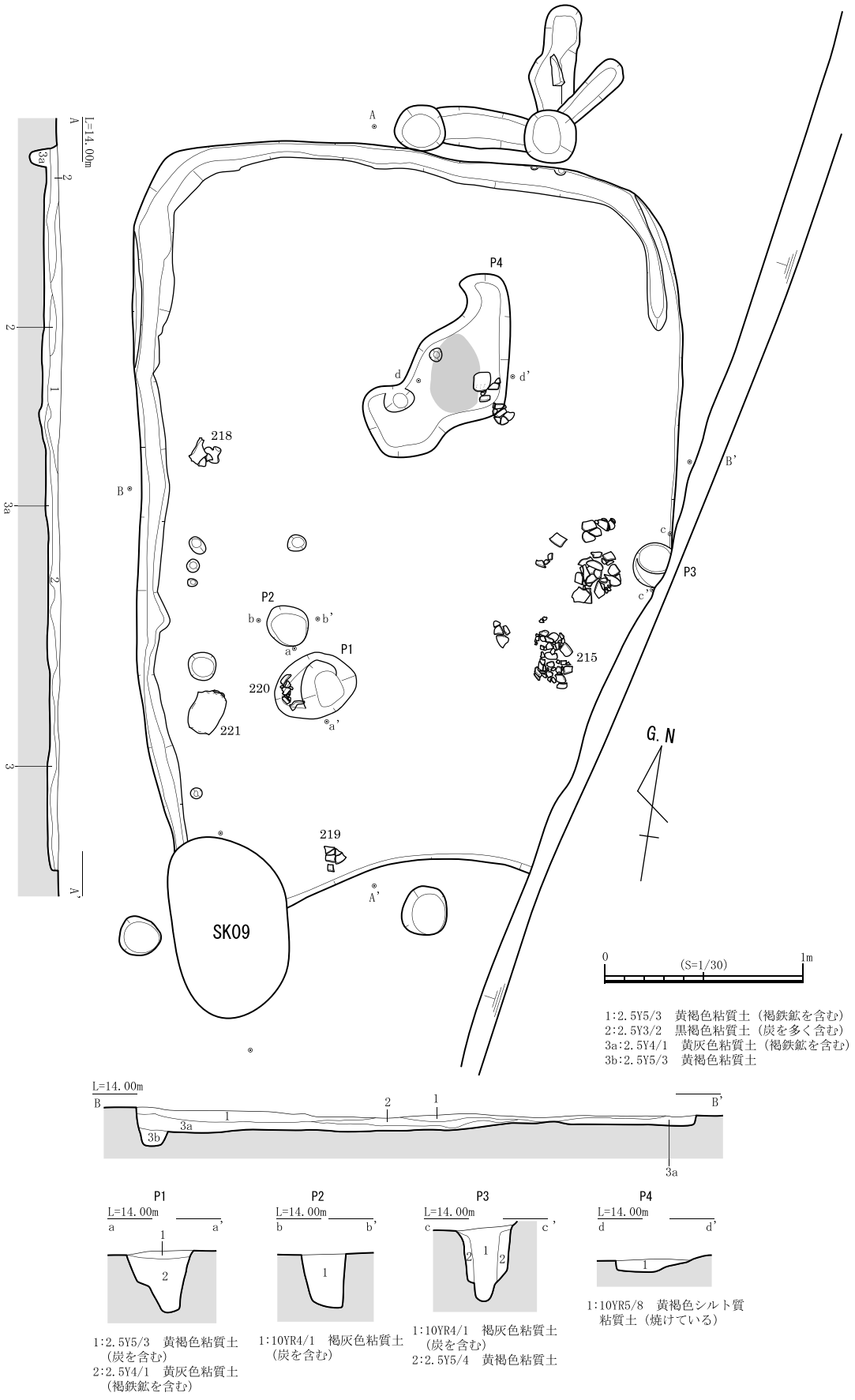
地床炉と考えられるやや小さな楕円形に赤く焼けた範囲が，中央やや北よりにある。その周辺は不整形であるが一段掘りこんでおり，床面よりやや低くなっている。

柱穴と想定されるものが地床炉の周り５ヵ所で確認できたが，位置関係から本来の支柱穴とは考えられず，明確な上屋を想定することが困難である。掘り方の外側に柱穴の存在を想定したが，確認することはできなかった。壁溝は認められなかった。

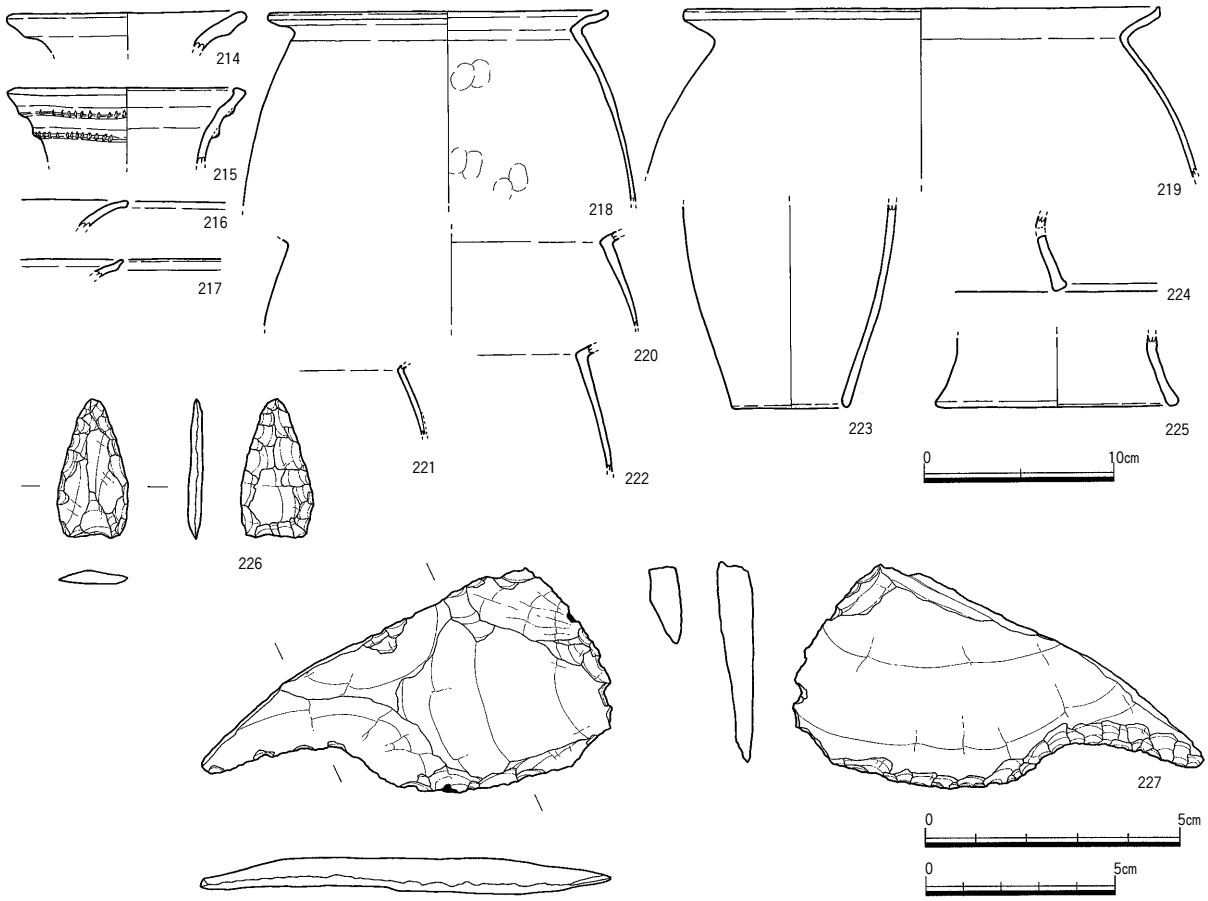
床面出土遺物は 230，232，235 で，出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階以前と考えられる。

出土遺物（第 43 図）

228 ～ 230，232 ～ 235 が弥生土器，231 が瓦器で，236 ～ 243 が石器である。231 は混入品と判断している。



第 40 図　SX03 平・断面図（S=1/30）



第 41 図　SX03 出土遺物（214～225：S=1/4，226：S=2/3，227：S=1/2）

228，230 は壺形土器である。228 は直口壺の壺 6 である。口唇部を内側に肥厚させ，口縁部は丁寧なヨコナデ調整によって仕上げる。外面は刷毛目調整，内面はナデ調整によって仕上げる。229 は「ハ」の字状に開く壺 8 と考えられる口頸部片で，粘土貼り付け状況を確認することができる。

232 ～ 235 は甕形土器である。232 は弥生前期の如意形口縁の甕で口唇部に刺突文を施す。233 は口縁部をヨコナデ調整によってやや口唇部をややつまみあげるため，やや尖る。234，235 は底部 2 と 3 で，234 はナデ調整によって器面を仕上げ，235 は外面を縦方向の磨きによって仕上げ，底部付近はヨコナデを施す。

231 は瓦器椀の口縁部片で，外面は磨き調整によって仕上げる。

土器などの色調および胎土は 3 つに分類できる。

228，229 は褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。234 は褐灰色を呈し，石英，長石を含むものである。それ以外は白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

石器は石鏃未製品，尖頭器，スクレイパー，石鋸，石錐，打製石斧，円礫が出土している。

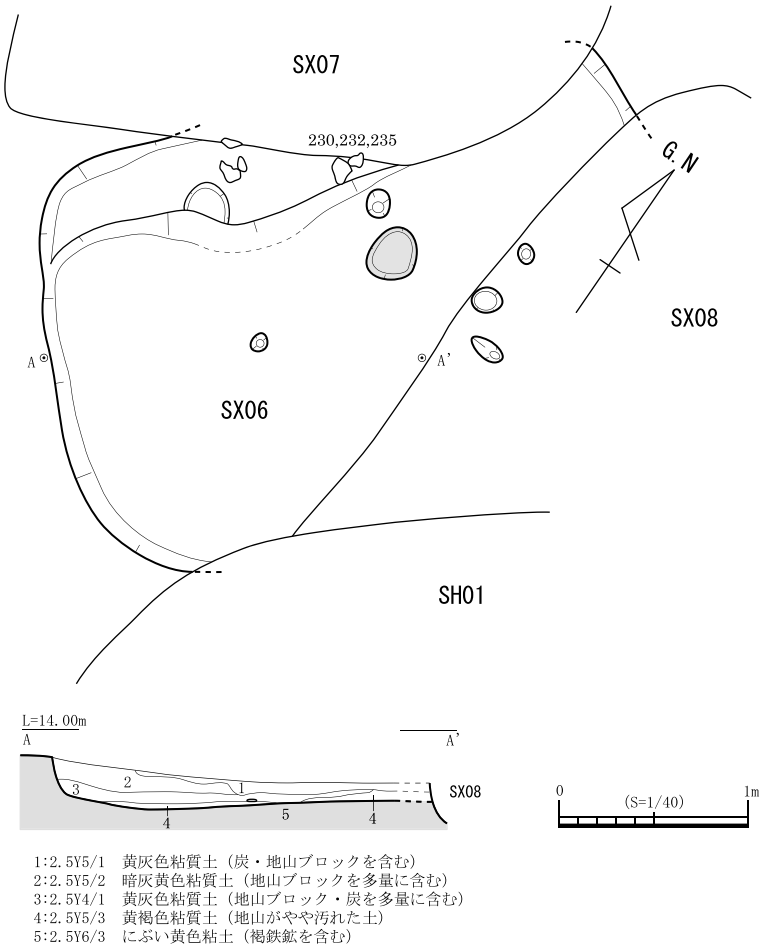
236 は素材剥片の一部に浅形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

237 は尖頭器である。背面側は粗い調整と浅形細部調整，腹面側は浅形 ～ 深形細部調整を施す。先端部を折損し，基端部は折損面に調整が確認できる。石材はサヌカイトである。

238，239 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。238 は横長剥片素材で，1 側辺を折損しているため全体の形状は不明である。側辺部に自然面を残し，背部は背潰加工が，刃部は粗い両面調整を施す。239 は背部を欠損し，側辺部は折損しているため，全体の形状は不明である。刃部は粗い両面調整が見られ，非常に摩滅している。

240 は石鋸と考えられる。刃部は粗い調整が見られる。石材は結晶片岩である。

241 は涙滴形を呈する石錐である。1 側辺を自然面で構成し，自然面を打面に調整を施す。もう片方の側辺は



第 42 図　SX06 平・断面図（S=1/40）

折損面であるが，細部調整が認められる。先端部は折損している。石材はサヌカイトである。

242 は打製石斧と考えられる。刃部を折損しているため，全体の形状は不明である。背腹両面と側辺部の一部に自然面を残し，全体に粗い調整で成形する。石材は安山岩である。

243 は砂岩製の平坦な円礫である。

SX07（第 44 図）

ES 区の南西隅部に位置する。長軸 3.3m，短軸 1 m のやや小型の隅丸方形の竪穴遺構である。北側をSP11 に切られており，SX06 を切る。

埋土は下層部分に地山ブロックを含む褐灰色シルトが堆積し，上層部分は炭や焼土，土器を含む褐灰色シルト質粘土である。遺物は浮いたものがほとんどであったことから，最終埋没時期を示すものと考えられる。

北東部と南西部の隅部に三角形状のテラスがあり，他の方形竪穴遺構と異なり，地床炉は確認できなかった。支柱穴はない。規模も小さく，以上のような特徴から，隅丸方形の竪穴建物状遺構の範疇で捉えるべきものではないかもしれない。

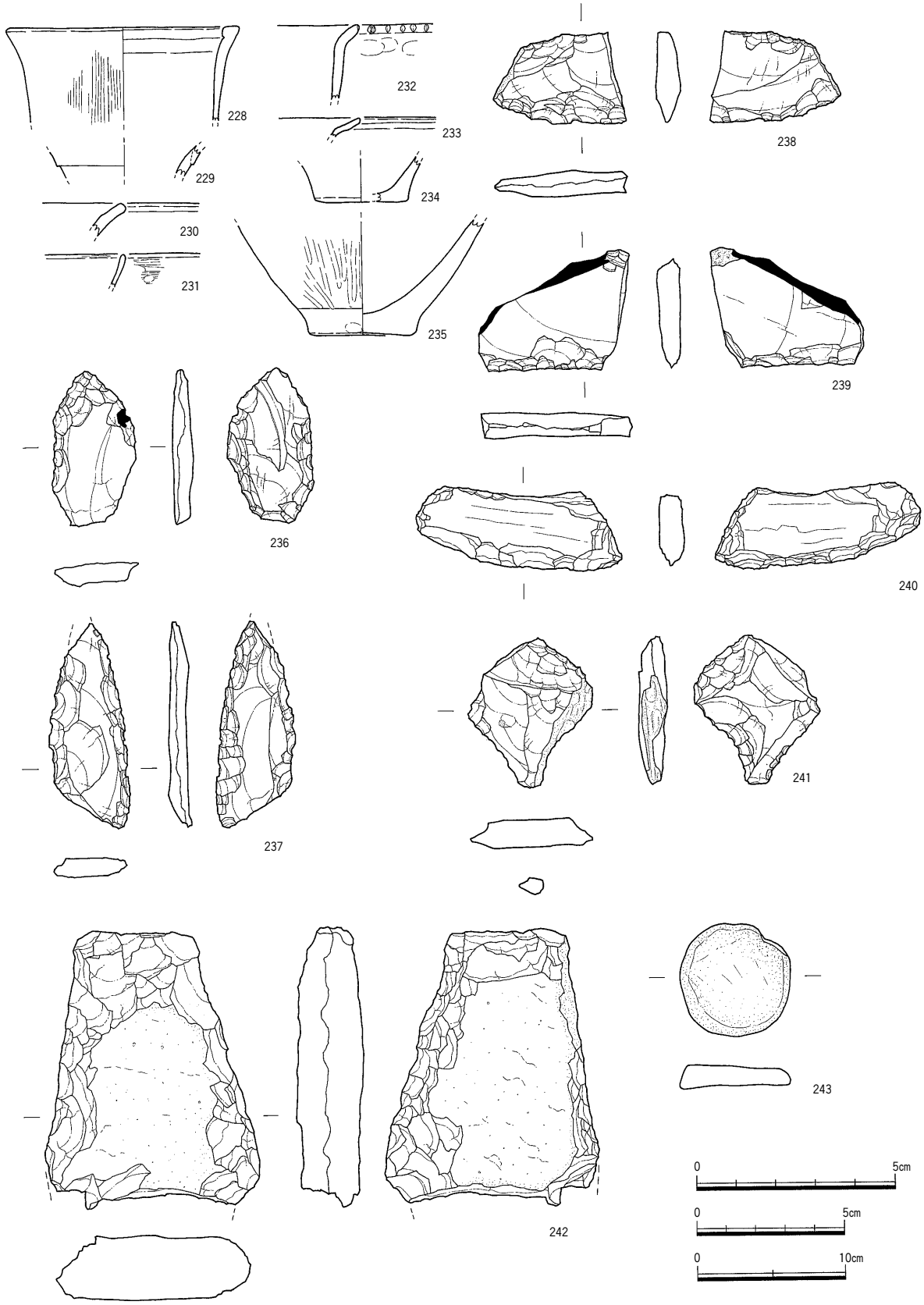
出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅲ-1 様式と考えられる。

出土遺物（第 45 図）

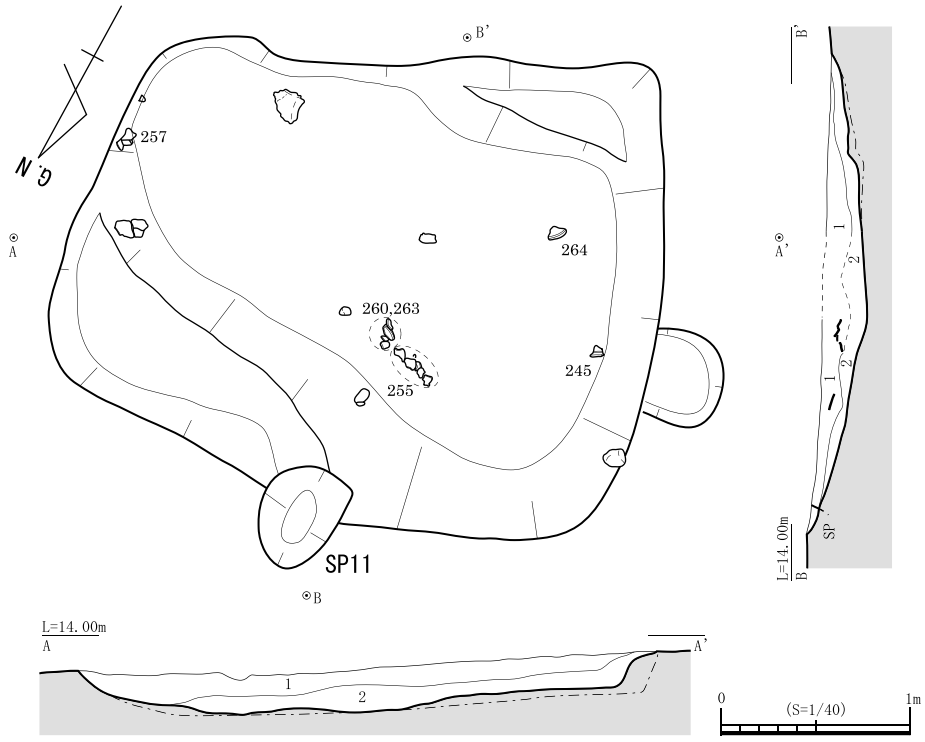
244 ～ 267 が弥生土器，268 ～ 271 がサヌカイト製石器である。

244 ～ 246 は壺形土器で，244，245 が壺 3，246 が口縁部が袋状を呈する壺 8 dである。244 は口縁部はヨコナデ調整によって仕上げる。245 は口唇部に凹線文を施すもので，頸部に三角突帯を貼り付ける。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整によって整形している。246 は袋状を呈する口縁部である。内外面ともにヨコナデ調整によって仕上げる。

247 ～ 258 は甕もしくは鉢である。247，248，249，250 は口唇部をやや強めのヨコナデ調整によってややつまみ上げた形態となるものである。いずれも，壺の口縁部の可能性も考えられる。250 は口唇部に刺突文を施



第 43 図　SX06 出土遺物
（228～235：S=1/4，236,241：S=2/3，237～240,242,243：S=1/2）



1:10YR6/1　褐灰色シルト質粘土（炭・焼土粒を含む）…土器包含層
2:10YR5/1　褐灰色シルト（やや砂質，浅黄色土・地山混じる，炭を若干含む）

第 44 図　SX07 平・断面図（S=1/40）

す。251 は鉢形土器の口縁部と考えられ，外面に凹線状の窪みが認められる。252，253，255 はより意識的に口唇部をつまみ上げた口縁部形態を呈するものである。いずれも内外面ともにヨコナデもしくはナデ調整によって整形を行っている。255 は内面を縦方向の板ナデ調整を施す。254，256 は明瞭につまみ上げた口唇部に 2 条の凹線文を施すものである。口縁内外面ともに明瞭なヨコナデ調整を施す。256 の体部外面は縦方向の刷毛目調整後に口縁部整形に伴うヨコナデが施されている。257，258 は頸部から肩部にかけての破片で，外面を縦方向の刷毛目調整後に頸部周辺をヨコナデ調整によって仕上げる。

259 ～ 262 は壺，甕，鉢の底部である。259，260 は底部 3 で，底部周辺がややすぼまった後に「ハ」の字に開く形態で，261，262 は直線的に「ハ」の字に開く形態ものである。260，262 から内面は刷毛目調整によって仕上げ，底部付近は指押さえによって成形した状況をとどめている。

263 ～ 267 は高杯もしくは台付鉢の杯部もしくは脚部である。263 は口縁部を内外面に引き伸ばしたもので，外面側は平坦に整え，刺突文を施す。口縁部成形に伴うヨコナデ調整による稜が認められる。264，265 は杯部が「ハ」の字に開いた後，稜をもって折れ，直線的に立ち上がるタイプのものである。口唇部には凹線文を施し，杯部外面にも 1 条から 2 条の凹線文を施す。内外面の調整は明瞭ではないが，内面は磨き調整によって仕上げているものと考えられる。266，267 は裾端部を外側へ引き伸ばすもので，267 は端部に凹線文を施す。内面はいずれも端部成形に伴うヨコナデ調整を施す。その後に，ケズリ調整を施し，器壁の厚みを調整している。

土器などの胎土および色調は 5 つに分類できる。

247，257，258 は黄白色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

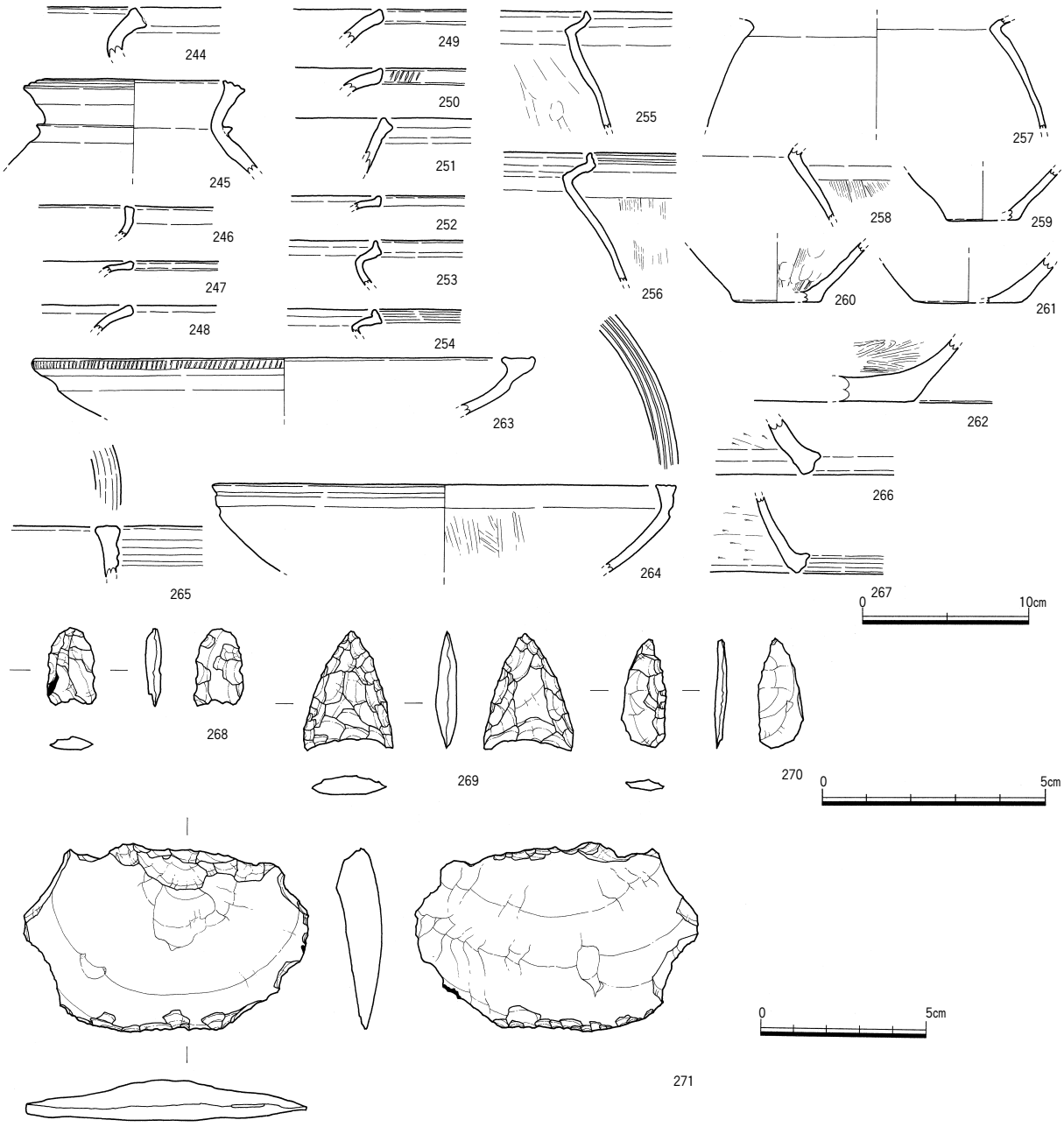
263 は明橙褐色を呈し，石英，長石を多量に含む。

261 は灰白色を呈し，長石を含む胎土である。

244，252，255，260，265 は褐灰色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

245，250 は茶褐色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。

それ以外の主体を占める一群は褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含むものである。その中でも，特に 249，256 は褐色を呈し，角閃石を多く含む胎土でい



第 45 図　SX07 出土遺物（244～267：S=1/4，268～270：S=2/3，271：S=1/2）

わゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似するものである。

石器は石鏃，石鏃未製品，スクレイパーが出土している。

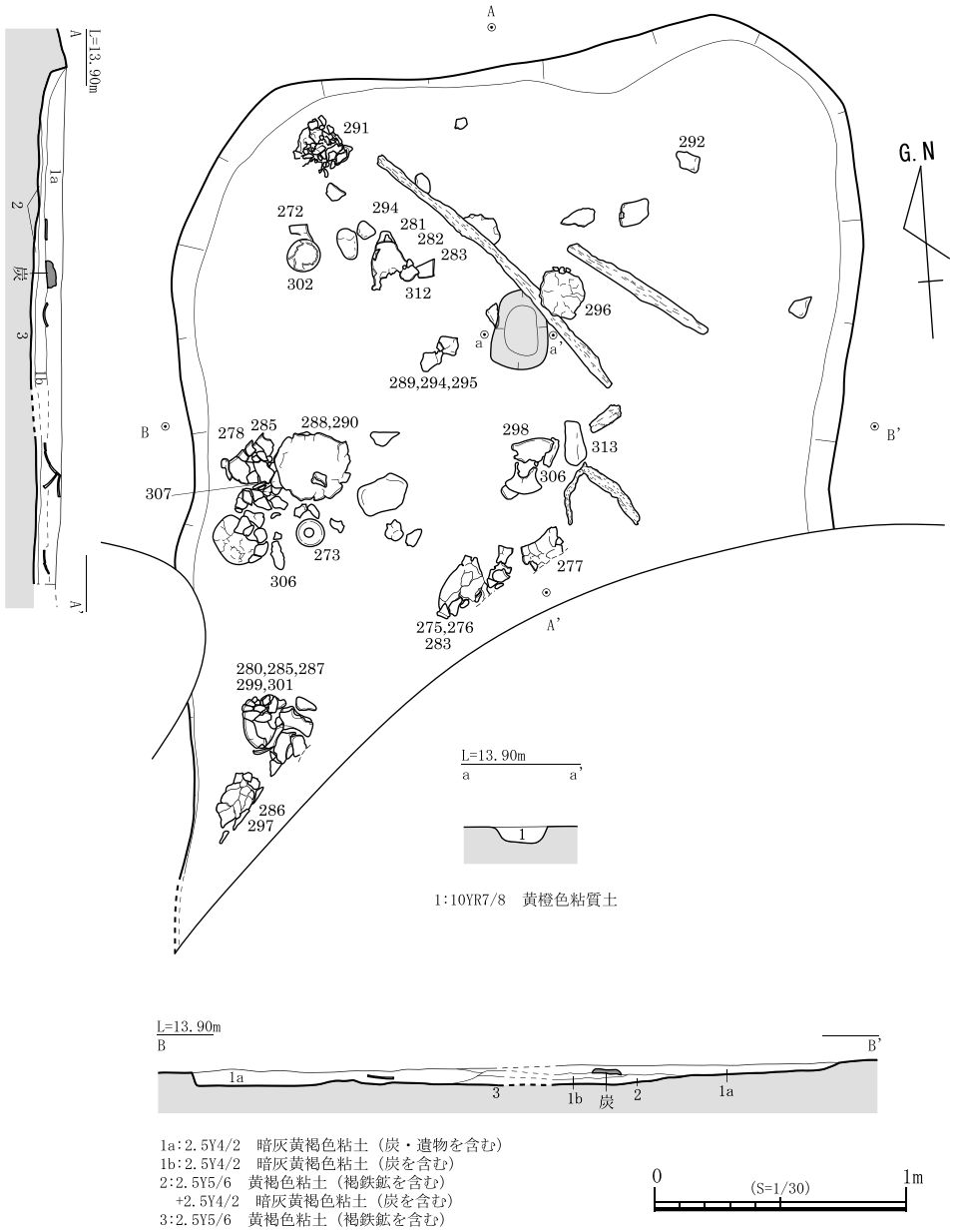
268，269 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。268 は平基式の小型石鏃である。風化が著しく，稜線は不明瞭であるが，素材剥片の一部に浅形 ～ 深形細部調整を施す。269 は凹基式の大型石鏃である。極浅形 ～ 浅形細部調整を背腹両面交互に施して成形する。

270 は石鏃未製品である。横長剥片を素材とし，１側辺を折損する。背面側に極浅 ～ 浅形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

271 は横長剥片素材のスクレイパーである。背部には背潰加工を，刃部は両面調整を施し，微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

SX08（第 46 図）

ES 区の南西隅部に位置する。残存長軸 3.4ｍ，短軸 2.7ｍの隅丸方形の竪穴遺構である。南側半分をSH01 に切られている。掘り方は明瞭で，おおよそ３層に分層でき，上位２層は炭を含む暗灰黄褐色粘土で，第３層（第 46 図の２層）は地山起源の黄褐色粘土に暗灰黄褐色土を含む土である。この層は貼床状に薄く堆積しており，その直上から多くの土器が出土した。土器は西側に集中



第 46 図　SX08 平・断面図（S=1/30）

し，折り重なりあって出土し，多くが完形に復元できたことから，遺棄されたものと考えられる。そのほか，一部，炭化した木材も確認でき，廃棄時に焼成行為があったものと考えられる。上層の埋土から，その後，一度に埋め戻されたと考えられる。

中央やや北よりに地床炉と考えられる長軸 31㎝のやや隅丸方形状に赤く焼けた範囲が認められる。炭化した木材を検出したが，分布状況等に規則性は見いだせないことから，これが部材になるかどうかは不明である。また支柱穴と考えられるものは確認できていない。

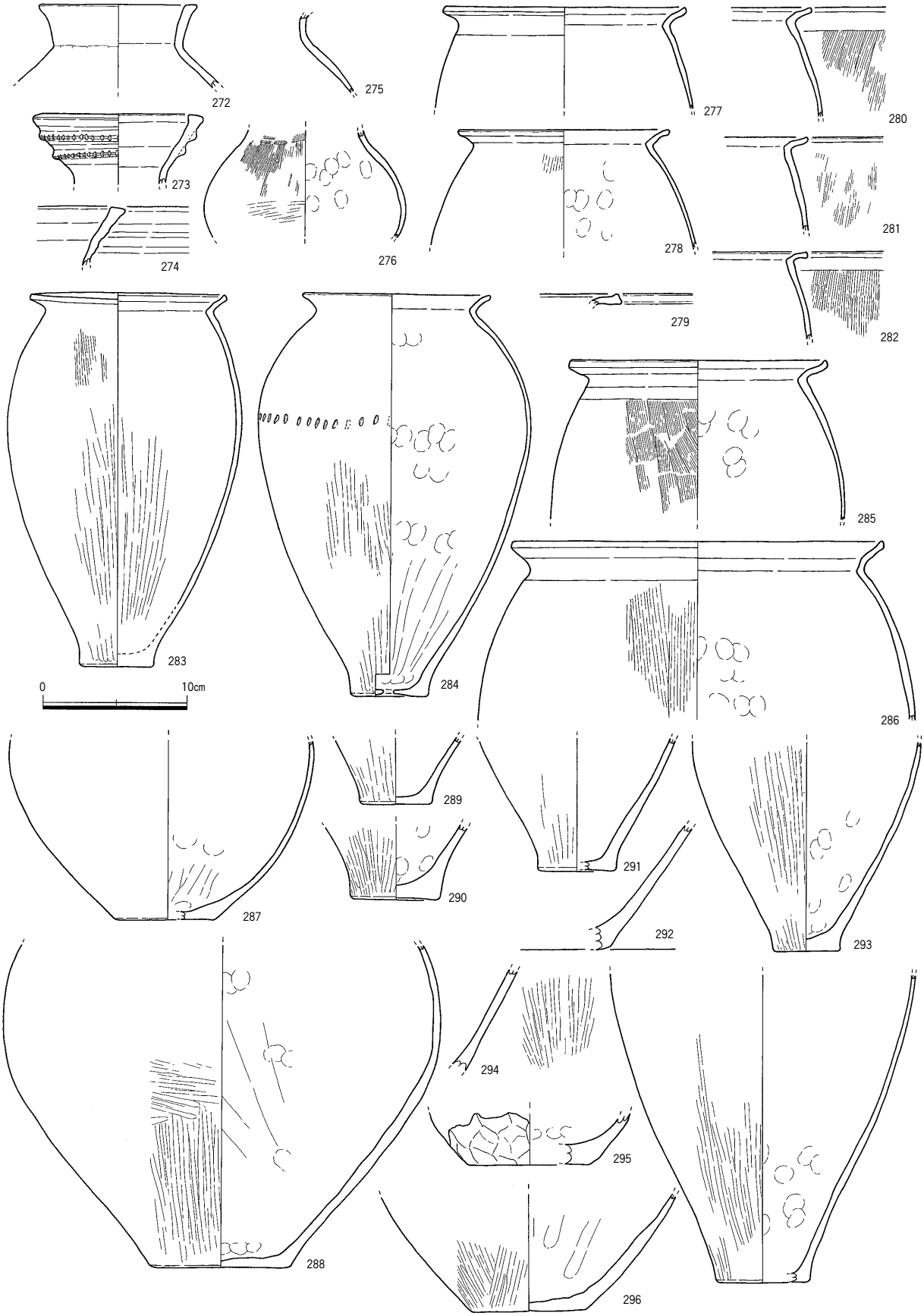
出土した土器は，多くが，完存もしくは全体の半分が残存している状況である。また，中には焼成時の剥離痕跡を残すものも 2 点認められた。床面出土遺物は 272，273，275 ～ 278，280 ～ 283，285 ～ 292，294 ～ 299，301 ～ 302，306，307，312，313 である。複数ある遺物番号は接合関係のあるものである（283，285，306）。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式と考えられる。

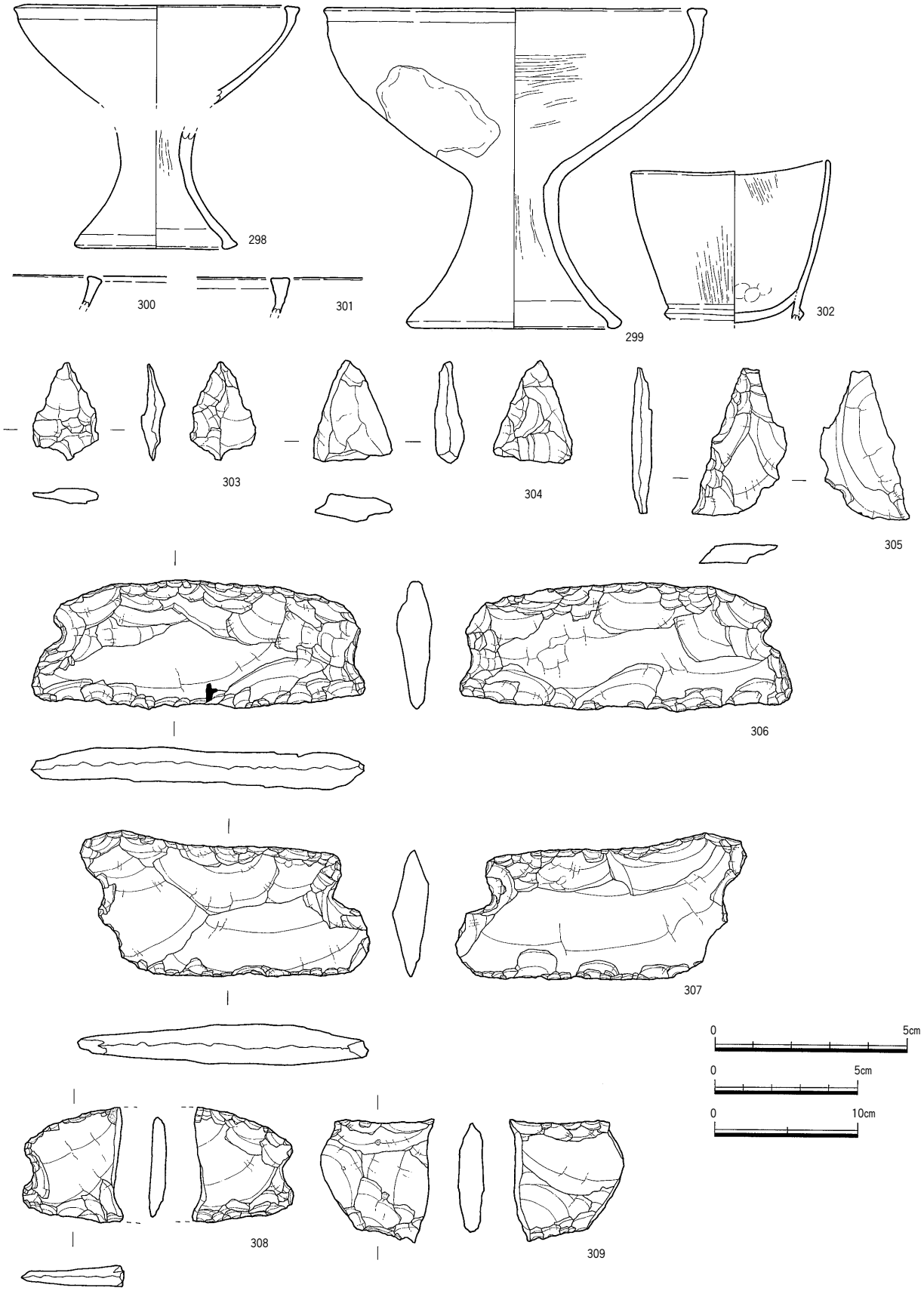
出土遺物（第 47 ～ 49 図）

272 ～ 302 が弥生土器で，303 ～ 313 が石製品である。

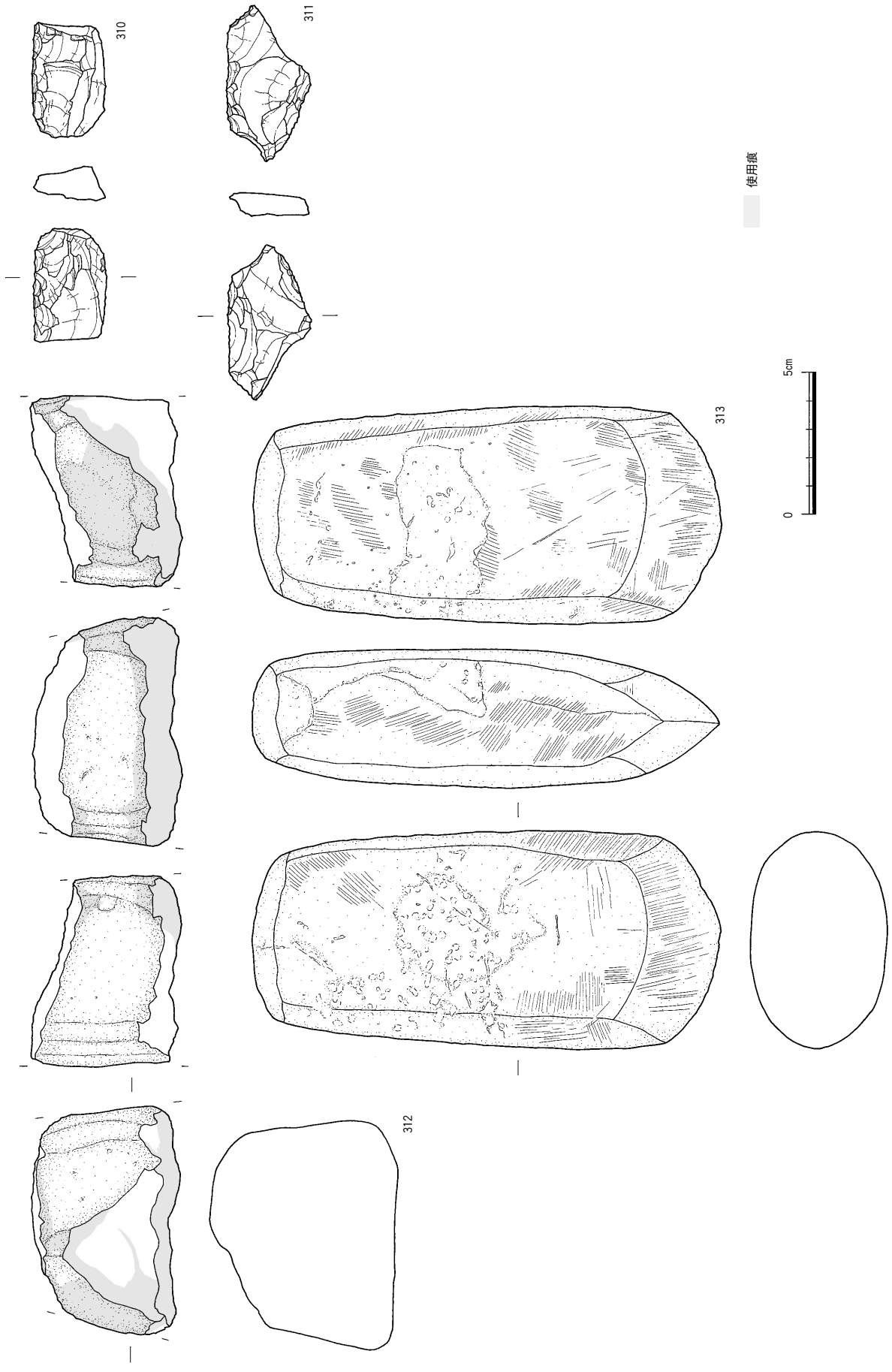
272 ～ 276 が壺形土器で，272 が壺 6，273 ～ 274 が



第 47 図　SX08 出土遺物①（S=1/4）



第 48 図　SX08 出土遺物②
（298～302：S=1/4，303～305：S=2/3，306～309：S=1/2）



第 49 図　SX08 出土遺物③（S=1/2）

壺８a，275，276 が壺体部片である。272 はやや外側に開くタイプのもので，内外面ともにナデ調整によって仕上げる。

273 は外面に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらし，先端部に刺突文を施す。一方，274 は強いヨコナデ調整によって突帯を作りだすものである。いずれも口縁部成形時に伴うヨコナデが内外面ともに明瞭に残る。275，276 は口縁部形態は不明である。276 から外面は縦方向の刷毛目調整によって整形した後，体部最大径部分については横方向の磨き調整によって仕上げる。

277 ～ 286 は甕形土器である。284 は外反する口縁部のもので，体部最大径に対して，頸部がやや窄まる形態となるものである。体部最大径に刺突文を施す。口縁部周辺はヨコナデ調整によって仕上げ，体部は外面が縦方向の磨き調整，内面は底部周辺が縦方向のナデ調整によって整形する。加えて内面には粘土帯の接合箇所と考えられる位置に水平方向に連続する指押さえが認められる。284 のみ底部に焼成後に穿孔を施す。

277 ～ 283，285，286 はヨコナデ調整の施し方によって口縁部形態が異なる。278，282 が丸くおさめるもしくは平坦に仕上げるもの，277，280，281，283，286 はややつまみ上げるもの，279，285 は意識的に強くつまみ上げるものである。調整はいずれも共通しており，外面は縦方向の刷毛目調整によって整形した後，体部下半には縦方向の磨き調整を施す。口縁部はヨコナデ調整等によって整形を行う。

287 ～ 297 は底部２と３である。287，288，294 ～ 296 は壺形土器の底部片で，289 ～ 293，297 は甕形土器の底部片である。287，288，294 ～ 296 は体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げ，体部最大径部は横方向の磨き調整によって仕上げる。内面は縦方向の板ナデ調整によって整形している。なお，295 の外面には焼成時の剥離痕跡が認められる。

一方，甕形土器の底部は外面は縦方向の磨き，内面はナデ調整によって整形している。

298 ～ 301 は高杯もしくは台付鉢である。298 ～ 301 ともに口縁部を内外面にあまり肥厚させないタイプである。脚部端部をヨコナデ調整によって内側にやや肥厚させる。内面には成形時の絞り痕跡が認められる。また，299 は杯部の外面に焼成時の剥離痕跡が認められる。

302 は小型の鉢形土器で，形態が特徴的である。底部は粘土板を張り付けて成形している。外面は三角形の貼り付け突帯を施す。外面は縦方向の磨き調整によって仕上げ，内面は縦方向の刷毛目調整で仕上げる。底部付近は指押さえが認められる。

土器等の色調および胎土は３種類に分類できる。ただし，当遺構出土土器は被熱等による変色した土器が多く，胎土構成から本来の色調を想定しているもの（278，287，292，293，301）がある。

285，290，292 は黄白色を呈し，石英，長石を含む比較的精良な胎土である。

275 ～ 278，284，287，288，293，299 は褐灰色を呈し，長石，石英を含む胎土である。

それ以外は褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土のもので，当遺構出土土器は色調のヴァリエーションが著しく，雲母を含むものなどが多いため，ややまとまりに欠けるが，一群としておく。

石製品は石鏃未製品，打製石包丁，楔形石器，焼け石，太型蛤刃石斧が出土している。

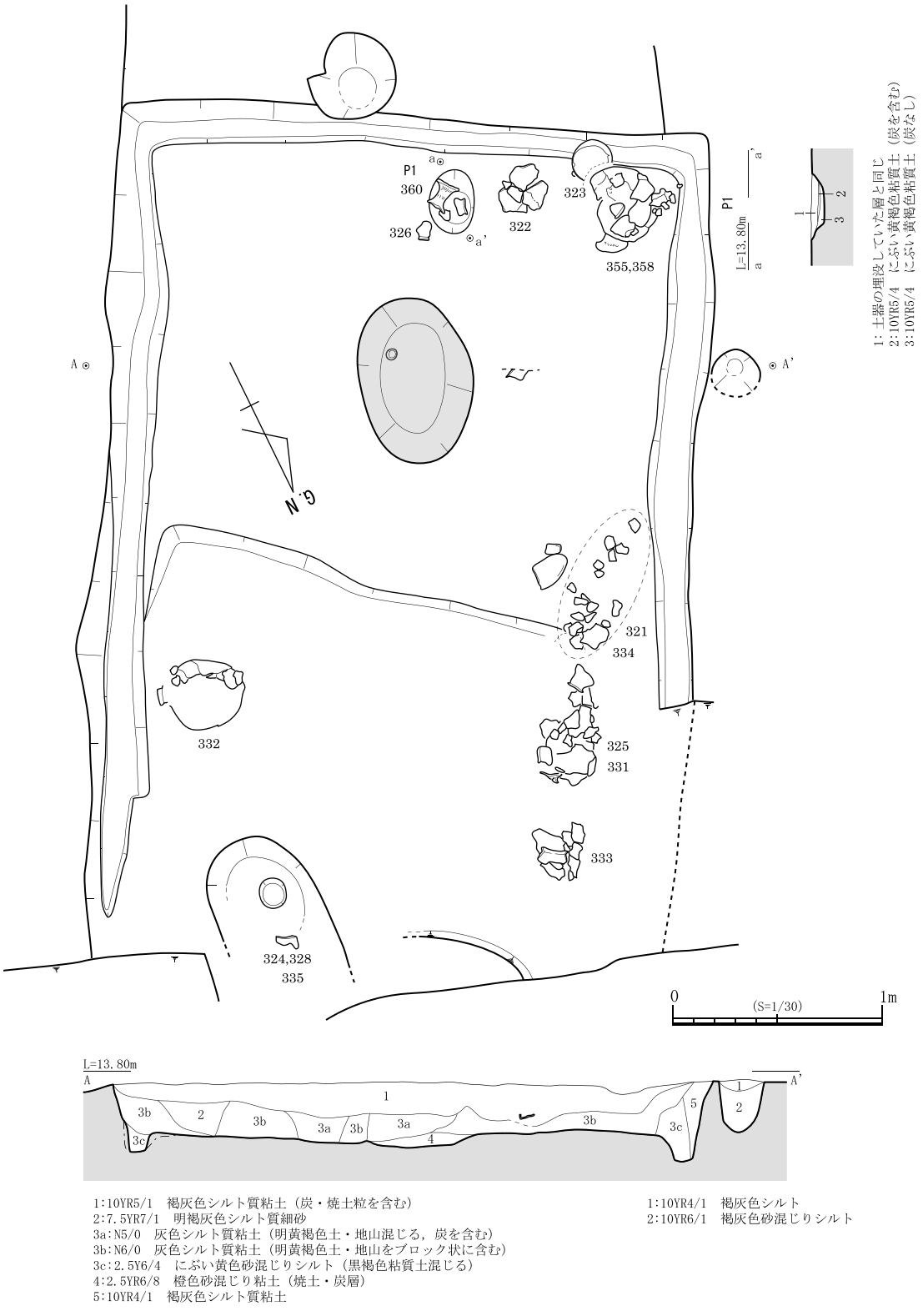
303 ～ 305 は石鏃未製品で，石材は 303・305 はサヌカイト，304 は安山岩である。303 は腹面側を細部調整して切先を作り出すが，側辺や基部の調整が粗いことから，石鏃未製品と考えられる。304 は全体に粗い調整を施すが，切先の調整は行われていない。１側辺を折損する。305 は横長剥片の背面側に粗い調整を施し，切先を作り出すが，基部は作り出していないことから，石鏃未製品と考えられる。

306 ～ 309 は打製石包丁で，石材はすべてサヌカイトである。306 は大型横長剥片素材で，両端に抉りをもつ。背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が認められる。307 は大型横長剥片素材で，両端に抉りをもつ。背部の一部に背潰加工が確認でき，刃部は両面調整し，摩滅が認められる。308 は折損しているため，全体の形状は不明であるが，抉りのある打製石包丁である。背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が認められる。309 は両端を折損しているため，全体の形状は不明であるが，背部を丁寧に潰していることから，打製石包丁と考えられる。刃部は両面調整し，やや摩滅している。

310・311 は楔形石器で，石材はすべてサヌカイトである。310 は下端部を折損しているが，上端部と下端部の一部に潰れの痕跡が確認できることから楔形石器とした。311 は両端を折損しているが，上・下端部に潰れが確認できることから楔形石器とした。

312 は被熱の痕跡が認められる砂岩である。

313 は太型蛤刃石斧である。表面の体部に新しい敲打痕が確認できるほかは，全体に丁寧な研磨を行う。刃部先端に弱い使用痕が確認できる。石材は輝緑岩である。

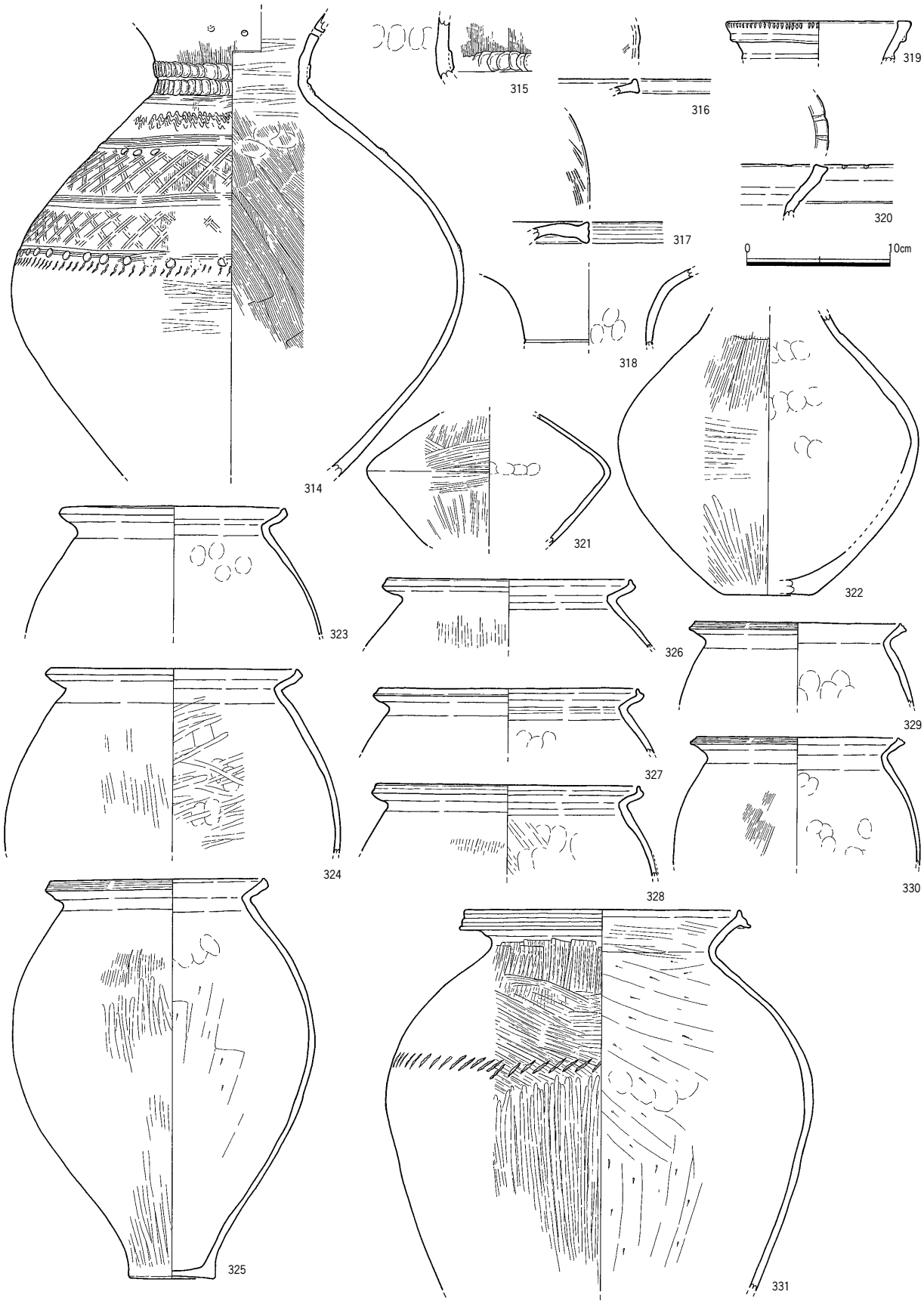


第 50 図　SX09 平・断面図（S=1/30）

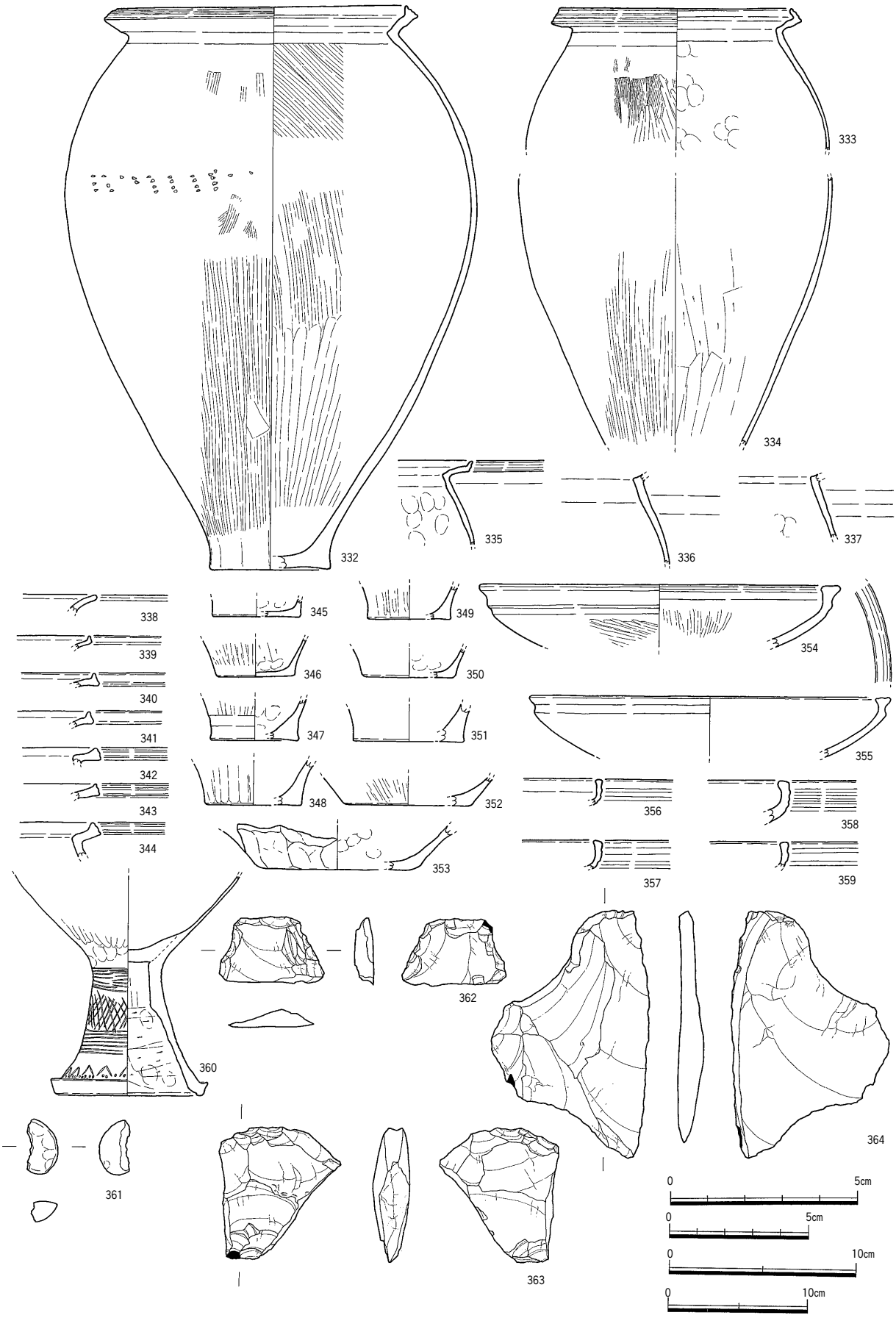
SX09（第 50 図）

ES 区の西側に位置する。残存長軸 4.1ｍ，短軸 2.82ｍの隅丸方形の竪穴遺構である。北側の一部は不明確である。掘り方は明瞭で，地山ブロックを含む灰色シルト質粘土がブロック状に下半部に堆積している。その上層は炭もしくは焼土粒を含む褐灰色シルト質粘土が堆積している。

中央やや南よりに地床炉と考えられる長軸 70㎝の楕



第 51 図　SX09 出土遺物①（S=1/4）



第 52 図　SX09 出土遺物②
（332～360：S=1/4，361：S=1/3，362～364：S=1/2）

円形を呈する赤く焼けた範囲が認められる。地床炉が確認された側が一段高くなっており，北側が一段低い。壁溝が南側にめぐる。

周辺でピットを確認しているが，上屋を想定できるようなものはなく，本来的に備わっていたものとは考えにくい。

ほぼ完存した土器が床面直上に長軸方向の壁，南側の壁に並行して据え置いたような状況で出土した。器種には偏りは見られない。出土した土器は，多くが，完存もしくは全体の半分が残存している状況である。床面出土遺物は 321 ～ 326，328，331 ～ 335，355，358，360 である。

出土遺物から時期は中期後葉，信里編年Ⅲ－１ ～ Ⅲ－２期と考えられる。

出土遺物（第 51 ～ 52 図）

314 ～ 361 は弥生土器もしくは土製品で，362 ～ 364 がサヌカイト片である。

314 ～ 322 が壺形土器で，314，315 が壺２dで，広口壺で頸部に押圧文を施すものである。口縁部形状については不明であるが，供伴土器から凹線文を施すタイプと考えておきたい。頸部には２個１対の穿孔が施されている。体部上半には上から波状文，櫛描文，斜格子文，櫛描文，斜格子文，櫛描文，刺突文の順で非常に密に文様が施されている。１段目および３段目の櫛描文には円形浮文も貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げた後，体部最大径には横方向の磨き調整を施す。内面は頸部に横方向の磨き調整，体部は縦方向を基調とする刷毛目調整で仕上げる。315 も同様である。施文は全体の調整が終了した後に行っている。

316 は壺２，317 は壺３の口縁部片で，いずれも口縁部上面に文様を施す。318 も同様な口縁部をもつ壺の頸部である。

319，320 は壺８で，319 は口縁部外側先端に刺突文を施し，三角突帯をヨコナデによって貼り付けるものである。一方，319 はヨコナデによって外反させ，受け口状に開くタイプである。口唇部には刺突文を施す。321，322 は壺の体部片で，玉葱形を呈する。特に 321 は体部最大径で強く屈曲する。いずれも外面は縦方向の刷毛目調整後，磨き調整を施す。体部最大径は横方向の磨き調整を施し，底部は縦方向の磨き調整で仕上げる。321 は煤，焦げの付着が著しい。

323 ～ 344 は甕形土器である。口縁部のヴァリエーションに富む。338 は丸くおさめるもので，323，324 はやや端部をつまみ上げるもので，326 ～ 328，339 ～ 341 は強く端部をつまみあげるもので，325，329 ～ 333，335，342，344 は２ ～ ３条の凹線文を施すものである。凹線文を施すものには端部をやや肥厚させるもの，上下を拡張するもの，333 のように端部の上のみを拡張するものがある。

331 は体部最大径に刷毛目状工具による列点文を施し，332 は列点文を施す。後者は非常に施文が非常に粗い。甕の調整は外面が刷毛目調整後磨き調整を体部下半に施す。内面は上半部を磨き調整によって仕上げるもの（324），外面同様に刷毛目調整後に磨き調整によって仕上げるもの，大部分をケズリによる整形痕跡を残すものがある（325，331，334）。

334，336，337 は体部片である。345 ～ 353 は底部２と３で，352，353 は壺もしくは鉢形土器の可能性がある。形態はヴァリエーションに富むが，基本的に外面を磨き調整によって仕上げ，内面は成形時の指押さえが残る。353 は焼成時の破裂痕跡が残る。

354 ～ 360 は高杯もしくは台付鉢である。杯部は 354，355 と 356 ～ 359 の大きく２つに分類できる。前者は杯部の途中で直立するもので，端部を内外に肥厚させる。355 や杯部の立ち上がりが強い稜をもって折れるため，後期的な特徴をもち，端部に凹線文を施す。後者は杯部上部を丸く直立させ，外面に２ ～ ３条の凹線文を施す。いずれも，内外面ともに磨き調整によって仕上げる。360 は高杯の脚部で，外面には数条の沈線による直線文，斜格子文，直線文を施し，裾部には山形状の中に２段の刺突文を施す。内面は削って成形している。杯部と脚部は円盤充填による。

土器などの胎土および色調は５つに分類できる。

314 ～ 316，343，358，361 は黄白色を呈し，長石，石英を含む胎土である。

317，351 は白色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

320 は赤褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

330 は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。それ以外の主体を占める一群は，褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。ただし，雲母および角閃石の含有量はやや個体差があり，当遺構出土土器は非常に角閃石が多く，特に底部類は角閃石を含む割合が高い傾向にある。その中で，特に 321，323，324，328，357，359 は角閃石を多量に含み，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似する胎土である。354 は明茶褐色を呈する。

なお，318 は表面が黒色化しており，詳細は不明であ

る。

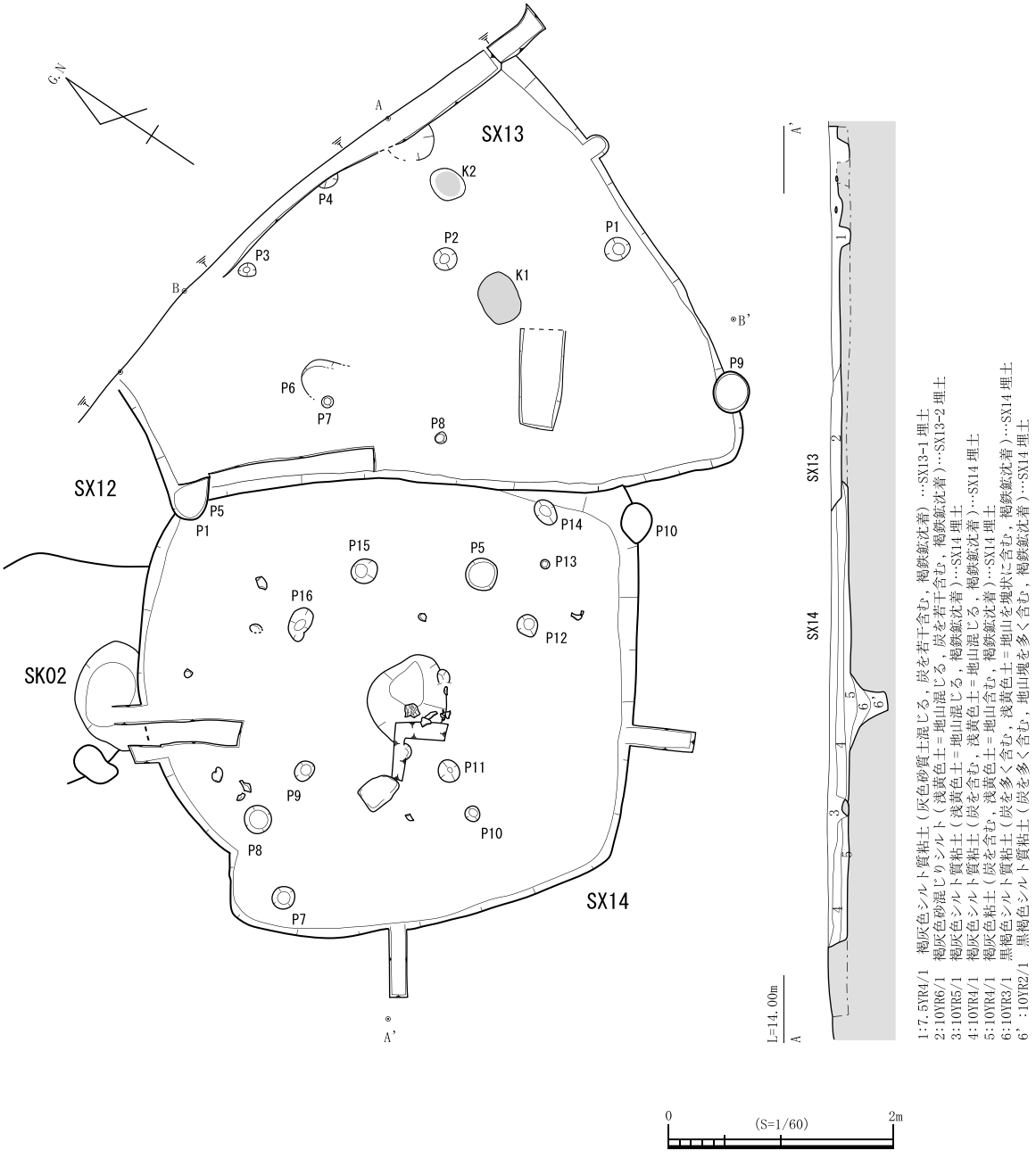
362 は剥片の周囲に二次加工を施すが，加工の意図については不明である。石材はサヌカイトである。

363 は楔形石器である。両側辺を折損するが，上・下端部につぶれの痕跡が確認できる。表面の一部に敲打痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

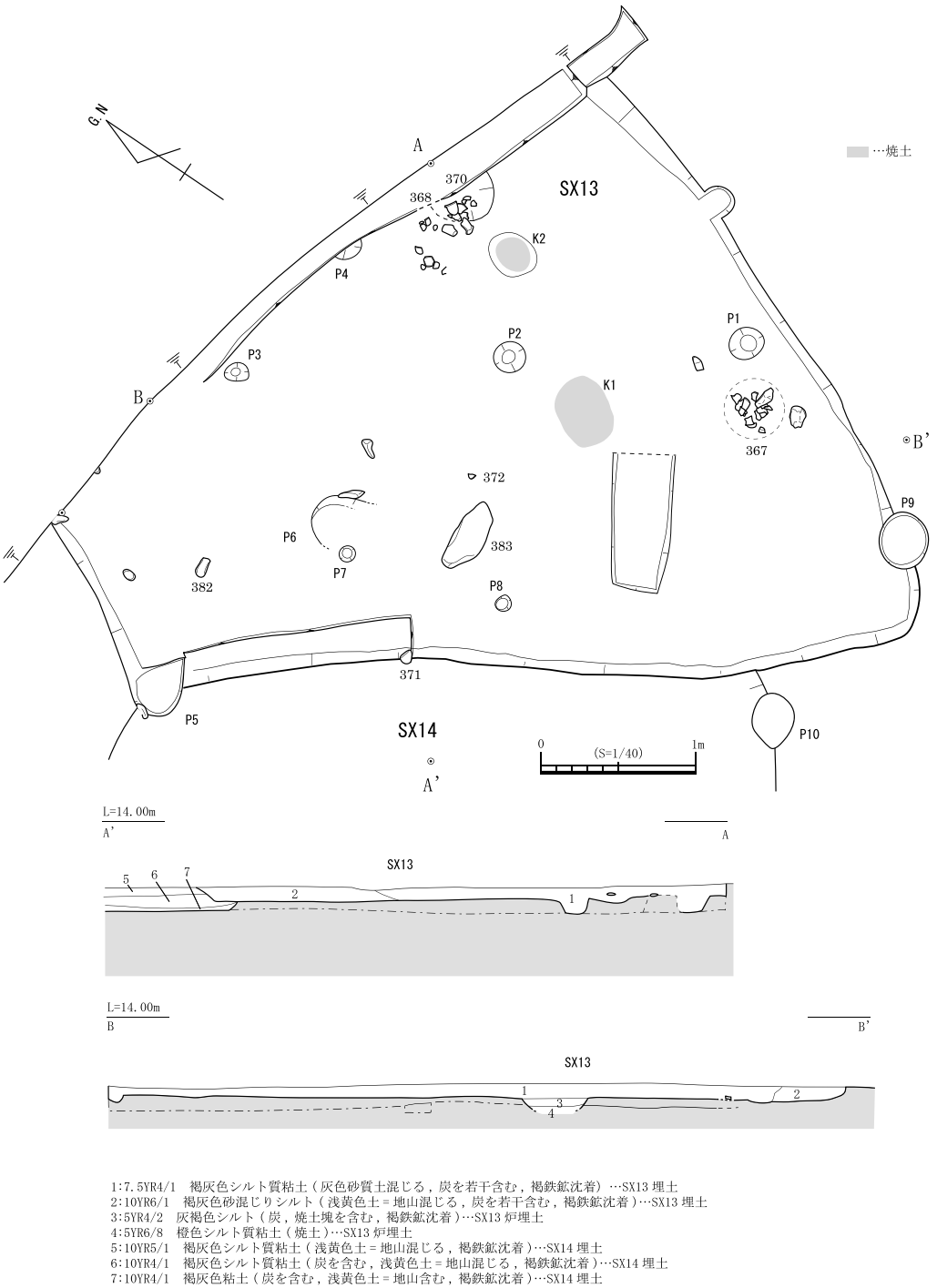
364 は微細剥離痕のある剥片である。縦長剥片の鋭利な側辺から端部にかけて，微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

SX13・14（第 53 図）

EN 区のほぼ中央に位置する。２つの隅丸方形の竪穴遺構が切り合ったものである。検出面の土が全体に汚れており，当初は切り合い関係が不明瞭であったため，一段下げて，切り合い関係の把握に努めた。その結果，SX14⇒SX13 という切り合い関係を把握した。以下に状況について詳説する。



第 53 図　SX13・14 平・断面図（S=1/60）



1:7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（灰色砂質土混じる，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）…SX13 埋土
2:10YR6/1　褐灰色砂混じりシルト（浅黄色土＝地山混じる，炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）…SX13 埋土
3:5YR4/2　灰褐色シルト（炭，焼土塊を含む，褐鉄鉱沈着）…SX13 炉埋土
4:5YR6/8　橙色シルト質粘土（焼土）…SX13 炉埋土
5:10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（浅黄色土＝地山混じる，褐鉄鉱沈着）…SX14 埋土
6:10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を含む，浅黄色土＝地山混じる，褐鉄鉱沈着）…SX14 埋土
7:10YR4/1　褐灰色粘土（炭を含む，浅黄色土＝地山含む，褐鉄鉱沈着）…SX14 埋土

第 54 図　SX13 平・断面図（S=1/40）

SX13（第 54 図）

長軸 4.75m，残存短軸 4 mのややいびつな隅丸方形の竪穴遺構である。一部は北側の調査区外へとのびる。

掘り方は検出状況では浅かったが，切り合い部分以外は明瞭で，炭を含む褐灰色シルト質粘土，褐灰色砂混シルトが堆積していた。

中央やや東よりに地床炉と考えられる長軸 45cmの隅丸方形を呈する赤く焼けた範囲が認められる。地床炉の北側に焼土を含むピット状の窪みも確認した。

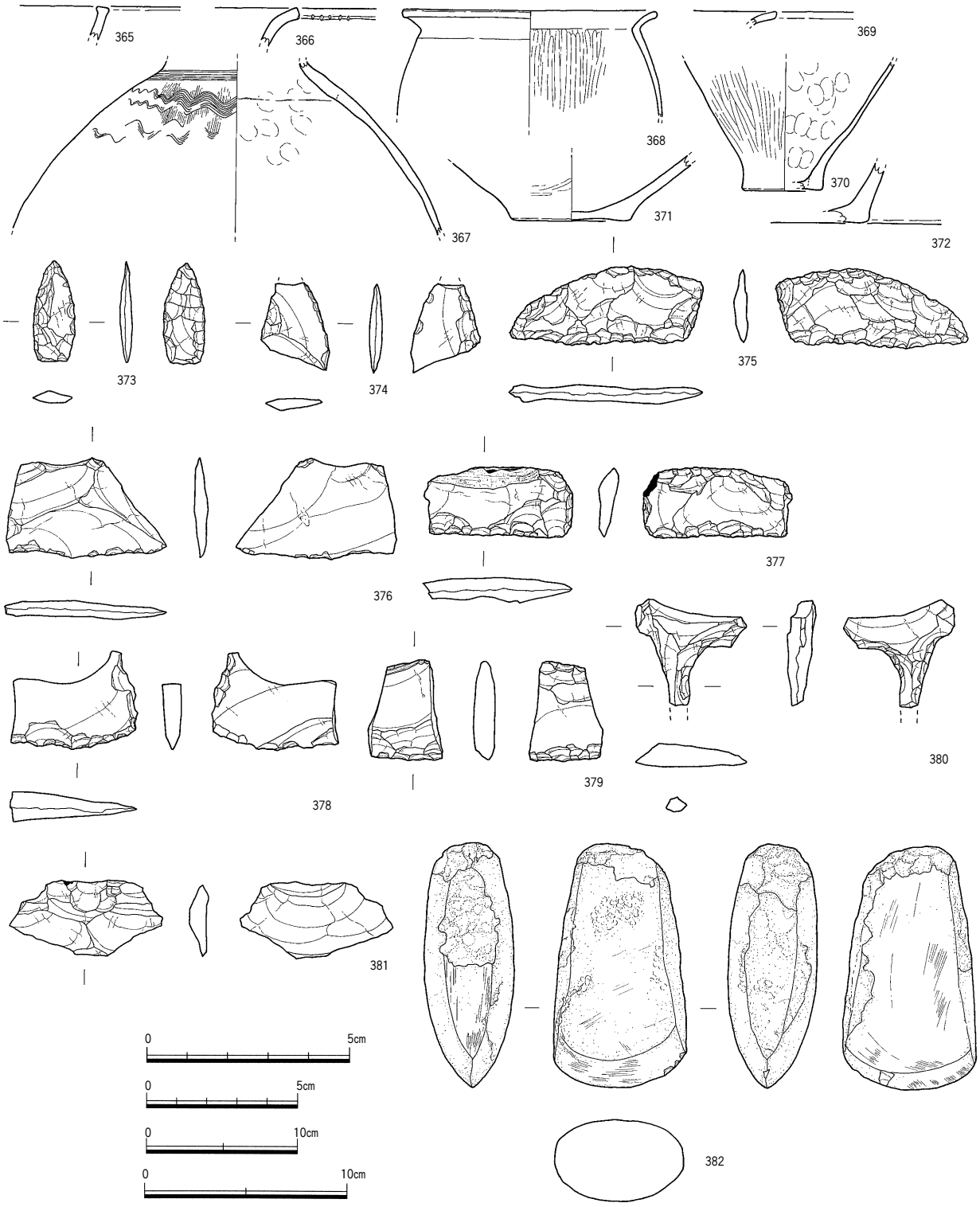
掘り方内に小さなピットを確認したが，規則的な配置は確認できず，本来的にSX13 に伴うものであるかは不明である。床面出土遺物は 367 ～ 368，370 ～ 372，382，383 である。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階と考えられる。

出土遺物（第 55 ～ 56 図）

365 ～ 372 が弥生土器で，373 ～ 383 が石製品である。

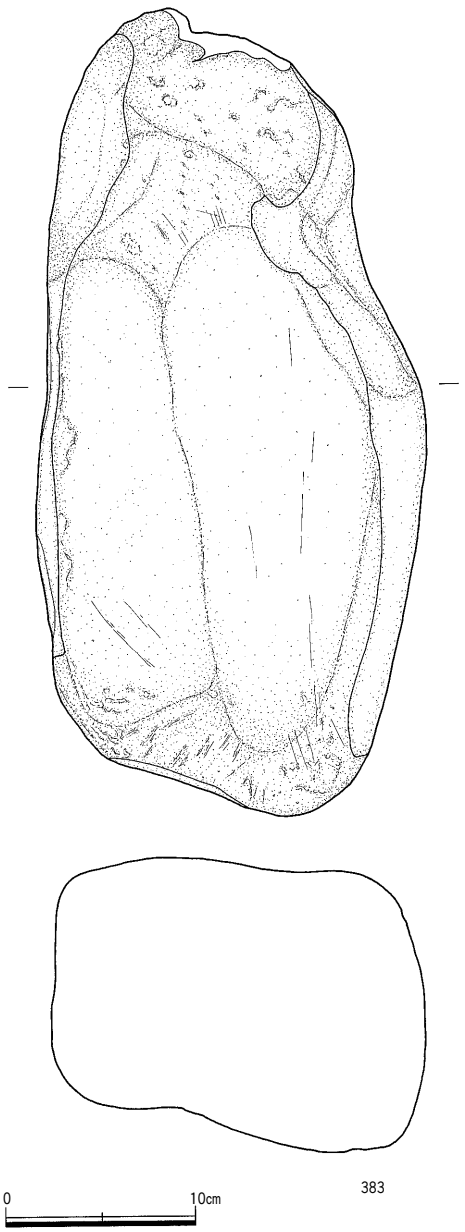
365 ～ 367 は壺形土器である。365 は壺 6 の口縁部で，



第 55 図　SX13 出土遺物①
（365～372：S=1/4，373,374,380,381：S=2/3，375～379：S=1/2，382：S=1/3）

口縁部付近はヨコナデ調整によって整形し，端部を内面側につまみ出す。366 は壺 1 と考えられる口縁部片で，端部に刺突文を施す。367 は壺 2 もしくは壺 3 の体部片と考えられる。外面は縦方向の刷毛目調整後，頸部付近に横方向の櫛描文，その下に 3 段の波状文を施す。内面には頸部成形時の粘土帯接合痕跡が認められる。また，それに伴う指押さえが施される。外面には，筋状黒斑が認められる。

368 ～ 369 は甕形土器である。368 は口唇部を丸くおさめるもの，369 はやや口唇部をヨコナデ調整によって



第 56 図　SX13 出土遺物②（S=1/4）

つまみ上げるものである。外面はナデ調整によって仕上げ，内面は縦方向の磨き調整によって平滑に仕上げる。

370 ～ 372 は底部片で，371 は壺の底部で，それ以外は甕の底部と考えられる。371 は磨滅が著しいが，横方向の磨き調整によって仕上げる。370 は縦方向の磨き調整によって仕上げ，内面には粘土帯接合に伴う指押さえが帯状に認められる。372 は器面磨滅のため，詳細は不明である。

土器の胎土および色調は 3 つに分類できる。

365，366，371，372 は白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。367 は黄白色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

それ以外は，褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土で，特に 368 は香東川下流域産土器（胎土 1 類）に類似する。

石器は石鏃，石鏃未製品，石小刀，スクレイパー，楔形石器，石錐，二次加工のある剥片，磨製石斧，砥石が出土している。

373 は凸基 I 式の石鏃である。背面側に極浅形 ～ 浅形細部調整を，腹面側に浅形 ～ 深形細部調整を施す。腹面側の切先は，丁寧な押圧剥離によって成形される。石材はサヌカイトである。

374 は切先と基部を折損しているため，全体の形状は不明であるが，粗い極浅形 ～ 浅形細部調整を部分的に行うことから，石鏃未製品と考えられる。石材はサヌカイトである。

375 は内刃側はほぼ直線的であるが，外刃側が弧を描く形態の石小刀である。外刃側には弱い摩滅が確認できる。石材はサヌカイトである。

376 ～ 378 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。376 は 2 側辺を折損しているため全体の形状は不明であるが，刃部には粗い両面調整と微細剥離痕が確認できる。377 は自然面を打面の横長剥片素材で，背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が認められる。378 は 2 側辺を折損するため，全体の形状は不明であるが，刃部と 1 側辺を両面調整し，摩滅が認められる。

379 は楔形石器である。両端を折損するため，全体の形状は不明であるが，上・下端部に潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

380 は頭部と錐部の境が明瞭で，石錐部が細長い形状を呈する石錐である。頭部と錐部の先端を折損する。錐部は極浅形細部調整によって成形する。石材はサヌカイトである。

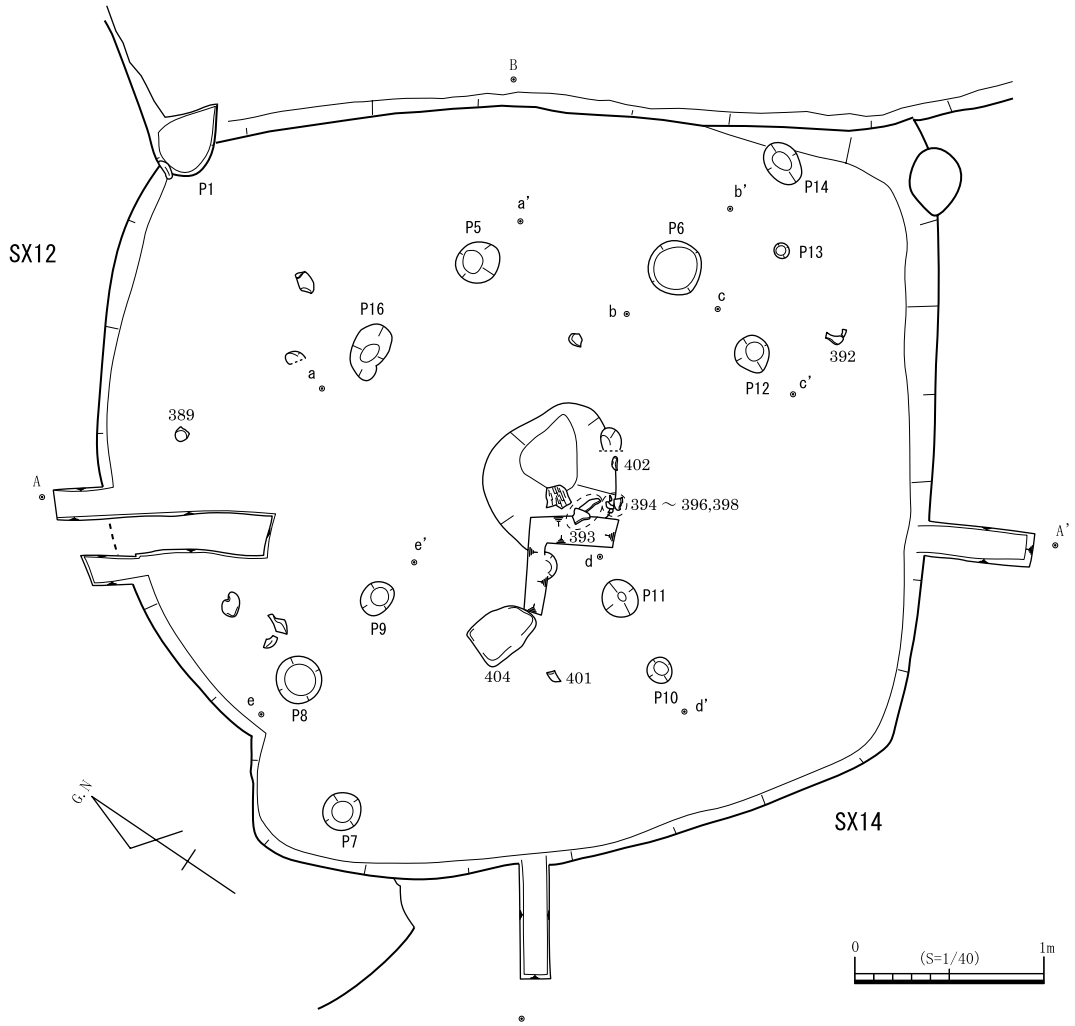
381 は二次加工のある剥片である。横長剥片の打面側に二次加工を施す。剥片の末端は弱い蝶番状を呈する。石材はサヌカイトである。

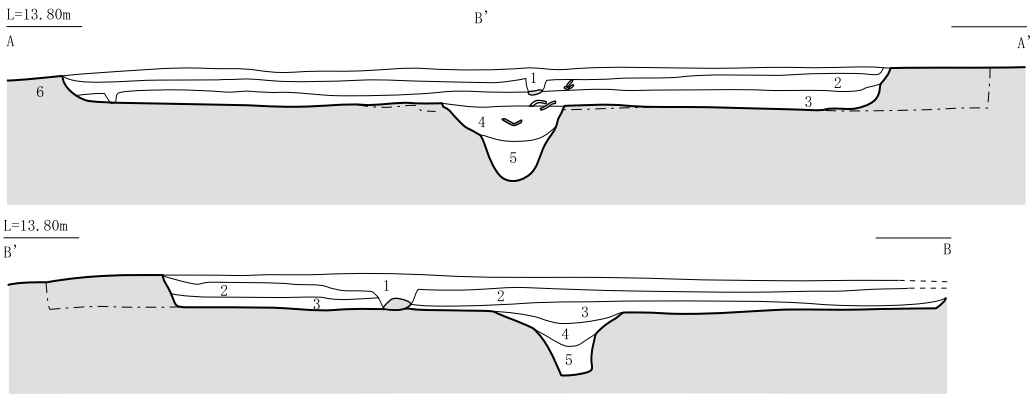
382 は磨製石斧である。基端部には敲打痕が確認でき，基部の体部の一部に研磨痕を切る敲打痕が確認できる。刃部は，一部に使用によると考えられる剥離痕がある。石材は凝灰岩である。

383 は砂岩製の砥石である。研面は表面と両側辺の 3 面が確認できる。

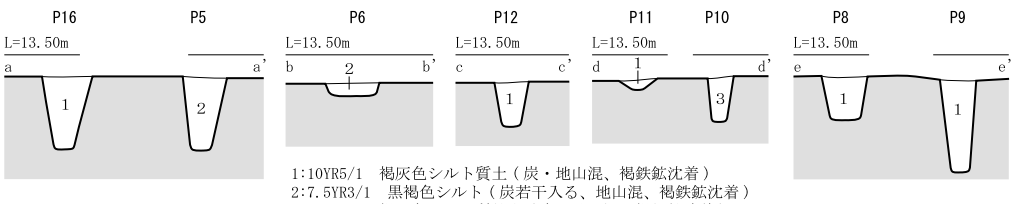
SX14（第 57 図）

EN 区中央部に位置する。長軸 4.3m，短軸 4 m でややいびつな隅丸方形を呈する竪穴遺構である。北側を



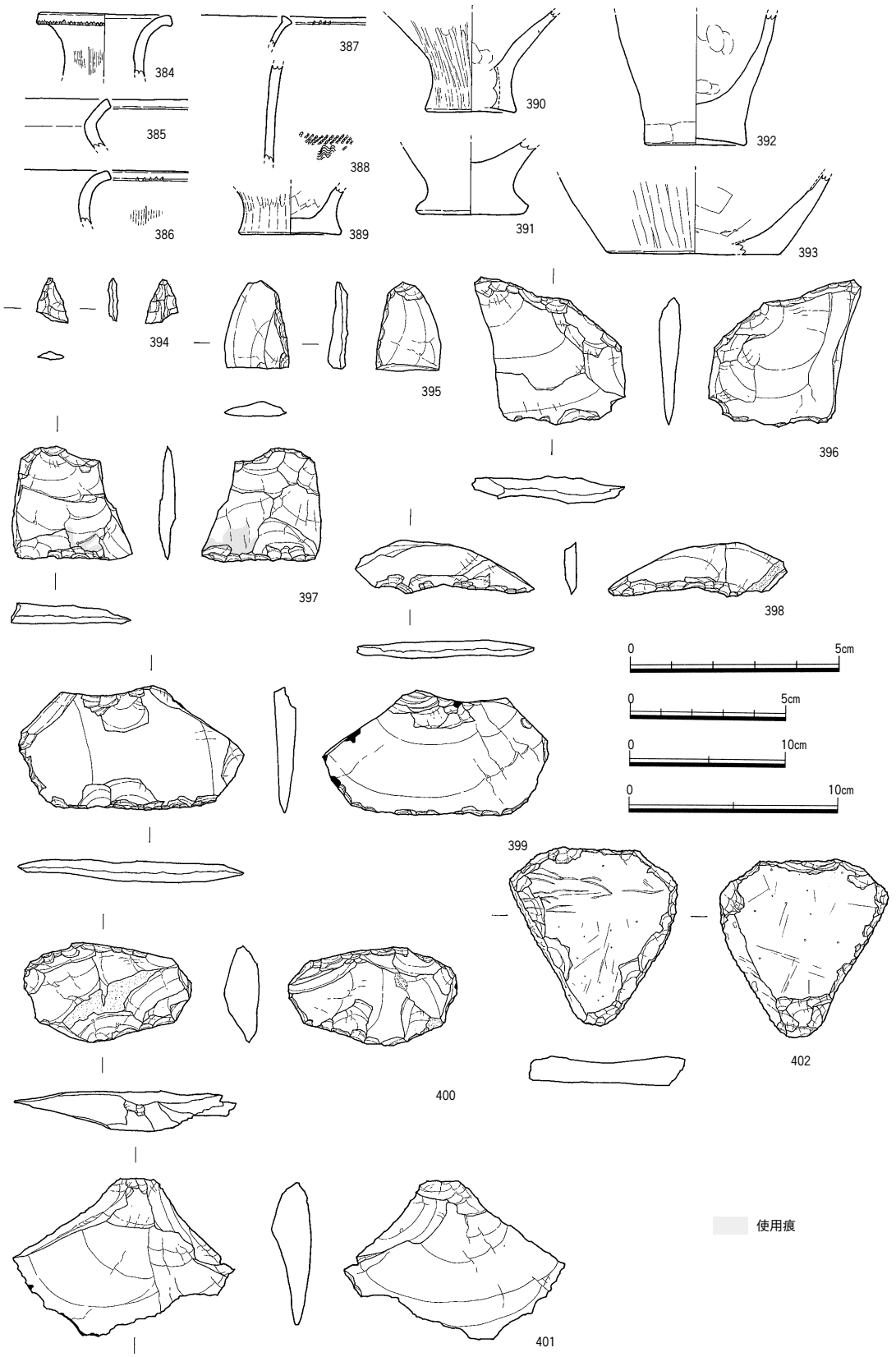


1:10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（浅黄色土＝地山混じる，褐鉄鉱沈着）
2:10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を含む，浅黄色土＝地山混じる，褐鉄鉱沈着）
3:10YR4/1　褐灰色粘土（炭を含む，浅黄色土＝地山含む，褐鉄鉱沈着）
4:10YR3/1　黒褐色シルト質粘土（炭を多く含む，浅黄色土＝地山を塊状に含む，褐鉄鉱沈着）
5:10YR2/1　黒褐色シルト質粘土（炭を多く含む，地山塊を多く含む，褐鉄鉱沈着）
6:7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）

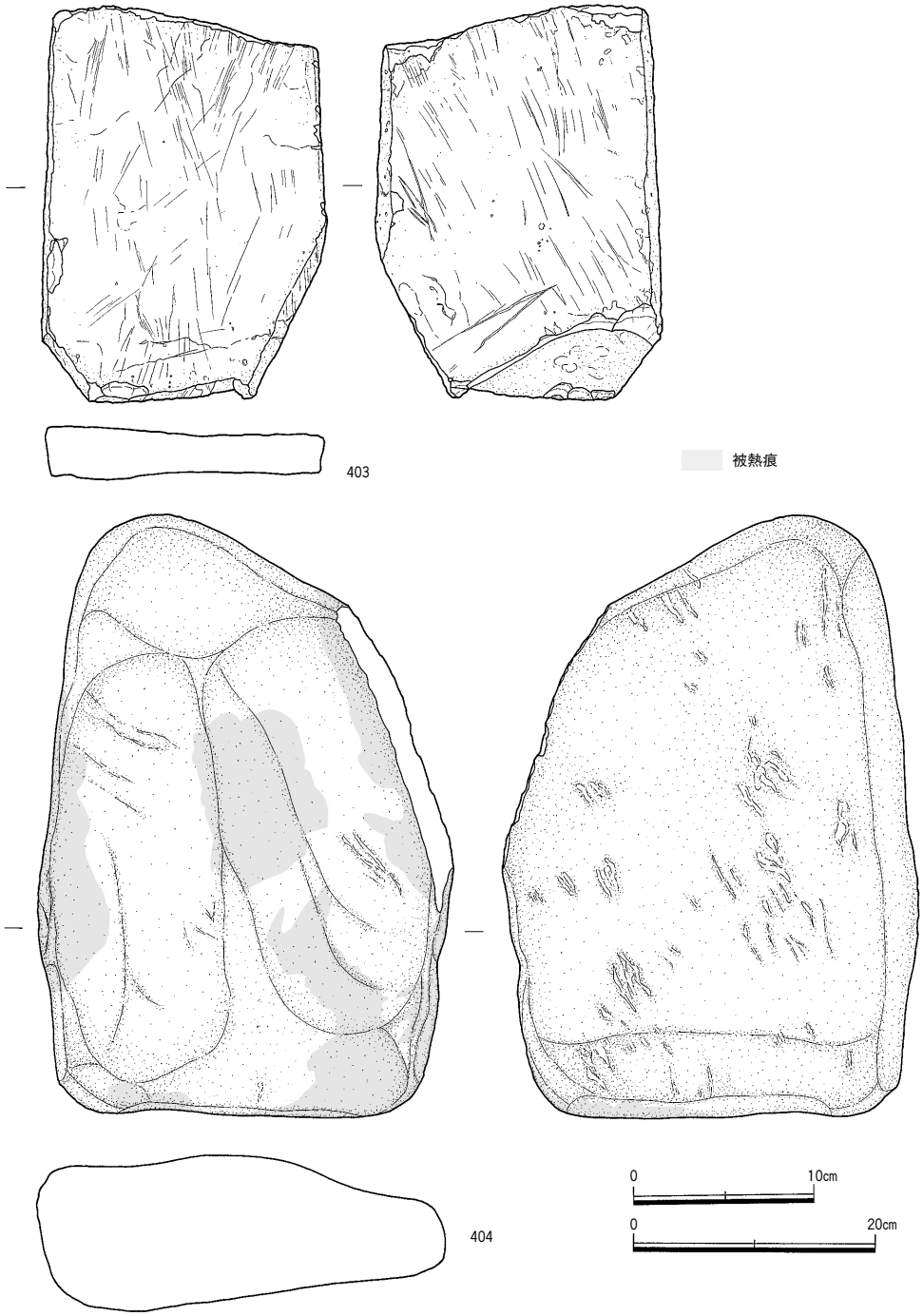


1:10YR5/1　褐灰色シルト質土（炭・地山混、褐鉄鉱沈着）
2:7.5YR3/1　黒褐色シルト（炭若干入る、地山混、褐鉄鉱沈着）
3:10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭・地山混、褐鉄鉱沈着）

第 57 図　SX14 平・断面図（S=1/40）



第 58 図　SX14 出土遺物①
（384～393：S=1/4，394,395：S=2/3，396～401：S=1/2，402：S=1/3）



第 59 図　SX14 出土遺物②（403：S=1/3，404：S=1/4）

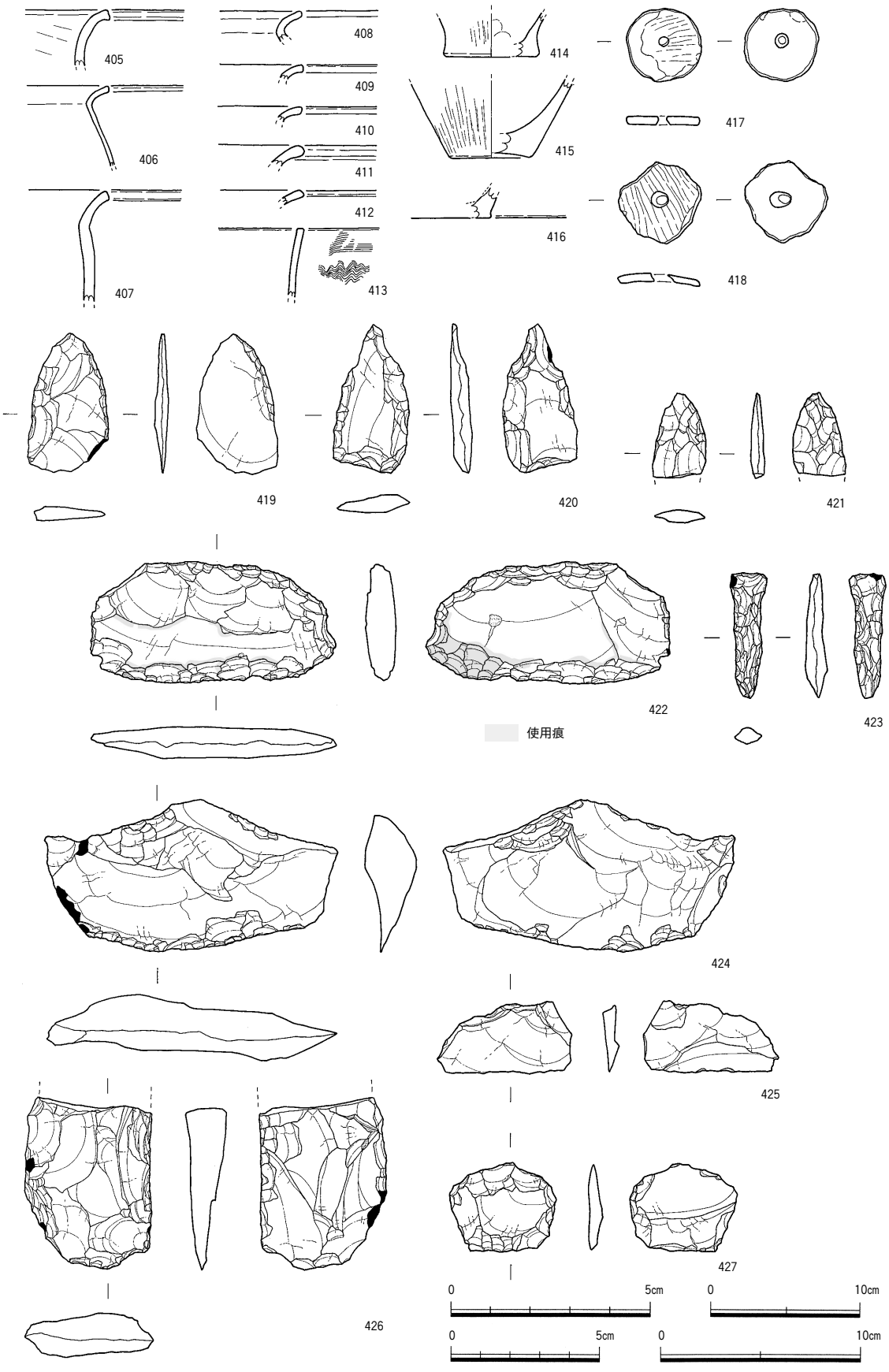
SX13 に切られる。掘り方は既述のとおり不明瞭で，特に切り合い関係は不明瞭であった。埋土は３層に区分でき，地山ブロックを含む褐灰色粘土が床面の直上に堆積しており，その上位に炭等を含むやや土質および色調の異なる褐灰色シルト質粘土が堆積している。

当遺構は他のものと異なり，明確な中央土坑を有する。中央土坑は大きく２層に分層でき，上位から黒褐色シルト質粘土，褐灰色シルト質粘土で，いずれも炭を含む。中央土坑近くには台石（404）が残されていた。支柱穴の配置が不明確であるが，P５，８，10，12，16 がその候補と考えられる。ただし，いずれも深度が浅い。床面出土遺物は 389，392 ～ 396，398，401，402，404 である。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式古段階と考えられる。

出土遺物（第 58 ～ 59 図）

384 ～ 393 が弥生土器で，394 ～ 404 が石製品であ



第 60 図　SX13・14 出土遺物
（405～416：S=1/4，417,418：S=1/3，419～421,423：S=2/3，422,424～427：S=1/2）

る。

384 ～ 387 が壺形土器である。384 と 386 は壺２である。口唇部下端に刻み目状の刺突文を施す。外面は刷毛目調整後，口縁部をヨコナデ調整によって整形する。内面はナデ調整である。

385 は体部が樽状を呈する壺の口縁部で，「く」の字状を呈する。内外面ともにヨコナデ調整によって仕上げる。

387 は壺６である。やや口唇部を内側に拡張し，口唇部下端刻み目状の刺突文を施す。388 は体部片で，刺突文と波状文を施す。

389 ～ 393 は底部で，ヴァリエーションに富む。389 は底部３aで，底部付近は板状工具によるナデ調整で，その後，縦方向の磨き調整を施す。内面はナデ調整である。390 はやや上げ底で，底部周辺が窄まり，その後，「ハ」の字に開く。外面は縦方向の磨き調整で，内面には成形時の指押さえが認められる。391 はつまみ状を呈する。392 は上げ底で，身の細い形態を示す。外面は板状工具による横方向のナデ調整よって仕上げる。内面には帯状の指押さえが残る。393 は大きく「ハ」の字に開く形態で，外面は縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面は板状工具によるナデ調整によって仕上げる。

土器の胎土および色調は５種類に分類できる。

384 は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

385 は黄白色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

387 は橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

388 ～ 390 は褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土で，特に，389 は角閃石を多量に含み，香東川下流域産土器（胎土１類）に類似する。

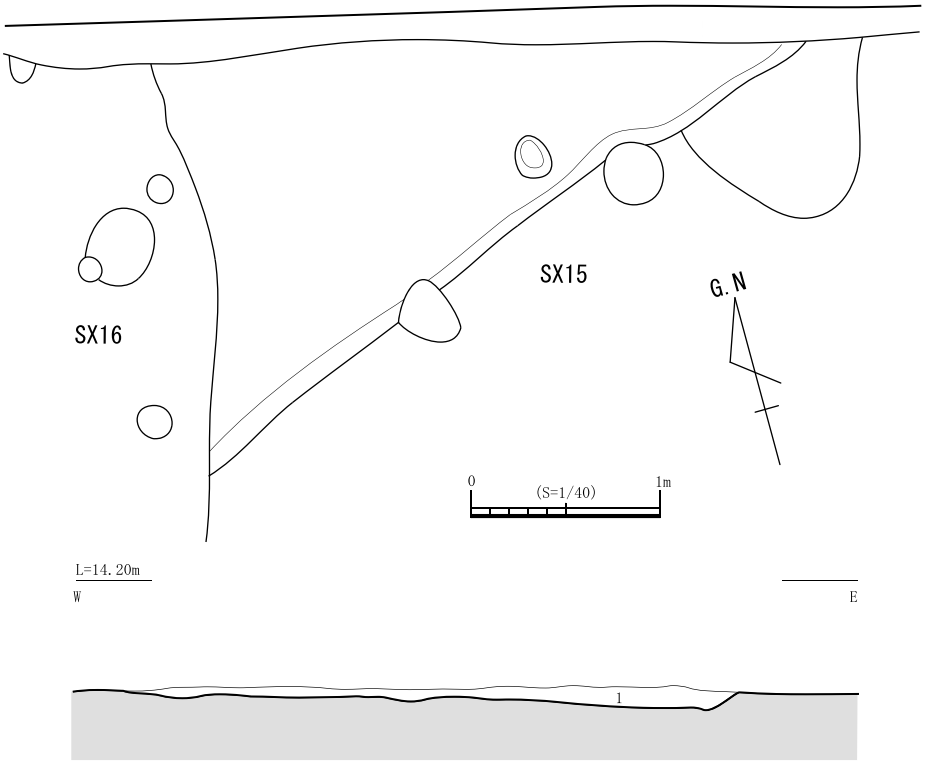
それ以外は白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。一部煤等で分かりづらいものもある。

石製品は石鏃，石鏃未製品，スクレイパー，楔形石器，微細剥離痕のある剥片，台石，器種不明石器が出土している。

394 は石鏃で，切先のみであるが丁寧な細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

395 は石鏃未製品である。横長剥片素材で，打面側に極浅形の細部調整を施す。剥片の末端はやや蝶番状を呈する。石材はサヌカイトである。

396 ～ 399 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。396 は横長剥片素材で，１側辺を折損するため，全体の形状は不明である。背部には背潰加工が，刃部は明瞭な調整を施さないが，微細剥離痕が確認できる。397 は両側辺を折損するため，全体の形状は不明で



第 61 図　SX15 平・断面図（S=1/40）

あるが，背部には背潰加工を，刃部は背面側の一部と腹面側に調整を施し，微細剥離痕が確認できる。背腹両面の刃部付近に摩滅痕が認められる。398 は大きく折損しているため，全体の形状は不明であるが，両面調整された刃部が確認できることから，スクレイパーとした。

399 は横長剥片を素材とし,背部は折損面と折損面に調整を施している。刃部は両面調整され，微細剥離痕が確認できる。

400 は楔形石器である。上・下端部に潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

401 は微細剥離痕のある剥片である。打面調整を行ったのち，剥片を剥離している。剥片の鋭利な端部に微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

402 は自然石と考えられる板状の安山岩の一部に剥離面が確認できる。403 は板状の安山岩で，一部に線状痕が確認できる。

404 は砂岩製の台石で，線状の敲打痕と被熱の痕跡が確認できる。

SX13・14 検出時の出土遺物（第 60 図）

405 ～ 416 が弥生土器，417 ～ 418 が土製品，419 ～ 427 がサヌカイト製の石製品である。

405 は壺形土器で，壺 1 である。口縁部端部をやや下側に拡張する。外面はナデ調整によって仕上げ，内面は板ナデによって仕上げる。

406 ～ 412 は甕形土器である。406，408 ～ 412 は「く」の字を呈し，407 は如意形を呈する口縁部である。口縁部はヨコナデ調整によって，前者は口唇部を丸くおさめるもの（408，411，412）と平坦におさめるもの（406，409，410）に分類できる。小片のため，調整等については不明である。

413 は甕 2 で，バケツ型を呈するものである。外面は口縁部下位から櫛描きによる直線文，波状文を施す。内面はナデ調整である。

414 ～ 416 は底部片である。414 が底部 3 a，415 が底部 2，416 が底部 3 bと考えられる。いずれも外面は縦方向の磨き調整で，内面はナデ調整によって仕上げる。

417 ～ 418 は土製品で，紡錘車である。いずれも土器片の転用品で，上面に磨き調整が認められる。焼成後穿孔で，上下から行っている。

土器等の胎土および色調は 4 つに分類できる。

405，407，415 は白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

411，412 は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

416，418 は橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

それ以外のものは褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。

石製品は石鏃未製品，石鏃，打製石包丁，石錐，スクレイパー，微細剥離痕のある剥片，打製石斧，二次加工のある剥片が出土している。

419，420 は石鏃未製品で，石材はすべてサヌカイトである。419 は横長剥片の背面側の 2 箇所に浅形と極浅形細部調整を，腹面側の 1 箇所に極浅形細部調整を施す。切先と基部は未調整である。420 は背腹両面に粗い浅形細部調整を施すが，切先の調整時に先端部が薄くなりすぎたため，作成を中止したと考えられる。

421 は石鏃である。両面に深形細部調整を施すが，基部は折損している。石材はサヌカイトである。

422 は抉りのない打製石包丁である。大型の横長剥片素材で，背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が確認できる。背腹両面の体部から刃部にかけて使用痕が認められる。石材はサヌカイトである。

423 は頭部と錐部の境がなく，ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態を呈する石錐である。両面に丁寧な浅形 ～ 深形細部調整を施す。錐部先端には摩滅は確認できない。石材はサヌカイトである。

424 は大型の横長剥片素材のスクレイパーである。素材である剥片は，バルブやバルバスカーが発達していることから，石の目に逆らって剥片を剥離したと考えられる。刃部は背面側に丁寧な細部調整を，腹面側には一部に細部調整を施し，摩滅が確認できる。石材はサヌカイトである。

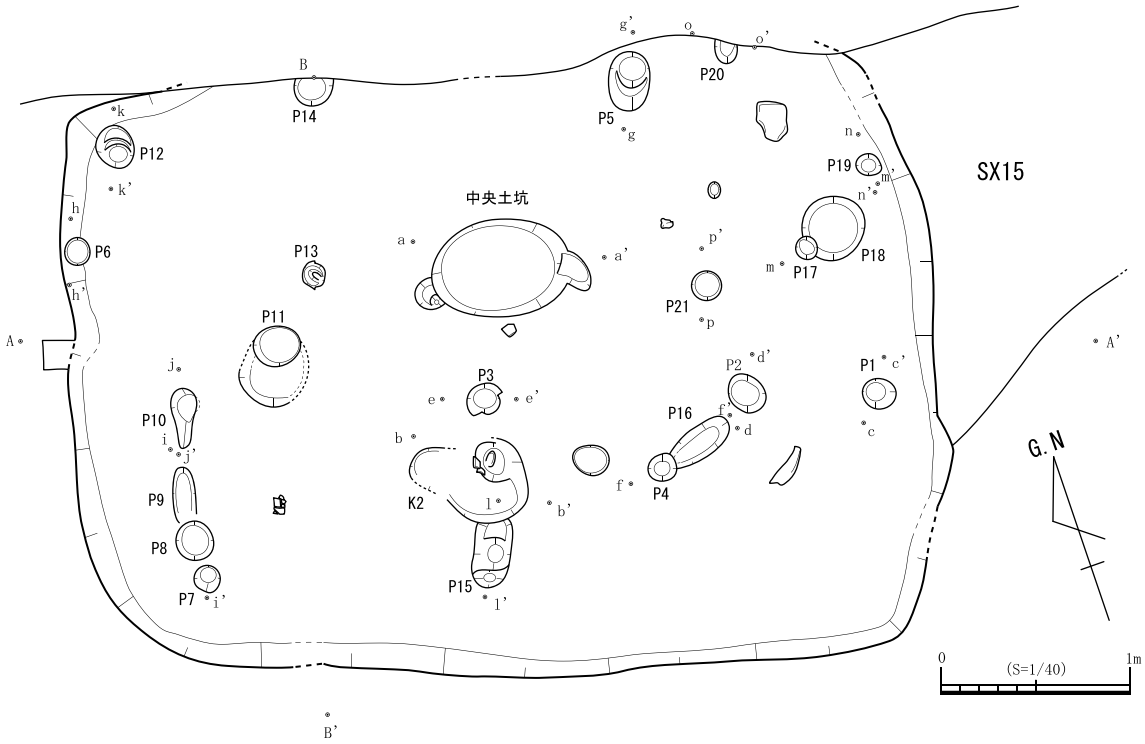
425 は微細剥離痕のある剥片である。横長剥片素材で，剥片の鋭利な端部に微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

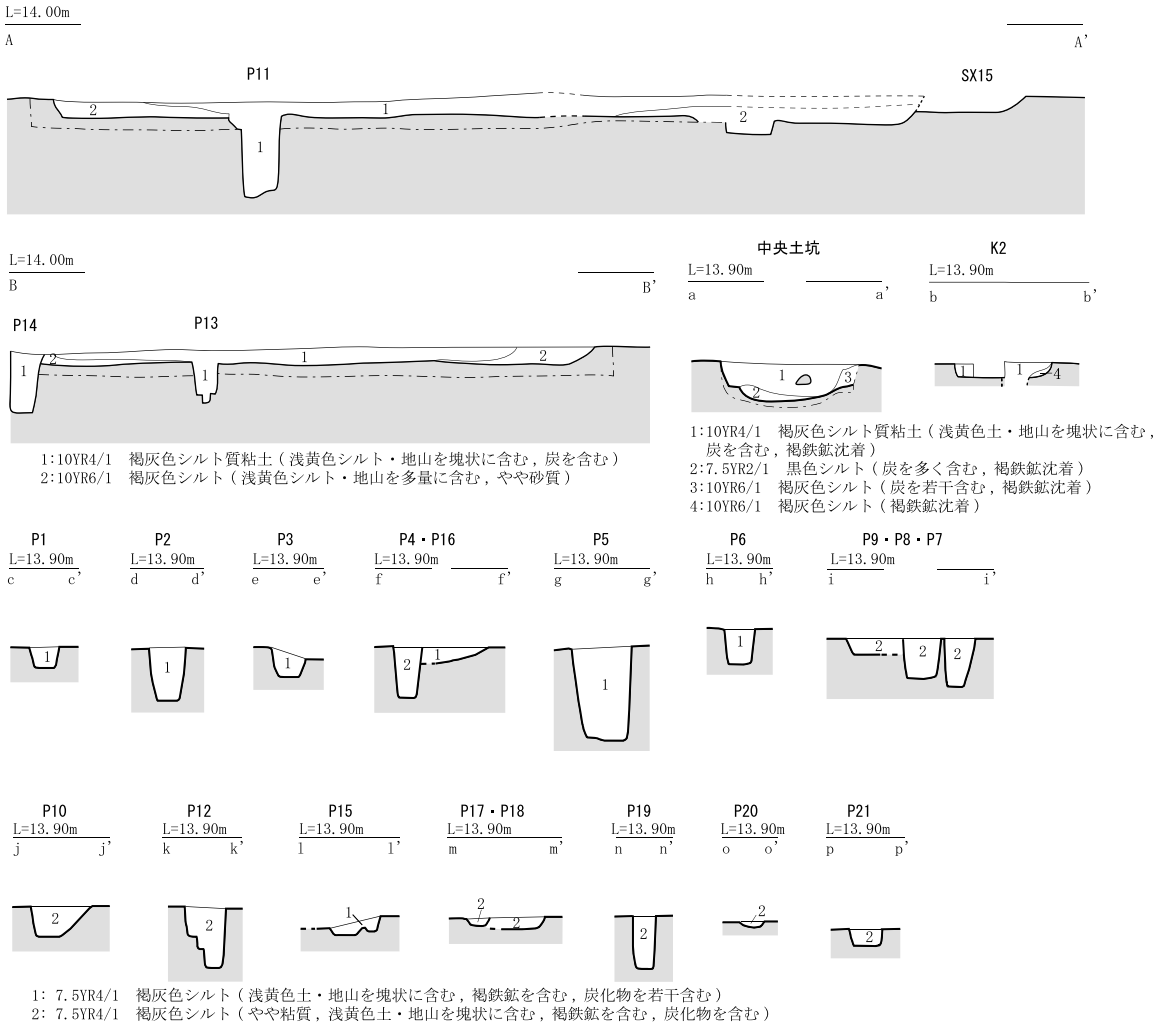
426 は打製石斧と考えられる。両面調整を施し，両側辺に顕著な潰れが確認できる。使用痕は確認できない。石材はサヌカイトである。

427 は二次加工のある剥片である。背面側の全周囲に浅形 ～ 深形細部調整が認められるが，調整の意図は不明である。石材はサヌカイトである。

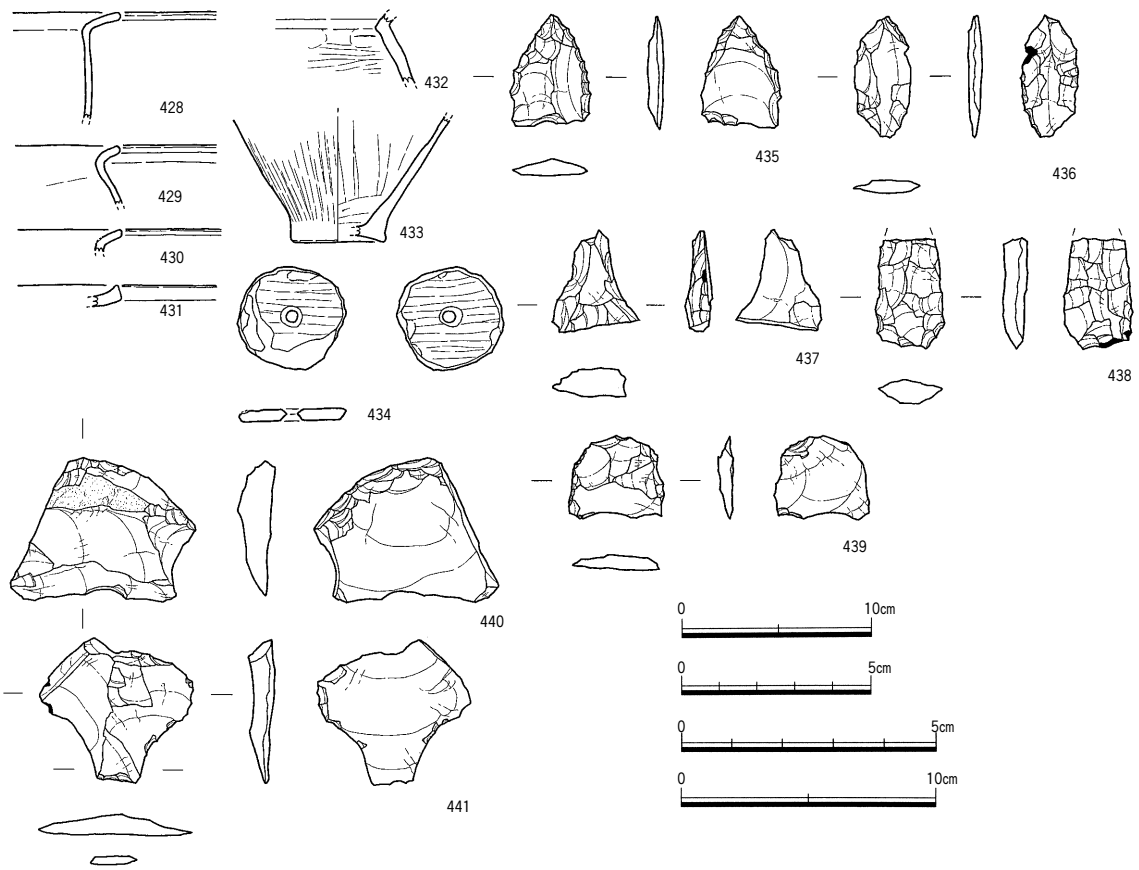
SX15（第 61 図）

EN 区の中央部やや東よりに位置する。西側をSX16に切られ，北側は調査区外へとのびるため，規模は不明である。他の竪穴建物と同様と考えられるが，地床炉な





第 62 図　SX16 平・断面図（S=1/40）



第 63 図　SX16 出土遺物
（428～433：S=1/4，434：S=1/3，435～438：S=2/3，439～441：S=1/2）

どは確認できなかった。掘り方近くにピットを 1 基確認しているが，SX15 に伴うものであるかは不明である。

埋土は褐灰色シルトで炭および地山ブロックを含む。

出土遺物からは時期を限定することはできないが，切り合い関係からSX16 より古い。

SX16（第 62 図）

EN 区の中央部やや東側に位置する。SX15 を切っている。北側の一部が調査区外へとのびる。長軸 4.6m，短軸 3.2mの隅丸方形の竪穴遺構である。

掘り方は明瞭で，埋土は 2 つに分層でき，上層は褐灰色シルト粘土で炭を含み，下層は褐灰色シルトで地山ブロックを多量に含む。

SX14 同様に中央土坑をもつタイプである。中央土坑は灰の掻きだし痕跡が土坑の東西に認められる。埋土は 3 層に分層できるが，基本的には褐灰色シルト質粘土で炭を含む土である。

掘り方内には複数ピットが確認できるが，この中で，上屋構造を推定する支柱穴はP 4 ・ 5 ・11・12・14・19 と考えられ，ややいびつであるが，六角形状に配置していると考えられる。埋土は基本的に褐灰色シルトで，地山ブロックおよび炭を含む。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階 ～ Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 63 図）

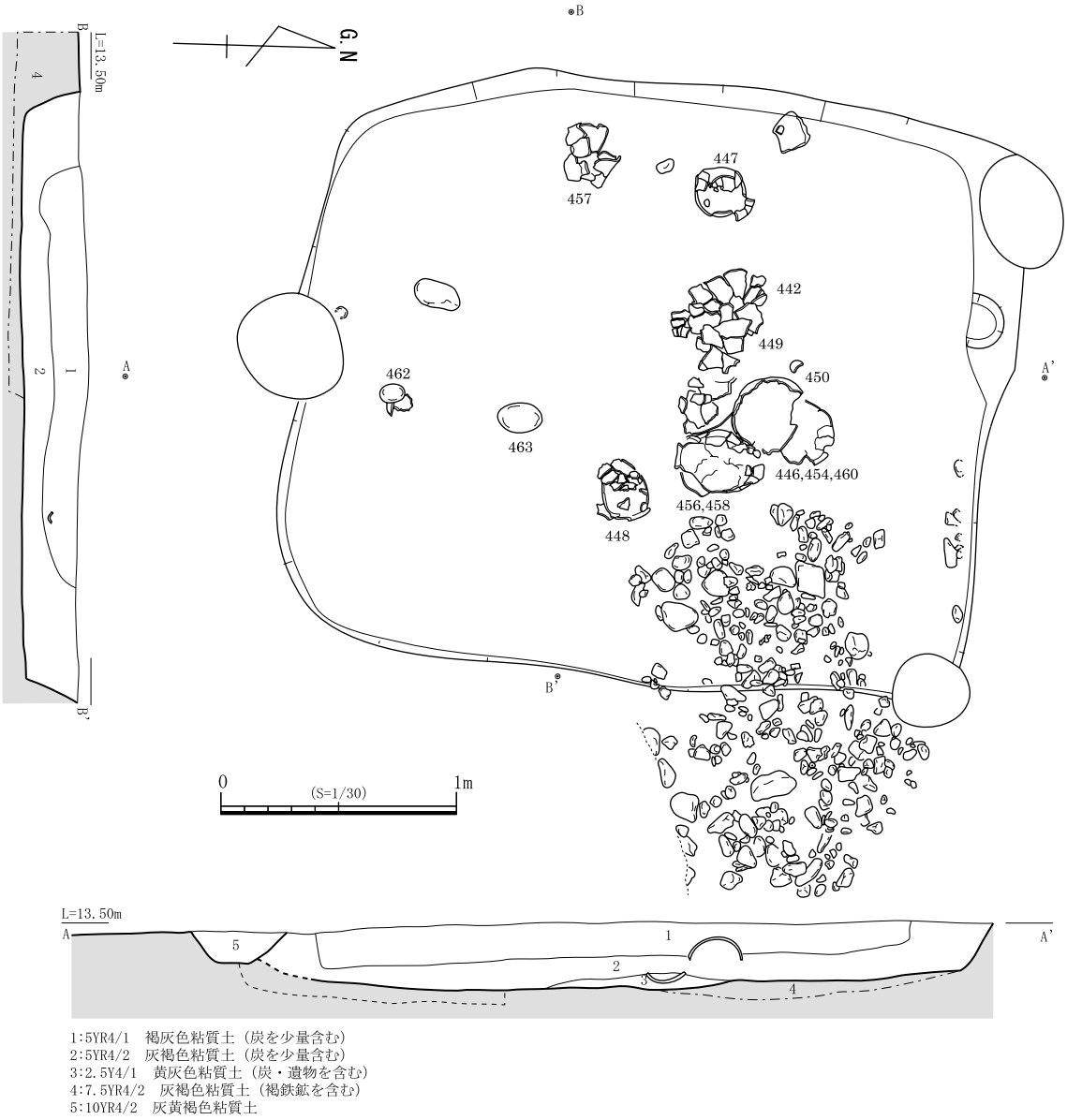
428 ～ 433 は弥生土器，434 は土製品，435 ～ 441 はサヌカイト製石製品である。なお，435 はSX15・16 の検出時出土品である。

428 ～ 431 は甕形土器の口縁部片で，ヴァリエーションに富む。428 ～ 430 は口唇部を丸くおさめるもので，431 はややつまみ上げる。

432 は肩部の破片で，外面はナデ調整で，内面は横方向の磨き調整によって仕上げる。

433 は底部 2 で，底部付近はナデ調整によって仕上げるが，それ以上は縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面は縦方向に板状工具によってナデ調整を施した後，円を描くように底部周辺をナデ調整によって仕上げる。

434 は紡錘車で，土器片の転用品である。内外面ともに磨き調整が認められる。破面を比較的丁寧に整形し，



第 64 図　SX17 平・断面図（S=1/30）

円形にしている。焼成後穿孔で，上下面から行う。

土器等の胎土および色調は大きく２つに分類できる。431 は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土で，それ以外のものは褐灰色もしくは明褐色で，石英，長石，角閃石，雲母を含むものである。

石製品は石鏃，石鏃未製品，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片が出土している。

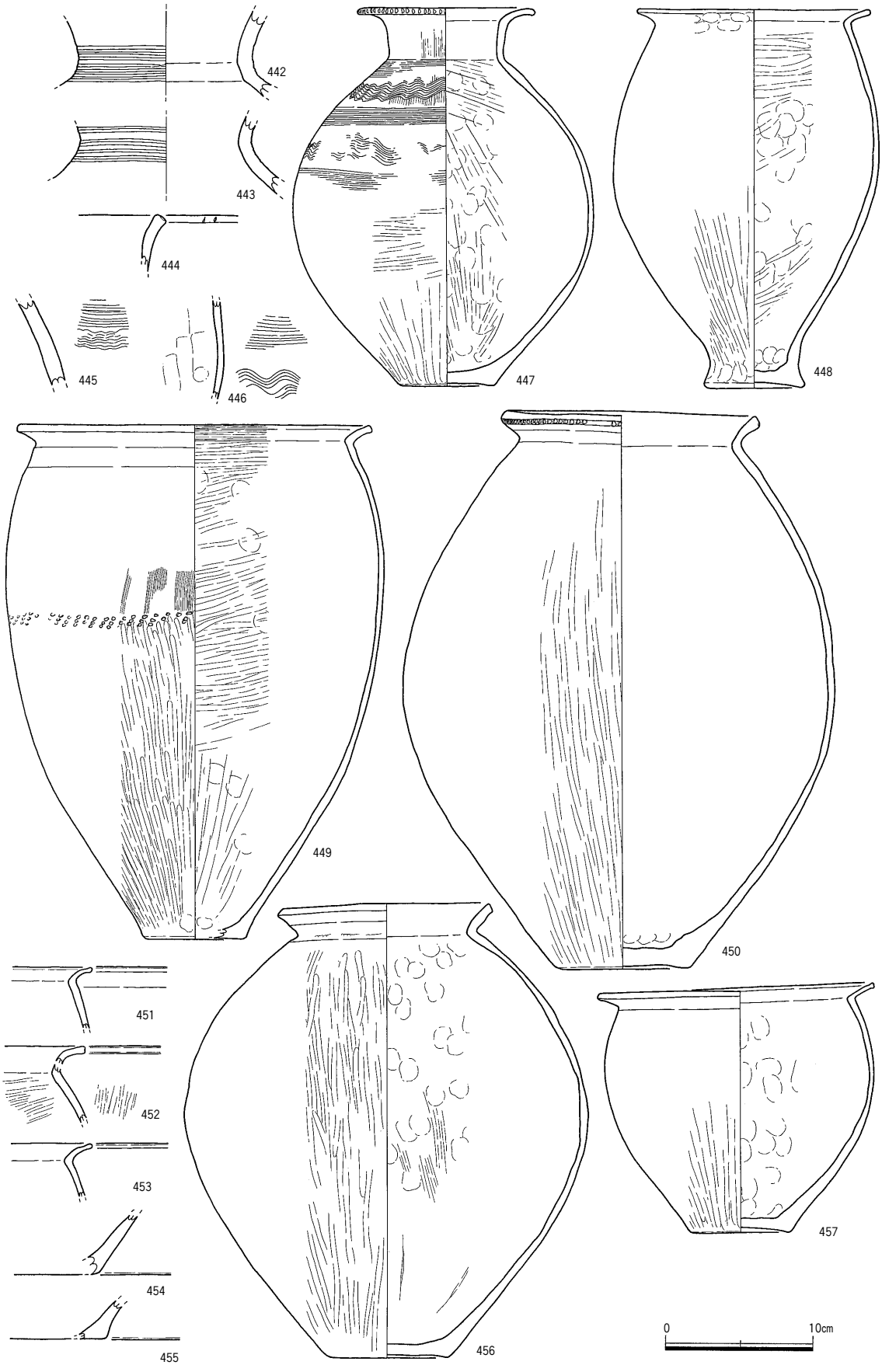
435 は平基式の石鏃である。調整は腹面側から背面側の順に極浅 ～ 浅形細部調整を施し，側縁は鋸歯状を呈する。石材はサヌカイトである。

436，438 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。436 は凸基Ⅱ式の石鏃で，背面側から腹面側の順に極浅 ～ 浅形細部調整を施す。基部は明瞭に成形されていない。438 は凸基Ⅰ式の石鏃で，背腹両面交互に深形細部調整を施す。切先を折損する。

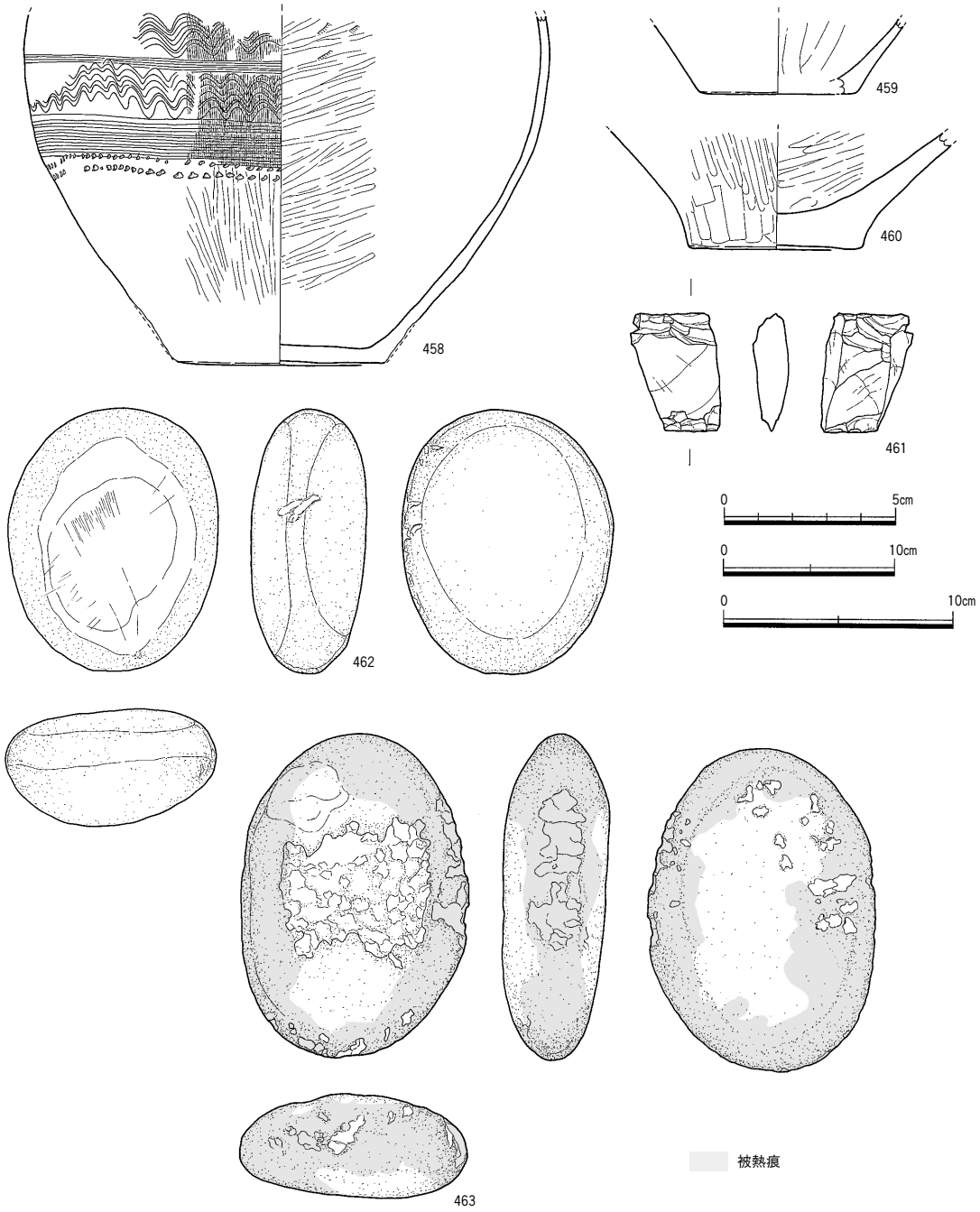
437 は石鏃未製品である。背面側に浅形細部調整を施すが，腹面側はほぼ未調整である。切先と基部を折損する。石材はサヌカイトである。

439，441 は微細剥離痕のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。439 は背面側の左側辺に微細剥離痕が確認できる。441 は剥片の鋭利な両側辺に微細剥離痕が確認できる。

440 は二次加工のある剥片である。両側辺を折損するため，全体の形状は不明である。剥片の打面側に，明瞭



第 65 図　SX17 出土遺物①（S=1/4）



第 66 図　SX17 出土遺物②
（458～460,463：S=1/4，461：S=1/2，462：S=1/3）

な潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

SX17（第 64 図）

ES 区の中央部やや東側に位置する。長軸 2.92m，短軸 2.52mの隅丸方形の竪穴遺構である。

検出時は掘り方が不明瞭で，一部断ち割りで確認しながら，掘り方の検出を実施した。埋土は３層に分層できるが，基本的には２層で，上層から褐灰色粘質土，灰褐色粘質土で，いずれも炭を含む。土層断面の状況から，第２層が埋没した後，掘り返したような状況を想定したが，土器の出土は第１ ～ ２層に及ぶこと，土器の上半が割れていることから，土器廃棄／遺棄後ある程度埋没した後，掘り返した可能性が考えられる。ただし，その理由ついては不明である。

地床炉や支柱穴は全く確認できなかった。完存する土器が中央部付近からまとまって出土しており，遺棄したような状況である。重なり状況から 458・465⇒446・

450・454・460⇒456という順序が判明している。448は若干出土レベルが高い。遺構内から遺構外にかけて分布する円礫は掘り方に影響を受けないこと，レベルも土器より低い位置にあることから，当初の遺構の掘り下げ後に流れ込んだもの，もしくは地山に含まれていた可能性が想定される。そのため，土器の廃棄／遺棄よりも前と判断した。

出土遺物から時期は中期前葉，信里編年Ⅱ-1様式古段階と考えられる。

出土遺物（第65～66図）

442～460が弥生土器で，461～463が石製品である。

442～447は壺形土器である。442～444は前期末から中期初頭の頸部に櫛描きで直線文を施すもので，口縁部が開く。444については破片のため不明確であるが，口唇部端部に刺突文を施す。

445～446は体部破片で，櫛描きによる直線文および波状文が上下に渡って施される。内面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。447は壺1で，頸部がやや外側に開きながら直立した後，外へと開く広口壺である。口唇部に刺突文を施す。体部ほぼ中央が最大径となる。外面は刷毛目調整後，体部下半をやや粗い縦方向の磨き調整を施し，体部最大径周辺を横方向の磨き調整で仕上げる。内面は粗い刷毛目調整によって仕上げる。体部には成形時の指押さえが認められる。外面には焼成剥離痕跡が認められる。

448～453，456は甕形土器である。448，449ともに口縁部を「く」の字に折り曲げるものであるが，体部最大径の位置が448は体部中央にあり，449はやや上半にあるため，見た目の形状が異なる。また，448の底部は上げ底で，やや窄まりながら立ち上がった後，「ハ」の字状に開くが，449は底部から直線的に「ハ」の字に開く。448の外面は上半部分は不明であるが，体部下半は縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面は横方向の磨き調整によって仕上げる。煤，焦げが対応して認められる。また，成形時の指押さえが底部周辺，体部に認められる。449は縦方向の刷毛目調整よって整形した後，体部下半を縦方向の磨き調整で仕上げる。体部最大径に3点を一つの単位とする刺突文を施す。内面は口縁部周辺を横方向の刷毛目調整を施す。体部下半は縦方向の磨き調整，体部上半は横方向の磨き調整によって仕上げる。

450，456は甕4で，口縁部が「く」の字を呈し，体部最大径が体部中央になる卵形を呈するものである。450は口唇部に刺突文を施す。外面は縦方向の磨き調整によって仕上げ，内面はナデ調整もしくは刷毛目調整によって仕上げる。456は成形時の指押さえが多数認められる。

451～453は口縁部片で，いずれも「く」の字を呈する。452は内外面とも刷毛目調整によって仕上げる。内面の一部に朱塗りのような痕跡が一部に認められる。

454，455，458～460は底部2と3である。いずれも直線的に「ハ」の字に開く形態のものである。458は壺形土器の可能性が考えられる。体部最大径に櫛描きによる波状文，直線文，波状文，直線文，2段の刺突文が施される。外面は刷毛目調整，体部下半は縦方向の磨き調整，内面は横方向の磨き調整である。底部周辺は面的に剥落しており，焼成剥離痕跡の可能性がある。2次的な被熱によるものと考えられる外面の被熱痕跡にと内面の黒斑の範囲が対応する。459は外面は不明であるが，内面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。460の外面は板状工具によるナデ調整後，縦方向の磨き調整を施す。内面は斜方向の磨き調整を施す。

457は鉢形土器で，鉢1の類と考えられる。口縁部は鋭く「く」の字に曲がり，口唇部はヨコナデ調整によって平坦に整形する。体部外面は底部から縦方向に磨き調整を施す。内面は粘土帯接合に伴う成形時の指押さえが一定間隔に帯状に認められる。

土器等の胎土および色調は一部変色しているものもあるが，4種類に分類できる。

442，443，445，460は白色もしくは黄白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

444，447，450，452，458は明橙褐色もしくは明淡橙色を呈し，石英，長石，黒色砂粒等を含む胎土である。一部変色するものもある。

453は変色しており，本来の色調は不明であるが，453と459石英，長石を多量に含む胎土を含む。

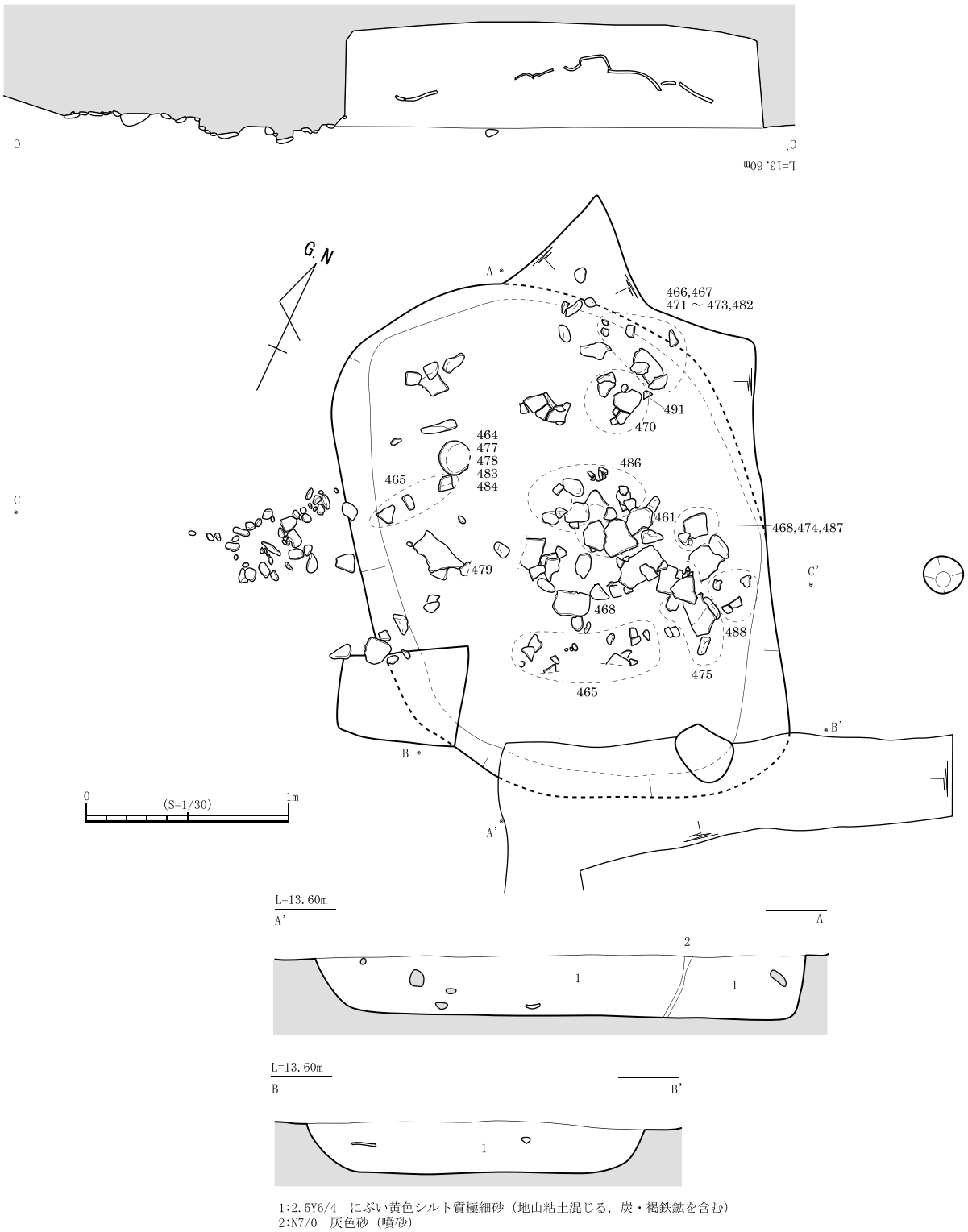
その他は，褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。

石製品は楔形石器，摺り石，台石・敲き石が出土している。

461は楔形石器である。両側辺を折損しているため，全体の形状は不明であるが，上・下端部に潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

462は砂岩製の摺り石である。表面に使用痕が確認できる。

463は砂岩製の台石・敲き石である。表面に敲打痕が，側面側に線状の敲打痕が認められ，被熱の痕跡が確認できる。



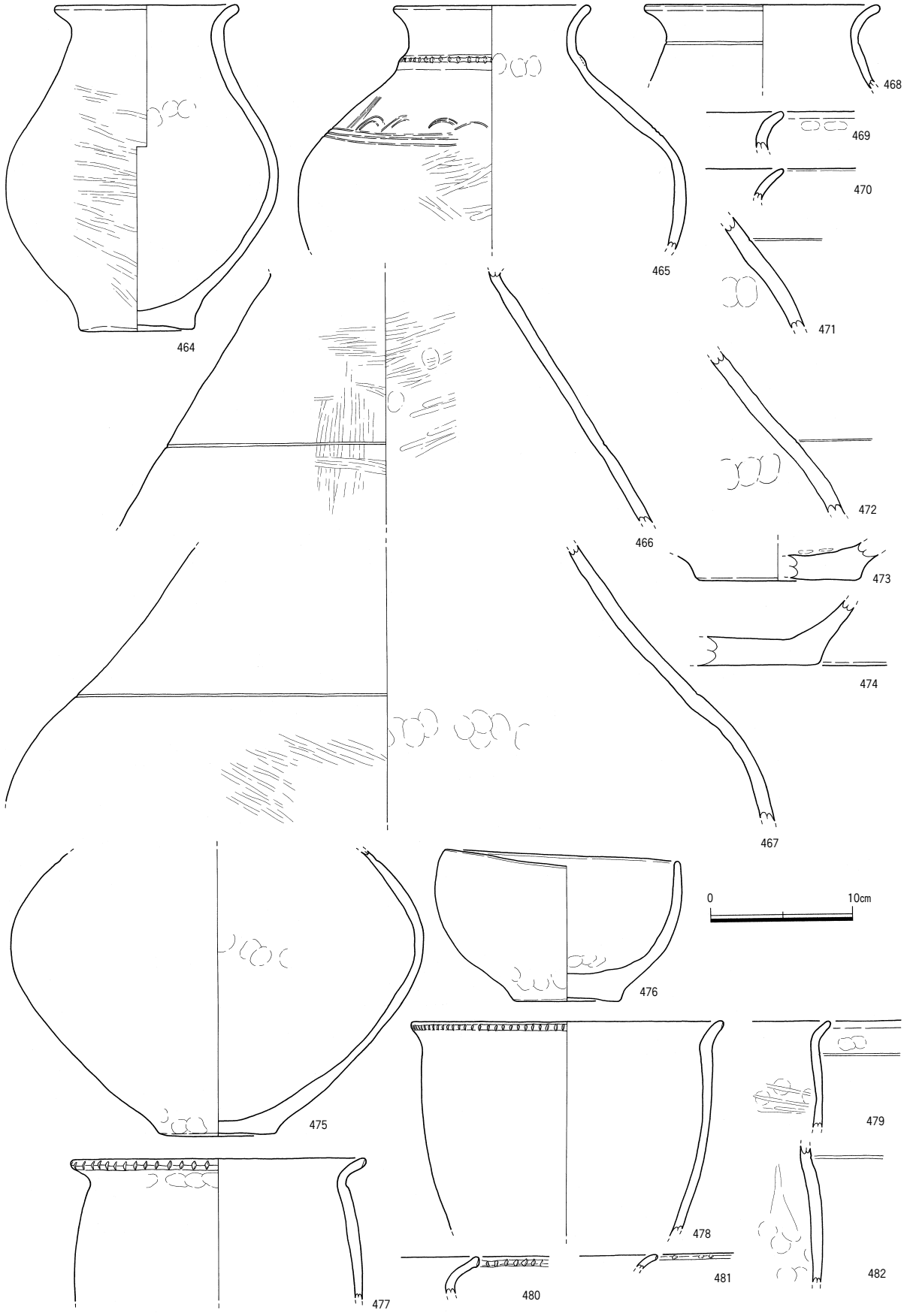
1:2.5Y6/4　にぶい黄色シルト質極細砂（地山粘土混じる，炭・褐鉄鉱を含む）
2:N7/0　灰色砂（噴砂）

第 67 図　SX18 平・断面図（S=1/40）

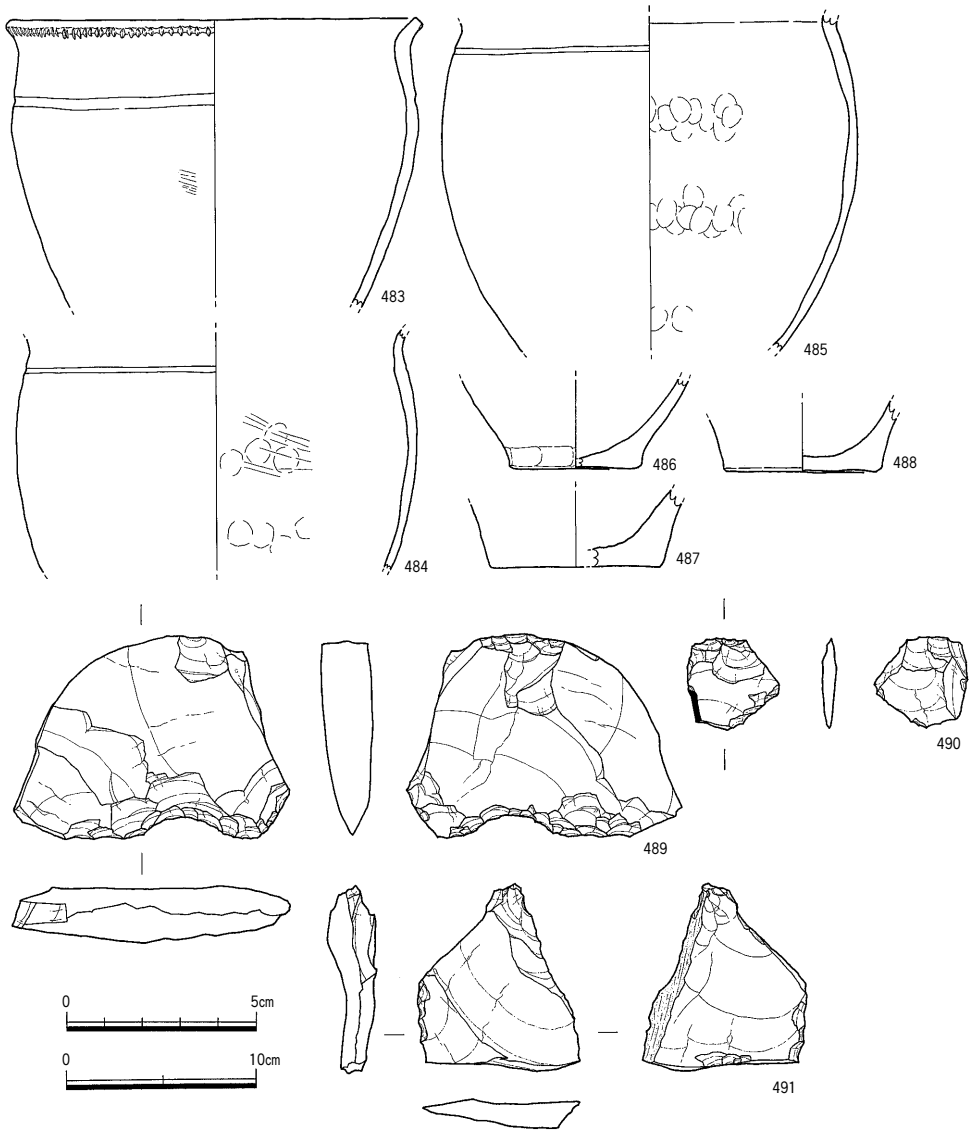
SX18（第 67 図）

ES 区の中央部やや東に位置する。長軸 2.65m，短軸 2.1mのやや変形した隅丸方形の竪穴遺構である。

埋土が地山と酷似しており，当遺構の掘り方の検出は難しく，当初はピットを検出，掘削後，土器がピットの掘り方を越えてのびていることが判明し，周辺を精査し掘り方の検出を試みた。さらに，サブトレンチなどで堆積状況を確認しながら最終的に掘り方の規模を突き止めた。そのため，図面上の掘り方のラインが一部破線となっている。掘り方は深く，埋土は既述のとおり，地山



第 68 図　SX18 出土遺物①（S=1/4）



第 69 図　SX18 出土遺物②（483～488：S=1/4，489～491：S=1/2）

に酷似した，にぶい黄色シルト質極細砂である。一部，噴砂を確認した。

他の方形竪穴遺構のように炉に関する施設，支柱穴などは全く確認できなかった。出土した土器は，いずれも破片となっており，広く分布している状況であった。出土位置は掘り方の深さにおけるほぼ中央部分で，基本的に浮いていた状況である。この点も他の方形竪穴遺構と異なる。

また，遺構の西部にはSX17 同様，円礫が集中して分布する状況が認められた。ただし，これらの集積は掘り方天端部分（地山直上）であり，遺構に伴うものではないと判断した。

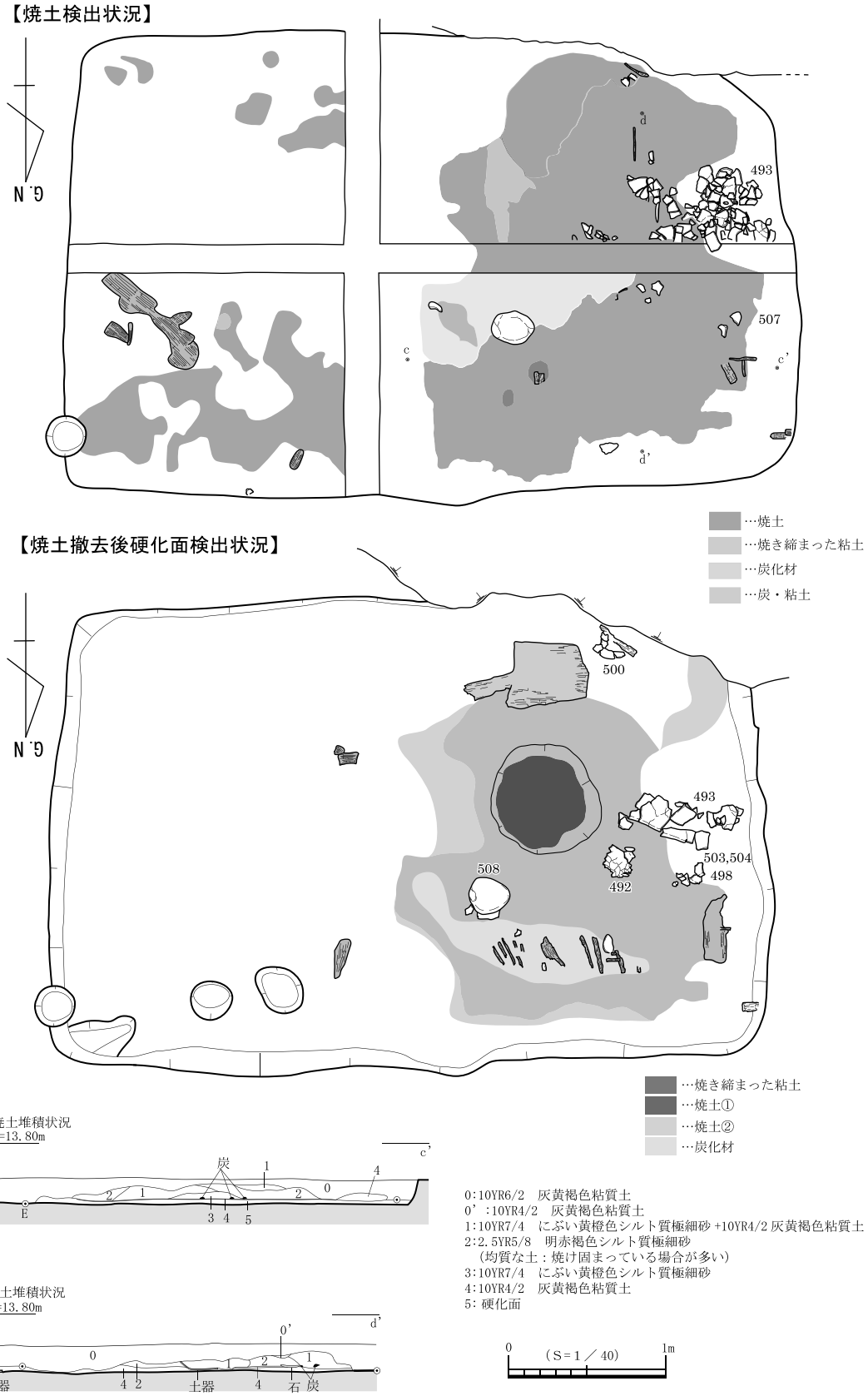
出土遺物から時期は前期中葉，信里編年前期Ⅰ-c段階と考えられる。

出土遺物（第 68・69 図）

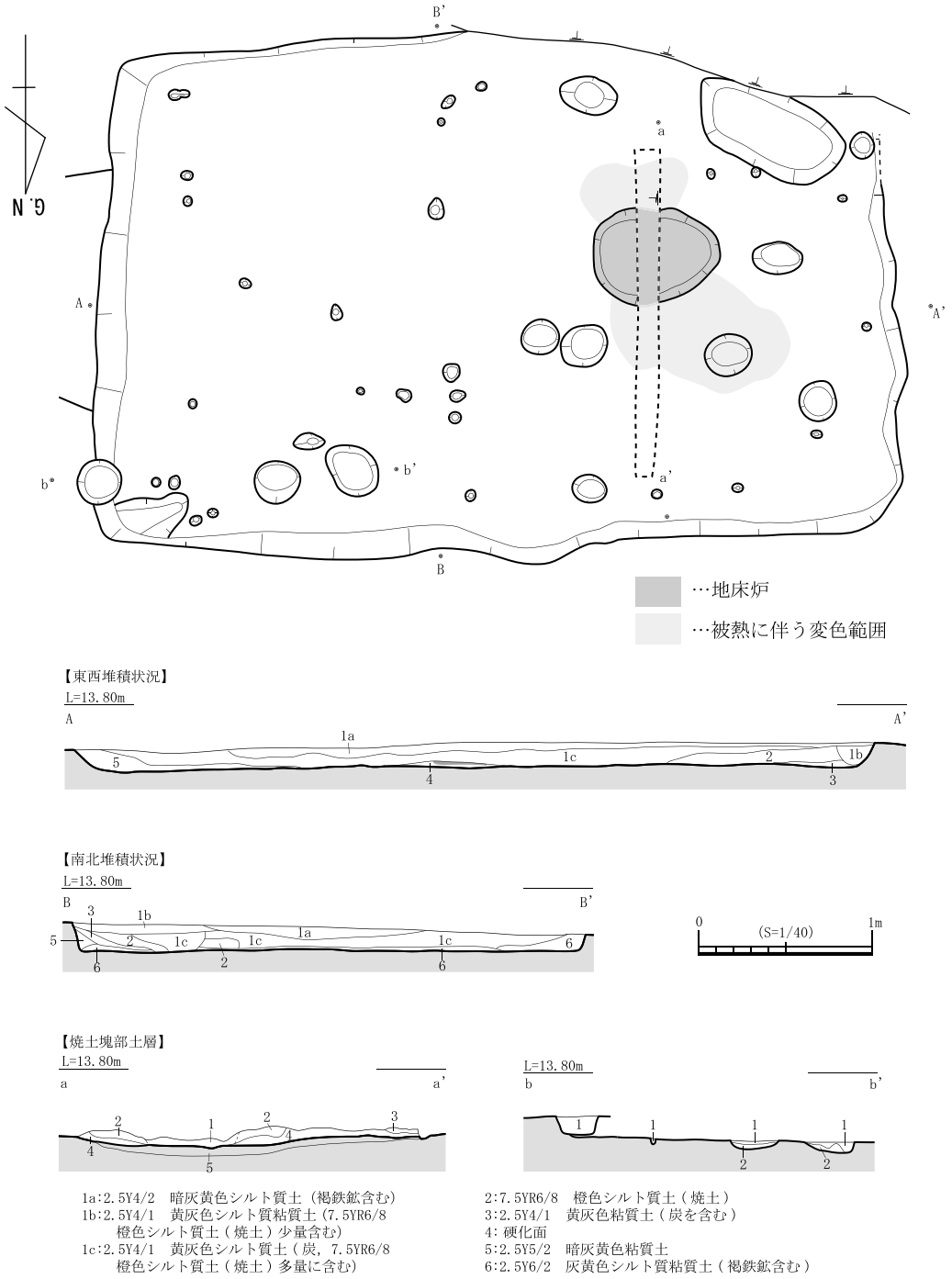
464 ～ 488 が弥生土器で，489 ～ 491 がサヌカイト製の石製品である。

464 ～ 475 は壺形土器である。大小に分類でき，466，467，471，472 は大型品である。464，465，468 ～ 470 は口縁部片で，465 は頸部に突帯を貼り付けた後，刺突文を施す。468 は沈線を施す。いずれもこれらは外面を細かな磨き調整によって仕上げる。465 は肩部に 2 重の沈線文によって描かれた半円状の文様を繰り返し，その下に直線文を施す。

466，467，471，472 は肩部に沈線を施すタイプである。いずれも，丁寧な磨き調整で仕上げる。内面にも細かい磨きが認められる。内面には頸部と体部の境に当たる部分に粘土帯接合時の指押さえが認められる。



第 70 図　SX19 検出状況図

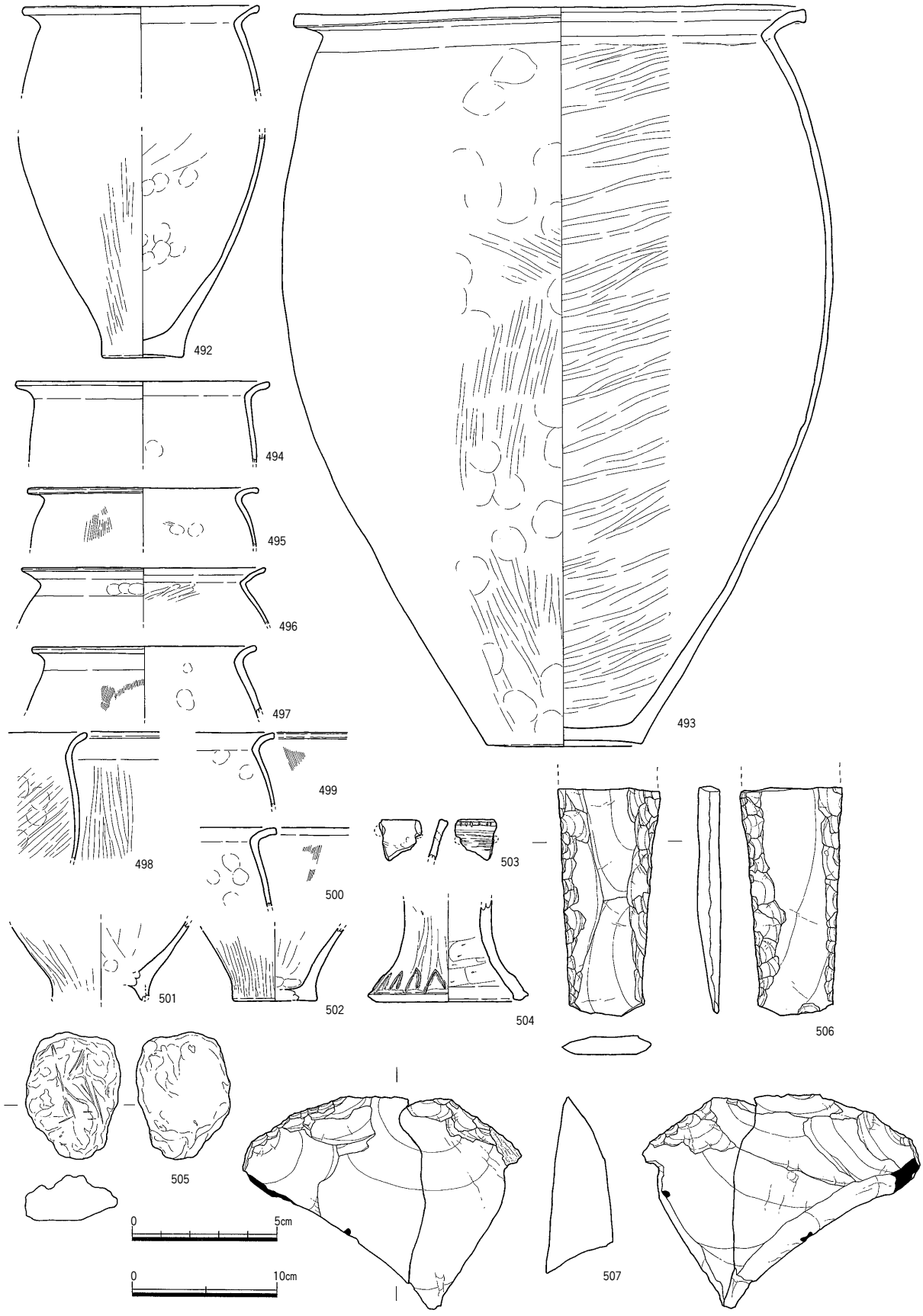


第 71 図　SX19 平・断面図（S=1/40）

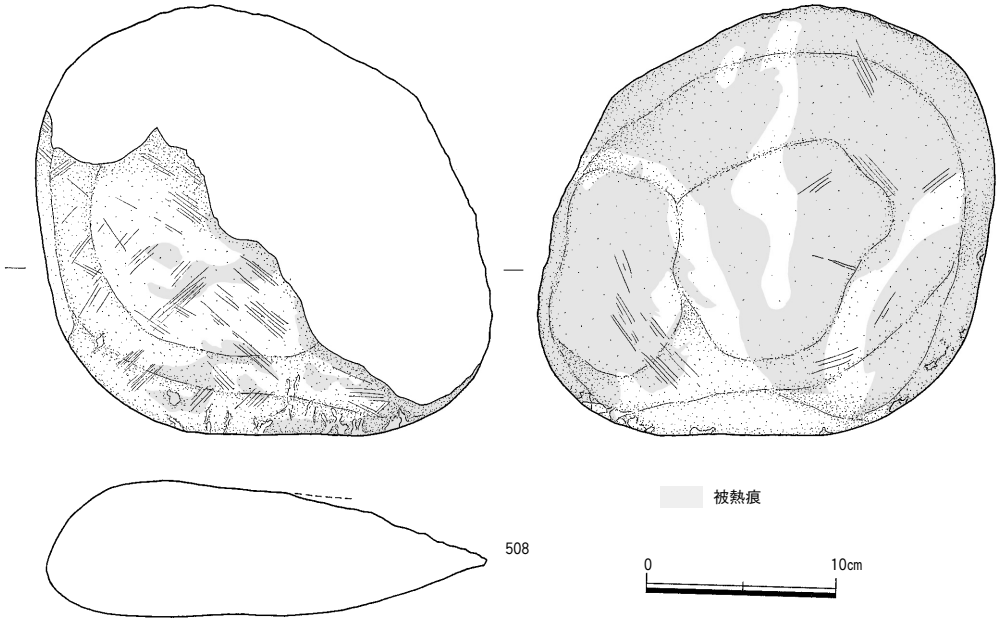
473，474 は壺形土器の底部片である。475 は底部から体部にかけての破片で，器面は残りが悪いため不明であるが，底部成形時および粘土帯接合時と考えられる指押さえの痕跡が認められる。

476 は鉢形土器もしくは，壺形土器の底部部分に当たるものである。器面が剥落しており，詳細は不明であるが，成形時の指押さえの痕跡が認められる。外面と内面の対応する位置に煤と焦げが付着している。

477 ～ 485 は甕形土器で，いわゆる如意形口縁の甕で，477，478，480，481，483 は口唇部に刻み目を施す。また，479，482，483 ～ 485 は肩部に沈線を施す。内外面ともに調整の詳細については不明であるが，口縁部成形時の指押さえが外面に認められる。内面には粘土帯接合時の指押さえの痕跡が帯状に認められる。使用痕跡が認められるものもあり，483，484，485 などは外面に煤，内面には焦げがパッチ状に付着している。



第 72 図　SX19 出土遺物①（492～505：S=1/4，506,507：S=1/2）



第 73 図　SX19 出土遺物②（S=1/4）

486 ～ 488 は甕形土器の底部片である。いずれも，器面が剥落しており，詳細は不明である。

土器等の胎土および色調は概ね同様である。いずれも白黄色もしくは淡黄白褐色を呈し，石英，長石，細かい黒色円礫を多量に含む。一部変色しているものもあり，明淡橙褐色を呈するものもある。しかし，基本的には前期土器に特徴的な石英，長石等の砂粒を多量に含む胎土である。

石製品はスクレイパー,二次加工のある剥片が出土している。

489 はスクレイパーと考えられる。背部は折損面を打面に二次加工が確認でき，刃部は両面調整し，刃部の中央には，顕著な潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

490，491 は二次加工のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。490 は剥片の背腹両面の一部に二次加工が確認できる。491 は縦長剥片素材で，剥片の端部は折損しているが，折損面を打面に調整を行うほか，剥片の鋭利な側辺の一部も二次加工を施す。もう一方の側辺は自然面で構成される。

SX19（第 70・71 図）

EN 区の中央部やや東に位置する。東西 4.6m，南北 3mの東西方向に長い隅丸方形を呈する竪穴遺構である。掘り方は明瞭で，深度は約 0.2mである。埋土は床面直上に灰黄色シルト質粘質土が堆積しており，その上層には粘土の硬化面，焼土，炭などが厚く堆積している。硬化面については西側に偏在する。硬化面を覆う焼土については，全体に分布しており，非常にもろい。さらに上層に，炭や焼土を含む暗灰黄色シルト質土，黄灰色シルト質粘質土が堆積している。

南西隅部は後世の撹乱によって切られている。中央部やや西側に東西 0.7m，南北 0.55mの楕円形状を呈する地床炉と考えられる被熱痕跡が認められた。周辺部でも被熱による褐色に変色した箇所が認められ，火を利用したものと考えられる。掘り方内には直径 10㎝ ～ 60㎝の大小様々な柱穴が数基確認できるが，いずれも浅く，計画的配置も認められないため，当遺構に伴うものではないと考えられる。

また，仮にこれらが付属する柱穴であった場合，柱穴の埋土には焼土や炭化材を含み，焼き締まった粘土が覆う状況であることから，柱穴群は，２次利用の前に埋まったことは明らかである。

いずれにせよ，以上の状況から，どのような上屋構造であったかは不明であるが，簡易な屋根をもった住居に類する遺構と考えられる。

２次利用について

検出時には大型で多量の炭化材，壁土状に焼きしまりのあまい焼土，非常に焼き締まった焼土が埋土として一面に広がっていた。そのため，大規模に火を使用した後，埋め戻された状況を想定した。埋土（灰黄褐色粘質

土）を撤去した状況が第 70 図の焼土検出状況で，西側に偏っていることが分かる。上段の焼土検出状況で示した範囲は焼き締まりの悪い壁土状を呈するものが分布する範囲である。これらの堆積は非常に厚く，今回の調査区で最も焼土が出土した遺構である。土層の状況からこれらの焼土は覆い被さるように堆積しており，盛り上げたものが埋まる段階に崩れたような状況を想定することができる。また，これらの焼土にはスサ入り粘土状のものを含む。

この焼土を撤去した後の状況が第 70 図の焼土撤去後硬化面検出状況である。西側に非常に硬く焼き締まった範囲が面的に認められた。これらの範囲が限定されること，土質が非常に精良であったため，意図的に敷き広げた可能性も想定される。焼き締まった面の直上にそれを取り囲むように炭化材が認められ，北側には細い枝状の炭化材が並べられたように出土しており，火を使用した際の状況を示していると考えられる。

また，硬化面の直上で，かつ中央部西側に先の炭化材に取り囲まれた中に大型の土器片が集中し，これらの出土した土器が接着する土器片間で色調が大きく異なることに加え，ほぼ完形に復元できたことから，土器焼成を行った可能性を想定したい。ただし，変形の痕跡などは認められない。

従ってSX19 は，住居状施設として利用した後，２次利用されたと考えられる。以上のような状況証拠から２次利用の内容は土器焼成と考えられる。他の類似遺構（SX20，21）に比べて最も残りが良く，他の状況を推察することができる資料である。492，493，498，500，503，504，508 は焼成面の直上で出土したものである。

建物遺構の本来の時期は不明確であるが，弥生時代中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階までに２次利用がなされたものと考えられる。

出土遺物（第 72・73 図）

492 ～ 504 は弥生土器，505 は土製品，506 ～ 508 は石製品である。

492 ～ 500 は甕形土器で，いずれも甕３ａである。口縁部形態については個体差が著しく，L字から「く」の字を呈し，498 のみ如意形を呈する。いずれも口唇部を丸くおさめる，もしくは平坦に整形するものである。器面の剥落が著しく，調整等については詳細が明瞭ではないが，いずれも外面を縦方向の刷毛目調整で仕上げ，口縁部周辺をヨコナデ調整によって仕上げるものである。内面は斜方向，縦方向の磨き調整によって仕上げる。493 は大型土器で，外面には粘土帯接合時の痕跡のほかに叩き成形の可能性も想定される平坦面が認められる。外面の変色が著しく，破片で明瞭に異なる場合がある。501，502 は底部片で，501 は底部１である。外面は磨き調整によって仕上げ，内面は底部周辺を成形時の指押さえが残り，板ナデ調整によって仕上げる。

503 は甕２ｂで，いわゆるバケツ型と呼ばれるものの口縁部と考えられる。口唇部に刺突文を施し，２個１対の穿孔を施す。

504 は脚部である。端部をやや肥厚させ，ヨコナデ調整によって端部が内外に引き出される。外面は縦方向の磨き調整によって整形し，内面は横方向のケズリによって整形する。外面位は△の底辺がない形状のヘラ描き文が施される。

土器の胎土および色調は，大きく３種類に分類できる。492 は明茶褐色を呈し，多量の石英，長石と，少量の雲母を含む。496 は変色しており，本来の色調は不明であるが，胎土は細かい石英，長石を多量に含むものである。それ以外の胎土は多量の石英，長石に加え，細かい雲母，角閃石を多量に含むものである。雲母と角閃石の量はやや個体差が認められる。焼き上がりがやや異なるため，色調は褐灰色 ～ 明褐色と幅があるものの，胎土構成から同一グループと考えられる。

505 はスサ入り粘土塊と呼ばれるもので，土器焼成に伴う産物と考えている。比較的厚く，片面にスサの圧痕があり，片面は平坦であることから，覆い焼の被覆粘土の可能性も考えられる。色調は白桃色の非常に極めの細かい胎土である。土器の胎土とは明確に異なる。

石製品は打製石剣,石核,石皿が出土している。

506 は打製石剣の基部と考えられる。先端部を折損するため，全体の形状は不明である。大型の横長剥片を素材に，両面に浅形細部調整を施し，側辺には潰れの痕跡が確認できる。石材はサヌカイトである。

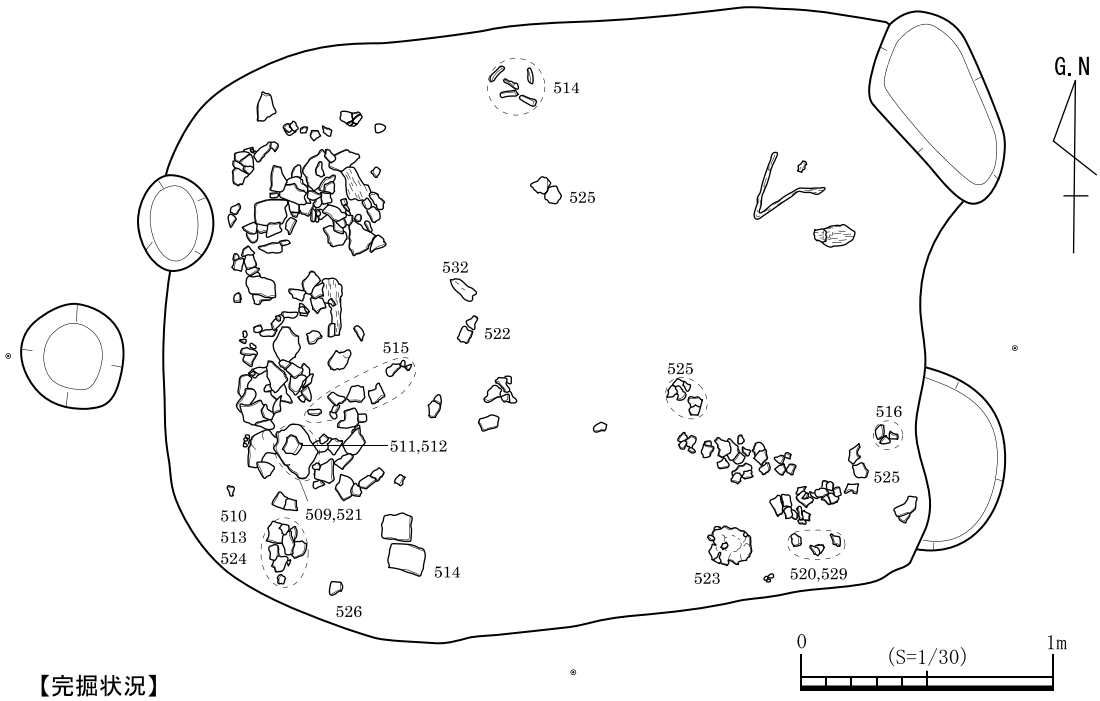
507 は石核である。板状石材を素材とし，小型の剥片を剥離している。両側辺は折損しており，素材剥片を分割した可能性がある。石材はサヌカイトである。

508 は砂岩製の石皿である。欠損，被熱しているため，全体の形状は不明である。

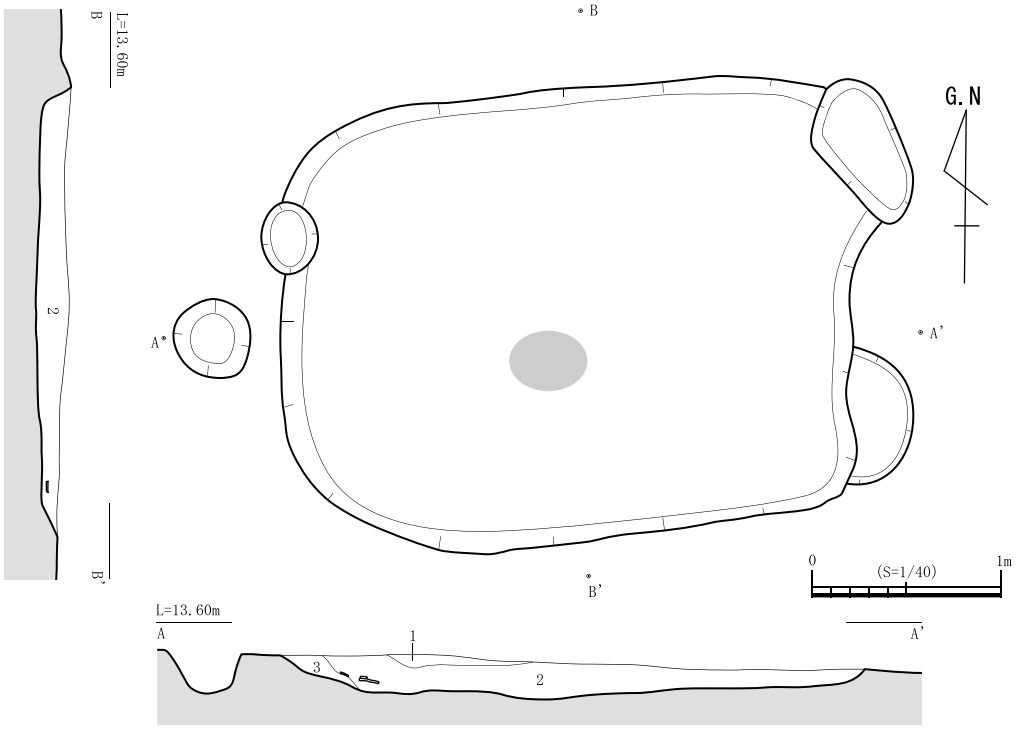
SX20（第 74 図）

ES 区の中央より東に位置する。東西 3m，南北 2.4m の東西方向に長い隅丸方形を呈する竪穴遺構である。深度は 0.23m で掘り方は明瞭で，埋土は炭を多量に含む黒褐色シルトであった。掘り込みの床面は明瞭に平坦に

【土器出土状況】



【完掘状況】



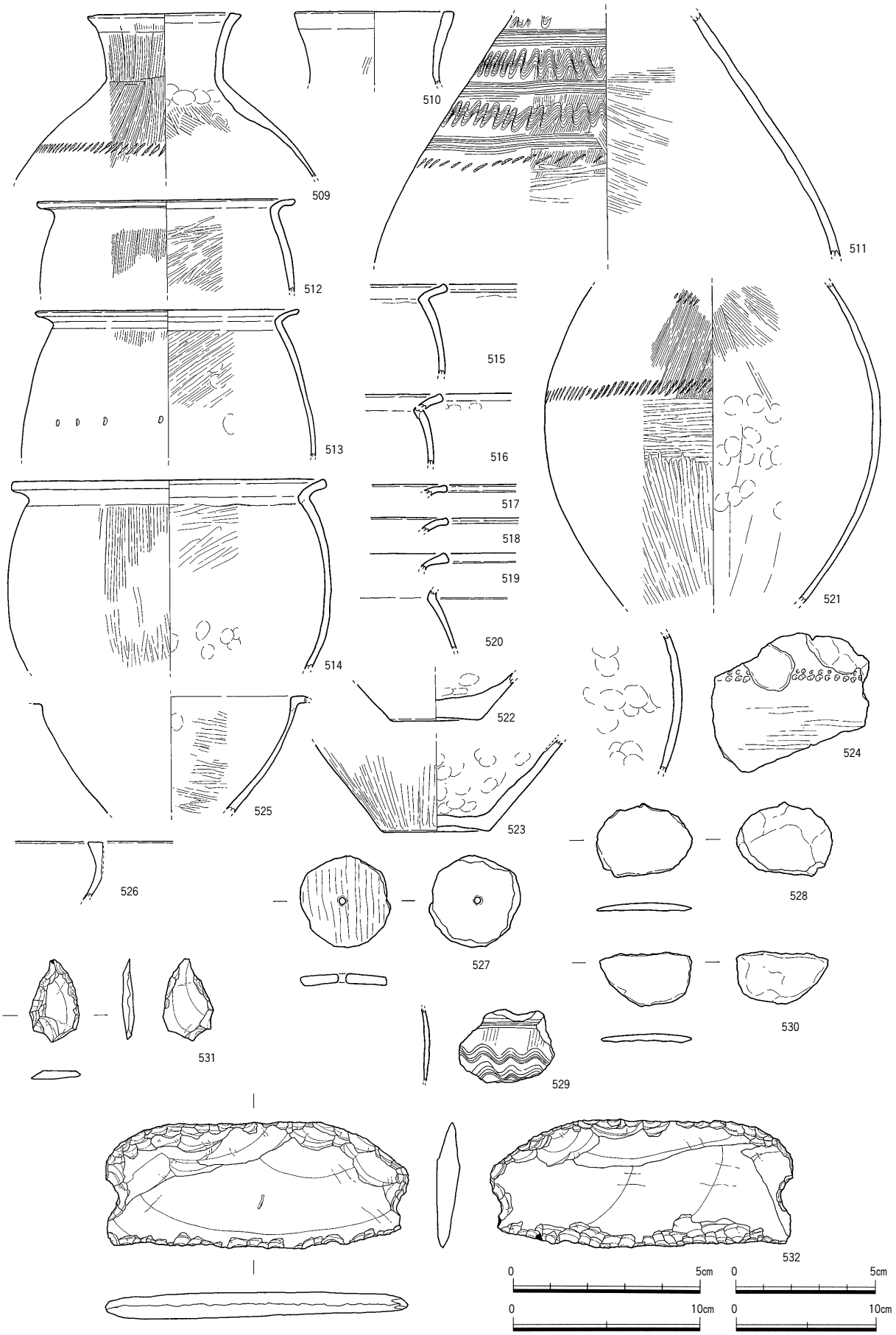
1:2.5Y6/3　にぶい黄色シルト質粘土（褐鉄鉱・炭を若干含む）
2:10YR3/1　黒褐色シルト（炭化物を多量に含む，土器を多量に含む，褐鉄鉱を含む）
3:2.5Y6/6　明黄褐色粘土（褐鉄鉱を含む）

第 74 図　SX20 平・断面図（S=1/30，1/40）

はされておらず，長軸（東西）方向はやや凸レンズ状を呈する。

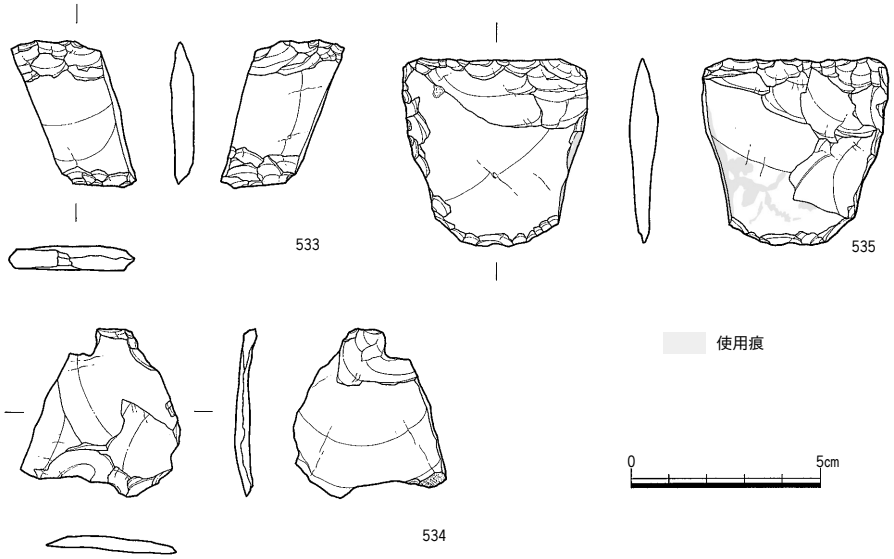
中央部やや西寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められ，一部焼土塊を含む。火を利用したものと考えられる。

掘り方内は無柱で，どのような上屋構造であったかは



第 75 図　SX20 出土遺物①

（509～523,525,526：S=1/4，524,527～530：S=1/3，531：S=2/3，532：S=1/2）



第 76 図　SX20 出土遺物②（S=1/2）

不明であるが，簡易な屋根をもった住居に類する遺構と考えられる。

２次利用について

遺構の西側および南東隅に土器片が集中して認められ，その中には炭化材も含まれている。これらは２次利用の状況を示すものと考えられ，当遺構の本来の性格を示すものではないと考えられる。ただし，調査区を南北に分け，南区から調査を実施したため，調査時には，SX19，21 に先立ってSX20 の調査を行った。そのため，当初は非常に炭化材を含む大型の土坑という認識で調査を行っており，当遺構が焼成遺構とは考えていなかった。

その後，既述した地床炉が確認でき，隅丸方形の竪穴遺構という認識までは至ったものの，SX19 やSX20 との関連性には残念ながら調査時には気づかなかった。その後，整理作業を行い，特徴を整理していく中で，検出時の状況がSX19，21 に類似し，これらの遺構とも近接することから同様な２次利用が想定されるに至った。調査時の所見が十分ではないものの，以上の理由から２次利用として土器焼成を想定している。また，出土遺物からは，焼成破裂土器片が出土しており，上記の性格を裏付けるものと考えている。

ただし，堆積状況からはうかがい知ることができないが，多量に出土した遺物の出土状況は床面よりやや浮いており，本来の住居状遺構としての機能を終えた後，しばらくしてから２次利用がなされたと考えられる。

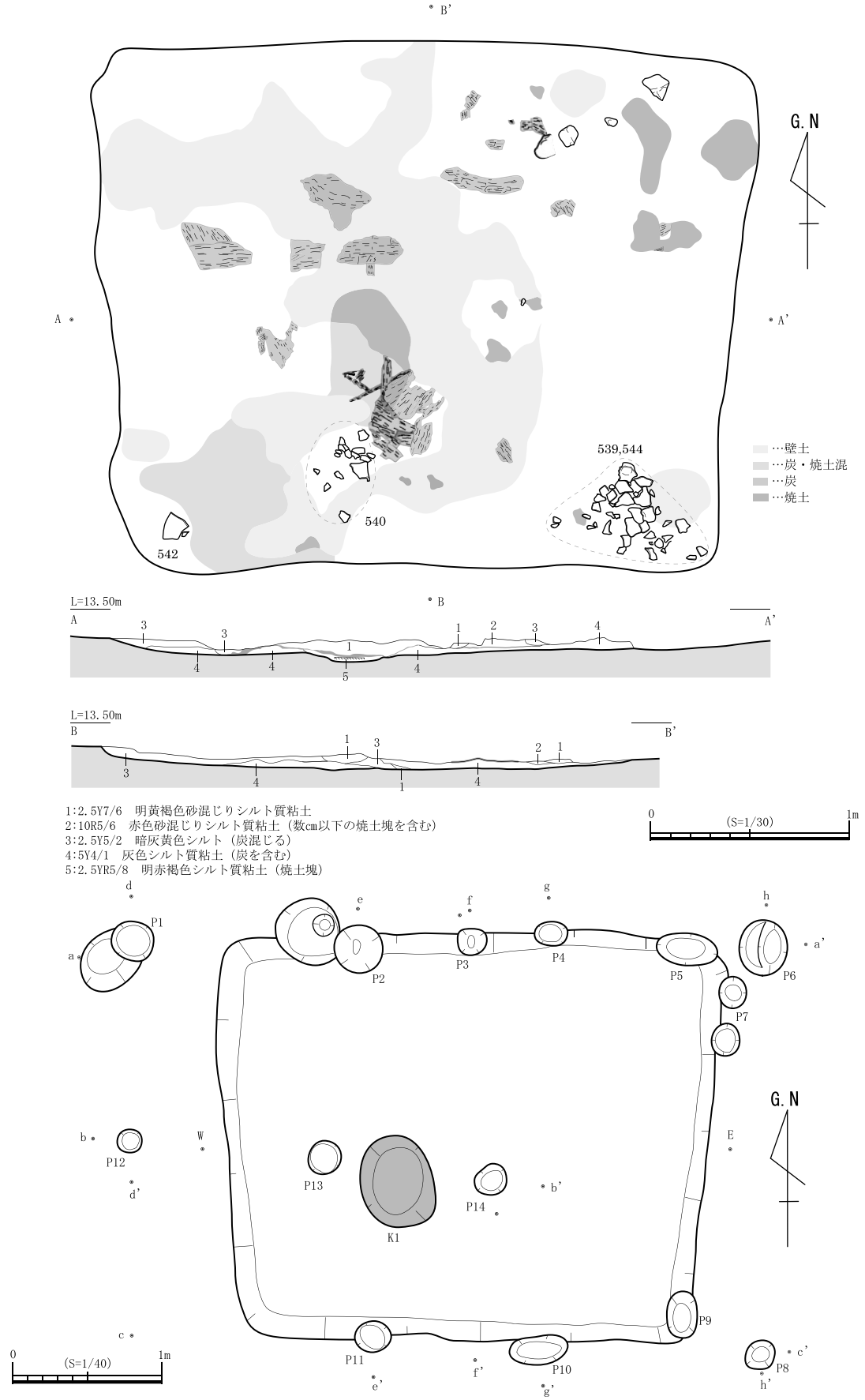
建物遺構に伴う時期は不明確であるが，弥生時代中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階までに２次利用がなされたものと考えられる。

出土遺物（第 75・76 図）

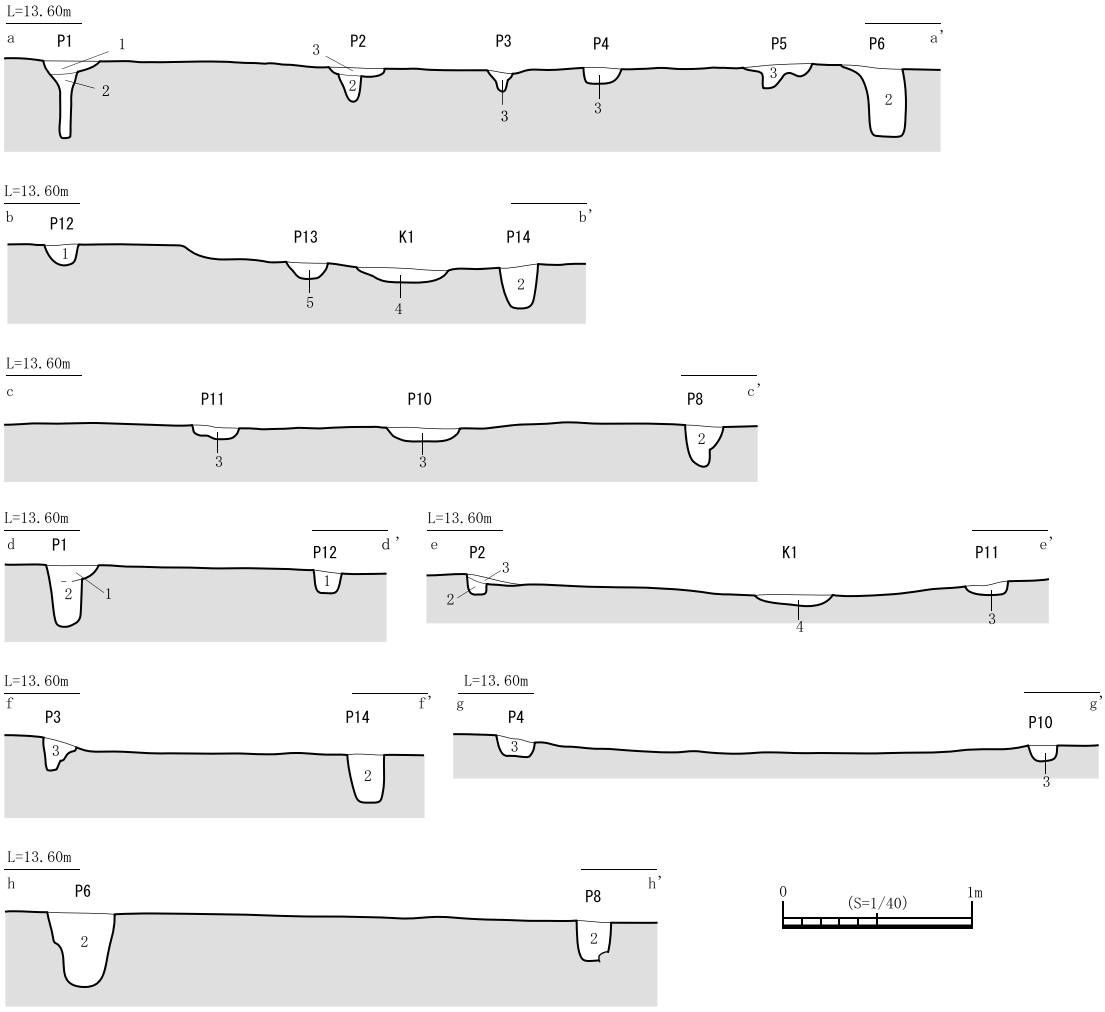
509 ～ 530 は弥生土器で，531 ～ 535 が石製品である。

509 ～ 511 は壺形土器で，509，510 は壺 6 aで，511 は壺 1 もしくは 6 の体部片と考えられる。509 および 510 ともに，外面は縦方向の刷毛目調整によって，整形した後，口縁部をヨコナデ調整によって整形する。そのため，ある程度器面を整えたのち，細部整形を行っていることが分かる。511 および 509 肩部に，刷毛目状工具による刺突文を施す。内面は刷毛目調整によって整形し，頸部周辺には成形の指押さえの痕跡が残る。

512 ～ 521 は甕形土器である。512 ～ 520 は口縁部が残るもので，いずれも，口唇部を平坦もしくは丸くおさめるもので，口縁部は「く」の字状を呈する。器壁が比較的厚い。512 ～ 514 の状況から，外面は縦方向の刷毛目調整を行った後，口縁部周辺のヨコナデ調整を行っている。内面も右上がりの磨き調整を行った後，口縁部をヨコナデ調整によって仕上げる。また，内面には成形時と考えられる指押さえが施される。513 は体部最大径に刺突文を施す。521 は，外面を縦方向の刷毛目調整によって仕上げ，体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げた後，体部最大径を横方向の磨き調整によって仕上げる。その後，刷毛目状工具によって刺突文を施す。内面は体部下半は板ナデ調整によって整形し，体部上半は斜方向の刷毛目調整によって仕上げる。体部最大径付近



第 77 図　SX21 平・断面図（S=1/30,1/40）



1:2.5Y5/1　黄灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，褐鉄鉱沈着）
2:5Y4/1　灰色シルト質粘土（炭化物を若干含む）
3:2.5Y5/1　黄灰色シルト（浅黄色土・地山を塊状に含む，炭・焼土塊を含む，褐鉄鉱沈着）
4:2.5YR5/6　明赤褐色～7.5YR7/3　にぶい橙色シルト（焼土塊を含む）
5:5Y2/1　黒色シルト（炭を多量に含む）
＊P-7，9は3の単層

第 78 図　SX21 断面図（S=1/40）

には粘土帯接合の指押さえの痕跡が認められる。514 は外面に焼成破裂痕跡が残る。

522，523 は底部片で，522 は詳細は不明であるが，523 は外面は縦方向の刷毛目調整を行い，内面は成形時の指押さえの痕跡が残る。外面は焼成時の剥離痕跡が著しい。

525 ～ 526 は鉢形土器もしくは高杯である。525 は内面に横方向の磨き調整で仕上げる。外面に焼成破裂痕跡と考えられる，剥離面が多数認められる。

この他に 524，528 ～ 530 は焼成関係資料（田崎 2004）である。524 は焼成破裂痕が残る土器片で，刺突文が認められることから，甕形土器の体部最大径部と考えられる。528 ～ 530 は土器焼成破裂土器片である。いずれも，不整な楕円形を呈し，断面中央部が凸レンズ状に膨らむ。

527 は土製の紡錘車である。上面には縦方向の指押さえが認められ，土器片を加工して転用を行っている。上下両側から穿孔を施す。

以上の土器等の胎土および色調は大きく 3 群に分けることができる。色調はよく似ているものでも，胎土構成が異なるものがあり，基本的には胎土構成をもとに分類している。主体を占めるものは褐灰色を呈し，多量の石英，長石に加え，細かい雲母，角閃石を多量に含むものである。焼き上がりがやや異なるため，色調に幅があるものの，胎土構成から同一グループと考えられる。雲母と角閃石の量はやや個体差が認められ，雲母のみしか認

められないものもあるため，さらに細分できる可能性はある。

510，511，528，530 は極めの細かい胎土で，細かい石英長石を多量に含むものである。上記の一群と色調はよく似ている。519 は明黄褐色を呈し，長石を少量含む胎土である。526 は被熱による変色で胎土焼成はよくわからない。

石製品は石鏃未製品,打製石包丁,スクレイパー,剥片が出土している。

531 は石鏃未製品と考えられる。背面側の剥片縁辺全体と腹面側の一部に極浅形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

532 は両端に抉りをもつ打製石包丁である。大型横長剥片素材で，背部には背潰加工を刃部は両面調整し，摩滅が認められる。石材はサヌカイトである。

533，535 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。533 は両側辺を折損しているため，全体の形状は不明であるが，両面調整された刃部が確認できたことから，スクレイパーとした。535 は 1 側辺を折損するため，全体の形状は不明であるが，両面調整された鋭利な刃部が認められることから，スクレイパーとした。背腹両面の一部に摩滅痕が確認できることから，別器種の可能性もある。

534 は縦長剥片である。 1 側辺を折損し，剥片端部には自然面が確認できる。石材はサヌカイトである。

SX21（第 77・78 図）

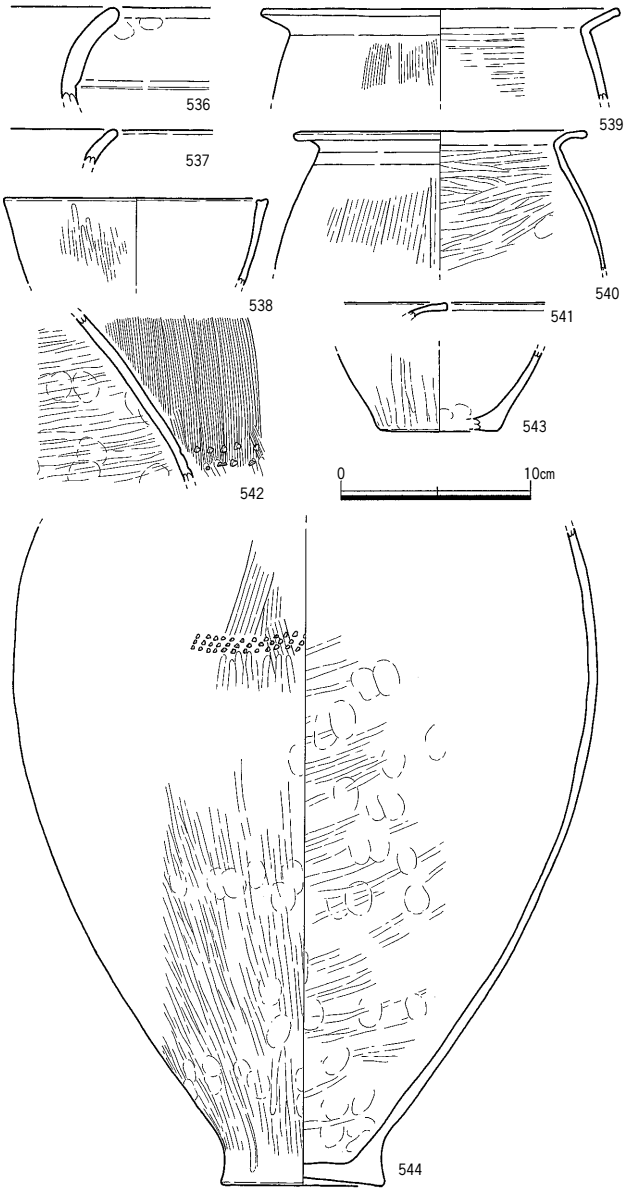
EN 区の東側に位置する。東西 3.1m，南北 2.7mの東西方向にやや長い隅丸方形を呈する竪穴遺構である。深度は 0.15mと浅い。中央部やや西寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められ，一部焼土塊を含む。火を利用したものと考えられる。掘り込みは非常に浅い。地床炉を挟むように柱穴が認められるが，非常に浅く，他の同類遺構から考えると，本来，当遺構に伴うものではないと考えられる。このほか，周辺にも柱穴が認められ，SP1，SP 6，SP 8 が上屋を支える柱穴の可能性を残す。それ以外の柱穴については計画的な配置ではなく，これらについても本来的に付属する柱穴かどうかは疑問が残る。また，仮にこれらが付属する柱穴であった場合，柱穴の埋土には焼土や炭化材を含んでいることから，後述する 2 次利用以降に埋まったものと考えられる。

どのような上屋構造であったかは不明であるが，簡易な屋根をもった住居に類する遺構と考えられる。

2 次利用について

検出時には大型で多量の炭化材，壁土状に焼きしまりのあまい焼土，非常に焼き締まった焼土が一面に広がっており，大規模に火を使用した後，埋め戻された状況がみとめられた。それらの中には土器片も 2 箇所でまとまって出土している。上記のとおり，遺構深度は浅く，特に東側では掘り方が不明瞭で，これらの焼土が盛り上がった状況であった。他のものと比較すると，上面は削平されていると考えられる。既述のとおり，周辺には同様な状況を示す遺構（SX19，SX20）がまとまって認められる。

これらのことから，住居状施設として利用した後，2 次利用されたと考えられる。その内容については先の



第 79 図　SX21 出土遺物（S=1/4）

SX20，SX21 の状況から土器焼成の可能性を想定している。

建物遺構に伴う時期は不明確であるが，弥生時代中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階までに２次利用がなされたものと考えられる。

出土遺物（第 79 図）

536 ～ 544 は弥生土器である。

536，537 は前期の壺形土器で，混入品と考えられる。536 は有段になるタイプの口縁部のもので，外面に成形時の指押さえが認められる。

538 は鉢形土器で，形状は不明であるが，口縁部端部をヨコナデによってやや凹む。外面は縦方向の磨き調整で仕上げ，内面はナデ調整で仕上げる。

539 ～ 544 は甕形土器である。口縁部形状はやや異なるが，いずれも口唇部を丸くおさめる。外面を刷毛目調整によって仕上げた後，口縁部をヨコナデ調整によって整形する。内面は頸部以下を横方向もしくは斜方向の磨き調整によって仕上げる。542，544 は体部から底部にかけての破片である。いずれも外面は縦方向の刷毛目調整で，544 は体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げる。いずれも体部最大径に２つが一対の刺突文を施す。543 は底部片である。外面は磨き調整によって仕上げ，内面は成形時の指押さえが認められる。

土器の胎土焼成は大きく２つに分類でき，536，537 は白黄褐色を呈し，石英を多量に含み，長石および赤褐色の砂粒を少量含む。その他は，褐灰色を基調とする胎土で，長石，石英に加え，雲母と角閃石を含む。中には，540 のように雲母を多量に含むもの，542 のように多量に角閃石を含むものなどがある。

【土　坑】

SK01（第 80 図）

WN区のほぼ中央部に位置し，長軸 1.33ｍ，短軸 0.4ｍの不整形な隅丸長方形である。掘り方は浅く，埋土は褐灰色粘土で炭を含む。時期は出土遺物から甕形土器片のみで中期中葉と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

545 は甕形土器の体部片である。外面は縦方向の刷毛目調整仕上げ，内面は斜方向の磨き調整を施す。色調は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

SK04（第 80 図）

WN区の北東部に位置し，長軸 1.05ｍ，短軸 0.8ｍの隅丸方形である。掘り方は浅く，埋土は灰黄褐色粘質土である。

時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

547 は高杯土器の口縁部片である。内側につまみ出し，内外の口唇部に刺突文を施す。口縁部はヨコナデ調整によって仕上げる。変色しているため色調は不明であるが，胎土は石英，長石を含む胎土である。

563 は平基式の石鏃である。調整は背腹両面交互に浅形 ～ 深形細部調整を施す。切先を折損する。石材はサヌカイトである。

564 は楔形石器である。１側辺を折損し，上・下端部に潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

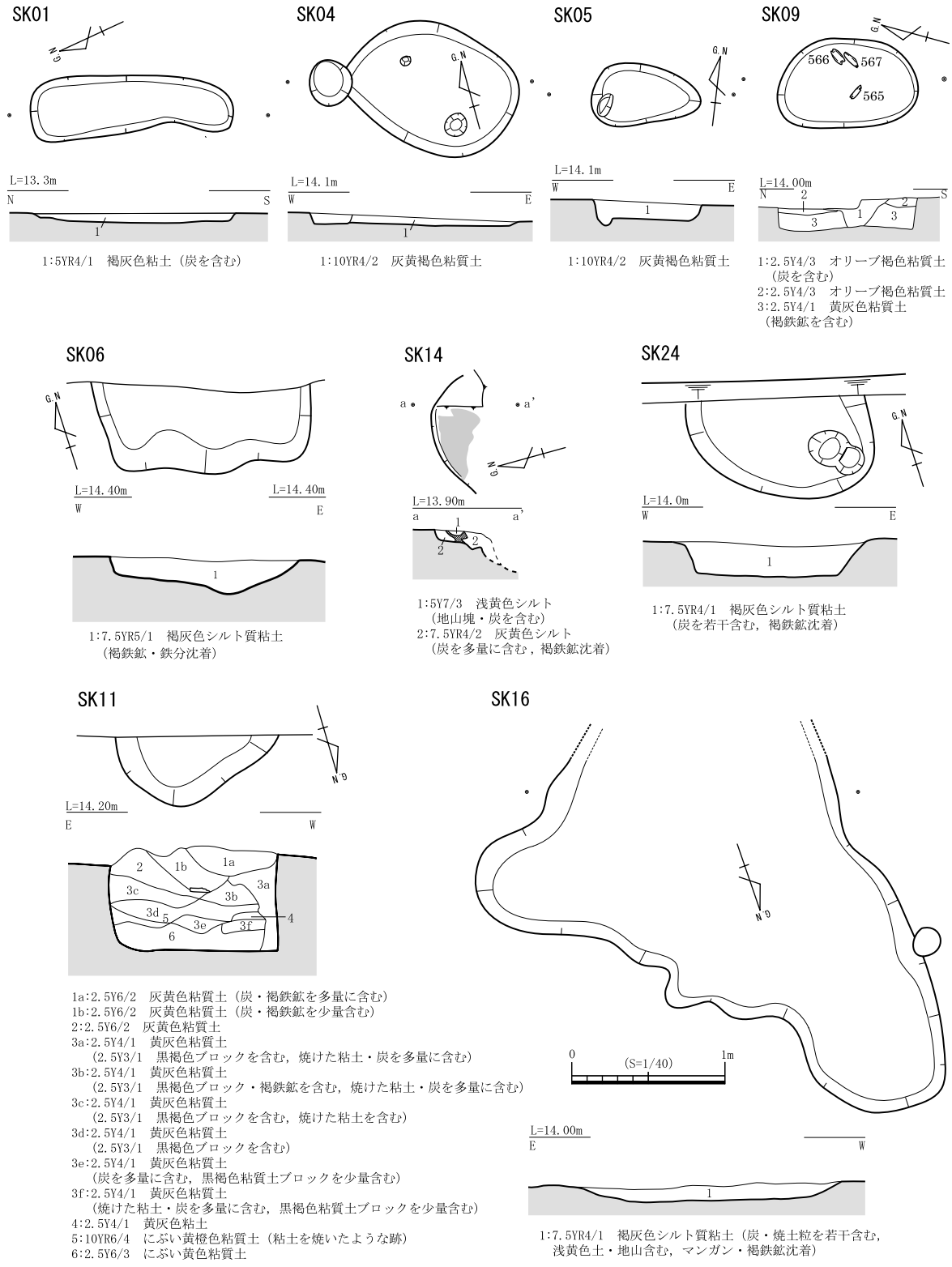
SK05（第 80 図）

WN区の北東部に位置し，長軸 0.72ｍ，短軸 0.4ｍの隅丸三角形である。掘り方は浅く，埋土は灰黄褐色粘質土である。

時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

546 は甕形土器で，甕３ａである。口唇部をやや肥厚させ，端部が凹線文状に凹む。外面は縦方向の刷毛目調整で，その後ヨコナデ調整によって口縁部を整形する。内面は横方向の磨き調整で仕上げる。褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。



第 80 図　SK01・04・05・06・09・11・14・16・24 平・断面図（S=1/40）

SK06（第 80 図）

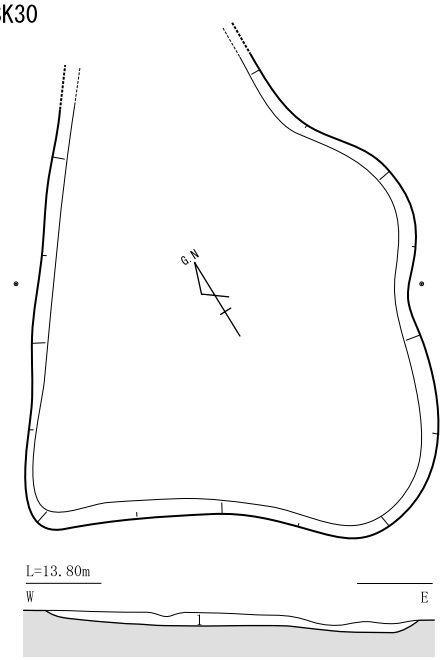
WN区の北東部に位置し，長軸 1.4m，残存短軸 0.5m の隅丸方角形である。掘り方は浅く，埋土は褐灰色シルト質粘土である。

時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

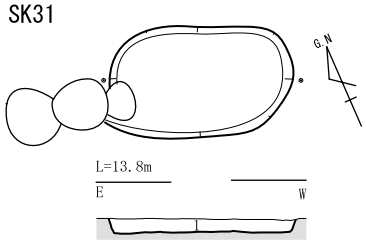
548 は高杯土器の口縁部片である。内側につまみ出し，内外の口唇部に刺突文を施す。口縁部はヨコナデ調整によって仕上げる。変色しているため色調は不明であるが，胎土は石英，長石を含む胎土ある。

SK30



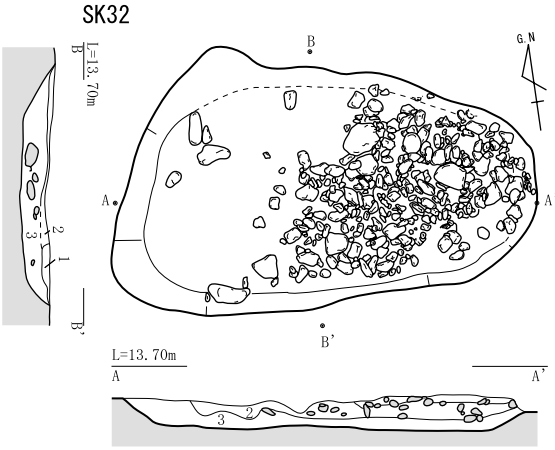
1:10YR4/1　褐灰色シルト質粘土

SK31



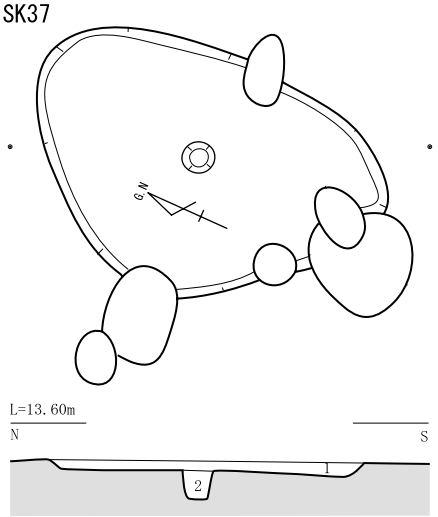
1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（炭化物を含む）

SK32



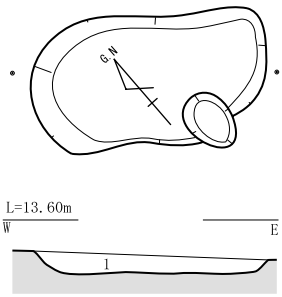
1:7.5YR4/1　褐灰色粘土
2:2.5Y5/4　黄褐色粘土
3:2.5Y7/4　浅黄色粘土

SK37



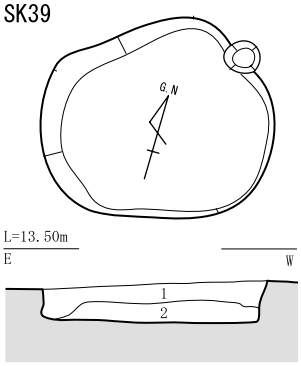
1:10YR5/1　褐灰色シルト（炭・浅黄色土・地山を若干含む，褐鉄鉱沈着）
2:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（褐鉄鉱を含む）

SK34

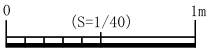


1:10YR4/2　灰黄褐色粘質土（褐鉄鉱を含む）

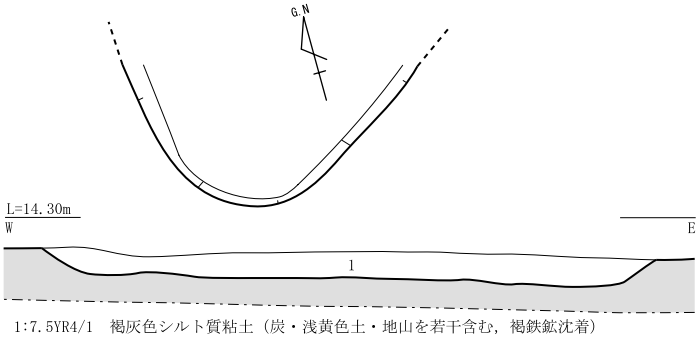
SK39



1:7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着）
2:5Y6/1　灰色シルト（炭を若干含む，褐鉄鉱沈着）

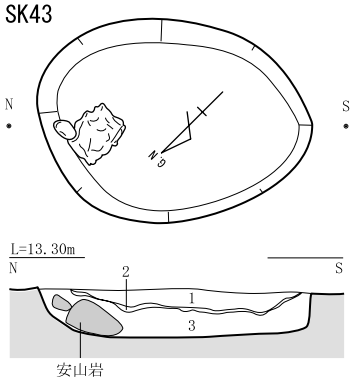


SK42



1:7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（炭・浅黄色土・地山を若干含む，褐鉄鉱沈着）

SK43



1:10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（ややグライ化，炭・浅黄色土・地山塊を多量に含む，褐鉄鉱沈着）
2:N2/0　黒色シルト（炭層）
3:10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（ややグライ化，炭を含む，浅黄色土・地山塊を多量に含む，褐鉄鉱沈着）

第 81 図　SK30・31・32・34・37・39・42・43 平・断面図（S=1/40）

SK09（第 80 図）

WN区の南東部に位置し，SX03 の南西隅を切っている。長軸 0.9m，短軸 0.6mのややいびつな楕円形を呈する。埋土の構成はやや複雑で，黄灰色粘質土，オリーブ褐色粘質土が堆積した後，中央部分に掘り込むように炭を含むオリーブ褐色粘質土が堆積している。掘り方内からはサヌカイト製石包丁が3点出土した。

年代を限定できる資料は出土しなかったが，SX03 との切り合い関係から考えると，中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式以降と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

565 ～ 567 は打製石包丁で，石材はすべてサヌカイトである。565 は大型横長剥片素材で，両端に抉りを形成する。背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が確認できる。腹面側体部に使用痕が認められる。566 は大型横長剥片素材で，両端に抉りを成形する。背部には背潰加工が，刃部は背腹交互に両面調整を施し，やや摩滅している。使用痕は確認できない。567 は大型横長剥片素材で，両端に抉りを形成する。背部は背潰加工が，刃部は両面調整を施し，摩滅している。背腹両面の体部に顕著な使用痕が確認できる。他の打製石包丁に比べ，幅が短いことから，何回も刃部を再生して使用していたと考えられる。

SK11（第 80 図）

ES 区の南西隅部に位置し，調査区南側へとのびる。残存状況で長軸 1.1m，残存短軸 0.46mで掘り方の形状は不整形な円形を呈すると考えられる。堆積状況は非常に複雑で，にぶい黄色粘質土，黄灰色粘質土を基調として，焼土や炭化材を多量に含む。時期を限定できる遺物はないが，周辺の遺構から，中期中葉と考えられる。

SK14（第 80 図）

EN 区の西部に位置し，長軸 0.8m，短軸 0.36mで掘り方の形状は不明な土坑である。埋土は炭を多量に含む灰黄色シルトの中に，炭を含む浅黄色シルトが堆積している。炭化材が多量に出土した。

時期を限定できる出土遺物はなく，詳細は不明である。SX05 と同様な時期と考えられる。

SK16（第 80 図）

EN 区の西部に位置し，長軸 3.2m，短軸 0.9mで掘り方の形状は非常に不整形な土坑である。埋土は炭，焼土粒や地山ブロックを含む褐灰色シルト質粘土である。出土土器から中期中葉，信里編年のⅡ-1 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

549 は壺形土器で，壺 2 bである。口縁部端部を上下に拡張し，刺突文を施す。口縁部内外面はヨコナデ調整によって仕上げる。550，551 は底部片で，外面は磨き調整によって仕上げ，内面の底部周辺には指押さえを施す。

出土土器はいずれも，褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石を含む胎土である。

SK24（第 80 図）

EN 区のほぼ中央部に位置し，長軸 1.22m，短軸 0.63mで掘り方の形状はかなり不整形な形状を呈する土坑である。埋土は炭，焼土粒や地山ブロックを含む褐灰色シルト質粘土である。出土土器から中期中葉，信里編年のⅡ-1 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

出土遺物は弥生土器（552）である。552 は体部片で凹線文を 3 条施す。内面はナデ調整である。

色調は灰白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

SK30（第 81 図）

ES 区のほぼ中央に位置し，長軸 2.6m，短軸 1.1mでかなり不整形な形状を呈する土坑である。深度は浅く，埋土は褐灰色シルト質粘土である。出土土器から前期，信里編年のⅠ-c期と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

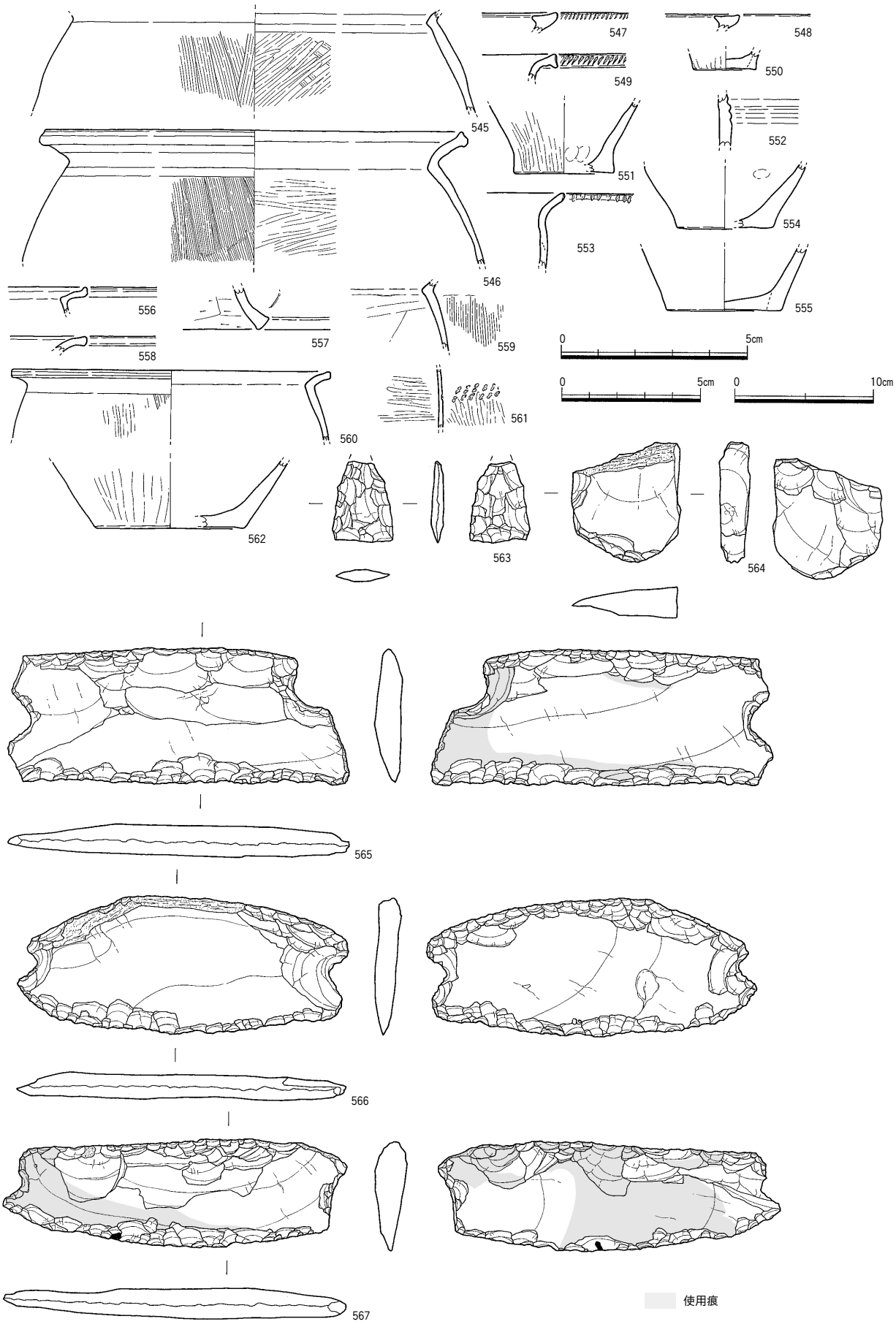
553 は甕形土器の如意形を呈する口縁部片で，口縁部端部に刻み目を施す。断面から粘土帯の外形接合を確認することができる。

554，555 は底部片で，内外面ともにナデ調整によって仕上げる。

これらの土器はいずれも灰白色もしくは黄白褐色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

SK31（第 81 図）

ES 区のほぼ中央に位置し，長軸 1.1m，短軸 0.62m



第 82 図　SK01・04・05・06・09・16・24・30・31・39・42・43 出土遺物
（545～562：S=1/4，563：S=2/3，564～567：S=1/2）

で楕円形を呈する土坑である。埋土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土である。出土土器から中期中葉，信里編年のⅡ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

556 は甕形土器で，甕 3 bである。ヨコナデ調整によって口縁部端部をつまみ上げる。褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。

SK32（第 81 図）

ES 区のほぼ中央に位置し，長軸 2.45m，短軸 1.3mで不整形な楕円形を呈する土坑である。掘り方内に 5 ㎝～ 20㎝の円礫を集積している。埋土は上層から褐灰色粘土，黄褐色粘土，浅黄色粘土で，第 1 ・ 2 層に円礫を多量に含む。時期を限定できる出土土器はなく，時期は不明であるが，周辺遺構の状況から中期中葉と考えられる。

SK34（第 81 図）

EN 区のほぼ中央に位置し，長軸 1.3m，短軸 0.7mで不整形な楕円形を呈する土坑である。掘り方は浅く，埋土は灰黄褐色粘質土である。出土遺物から時期を限定するのはやや困難であるが，周辺遺構の状況等から中期中葉と考えられる。

出土土器（第 82 図）

557 は高杯形土器の脚部片で，外面はナデ調整，内面は削りである。胎土は淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

SK37（第 81 図）

EN 区の中央部やや東よりに位置し，長軸 2.1m，短軸 1.4mで隅丸三角形を呈する土坑である。掘り方は浅く，埋土は炭および地山ブロックを含む褐灰色シルトである。時期を限定できる出土土器はなく，詳細は不明であるが，周辺遺構の状況から中期中葉と考えられる。

SK39（第 81 図）

ES 区の東部に位置し，長軸 1.28m，短軸 1.1mで隅丸三角形を呈する土坑である。掘り方は浅く，埋土は 2 層に分層でき，上層から褐灰色シルト質粘土，灰色シルトである。時期を限定できる出土土器はなく，詳細は不明であるが，周辺遺構の状況から中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階と考えられる。

出土土器（第 82 図）

558 は甕口縁部片で，口唇部を平坦におさめる。淡褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

SK42（第 81 図）

EN 区の東部に位置し，大部分は調査区北側へとのびる。残存部で長軸 1.65m，短軸 0.8mで楕円形を呈する土坑である。埋土は炭化物および地山ブロックを含む褐灰色粘土である。出土土器から中期中葉，信里編年のⅡ-1 様式新段階と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

559 ～ 560 は甕形土器で，560 は甕 3 aである。外面は粗い刷毛目調整を施し，内面はナデ調整によって仕上げる。

559 は外面を細かい刷毛目調整によって仕上げ，内面は斜方向の板状工具によるナデ調整で仕上げる。

561 は体部片で，3 つ 1 組の列点文を施す。外面は縦方向の磨き調整で仕上げ，内面は横方向の磨き調整によって仕上げる。調整の状況から体部下半と考えられる。

土器の色調および胎土は，いずれも褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。559 はいわゆる香東川下流域産土器（胎土 1 類）に近い胎土である。

SK43（第 81 図）

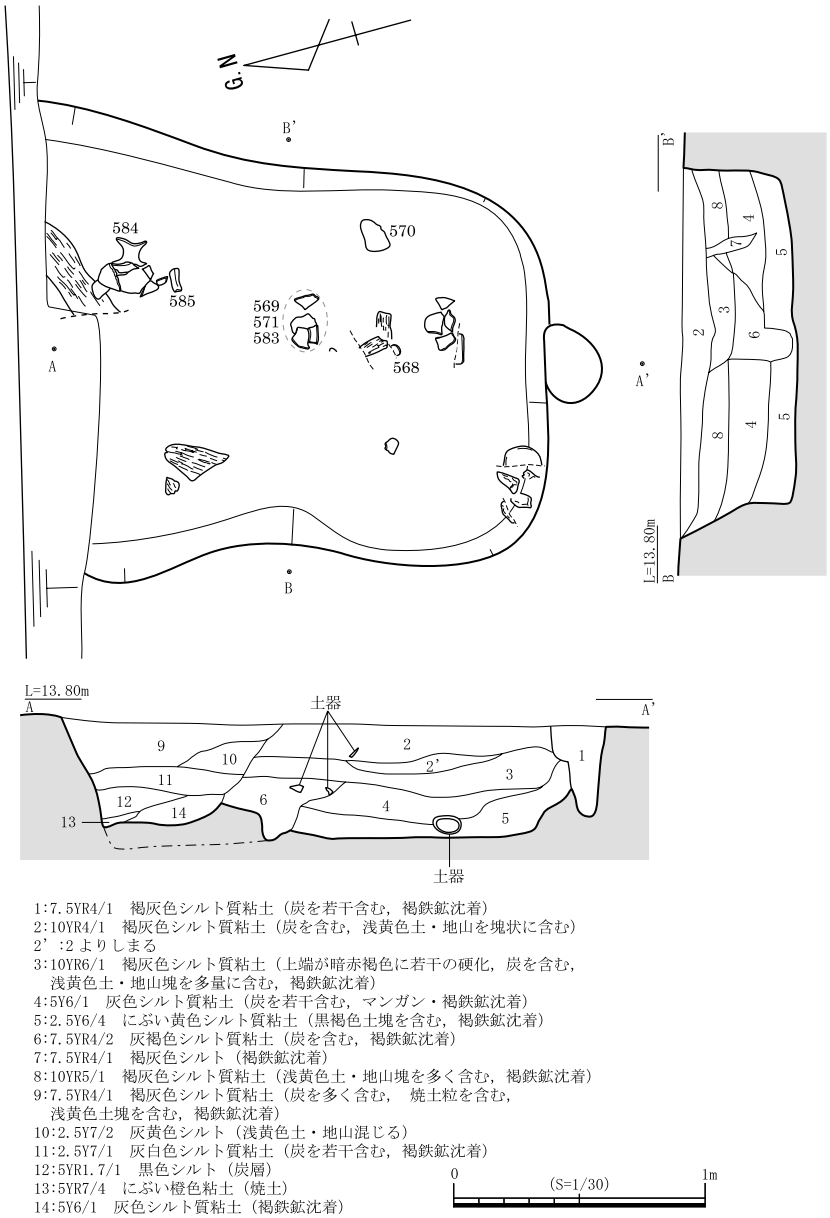
EN 区の東部に位置し，長軸 1.55m，短軸 1.15mで楕円形を呈する土坑である。底に安山岩があり，埋土は上層から炭や地山ブロックを含む褐灰色シルト質粘土，炭層，炭および地山ブロックを含む褐灰色シルト質粘土である。炭層が間層として認められ，埋没状況を示唆するが，その詳細については明らかにすることはできなかった。時期を限定できる出土土器はなく，詳細は不明であるが，周辺遺構の状況から中期中葉と考えられる。

出土遺物（第 82 図）

562 は底部片で，縦方向の磨き調整で，内面はナデ調整である。淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土で，非常に精良である。

SK21（第 83 図）

EN 区の中央やや西よりに位置し，一部は調査区外北



第 83 図　SK21 平・断面図（S=1/30）

側へとのびる。長幅 2.0ｍ，短幅 1.5ｍの隅丸方形状を呈する土坑である。掘り方は明瞭で，深度は 0.46ｍと深く，埋土は炭化物および焼土を含む褐灰色，灰褐色，灰黄色を基調としたシルト質粘土が水平堆積している。また，大型の炭化材も北側で認められた。南北方向の土層から二つの遺構の切り合いと想定されたものの，土器の出土状況，平面検出から，遺構の切り合い関係は認められず，大型の土坑として認識した。土坑の中央部の南北方向に完形に近い土器がまとまって出土した。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 84 図）

568 ～ 584 が弥生土器で，585 がサヌカイト製の石製品である。

568 は短頸壺で，口縁部成形時の指押さえの痕跡が認められる。器面が剥落しており，詳細は不明である。569 は直口壺で，壺６ｂである。頸部には押圧文を施した突帯を貼り付ける。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後，内外面ともに整形に伴うヨコナデ調整を施す。

570 ～ 580 は甕形土器で，口唇部を丸くおさめるもしくは平坦におさめるもの（甕３ａ）と，強いヨコナデ調整によって端部をつまみあげるもしくは跳ねあげるもの（甕３ｂ，３ｃ）がある。いずれも口縁部片のため詳細は

不明であるが，580 は外面を刷毛目調整後，口縁部をヨコナデ調整によって整形している。内面はナデ調整である。

581 は底部３ａで，外面は縦方向の磨き調整で仕上げる。

582 は鉢形土器である。外面は縦方向の刷毛目調整後，縦方向の磨き調整を施す。内面は横もしくは斜方向の刷毛目調整を施す。内外面ともに刷毛目調整後，ヨコナデ調整によって整形している。

583，584 は高杯形土器である。583 は３ｂで，口縁端部を内面に肥厚させ，外面には刺突文を施す。外面は刷毛目調整後，縦方向の磨き調整で仕上げる。内面は斜方向の磨き調整によって仕上げる。584 は口縁端部を内面に肥厚させ，２個１対の穿孔を施す。外面は脚部から杯部下半にかけ，縦方向の磨き調整で仕上げ，上半は横方向の磨き調整によって仕上げる。内面は横方向の丁寧な磨き調整によって仕上げる。脚部は円盤充填による接続技法で，内面にはしぼりの痕跡がみとめられる。外面には焼成剥離痕跡が面的に認められる。

土器の色調および胎土は５つに分類できる。

568，571 は灰白色，もしくは黄白色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土で，571 は砂粒が少なく，精良である。

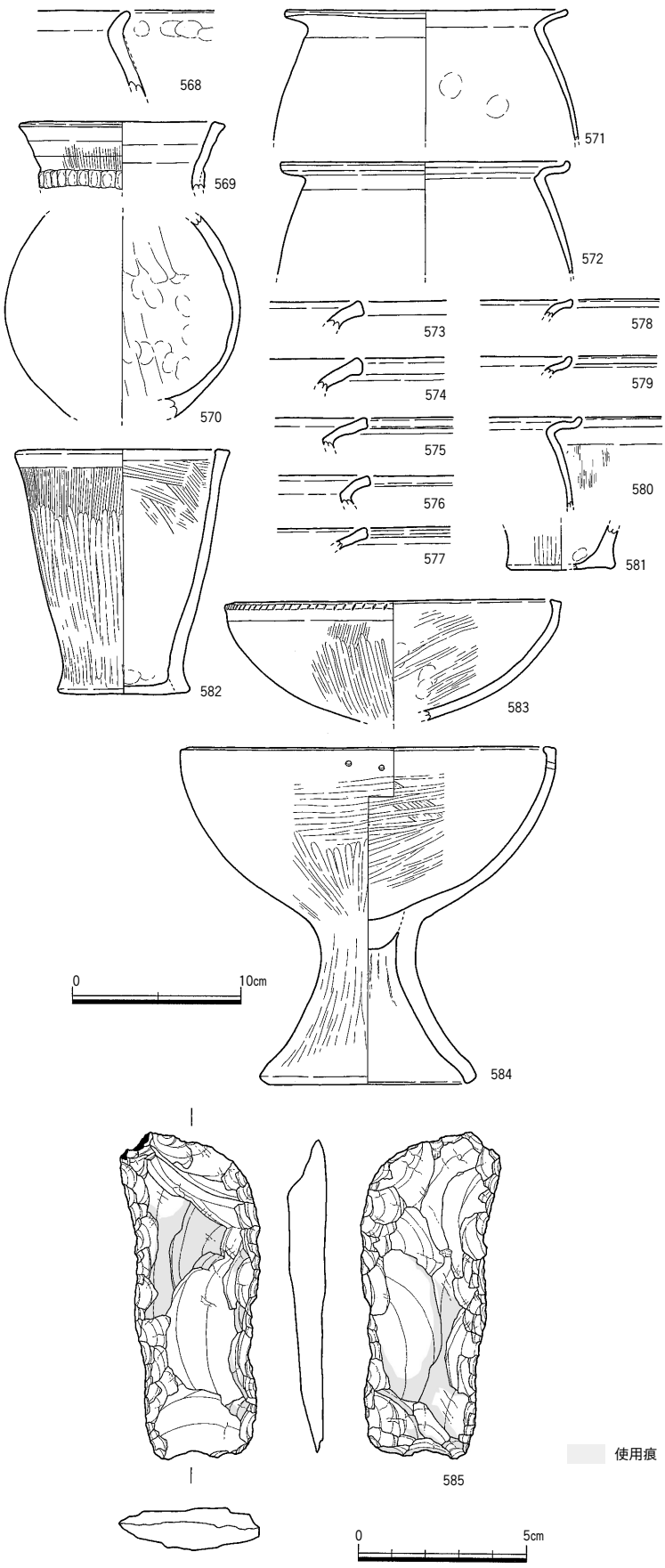
573 は淡黄褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

570，578 は淡灰褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

584 は明橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

それ以外の一群は，褐灰色，もしくは明褐色（574 ～ 576，583）を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を多量に含む胎土である。角閃石を多量に含むもの，雲母を多量に含むものなどヴァリエーションが認められる。なお，581 は角閃石を多量に含み，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似する。

585 は打製石斧である。両面調整し，



第 84 図　SK21 出土遺物（568～584：S=1/4，585：S=1/2）

側辺部には顕著な潰れが確認できる。背腹両面の体部には，使用痕が確認でき，使用痕の位置から，天地を逆転させながら使用していた可能性が考えられる。石材はサヌカイトである。

SK26（第 85 図）

ES 区のほぼ中央部に位置する。長軸 1.4ｍ，短軸 1.25ｍの不整な円形を呈する土坑である。SD07 を切り，遺構の一部がSH02 の支柱穴によって切られており，SD07⇒SK26⇒SH02 という順序が明らかである。掘り方が明瞭で，落とし穴遺構状にオーバーハングする。炭を多量に含む層が目立ち，黒褐色を呈する。焼土も多量に含む。第１ ～ ３層にかけて土器がまとまって出土し，検出時に確認した土器はすべて第１層に収まる。当遺構の本来の性格は不明確であるが，炭化材等を多量に含むことから，使用後，廃棄の過程で土器などとともに，炭化物も埋められた可能性を想定しておきたい。

出土遺物から時期は中期中葉，信里編年Ⅱ－１新段階と考えられる。

出土遺物（第 86・87 図）

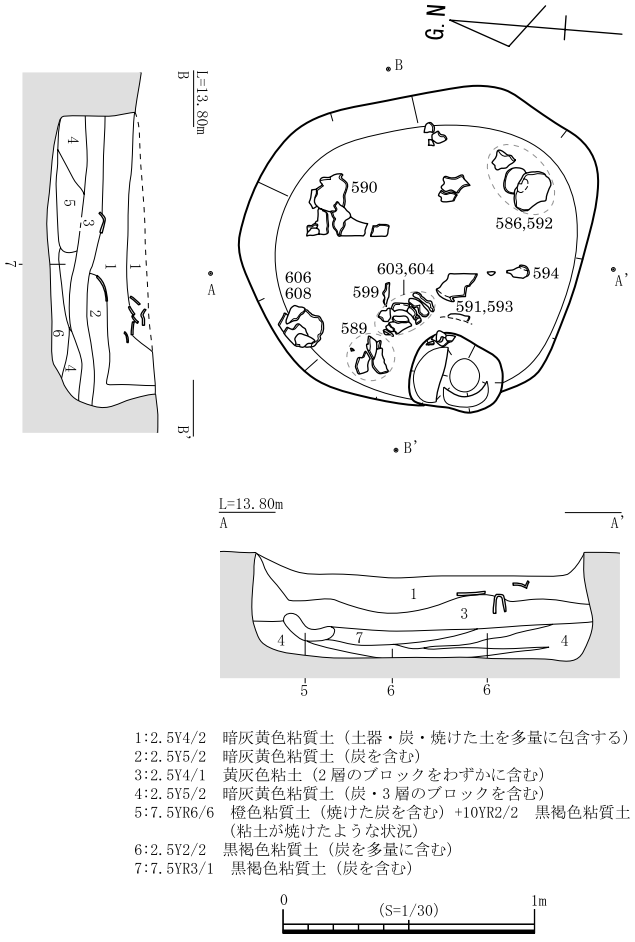
586 ～ 608 は弥生土器で，609 ～ 613 がサヌカイト製の石製品である。

586 ～ 589 が壺形土器である。586 ～ 588 は壺６の口縁部もしくは，体部片である。586 は外反しながら，「ハ」の字に開く壺で，口縁部端部に刺突文を施す。外面は縦方向の刷毛目調整後，縦方向の磨き調整によって仕上げる。刷毛目調整後に口縁部周辺をヨコナデ調整によって整形する。内面は板状工具による縦方向のナデ調整を施す。外面に煤が付着している。

587 は直線的にやや開く口頸部の壺で，外面は磨き調整によって仕上げ，２方向から磨き調整を施した状況が確認できる。頸部真中に穿孔を施す。口頸部内面には横方向の磨き調整を施し，体部は成形時の指押さえに加え，縦方向のナデ調整を施す。

588 は押圧文を施した突帯を貼り付けた壺で，外面は縦方向の刷毛目調整，内面は斜方向の磨き調整を施す。

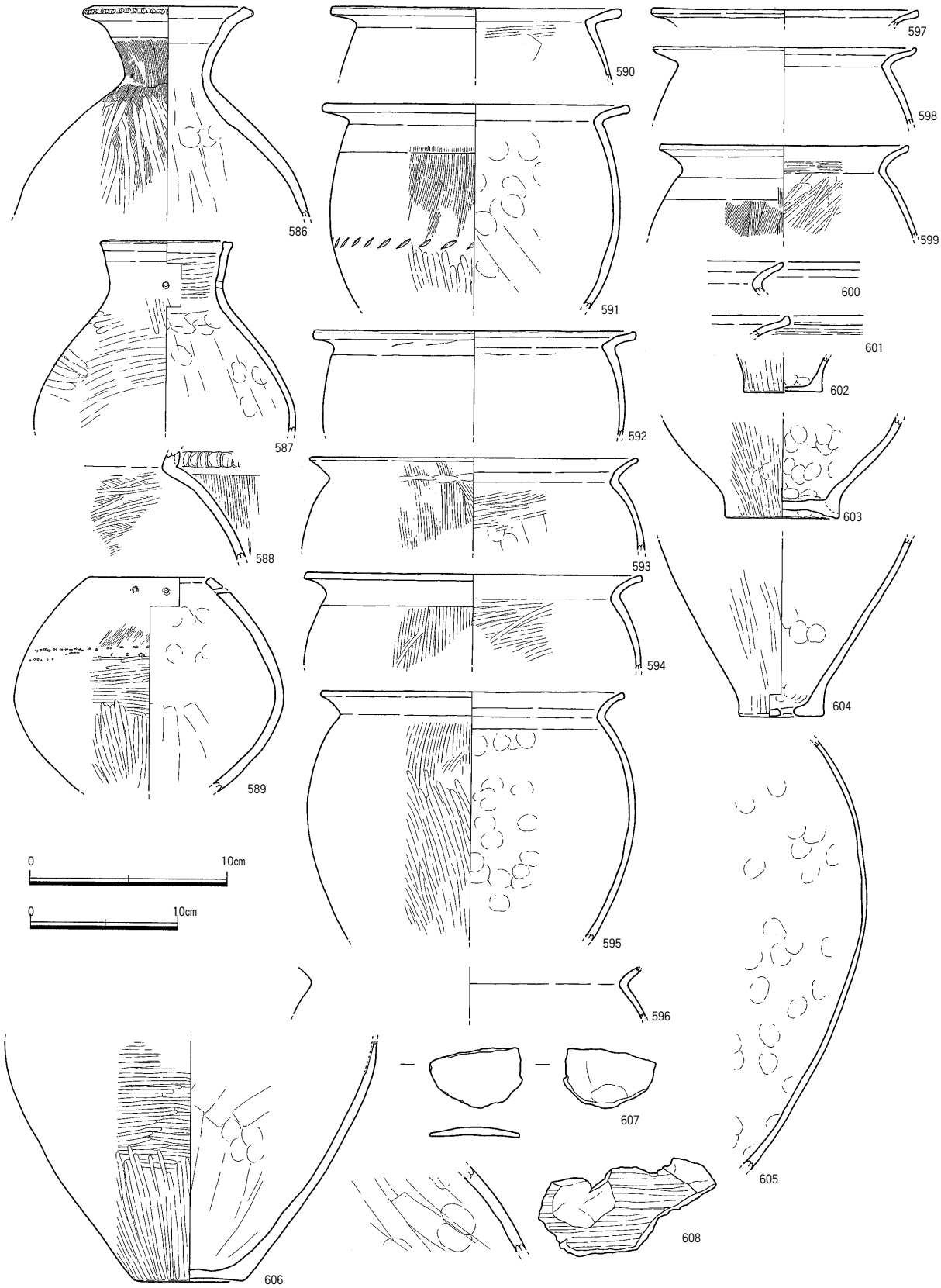
589 はヤシの実形を呈する無頸壺である。口縁部近くに２個１対の穿孔を施すものである。体部最大径のやや上位にも刺突文を２段に渡って施す。胎土は精良で，調整も丁寧である。外面は細かい刷毛目調整後，体部最大径周辺を細かい磨き調整を施し，体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面は成形時の指おさえが認められ，下半を板状の工具でナデ調整を施す。



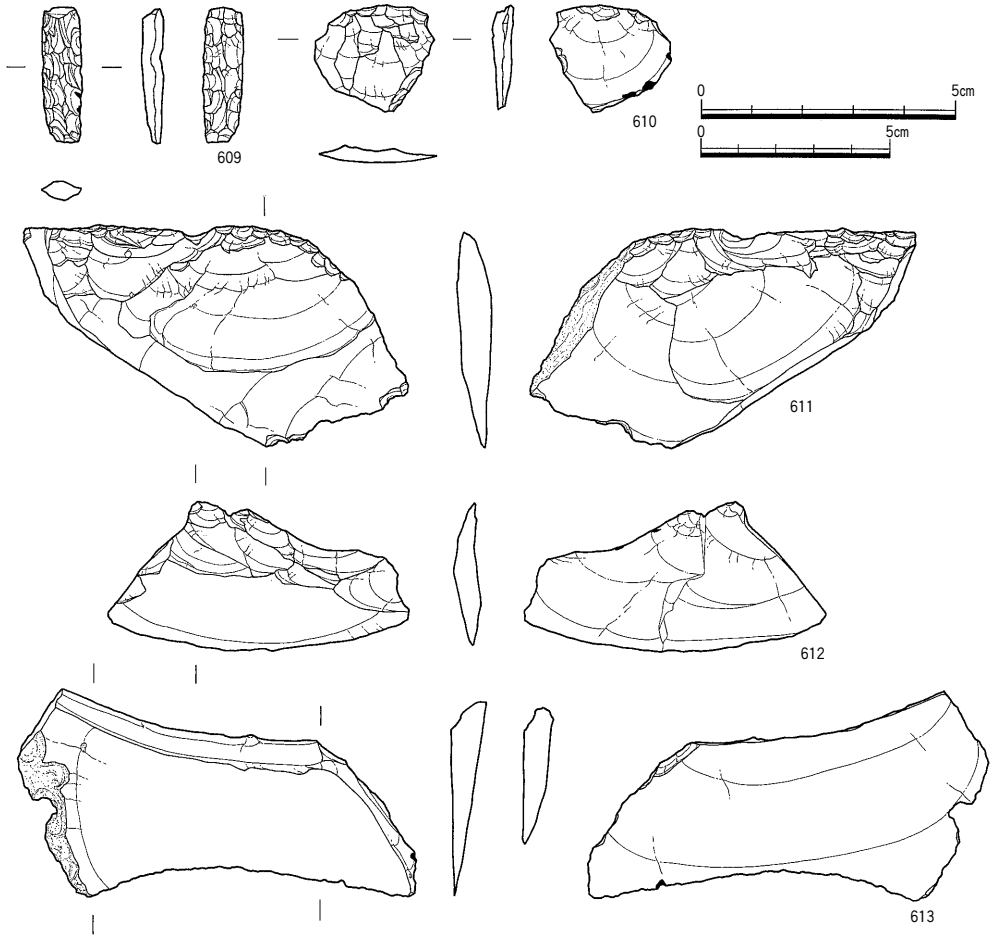
第 85 図　SK26 平・断面図（S=1/30）

590 ～ 601 は甕形土器で，口唇部を丸くもしくは平坦におさめるもの（甕３a）とややつまみ上げるもの（甕３b）に分類できる。591 は体部最大径やや下位に刷毛目列点文を施す。器面を観察できないものもあるが，基本的な調整は，以下のとおりである。外面は縦方向の刷毛目調整を施したのち，体部下半に縦方向の磨き調整を施す。磨き調整との先後関係は不明瞭であるが，刷毛目調整後口縁部をヨコナデ調整によって整形する。ただし，593 は口縁部まで刷毛目調整が及んで，ヨコナデ調整が認められない。内面は成形時の指押さえの痕跡が認められる。刷毛目調整後，斜方向の細かな磨き調整によって仕上げる。なお，592 の外面には焼成破裂痕跡が認められる。

602 ～ 605 は体部もしくは底部片である。底部周辺は縦方向の磨き調整によって仕上げ，内面は成形時の指押さえが認められる。604 は焼成後に穿孔を行っている。606 は非常に丁寧な作りで，外面は体部最大径周辺を横



第 86 図　SK26 出土遺物①（586～606：S=1/4，607,608：S=1/3）



第 87 図　SK26 出土遺物②（609：S=2/3，610～613：S=1/2）

方向の磨き調整を行った後，底部から縦方向の磨き調整を行う。606 は焼成破裂痕跡が認められる。

607 は焼成破裂土器片と考えられる土器片で，断面が凸レンズ状を呈する。ただし，破面を面取りしている可能性があり，紡錘車の可能性もある。一方，608 は焼成破裂痕土器の破片である。外面は磨き調整によって仕上げ，内面は縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。

土器等の色調および胎土は４つに分類できる。

586，597 は灰白色もしくは淡黄褐色を呈し，石英，長石を含む胎土で，597 は精良である。

587，596 は淡褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

602 は淡黄灰褐色を呈し，石英，長石，雲母を含む胎土である。

それ以外の一群は，褐灰色，明褐灰色を呈するもので，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。598，599，594，595 は雲母を多量に含むものである。

石製品は石錐,二次加工のある剥片,剥片が出土している。

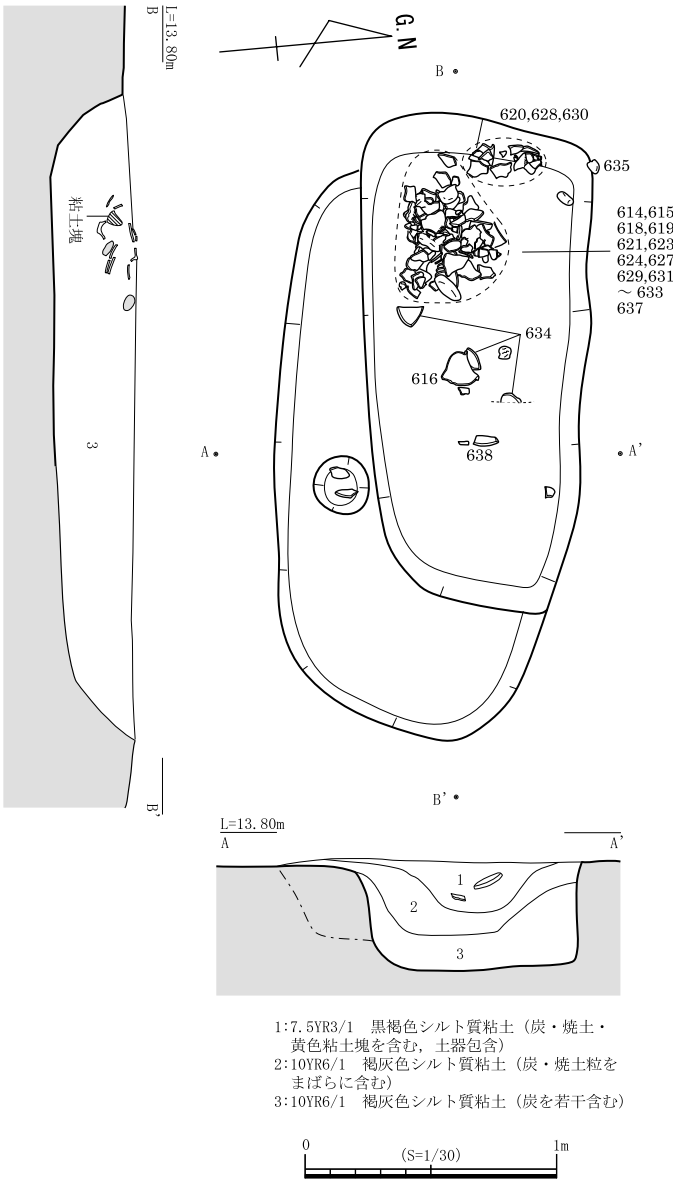
609 は頭部と錐部の境がなく，ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態を呈する石錐である。両面に深形細部調整を施す。頭部と錐部の端部を折損する。石材はサヌカイトである。

610・611 は二次加工のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。610 は背面側の右側辺の一部と，腹面側の左側辺の一部に二次加工が確認できる。611 は１側辺を自然面で構成し，もう片方の側辺は折損する大型横長剥片の打面側に二次加工を施す。

612・613 は横長剥片で，石材はすべてサヌカイトである。612 は１側辺を折損し，剥片の末端は羽毛状を呈するが，微細剥離痕などは確認できない。613 は大型の横長剥片で，剥片の打面側は斑晶によって折損している。１側辺を自然面で構成し，もう片方の側辺は折損している。剥片の末端は羽毛状を呈するが，微細剥離痕などは確認できない。

SK27（第 88 図）

ES 区のほぼ中央部に位置する。長軸 1.92ｍ，短軸



第 88 図　SK27 平・断面図（S=1/30）

0.7 ～ 0.9mの長方形の土坑である。

二つの土坑の掘り方が織り重なったような状況を呈する。なお，南側のピットはSK27 に伴うものではないと考えている。掘り方は明瞭で深さは 0.43mと深く，埋土は３層に区分でき，いずれの層も炭化物を含み，上から黒褐色シルト質粘土，褐灰色シルト質粘土である。

第１層から土器が多量に出土している。土器は細かな破片となっており，長軸方向の西側に集積したような状況で出土した。このような状況や土坑の形状等から，墓としての性格を考えたが，木棺痕跡などは確認することはできなかった。そのため，状況証拠のみで，明確な証拠は確認できていない。

時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えている。

出土遺物（第 89・90 図）

614 ～ 634 が弥生土器で，635 ～ 638 が石製品である。

614，623 は壺形土器である。614 は直口壺で，やや外反しながら，直立する。口縁部端部周辺はヨコナデ調整によって肥厚し，端部に刺突文を施す。623 は体部の中央が最大径となり，丸みを帯びた形状となる壺である。最大径位置に２段に渡って刺突文を施す。甕形同様に縦方向の刷毛目調整を施した後，横方向の磨き調整を施す。内面には指押さえが顕著に認められる。

615 ～ 620 は甕形土器の口縁部である。口縁端部を丸くおさめるもの，平坦に仕上げるもの（３a），つまみ上げるもの（３b）に分類できる。いずれも外面は縦方向の刷毛目調整後，縦方向の磨き調整を施す。口縁部周辺のヨコナデ調整は縦方向の刷毛目調整を施した後に行う。620 は外面に土器焼成剥離痕跡が認められる。

624 ～ 632 は底部片である。630，631 は壺底部片（底部３b）で，それ以外が甕の底部片（底部２）と考えられる。624 は高台型を呈する上げ底の底部で，それ以外はやや上げ底になるか，平坦な底部である。外面は磨き調整で仕上げ，内面は刷毛目調整，もしくは磨き調整によって仕上げる。成形時の指押さえが認められる。

633 ～ 634 は高杯形土器で，いずれも口縁端部周辺に穿孔をもつものである。633 は小片のため，詳細は不明であるが，634 から内外面ともに丁寧な磨き調整によって仕上げる。なお，634 は焼成剥離が帯状に生じており，器面の剥落が著しい。

土器の色調および胎土は３つに分類できる。

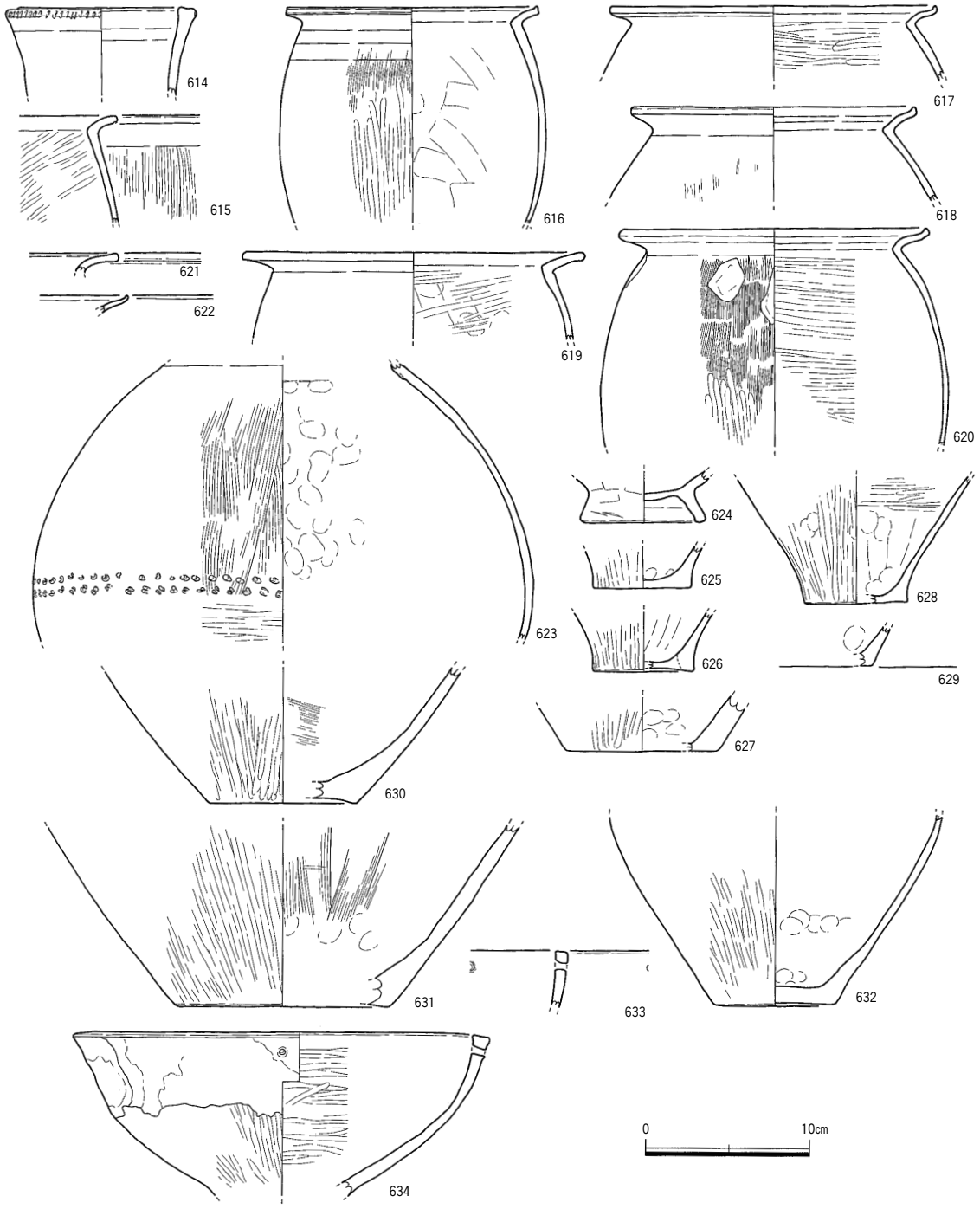
614 は灰白色を呈し，石英，長石を多量に含む。

618，633 は灰黄褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。618 は精良である。

それ以外の一群は，褐灰色もしくは明褐色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含む胎土である。616，619，623，627，630，631，634 などは雲母を多量に含む。626 は角閃石を多量に含む。

石製品は打製石斧,剥片,微細剥離痕のある剥片,石棒が出土している。

635 は打製石斧と考えられる。基部と１側辺を折損す



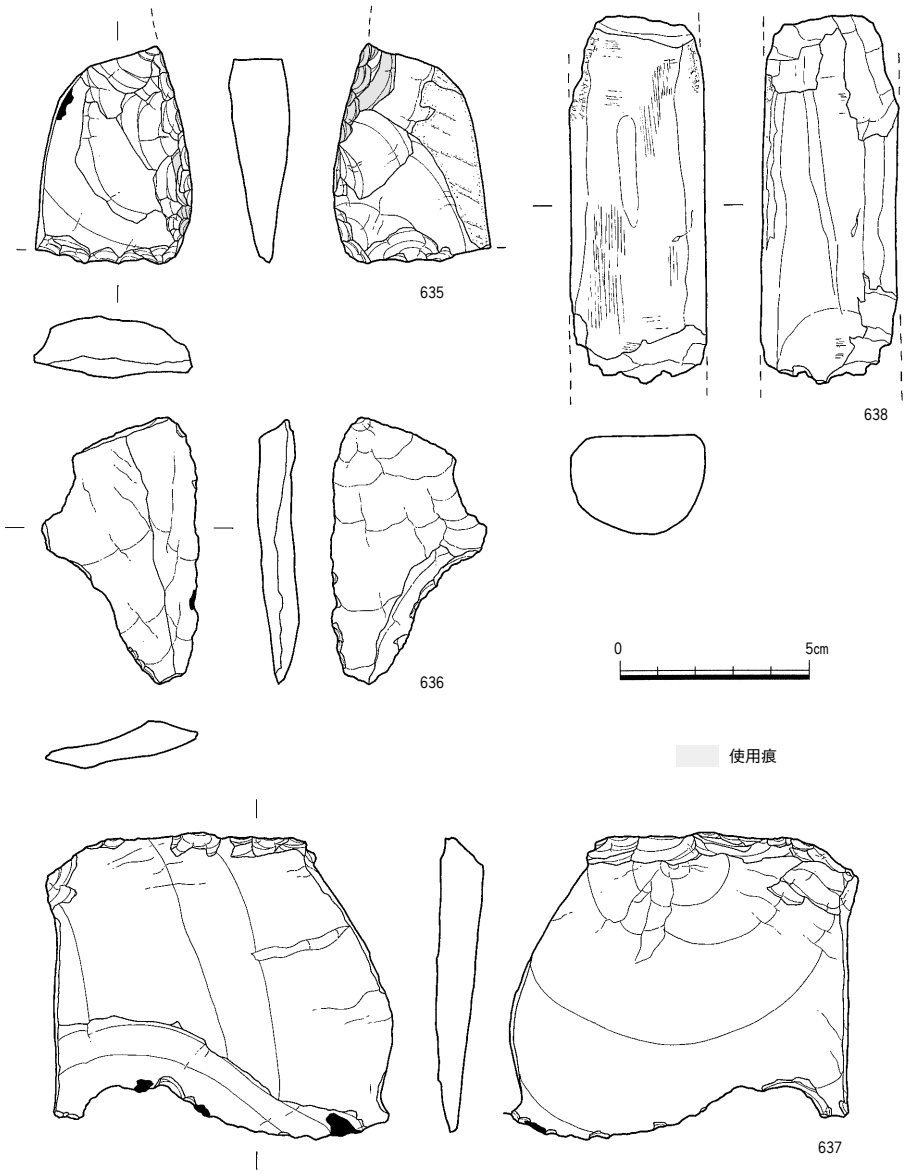
第 89 図　SK27 出土遺物①（S=1/4）

ることから，全体の形状は不明である。折損していない側辺には潰れの痕跡が著しい。背腹両面の側辺から体部にかけて使用痕が確認できる。石材は白色風化したサヌカイトである。

636 は安山岩の剥片である。平坦面を打面に剥片を剥離している。両側辺の一部に微細な剥離痕が確認できる。

637 は微細剥離痕のある剥片である。両側辺を折損しているため，全体の形状は不明であるが，大型の横長剥片であると考えられる。剥片の鋭利な端部に微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

638 は石棒と考えられる。両端を欠損しているため，全体の形状は不明である。石材は珪質結晶片岩である。



第 90 図　SK27 出土遺物②（S=1/2）

【SP】

SP03（第 91 図）

WN区の西側に位置する。長軸 2.7ｍ，短軸 2.2ｍの楕円形を呈するピットである。深度は５㎝で埋土は灰黄褐色粘質土である。時期は出土遺物が小片のため限定はできないものの，中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

639 は弥生土器で，高杯形土器の口縁部片である。小片のため詳細は不明である。橙褐色を呈し，石英，長石を多量に含む胎土である。

SP15（第 91 図）

ES 区の西南西隅部に位置する。直径 24㎝のピットである。深度は 28㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。楔形石器が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

663 は楔形石器である。上・下端部と１側辺に顕著な階段状の剥離が確認できる。石材はサヌカイトである。

SP24（第 91 図）

EN 区のほぼ中央部に位置する。直径 25 ～ 32㎝のピットである。深度は 42㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。甕形土器の底部片が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

640 は甕形土器の底部片である。破片のため詳細は不明である。色調は灰白色を呈し，石英，長石を多量に含む。

SP27（第 91 図）

EN 区のほぼ中央部に位置する。直径 25 ～ 32㎝のピットである。深度は 17㎝で，埋土は暗灰黄褐色粘質土である。楔形石器が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

662 は楔形石器と考えられる。両側辺を折損することから，全体の形状は不明であるが，上・下端部に潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

SP30 ～ SP33（第 91 図）

ES 区のほぼ中央部に位置する。SX18 の上層で確認したピット群である。

SP30 は長軸 42㎝，短軸 35㎝の楕円形を呈し，深度は 8㎝で，埋土は暗灰黄褐色粘質土である。

SP31 は長軸 47㎝，短軸 40㎝の楕円形を呈し，深度は 35㎝で，埋土は暗灰黄褐色粘質土である。

SP32 は長軸 40㎝，短軸 28㎝の楕円形を呈し，深度は 23㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。

SP33 は長軸 36ｍ，短軸 25㎝の楕円形で，深度は 65㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。検出時に壺形土器片，甕形土器片などが出土している。時期を限定できるのは，SP30 と 31 のみで，いずれも中期前葉と考えられる。

出土遺物（第 92 図）

641 はSP30 の出土遺物である。壺形土器の体部片で，外面には櫛描き状の波状文のほか，流水文状の文様が施される。外面は刷毛目調整後磨き調整によって仕上げ，内面は刷毛目調整が認められる。色調は灰橙色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

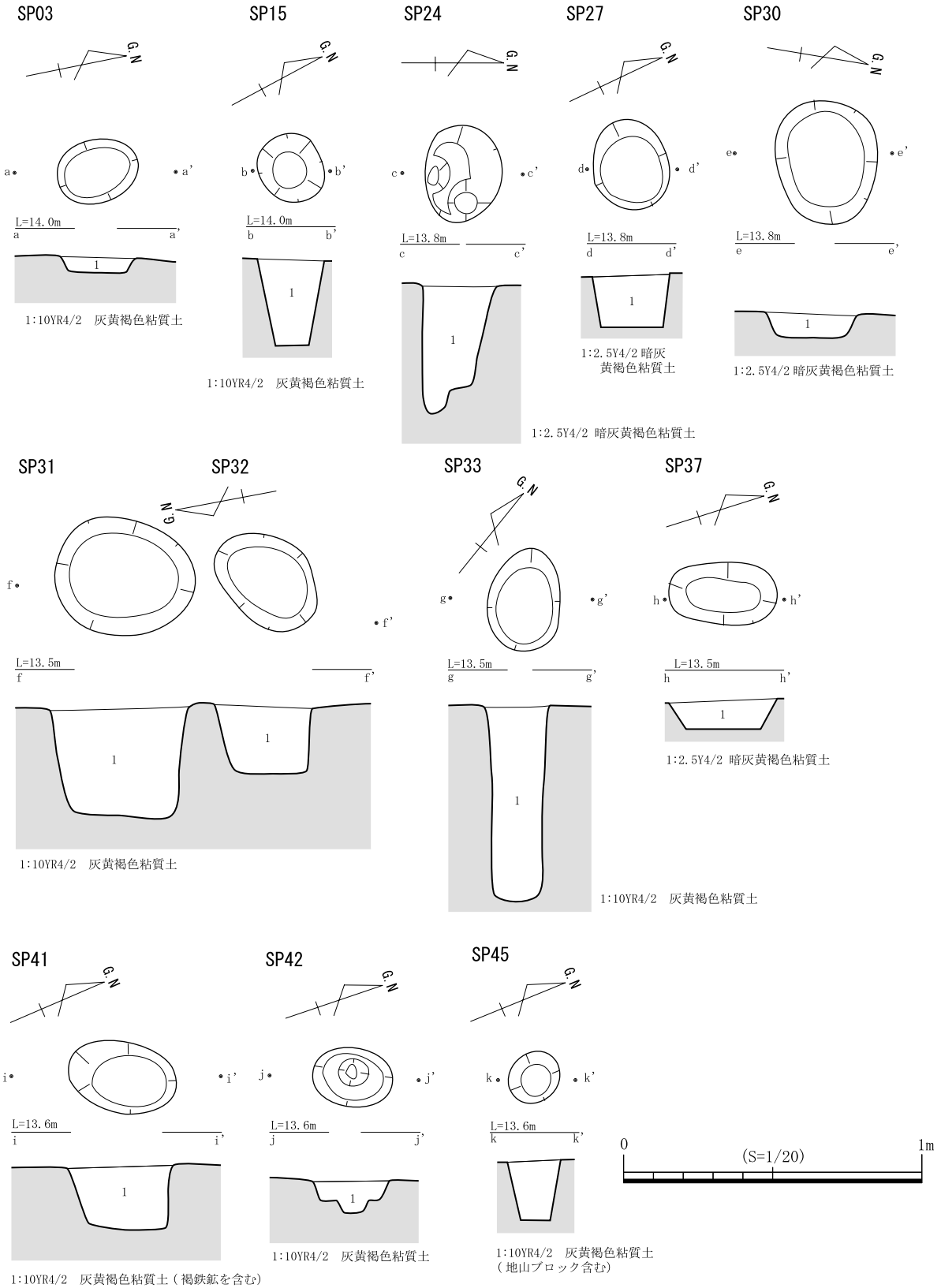
649 ～ 652，657 はSP31 ～ 33 検出時の出土遺物である。640 は壺もしくは甕の口縁部片で，端部をつまみ上げる。650，651 は丸くおさめるタイプのものである。652 は底部片である。いずれの土器も色調は灰白色もしくは黄灰褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。649 は非常に精良である。

657 は平基式の石鏃である。調整は背腹両面を交互に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。切先を折損する。

SP31 からは弥生土器，石鏃,二次加工のある剥片,スクレイパーが出土している。

642 は壺形土器の体部片で，「ハ」の字に開く口縁部形態である。頸部には２条の三角突帯を貼り付けている。外面は刷毛目調整で仕上げる。643 は甕形土器の体部片である。646 ～ 648 は底部片で，外面は磨き調整によって仕上げる。

ほとんどの土器が灰白色もしくは黄灰褐色を呈し，644 と 649 が淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土で



第 91 図　SP平・断面図（S=1/20）

ある。642，643 は精良な胎土である。

656，658 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。656 は凹基式の大型石鏃である。粗い浅形 ～ 深形細部調整を施し，基部は大きな１撃の剥離で作り出す。切先を折損する。658 は有茎式の大型石鏃である。１側辺を折損し，両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。茎部と先端部との境は大きな一撃の剥離で作り出す。

659 は二次加工のある剥片である。１側辺を自然面で構成し，打面は折損する。背面側の剥片端部に細部調整が認められる。石材はサヌカイトである。

660 はスクレイパーと考えられる。両側辺を折損するが，１側辺には折面を打面に調整が認められる。刃部は両面調整する。石材はサヌカイトである。

SP37（第 91 図）

ES 区の東部に位置する。長軸 37㎝，短軸 21㎝の楕円形を呈するピットである。深度は 9㎝で，埋土は暗灰黄褐色粘質土である。打製石斧が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

653 は甕形土器の肩部片である。小片のため詳細は不明である。変色しており，本来の色調は不明であるが，石英，長石を含む胎土である。

SP41（第 91 図）

EN 区の東部に位置する。長軸 37㎝，短軸 24㎝の楕円形を呈するピットである。深度は 21㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。甕形土器が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

654 は甕形土器の肩部片である。小片のため詳細は不明である。淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

SP42（第 91 図）

EN 区の東部に位置する。長軸 27㎝，短軸 20㎝の楕円形を呈するピットである。深度は 10㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。甕形土器が出土している。時期は出土遺物から限定することは難しいが，中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階と考えられる。

出土遺物（第 92 図）

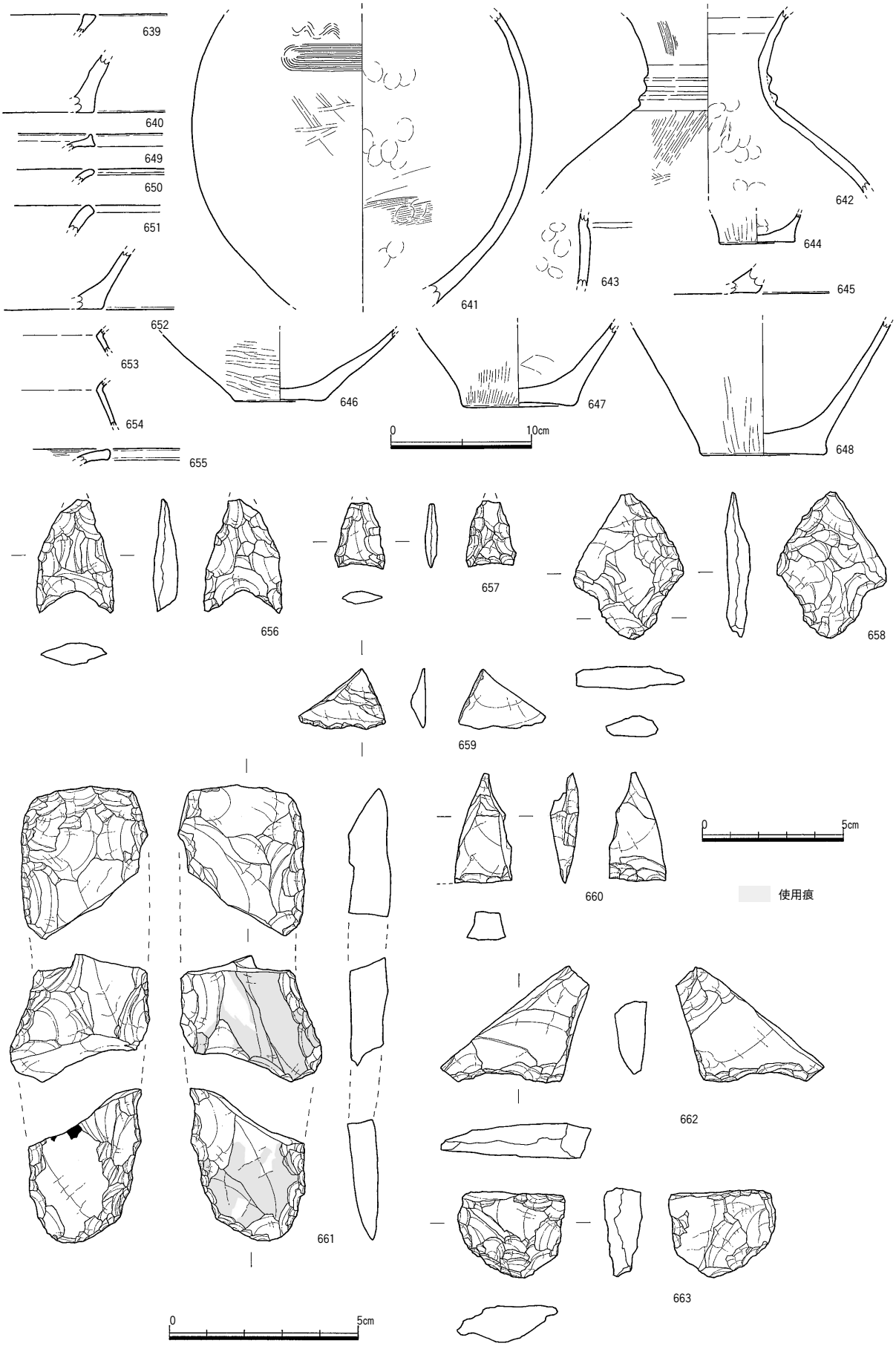
655 は甕形土器の口縁部片である。口縁部端部は平坦に仕上げる。内面に刷毛目調整が施される。褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。

SP45（第 91 図）

EN 区の東部に位置する。直径 18㎝のピットである。深度は 20㎝で，埋土は灰黄褐色粘質土である。打製石斧が出土している。時期は出土遺物から限定することはできないものの，中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 92 図）

661 は同一個体の打製石斧と考えられるが，接合はしない。両側辺に顕著な潰れが，腹面側の体部から刃部にかけて使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。



第 92 図　SP出土遺物（639～655：S=1/4，656～658：S=2/3，659～663：S=1/2）

【SD】

SD01（第 93 図）

WS・WN区の西部を横断する溝状遺構である。幅 0.3 ～ 0.6ｍで延長は 24.5ｍで，調査区外へとのびる。深度は 20㎝で，埋土は灰黄褐色シルト質粘土の単層である。後述するSR01 に並走する。時期は出土遺物から限定することはできないものの，甕形土器の底部片などから中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 96 図）

664 は突帯文土器の口縁部片で，口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。口唇部および断面三角形の突帯に刺突文を施す。黄灰褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

665 は甕形土器の底部片で，外面は縦方向の磨き調整，内面は縦方向のナデ調整によって仕上げる。淡灰褐色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。

SD03（第 93 図）

WS・WN区の西部を横断する溝状遺構である。幅 0.3 ～ 0.75ｍで延長は 12ｍで，深度は 15㎝で，埋土は２層に分層でき，上層から灰色シルト質粘土，緑灰色砂質シルトである。後述するSR01 とSD01 に並走する。時期は出土遺物から限定することはできないものの，弥生前期以降と考えられる。

出土遺物（第 96・97 図）

666 は突帯文土器の口縁部もしくは体部片である。断面三角形の突帯に刻み目を施すものである。淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。673 ～ 675 は材質および器種等についても不明であるが，鉄分である可能性が高い。

703 は石斧の粗割から研磨段階の資料と考えられる。表面の左側側辺と体部，裏面の刃部付近に研磨痕が確認できる。石材は珪質泥岩である。

SD05（第 93 図）

ES 区の西部に位置する溝状遺構である。幅 0.3 ～ 0.7ｍで延長は 2.5ｍで，SX09 から南にのび，調査区外へとのびる。深度は 10㎝で，埋土は２層に分層でき，上層から灰色粘質土，灰黄色粘土である。時期は出土遺物から限定することはできないものの，サヌカイトの石製品などから中期中葉の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物（第 96・97 図）

691 は石鏃の切先である。基部を折損するため，全体の形状は不明である。石材はサヌカイトである。

708 は楔形石器である。１側辺を折損し，３側辺に顕著な潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

SD07（第 94 図）

ES 区のほぼ中央部に位置する溝状遺構である。幅 0.6 ～ 0.9ｍで延長は約 12ｍで，円形を呈しながら，調査区外へとのびる。深度は 18㎝で，埋土は２層に分層でき，上層から褐灰色シルト，褐灰色砂混じりシルトである。時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階と考えられる。

出土遺物（第 96・97 図）

667，668，671，672 は甕形土器の口縁部周辺の破片である。671 はヨコナデ調整によってつまみ上げるが，それ以外は丸くおさめる。670 は甕の底部３ａで，外面を磨き調整によって仕上げる。いずれも褐灰色もしくは明褐色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。

669 は脚台付の製塩土器の脚部片と考えられる。褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母等を含む胎土である。

石製品は石鏃,石錐,スクレイパー,微細剥離痕のある剥片,二次加工のある剥片が出土している。

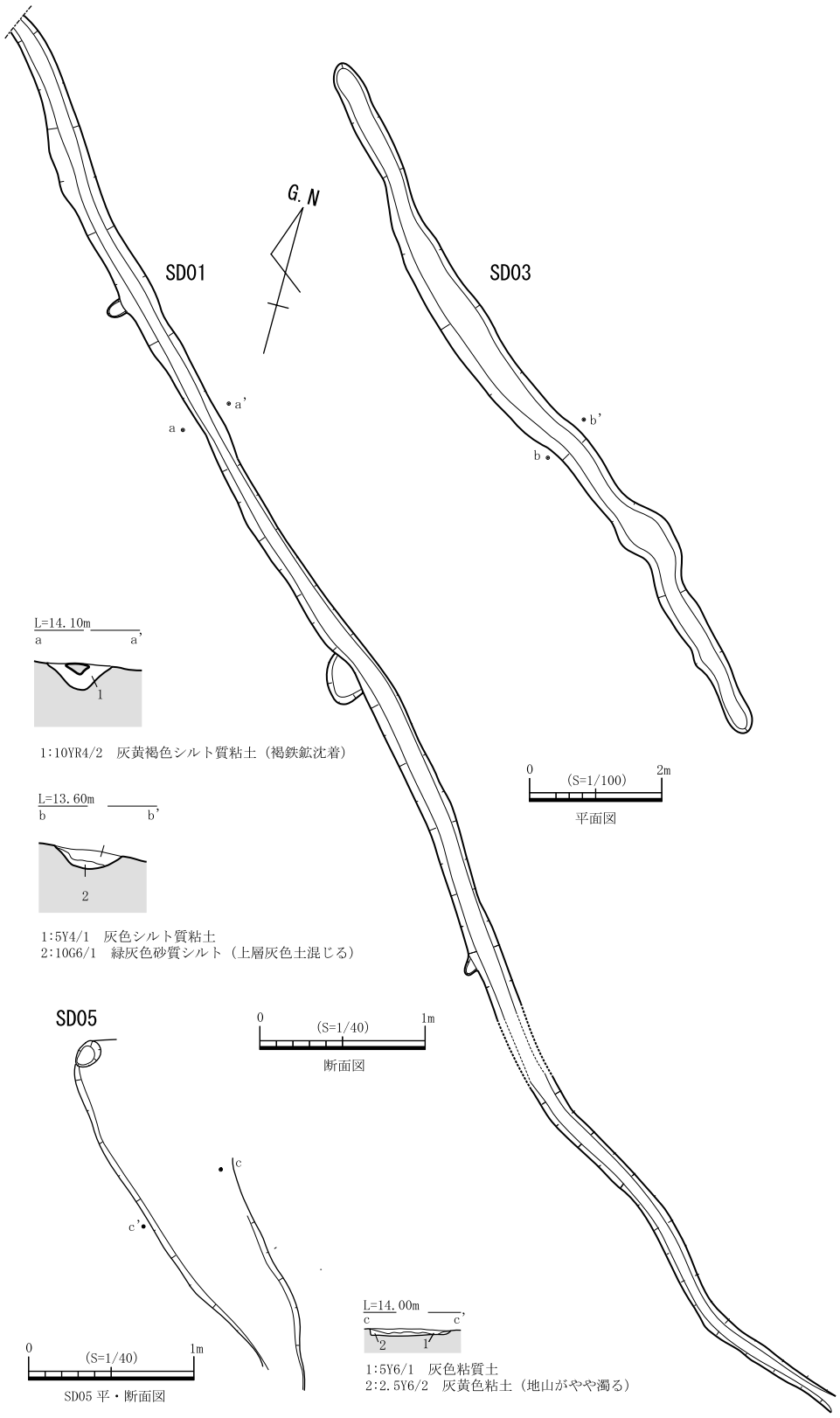
692・693 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。692 は平基式の大型石鏃である。両面に浅形細部調整を施し，腹面側を最終的に調整する。693 は基部を折損しているが，凸基Ⅰ式の大型石鏃と考えられる。調整は背腹両面交互に極浅形細部調整を施す。

701 は頭部と錐部の境が明瞭で，錐部が細長い形状を呈する石錐である。錐部は側辺部の両面に浅形細部調整を施して成形する。頭部と錐部先端を折損する。石材はサヌカイトである。

702 は打製石斧である。体部から基部を折損するため，全体の形状は不明である。側辺から先端にかけて，顕著な潰れが認められる。また，先端部と体部の一部に弱い使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

704 はスクレイパーである。２側辺を折損するため，全体の形状は不明である。刃部は主に背面側を調整して成形する。石材はサヌカイトである。

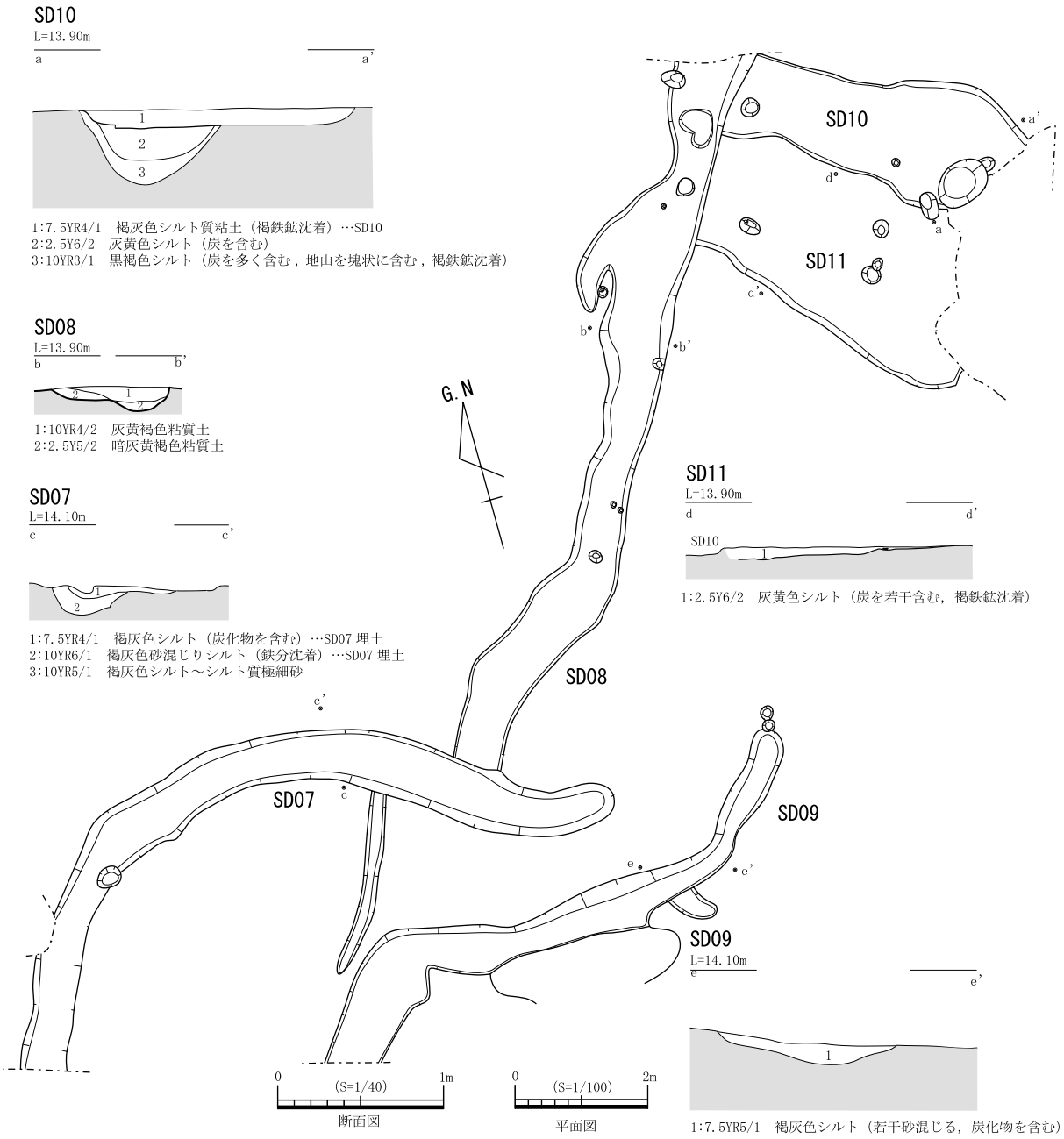
710 は大型横長剥片素材の微細剥離痕のある剥片であ



第 93 図　SD01・03・05 平・断面図

る。剥片は平坦面を打面に剥片を剥離しており，ツインバルブが確認できる。１側辺ともう片方の側辺の一部を自然面で構成し，側辺の一部は折損する。刃部は両面調整し，微細剥離痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

711 は二次加工のある剥片である。縦長剥片を素材



第 94 図　SD08～11 平・断面図（平面図:S=1/100,断面図:S=1/40）

に，背面側の剥片端部に二次加工が確認できる。石材はサヌカイトである。

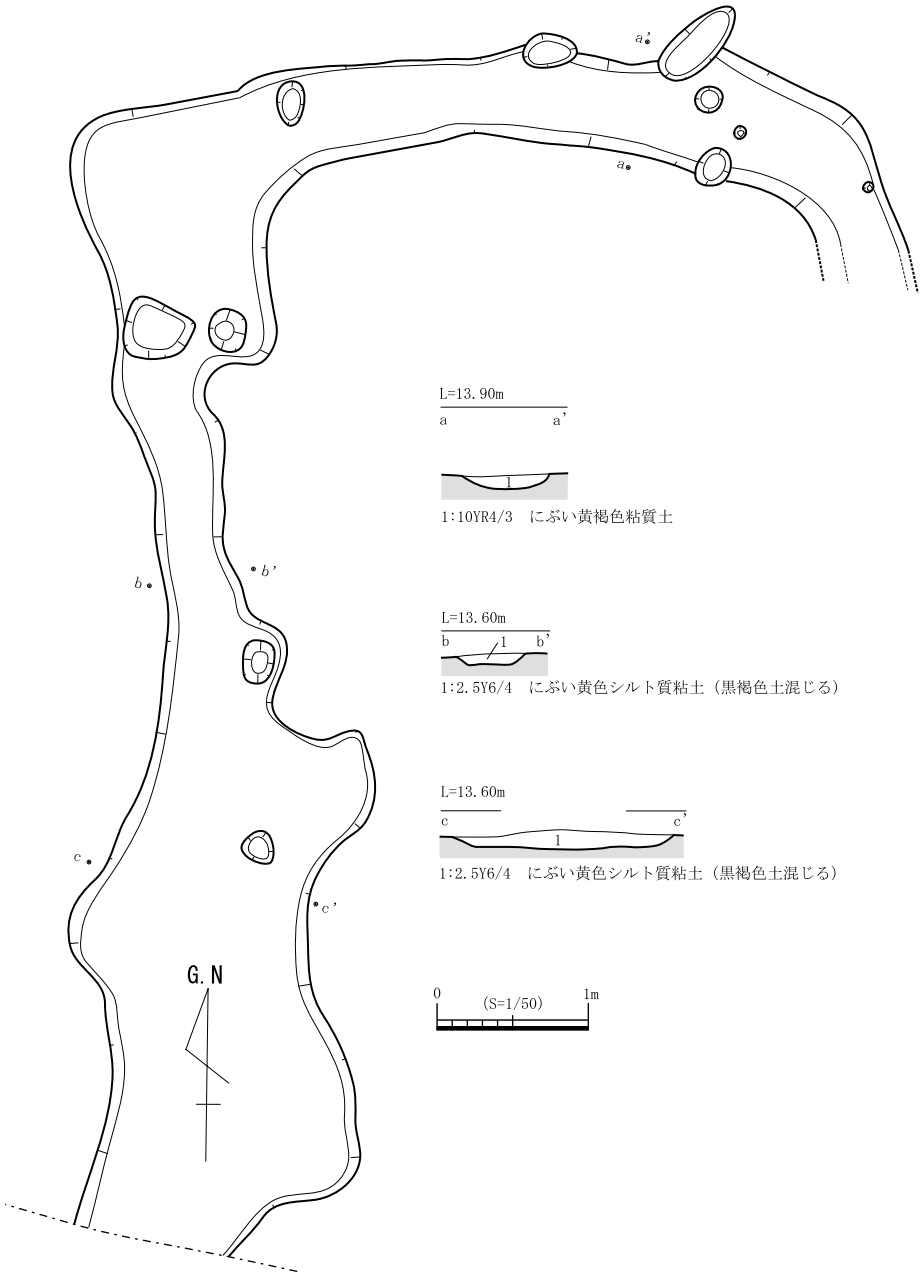
SD08（第 94 図）

ES ～ EN 区を縦断し，ほぼ調査区中央部に位置する溝状遺構である。幅 0.6 ～ 1.5ｍで延長は 11.5ｍで，円形を呈しながら，調査区外へとのびる。深度は 14㎝で，埋土は２層に分層でき，上層から灰黄褐色粘質土，暗灰黄褐色粘質土である。時期は出土遺物から中期後葉，信里編年Ⅲ-1 様式と考えられる。

出土遺物（第 96 図）

676 は壺形土器の口縁部片と考えられる。口縁端部を直立させ，凹線文を施す。内外面ともにヨコナデ調整によって仕上げる。橙褐色を呈し，石英，長石を含むが，非常に精良な胎土である。

677 は甕形土器の肩部片である。小片のため詳細は不明である。黄灰褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。678 は脚部片で，三角形の透かしを施す。淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。裾部端部は外側につまみ出す。内面は削りによって成形する。679 は底部片で，焼成剥離痕跡が認められる。褐灰色を呈し，石



第 95 図　SD12 平・断面図（S=1/50）

英，長石，角閃石，雲母等を含む胎土である。

688 は紡錘車で，弥生土器片の転用である。破面を成形し，円形に仕上げる。片面には，磨き調整が認められる。穿孔は貫通していない。褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母等を含む胎土で，いわゆる香東川下流域産土器（胎土 1 類）に類似する。

694 は平基式の石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

SD09（第 94 図）

ES 区のほぼ中央部に位置する溝状遺構である。幅 0.3 ～ 1.1ｍで延長は 8.5ｍで，SD07 に並走して折れ曲がりながら，調査区外へとのびる。深度は 12㎝で，埋土は褐灰色シルトである。時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 96 図）

681，682 は甕形土器の口縁部片である。681 は口縁端

部をヨコナデ調整によってつまみ上げる。いずれも小片のため，詳細は不明である。いずれも，褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土で，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似している。

SD10（第 94 図）

EN 区のほぼ中央部に位置する溝状遺構である。幅１～ ２ｍで延長は４ｍで，東西をSD08 とSX14 に切られる。SD11 を切る。深度は 10㎝で，埋土は灰褐色シルト質粘土である。時期は出土遺物から中期中葉，信里編年Ⅱ-2 様式と考えられる。

出土遺物（第 96 図）

683 は壺形土器の口縁部片（壺８？）である。口縁部端部はヨコナデ調整によって平坦面を作りだす。黄灰褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

684 は甕形土器の底部片で，外面は縦方向の磨き調整によって仕上げ，内面には成形時の指押さえが認められる。褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母等を含む胎土で，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似している。

SD11（第 94 図）

EN 区のほぼ中央部に位置する溝状遺構である。幅 1.7 ～ 2.5ｍで延長は 4.5ｍで，東西をSD08 とSX14 に切られ，北側をSD10 に切られる。深度は 8㎝で，埋土は灰褐色シルト質粘土である。時期は出土遺物からは限定できないが，中期中葉の範疇でおさまるものと考えられる。

出土遺物（第 96・97 図）

685 は甕形土器の体部片と考えられる。外面には４条の沈線文と木の葉状の文様が施される。

686 は底部片で，外面を縦方向の磨き調整で仕上げる。687，689 は弥生土器片の転用による紡錘車である。いずれも破面を整形し，不整な円形を呈する。焼成後穿孔で，689 は裏面まで達していない。いずれも，黄灰褐色，淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

石製品は石鏃,石鏃未製品,スクレイパー,石小刀,楔形石器が出土している。

695，696，698，699 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。695 は凹基式の石鏃である。背面側から腹面側の順に深形細部調整を施す。696 は平基式の小型石鏃である。切先を折損する。背面側に極浅形 ～ 浅形細部調整を，腹面側に極浅形細部調整を施す。698 は凸基Ⅰ式の石鏃である。調整は背面側から腹面側の順に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。側辺はやや鋸歯状を呈する。切先を折損する。699 は平基式の石鏃である。両面に極浅形細部調整を施して成形する。

697 は石鏃未製品である。腹面側は，浅形細部調整を施すが，切先と基部は未調整である。石材はサヌカイトである。

705，706 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。705 は２側辺を折損するため，全体の形状は不明であるが，刃部は主に背面側を調整して作り出し，やや摩滅している。706 は１側辺を折損するため，全体の形状は不明である。背部は背潰し加工は確認できない。刃部は両面調整し，やや摩滅している。

707 は先端と基部を折損しているため，全体の形状は不明であるが，石小刀と考えられる。背腹両面に深形細部調整を施し，外湾している刃部には潰れが認められる。石材はサヌカイトである。

709 は楔形石器である。折損面を打面に４側辺すべてに潰れが確認できる。石材はサヌカイトである。

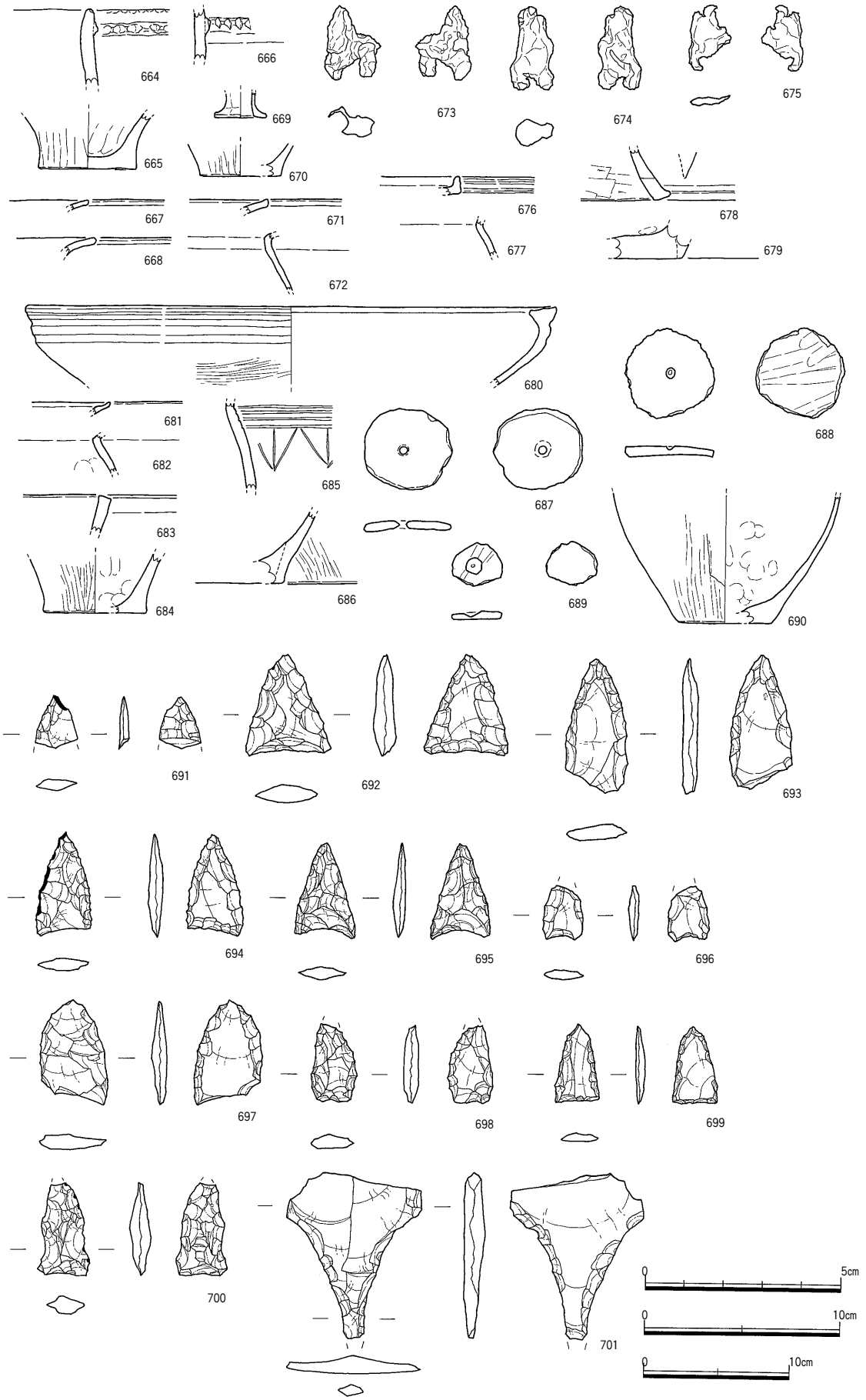
SD12（第 95 図）

ESからEN 区にかけて，展開する溝状遺構で，調査区東部に位置する。幅 0.44 ～ 1.6ｍで延長は約 13ｍで，北側で２度クランクし，南側は調査区外へとのびる。深度は８～ 14㎝で，埋土は場所によってやや異なるが，にぶい黄褐色粘質土もしくはにぶい黄色シルト質粘土である。時期は出土遺物から限定できないが，中期中葉の範疇でおさまるものと考えられる。

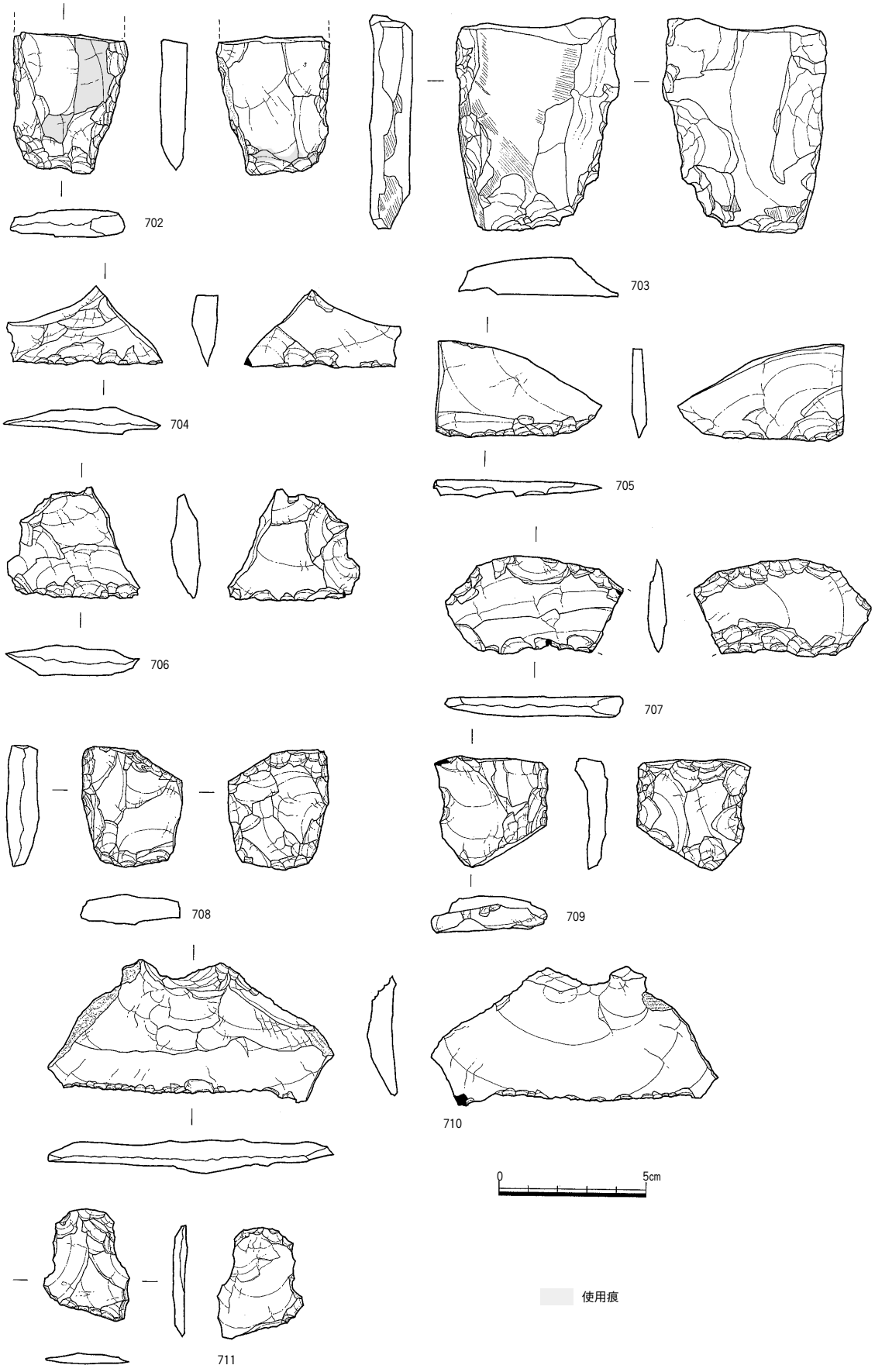
出土遺物（第 96 図）

690 は甕形土器の底部片である。外面は縦方向の磨き調整で仕上げ，内面は成形時の指押さえが認められる。外面には焼成剥離痕跡が認められる。褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

石製品は石鏃,打製石斧が出土している。700 は平基式の石鏃である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施すが，調整はやや粗い。切先を折損する。石材はサヌカイトである。



第 96 図　SD01・03・05・07・08・10・11・12 出土遺物①
（664～672,676～686,690：S=1/4，673～675,687～689：S=1/3，691～701：S=2/3）



第 97 図　SD01・03・05・07・08・10・11・12 出土遺物②（S=1/2）

【旧河道】

SR01（第 98 ～ 100 図）

SR01 は，WS区からWN区にかけて展開する幅 5.5ｍの旧河道で，調査区内で大きく蛇行する。そのため，中州状の微高地を挟んで北流する。その後，石清尾山南麓を東流しているものと考えられる。水源地は北側に位置する石清尾山山塊と考えられ，谷部から流れ出た流路と考えている。

第 100 図第 6 層はSR01 および周辺の弥生時代中期の遺構が埋没した後に堆積した層で，土層や土質などの状況から水田面の可能性が想定された。

第 7 層以下の各層は旧河道中の堆積土で，木質遺物や炭化物，土器を多く含むシルト／粘土層を中心として堆積している。SR01 は集落が営まれた時期（弥生時代中期中葉）には川として機能していたものと考えられるが，SR01 が埋没した後に形成されたSX01 を覆う土中からやや特異な形態ではあるが，弥生時代後期前半以降と考えられる土器が出土しており，弥生時代後期には埋没していた可能性が高い。

中州を挟んで東岸側に炭化した木材がまとまって出土した。ある程度，SR01 が埋没した後に廃棄されたか，漂着したものと考えられる。樹皮の残る自然木も含まれており，その一部を年代測定（163 頁試料No.2）した結果，322 BC ～ 206 BC（74.6％）という年代が出ている。なお，土層断面中の「●」・「○」印は花粉分析等資料採取箇所を示す。

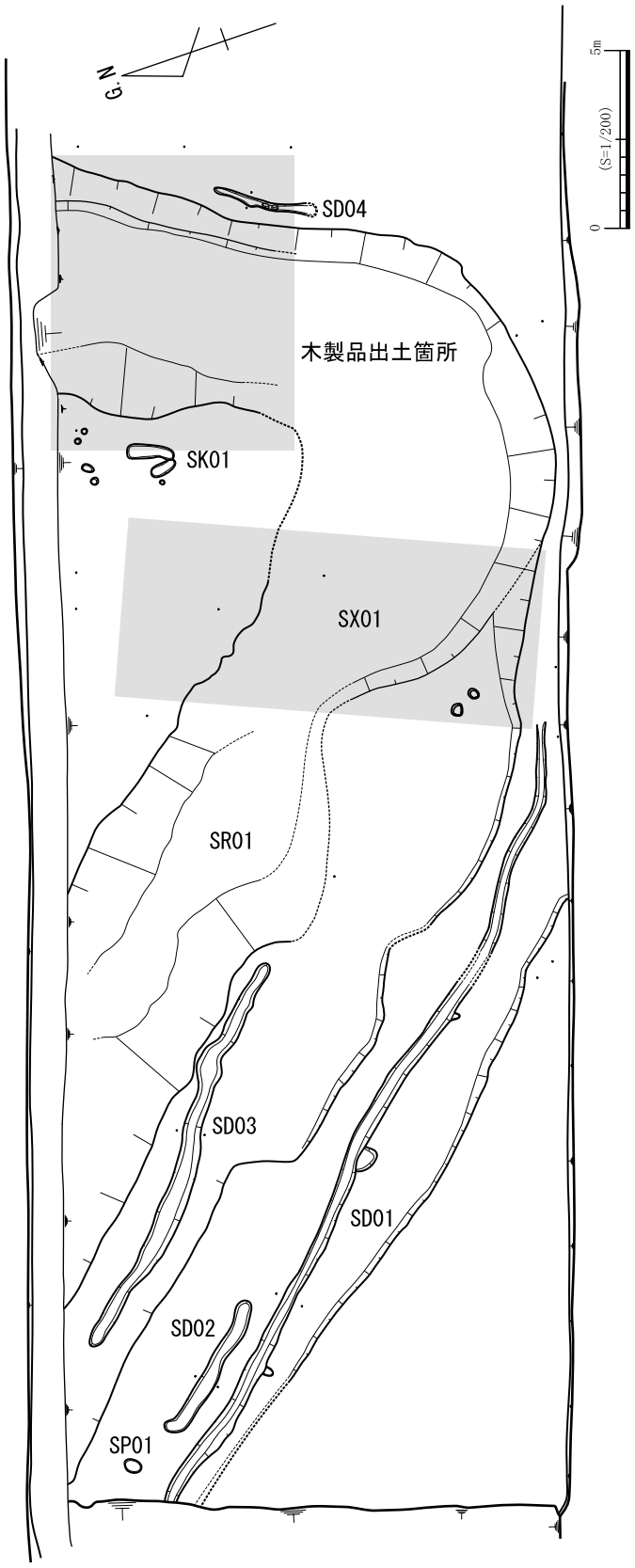
調査終了後，中州部分の断ち割り調査を実施したところ，深さ 2.1ｍの第 100 図第 30 層でSR01 の流れの方向とは異なるさらに古い流路を確認することができた。土器などは出土せず，具体的な時期を限定することはできなかった。

出土遺物（第 101 ～ 104 図）

712 ～ 769 が弥生土器，771，773 が須恵器，772 が土師質土器，770，774 が土製品，775 ～ 780 が石製品，781 ～ 782 が木製品である。

712 ～ 718 は壺形土器である。712 ～ 714 は広口壺である。712 壺 2 bで，口唇部に刺突文を施すものである。

713 は壺 2 aである。714 は壺 3 aで，口縁部を上部に拡張し，凹線文を施す。口縁部内面には斜格子文，刷毛目状工具による刺突文を施す。頸部には粘土紐を貼り付けた後，押圧文を施す。外面は刷毛目



第 98 図　SR01 平面図（S=1/200）

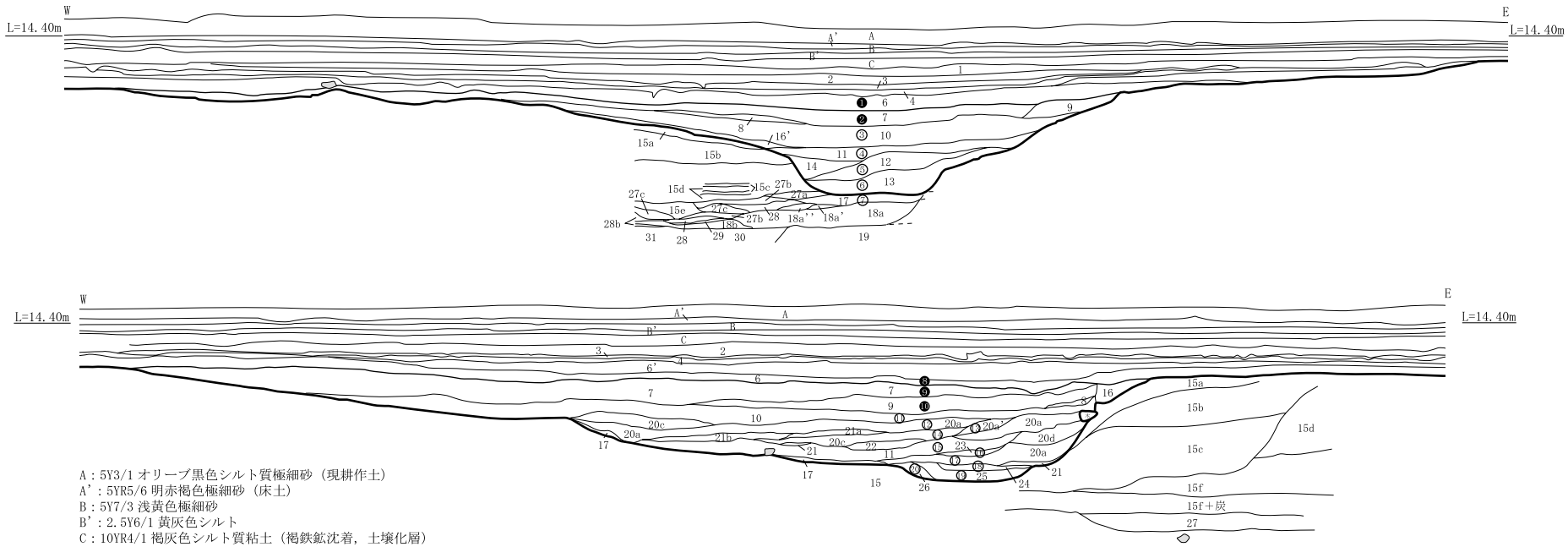
第 99 図　SR01 木製品出土状況平面図（S=1/40）

調整で仕上げる。715 は壺４ dで，「ハ」の字状に開く口縁部形態で，口唇部を上下に拡張し，凹線文を施す。頸部には粘土紐を貼り付け，押圧文を２段に渡って施す。口頸部はヨコナデによって整形を行い，体部は磨き調整によって仕上げる。内面は刷毛目調整後，磨き調整を施す。粘土帯接合痕跡を断面で確認できる。

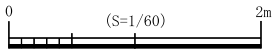
716 は壺８ aで，断面三角形の突帯を貼り付けた後，先端部に刺突文を施す。外面は刷毛目調整を施す。

717，718 は壺の頸部片で，後者は押圧文を施した突帯を貼り付ける。

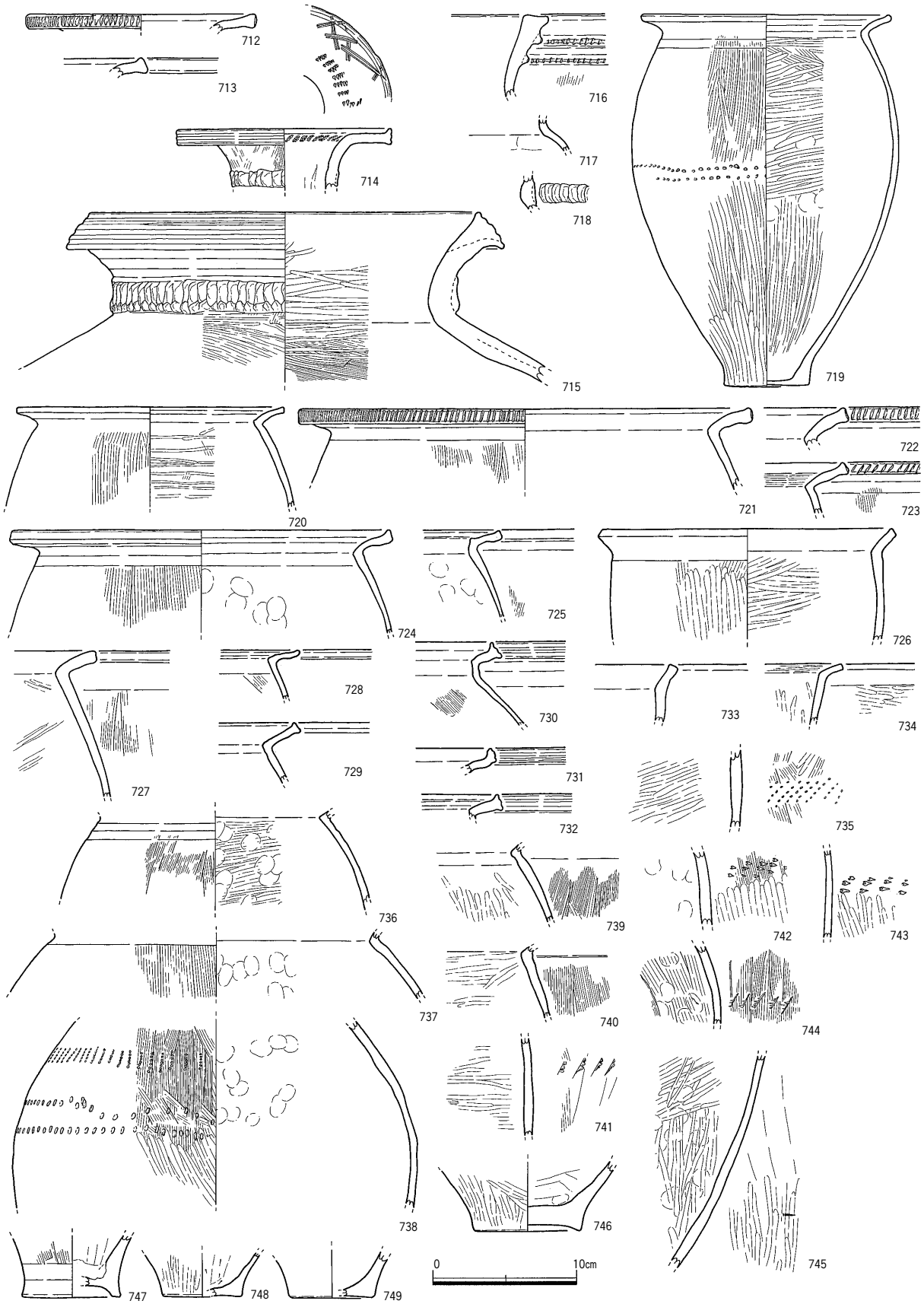
720 ～ 734 は甕形土器である。719，720 は甕３ aで口縁部をヨコナデによって整形し，外面は縦方向の刷毛目



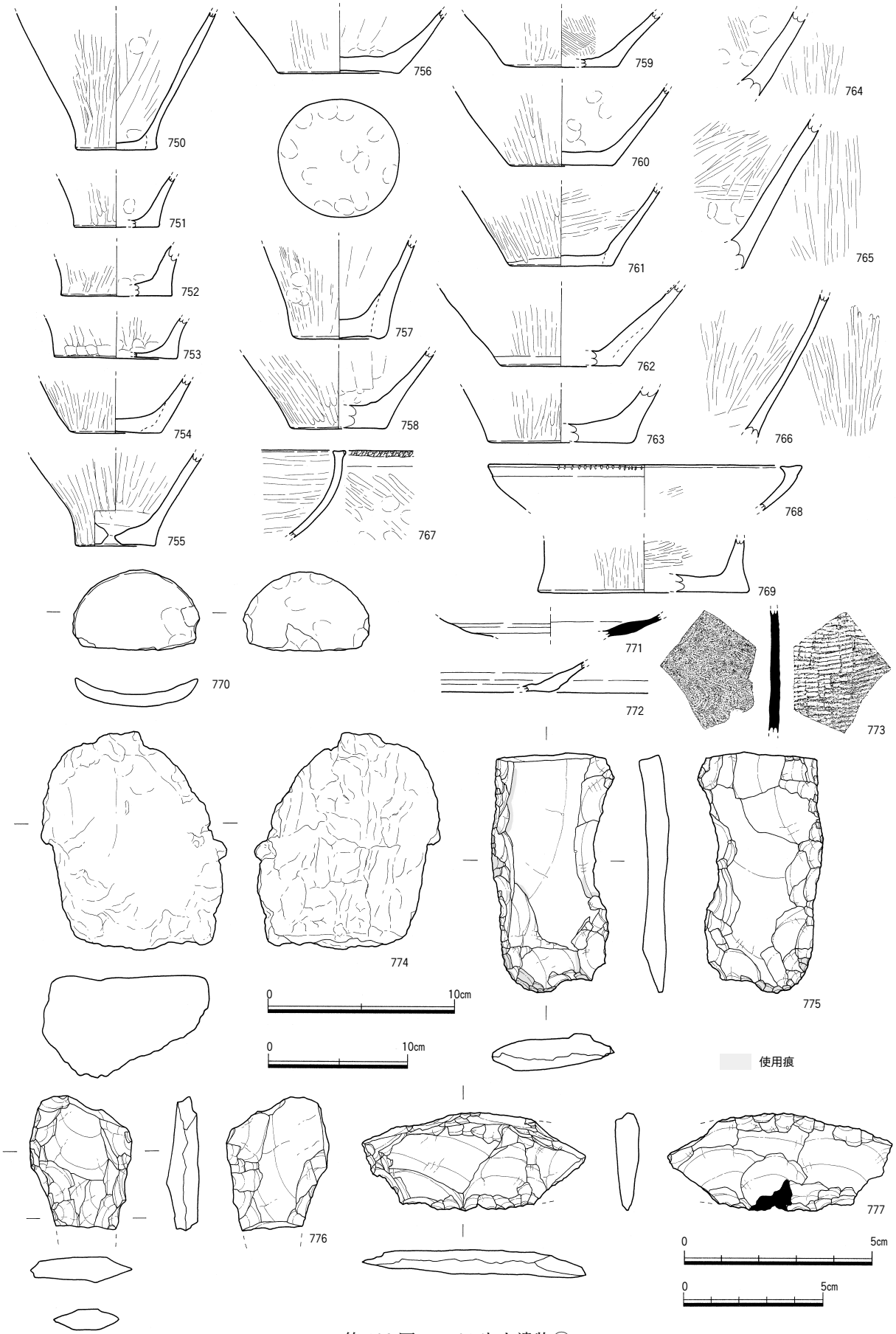
A：5Y3/1 オリーブ黒色シルト質極細砂（現耕作土）
A’：5YR5/6 明赤褐色極細砂（床土）
B：5Y7/3 浅黄色極細砂
B’：2.5Y6/1 黄灰色シルト
C：10YR4/1 褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着，土壌化層）
D：10YR5/1 褐灰色シルト質粘土（E 層，浅黄色砂土混じる，褐鉄鉱沈着）
E1：5Y7/4 浅黄色シルト質細砂（褐鉄鉱沈着）
E2：2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質細砂（褐鉄鉱，鉄分沈着著しい，E1 層より濁る）
1：7.5YR4/1 褐灰色シルト質粘土～粘土（褐鉄鉱沈着，土壌化，≠C 層）…SR01 埋土
2：7.5YR2/1 黒色粘土（褐鉄鉱沈着）…SR01 埋土
3：2.5Y7/6 明黄褐色シルト（やや砂質）…SR01 埋土
4：7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土～粘土（褐鉄鉱，炭化物を含む）…SR01 埋土
5：7.5YR6/2 灰褐色シルト（やや砂質，しまる，褐鉄鉱沈着）…SR01 埋土
6：N5/0 灰色シルト質粘土（褐鉄鉱沈着）…SR01 埋土
7：10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（炭を含む）…SR01 埋土
8：5YR3/1 黒褐色シルト質粘土（炭を含む）
9：N5/0 灰色シルト質粘土 +5GY5/1 オリーブ灰色粘土
10：10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（木，葉を少量含む）
11：2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土（木，葉を多量に含む）
12：5Y4/1 灰色砂質土
13：2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土（5Y4/1 灰色砂質土を含む）
14：5Y4/1 灰色砂質粘土
15a：5GY5/1 オリーブ灰色粘土（わずかに炭を含む）
15b：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
15c：5GY5/1 オリーブ灰色砂質粘土
15d：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
15e：5GY5/1 オリーブ灰色粘性のある砂質土
16：2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘質土
17：5GY5/1 オリーブ灰色粘土 +18 層
18a：2.5Y3/2 黒褐色砂質土（木，葉を多量に含む）
18a’：2.5Y3/2 黒褐色粘質土
18a’’：2.5Y3/2 黒褐色細かい砂粒を含む粘質土
18b：2.5Y3/2 黒褐色砂質土（木，葉をわずかに含む）
19：砂層
20a：2.5Y 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物，木を含む）
20b：2.5Y 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物，焼けた粘土を多量に含む）
20c：2.5Y 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，木 or 炭を含む）
20d：2.5Y 黄灰色シルト質極細砂（粘性あり，炭化物を含む）
21a：5Y6/1 灰色砂
21b：5Y6/1 灰色砂
22：2.5Y5/1 黄灰色シルト質極細砂（2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土がブロックで混じる）
23：2.5Y6/1 黄灰色砂質土
24：2.5Y5/1 黄灰色砂質土
25：7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
26：7.5Y4/1 灰色粘土
27a：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭をわずかに含む）
27b：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭を少量含む）
27c：2.5Y5/1 黄灰色粘性のある砂質土（炭は含まない）
28a：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土
28b：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土（細かい砂粒，炭を含む）
29：2.5Y5/1 黄灰色砂
30：2.5Y2/1 黒色シルト質粘土（砂粒をわずかに含む）
31：2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土



第 100 図　SR01 断面図（S=1/60）

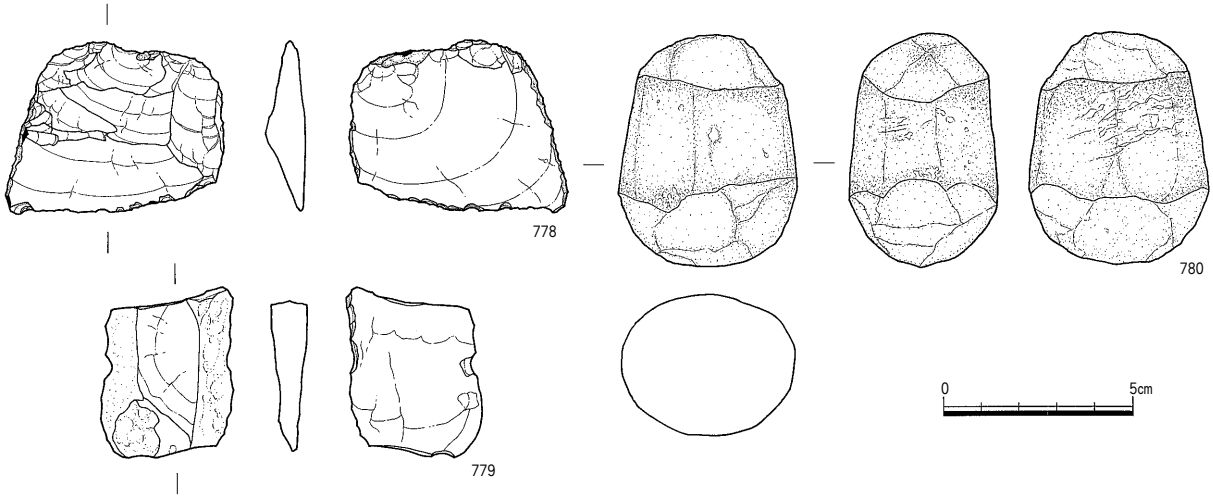


第 101 図　SR01 出土遺物①（S=1/4）



第 102 図　SR01 出土遺物②

（752～769,773,774：S=1/4・770～772，S=1/3，775,777：S=1/2，776：S=2/3）



第 103 図　SR01 出土遺物③（S=1/2）

調整後に底部周辺に磨き調整を施す。内面は体部下半に縦方向の磨き調整を施し，その後，上半に横方向の磨き調整を施す。719 は体部最大径部に刺突文を２段に渡って施す。外面には多量に煤が付着している。

721 ～ 723 は口唇部に刺突文を施す甕形土器である。いずれも外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げ，内面はナデ調整で仕上げる。724 ～ 726 は甕３bで口唇部先端をつまみ出す。外面は縦方向の刷毛目調整後，口縁部をヨコナデによって整形する。727，728 は甕３aである。小片のため，詳細は不明確であるが，外面は縦方向の刷毛目調整後，口縁部をヨコナデによって整形する。729 ～ 731 は５aで口縁端部を上下に拡張し，凹線文を施す。732 ～ 734 は口縁部の屈曲が緩やかな一群で，口縁部形態が他のものと異なる。内外面ともに磨き調整によって仕上げる。調整においても他の甕と異なる。

735 ～ 745 は甕形土器の体部片である。736 は外面刷毛目調整で仕上げた後，口縁部整形に伴うヨコナデを行う。内面は成形時の指押さえが認められ，横方向の磨き調整で仕上げる。737，739，740 は外面を縦方向の刷毛目調整で仕上げ，内面は磨き調整によって仕上げる。738 は刷毛目状工具による刺突文，さらに，刺突文を２段に渡って施す。外面は縦方向の刷毛目調整後，体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面には粘土帯接合時の指押さえが，帯状に認められる。なお，727 は還元したような状況になっており，変色しているとともに，非常に焼きしまっている。

735，741 ～ 744 は刺突文が認められる体部片で，735，741，744 は刷毛目状工具による刺突文，742，743 は管状を呈する工具による３段一組の刺突文が施される。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後，磨き調整で仕上げる。内面は磨き調整を施す。

745 は外面を板状工具によるナデ調整を施した後，縦方向の磨き調整を施す。内面は縦および斜め方向の磨き調整によって仕上げる。

746 ～ 760 は底部片である。747 は底部１で，749，755，756，757 は底部２，それ以外は底部３である。755 には焼成後に穿孔を施す。756 は変色しているとともに大きく変形している。いずれも外面は縦方向の磨き調整で仕上げるものとその後，底部周辺を横方向にナデ調整を施すもの（747，753，757，762）がある。なお，756 は底部外面に指押さえが顕著に認められる。

769 は甕２としているもので，いわゆるバケツ型と呼ばれるものである。底部片で，内外面ともに磨き調整によって仕上げる。

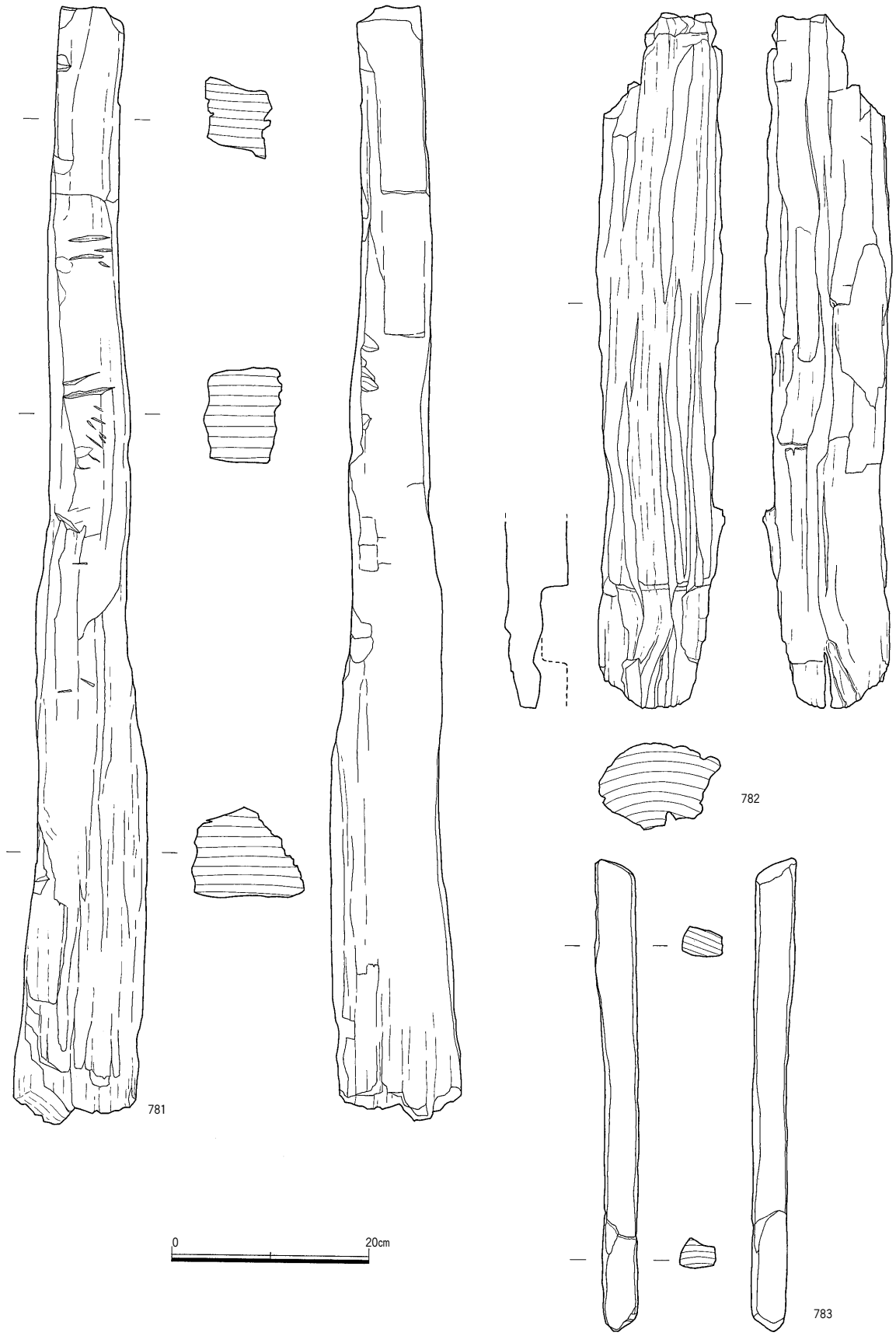
767，768 は高杯形土器の杯部で，高杯３bである。口唇部をヨコナデによって内側につまみ出し，外面側に刻み目を施す。器面は剥落しており，詳細は不明であるが内外面ともに磨き調整によって仕上げるものと考えられる。

770 は円形を呈する断面が凸レンズ状を呈する土製品である。表面には成形時の指押さえの痕跡が認められ，底部や高杯の円盤充填などに使用される粘土板の可能性が考えられる。

以上の土器の胎土および色調は４つに分類できる。

713，718，734，739，746，760，764，769 は灰白色もしくは黄灰褐色を呈するもので，石英，長石を多量に含む。その中で，739，760 は砂粒が少なく，非常に精良な胎土で，739 は搬入品の可能性がある。

715，728，749，757，761，762 は淡橙褐色を呈し，石英，長石を含むものである。



第 104 図　SR01 出土遺物④（S=1/6）

716，730，747，770 は明橙褐色を呈し，石英，長石を含むもので，精良な胎土のものが多い。

727，730，751，752，754，756，758，763 は褐灰色を呈し，石英，長石を含むものである。ただし，752 は雲母も含む。

それ以外の土器群は褐灰色，明褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含むもので，720 ～ 722，740，750，752，766，767 は雲母を多量に含む。723，724，726，733，735，737，741 ～ 744，765 は角閃石を多量に含み，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）と酷似している。

771 ～ 773 は上面検出時出土遺物である。771 は須恵器杯身で，772 は土師質土器の杯部片である。ヨコナデによる整形である。773 は須恵器甕の体部片で，外面は格子目叩きで成形し，内面は青海波文がわずかに残る。

774 は粘土塊で，非常に大きく，分厚い。非常によく焼きしまっており，上面とした平坦面側は黒く炭化している。いずれの面も生きており，平坦面は意識的に成形したものと考えられる。掘り込みや加工等は一切認められず，本来の機能は分からない。可能性としては壁土等が考えられる。灰白色を呈し，砂粒を含まず非常に精良である。

石製品は打製石斧,石錐未製品,スクレイパー,微細剥離痕のある剥片,剥片,石錘が出土している。

775 は打製石斧である。大型の横長剥片素材で，基部を折損するため，全体の形状は不明である。側辺部の一部に顕著な潰れが確認できる。刃部から体部の一部に使用痕が認められる。石材はサヌカイトで，ほかの石器に比べ，風化が著しく弱い。

776 は先端部と頭部の一部を折損するため，全体の形状は不明であるが，石錐未製品と考えられる。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

777 はスクレイパーである。１側辺を折損するため，全体の形状は不明である。背部には背潰加工が確認でき，刃部は両面調整する。石材はサヌカイトである。

778 は微細剥離痕のある剥片である。自然面を打面に横長剥片を剥離しており，腹面側にはツインバルブが確認できる。微細剥離痕は腹面側の鋭利な剥片端部に認められる。石材はサヌカイトで，風化が著しい。

779 は硬質砂岩の剥片である。

780 は輝緑岩製の石錘と考えられる。剥離によって面を成形し，体部の一部に線状の敲打痕と研磨痕が確認できる。

781 は柱状の木製品で，断面が方形になるよう加工している。782 は建築部材と考えられ，破損しているものの，部材をはめこむための刳りこみ部分を作りだしている。783 は細い棒状の木製品で，表面を加工している。

SX01（第 105 図）

SR01 内で認められた集石および堰状遺構である。SR01 の上面第６層で 30 ～ 40㎝台の角礫が集積された状態で認められ，それとともに，木製品が南北方向にまとまって出土した。明確な堰をなすような構築物は認められなかったものの，埋没したとはいうものの，流路を横断し，流れを堰き止める方向にこれらの石材および木製品が分布し，棒状のものを打ち込んだ状況も認められたことから，堰が存在した可能性を想定している。先述のとおり，東西方向に長い調査区を設定したために，北側に中州状の微高地があるという想定が調査時になかったことから，調査としては本遺構を一連のものとして調査時は認識できていなかった。そのため，調査時は北と南で寸断された調査となり，関係性を明確に把握できたとは言い難い。

SR01 の埋没が進んだ状況での設置と考えられることから，集落域としての利用がなされなくなり，生産域としての利用が行われた段階を想定している。

時期は出土遺物から後期前半段階と考えられる。

出土遺物（第 106 ～ 107 図）

784 ～ 814 は弥生土器，815 は土製品，816，817 は木製品である。

784 ～ 789 は壺形土器である。784 は垂下口縁に凹線文を施し，竹管状の刺突文を施す。胎土も異なり，搬入品の可能性がある。785，786 は上部に拡張する口縁部に３条も凹線文を施す。

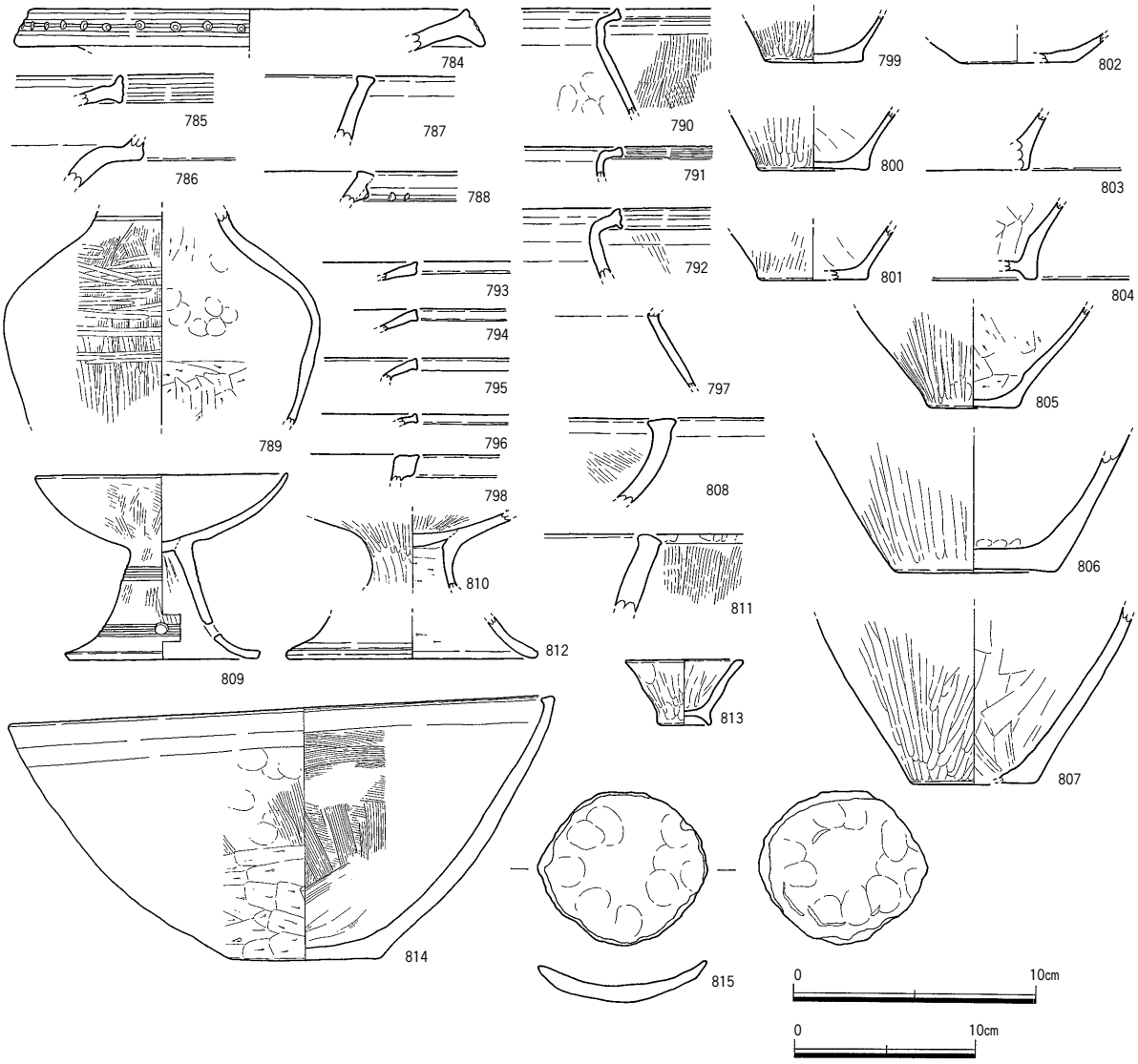
787 は壺６aの口縁部片である。内外面ともにナデ調整によって仕上げる。

788 は壺８の口縁部片である。断面三角形の突帯を貼り付け，刻み目を施す。

789 は体部片で，外面は縦方向の刷毛目調整を施した後，細かな工具で下半部を縦方向，上半部を横方向に磨き調整を施して仕上げる。

790 ～ 797 は甕形土器である。791，792 は口縁部端部を上下もしくは上部へと拡張し，凹線文を施す。外面は刷毛目調整である。790 は口縁部端部を上へとつまみ上げる。外面を縦方向の刷毛目調整を行った後，口縁部をヨコナデによって整形する。793 ～ 796 は甕３aで，やや上部へとつまみ上げる意識があるものである。797 は

第 105 図　SX01 平・断面図（平面図:S=1/80,断面図:S=1/60)



第 106 図　SX01 出土遺物①（784～814：S=1/4，815：S=1/3）

肩部片である。

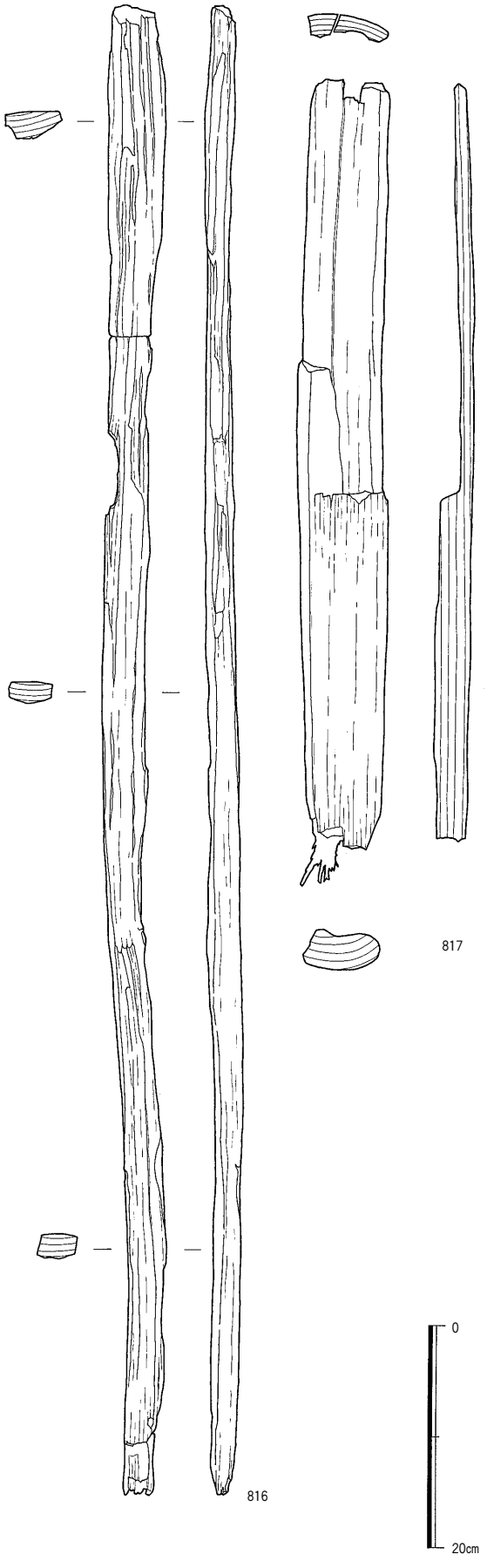
798 は断面方形の口縁部を呈するものであるが，器種は不明である。

799 ～ 807 は底部片で，804 が底部１，802，806，807 が底部３b，それ以外が底部３aである。いずれも外面は縦方向の磨き調整を施す。内面は多くが縦方向の板状工具によるナデ調整を施すが，805 は削りによる整形の痕跡をとどめる。

808 ～ 812 が高杯形土器である。808 は高杯３bでの破片で，口唇部を内外に少し拡張する。内面は刷毛目調整が認められる。809 は浅い碗形を呈する杯部に，裾部がやや「ハ」の字状に開く脚部である。脚部には上段３条，下段３条の櫛描き状の直線文が施され，下側には円形の透かしを施す。部分的に丹塗りが残っており，赤彩されていたと考えられる。杯部および脚部の外面は細かい刷毛目調整を施す。内面にはしぼり痕跡が認められ，接合は円盤充填技法である。810 は杯部と脚部の接合部で，円盤充填技法である。811 は大型品で，台付鉢形土器の口縁部片と考えられるが，壺６の可能性もある。外面は縦方向の刷毛目調整を施し，口唇部には刺突文を施す。813 は小型の鉢形土器で，外面は磨き調整で仕上げる。底部は高台状になっており，その部分に鉄分の付着が認められる。

814 は鉢形土器である。外面は縦方向の刷毛目調整後，下半をケズリによって整形する。内面は刷毛目調整を施す。

815 は円形を呈する断面が凸レンズ状を呈する土製品である。表面には成形時の指押さえの痕跡が認められ，



第 107 図　SX01 出土遺物②（S=1/6）

底部や高杯の円盤充填などに使用される粘土板の可能性が考えられる。

土器の色調および胎土は 4 つに分類できる。

784，787，804 はいずれも色調が異なり，順番に淡明橙褐色，赤橙色，明茶褐色で，石英，長石を含む胎土である。

788 は灰白色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

803，811 は淡橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

806，808 は淡褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

それ以外の土器群は褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。814 は赤褐色砂粒を含む。789，791，792，805 は雲母を多量に含む胎土である。784，799，809，810，812，813，815 は角閃石を多量に含むもので，いわゆる香東川下流域産土器（胎土Ⅰ類）と酷似する。

816 は細い棒状の木製品で，断面は横長の直方体を呈する。明確な加工具の痕跡は認められないが，一部抉りを設けている。

817 は板状の木製品で，比較的分厚い。段を設けている。

SX02

SR01 の東岸は東側にむけて緩やかに上がっているが，その緩斜面に位置し，東岸から約 3 ～ 4 mのところに集石を行った簡易な護岸上の施設が認められた。流路等には，既述のSX01 のような石材は認められなかったことから，意図的に集めてきた約 15 ～ 40㎝の角礫を主に使用し，石を配置したものと考えられる。石は地山面よりもやや浮いた状況で検出されたことから，SR01 が一定程度埋積した後に形成されたものと考えられる。

しかし，これらの集石が，東岸全体におよぶものではなく，ごく一部に限られるため，本来護岸のために実施したかどうかについては不明確であると言わざるを得ない。

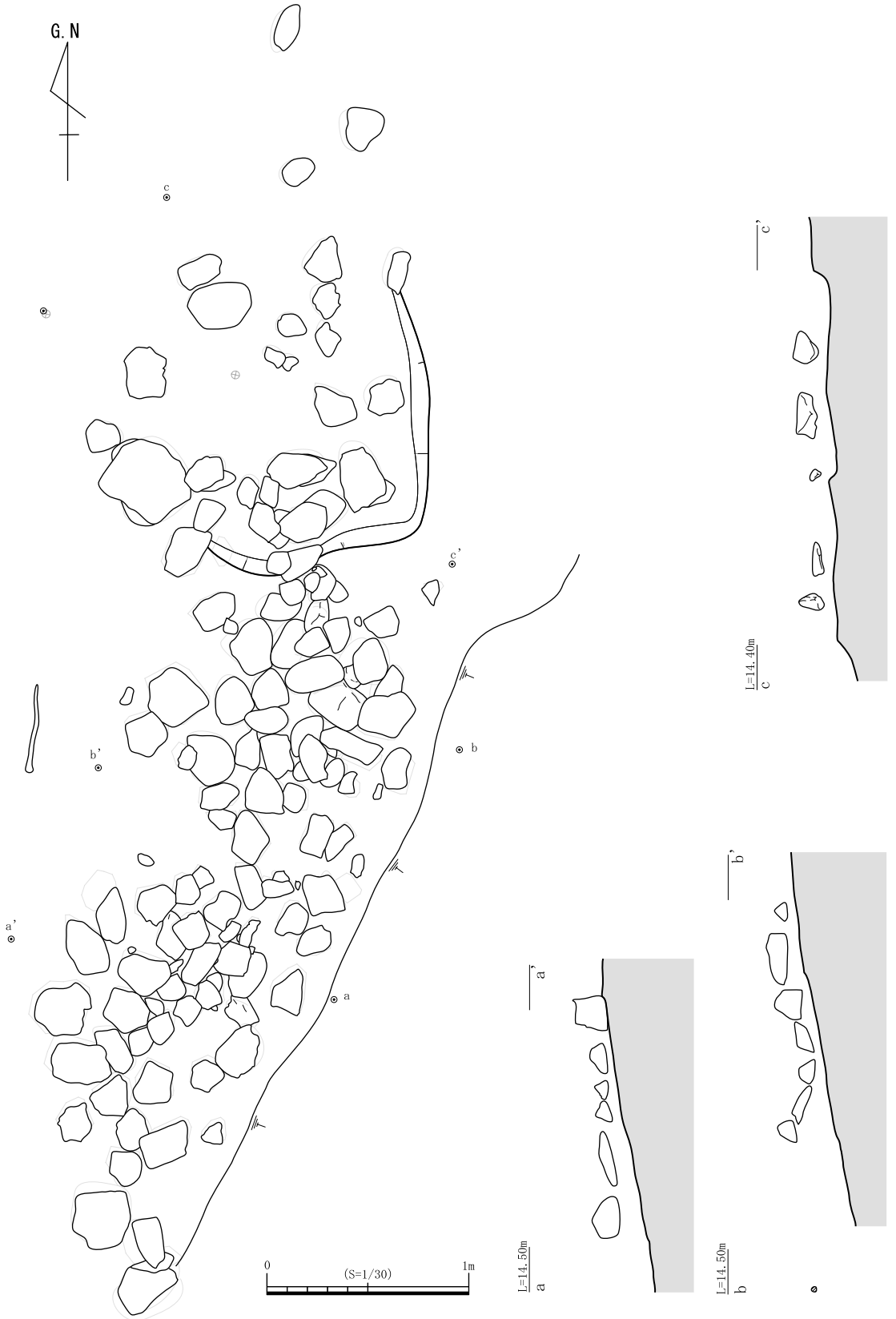
時期は出土遺物から中期後半，信里編年Ⅲ-1 様式以降と考えられる。

出土遺物

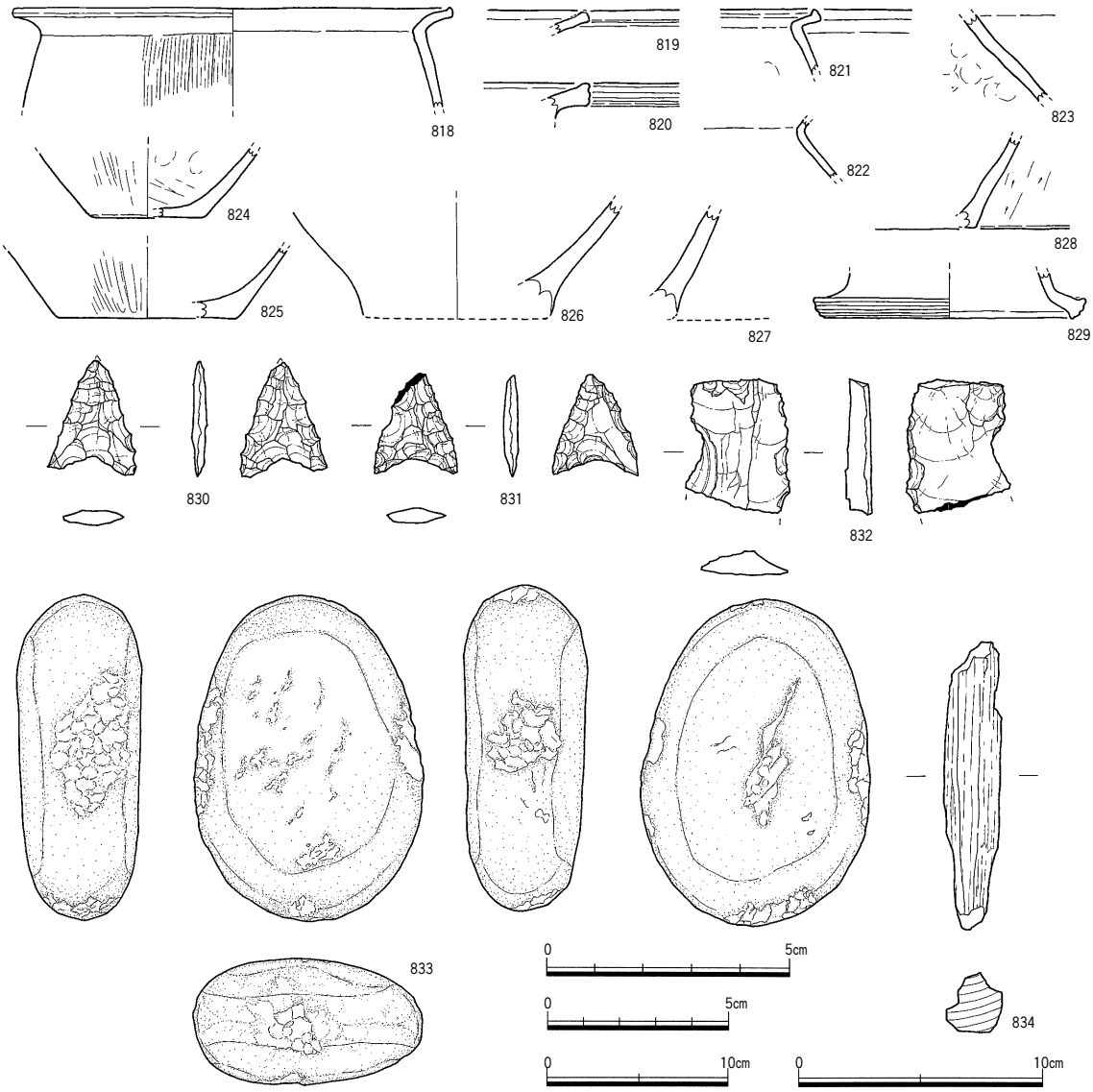
818 ～ 829 が弥生土器で，830 ～ 833 が石製品，834 が木製品である。

818 ～ 823 は甕形土器である。口縁部形態は様々で，口唇部を平坦におさめるもの（819），つまみあげるもの

第 108 図　SX02 周辺平・断面図(平面図:S=1/80,断面図:S=1/40)



第 109 図　SX02 平・断面図（S=1/30）



第 110 図　SX02 出土遺物
（818～829,834：S=1/4，830,831：S=2/3，832：S=1/2，833：S=1/3）

（818），上部へと拡張するもの（821），拡張せずに端部に凹線文を施すものがある。小片のものもあり，明確ではないが，外面を縦方向の刷毛目調整によって仕上げ，口縁部周辺をヨコナデで整形する。内面はナデ調整によって仕上げる。824 ～ 828 は底部片で，824、825，827，828 が底部３b，826 が底部３aである。外面は磨き調整によって仕上げ，内面は磨き調整によって仕上げる。

829 は高杯の脚部片で，裾部を上下に拡張し，凹線文を施す。

土器の色調および胎土は３つに分類できる。

820，826，827 は灰白色もしくは黄灰色を呈し，石英，長石を含むものである。

819，821，823，824 は褐灰色を呈し，石英，長石，を含むものである。その以外の土器群は褐灰色もしくは明褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む。

石製品は石鏃,二次加工のある剥片,敲き石が出土している。

830，831 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。830 は凹基式の石鏃で，両面に深形細部調整を施す。切先の一部を欠損する。831 は凹基式の石鏃で，背面側右側辺と腹面側左側辺，基部に深形細部調整を施す。調整は腹面側を調整したのち，背面側を調整する。側辺部はやや鋸歯状を呈する。

832 は二次加工のある剥片である。平坦な折れ面を打面に縦長剥片を剥離しており，腹面側にはツインバルブが確認できる。二次加工は，剥片の鋭利な両側辺の一部に認められる。剥片端部は欠損する。石材はサヌカイト

である。

833 は砂岩製の敲き石である。あばた状の敲打痕と線状の敲打痕が確認できる。

SR02（第 111 図）

調査区の西部で確認した流路跡であり，調査区の南側を現在流れている清水川の旧路であるとともに，本来は旧香東川の支流の一つと考えられ，調査地の東側に位置する松並・中所遺跡の北側で確認されている旧河道に接続するものと想定される。

SR01 と異なり，現在も地下水脈として機能しており，掘削に伴い，多量の水が湧き，常時，水を排水する必要があった。そのため，一部については掘削を完了することができなかった。流路の北岸から蛇行する溝状遺構がいくつか派生する。

第 111 図の上段土層図の第 4 ～ 6 層は周辺の弥生時代中期の遺構が埋没した後の堆積層で，土層や土質などの状況から水田面の可能性が想定された。

同じく第 7 ～ 9 層は旧河道中の堆積土で，木質遺物や炭化物，土器を多く含むシルト／粘土層である。

出土遺物からSR02 は集落が営まれた時期（弥生時代中期中葉）に川として機能していたものと考えられるが，弥生時代後期以降には埋没していた可能性が考えられる。

出土遺物（第 112 ～ 113 図）

835 ～ 858 は弥生土器で，859 ～ 860 はサヌカイト製の石製品である。

835 ～ 840 は壺形土器である。835，836 は壺 6 aで，いずれも，外面には，櫛描き文による直線文，波状文，直線文，波状文，直線文の組み合わせで，体部上半に施文を行う。外面は縦方向の刷毛目調整後，施文を行う。口縁部周辺についても，刷毛目調整後，ヨコナデを施すものと考えられる。内面には成形時の指押さえの痕跡が多数認められる。

837 は壺 3 aの体部片と考えられる。口縁部は残存していない。頸部に突帯を貼り付け，押圧文を施す。体部最大径の位置に刷毛目状工具による列点文を施す。外面は縦方向の刷毛目調整を施し，内面は体部を刷毛目調整，頸部内面に磨き調整を施す。838 は壺 3 で，口頸部は直立した後に「ハ」の字状に開く。口縁部を上下に拡張し，4 条の凹線文を施す。口唇部には竹管文による刺突文を 1 カ所に 10 個ほど施す。また，体部最大径の位置に刷毛目状工具による列点文を施す。体部がやや高い位置にあり，肩が張った形態である。外面は縦方向の刷毛目調整を施した後，体部下半を縦方向，体部最大径の位置では横方向の磨き調整を施す。

839 は体部片で，破片のため詳細は不明である。840 は頸部片で，断面三角形の突帯を貼り付けている。

841 ～ 848 は甕形土器である。

842，843 は甕 3 aであるが，口縁部形状がやや異なるが，いずれも外面は縦方向の刷毛目調整後，体部下半を縦方向の磨き調整によって仕上げる。内面は刷毛目調整を施した後，横もしくは斜め方向の磨き調整で仕上げる。843 は口縁部成形時の指押さえ痕跡が残る。

841，846 ～ 848 は体部片である。846 は内外面ともに刷毛目調整で仕上げる。841，848 は外面に施文を行うもので，前者は櫛状工具による 3 つが一組の刺突文，後者は 2 つが一組の刺突文を施す。調整は外面は縦方向の刷毛目調整後，体部下半を縦方向の磨き調整を施す。内面は横方向の磨き調整を施す。847 は外面を平行叩きで成形後，縦方向の刷毛目調整で仕上げる。内面は削りによって整形する。煤および焦げの付着が著しい。

844，845 は小型品で，鉢形土器と呼ぶべきものかもしれない。844 は口縁部が「く」の字を呈するもので，外面は板状工具によるナデ調整後，磨き調整を施し，内面は横方向の削りによって整形している。845 は口縁部をつまみあげることで口唇部を拡張するものである。外面は不明であるが，内面は削りによって整形する。煤および焦げの付着が著しい。

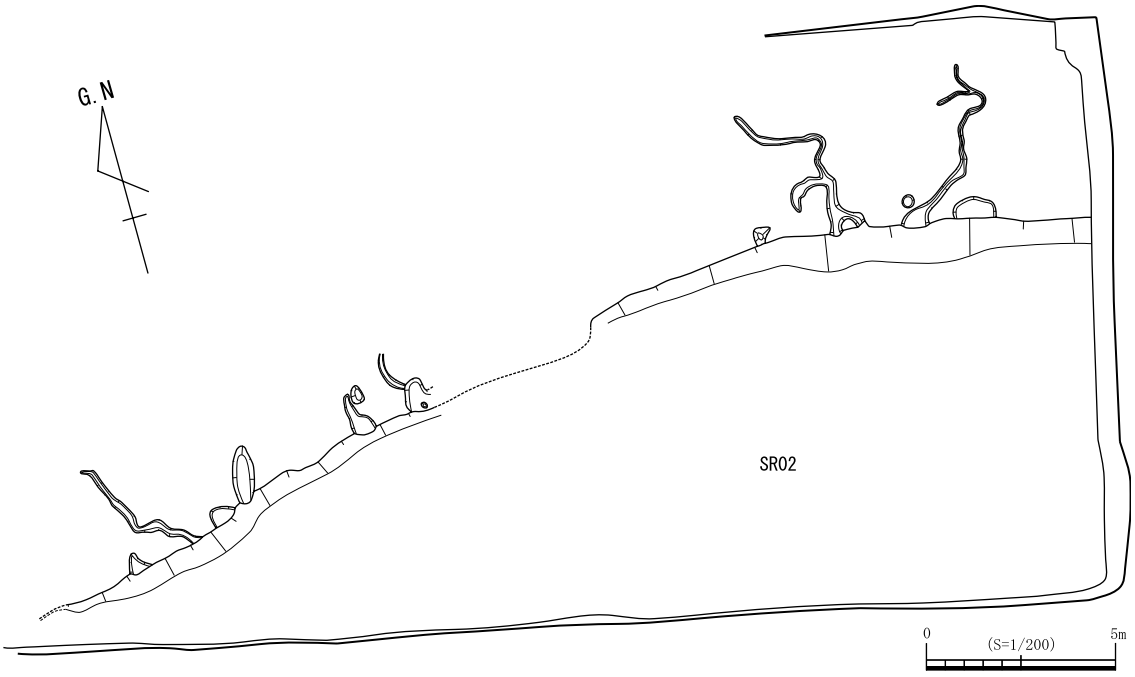
849 ～ 854 は底部片である。850 は底部 2 で，焼成後に穿孔を施している。853 は底部 3 b，それ以外は底部 3 aである。いずれも外面は縦方向の磨き調整を施し，一部，その後，底部周辺をヨコナデ調整によって整形する。内面は板状工具によるナデ調整を行うが，851 は磨き調整によって仕上げる。

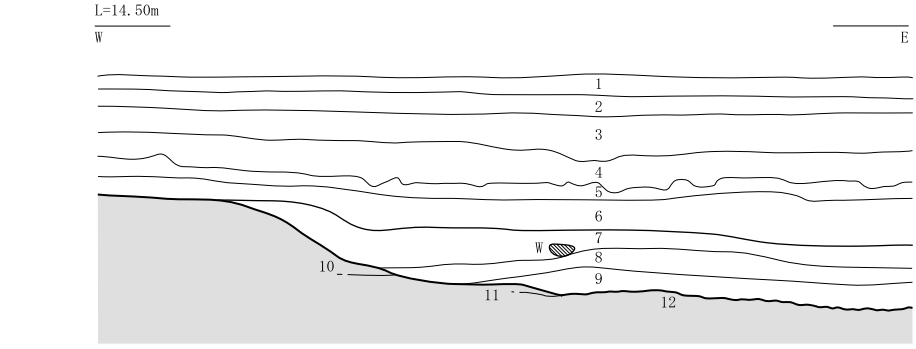
855 ～ 857 は高杯もしくは台付鉢と呼ばれるものである。855 は高杯 3 bで，口縁端部をやや内側へとつまみだし，杯部は深い。口縁部はヨコナデによって整形し，内外面はともに磨き調整によって仕上げる。856 は高杯 3 dで口縁端部を外側へと大きくつまみ出し，杯部外面に 2 条の凹線文が施される。857 は口縁端部が外側へと緩やかに外反しながら，開くもので，内画面ともに磨き調整によって仕上げる。

858 は焼成破裂痕跡の残る土器片である。外面は磨き調整で仕上げている。

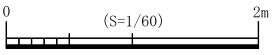
土器等の色調および胎土は 4 つに分類できる。

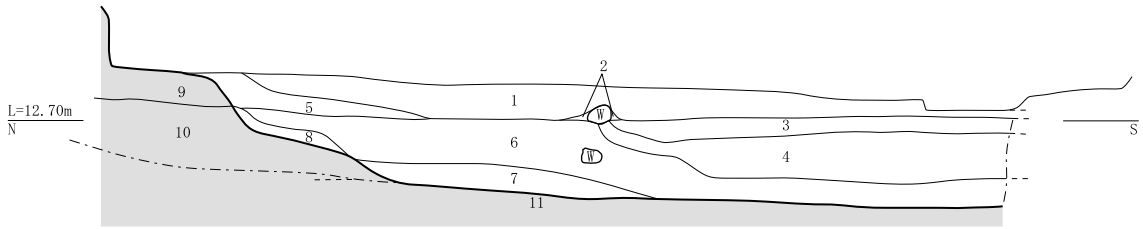
836，840 は明橙褐色を呈し，石英，長石を含む胎土





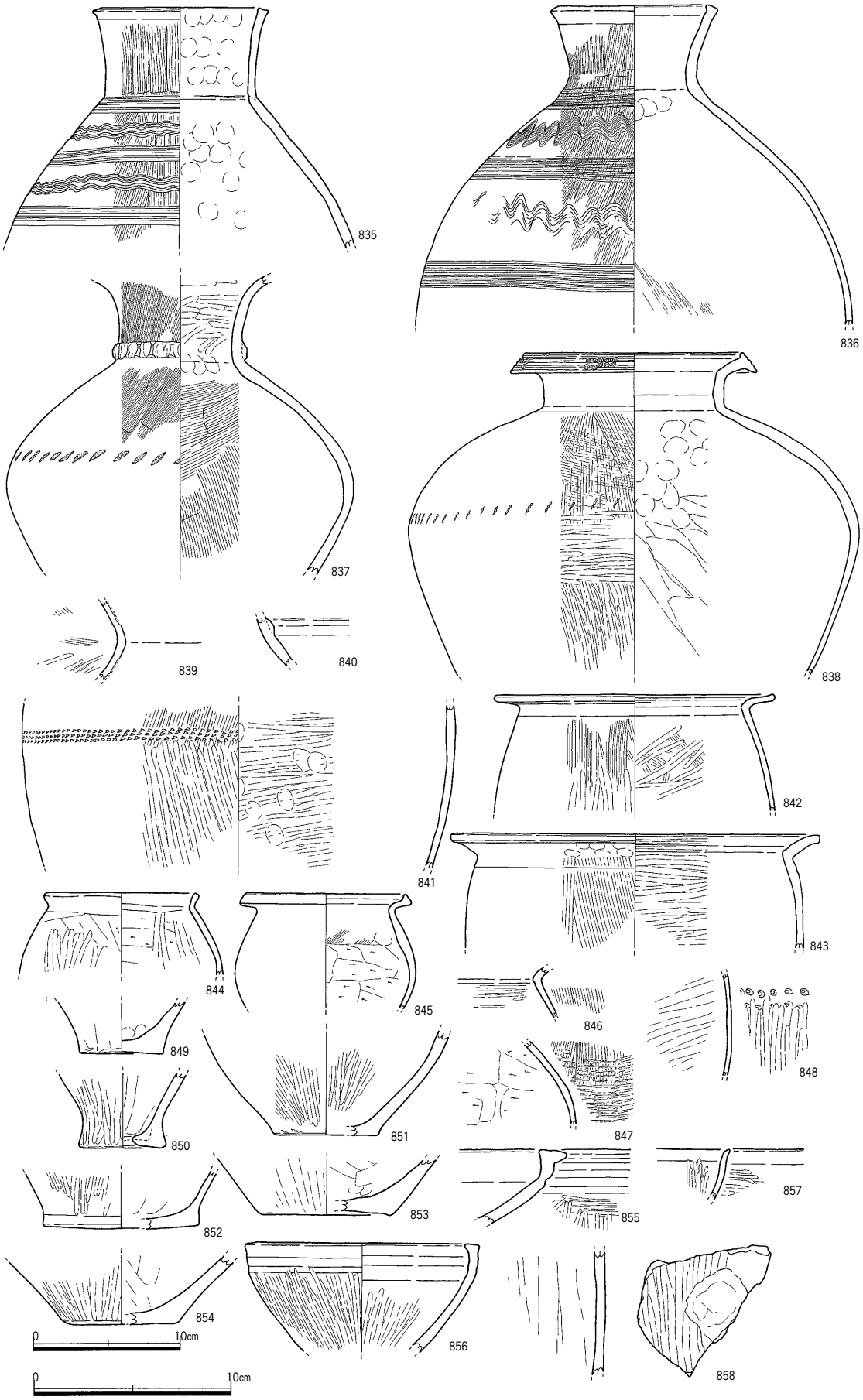
1: 2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質極細砂（現耕作土）
2: 2.5Y7/2　灰黄色シルト質細砂（床土）
3: 2.5Y7/1　灰白色シルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
4: 7.5YR3/1　黒褐色シルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
5: 10YR6/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
6: 7.5YR4/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
7: 10YR4/1　褐灰色シルト質粘土～粘土（木質遺物・炭化物・褐鉄鉱を含む）…SR02 埋土
8: 5Y4/1　灰色シルト（やや砂質、木質遺物・炭化物を多く含む）…SR02 埋土
9: 5Y5/1　灰色砂混じりシルト（木質遺物・炭化物を多く含む）…SR02 埋土
10:2.5Y6/6　明黄褐色粘土（褐鉄鉱を多く含む）
11:10G6/1　緑灰色細砂（しまらない）
12:5BG6/1　青灰色砂礫（数cm～拳大の円礫を多く含む）



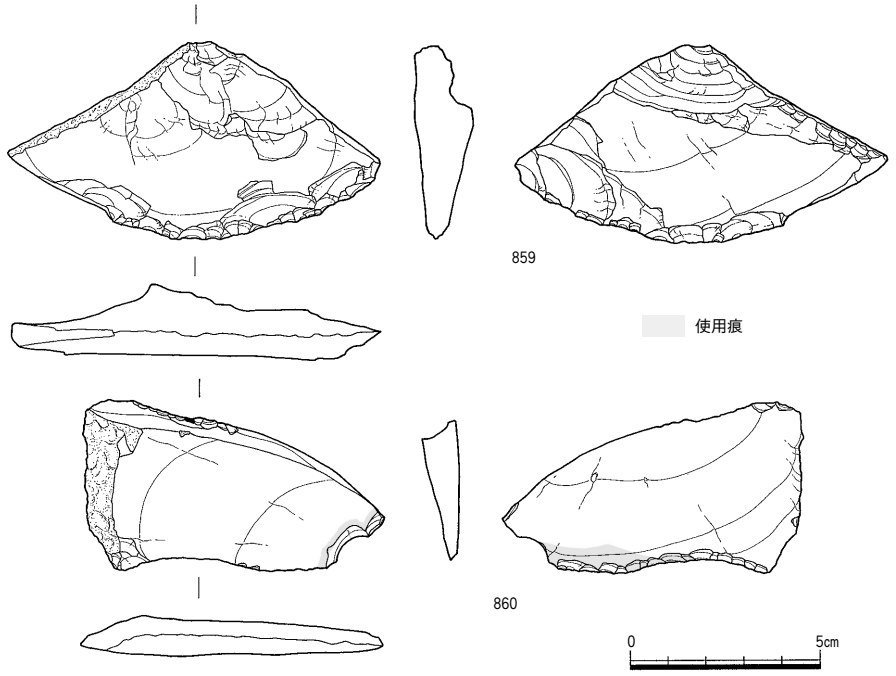


1: 10YR5/1　褐灰色粘土（褐鉄鉱・植物（アシ）遺体を含む，炭化物を若干含む）
2: 10YR4/1　褐灰色粘土（木質遺物を含む）
3: 2.5Y5/1　黄灰色粘土（下端に炭薄層）
4: 10YR5/2　灰黄褐色シルト質粘土（炭化物を含む）
5: 10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（褐鉄鉱・植物遺体・炭化物を含む，１層と連続）
6: 10YR5/1　褐灰色シルト質粘土・10YR7/1　灰白色砂のラミナ状堆積（木質遺物・泥炭を含む，部分的に鉄分沈着）
7: 10YR4/1　褐灰色砂礫混じりシルト～シルト質粘土（部分的に鉄分沈着，炭化物を若干含む）
8: 10YR4/1　褐灰色シルト質粘土（９層地山混じる）
9: 5Y7/6　黄色砂混じりシルト質粘土（褐鉄鉱を含む）
10:10G7/1　明緑灰色シルト質細砂
11:5BG6/1　青灰色礫（部分的に鉄分沈着）

第 111 図　SR02 平・断面図（平面図:S=1/200,断面図:S=1/60）



第 112 図　SR02 出土遺物①（835～857：S=1/4，858：S=1/3）



第 113 図　SR02 出土遺物②（S=1/2）

である。849 は黄灰褐色を呈し，石英，長石を含む。

853 は褐灰色を呈し，石英，長石を含むものである。

それ以外の土器群は，褐灰色を呈し，石英，長石，雲母，角閃石を含むものである。842，845，846，854 は雲母を多量に含むもので，838，839，841，850 ～ 852，858 は多量に角閃石を含むいわゆる香東川下流域産土器（胎土Ⅰ類）に酷似する。

石製品はスクレイパーが出土している。

859，860 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。859 は横長剥片素材で，１側辺と刃部の一部を折損する。刃部は剥片の鋭利な端部を両面調整して形成する。刃部は摩滅が認められる。860 は横長剥片素材で，腹面側折損面に調整が確認できる。折損面の一部が鋭角になっていたため，調整を加えたものと考えられる。刃部は片側調整で，背面側の剥片の鋭利な端部に極浅形細部調整によって作り出す。細部調整の一部の剥離角は鈍角になっている。刃部は著しく摩滅しており，微細剥離痕も確認でき，また一部に光沢が認められ，コーングロスの可能性も考えられる。

【その他の不明遺構】

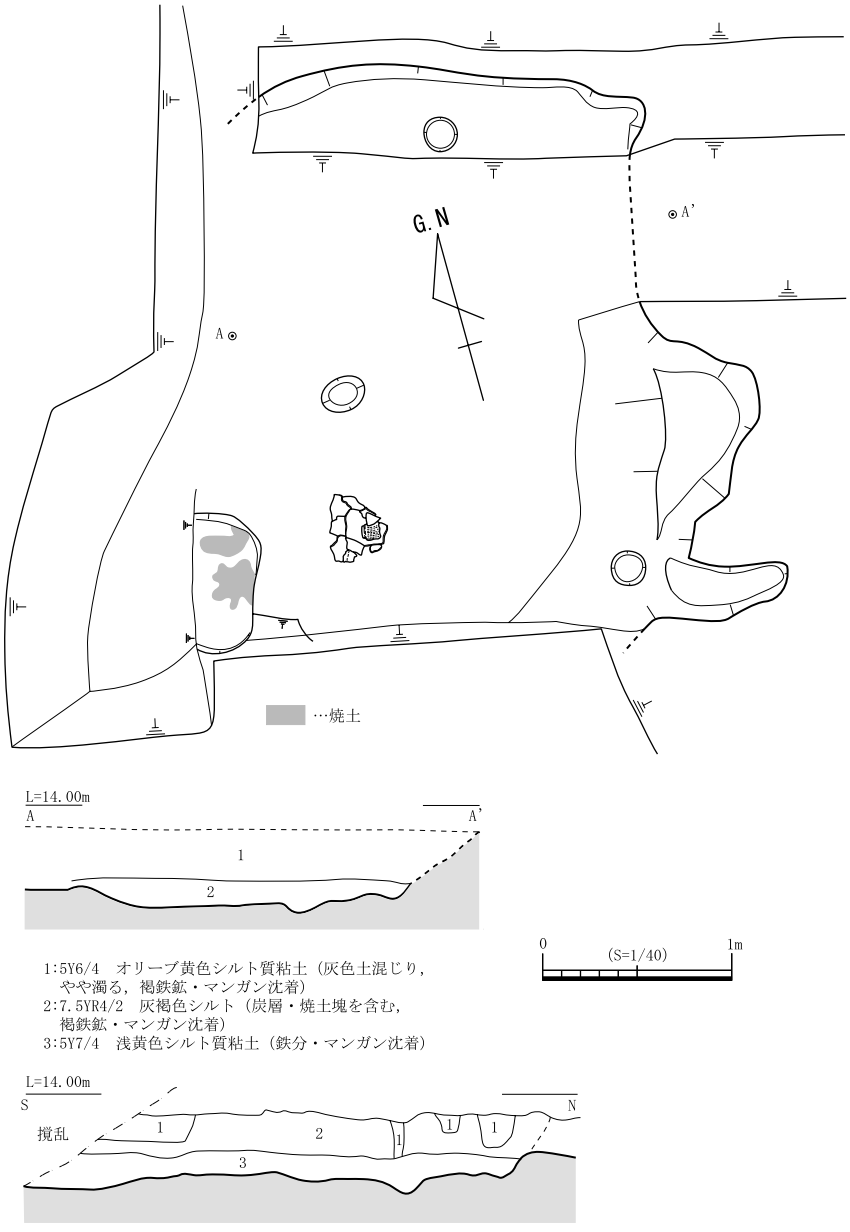
SX04（第 114 図）

EN 区の最西部に位置し，調査区外へとのびる。SX18 同様に，地山に近い埋土であったため，掘り方の平面検出が非常に困難であった遺構である。埋土は大きく 2 層に区分でき，最終的に不整形な方形の大型の土坑状を呈するものとなった。

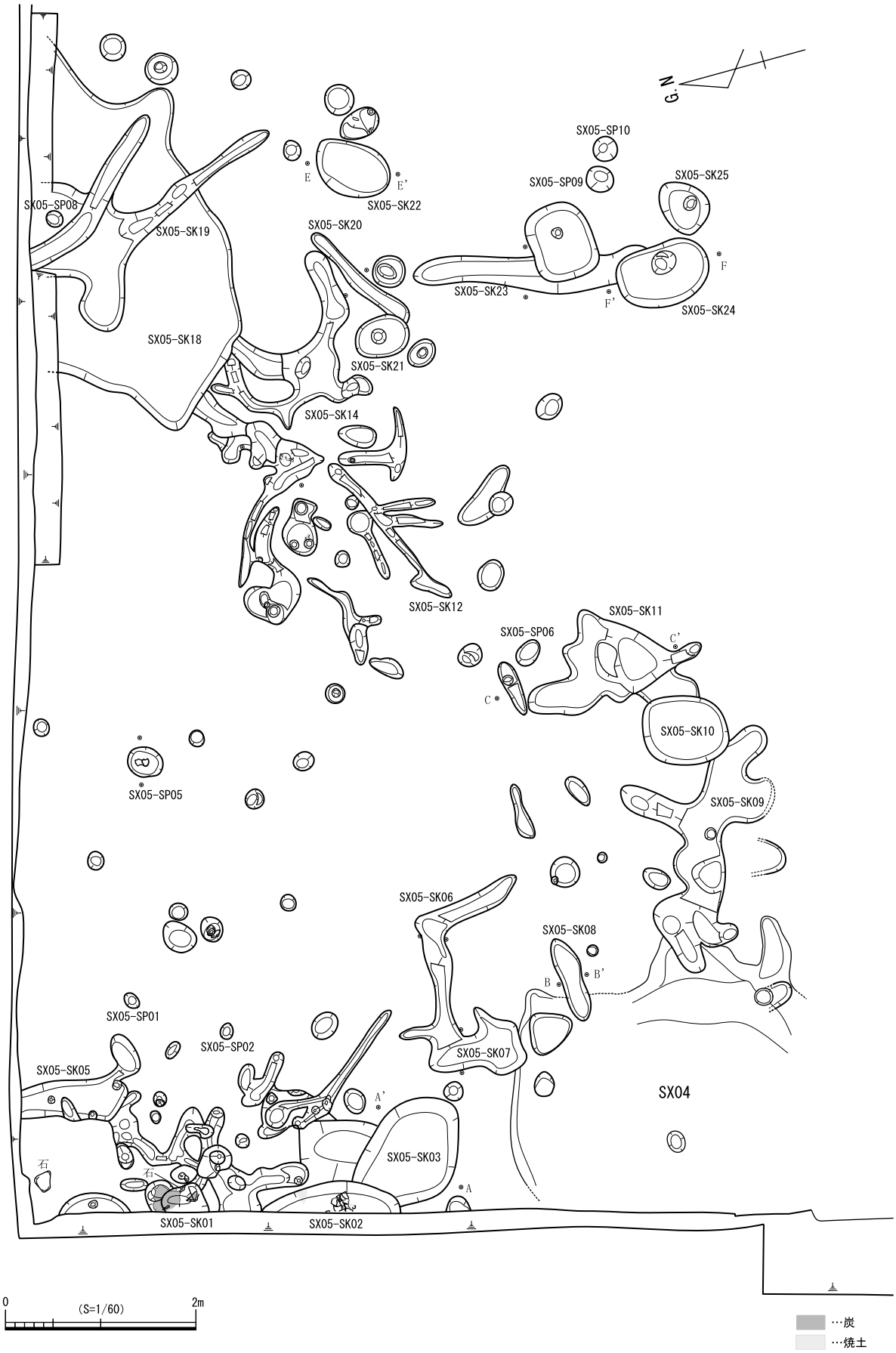
出土遺物から時期は縄文時代晩期後半と考えられ，森下編年突帯文期Ⅱ-b期と考えられる。

出土遺物（第 117 図）

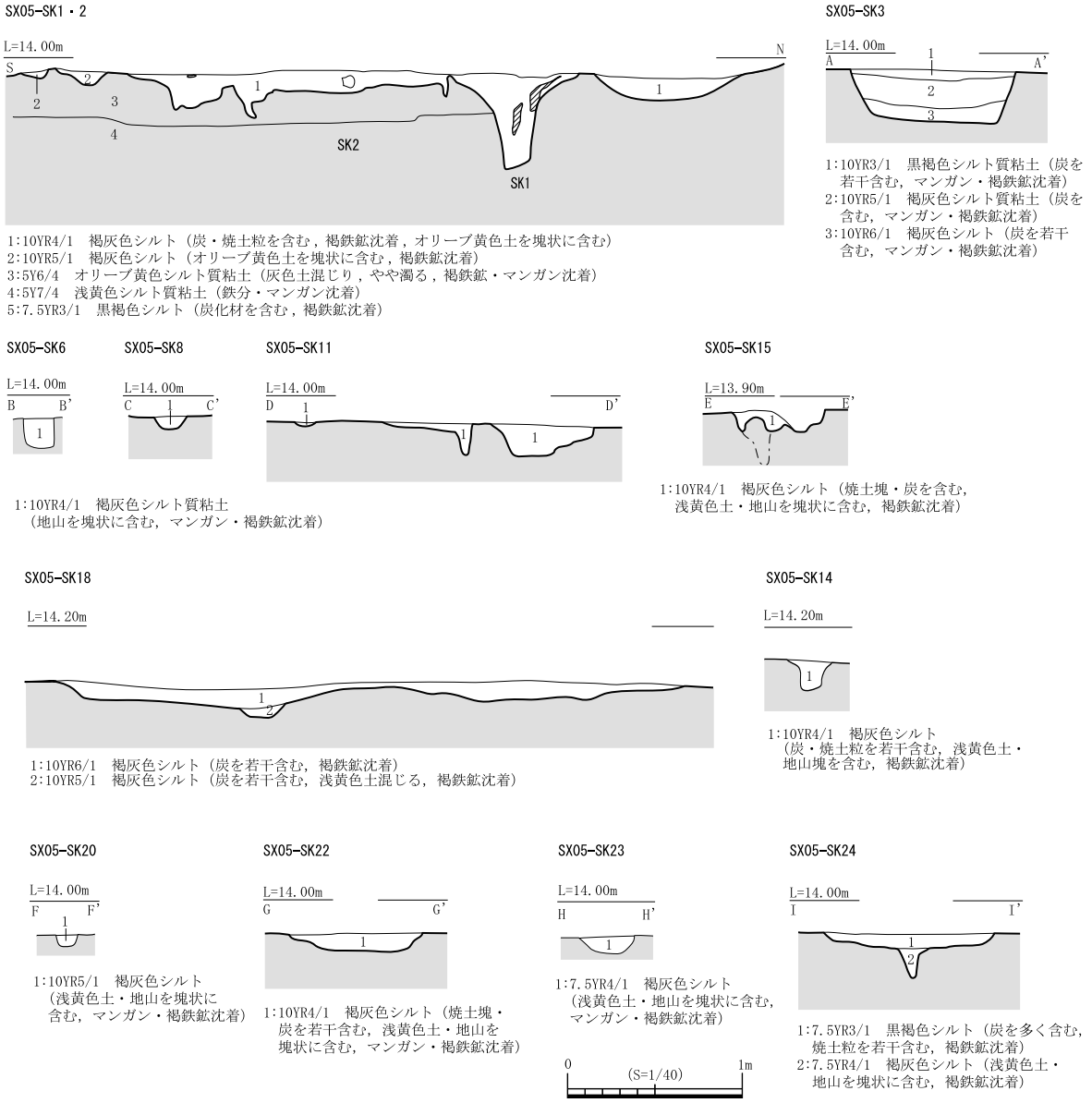
861 は突帯文土器で，口縁部は緩やかに外反しながら，開く。断面三角形の突帯を口唇部からやや下がったところと肩部に貼り付け，D字型の刻み目を施す。また，突帯によって区画された範囲に 8 本の沈線によって山形文を施す。肩部には磨き調整がみとめられるが，基本的には削りによって成形を行う。内面はナデ調整で仕上げる。



第 114 図　SX04 平・断面図（S=1/40）



第 115 図　SX05 平面図（S=1/60）



第 116 図　SX05 断面図（S=1/40）

色調は褐灰色を呈し，石英，長石を含む胎土である。

SX05（第 115 ～ 116 図）

EN 区の西部に位置する。不整形な土坑やその土坑から派生する溝状遺構が多数分布し，埋土に炭化材や焼土を含むものが多く，周辺の遺構と形状および埋土の状況が大きく異なるため，これらの集合体をSX05 として呼称することとした。不整形な土坑は円弧状を呈する帯状に展開する。そのため，SX05-SP05 周辺に空閑地が存在する。この点については調査時に意識ができておらず，図面からの想定である。そのため，この空閑地の意味については不明であるが，周辺の円弧状に展開する不整形土坑群と関係があるものと考えられる。

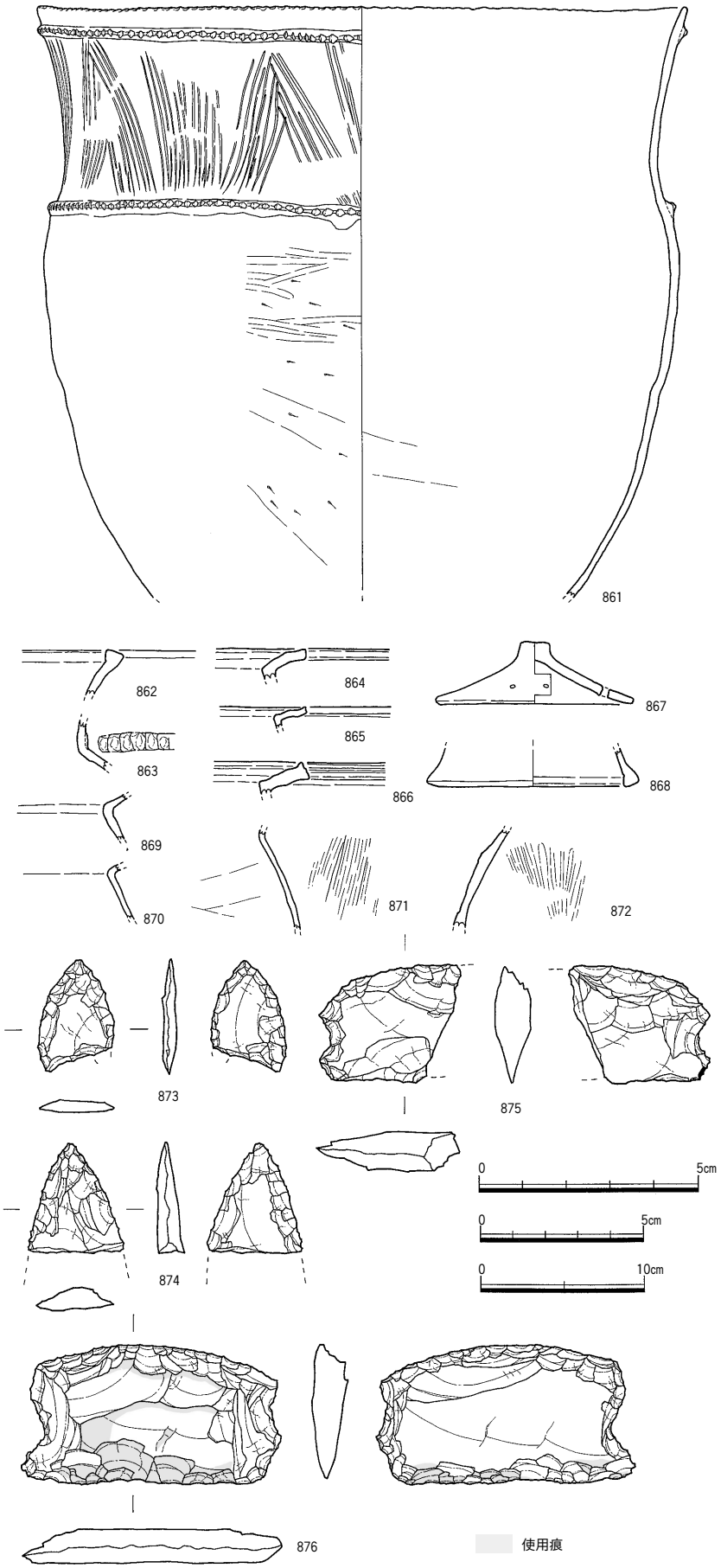
埋土は個々の遺構で微妙に異なるものの，褐灰色シルトが基調となっている。調査区外へとのびることもあり，本来の遺構の広がりは不明確である。

時期は出土土器から総合すると，中期中葉，信里編年Ⅱ-1 様式新段階～Ⅱ様式と考えられる。

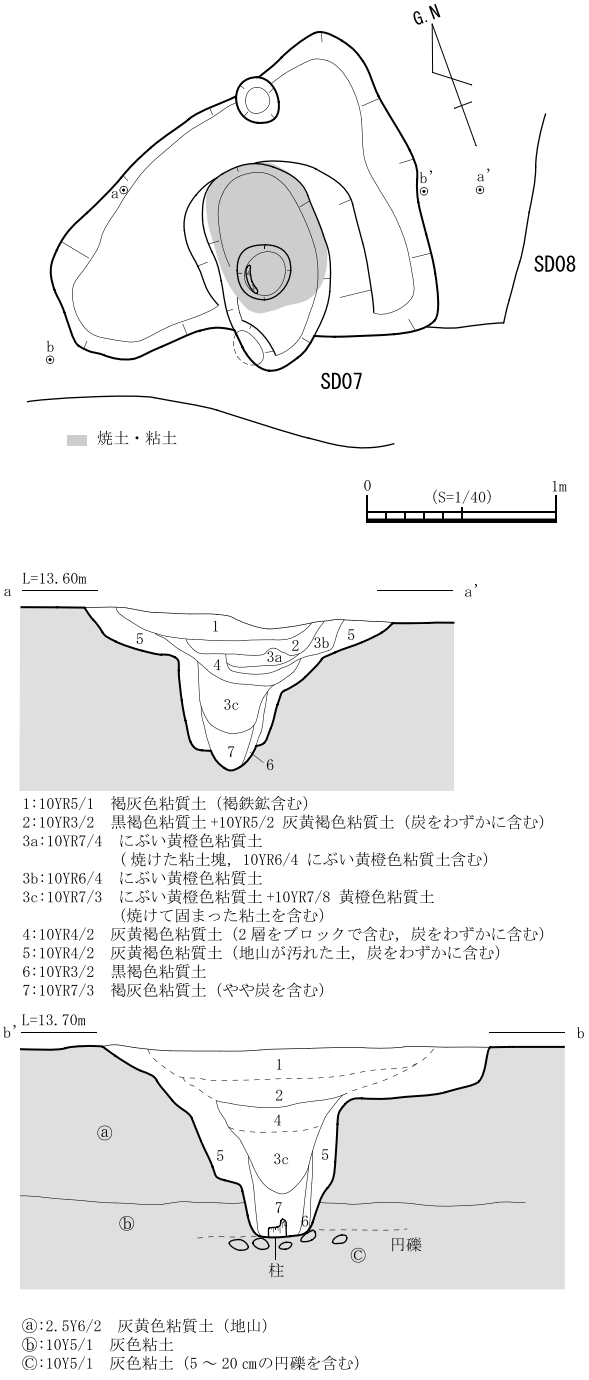
出土遺物（第 117 図）

862，863，867，868 がSK02 から出土，871 がSK03 から出土，864 がSK09 から出土，876 がSK10 から出土，865 がSK11 から出土，873 がSK18 から出土，866，869，874 がSK19 から出土，875 がSK24 から出土，870，872 がSP06 から出土している。

862 ～ 863 が壺形土器である。862 が壺 6 aで，口縁端部を内側へと肥厚させる。863 は壺の頸部で，貼り付けた突帯に押圧文を施すものである。



第 117 図　SX04・05 出土遺物（861～872：S=1/4，873，874：S=2/3，875，876：S=1/2）



第 118 図　SX11 平・断面図（S=1/40）

864 ～ 866，869 ～ 871 が甕形土器である。864 ～ 866 は甕の口縁部で，ヨコナデ調整によって整形する。866 は後期の可能性があり混入品かもしれない。

869 ～ 871 は肩部片で，小片のため詳細は不明であるが，871 から外面は縦方向の刷毛目調整，内面は板状工具によるナデ調整によって仕上げる。

867 は蓋形土器である。2 個一対の円形の透かしを施す。

868 は脚部と考えられる。内側にややつまみ出す。

872 は不明土器である。外面を縦方向の磨き調整で仕上げる。

土器の色調および胎土は 3 つに分類できる。

862 ～ 864，868 は明茶褐色を呈し，石英，長石を含むもので，862，863 は雲母も含む。

866 は黄灰褐色を呈し，石英，長石を含むものである。

それ以外は褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含むものである。

873 ～ 876 は石製品である。

873 は基部の一部を折損しているが，凹基式の石鏃と考えられる。背面側から腹面側の順に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

874 は体部から基部を折損しているが，打製石剣の先端部と考えられる。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。石材はサヌカイトである。

875 は折損しているため，全体の形状は不明であるが，抉りをもつ打製石包丁である。背部には背潰加工が確認でき，刃部は調整が確認できず，剥片の鋭利な端部をそのまま利用している。石材はサヌカイトである。

876 は両端に抉りをもつ打製石包丁である。背部には背潰加工が，刃部は両面調整し,摩滅が認められる。刃部から体部にかけて,使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

SX11（第 118 図）

ES 区の中央に位置する。SD07 の北側のやや黒ずんだ土を撤去した際に，長幅 2 m，短幅 1.68ｍの隅丸三角形の掘り方とそれを切る長軸 1.1ｍの楕円形の掘り方を確認した。一部はSD07 に切られている。検出面から約 20㎝程掘り下げると，掘り方が小さくなり，焼土が充填されたピット状の掘り方が確認できた。

その部分をさらに掘り下げたところ，ピットの掘り方となり，掘削が困難であったことから，b-b'断面で，断ち割りを行った。その結果，検出面から約 1 ｍほど掘り下げた最下層では柱材を確認した。柱材は腐食が著しく取り上げはできなかったものの，本来はピットであったと考えられる。土層図からも明らかなように，埋土は

柱材の上部撤去後，埋め戻す際に充填されたものと考えられ，焼土もまとまって堆積しており，埋め戻す際には一定の配慮がなされたものと考えられる。

時期は出土遺物がないことから，限定できない。SD07に切られていることから，信里編年Ⅱ-2様式以前と考えられる。掘り方の検出が困難であったことを考慮すると，SX17・18などと同様な時期である可能性が想定される。

その他の出土遺物（第 119 ～ 122 図）

ここで取り上げる遺物は，主に機械掘削時，遺構検出中等に出土した遺物である。

877 ～ 911 が弥生土器，912 が土製品，913 ～ ，918，925 は須恵器，919 は黒色土器，924 は土師質土器，926 は白磁，927 は染付である。928 ～ 958 が石製品である。

877 ～ 882 は壺形土器である。877 は小型壺である。器面の磨滅が著しい。878，879 は壺 6 ，880 は壺 2 b，881 ～ 882 は壺 8 である。

883 ～ 896 は甕形土器である。883 は如意形口縁の前期の甕である。884，889，890，893 は甕 3 a，885，891，894 は甕 3 b，886 は甕 3 c，887 は甕 4 b，892，895，896 は甕 5 aである。

897 ～ 901 は底部片である。

902 ～ 910 は高杯形土器もしくは台付鉢である。904 は器面の剥離が著しく，変色している。

911 は蓋形土器と考えられる。

912 は一見土製品のようであるが，重みがあり，材質については不明である。

これらの土器の色調および胎土は 4 つに分類できる。

877，878，881，883，898 は灰白色，黄灰褐色を呈し，石英，長石を含むものである。880，900，906 はやや個体差があるが，黄橙褐色を呈し，石英，長石を含むものである。887，895，904，905 は褐灰色，淡褐灰色を呈し，石英，長石を含むものである。これら以外の一群は褐灰色を呈し，石英，長石，角閃石，雲母を含む胎土である。

913 は蓋杯，914 ～ 916 は蓋坏，坏身である。

917 は壺体部片である。918 は口縁部と考えられるが，小片のため，詳細は不明である。920 は鉢形土器の口縁部と考えられる。921，922 は杯である。923 は高杯の脚部である。924 ～ 925 は東播系須恵器の鉢である。

919 は黒色土器椀の口縁部である。内面を黒色化している。926 は白磁の皿である。927 は染付椀である。

石製品は石鏃,石鏃未製品,石錐,スクレイパー,打製石剣,打製石包丁,打製石斧,磨製石斧,柱状片刃石斧,楔形石器,二次加工のある剥片,微細剥離痕のある剥片が出土している。

928 ～ 935 は石鏃で，石材はすべてサヌカイトである。928 は凹基式の石鏃で，両面に深形細部調整を施し，腹面側は中央に稜を成形する。風化が著しい。929 は折損しているため全体の形状は不明であるが，凹基式の石鏃と考えられる。素材剥片の周辺に極浅形細部調整を施し成形する。930 は平基式の石鏃である。腹面側から背面側の順に，深形細部調整を施して成形する。931 は平基式の石鏃である調整は，腹面側から背面側の順に行い，背面側は極浅形 ～ 浅形細部調整，腹面側は極浅形細部調整ないし未調整である。932 は凸基Ⅰ式の石鏃である。両面に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。933 は平基式の石鏃である。中央でやや側辺部が張り出す形態から五角形鏃と考えられる。両面に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。934 は凸基Ⅱ式の石鏃である。調整は背面側から腹面側の順に深形細部調整を施す。935 は有茎式の大型石鏃である。両面に粗い極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。基部の一部を折損する。

936・937 は石鏃未製品で，石材はサヌカイトである。

936 は横長剥片素材で，切先を折損している。調整は背腹両面の一部に極浅形 ～ 浅形細部調整を施す。937 は有茎式の石鏃未製品と考えられる。切先を折損する。基部は浅形細部調整によって作り出す。

938 は全体が分厚い涙滴形を呈する石錐である。先端部を折損する。粗い両面調整を行ったのち，浅形細部調整によって成形する。石材はサヌカイトである。

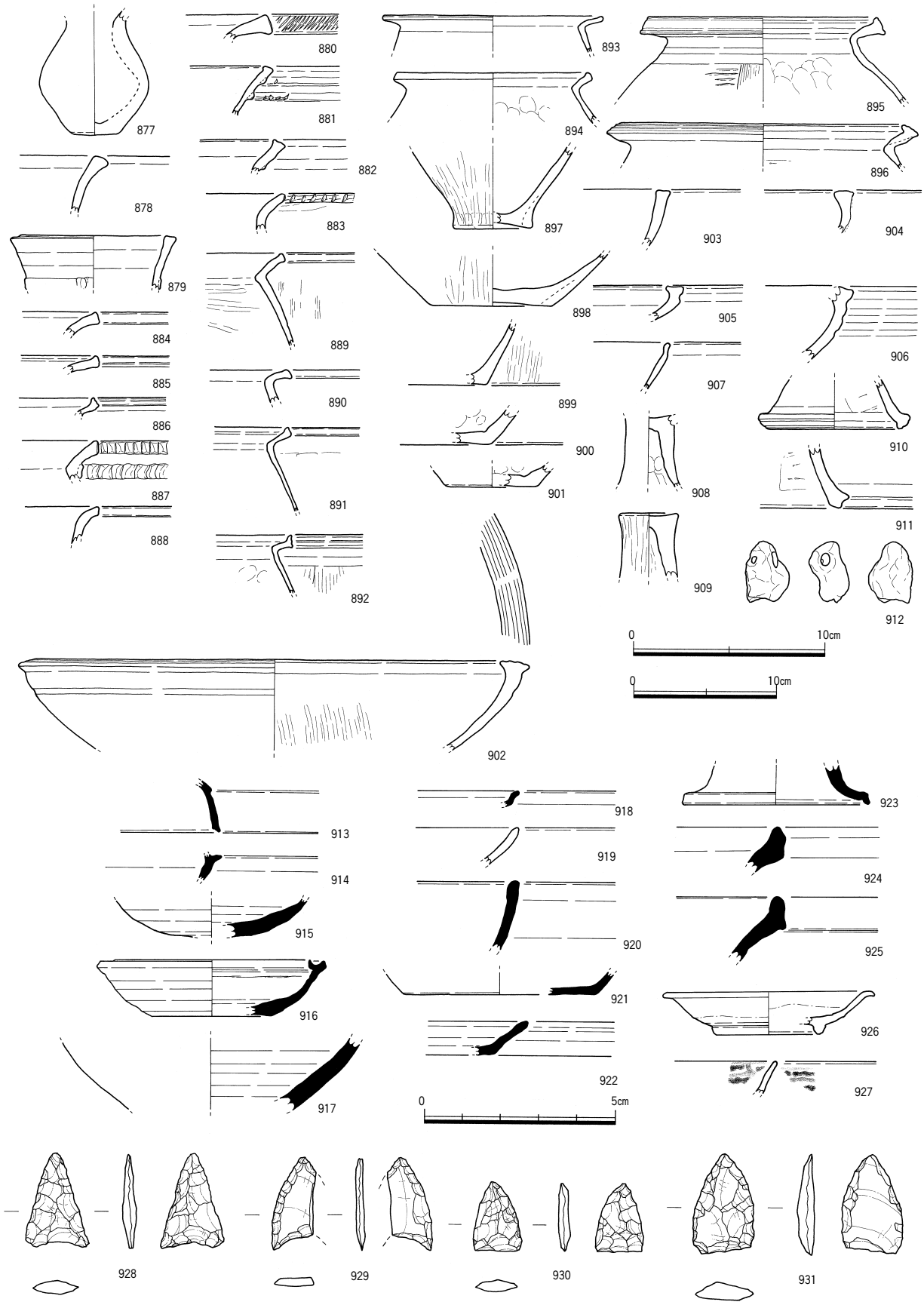
939 は打製石剣である。両面に浅形 ～ 深形細部調整を施す。背腹両面の体部に光沢面が確認できることから，打製石包丁からの転用と考えられる。基部を欠損する。石材はサヌカイトである。

940 は打製石斧である。粗い両面調整によって成形する。基部の側辺部には潰れが確認できる。背面側刃部に使用痕が確認できる。石材はサヌカイトである。

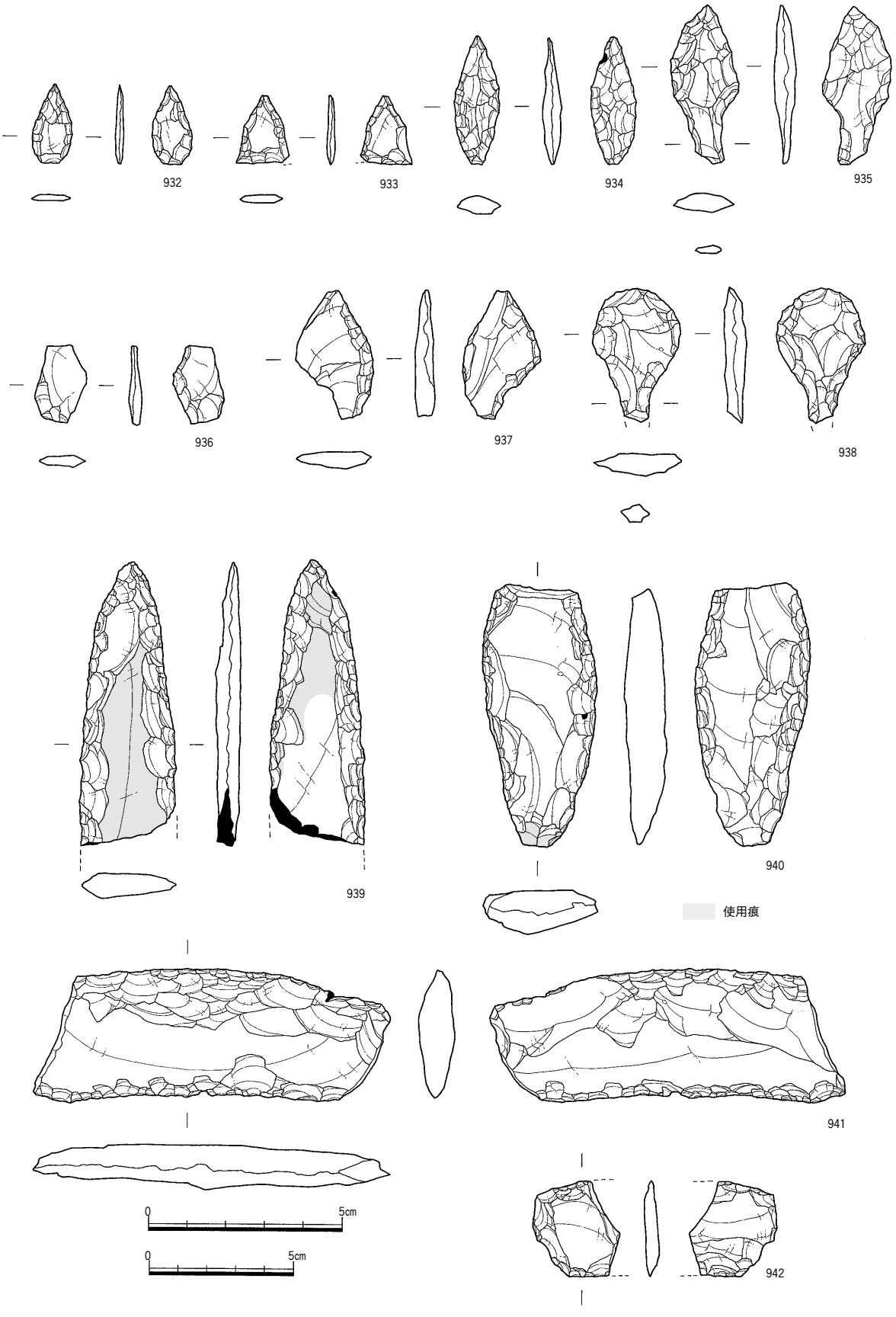
941 は打製石包丁である。両端を折損しているため，全体の形状は不明である。大型横長剥片を素材とし，背部には背潰加工が，刃部は両面調整し，摩滅が認められる。石材はサヌカイトで，風化が著しい。

942 は器種不明だが，一部に顕著な使用痕が確認できることから，打製石包丁の一部の可能性が考えられる。石材はサヌカイトである。

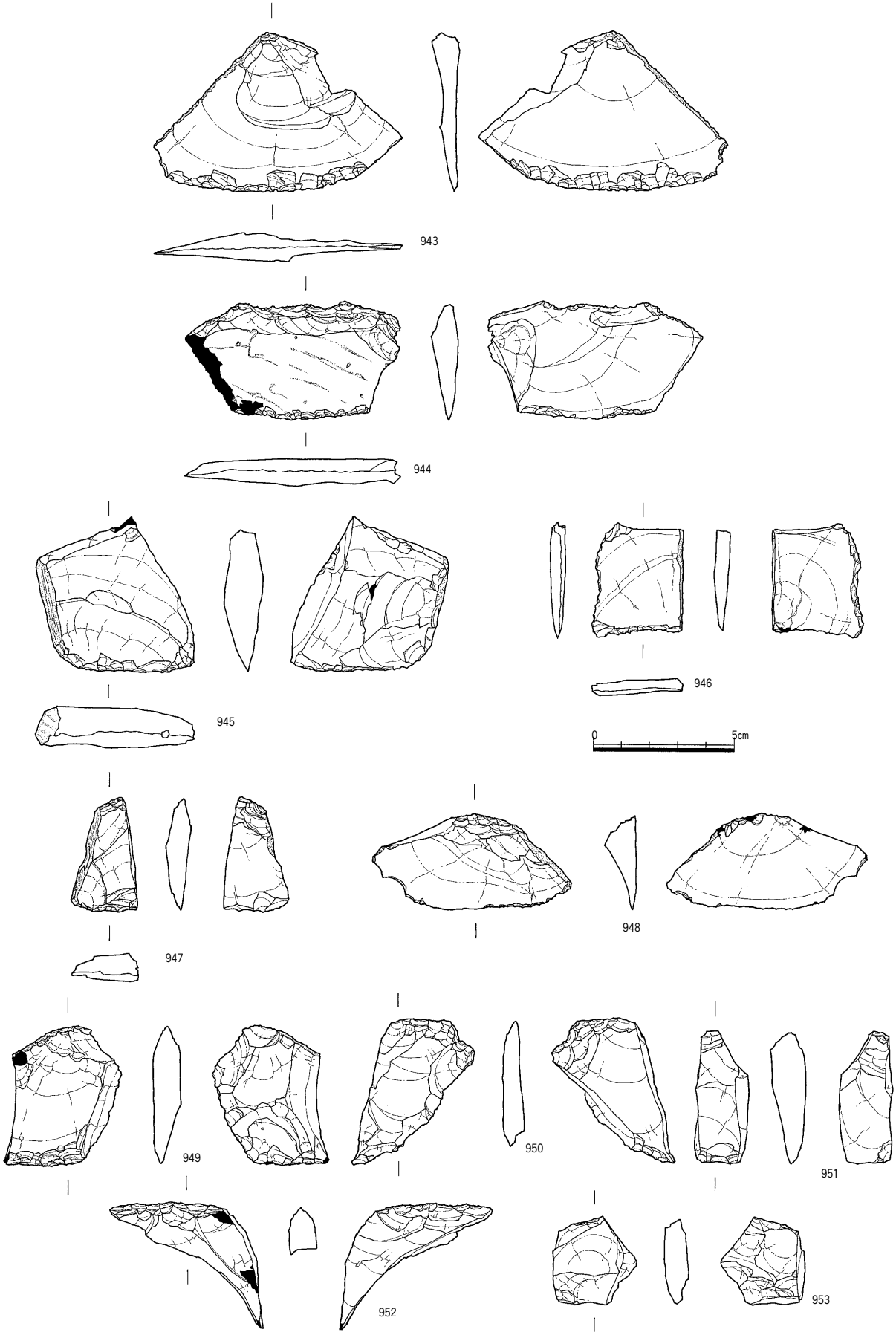
943 ～ 947 はスクレイパーで，石材はすべてサヌカイトである。943 は横長剥片素材のスクレイパーである。１側辺を自然面で構成する。刃部は剥片の鋭利な端部に両面調整して成形し，摩滅が認められる。944 は背面側体部に自然面を大きく残す横長剥片を素材で，１側辺を欠損するため，全体の形状は不明である。背部は背潰加工が，刃部は両面調整し，微細剥離痕が確認できる。945 はスクレイパーと考えられる。２側辺を折損することから，全体の形状は不明である。刃部は剥片の側辺部に両面調整によって形成され，摩滅が認められる。946



第 119 図　その他の出土遺物①　　877～911　S=1/4・912～927　S=1/3・928～931　S=2/3



第 120 図　その他の出土遺物②（932～938：S=2/3，939～942：S=1/2）



第 121 図　その他の出土遺物③（S=1/2）

は，端部を折損しているため，全体の形状は不明であるが，縦長剥片素材と考えられる。刃部は打面側と１側辺に，鈍角な剥離角をもつ調整によって成形され，摩滅が認められる。947 は大きく折損しているため，全体の形状は不明であるが，刃部は背面側の剥片の端部に作り出され，やや摩滅している。

948，955 は微細剥離痕のある剥片で，石材はすべてサヌカイトである。948 は横長剥片素材で，背腹両面の剥片の鋭利な端部の一部に微細剥離痕が確認できる。955 は縦長剥片素材で，剥片の鋭利な側辺の一部に微細剥離痕が確認できる。

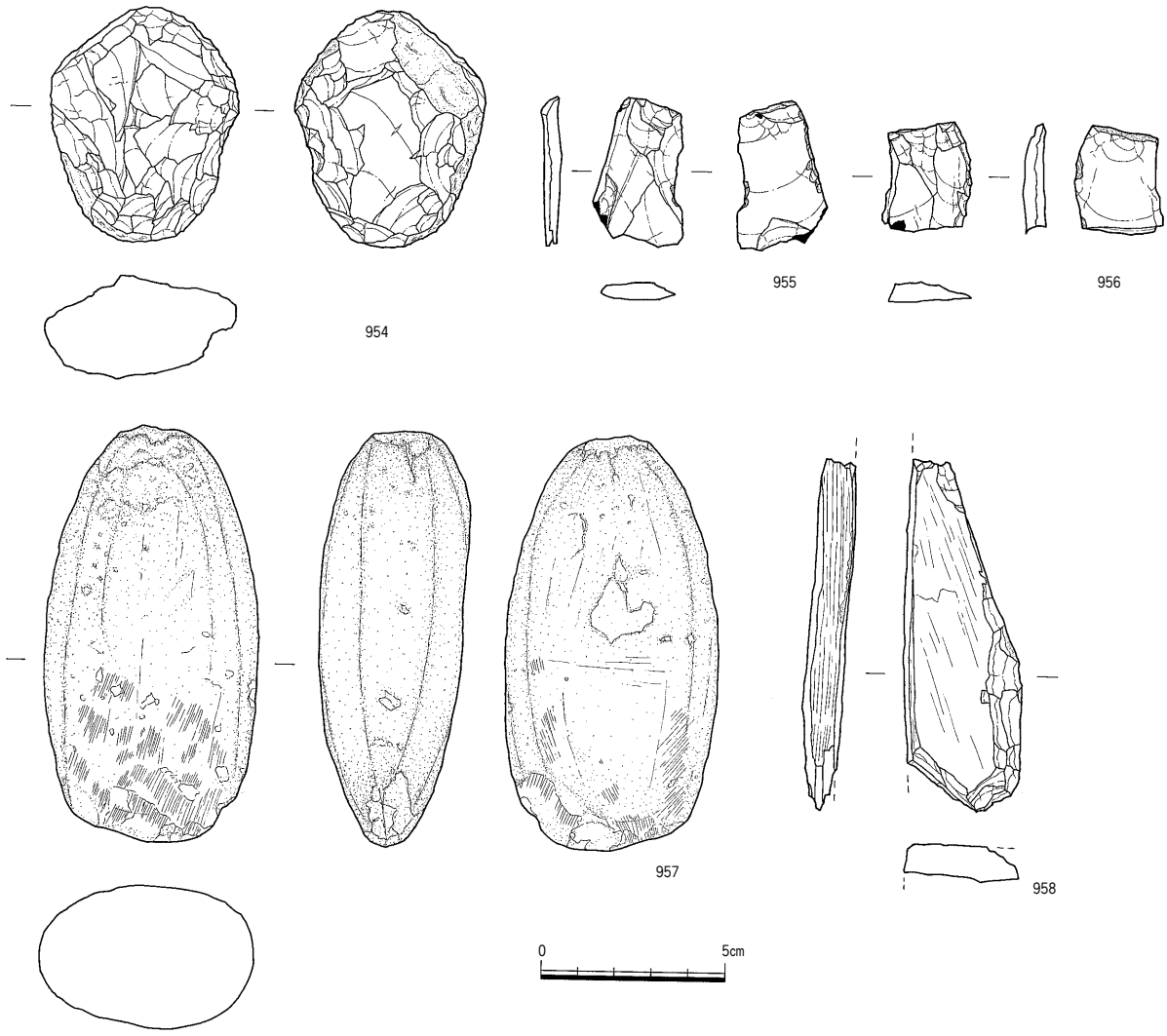
949 ～ 953 は楔形石器で，石材はすべてサヌカイトである。949・950・951 は２側辺を折損するが，上・下端部に顕著な潰れが確認できる。952 は大きく折損しているため，全体の形状は不明であるが，上端部に顕著な潰れが確認できる。953 は２側辺を折損するが，上・下端部の一部に潰れが確認できる。

954 は器種不明であるが，全体に剥離痕が認められ，一部に敲打痕が確認できる。石材はハリ質安山岩である。

956 は二次加工のある剥片である。剥片は自然面を打面に剥離されており，１側辺と端部は折損している。二次加工は背面側の鋭利な剥片の側辺部に認められる。石材はサヌカイトである。

957 は磨製石斧である。敲打によって成形されており，研磨による調整は僅かである。側面部分の研磨は特に弱い。刃部は非常に摩滅している。石材は凝灰岩である。

958 は全体を大きく欠損しているが，柱状片刃石斧と考えられる。側辺部と体部の一部に研磨痕が確認できる。石材は結晶片岩である。



第 122 図　その他の出土遺物④（S=1/2）

第４章　自然科学分析

第１節　北山浦遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

１．分析の目的

北山浦遺跡出土の弥生時代中期中葉の土器には，肉眼観察で多量の角閃石・黒雲母・長石の混入や形態的特徴から，『香東川下流域産土器』（本文中の下川津B類土器（胎土Ⅰ類）に該当）と考えられる土器がある[註1)]。しかし，中には角閃石の含有量が少ない土器がみられる。そこで，これら土器が自然科学的な胎土分析でどのように分類されるか。またこの遺跡からは弥生時代中期中葉の土器焼成土坑と想定されている遺構が確認されており，この焼成土坑内出土の焼土塊および土壌の胎土分析を実施し，遺跡内出土土器との比較を行った。そして高松平野部の上天神遺跡，空港跡地遺跡，中間西井坪遺跡，岡清水遺跡，宗高坊城遺跡から出土している香東川下流域産土器との胎土比較を行い，この土器の細分が可能かどうか検討した。

２．分析方法・試料

胎土分析の方法は，二つの方法で分析した。

一つは，蛍光Ｘ線分析法で，胎土中の成分（元素）量を調べる方法である。この方法は，分析試料を一部破壊して測定した。以下に試料作製，測定装置，方法について述べる。

試料の作製方法は，土器表面の汚れを除去し，乾燥(80℃で１時間）したものをタングステンカーバイト製の粉砕容器に詰め，試料粉砕機により約 100 ～ 200 メッシュほどに細かく粉砕し粉末試料にする。この粉末試料を塩化ビニール製のリング（直径約 25㎜，厚さ約 2㎜）に詰め，油圧式成形機で約 15ｔ圧力を加えコイン状に成形したものを，蛍光Ｘ線分析装置の測定試料とした。分析装置はエネルギー分散型卓上型蛍光Ｘ線分析計SEA 2010Ｌ（セイコーインスツルメント社製）を使用した。測定条件は，Ｘ線照射径：10㎜，電流：50 ～ 200ｍA，電圧：50 KV・15 KV，測定時間：200 秒，測定室：真空で測定した。また，各元素の定量値は，地質調査所のJA-1 標準試料を用いて検量線を作成し求めた。測定した元素はSi（珪素），Ti（ﾁﾀﾝ），Al（ｱﾙﾐﾆｳﾑ），Fe（鉄），Mn（ﾏﾝｶﾞﾝ），Mg（ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ），Ca（ｶﾙｼｳﾑ），Na（ﾅﾄﾘｳﾑ），K（ｶﾘｳﾑ），P（ﾘﾝ）の 10 元素である。

もう一つは，実体顕微鏡を用いた土器表面の砂粒観察である。これは，胎土に含まれている砂粒（岩石・鉱物）の種類，含有量を肉眼観察により判別し，どのような地質基盤の粘土を用いているか調べる方法である。

分析試料は，第６表に示した 45 点の試料で，内訳は中期中葉から後葉の土器 34 点，焼土ほか 10 点，斑レイ岩１点である。

３．分析結果

（１）蛍光Ｘ線分析結果について

第 123 図K－Ca散布図では，北山浦遺跡出土土器および焼土が胎土分析でどのように分類されるか検討した。その結果，大きく２つの胎土に分類された。

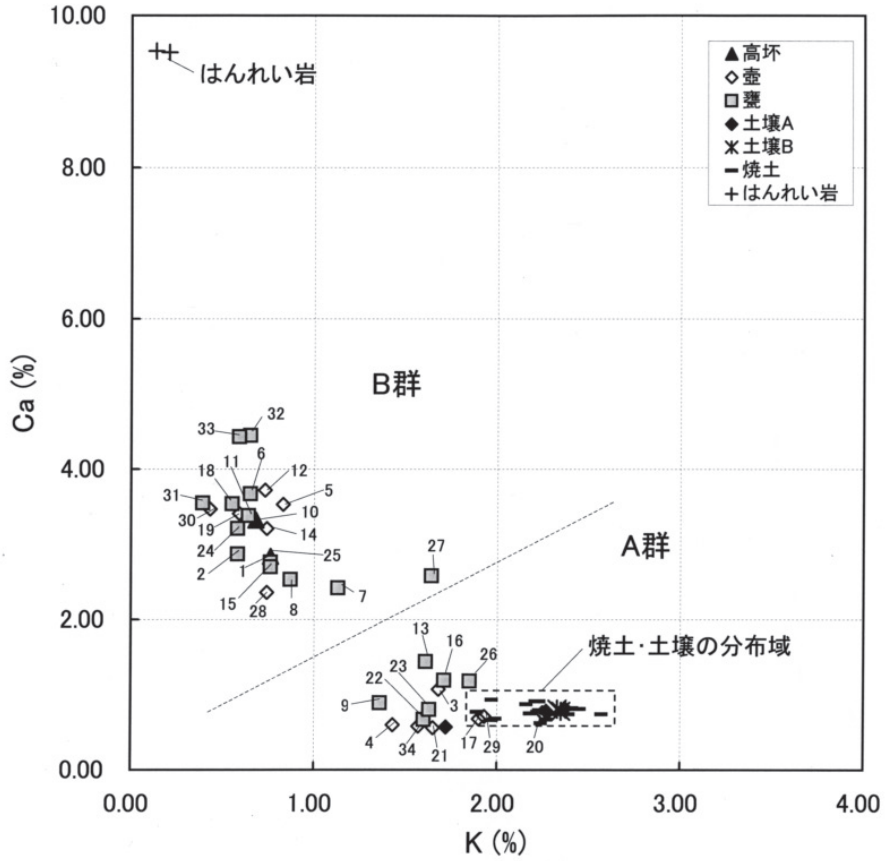
A群 ・・・・・ Ca量が約 1％以下で，K量が約 1％以上に分布するもの。
試料番号　3,4,9,13,16,17,20,21,22,23,26
29,34,35,36,37,38,39,40,41,
42,43,44

B群 ・・・・・ Ca量が約 2％以上で，K量が約 1％以下に分布するもの。
試料番号 1,2,5,6,7,8,10,11,12,14,15,18,
19,24,25,27,28,30,31,32,33

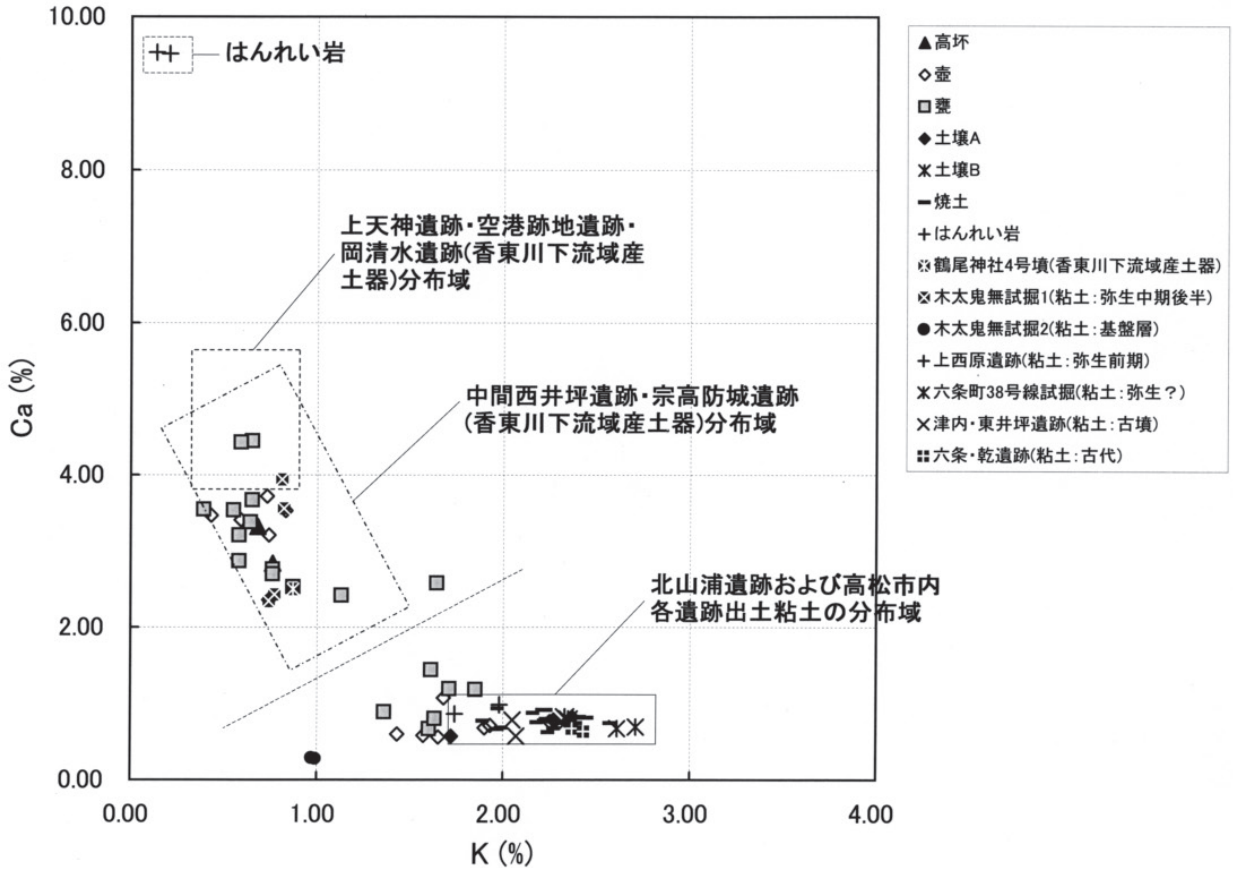
また，斑レイ岩は，ほかの土器と離れてCa量が 9.5％以上含まれているところに分布している。なお，B群が香東川下流域産土器である。

第 124 図K－Ca散布図では，北山浦遺跡と高松平野部の上天神遺跡，宗高坊城遺跡，空港跡地遺跡，中間西井坪遺跡，岡清水遺跡から出土している香東川下流域産土器が各遺跡別で違いがあるかどうか調べた。すると北山浦と中間西井坪および宗高坊城の分布範囲がそれぞれ同じであった。また北山浦の試料番号 32，33 は上天神・空港跡地・岡清水の各遺跡の分布域に分布した。

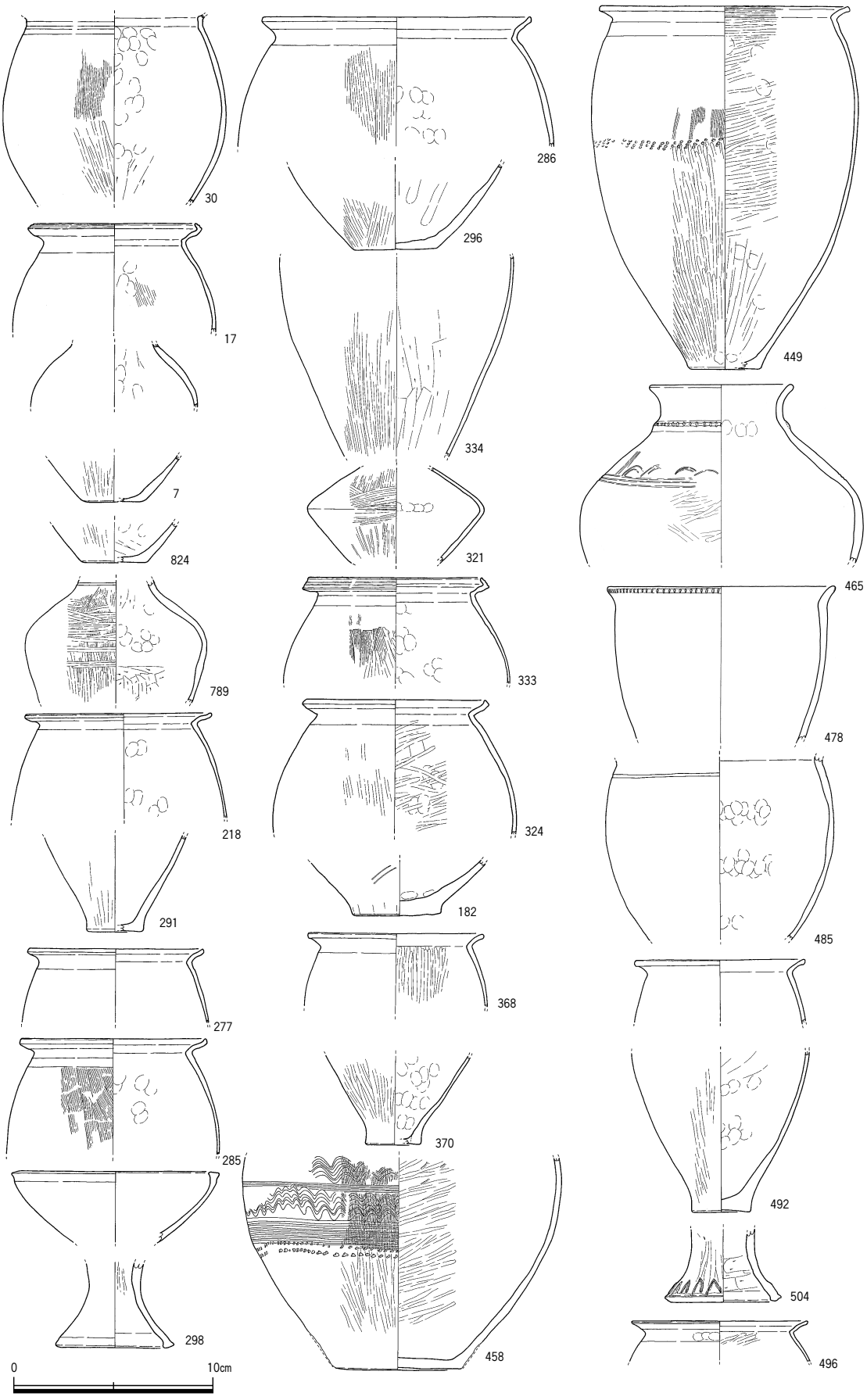
そして北山浦出土の土壌・焼土と高松平野でサンプリングした粘土と比較した。その結果，上西原(弥生前期)，六条町 38 号線試掘（弥生？），津内・東井坪（古墳），



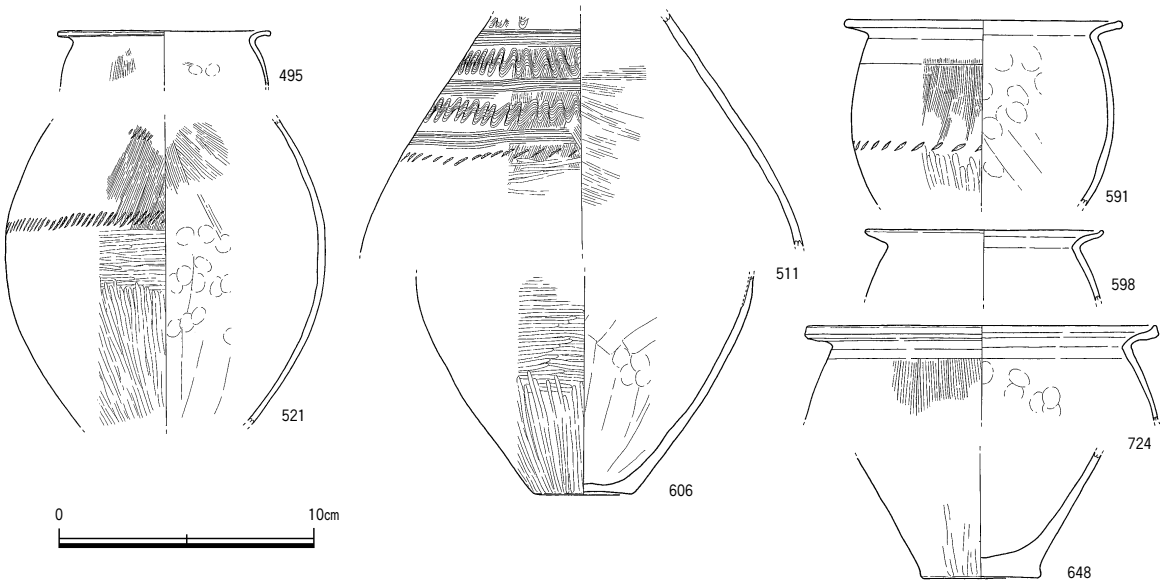
第 123 図　北山浦遺跡内出土土器の胎土比較



第 124 図　高松市内出土土器と北山浦遺跡出土土器の胎土比較



第 125 図　北山浦遺跡出土土器試料①（S=1/6）



第 126 図　北山浦遺跡出土土器試料②（S=1/6）

六条・乾（古代）の各遺跡で採取した粘土と北山浦出土の土壌・焼土の分布域が一致した。また木太鬼無試掘の粘土（弥生中期後半）は北山浦のB群（香東川下流域産土器）の領域に分布している。

（2）実体顕微鏡による砂粒観察法

北山浦遺跡出土土器の表面を実体顕微鏡観察したところ，以下の胎土に分類された。

1類 ····· 1㎜以下の石英を多量に含み，0.5㎜以下の黒雲母・角閃石を中量程度含み，1㎜以下の長石を少量含んでいる。
（巻頭図版 15-1・2・3）

2類 ····· 2㎜以下の石英・長石と 1㎜以下の黒雲母を少量含み，まれに花崗岩（2㎜以下）らしき岩片もみられる。（巻頭図版 15-4）

3類 ····· 2㎜の石英・長石と，0.5㎜以下の火山ガラスを少量含む。まれに砂岩（2㎜以下）の岩片がみられる（巻頭図版 15-5）

以上のように，3つの胎土に分類された。そして1類は蛍光X線分類のB群（香東川下流域産土器）に，2・3類は，蛍光X線分類のA群に，それぞれ該当する。つまり，A群には火山岩起源（花崗岩の岩片）と堆積岩起源（砂岩・片岩の岩片）の2種類の岩片が含まれており，複数の胎土に分類が可能である。またB群の香東川下流域産土器も，黒雲母や角閃石の含有量の違いで，複数の胎土に分類できるようである。それは，0.5㎜以下の微細な角閃石を多く含むもの，1㎜以下の黒雲母を多く含むものである。

なお，北山浦遺跡内出土の焼土・土壌は，非常に精緻な粘土で，石英以外の砂粒はほとんど観察できなかった。

4．考察

北山浦遺跡出土土器・焼土を中心として蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察法の胎土分析を実施したところ，以下のことが明確になった。

北山浦遺跡出土土器は，蛍光X線分析法で2つに，実体顕微鏡観察法では3つにそれぞれ分類できた。このうち蛍光X線分類のA群と砂粒観察2・3類が，B群と1類がそれぞれ対応した。なお，Ca量が少ないA群は複数の胎土（砂粒構成が異なる）があることが推定された。それは火山岩起源と堆積岩起源の2種類の岩片が含まれていることから推定される。また，B群の香東川下流域産土器も角閃石や黒雲母の含有量の違いで複数の胎土に分類が可能であった。

当初、同遺跡出土の斑レイ岩原石（巻頭図版 15-6）は石英・長石・角閃石・輝石などの鉱物で構成されていることから、同遺跡出土土器の香東川下流域産土器を制作するための混和材として混ぜて焼成されたのではないかと考えられた[註2)]。しかし、叩き石に使用されている類例があることや、混和材として入れているには、砂粒が大きすぎるなどの指摘があり、今回の分析等では、斑レイ岩原石が混和材として使用されたと、決定づけるに

第６表　北山浦遺跡出土遺物の胎土分析一覧表（Si～P：％）

No	報告番号	調査区	出土遺構	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	時期
1	30	ES	SH01	甕 胴部	57.26	2.21	20.89	9.53	0.15	2.41	2.76	3.00	0.76	0.70	Ⅲ-1
2	17	ES	SH01	甕 口縁部	55.71	2.23	21.00	10.03	0.17	2.32	2.87	4.26	0.58	0.47	Ⅲ-1
3	7	ES	SH01・SX08畦	壺 胴部＋底部	68.20	0.67	18.29	3.46	0.04	2.14	1.07	3.39	1.68	0.67	-
4	824	WS	SX02	壺 底部	61.45	1.27	21.74	6.38	0.07	2.28	0.60	3.74	1.43	0.74	-
5	789	WN	SX01	壺 胴部	57.40	1.51	19.42	79.70	0.18	2.66	3.53	3.94	0.83	0.35	後期
6	218	WN	SX03	甕	57.17	1.37	21.12	9.73	0.14	2.42	3.67	2.54	0.65	0.82	Ⅱ-2
7	291	ES	SX08	甕 底部	59.46	1.12	20.88	8.72	0.11	2.47	2.42	2.63	1.13	0.63	-
8	277	ES	SX08	甕	59.28	1.44	21.26	8.90	0.12	2.83	2.53	2.31	0.87	0.07	Ⅱ-1新
9	285	ES	SX08	甕	65.96	0.98	19.99	4.85	0.05	2.25	0.89	3.01	1.36	0.40	Ⅱ-2
10	298	ES	SX08	高杯	56.13	1.32	21.70	10.45	0.15	2.76	3.32	2.60	0.68	0.58	Ⅱ-2
11	286	ES	SX08	甕	57.99	1.27	21.37	9.41	0.14	2.33	3.38	3.11	0.64	0.04	Ⅱ-2
12	296	ES	SX08	壺 底部	56.93	1.37	21.57	10.83	0.15	2.60	3.72	1.37	0.73	0.30	-
13	334	ES	SX09	甕 胴部	61.02	1.11	20.63	7.68	0.10	2.38	1.44	2.72	1.61	0.79	中期
14	321	ES	SX09	壺 胴部	57.85	1.93	20.12	10.29	0.20	2.65	3.21	2.55	0.74	0.12	-
15	333	ES	SX09	甕	57.90	2.14	20.36	11.23	0.17	2.61	2.70	1.14	0.76	0.63	Ⅲ-1
16	324	ES	SX09	甕	68.71	0.91	18.53	3.02	0.03	1.88	1.19	2.76	1.71	0.74	Ⅱ-2
17	182	EN	SH03	壺 底部	71.58	0.67	17.25	1.39	0.00	1.84	0.68	3.70	1.90	0.59	前期？
18	368･370	EN	SX13	甕	56.50	1.28	23.01	8.54	0.12	2.28	3.54	3.38	0.55	0.57	Ⅱ-1古
19	449	ES	SX17	壺	55.86	1.27	21.39	10.31	0.15	2.55	3.41	3.63	0.59	0.49	Ⅱ-1古
20	458	ES	SX17	壺 底部	67.26	0.62	19.58	2.30	0.03	2.19	0.76	3.66	2.25	0.63	Ⅱ-2
21	465	ES	SX18	壺	69.91	0.74	18.57	2.26	0.02	2.14	0.56	3.41	1.65	0.39	前期
22	485	ES	SX18	甕	70.13	0.85	19.05	2.51	0.03	2.29	0.67	2.20	1.60	0.29	前期
23	478	ES	SX18	甕	69.05	0.66	17.84	2.39	0.04	2.20	0.80	4.59	1.63	0.43	前期
24	492	EN	SX19	甕	59.04	1.38	21.55	9.10	0.14	2.56	3.21	1.89	0.58	0.17	Ⅱ-1
25	504	EN	SX19	脚部	57.69	1.78	21.54	11.79	0.15	2.73	2.84	0.01	0.76	0.34	-
26	496	EN	SX19	甕	67.88	0.78	18.70	1.74	0.01	2.31	1.18	5.08	1.85	0.16	Ⅱ-1新
27	495	EN	SX19	甕 口縁部	58.63	1.25	22.89	7.49	0.09	0.09	2.58	2.36	1.64	0.74	Ⅱ-1新
28	521	ES	SX20	壺 胴部	58.26	1.39	21.24	7.49	0.09	2.58	2.36	3.64	0.74	0.12	中期
29	511	ES	SX20	壺 胴部	67.34	0.83	20.11	3.79	0.06	2.28	0.71	2.06	1.93	0.47	Ⅱ
30	606	ES	SK26	壺 体部	56.05	1.43	21.92	10.01	0.15	2.60	3.47	2.66	0.43	0.87	-
31	591	ES	SK26	甕	52.61	1.75	21.83	11.58	0.17	2.82	3.55	4.44	0.39	0.68	Ⅱ
32	598	ES	SK26	甕 口縁部	57.95	1.51	21.27	10.20	0.16	3.11	4.45	0.45	0.65	0.01	Ⅱ-2
33	724	WN	SR01-①	甕 口縁部	60.75	1.06	18.56	9.18	0.17	2.67	4.43	2.01	0.59	0.23	Ⅱ-2
34	648	ES	SP31	壺 底部	72.47	0.67	17.20	2.12	0.02	2.13	0.58	2.58	1.57	0.31	-
35			西壁	土壌A	69.20	0.61	16.96	5.22	0.15	2.11	0.82	1.86	2.37	0.17	
35			西壁	土壌A	68.39	0.61	16.91	4.91	0.15	2.16	0.78	3.19	2.27	0.16	
35			西壁	土壌A	58.36	0.42	17.48	3.66	0.12	3.76	0.57	13.42	1.72	0.10	
36			西壁	土壌B	70.79	0.66	16.89	5.05	0.08	1.71	0.78	0.98	2.35	0.20	
36			西壁	土壌B	69.04	0.55	17.06	5.01	0.07	2.35	0.81	1.59	2.33	0.74	
37			SH01	焼土	69.76	0.73	17.14	3.22	0.04	2.13	0.75	2.98	2.18	0.68	
37			SH01	焼土	70.09	0.67	17.07	3.31	0.05	2.11	0.77	2.86	2.22	0.41	
37			SH01	焼土	70.81	0.71	17.08	328.00	0.03	1.95	0.79	2.57	2.23	0.22	
38			SK11	焼土	69.76	0.53	16.85	2.43	0.02	2.15	0.74	4.62	2.34	0.14	
38			SK11	焼土	71.70	0.57	16.90	2.61	0.04	1.85	0.82	2.32	2.41	0.31	
38			SK11	焼土	72.31	0.55	16.65	2.53	0.04	2.03	0.81	2.10	2.45	0.12	
39			SK21	焼土	70.18	0.65	16.99	3.10	0.04	1.97	0.81	3.07	2.43	0.30	
39			SK21	焼土	70.24	0.70	17.52	3.02	0.05	2.18	0.76	2.54	2.27	0.27	
40			SK26	焼土	69.04	0.64	16.48	3.87	0.04	2.34	0.93	3.95	1.97	0.36	
40			SK26	焼土	70.19	0.56	16.66	4.21	0.05	2.28	0.87	2.43	2.16	0.15	
41			SK27	焼土	71.59	0.67	16.42	3.55	0.05	2.04	0.91	1.69	2.21	0.38	
41			SK27	焼土	71.09	0.63	16.31	3.60	0.05	2.06	0.91	2.50	2.23	0.15	
42			SX04	焼土	60.17	0.59	15.49	15.44	0.25	2.01	0.77	2.30	1.89	0.34	
42			SX04	焼土	62.74	0.44	15.63	15.35	0.24	2.19	0.68	0.00	1.99	0.19	
43			SX19	焼土	66.83	0.66	17.37	4.53	0.08	2.04	0.74	4.62	2.39	0.17	
43			SX19	焼土	67.74	0.69	17.49	4.63	0.07	2.23	0.74	3.19	2.57	0.19	
43			SX19	焼土	66.83	0.65	17.77	4.37	0.07	2.40	0.62	4.23	2.24	0.37	
44			SX21	焼土	66.47	0.56	17.34	3.17	0.06	2.23	0.66	6.78	1.97	0.39	
44			SX21	焼土	69.79	0.72	17.44	3.42	0.06	1.99	0.67	2.95	2.27	0.30	
45			SH01	斑レイ岩	40.18	3.85	16.49	18.03	0.24	9.53	9.52	1.72	0.20	0.05	
45			SH01	斑レイ岩	40.13	3.93	16.24	17.96	0.28	9.62	9.53	1.95	0.13	0.05	

*時期決定は信里芳紀氏の編年に依拠している。

は無理がある。しかしながら、これまでの胎土分析では、香東川下流域産土器のなかでも、角閃石や長石および黒雲母の含有量が異なるものがあり、それほど単純な砂粒構成比比率ではないと考えられる[註3)]。今後このような類例が増えることで混和材として使用されたことが裏づけられることを期待したい。

この胎土分析の機会を与えていただいた小川賢氏，山元敏裕氏，渡邊誠氏をはじめ，高松市教育委員会の職員の方々にはいろいろとお世話になった。記して感謝致します。

【註】

(1) 大久保徹也「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社　2003

(2) 渡邊　誠氏のご教示による。

(3) 白石　純「高松平野部出土の弥生時代後期から古墳時代前期土器の胎土分析」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会　2008

【参考文献】

白石　純「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『上天神遺跡』香川県教育委員会　1995

白石　純「空港跡地遺跡出土土器の胎土分析」『空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会　1997

白石　純「中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析」『中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会　1999

白石　純「岡清水遺跡出土土器の胎土分析」『岡清水遺跡』香川県教育委員会　2001

白石　純「宗高坊城遺跡出土土器の胎土分析」『宗高坊城遺跡』高松市教育委員会　2004

第２節　高松市北山浦遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市北山浦遺跡から出土した建築部材４点，用途不明品５点の合計９点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面），柾目（放射断面），板目（接線断面）の各切片を採取し，永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹１種，広葉樹７種）の表と顕微鏡写真を示し，以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

第７表　樹種同定結果一覧

No	報告番号	出土遺構	種類	樹　種
1	162	SH01 SP02	柱材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
2	161	SH01 SP01	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	817	SX01	建築部材？	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
4	781	SR01	建築部材？	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
5	816	SX01	棒材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	163	SH01 SP03	柱材	ニレ科エノキ属
7	164	SH01 SP06	柱材	ニガキ科ニガキ属ニガキ
8	783	SR01	棒材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
9	782	SR01	建築部材？	クスノキ科クスノキ属クスノキ

１）コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ（Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.）（遺物No.３，写真No.３）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南），四国，九州（宮崎まで）に分布する。

２）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）（遺物No.1,4,6，写真No.1,4,6）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり，時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ，アカガシ，シラカシ等があり，本州（宮城，新潟以南），四国，九州，琉球に分布する。

３）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節（Sect. Prinus Loudon syn. Diversipilosae, Dentatae）（遺物No.２，写真No.２）

環孔材である。木口では大道管（～380μm）が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ，薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ，ミズナラ，カシワ等があり，北海道，本州，四国，九州に分布する。

４）ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus Endlicher sect. Cerris）（遺物No.５，写真No.５）

環孔材である。木口では大道管（～430μm）が年輪界にそって１～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ，厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られ

る典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ，アベマキがあり，本州（岩手，山形以南），四国，九州，琉球に分布する。

5）ニレ科エノキ属（Celtis sp.）
（遺物No.7，写真No.7）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～230μm）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形，斜線状の集団管孔を形成し，花綵状に配列している。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものと8～10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞（鞘細胞）に取り囲まれている。エノキ属はエノキ，エゾエノキ等があり，北海道，本州，四国，九州に分布する。

6）クスノキ科クスノキ属クスノキ（Cinnamomum Camphora Presl）（遺物No.8，写真No.8）

散孔材である。木口では中庸の道管（～200μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり，その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列，高さ～800μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州（関東以西），四国，九州に分布する。

7）ニガキ科ニガキ属ニガキ（Picrasma quassioides Benn.）（遺物No.9，写真No.9）

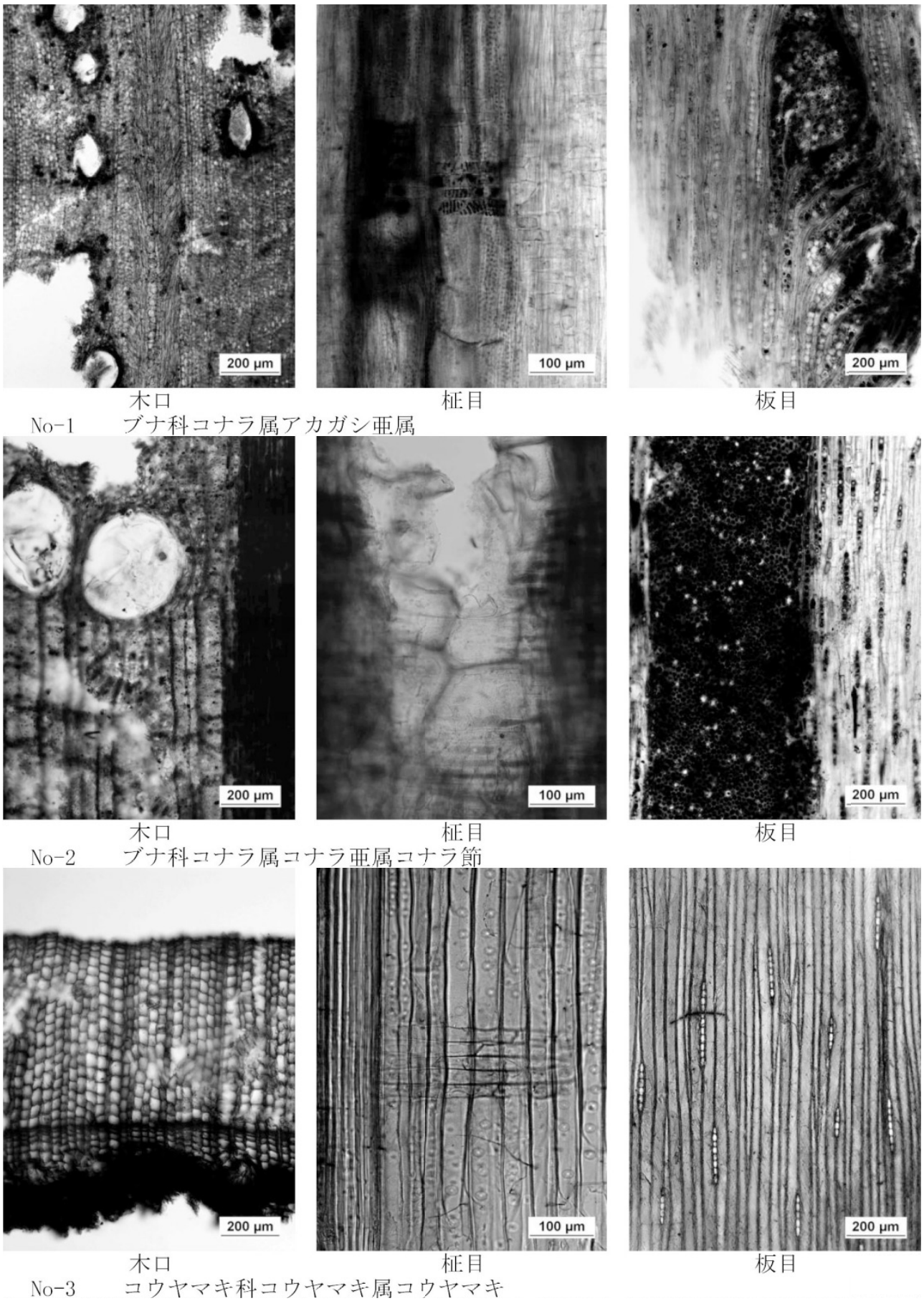
環孔材である。木口では大道管（～250μm）が単独ないし多列で孔圏部を形成している。孔圏外では厚壁の小道管が単独ないし数個複合して散在する。軸方向柔細胞は顕著で，周囲状，翼状，連合翼状，帯状を呈する。柾目では大道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は小型である。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。軸方向柔組織は細胞内に結晶を含み，階層状に配列している。板目では放射組織は1～5細胞列，高さ～500μmからなる。ニガキは北海道，本州，四国，九州，琉球に分布する。

【参考文献】

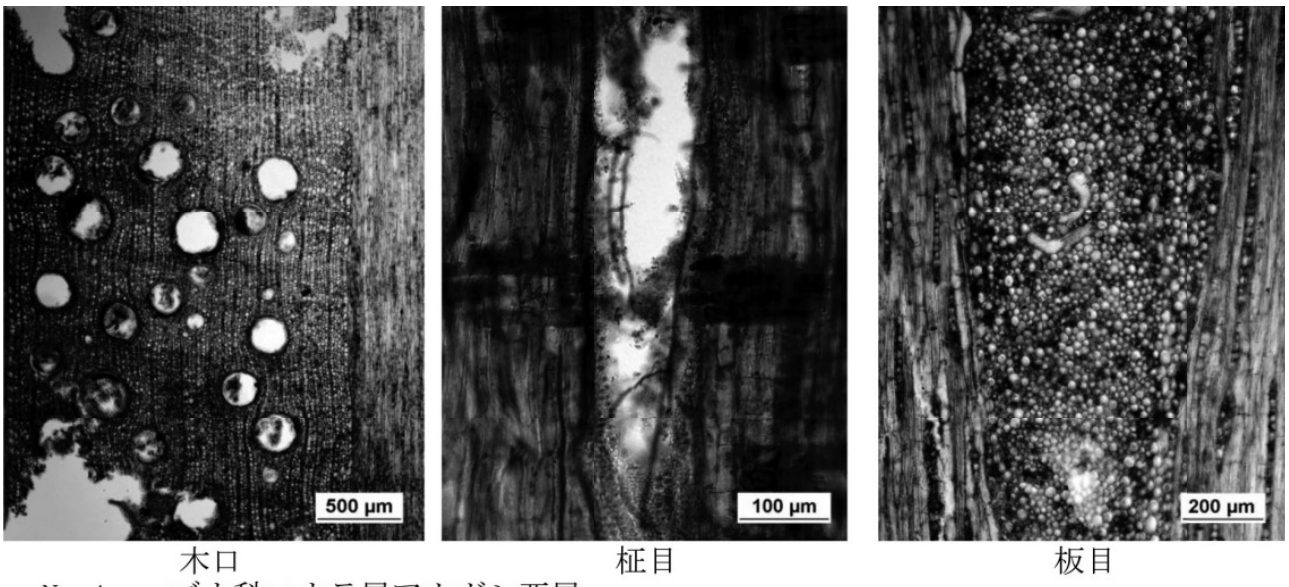
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

【使用顕微鏡】

Nikon DS-Fi1

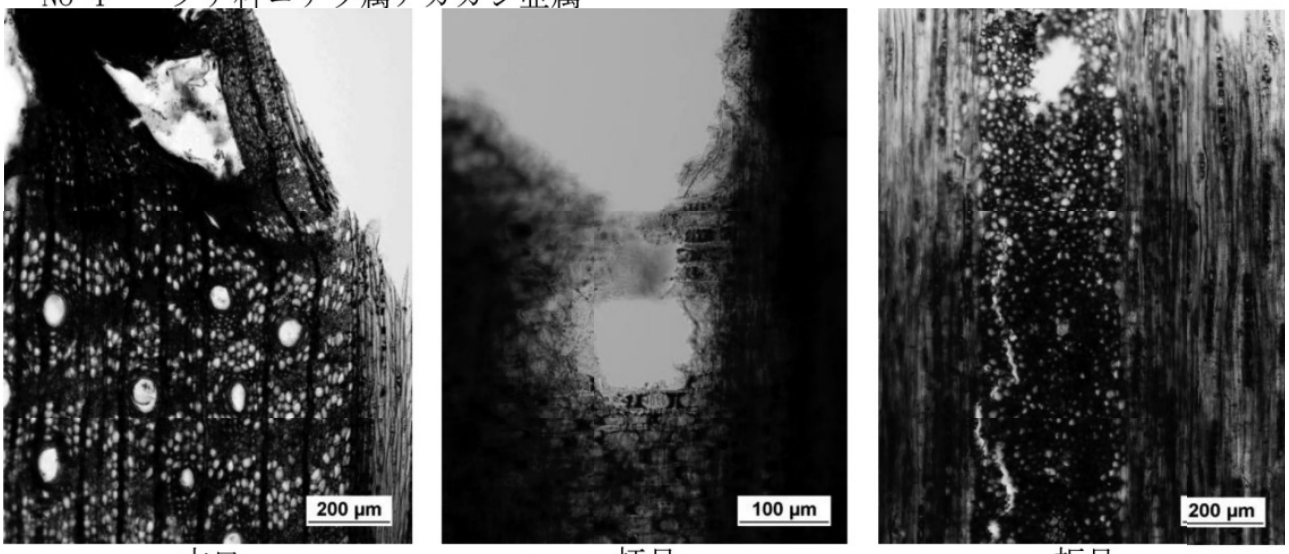


第 127 図　樹種調査写真№１～№３



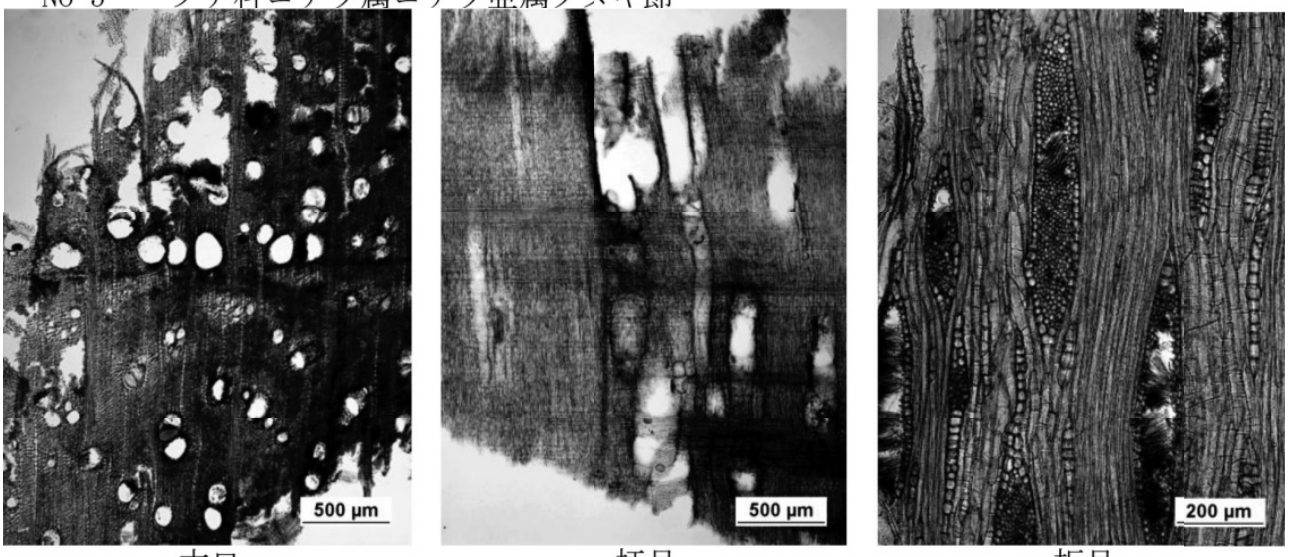
木口　　柾目　　板目

No-4　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　　柾目　　板目

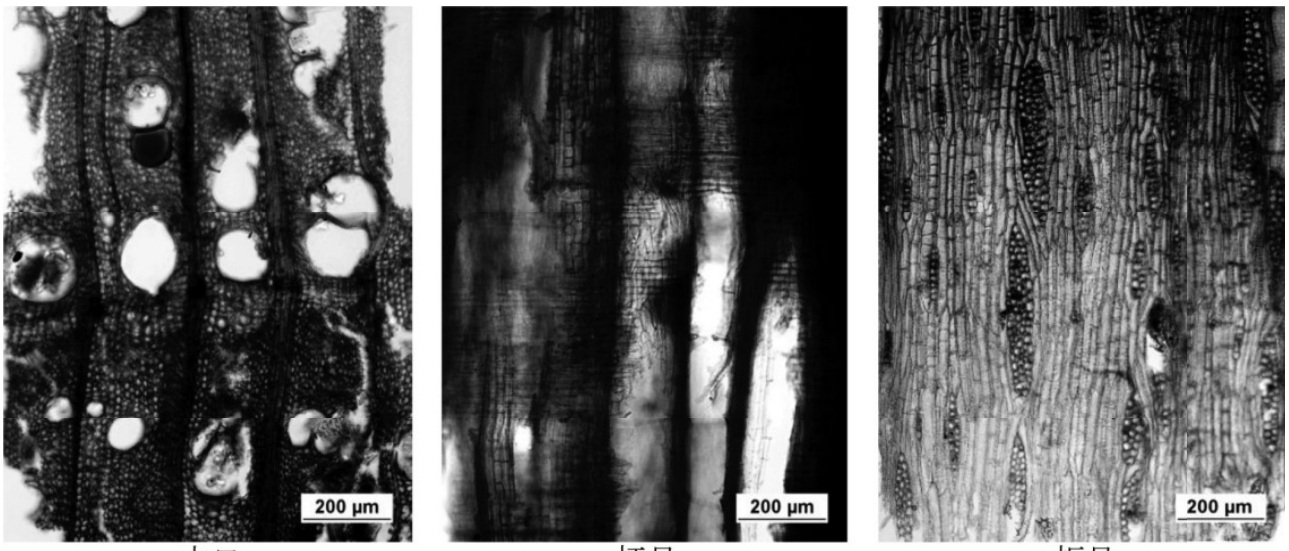
No-5　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口　　柾目　　板目

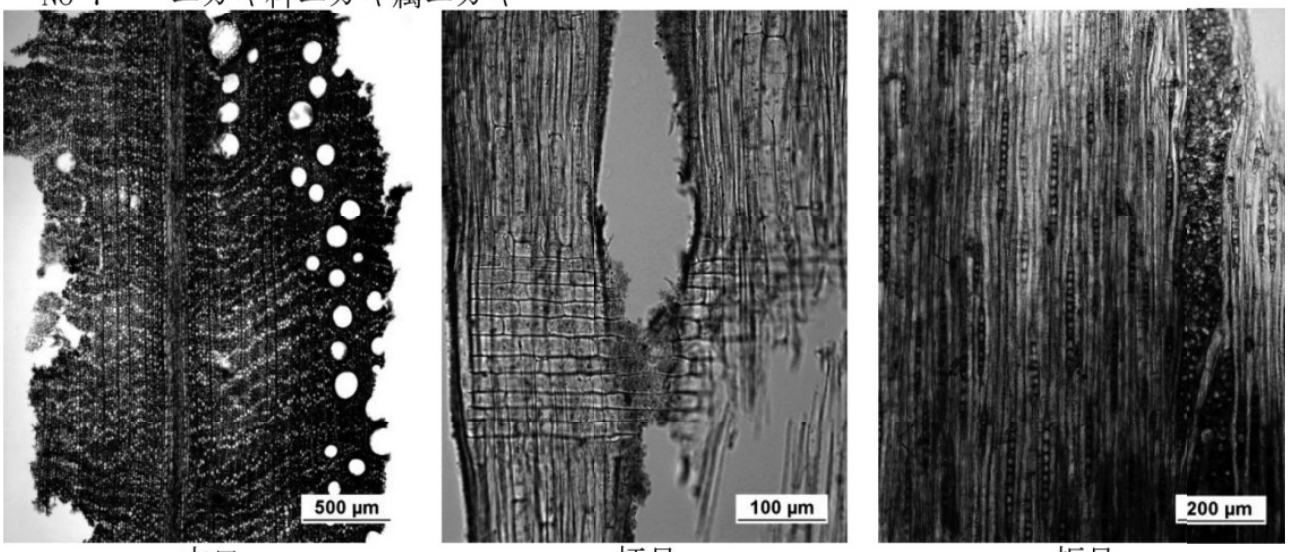
No-6　ニレ科エノキ属

第 128 図　樹種調査写真№４～№６



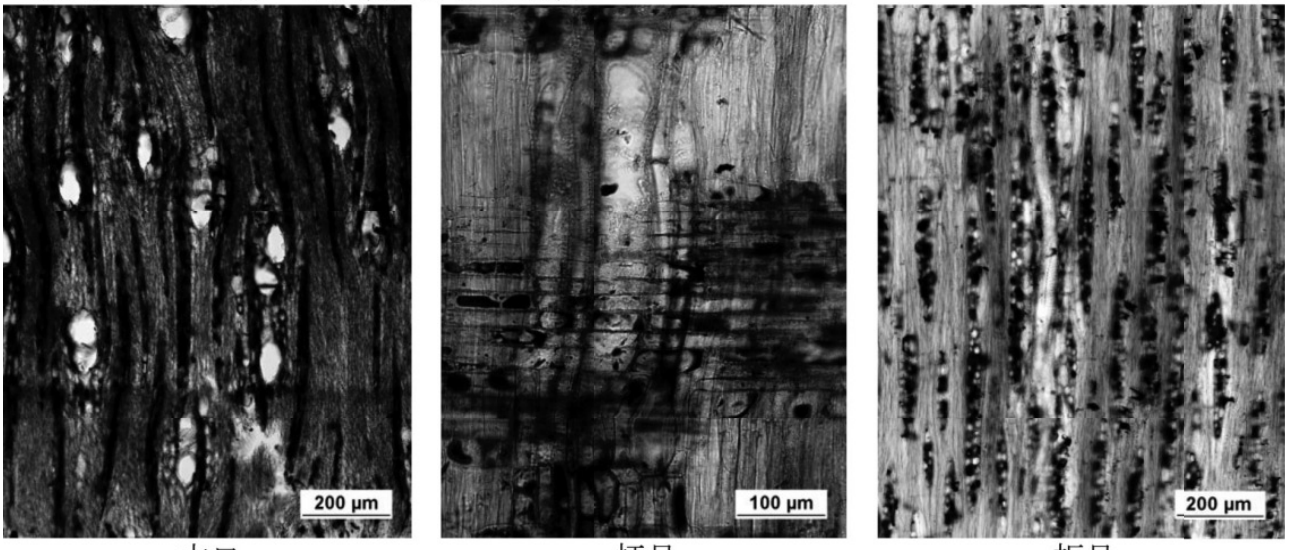
木口　　柾目　　板目

No-7　　ニガキ科ニガキ属ニガキ



木口　　柾目　　板目

No-8　　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　　柾目　　板目

No-9　　クスノキ科クスノキ属クスノキ

第 129 図　樹種調査写真№７～№９

第3節　放射性炭素年代測定

（株）吉田生物研究所

1. はじめに

高松市北山浦遺跡の用途不明品2点について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報，調製データは第8表のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（AMS：NEC製1.5 SDH）を用いて測定した。得られた14 C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，14 C年代，暦年代を算出した。

3. 結果

第9表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13 C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した14 C年代，14 C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14 C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14 C年代（yrBP）の算出には，14 Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した14 C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の14 C年代がその14 C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の14 C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14 C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14 C濃度の変動，及び半減期の違い（14 Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

14 C年代の暦年較正にはOxCal 4.1（較正曲線データ：IntCal 04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された14 C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第8表　測定試料および処理

No.	試料データ	前処理
1	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：No.1(ES SH01 SP02 2008.2.12)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
2	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：保存処理なし	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)

第9表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

No.	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
1	-27.28±0.25	2137±28	2135±30	342BC(7.5%)326BC 204BC(44.0%)151BC 140BC(16.7%)112BC	351BC(16.1%)300BC 228BC(0.6%)223BC 210BC(75.0%)88BC 78BC(3.7%)56BC
2	-27.77±0.22	2229±23	2230±25	371BC(12.8%)352BC 296BC(48.9%)228BC 221BC(6.5%)211BC	384BC(20.8%)346BC 322BC(74.6%)206BC

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の 14 C年代』3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第4節　北山浦遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ（株）

1．はじめに

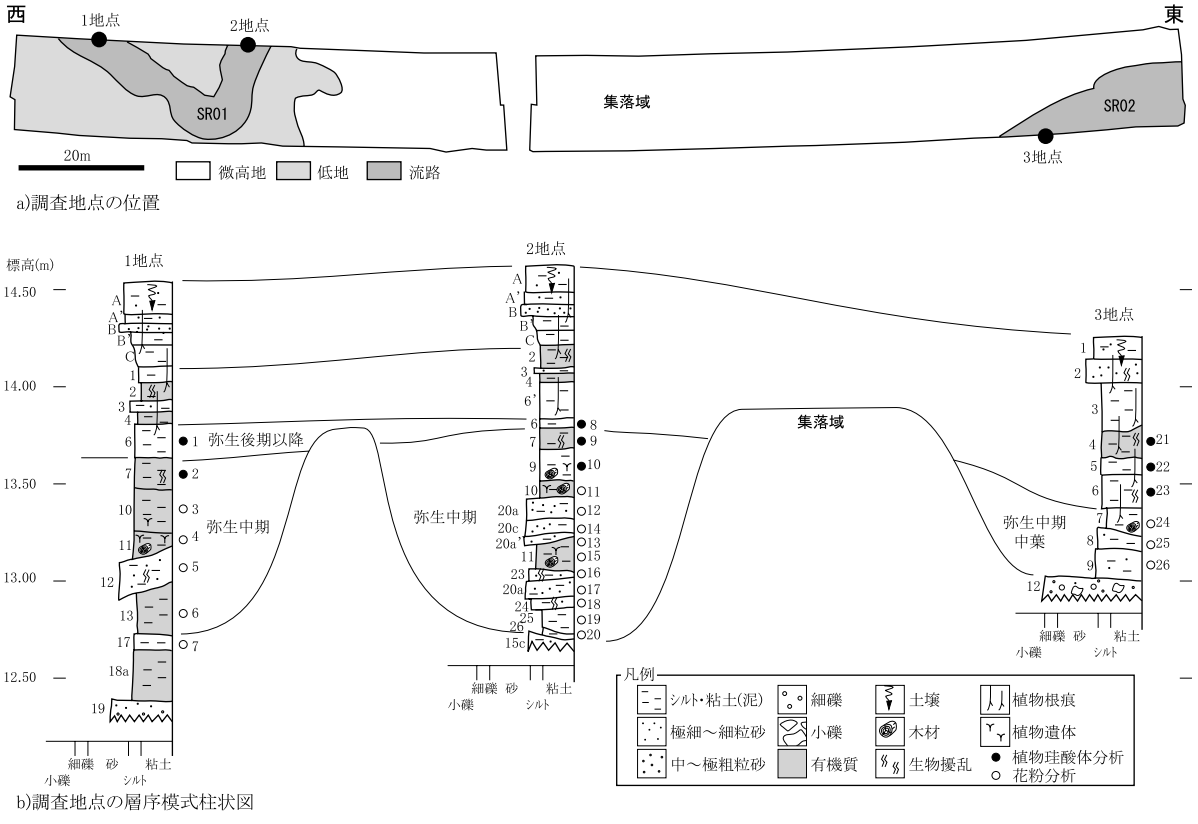
今回の分析調査では，北山浦遺跡における弥生時代中期中葉とそれ以降の流路充填堆積物について，花粉・植物珪酸体分析を実施し，当時の周辺植生や栽培植物に関する検討を行う。

2．調査地点・試料

調査地点の位置および調査地点の堆積層の累重状況を，模式柱状図として第130図に示す。調査区西部で検出されている大きく蛇行する流路SR01は，主に有機質泥～泥からなる堆積物により充填されており，中・上部で有機質や植物遺体を含む。また，2地点は砂質泥や焼土が混じる砂質泥層を挟在する。このような層相から，SR01流路の堆積環境は基本的に水流の弱い，あるいは放棄流路のような堆積環境が推定される。各層の形成年代は，遺物の出土状況より，7層～13層が集落が営まれていた弥生時代中期中葉，6層が弥生時代後期初頭以降に形成されたと推定されている。また，6層は層相から水田耕作土の可能性が指摘されている。

調査区南東隅で検出されている流路SR02は泥（シルト・粘土）を主体とする堆積物により充填されている。SR01と同様に水流の弱い，あるいは，放棄流路のような堆積環境で形成されたことが推定される。遺物の出土状況から，7～9層が弥生時代中期中葉に形成されたことが推定されている。また，4層～6層は周辺の弥生時代中期の遺構が埋没した後に形成された堆積層であり，層相から水田耕作土の可能性が指摘されている。

分析試料は，SR01の2箇所の断面から20点（試料1～20），SR02の断面から6点（試料21～26）の試料が採取されている。このうち，花粉分析は，SR01　1地点の10層（試料3），11層（試料4），12層（試料5），13層（試料6），17層（試料7），SR01　2地点の



第130図　調査地点の位置および模式柱状図

10層（試料11），20 a層（試料12），20 a'層（試料13），20 c層（試料14），11層（試料15），23層（試料16），20 a層（試料17），24層（試料18），25層（試料19），26層（試料20），SR02の7層（試料24），8層（試料25），9層（試料26）の計18点について実施する。植物珪酸体分析は，SR01　1地点の6層（試料1），7層（試料2），SR01　2地点の6層（試料8），7層（試料9），9層（試料10），SR02の3地点の4層（試料21），5層（試料22），6層（試料23）の8点について実施する。

３．分析方法

(1) 花粉分析

試料約10ｇを秤り取り，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛，比重2.3）よる有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物粒の溶解，アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理によるセルロースの分解，の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり，グリセリンで封入してプレパラートを作成し，同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表，および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数，草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として，百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について，乾燥重量を秤量後，過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は，堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）の一覧表として示す。その際，100個/ｇ未満は「<100」で表示する。また，各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。さらに各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から古植生について検討するために，植物珪酸体含量を図示する。

3.結果

(1) 花粉分析

結果を第10表，第131図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは，種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出し，保存状態も普通 ～ 良好なものが多い。以下，地点別に述べる。

・SR01　1地点

試料7，6では木本花粉の割合が高く，コナラ属アカガシ亜属が優占する。その他では，ツガ属，マツ属，コナラ属コナラ亜属，シイ属，ニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属，イボタノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し，カヤツリグサ科，タデ属，マメ科，ヨモギ属等が認められる。

試料5では草本花粉の割合が増加するものの，木本花粉の群集組成に大きな変化は認められず，アカガシ亜属が最も多く産出する。その他ではツガ属，マツ属，スギ属，コナラ亜属，シイ属，ウコギ科等を伴う。草本花粉はイネ科，ヨモギ属が多く産出し，タデ属，マメ科等が認められる。

試料4，3ではさらに草本花粉の割合が増加する。試料5まで多産していたアカガシ亜属の割合は減少し，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属，コナラ亜属の占める割合が高くなる。その他ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，シイ属，ニレ属－ケヤキ属，イボタノキ属，スイカズラ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し，オモダカ属，カヤツリグサ科，ミズアオイ属，タデ属，バラ科，ヨモギ属等が認められる。

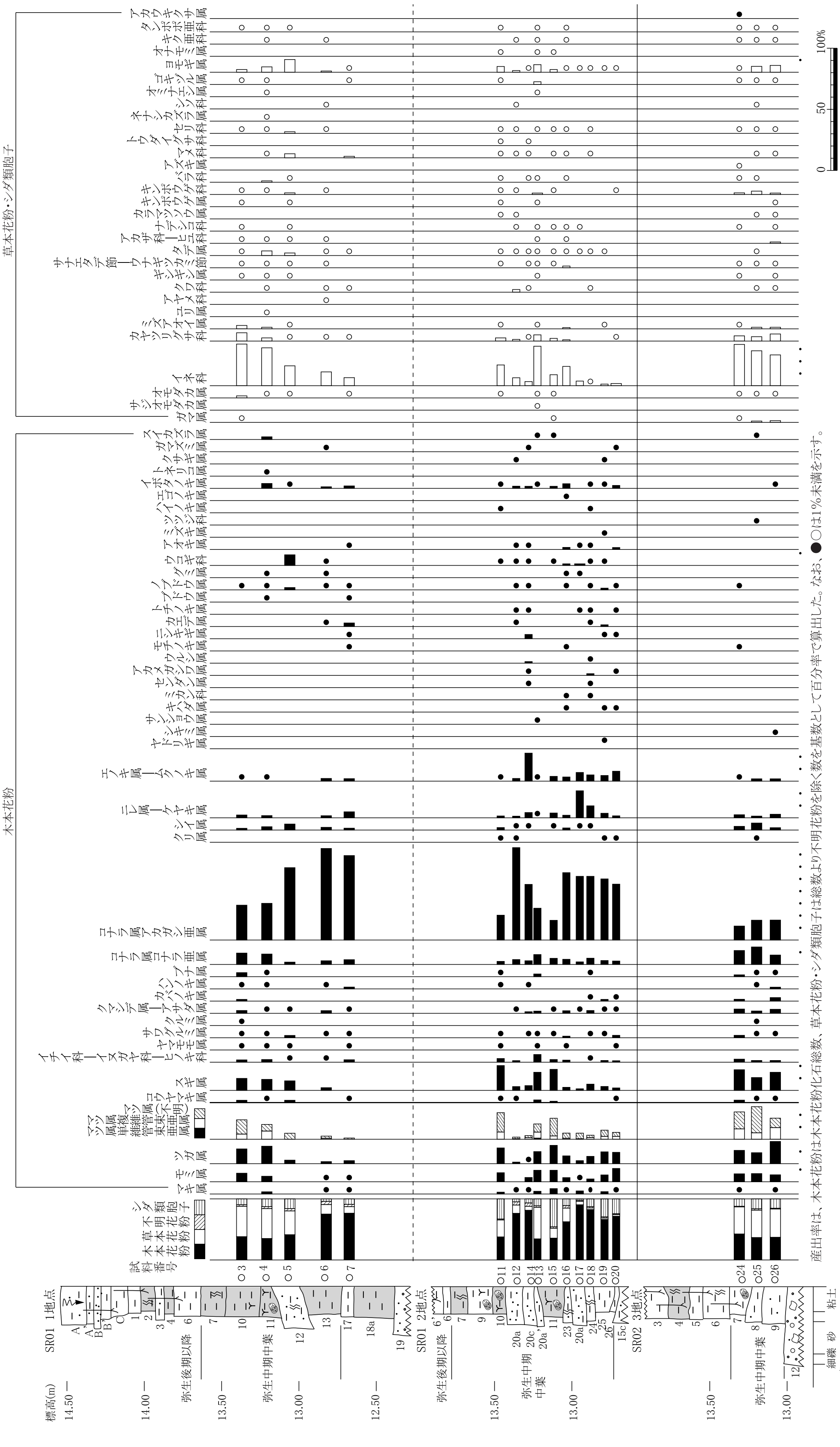
・SR01　2地点

試料20 ～ 16，14，12は木本花粉の割合が高く，木本花粉の群集組成も概ね類似する。いずれもアカガシ亜属が最も多く産出し，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属，コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科，カヤツリグサ科，タデ属，ナデシコ科，ヨモギ属等が認められる。

試料15，13，11では，アカガシ亜属の割合が減少し，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属の割合が高くなる。その他ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，コナラ属コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属エノキ属－ムクノキ属，イボタノキ属等を伴う。草本花粉をみると，イネ科，カヤツリグサ科，ヨモギ属等が多く認められ，特に試料13，11でイネ科の多産が顕著である。その他では，ガマ属，

第10表　花粉分析結果

種　類	上段:地点　下段:試料番号																	
	SR01土層1					SR01土層2										SR02		
	3	4	5	6	7	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	24	25	26
木本花粉																		
マキ属	−	4	−	1	1	3	2	5	1	8	2	6	1	4	2	1	−	1
モミ属	15	10	−	2	1	15	−	21	8	17	8	2	5	12	27	13	14	12
ツガ属	26	32	3	4	5	26	3	22	2	27	15	6	13	21	23	22	19	38
マツ属単維管束亜属	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属複維管束亜属	9	15	−	2	−	12	1	11	3	5	2	1	3	5	6	17	11	20
マツ属(不明)	25	12	5	4	2	32	3	15	4	26	10	11	4	11	8	28	45	16
コウヤマキ属	4	2	2	−	1	2	1	5	−	2	−	−	−	−	1	4	2	2
スギ属	21	20	8	5	−	41	7	33	9	31	6	3	11	7	5	34	22	31
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	4	5	1	2	4	6	3	14	−	4	4	−	1	3	3	5	3	3
ヤマモモ属	1	1	1	−	1	1	−	2	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−
サワグルミ属	1	1	2	2	1	2	−	1	1	1	3	−	1	1	5	4	1	2
クルミ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
クマシデ属ーアサダ属	5	2	1	5	2	−	2	4	3	1	5	1	5	1	1	7	4	7
カバノキ属	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3	1	3	−	6
ハンノキ属	1	1	−	1	3	2	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	3
ブナ属	7	1	−	−	−	1	−	5	−	−	−	−	1	−	−	3	1	1
コナラ属コナラ亜属	20	19	2	7	8	5	9	18	7	9	10	5	11	7	7	23	30	16
コナラ属アカガシ亜属	61	67	61	173	141	41	170	58	105	29	130	125	112	108	113	23	34	34
クリ属	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	1	2	−	1	−
シイ属	3	6	5	5	3	4	2	−	1	1	4	2	1	−	−	6	12	4
ニレ属ーケヤキ属	5	4	−	4	10	3	3	1	10	7	5	53	21	8	4	5	3	6
エノキ属ームクノキ属	1	2	−	5	4	1	5	2	53	7	8	17	11	10	20	1	4	4
ヤドリギ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
シキミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
サンショウ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キハダ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	1	−	−	−
ミカン科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−
センダン属	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−
アカメガシワ属	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	3	−	1	−	−	−
ウルシ属	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	1	−	−	−	−	−
モチノキ属	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−
ニシキギ属	−	−	−	−	1	−	−	−	8	−	−	−	−	1	2	−	−	−
カエデ属	−	−	−	1	6	−	2	−	−	−	−	−	1	3	−	−	−	−
トチノキ属	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	2	1	−	1	−	−	−
ブドウ属	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ノブドウ属	1	2	2	1	2	−	2	−	1	−	1	−	1	3	2	1	−	−
グミ属	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	−	9	2	−	1	2	−	1	1	3	3	1	1	−	−	−	−
アオキ属	−	−	−	−	1	−	1	−	1	−	4	2	1	−	4	−	−	−
ミズキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ツツジ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
ハイノキ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
エゴノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
イボタノキ属	−	9	1	3	4	2	4	2	4	3	9	−	1	2	6	−	−	2
トネリコ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
クサギ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ガマズミ属	−	−	−	1	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	1	−	−	−
スイカズラ属	−	5	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−
草本花粉																		
ガマ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	6	8
サジオモダカ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オモダカ属	9	5	1	−	1	1	−	1	−	1	−	−	−	−	−	2	2	2
イネ科	186	190	39	33	17	90	18	203	9	44	57	10	2	4	6	158	160	140
カヤツリグサ科	37	16	2	2	1	14	4	32	1	11	4	−	−	−	1	20	20	32
ミズアオイ属	15	8	1	−	−	2	−	4	−	−	4	−	−	1	−	1	7	7
ユリ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アヤメ科	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
クワ科	−	5	−	1	1	−	6	−	2	−	−	−	1	−	−	−	2	2
ギシギシ属	1	1	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
サナエタデ節ーウナギツカミ節	1	6	1	1	−	1	−	6	1	4	5	−	−	−	−	1	1	4
タデ属	3	23	5	1	2	1	1	2	1	1	2	2	1	2	−	−	1	−
アカザ科ーヒユ科	1	1	2	1	−	−	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−	−	6
ナデシコ科	1	−	2	−	−	−	1	3	−	2	3	1	−	−	−	1	−	3
カラマツソウ属	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2
キンポウゲ属	1	−	1	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
キンポウゲ科	3	2	3	2	−	2	1	7	−	1	−	−	−	−	1	6	15	6
バラ科	−	7	1	−	−	1	−	3	1	−	1	−	−	−	−	1	5	−
アズキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
マメ科	−	3	8	−	3	1	1	−	1	2	1	−	1	−	−	−	2	1
トウダイグサ科	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
セリ科	3	2	3	1	−	2	1	4	−	2	1	−	1	−	−	3	2	1
ネナシカズラ属	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
シソ科	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
オミナエシ属	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ゴキヅル属	1	4	−	−	1	1	−	14	−	−	−	−	−	−	−	2	2	5
ヨモギ属	12	27	25	3	2	25	4	39	1	11	3	2	1	1	1	4	27	31
オナモミ属	−	−	−	−	−	1	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
キク亜科	−	3	−	1	−	−	1	4	−	−	1	−	−	−	−	3	1	4
タンポポ亜科	2	1	1	−	−	4	−	2	−	−	1	−	−	−	−	3	1	2
不明花粉	15	20	9	16	10	8	15	16	16	11	15	5	6	6	4	4	13	7
シダ類胞子																		
ヒカゲノカズラ属	−	1	−	−	−	−	−	1	2	2	−	−	1	2	2	1	3	1
イノモトソウ属	−	−	−	−	−	10	1	7	1	26	2	−	3	11	10	3	8	2
アカウキクサ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
他のシダ類胞子	54	80	40	12	24	168	13	66	16	202	39	6	29	83	72	53	82	84
合　計																		
木本花粉	214	223	103	231	204	202	225	223	231	180	236	240	215	216	247	201	210	209
草本花粉	277	309	97	48	28	150	40	331	18	81	84	15	7	8	9	209	256	260
不明花粉	15	20	9	16	10	8	15	16	16	11	15	5	6	6	4	4	13	7
シダ類胞子	54	81	40	12	24	178	14	74	19	230	41	6	33	96	84	58	93	87
総計(不明を除く)	545	613	240	291	256	530	279	628	268	491	361	261	255	320	340	468	559	556



産出率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

第131図　花粉化石群集の層位分布

サジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属，ゴキヅル属等の水湿地生植物に由来する花粉も検出される。

・SR02　3 地点

試料 26 ～ 24 のいずれも群集組成が類似し，木本花粉ではツガ属，マツ属，スギ属，コナラ亜属，アカガシ亜属が多く産出し，モミ属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，クマシデ属－アサダ属，シイ属，ニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し，カヤツリグサ科，キンポウゲ科，ヨモギ属等が認められる。また，ガマ属，オモダカ属，ミズアオイ属，ゴキヅル属，アカウキクサ属等の水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。

(2) 植物珪酸体分析

結果を第 11 表，第 132 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

・SR01　1 地点

植物珪酸体含量は，試料 2 が 21,300 個/ｇ，試料 1 が 35,600 個/ｇである。両者の分類群は同様であり，栽培植物のイネ属，ネザサ節を含むタケ亜科，ヨシ属，コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科などが認められる。この中では，概してネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また，試料 1 では樹木起源珪酸体の第Ⅳグループ（近藤・ピアスン,1981）も産出する。

イネ属は，試料 2 から試料 1 にかけて増加する。すなわち，試料 2 では短細胞珪酸体 400 個/ｇ，機動細胞珪酸体 200 個/ｇに対して，試料 1 では短細胞珪酸体 1,000 個/ｇ，機動細胞珪酸体 2,800 個/ｇとなる。

・SR01　2 地点

植物珪酸体含量は上位ほど減少し，試料 10 で 53,900 個/ｇ，試料 9 で 43,500 個/ｇ，試料 8 で 42,800 個/ｇである。

各層から産出する分類群は 1 地点と同様であり，イネ属，ネザサ節を含むタケ亜科，ヨシ属，コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科，樹木起源珪酸体の第Ⅳグループなどが認められる。この中では，概してネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。イネ属は，試料 10 から試料 8 にかけて増加する。試料 10 では短細胞珪酸体 300 個/ｇ，機動細胞珪酸体 500 個/ｇ，試料 9 では短細胞珪酸体 1,000 個/ｇ，機動細胞珪酸体 1,800 個/ｇ，試料 8 では短細胞珪酸体 1,100 個/ｇ，機動細胞珪酸体 2,700 個/ｇとなる。

・SR02

植物珪酸体含量は，試料 23 から試料 22 にかけて 38,100 個/ｇから 69,800 個/ｇまで増加するが，試料 21（4 層）にかけて大きく減少し，10,500 個/ｇとなる。産出する分類群は旧河道SR01 の土層と同様であり，概してネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。

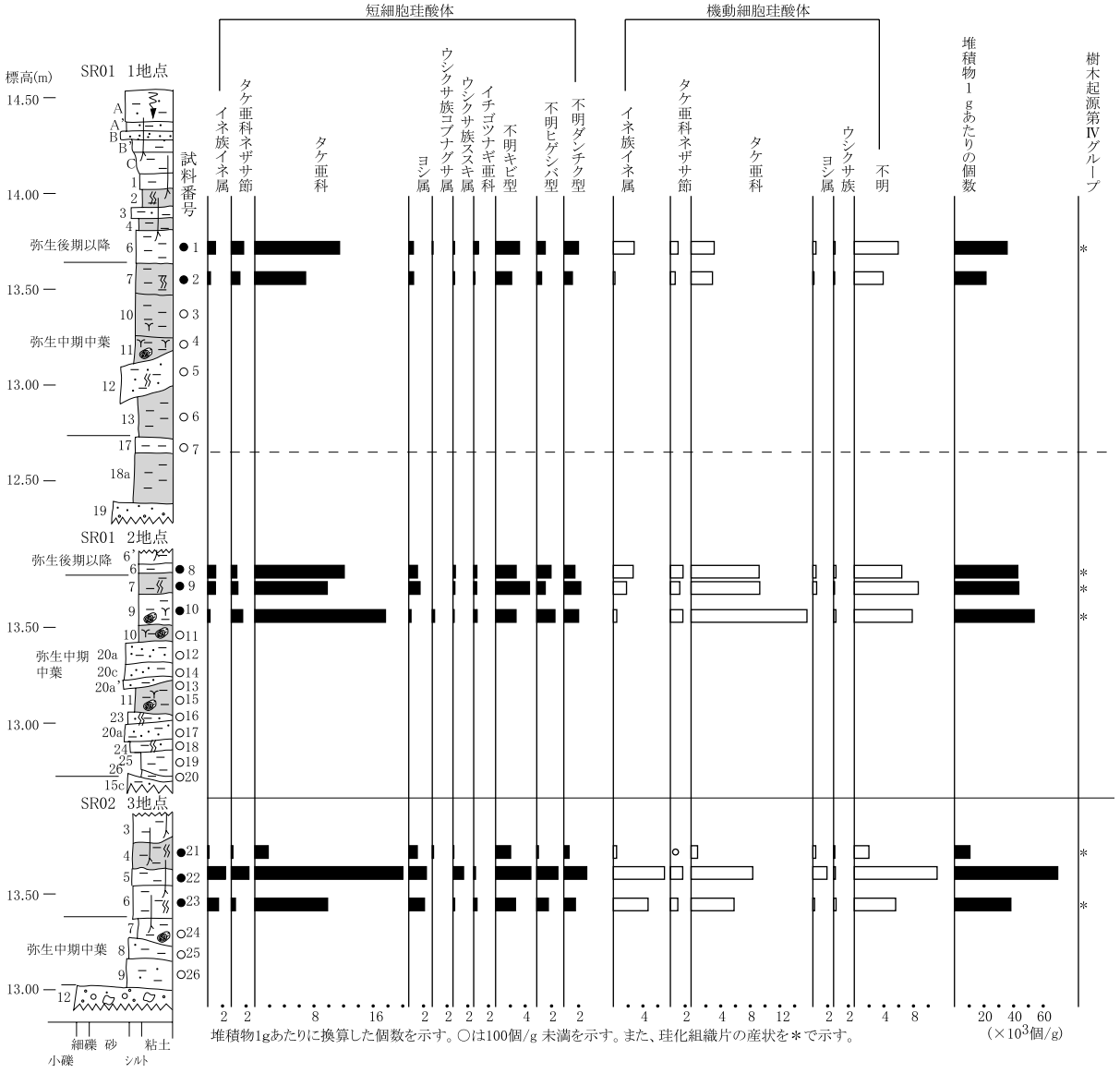
イネ属は，試料 23 から試料 22 にかけて増加するが，試料 21 で大きく減少する。すなわち，試料 23 では短細胞珪酸体 1,500 個/ｇ，機動細胞珪酸体 4,700 個/ｇ，試料 22 では短細胞珪酸体 2,400 個/ｇ，機動細胞珪酸体 6,900 個/ｇ，試料 21 では短細胞珪酸体 200 個/ｇ，機動細胞珪酸体 400 個/ｇとなる。

4.考察

(1) 各地点の花粉化石群集の生層序対比

今回のSR01 流路充填堆積物の花粉化石群集は，弥生時代中期の 11 層より上位層準で層位的に変化する。11 層の下位層準では木本花粉が優占し，その中ではコナラ属アカガシ亜属が多産するが，11 層より上位層準では草本花粉が増加し，木本花粉と草本花粉の割合が同程度になり，マツ属などの針葉樹花粉が増加する。一方，SR02 流路充填堆積物の花粉化石群集は木本花粉と草本花粉の割合が同程度に産出し，マツ属などの針葉樹花粉が比較的多産する組成を示しており，SR01 流路充填堆積物の 11 層より上位層準の花粉化石群集に類似する。

以上のことと，調査地点が距離的に近いこと，堆積層の層相から推定される堆積環境が類似することを踏まえると，SR01 流路充填堆積物 11 層 ～ 7 層と，SR02 流路充填堆積物 9 層 ～ 7 層は生層序として層序対比できると判断される。なお，SR01 流路地点のうち 2 地点の 20 a層・20 c層の花粉化石群集は，層位的には 11 層より上位層準に位置するが，花粉化石群集は 11 層より下位層準の群集に類似している。この変化は同じ流路の 1 地点では確認されないこと，20 a層・20 c層が焼土ブロックを含むなど，人為的影響を受けている堆積物の可能性が高いことから，普遍的変化として捉えて良いか否か判断が付かない。今後，20 a層・20 c層の堆積・土壌構造を踏まえた成因に基づく再評価が必要である。



第 132 図　植物珪酸体群集の層位分布

第 11 表　植物珪酸体分析結果

種　類	上段:地点　下段:試料番号							
	SR01土層1		SR01土層2			SR02		
	1	2	8	9	10	21	22	23
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	1,000	400	1,100	1,000	300	200	2,400	1,500
タケ亜科ネザサ節	1,700	1,200	700	900	1,500	200	2,400	600
タケ亜科	11,500	6,900	12,100	9,800	17,700	1,800	20,000	9,800
ヨシ属	600	700	1,200	1,500	300	1,200	2,400	2,100
ウシクサ族コブナグサ属	100	－	－	－	300	200	－	－
ウシクサ族ススキ属	200	200	300	300	200	100	1,400	200
イチゴツナギ亜科	600	100	400	400	500	－	200	400
不明キビ型	3,200	2,200	2,800	4,600	2,800	2,000	4,800	2,700
不明ヒゲシバ型	1,100	700	1,900	1,100	2,500	200	2,900	1,600
不明ダンチク型	2,000	1,200	1,500	2,300	2,000	700	3,100	1,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	2,800	200	2,700	1,800	500	400	6,900	4,700
タケ亜科ネザサ節	1,000	700	1,700	1,300	1,700	<100	1,700	1,000
タケ亜科	3,100	2,900	9,200	9,300	15,700	900	8,300	5,800
ヨシ属	400	100	400	500	－	400	1,900	200
ウシクサ族	200	100	300	100	300	200	200	300
不明	5,900	3,900	6,400	8,700	7,800	2,000	11,200	5,600
合　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	22,100	13,400	22,000	21,900	28,000	6,600	39,500	20,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	13,500	8,000	20,800	21,600	26,000	3,900	30,300	17,700
総　計	35,600	21,300	42,800	43,500	53,900	10,500	69,800	38,100
樹木起源珪酸体								
第Ⅳグループ	＊	－	＊	＊	＊	＊	－	＊

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めて表示する(100単位にする)。<100は100個/g未満を示す。樹木起源珪酸体の－は未検出,＊は検出を示す。

(2) 古植生

ここでは，上述の花粉化石群集の生層序対比結果に基づいて，調査区および周辺の古植生について検討する。花粉化石群集の層位変化から，調査区の周辺植生は調査区において人間活動が確認されるようになる，弥生時代中期以降に大きく変化したことが推定される。

弥生時代中期以前の花粉化石群集は，木本花粉が優占し，その中ではコナラ属アカガシ亜属が多産することが特徴である。アカガシ亜属は，シイノキ属等と共に暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり，随伴する分類群にも，マキ属，ヤマモモ属，センダン属，シキミ属，アオキ属といった暖温帯林要素が認められる。この他に随伴する分類群をみると，モミ属，ツガ属，スギ属といった針葉樹も認められる。これらの分類群は群集組成からみて，温帯針葉樹のスギ，モミ・ツガに由来する可能性が高い。温帯針葉樹は，斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壌が露出する撹乱地が生育適地とされる（中静,2004）。このほか河畔林構成要素でもあるニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属等も確認される。

以上の花粉化石群集の特徴，および各層の堆積環境を踏まえると，弥生時代中期以前の調査区周辺には，流路沿いなど河川撹乱を受ける領域に河畔林要素が撹乱程度の応じるように帯状に分布し，その背後のより安定した低地や残丘などの領域には，アカガシ亜属を主とする常緑広葉樹が分布していたものと推定される。花粉化石群集に占める木本花粉の割合が著しく高いことから，調査区近辺まで林分が拡がっていたことが推定される。

弥生時代中期以降の層準では花粉化石群集が大きく変化し，草本花粉が増加し，木本花粉と草本花粉の割合が同程度になる。増加する草本花粉ではイネ科がもっとも顕著に増加し，カヤツリグサ科，タデ属，キンポウゲ科，マメ科，ヨモギ属等も漸増する。これらの分類群は開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群である。また，種類構成も多彩になり，ガマ属，サジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属，ゴキヅル属，アカウキクサ属等の水湿地に生育する花粉・胞子も産出する。なお，多産するイネ科，カヤツリグサ科や，アヤメ科，セリ科等には，水湿地に生育する種が含まれる。これらは，河道や周辺の湿地に生育する種類であるが，水田のような浅い水域を好む。一方，相対的な割合が減少する木本花粉の組成をみると，多産していたアカガシ亜属が減少し，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属，コナラ亜属の割合が増加する。増加するマツ属・コナラ亜属は，暖温帯における二次林の代表的な樹種を含む分類群である。このような花粉化石群集の変化は，堆積環境が大きく変化していないことを踏まえると，周辺植生の変化を反映しており，弥生時代中期以降には，調査区において人間活動が確認されるようになることから，人為的植生撹乱に起因する変化と推定される。すなわち，弥生時代中期以前に成立していた河畔林や常緑広葉樹林などは，人為的植生撹乱などにより減少し，調査区および近辺低地においてイネ科などの草本植物が生育する領域が拡大したことが推定される。また，背後の常緑広葉樹林域においてマツ属などの二次林植生が拡がった可能性がある。なお，本時期に増加する温帯針葉樹については，上述の生態性とSR01流路内に砂質堆積物（12層）が流入した後に起こっていることから，集水域における地形変化と関連して分布を拡げた可能性がある。

以上，今回の調査区では弥生時代中期に植生が変化し，常緑広葉樹林が減少し，低地を中心に草地が拡がったことが推定される。本遺跡周辺では，高松市の林・坊城遺跡，坂出市の下川津遺跡等において弥生時代の分析事例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社,1990,1993）。これらによると，縄文時代 ～ 弥生時代前期頃にかけては，カシ類等の常緑広葉樹を主体としてナラ類等の落葉広葉樹を伴う森林が分布し，弥生時代前期後半以降になるとカシ類とナラ類からなる森林にコウヤマキ，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，マツ属等の針葉樹が混在するようになるとされている。このような針葉樹の混在する森林植生は，弥生時代から奈良時代頃まで続いたと推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1990）。また，この時代におけるマツ属の増加は，森林植生への干渉によるマツ二次林の分布開始を示している可能性を指摘している。今回の分析結果は，これら既存の調査事例と同調的な変化を示している。

(3) 稲作について

SR01流路1地点・2地点の6層，SR02流路3地点の4層 ～ 6層は，弥生時代中期の流路が埋没後に形成された堆積物で，層相などの状況から水田耕作土に相当する可能性が想定されている。植物珪酸体分析の結果，これらの堆積物から栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出した。また，SR01流路の1・2地点では6層にかけて増加傾向を示していることも確認された。

稲作が行われた水田跡の土壌では，イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多く，安定

した水田稲作が行われたことを示す目安となっている（杉山,2000）。今回の結果をみると，SR01流路地点では目安となる含量密度より低いが，SR02流路3地点では，同等の含量密度を示している。近年の大阪平野の水田跡で実施された植物珪酸体分析結果では，池島・福万寺遺跡の弥生時代中期の調査例（辻本・辻,2002）や勝部遺跡の弥生時代後期の調査例（辻本ほか,2003）で，イネ属珪酸体の割合が地点によってかなり差異が生じることが報告されている。また，池島・福万寺遺跡では，水田面のイネ属珪酸体の検出数や量が，耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することも確認されている（外山，2002）。さらに植物珪酸体がpH値の高い場所や，乾湿を繰り返す場所で風化しやすく（江口,1994,1996），種類によって溶解性に違いがあることも確認されている（近藤・佐瀬,1986）。このような事例は，植物珪酸体化石のタフォノミーに関連する問題であると認識され，SR01流路地点のイネ属の産状もタフォノミーに関係している可能性がある。この点については調査区の地形条件などを踏まえた評価が今後必要であるが，SR02流路地点の結果に基づくと，SR01・SR02流路埋積後の調査区では稲作が行われていた可能性が高いと判断される。なお，SR02流路3地点の4層ではイネ属の含量が急激に減少するが，これは植物珪酸体含量の総量も減少することから，堆積環境の変化により植物珪酸体が堆積層中に蓄積されにくい状況に変化したことを示していると思われる。

一方，各層からはネザサ節を含むタケ亜科が多産した。タケ亜科の仲間は，自然堤防や明るい二次林の林床などの乾いて開けた場所に生育する種類が多い。上記したように，弥生時代中期以降には調査区周辺において草地が拡がったことと同調的な産状といえる。また，湿潤な場所に生育するヨシ属やコブナグサ属も検出されるが，これらも調査区周辺の湿潤な場所に生育していたものと思われる。

【引用文献】

近藤錬三・ピアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12,217-229.

近藤錬三 2004「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48,46-64.

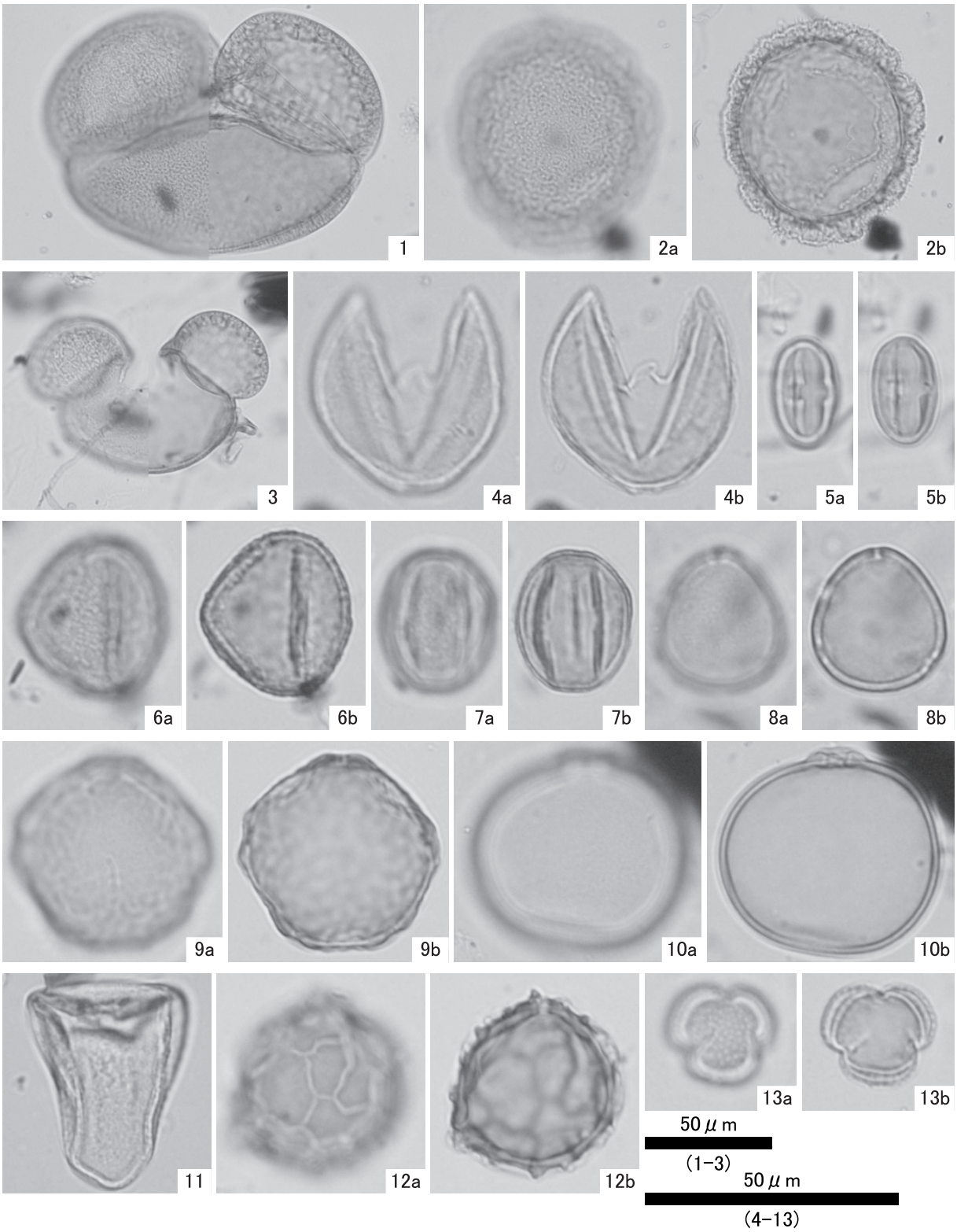
パリノ・サーヴェイ株式会社 1990「下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』－第2分冊－,香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団,479-518.

パリノ・サーヴェイ株式会社 1993「花粉分析とプラント・オパール分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第2冊　林・坊城遺跡』香川県埋蔵文化財研究会,239-263.

外山秀一 2002「池島・福万寺遺跡の立地と環境」『池島・福万寺遺跡2（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編』（財）大阪府文化財センター,411-429.

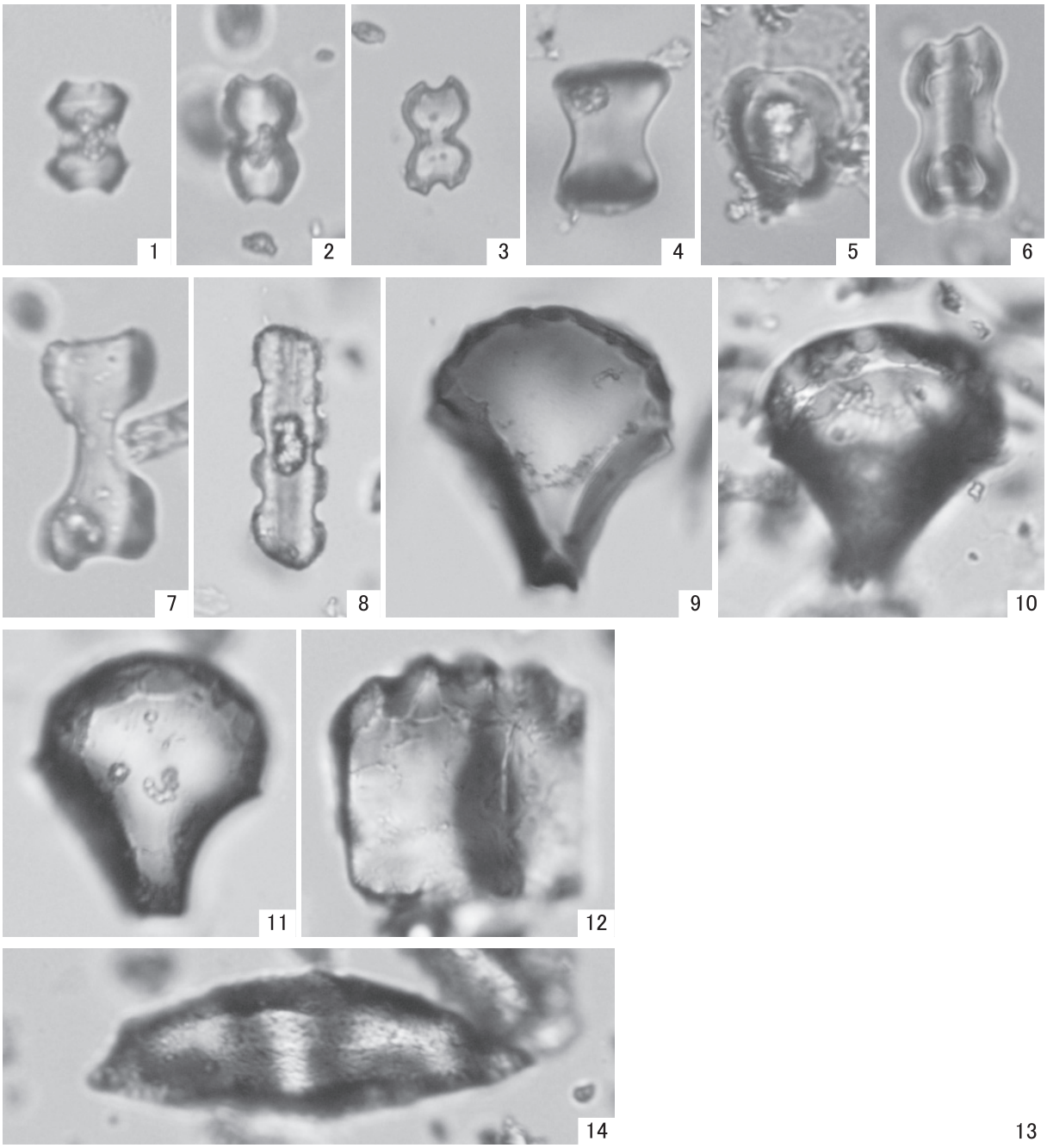
辻本裕也・辻康男 2002「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡2（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編』（財）大阪府文化財センター,361-410.

辻本裕也・辻康男・田中義文・馬場健司 2003「自然科学分析の成果」『勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター,151-192.



1．モミ属(試料番号3)
2．ツガ属(試料番号3)
3．マツ属(試料番号3)
4．スギ属(試料番号3)
5．シイ属(試料番号3)
6．コナラ属コナラ亜属(試料番号3)
7．コナラ属アカガシ亜属(試料番号3)
8．エノキ属－ムクノキ属(試料番号14)
9．ニレ属－ケヤキ属(試料番号3)
10．イネ科(試料番号4)
11．カヤツリグサ科(試料番号4)
12．アズキ属(試料番号24)
13．ヨモギ属(試料番号3)

第133図　花粉化石写真



1．イネ属短細胞珪酸体(試料番号1)
2．イネ属短細胞珪酸体(試料番号10)
3．イネ属短細胞珪酸体(試料番号23)
4．ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号23)
5．ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号21)
6．コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号21)
7．ススキ属短細胞珪酸体(試料番号22)
8．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号23)
9．イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
10．イネ属機動細胞珪酸体(試料番号9)
11．イネ属機動細胞珪酸体(試料番号23)
12．ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号23)
13．ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号21)
14．樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(試料番号10)

第 134 図　植物珪酸体写真

第5章　考　　察

第1節　北山浦遺跡の集落構造とその変遷

まず，本遺跡における集落構造について整理する。特に，居住施設もしくはそれに類する遺構としての円形の竪穴建物遺構，方形の竪穴遺構を取り上げて整理し，その後，それらの総体としての集落の変遷について整理しておく。

a）竪穴建物遺構の構造

集落遺跡は，面的な広がりをもった建物跡とその他の生活に関わる遺構の総体として捉えられる。とりわけ竪穴建物は集落構造，集団の在り方等を分析する上で，欠くことのできない重要な要素であり，それゆえに基本的な属性について整理しておく必要がある。ここでは先行研究の成果を整理して，近年の資料を追加し，円形竪穴建物，いわゆる竪穴住居の構造についてまず検討したい。その後，北山浦遺跡における円形竪穴遺構の構造について言及する。

まず，定義を行う上で，学史について整理を行っておきたい。香川県内においても既に，竪穴建物を対象としたいくつかの分析が行われている。まず，竪穴建物の各属性（規模・平面形・柱配置等）に焦点を当てて行われた細かな分類に基づき，県内外の各地域間で比較検討が行われている（松本 2000）。また，竪穴建物の個別具体的な属性（張り出し部・10 型土坑）に焦点を絞った詳細な分類・比較検討も行われている（松本 2001）。これらの分析は終局的に，県内各地域間の地域差を顕在化させるとともに，県外他地域との交流の在り方を示唆している。

また，旧練兵場遺跡における集落構造分析の一環として，遺跡内における竪穴建物の通時的な変遷過程が示されている。当遺跡では弥生時代中期中葉～古墳時代前期初頭にかけての竪穴建物が累積的に検出されており，竪穴建物の変遷過程を通時的に追究するためのよい条件が整っている。丸亀平野における一集落の例ではあるが，同様の分析を行う上で非常に示唆的である（森下 2001）。

以上のような研究成果を踏まえつつ，竪穴建物の事例が増加した現在，一旦，基本的属性について整理し直す必要がある。ここでは，香川県内における弥生時代中期前葉～古墳時代前期初頭にかけての竪穴建物について，規模，平面形，柱配置の変遷・相関関係を再整理し，当該期間における竪穴建物に関する基礎資料として提示する。その上で，いくつかの特筆すべき点について解釈を加える。

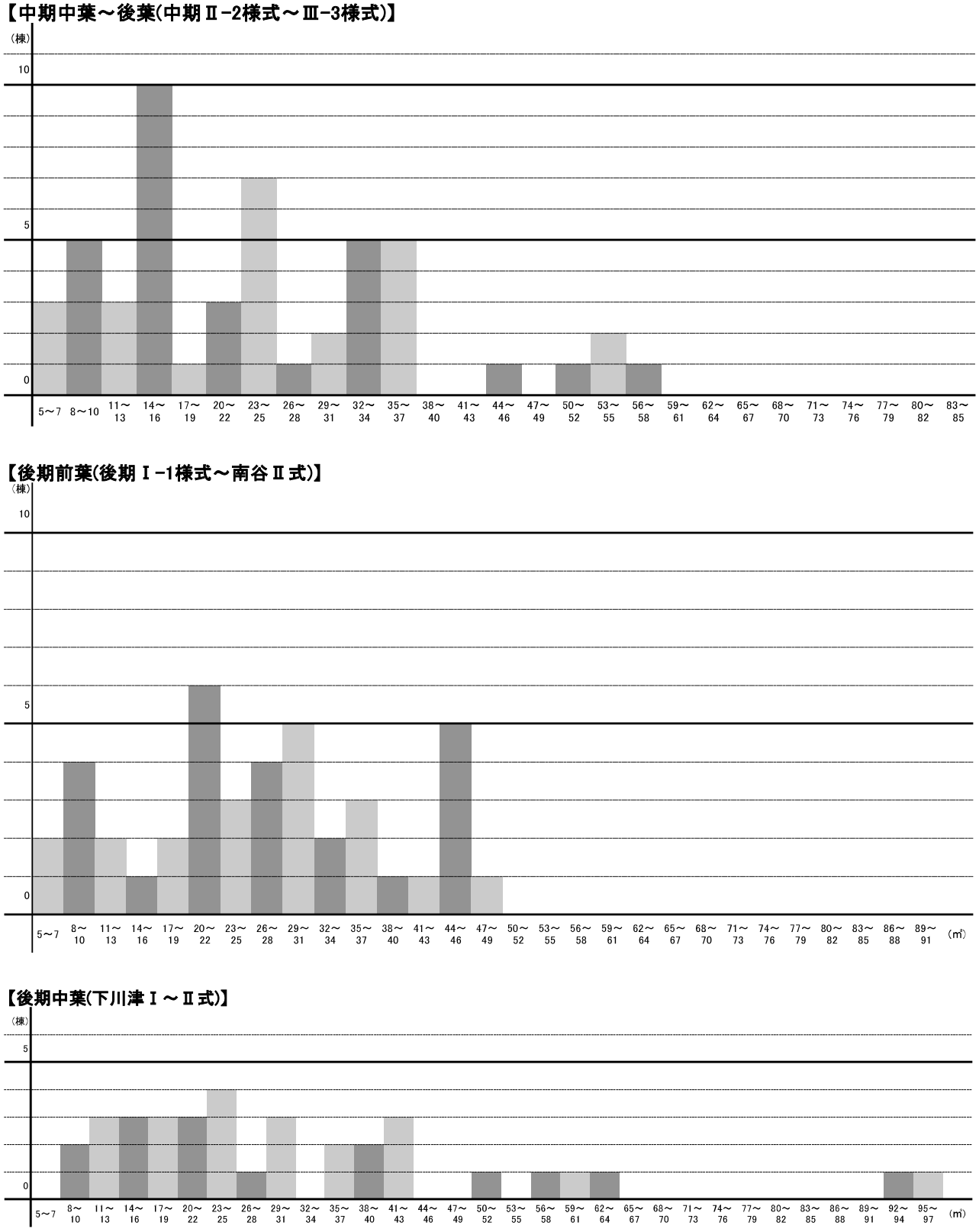
なお，ここにおける相対年代の表記は，中期前葉～後期初頭に関しては信里氏の土器編年案（信里 2005）を，後期中葉～古墳時代前期初頭に関しては大久保氏の土器編年案（大久保 1990・1993）を採用する。また，後期初頭と後期中葉間の空白を埋めるものとして，片桐氏の土器編年案（片桐 2006）を採用する。具体的な対応関係は，中期前葉（中期Ⅱ-1 様式（新）以前），中期中葉（中期Ⅱ-2～Ⅲ-1 様式），中期後葉（中期Ⅲ-2～Ⅲ-3 様式），後期前葉（後期Ⅰ-1 様式～南谷Ⅱ式），後期中葉（下川津Ⅰ～Ⅱ式），後期後葉（下川津Ⅲ～Ⅴ式），古墳時代前期初頭（下川津Ⅵ式）とする。

(1) 竪穴建物床面積時期別データ（第 135・136 図）

まず，弥生時代中期前葉～古墳時代前期初頭にかけての竪穴建物床面積の時期別データを提示する。なお，データとして抽出した資料は，竪穴建物である確実性が極めて高く，かつ床面積測定に堪えるだけの残存状況を有するもののみに限定している点を予め断わっておく。また，中期のデータに関しては，各時期の資料数が少なく，傾向を読み取りにくいことから，中期前葉～後葉を一括してグラフ化している。第 135・136 図は竪穴建物床面積を測定し，時期別にグラフ化したものである。

中期前葉～後葉にかけては概ね，5～30㎡台と 40㎡台以上に分布の中心が二分される。5～30㎡台では，とりわけ 25㎡以下に資料全体の 6 割強が集中する。

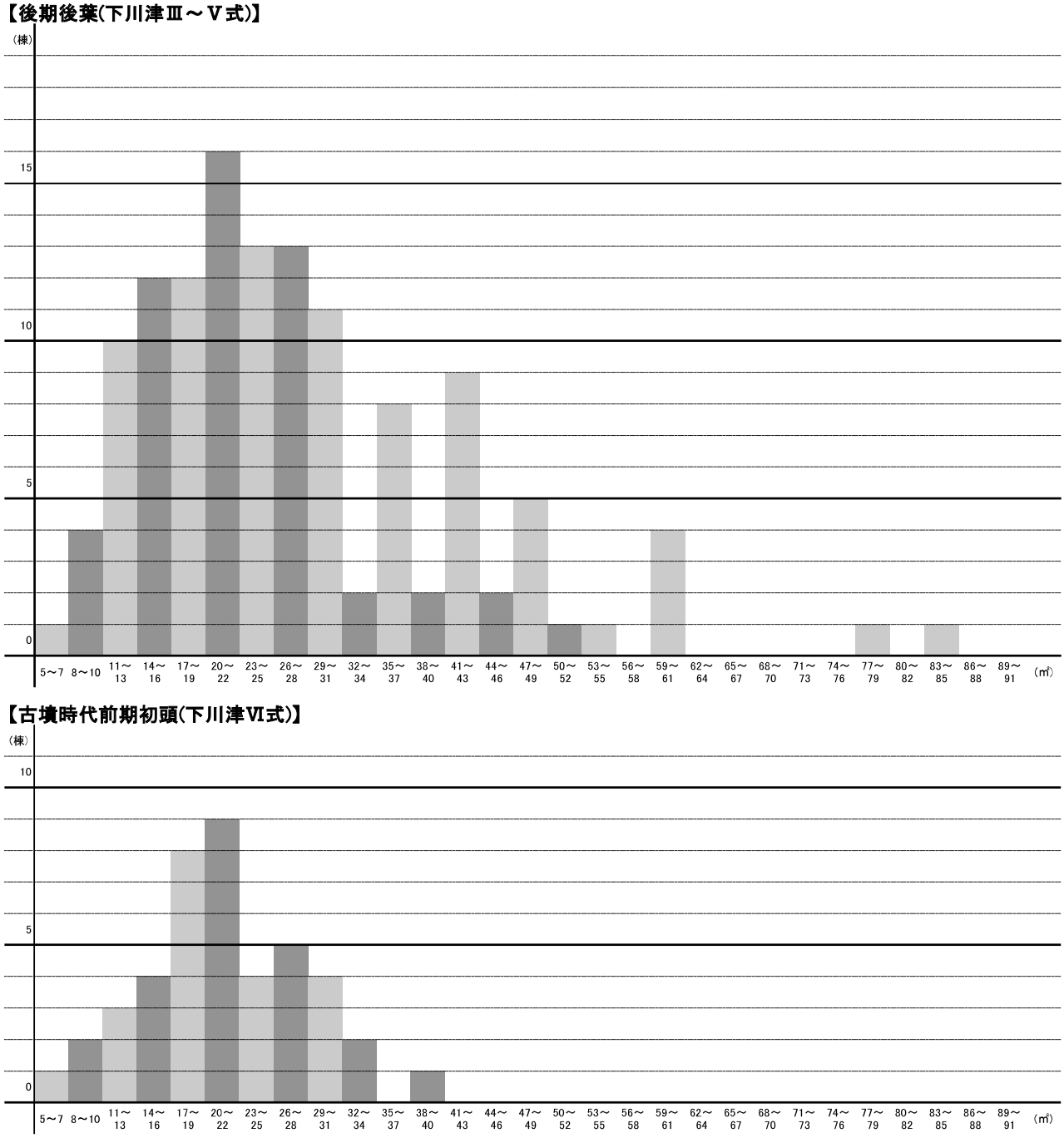
後期前葉段階にも概ね 30㎡台以下と 40㎡台以上に分布の中心が二分される。当該期には前段階と比較して，全体的な床面積の拡大傾向が読み取れる。それに伴い，30㎡台以下の建物に関しては，20～30㎡台に資料全体の 6 割弱が集中するようになり，25㎡以下の建物の比率は 5 割以下となる。同時に，前段階には資料全体のわずか 1 割程度にとどまっていた 40㎡台以上の建物の比率が 2



第 135 図　建物規模分布図①

割弱まで上昇する。

後期中葉段階にも前段階までの基本的な傾向が読み取れる。30㎡台以下においては，規模の点で偏在する状況はみられず，平均的な分布状況を示す。床面積の拡大傾向はさらに進行し，40㎡台以上の建物の占める割合が資料全体の 2 割強を占める。当該期に特筆すべき点は，90㎡を超える建物が形成され始める点である。これも床面積拡大傾向の一側面として捉えられよう。



第136図　建物規模分布図②

後期後葉段階にも，分布の中心が概ね30㎡台以下と40㎡台以上に2分される点，前段階の90㎡を超える建物に準じる規模の建物が形成される点で，前段階までの傾向を基本的に踏襲しているとみてよいが，やや状況が変化する。前段階には，30㎡台以下において平均的な分布状況を示していたが，後期後葉段階には10～20㎡台に資料全体の7割弱が集中するようになる。さらに，前段階に資料全体の2割強まで上昇した40㎡以上の建物の比率が2割弱まで低下する。これらは次段階にみられる建物規模の斉一化・均質化の兆候として解釈できる。

古墳時代前期初頭段階には，建物規模の斉一化・均質化がみられる。当該期の建物すべてが40㎡未満となり，特に，15～30㎡に資料全体の7割弱が集中する。

(2) 竪穴建物構造の時期別変遷（第12表）

ここでは，竪穴建物床面積と平面形・柱配置の相関関係に関するデータを提示する。なお，データとして抽出した資料は，前項で床面積を測定した資料の内，柱配置が確実に判別できるもののみに限定している。

第 12 表　支柱穴配置と竪穴建物規模（㎡）の相関表

【中期中葉】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱																											
方形無主柱	2																										
円形2本主柱	1	1		1																							
方形2本主柱																											
円形4本主柱		1		1																							
方形4本主柱																											
円形多主柱				1		1	4	1	1	3	4			1		1	2	1									
多角形																											

【中期後葉】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱		1																									
方形無主柱																											
円形2本主柱																											
方形2本主柱		1																									
円形4本主柱			1			1																					
方形4本主柱		1		1						1																	
円形多主柱				1	1		1		1																		
多角形																											

【後期前葉】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱																											
方形無主柱	1	1																									
円形2本主柱		1				1																					
方形2本主柱	1	2	1					1																			
円形4本主柱				1		2	1	1	2																		
方形4本主柱			1		1	1																					
円形多主柱						1	1	1	2	1	2	1	1	5	1												
多角形																											

【後期中葉】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱																											
方形無主柱																											
円形2本主柱																											
方形2本主柱		1	1	2		2																					
円形4本主柱					2		1	1			1																
方形4本主柱		1	1			1	1																				
円形多主柱				1			1		2		1	2	2			1		1	1	1						2	
多角形																											

【後期後葉】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱																											
方形無主柱	1	1	2																								
円形2本主柱					1																						
方形2本主柱		3	5	2	2																						
円形4本主柱			1	1	1	4	1	2																			
方形4本主柱			2	8	7	11	10	8	8	1	2	1	1	2	2												
円形多主柱								1	1	1	2	1	5		2	1			3						1		
多角形								1			2		2		1												

【下川津Ⅵ式(古墳時代前期前葉)】

	5～7	8～10	11～13	14～16	17～19	20～22	23～25	26～28	29～31	32～34	35～37	38～40	41～43	44～46	47～49	50～52	53～55	56～58	59～61	62～64	65～67	68～70	71～73	74～76	77～79	80以上	(㎡)
円形無主柱																											
方形無主柱	1	2	1																								
円形2本主柱																											
方形2本主柱				2	1	2																					
円形4本主柱																											
方形4本主柱			2	2	7	7	4	5	4	1		1															
円形多主柱										1																	
多角形																											

※セル内の数値は資料数を表わす。

弥生時代中期前葉～古墳時代前期初頭にかけては，「円・方形無主柱」，「円・方形2本主柱」，「円・方形4本主柱」，「円形多主柱（5本以上の主柱穴をもつもの）」，「多角形多主柱（5本以上の主柱穴をもつもの）」の竪穴建物が存在する。これらに「張り出し部」が付設されるものもみられるが，今回は単純化のため「円形」または「方形」に含めて集計している。

以下，第12表から読み取れる状況を整理する。

まず指摘できる点は，方形建物の増加傾向である。資料全体に占める方形建物の割合は，中期前～中葉で6%弱，以下中期後葉2割程度，後期前葉3割弱，後期中葉4割弱，後期後葉7割弱，古墳時代前期初頭10割弱となる。特に，中期中葉～後葉にかけて，後期中葉～後葉にかけての増加率が極端に高い。古墳時代前期初頭には，ほぼすべての建物が方形となり，規模と同様，構造面でも斉一化・均質化がみられる。この3つの局面に画期を設定することができよう。詳細は後述する。

中期後葉～後期後葉における方形建物の増加傾向は，主として20㎡未満の建物のあり方と関係している。中期後葉以降，20㎡未満において円形建物の占める割合が低下し，代わって方形建物の占める割合が上昇する。一方で，20㎡以上においては，方形建物の占める割合が増加の一途をたどっているとは必ずしも言えない。詳細は後述するが，概ね20㎡前後を境に，方形建物と円形建物を緩やかに使い分ける傾向が指摘できる。ただし，後期後葉段階には20㎡以上における方形建物の割合も同時に極めて高くなっており，このことが後期中葉・後葉間における方形建物の極端に高い増加率の原因であると考えられる。

次に指摘できる点として，同時期の同じ平面形を呈する建物どうしを比較すると，規模に応じて主柱穴数が増減する状況が読み取れる。これは，構造上の問題（耐久性等）が関係しているものと考えられる。

最後に，後期後葉には多角形建物が形成されるようになる。この点で，後期後葉に竪穴建物の規模・構造面での多様性が最も顕著にみられると言える。

(3) 竪穴建物の分類

以上，2つの分析を踏まえて竪穴建物の分類を行う。まず，規模の点で，時期により多少のばらつきはあるものの，概ね40㎡台以上と30㎡台以下に二分できる。30㎡台以下の建物に関しては，特に10㎡以下に無主柱や2本主柱の建物が比較的偏る傾向がある。よって，より規模の大きな建物と同様の用途・機能をもった施設として捉えることは必ずしも適切ではない。一方，40㎡以上の建物については，特に後期中葉以降に出現する70㎡以上の床面積をもつものに注目したい。詳細は後述するが，非常に事例が少なく，限られた期間のみ存在する。よって40～60㎡台の竪穴建物とは区別してその存在意義を検討する必要がある。

以上より竪穴建物を小形（10㎡以下），中形（11㎡以上40㎡未満），大形（40㎡以上70㎡未満），超大形（70㎡以上）の少なくとも4類型に分類することが適切であると考えられる。

(4) 超大形建物の特異性

前述のとおり，後期中葉～後期後葉にかけて70㎡を超える超大形に分類される竪穴建物が形成される。現在までのところ，香川県内の確実な事例は，高松平野中央部でのみ確認されており，空港跡地遺跡SH102（下川津Ⅰ式）（乗松2004），同SHc21（下川津Ⅴ式）（西岡他1996），日暮・松林遺跡SH02（下川津Ⅴ式）（山本他1997）が挙げられる。なお，空港跡地遺跡ではSH102が確認された調査区の南方で，同時期の超大形建物が新たに確認されている（波多野2012）。

出土遺物等から特徴的な傾向は読み取れず，機能を特定するには至っていない。しかし高松平野内でも，特に後期前葉から比較的頻繁に居住域として利用されるエリア内でのみ確認されている点は示唆的である。超大形建物に関しては時間的・地理的偏向が認められることが重要と考え，その機能や出現の背景を示しているものと言えよう。

(5) 方形建物導入の過程

前述のとおり，中期後葉以降，方形建物の増加傾向がみられる。特に中期中葉～後葉，後期中葉～後葉，後期後葉～古墳時代前期初頭に著しい増加傾向がみられ，画期とみなしうる。以下，方形建物の増加過程の状況を分析し，その意義を検討する。

中期前葉～中葉段階には小形無主柱の建物がごく少数確認されている。大多数は円形建物であり，むしろ例外的な在り方である。付属施設・補助施設的な建物とみた方がよい。

中期後葉も大多数は円形建物であるが，当該期の竪穴建物の平均的規模である15～20㎡台の方形建物がみられ，また円形建物と同様の柱配置（2・4本主柱）を呈する方形建物も存在する。さらに，久米池南遺跡（藤井1989）においては30㎡台の方形建物が円形建物と並存

している。よって当該期から，方形建物が「建物群」の主たる構成要素として部分的に採用され始めたと考えられる。これが，中期中葉・後葉間の画期の内容であると言える。

後期前葉も基本的には円形建物が主体となるが，小山・南谷遺跡（片桐 2006）でみられるように 20㎡以下の方形建物のみからなる「建物群」も形成される等，方形建物が本格的に導入され始めた段階と言える。

後期中葉にも同様の傾向は続くが，後期後葉には半数以上が方形建物となる。円形建物のみからなる「建物群」，方形建物のみからなる「建物群」，両者が混在する「建物群」が存在しており，基本的な状況は前段階までと大差ない。ただし，前述のように各規模において方形建物の占める割合が上昇しており，これが後期中葉・後葉間の画期の直接的な原因となっている。床面積同様，建物構造についても，古墳時代前期初頭における斉一化・均質化の兆候が現われていると言える。

古墳時代前期初頭には竪穴建物規模・構造の斉一化・均質化が同時に達成されている。この画期の背景・内容に関しては今後の検討課題である。

以上，中期後葉以降の方形建物増加過程の状況を示した。前述のとおり，方形建物増加の背景には，20㎡未満の竪穴建物における方形化が大きく関係している。中期後葉における方形建物の部分的な導入を経て，円形建物と方形建物を概ね 20㎡を境に緩やかに使い分ける傾向がみられる。建物規模に基づく円形・方形建物の「緩やかな選択的利用傾向」を，古墳時代前期初頭における竪穴建物規模・構造の斉一化・均質化の前段階として位置付けることができる。

(7) 北山浦遺跡の円形の竪穴建物の評価

これらの分析を踏まえ，北山浦遺跡の竪穴建物を評価する。本遺跡の竪穴建物は中期中葉（中期Ⅱ-2 様式～Ⅲ-1 様式）に属する。円形多主柱の建物が少なくとも 4 棟検出しており，それぞれの規模は，SH01 約 36㎡，SH02 約 23㎡，SH03 約 35㎡，1 棟は規模不明である。いずれも中形建物に属し，構造についても当該期の一般的傾向に合致する。ただし，規模に関しては，当該期の中形建物の中ではやや大きい部類に属する。

一方で，円形建物に先行する時期の方形建物跡とみられる遺構も検出している。いずれも 10㎡前後の規模を有するが，前述のように通時的に見た場合，当該期の方形建物は例外的存在である。したがって，どのような機能をもった建物跡と認定するかについて次に検討を行う。（池見　渉）

b）方形竪穴遺構の構造と機能

以上の分析結果から県内の竪穴遺構を概観すると，方形の竪穴建物が出現するのは，中期中葉以降であるが，明確な居住施設として定着するのは後期以降である。そのなかで，本遺跡では方形竪穴遺構が多数確認され，居住域すべてを調査したわけではないが，円形の竪穴建物を凌ぐ棟数である。この遺構を居住施設として捉えるべきかどうかという問題も含め，検討を加える必要がある。

その中で，ここで取り上げる方形竪穴遺構は，隅丸方形の掘り方に被熱痕跡をもつという構造的特徴をもち，本遺跡でそれに該当するものは SX03，06，08，09，13，19，20，21 である。

これに加え，SX14，16 は同様な方形の掘り方であるが，中央土坑をもち，円形竪穴建物の折衷形とでも呼ぶべき構造のもので，これらの取扱いについても検討を要する。

また，SX とした方形竪穴建物には，SX07，17，18 等を含んでおり，これらと掘り方の規模や形状などには大きな違いがない。各遺構の時期を整理すると，SX17 が中期前葉～中期中葉古段階，SX18 が前期，SX07 が中期後葉，それ以外の上記の SX 群が中期中葉であり，時期が限定でき，SX07，17，18 とは分けて考える必要があることが分かる。

ここではまず，上記の問題を検討する前に，本遺構の構造的特徴を挙げると以下のようになる。

①無柱穴
②必ず中央から，ややどちらかに寄った位置に赤く焼けた明確な地床炉が存在する。
③壁溝が廻るものと廻らないものがある。
④土器の明確な遺棄が認められる場合があり，いわゆる竪穴住居と何ら変わりのない出土遺物が認められる。

この特徴をもつ県内の類似例としては中期後葉の松並・中所遺跡で，地床炉をもたない方形の竪穴遺構（SX 群），成重遺跡Ⅴ区 SH08，12[註1)]，SX09 等があるが，いずれも中期であるが，単発的な存在で概観できるような資料はない。

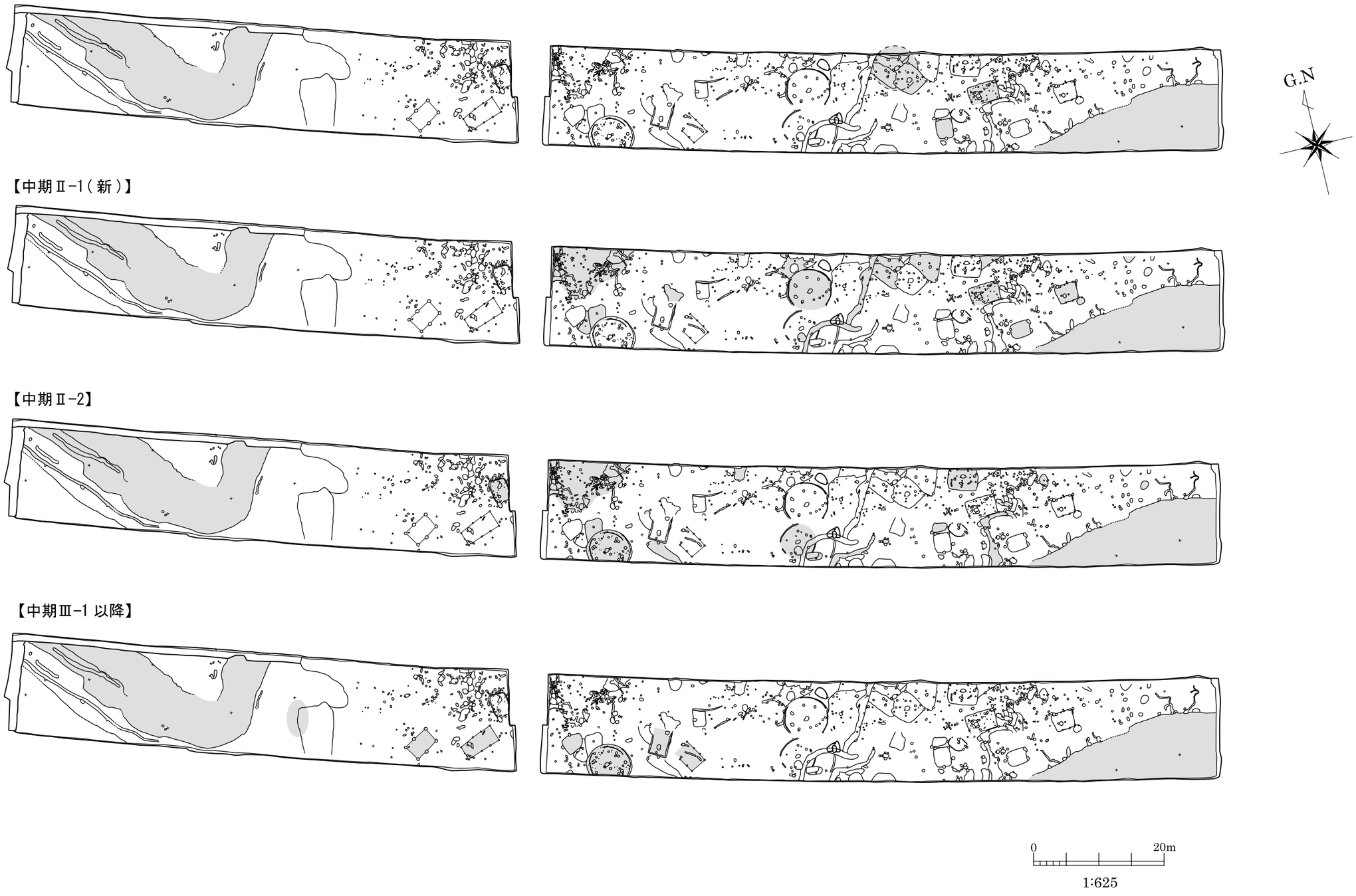
そのような中で，同様な事例が岡山県で認められ，既に中山俊紀氏が報告を行っている。中山氏の定義（中山 2001）と照合すると上記の特徴のうち②と④が該当し，

【中期Ⅱ-1（古）】

【中期Ⅱ-1（新）】

【中期Ⅱ-2】

【中期Ⅲ-1 以降】



第 137 図　北山浦遺跡　遺構変遷図（S=1/400）

同一遺構と言っても問題はない。

中山氏はこの遺構の機能を推定する中で，遺構の立地，構造的特徴に加え，文献，民俗的視点から分棟型の居住型式を想定し，方形竪穴建物は火の使用と土器の出土等から「炊屋」としての機能を考えている。

本遺跡で確認した遺構の状況が既述のとおり，中山氏の提示した構造的特徴とほぼ合致するため，同様な機能をもつ施設と考えうるものの，下記の理由から異なった機能の可能性についても想定しておきたい。

①この時期の前後の「炊屋」をどのようにとらえるかが明確でない。
②近隣でも本遺跡ほど明確な事例は認められないし，本遺跡でも中期中葉のみに単発的に出現し，後世へと平面プランや構造が引き継がれないことから，炊屋として限定することが困難である。岡山県の事例でも吉井川流域に限られるようで，時期も中期中葉から後葉に限定される。
③本遺跡では既述のとおり，岡山県の事例と異なり，円形竪穴建物に従じるような遺構配置をとらず，むしろ単独で形成され，そして，円形竪穴建物よりも棟数が多く，主体的と言わざるを得ない。
④円形竪穴建物との折衷形式が認められ，居住施設としての利用が想定される。

上屋構造については疑問が残るものの，以上のような点から居住施設としての可能性についても想定しておきたい。また，この方形竪穴遺構が集落の面的な居住域の形成段階に採用される施設形態であり，他地域でも構造的に全く同一のものが認められ，時期および地域も限定される可能性があることから，文化受容等による一時的な外的影響に伴って出現する物質文化である可能性を想定しておきたい。

現状はその淵源を把握できていないものの，中期中葉もしくは中期前半期に類似する構造の竪穴遺構が西日本で散見されるため，ある特定の背景によって生じた居住形態ではないかと考えられる。　　（渡邊　誠）

c）北山浦遺跡の集落変遷

以上，集落を構成する竪穴建物について整理を行ってきたが，その複合体としての集落の変遷についてここでは整理を行っておきたい。

第137図のように中期前葉から中葉については信里編年Ⅱ－1様式古段階からⅢ－1様式まで時期別に住居等の居住施設の色分けによる整理を行い，その前後の時期については個別に既述する。

【前期以前】

縄文時代晩期（SX04），弥生時代前期前半（SX18）などの遺構が認められるが，基本的には散発的で明確な居住施設は確認できなかった。前期については，ピットなどからも土器片が出土しており，一定程度の居住を想定することができる。松並・中所遺跡においても，同時期の居住域が展開している。

【中期前葉～中葉】

中期前葉もしくは中葉古段階から集落域の形成が認められるようになる。当遺跡のⅡ-1様式古段階はそれほど多くはないが，円形竪穴建物（SH04），方形竪穴遺構（SX14，17，SX19）が認められるようになる。特にSX17は完形の土器群がまとまって出土し，本遺跡の明確な居住地としての土地利用痕跡が認められることから，この頃から集落の形成がはじまったと考えられる。

その後，Ⅱ-1様式新段階に，方形の竪穴建物（SX06，08，13，15，19，20，21）が多数認められるようになり，面的に居住域が広がっていったものと考えられる。Ⅱ－2様式には円形竪穴建物（SH01，02，03），方形竪穴遺構（SX03，08，16）が認められ，Ⅱ-1様式新段階～Ⅱ-2様式に面的に集落域が形成・維持されていたと考えられる。

【中期後葉】

その後，Ⅲ-1様式になると，集落域は西側に偏在し，円形竪穴建物（SH01：拡張），方形竪穴遺構（SX09），掘立柱建物（SB01 ～ 03）が認められる。方形竪穴遺構は既述のとおり，Ⅱ－1様式新段階からⅢ-1様式にかけて減少する傾向にある。また，集落の衰退傾向も認められる。

【後期】

後期には既述のとおり，集落域は放棄されており，旧河道SR01は堆積が進行し，かろうじて機能していた可能性がある。また，堆積の結果，湿地状になった箇所に堰状施設（SX01）や護岸状施設（SX02）を設けていた可能性が考えられる。調査区東側のSR02は明確ではないが，弥生時代を通じて流路として機能していた可能性が高い。

以上の成果をまとめると，旧河道に挟まれた中洲状の微高地に形成された当集落は，縄文時代晩期頃から弥生時代前期前半にかけて居住域として利用した痕跡が認められるが，中期に入り面的な土地利用が開始されたと考えられる。特に，中期中葉（Ⅱ－１様式新段階～Ⅱ－２様式）を中心とした時期に面的に集落が形成される。後述する土器製作の痕跡もほぼ同時期である。

その後，中期後葉段階へと継続するものの，いわゆる凹線文期には集落は別の場所へと移動している。集落域が放棄された後，調査区西側の旧河道はさらに堆積作用が進み，埋積土上の集石中から後期土器が出土しており，後期には埋まってしまったと考えられる。中期後葉以降は周辺の旧河道の氾濫等による周辺の湿地化など，居住環境の悪化などが起こり，居住域として利用が困難になったものと考えられる。それ以後も上記のような状況が続き，居住域としての利用は認められず，第４章のプラントオパール分析や土層観察からも水田としての利用が想定される。

以上のように本遺跡は中期中葉の比較的短期間に営まれた集落であることが明らかとなった。

また，円形竪穴建物と方形竪穴遺構の関係は，現状では補完関係やセット関係をなすようなものではなく，ほぼ並存する形であるものの，方形竪穴遺構は既述のとおり，本遺跡の集落域形成時期に主体を占めることは明らかである。（渡邊　誠）

第２節　北山浦遺跡周辺環境

上記の当遺跡の集落動態を受け，次に，周辺環境について整理し，周辺環境と本遺跡の動態との関係についてい整理しておきたい。

a）自然環境

既述のとおり，本調査区は旧河道に挟まれた微高地に展開し，西側に浄願寺山，北側に石清尾山が位置している。そのため，ある程度，土壌等に含まれる花粉等は周辺環境を推定するのに役立つと考え，調査時にサンプリングを行い，分析を実施した。また，集落廃絶後，旧河道の埋没状況および土地利用の状況が大きく変化していることが調査所見としてあり，それらの検証も含めて分析を実施した。その結果は第４章のとおりである。

第４章の分析結果に基づき，周辺環境について整理しておきたい。分析結果が示すとおり，当時の自然環境は人々の居住前，居住中，居住後，現代という区分ができる。ただし，居住後から現代までどのようなスパンで変化をたどったかは不明で，既述のとおり周辺地域が生産域としての利用が現代まで継続していたというのが前提である。また，生産域としての土地利用の現代化の過程についても細かな土地利用のあり方の変化については現状では示しえない。

ここではあくまで集落が展開した前後の自然環境についてまとめることとし，居住前：弥生時代中期以前，居住中：弥生時代中期，居住後：弥生時代後期という大まかな流れで整理しておく。

【居住前】

厳密には中期以前にも人々の生活の痕跡は確認できるものの，明確な居住施設は確認できていない。

石清尾山に由来する谷川や香東川の支流などの流路が周辺に展開し，その周りにはニレ属-ケヤキ属，エノキ属などの河畔林が展開していたと考えられ，さらにその周辺にはアカガシ属，コナラ属に代表される照葉樹林を中心とする林野が展開していたものと考えられる。

また，石清尾山から流れ出る SR01 出土の花粉化石から安山岩が露出する石清尾山山塊には地盤が露出する周辺を生育適地とするスギ属，モミ属，ツガ属などが植生していたようである。これらの状況は近接する松並・中所遺跡（松本 2000），平野中央部の林・坊城遺跡（信里 2004）でも確認されている。

【居住中】

人々が居住地として利用しはじめると，草本花粉が増加し，花粉化石中に「人里植物」を多く含むようになる。特にイネ科が最も多く，湿地性の植物が多様化することから，周辺が開拓され，水田等として利用されていた状況が想定される。

木本花粉はアカガシ属に変わり，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属，コナラ属などが増加しており，二次林が広がっていたとされる。出土した木製品の樹種同定から，居住域で使用されていた木材は居住以前の植生と一致する。このことから，居住に際して周辺の林野から木材を調達した状況が想定でき，このような生業活動によって周辺環境の改変が進み，草本類の増加へと繋がり，二次林が形成されることとなったと考えられる。同様な傾向は多肥松林遺跡（山下 1999），上天神遺跡（大久保 1995）でも確認されている。

【居住後】

旧河道の埋没状況から居住後（集落廃絶）は湿地となった可能性が高いが，花粉分析等からはその変化は読み取ることができない。そのため，第4章で既述のとおり，弥生時代中期に居住域の拡大に伴う土地開発によって引き起こされたとされる周辺環境の大きな変化はその後，弥生時代を通じて漸移的に平野部に広がっていったものと考えられる。

また，近隣に所在する太田下・須川遺跡では古墳時代の柱材等が弥生時代前期以前に一般的に認められる種類のものである。これは，同様な植生が古墳時代にも残っていたことを示すものであり，このような成果からも，上記に述べた植生の変化は面的な変化というよりは集落域周辺での点的な変化として捉えるべきかもしれない。

そのため，弥生時代中期に起きた集落域周辺の環境変化はそれ以後，居住域の広がりもしくは増加等によって漸移的に起こったものと考えておきたい。

このような漸移的な変化の背景には高松平野に多数所在する旧河道の影響が想定でき，不定期に生活環境に大きな影響を与えたものと想定される。そのような環境下での流動的な居住空間の移動現象が結果的に一定地域における急激な環境変化の歯止めとなった可能性も考えられる。高松平野における弥生時代の姿を復元するうえで，今後の地道な環境調査の積み重ねが必要であることは言うまでもない。　（渡邊　誠）

b）社会環境　周辺集落の動態

次に，当遺跡周辺の集落分布等を通して，社会環境の変化について検討を行う。

その際に，まず，本遺跡が所在する高松平野における弥生集落研究を整理するとともに，高松平野における弥生時代の集落動態について分析・検討を行っておきたい。その上で，本遺跡周辺の状況を整理する。

ア）高松平野における集落研究

まず，先行研究における現状を把握し，高松平野における集落動態を見ていく上での注目点を整理しておきたい。

大嶋・川部両氏は高松平野における集落動態の概要を示した。（大嶋・川部 1999）。まず，平野部の微高地上では弥生時代を通して集落が形成され続けるが，特に後期後半には爆発的に増加することが指摘されている。この点については後述する大久保氏の論を引用し，一微高地上で複数の集落単位が共存して共同体を形成し，灌漑システムを成立させたとしている。また，後期には遺跡範囲・遺物量の点から中心的と言える集落が存在するもののいわゆる「拠点集落」と言えるものは存在せず，集落単位や共同体が相互に「比較的穏やか」に結びついていたとしている。一方で中期中葉から後期前葉にかけて，海岸部に近接した丘陵上に集落が展開するが，以降徐々に減少し，後期後葉には墓域として利用されるようになるとしている。また丘陵部では大規模な灌漑システムが不要であるため，一集落単位のみで共同体となりえたとしている。

次に大久保氏により，高松平野を事例に平野内に散在する集落遺跡の在り方を理解する上で重要な指摘がなされている（大久保 1995）。技術的・地形的条件に規定されて，一基幹水路により灌漑可能な範囲は旧河道に挟まれた一微高地内に限られる。その結果，微高地ごとに複数の「個別集落単位」が居住し，共同労働により基幹水路が整備・維持されることになったとしている。また，基幹水路の継続期間の長さに相反して「個別集落単位」の存続期間が短い一方で，「個別集落単位」の消長を超えた，灌漑を基軸とした集団間の結合が維持されたという。

ここでは以上のような論考を踏まえ，居住域の選択に関わる集落分布の傾向やその集落の継続性を重視し，高松平野における弥生時代中期前葉～弥生時代後期前葉の集落動態の概要を整理する。その上で若干の検討を加えることとする。

※弥生時代中期～古墳時代前期初頭において「建物群」が形成された、あるいは近隣に「建物群」が形成された可能性が極めて高い遺跡のみを示している。

第 138 図　高松平野弥生時代中期～古墳時代前期初頭主要遺跡位置図

なお，本項における相対年代の表記も，既述のとおりである。

イ）集落動態

(1)「建物群」と「基礎単位」（第 138･139 図，第 13 表）

以下，高松平野における集落動態の様相を概観していく中で，「建物群」という概念を用い，その形成主体に対応するものとして「基礎単位」という概念を用いることとする。

「建物群」とはそれを構成する建物跡から出土した遺

【弥生時代中期】

【弥生時代後期～古墳時代前期初頭】

※ドットは「建物群」が確認された地点および遺物出土状況から考えて近隣に「建物群」が形成された可能性が極めて高い地点を示している。

第 139 図　高松平野弥生時代中期～古墳時代前期初頭における「建物群」累積状況

第13表　高松平野における「建物群」形成状況

地図番号	遺跡名	土器型式													
		中期初頭	中期Ⅱ-1様式	中期Ⅱ-2様式	中期Ⅲ-1様式	中期Ⅲ-2様式	中期Ⅲ-3様式	後期Ⅰ-1様式	南谷Ⅱ式	下川津Ⅰ式	下川津Ⅱ式	下川津Ⅲ式	下川津Ⅳ式	下川津Ⅴ式	下川津Ⅵ式	下川津Ⅵ・Ⅶ式間
1	日暮・松林遺跡(都市計画道路)遺跡	◎	○	◎	◎		○			○	◎	○	◎	◎		○
	日暮・松林(済生会特養ホーム)遺跡		○	○	○			○	○	○			○			
	日暮・松林(済生会)遺跡		○	◎	○	○	○			○	○		◎	○	○	
	日暮・松林(フィットネスクラブ)遺跡					○				○			○	○		
2	多肥松林(高校新設)遺跡	○	○	○	◎	○		○	○	◎	○	○	○	○	○	○
3	松林(香川県立高松桜井高校周辺通学路)遺跡			◎	○			○		○		○		○		○
4	空港跡地(A地区)遺跡			○				○	◎	○		○	■	■	■	
	空港跡地(B・L地区)遺跡							○	○	◎	○	○	◎	◎	◎	
	空港跡地(C地区)遺跡			○	○		○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	
	空港跡地(D地区)遺跡							○	○					○		○
	空港跡地(F地区)遺跡							◎	○					○	○	
	空港跡地(G地区)遺跡								○	○			○	◎		
	空港跡地(H地区)遺跡							○	○	◎	○		◎	○		
5	一角遺跡							○	◎	○	○		○	○	○	
6	宮西・一角遺跡	○							○					○	○	○
7	弘福寺領山田田図比定地関連遺跡			○				◎		○(大池南東)			○(大池南東)	○(大池南東)		
8	汲仏遺跡							○	○							
9	凹原遺跡	◎?								○			◎	◎■	○	
10	宗高坊城遺跡							○		○			○	○		
11	林宗高遺跡												○	○		
12	井出東Ⅰ遺跡		○	○	○					○		○		○		
13	さこ・長池遺跡	○	○	◎	○	○	○	○			○	○		○		○
14	さこ・長池Ⅱ遺跡		○	◎	○							○				
15	林・坊城遺跡			○	○		◎	■?	■	■		○	○		○	
16	北山清遺跡		○	◎	◎					○						
17	松並・中所遺跡			○	◎	○										
18	摺鉢谷遺跡		○		○	○										
19	南山清遺跡						○									
20	上天神遺跡							◎	◎	○			◎?	○		
21	太田下・須川遺跡						◎?	◎	◎			○■	◎	○		
22	本郷遺跡			○				○	○	○?		○?	○	○	◎	
23	正箱遺跡	◎														
24	西打遺跡								○	○					◎	
25	天満・宮西遺跡							○	◎	◎		○	◎	◎	○	
26	木太中村遺跡								○	○	○		◎	○	○	
27	岡清水遺跡						○	◎	◎■	○		■				
28	竹元遺跡								○			○	○	○	○	
29	中山田遺跡						◎?	◎?								
30	三谷三郎池遺跡						○	○								
31	屋島南嶺		○	○			○									
32	奥の坊(Ⅰ・Ⅱ区)遺跡	○	○	○				○								
	奥の坊(Ⅵ区)遺跡	◎	◎													
	奥の坊(Ⅶ区)遺跡	○	◎	○												
	奥の坊IX区)遺跡	○	○													
	奥の坊権現前遺跡			◎		○		○	◎	○						
33	大空遺跡							○								
34	小山・南谷遺跡		○					◎	◎	◎						
35	諏訪神社遺跡		○	○	○		■	○					■			
36	久米山遺跡群(久米山東墓地地区)遺						○		◎	○						
37	久米池南遺跡						◎									
38	前田東・中村遺跡				○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	
39	西浦谷遺跡				◎		◎	◎	◎?							
40	鹿伏・中所遺跡	◎	◎	◎	◎		○	◎	◎	◎	○	○■	◎■	◎	◎	○
41	砂入遺跡			○	○			○		○		◎■	○	◎	◎	
42	白山3遺跡							○	◎							
43	西土居遺跡群							○		○		■	◎■	■		

◎　当該期の建物跡が検出されていることを示す。
○　当該期の遺物が出土していることを示す。
■　当該期の墳墓関連遺構が検出されていることを示す。
　　当該期に「建物群」が形成された，あるいは近隣に形成された可能性が極めて高いことを示す。

物の所属時期，建物跡の位置関係・分布状況，他の遺構（自然流路・低地帯等）との位置関係等を総合的に考慮して，同時並存が想定でき，且つ集団の最小単位に対応するとみなしうる建物跡の総体を指す。これは「集落」の構成要素であり，複数の「建物群」により，または単独の「建物群」により「集落」は形成されることとなる。換言すれば，「建物群」とは「集落」の最小構成単位である「基礎単位」という集団概念が，建物跡の集合状態として顕在化された姿であると言える。それゆえ，「建物群」の分析を通して「基礎単位」の基本的性格をより明確化することができると考える。なお，「建物群」の認定は建物跡（竪穴建物・掘立柱建物）が検出されているか否かにより判断している。

第 138 図は高松平野において「建物群」が確認された，あるいは近隣に「建物群」の存在が想定できる遺跡の位置図であり，第 13 表は各遺跡における「建物群」形成状況を示したものである。第 139 図は「建物群」が形成された，あるいは近隣に形成された可能性が極めて高い地点にドットを落とし，「建物群」の累積状況を図示したものである。

(2)「建物群」分布状況の概要

弥生時代中期前葉～後期中葉の「建物群」は，概ね香東川下流域，新川中・下流域に分布している。平野南部の丘陵裾部や香東川中流域，本津川下流域にも形成されるがいずれも一時的なものである。以下，各時期の詳細な状況を整理する。

【中期前葉～後葉】

平野中央部，平野東部丘陵の南西から南裾部，石清尾山塊周辺が比較的頻繁に土地利用されたと考えられる。その他，平野北東部や西部，屋島南嶺でも「建物群」が形成されたと考えられるが，いずれも一時的なものである。当該期の「建物群」が確認された北山浦遺跡の位置する石清尾山塊周辺部では，南麓から山上が比較的頻繁に土地利用されたとみられる。

また，主として中期後葉以降に特筆すべき事項として，丘陵上あるいは尾根頂部付近に「建物群」が形成される点が挙げられる。摺鉢谷遺跡や久米池南遺跡，西浦谷遺跡等がこれに該当する。同じく中期後葉には，主に平野南部の丘陵谷部においても「建物群」が形成される。

【後期前葉】

引き続き丘陵頂部等に形成された「建物群」は存在し，平野最奥部である香東川中流域においても「建物群」が形成される。平野中央部，平野東部丘陵周辺にも「建物群」は分布する。この点で，中期後葉の基本的な傾向を踏襲していると言える。一方，平野北端の旧海岸線付近にも「建物群」が形成され，以降，後期を通して頻繁に土地利用されたとみられる。

【後期中葉～後葉】

旧海岸線付近・平野中央部・平野東部丘陵周辺において「建物群」が形成される。また，後期後葉には再び平野南東部の丘陵谷部において「建物群」が形成される。

以上，各時期の「建物群」形成状況を概観したが，まず特筆すべき点として，弥生時代中期前葉～後期中葉にかけて，平野中央部および平野東部丘陵の南西から南裾部が，頻繁に土地利用がなされている状況が指摘できる。これを軸としつつ，中期には石清尾山塊周辺において，後期には平野北部旧海岸線周辺において比較的土地の利用頻度が高い状況が指摘できる。ここで注意を要するのは，上記のエリアはあくまでも「平野内において比較的土地の利用頻度が高いエリア」であり，「建物群」「基礎単位」の継続性とは別次元のものであるという点である。詳細は後述する。

丘陵上あるいは尾根頂部付近での「建物群」形成は，主として中期後葉～後期前葉に限定的にみられる現象である。一方，丘陵谷部に形成された「建物群」に関しては，奥の坊遺跡で中期前葉からみられる等，顕著な時間的偏向は認められない。丘陵地帯に形成されるという点で近似した属性をもつ２パターンの「建物群」ではあるが，両者を共通の事象に起因する現象として扱うことには慎重にならざるをえない。

その他，後期中葉以降「建物群」の分布が平野北部の旧海岸線周辺から平野中央部を経て，主として平野南東部に向けて広がる傾向が指摘できる。

(3)「基礎単位」の継続性

第 13 表を参照すると，特定スポットの居住域としての連続した土地利用の期間は，多くの場合，土器型式１～2 型式以内であることがわかる。これは丸亀平野等，県内の他地域における一般的傾向とも合致する。また，建物群の構成も継続している場合が多く，少なくとも土器型式 1～2 型式以内は「基礎単位」の継続性が認めら

れる可能性が高い。

一方で少数，土器型式３型式以上にわたり居住域として利用され続けるスポットが存在する。高松平野では，小山・南谷遺跡（後期Ⅰ-1 様式～下川津Ⅰ式），空港跡地遺跡Ｂ・Ｌ地区（下川津Ⅳ～Ⅵ式），同 Ｃ地区（下川津Ⅳ～Ⅵ式）等が挙げられ，県内の他地域においても少数認められる。この種のスポットに関しては，２通りの解釈が可能である。

一方は，土器型式３型式以上にわたり「建物群」形成主体たる「基礎単位」が断絶することなく存続し続けたという解釈，他方は居住域という機能を固定化されたスポットに立ち代り入れ替わり「基礎単位」が居住し，結果として常に集団が存在する状態が形成されたという解釈である。この問いに対する答えを導き出すためには，「建物群」構成パターン（竪穴建物の規模構成・構造・配列）に基づく詳細な分析を提示する必要があるが，具体的な分析の提示は別稿を期したい。ここでは結果のみを述べるが，後者の解釈の方がより適当であると考えている。それは，居住域における建物群の変化という考古学的事象が認められ，これは建物群を造営する基礎単位の分散や統合に伴う表現型の変化として把握した方が理解がしやすいと考えるからである。

以上の理由と集落の継続時期から，「基礎単位」が継続するのは，せいぜい土器型式１～２型式以内であり，このことから「基礎単位」は流動的であると言える。

ここで示した「基礎単位」の流動性とは，一集落の継続期間の短さに加え，継続する場合も「分散」と「統合ないしは吸収」という二面性を示すものである。「基礎単位」の「形成」-「分散」-「統合ないしは吸収」のサイクルが頻繁に繰り返されている状態を「流動的」という言葉で表現している。

(4)「基礎単位」の流動性と「土地利用頻度が高いエリア」

既述のように，高松平野内においては「比較的土地利用頻度が高いエリア」が複数存在する。ここでいう「土地利用」とは，居住域としての土地利用形態をも含む広義の土地利用であり，必ずしも居住域としての土地利用に限定しているわけではない。ただし，その場合でも核となるのは居住域としての土地利用である。「基礎単位」の継続性を検討する上で重要となるのは，「建物群」が形成された特定の「点」もしくは「スポット」であるのに対し，「土地利用頻度が高いエリア」とは，複数の「点」を含む「面」的な広がりを指す。「基礎単位」の継続期間が，一スポットにおける一「建物群」の継続期間に対応するのに対し，「土地利用頻度が高いエリア」は，一定の範囲内において，複数の「基礎単位」が「居住」を核とした何らかの土地利用を行った痕跡の累積として捉えられるのだ。

ここで注目すべきは，「『基礎単位』の流動性」と「『土地利用頻度が高いエリア』の存在」という，相反する事象が同時にみられる点である。地域社会の構成要素たる「基礎単位」が流動的であるにもかかわらず，比較的長い期間にわたってある一定エリアで継続的に土地利用が成されているのである。高松平野内にこのようなエリアが形成される背景を考察するだけの分析を行えてはいないが，少なくとも「基礎単位」の枠組みと「土地利用頻度が高いエリア」の存在の両者が，当時の社会環境をつくり出していたことは明らかであり，双方の性格やそれを生みだす背景を考える必要がある。

(5) 北山浦遺跡における「建物群」の評価

北山浦遺跡は，中期中葉～後期前葉にかけて頻繁に土地利用がなされた石清尾山塊周辺に位置する。本遺跡は，既述のとおり，検出遺構と出土遺物から判断して，少なくとも土器形式２～３型式（中期Ⅱ-1 様式～Ⅲ-1 様式）にわたり居住域として利用されたといえる。

「建物群」構造については，土器型式２型式にわたり円形多主柱，20～30㎡台の竪穴建物と掘立柱建物のセット関係がみられる。よってこの間，「建物群」構造に目立った変化・断絶は想定し難く，継続性を有する「基礎単位」が居住し続けたとみて差し支えないと考えられる。これは県内でみられる一般的傾向とも合致しており，同時に前述の「基礎単位」の基本的性格を追認することとなる。

また，北山浦遺跡で形成された「建物群」が断絶する中期後葉にも，石清尾山塊周辺で継続的に土地利用がなされる。この一定範囲（エリア）内における継続的な土地利用の背景について次に検討を行いたい。（池見　渉）

(6) 北山浦遺跡周辺の集落分布と社会環境

次によりミクロな視点で石清尾山山塊周辺の弥生時代集落の分布と動態について整理し，上記における高松平野における集落動態との比較を行いたい。

本遺跡周辺は前期からの土地利用が認められる。前期は本遺跡，松並・中所遺跡，中期前葉はやや不明で，中期中葉は本遺跡，擂鉢谷遺跡，中期後葉は擂鉢谷遺跡，松並・中所遺跡，本遺跡，後期前葉～中葉は上天神遺跡，南山浦遺跡，坂田廃寺下層遺跡といった集落変遷が

認められ，後期を除けば，小規模な集落が点在している状況である。

これは先の，集落を構成する建物群の流動性と一致する状況であるとともに，ある一定エリア内に場所を変えながら土地利用を行うパターンに当たる。また，中期中葉から後期初頭にかけて擂鉢谷遺跡のように丘陵上に居住域を設ける集団も出現するなど，この点についても高松平野の状況と類似するものの，中期中葉から居住している点は注意する必要がある。

この小規模な範囲で認められる居住地の移動は同一集団が一定のエリア内で居住域のみを移動させているという理解も可能で，広義には一定エリア内の継続的な居住とも理解できないことはない。しかし，集落が分散して並存している点などを考えると，現状では，「基礎単位」の流動性を示すとともに，集団自体の分散や統合を示しているものと考えておきたい。

このような中で集落の短期間での移動の背景には，周辺環境の部分でも述べたように，一つには旧河道などの氾濫等をはじめとする環境的要因[註2)]が一定の影響を及ぼしていた可能性が想定される。これらの影響により，居住地の移動が生じ，その結果，集団間の交流が促進されるとともに，諸関係において緊張関係や協力関係の形成や再編等の大小様々な摩擦が起こったことが想像される。

現状では，交易等に伴う財の集中等によるある集落への集住現象や，逆の大規模集落からの分散現象といった人口の大規模な増減現象は認められない。これは先学による高松平野における拠点集落の形成は後期後半段階まで待たねばならないという指摘とも一致する（大嶋・川部 1999）。

以上のような状況から，本遺跡周辺では集団間の関係もしくは集落間の関係が中期を通じて大きく変化したような状況は確認できない。これは，集落の移動が比較的頻繁に起こる中で，集団間の諸関係の形成・再編が生じ，各集団の関係調整が比較的頻繁に生じ，ある集団が一定の調整機能を求められたことが想定される。しかし，集団間の関係が不安定で，移動や何らかのイベントの度に，一定の再編が生じた可能性が想定され，それゆえ，一集団や一集落が突出するような状況が結果的に生じなかったと考えられる。その一方で，一定エリア内に居住し続ける現象は，移動に伴う様々なリスクを軽減し，集団間関係が大きく変化することを抑制しようとした結果である可能性がある。これは，集落間に張り巡らされる大溝の継続的な協同的／協業的維持管理（大久保 1995，信里 2008）からも推察される。

後期に入り，外来系統の土器群が多量にみられ，交易の拠点となったと考えられる上天神遺跡や天満・宮西遺跡のような集落でも，基本的には集落／建物群の流動性が認められ，依然として同様な社会環境が継続した可能性が想定される。高松平野では面的な調査が必ずしも多いとは言えない中で，後期には香川県中西部で下川津遺跡，旧練兵場遺跡のようないわゆる拠点集落／大規模集落が形成される状況から考えると，後期になり，より広域に及ぶ地域間との関係性の中で集住を生み出すメカニズムが構築されたと考えられる。先に述べた高松平野における上天神遺跡や天満・宮西遺跡はその萌芽的存在であったのかもしれない。

以上のように集落動態から本遺跡周辺の社会環境について流動性と突出する集団／集落の非存在という視点から検討を行ってきたが，ここで指摘した居住環境の変化などに伴う移動のみならず，マクロな視点による集落の移動現象の把握（共変動の有無等（大嶋・川部 1999 等））からより具体的な社会環境（抗争，集団の主体的移動等）が集落の移動を引き起こした可能性を想定する必要もある。

本項での検討の結果，集団の移動は，当時の集団間関係の不安定さゆえに社会環境のある種の安定化と，変化に対するある種の抑制効果を生み出し，結果的に中期における集落を取り巻く社会環境のいわゆる安定が形成されたと考えておきたい。　（渡邊　誠）

第3節　北山浦遺跡における生産部門

本項では，当遺跡で非常に良好な資料を得ることができた土器製作，石器製作について，出土資料を整理し，今後の調査研究に備えたい。

a）土器製作　～香東川下流域産土器成立の前夜～

本遺跡では，第3章で述べたように，土器焼成に関わると考えられる資料が多数認められた。本遺跡周辺は副題に付したように，弥生時代後期に特徴的な胎土を使用する土器群を製作する地域として著名である。そのため，その生産と供給，社会背景など様々な論点から議論の中心となっている。これまで，その前夜にあたる中期の土器製作については全く不明であったため，本遺跡の土器製作に関わる資料の整理は，高松平野における弥生時代後期の土器つくりを考える上でも非常に重要であ

る。それゆえ，今回出土した土器製作に関連する遺構，遺物のみならず，胎土分析で明らかとなった褐色を呈し，角閃石を多量に含む胎土の土器についても総合的に検討を行っておく必要がある。

ここでは，土器製作の可能性について，土器製作工程の各工程に関わる事象ごとに再度整理しておきたい。土器製作工程は一般的に下記のような流れを想定できるが，この中で，遺跡の中で確認できた粘土採取から素地作り，焼成の２項目について整理しておきたい。

粘土採取⇒素地作り⇒成形⇒乾燥⇒焼成⇒使用・交換

【粘土採取】

まず，肉眼による胎土観察について整理し，胎土分析の結果について整理しておきたい。

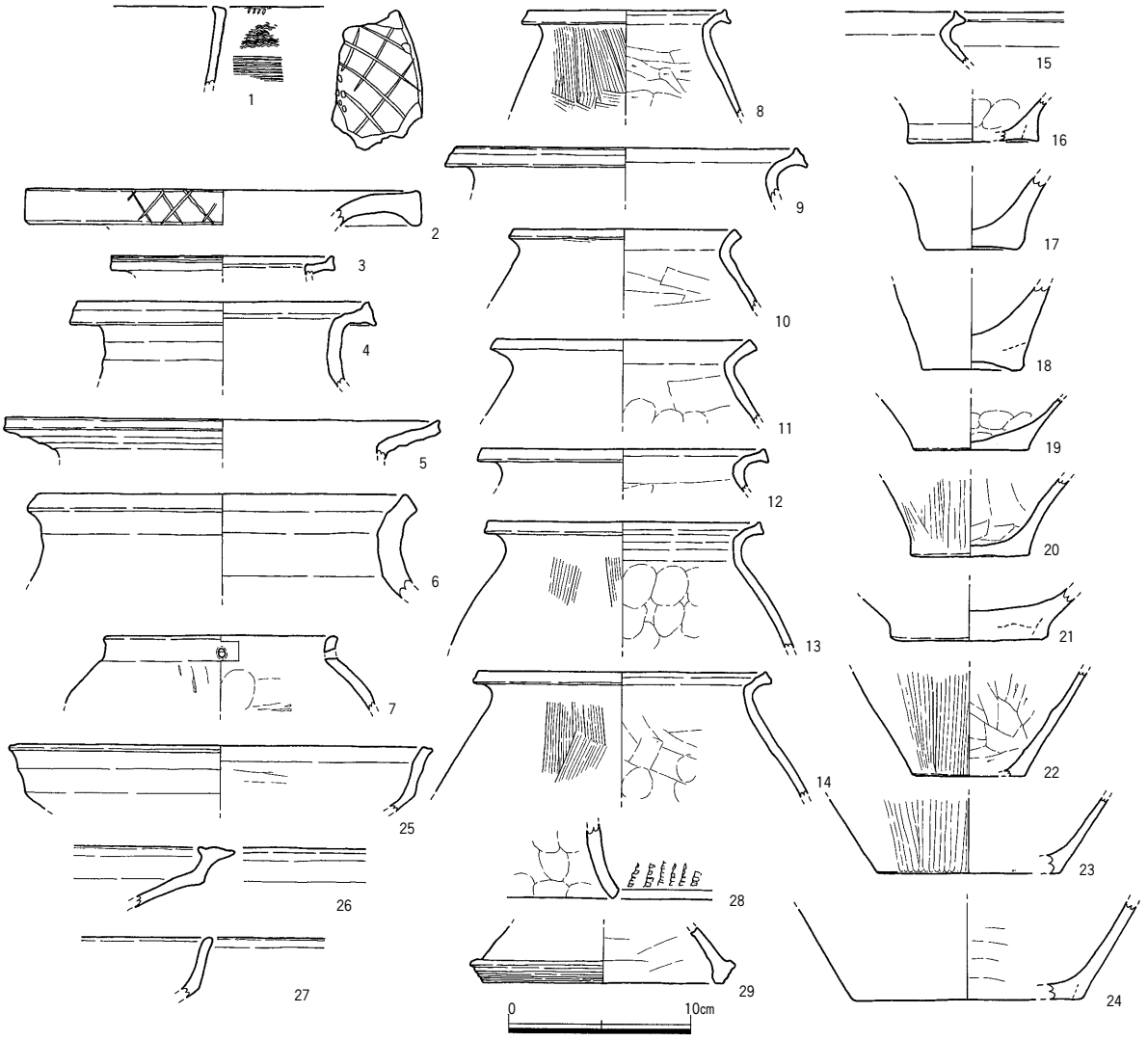
①土器の胎土

個々の胎土については第３章の中で個別具体的に既述し，出土遺構別に分類を行った。その中で，中期中葉の各遺構には胎土に角閃石を含み，褐色系胎土のものが一定量存在することが明らかとなった。ただし，胎土の粗密，角閃石および雲母の量などの点から同じ褐色を呈し見た目として統一感がある土器群の中にも胎土構成などにヴァリエーションがあり，統一感に欠ける。その一方で，胎土構成および見た目において弥生時代後期後半期の香東川下流域産土器と遜色のないものも一定量存在する。

縄文時代晩期から弥生時代中期後葉までの遺構が認められたが，各遺構出土土器の胎土の傾向について簡単に整理しておきたい。

【縄文時代晩期】：SX04

後述する弥生時代前期と同様で，白色系の胎土に石英や長石を含む胎土である。



第 140 図　坂田廃寺下層遺跡出土弥生土器（S=1/4）

【弥生時代前期】：SX18 等

色調は灰白色，黄白色などややヴァリエーションがあるが，基本的には白色系の胎土で大粒の石英や長石を多量に含む弥生時代前期に特徴的な色調および胎土構成である。

【弥生時代中期前葉～中期中葉古相】：SX17

黄白～灰白色や橙褐色系を呈し，比較的明度の高いものが多く，石英や長石を含む胎土である。この段階から一定量，褐色系胎土が存在する。現状では量的な比較が難しいが，出現期の可能性がある。

【弥生時代中期中葉】：SX03，08，19，20，21 等

全体の中で圧倒的に褐色系胎土が増加し，一定量を占める。この褐色系胎土には石英や長石のみを含むものも一定量あり，角閃石や雲母を含むものがすべてではないが，この段階になって主体となることには変わりがない。また，後述する焼成遺構から出土した土器は基本的に褐色系を呈するものであるが，角閃石や雲母を含まないものもあり，限定的な胎土選択ではない点も注意される。

【弥生時代中期後葉】：SH01，SX09

量が少ないため，詳細は不明であるが，中期中葉と同様に褐色を呈する胎土が一定量を占める。

次にこのほか，中期中葉から後期にかけての周辺遺跡の土器の胎土の状況について概観しておきたい。

まず，松並・中所遺跡である。中期中葉～後葉に属する甕形土器が出土しているが，いわゆる香東川下流域産土器（胎土１類）に類似するものが認められ，その一方で，当遺跡同様にヴァリエーションが認められることも事実である。本遺跡に類似する傾向である。

次に，高松平野の中期後葉の集落を象徴する遺跡の一つである擂鉢谷遺跡の資料について述べておく。

中期中葉（信里編年Ⅱ－１様式新段階）の土器群も含むものであるが，これらの多くは色調が褐色系を呈する胎土である。見た目では大きく４種類に分類でき，その１つが茶褐色から褐色を呈し，細かな角閃石を含有する胎土である。最も香東川下流域産土器に近いが，含有する角閃石は細かく，あまり多くない。本遺跡同様にヴァリエーションが認められ，複数の胎土があることが注目される。中期では胎土選択に特化した状況が現状では認められない。

最後に坂田廃寺下層遺跡について少し詳述しておきたい。

坂田廃寺下層遺跡は名のとおり，古代に築かれた坂田廃寺に先行する遺跡で，ここで図示した弥生土器は坂田廃寺の発掘調査時に出土した土器群である[註3)]。基本的には後期前葉～中葉を中心とする土器群で，いわゆる香東川下流域産土器と同等な胎土をもつものとそれ以外のものが認められる。掲載の１～２，底部資料の一部（23・25～27）については中期に属するものである。１・２は褐色系を呈するが，角閃石は含まない。５，23，25～27 はいずれも色調が異なり，明橙や黄褐色系のもので，石英や長石を多量に含む胎土である。

一方，それ以外は 24 を除いて，橙褐色～褐色という明度に幅があるものの基本的には色調が褐色系の胎土で，角閃石を含むものが主体を占める。

以上のことから，これまで指摘されているように，後期段階まで，いわゆる香東川下流域産土器群に特徴的な胎土，つまり褐色系胎土に角閃石を多量に含む土器を集中的に製作する状況は認められない。中期に認められる褐色系胎土は中期中葉以降出現し，本遺跡周辺では主体を占める。ただ,その胎土に含まれる砂粒は複数あり，一定の幅がある。

また，角閃石を多量に含むいわゆる褐色系胎土（粘土）を使用した土器類は，この周辺では古代の瓦（渡邊編 2009），中世の土器等でも確認でき，粘土採集地として石清尾山および浄願寺山の山麓の複数箇所が存在し，通時的に利用されていた可能性が想定される。

②胎土分析について

結果は第４章で述べられており，概要をまとめると下記のとおりである。

- 胎土は大きく２つに分類でき，一群が香東川下流域産土器に特有な分布圏に含まれる。
- もう一群の胎土は遺跡で採取された粘土および焼土と同様な分布圏を形成するが，重複しない点は注目される。
- 地山および焼土には基本的に角閃石は含まれず，異なるグループになる。
- 角閃石を含む粘土採取地は現在想定されている箇所以外にも，浄願寺山北東部でも確認されており，複数存在する可能性が指摘されている（白石 2004）。

以上の結果から，大きく２種類の胎土を想定でき，集落周辺の粘土では角閃石は含まれず，意図的に胎土選択

が志向されたことは明らかである。

【素地作り】

SH01 出土の斑レイ岩について

本遺跡 SH01 の床面から斑レイ岩の原石が２石出土した。加えて，調査時から褐色胎土の土器群の存在が明らかであり，それら原石が，敲打したような状況が認められるとともに，角がすり減って丸みを帯びていたことなどから，混和材としての使用の可能性を想定していた。また，胎土分析の結果からも集落周辺の地盤には角閃石を含む粘土がなかったため，意図的に混入していたのであろうと想定した[註4)]。

しかし，その後，混和材として混入させた場合は大きめの角礫が土器の胎土内に含まれること[註5)]，叩き石としての使用された類例があること[註6)]を知り，現状では混和材ではなく，叩き石として使用したものと考えている。

以上の理由から現状では，混和材としての斑レイ岩の使用は保留しておき，あくまでも後期同様に角閃石を含む粘土を採取してきて土器つくりを行っていたと想定しておきたい。

【焼成】

既述のとおり本遺跡では，SX19～21 が焼成遺構である可能性があることを述べた。これらの３遺構は隣接するとともに，周辺には炭化材は認められず，各遺構の埋土中に多量の焼土や炭化材が認められること，出土土器からほぼ同時期に，２次利用がなされたという共通点を挙げることができる。

既述のとおり，ここでいう２次利用は土器焼成を想定している。ここで重要な点は，土器焼成を行うために，焼成用の土坑を設営していない点である。この点は他事例からも明かなように，土器焼成遺構は一般的に方形が多いものの，その確認例は決して多いとは言えず，焼成行為を行う施設については多様なあり方を想定する必要がある。そのため，遺構よりも既述のとおり，焼成行為を示す遺物を重視して検討した。

調査の成果においても述べたように，方形竪穴遺構（SX19～21）は本来の機能を終えた後，焼成土坑として２次利用をなされた可能性が高い。

特に SX19 は残存状況が良く，多量の炭化材，多量の粘土塊（スサ入り粘土含む），硬く焼き締まった粘土，接合する破片で焼き上がりの色調が異なる土器等が出土している。また，SX20 では焼成破裂土器片（田崎 2004 ほか）が出土している。また，焼土を含む遺構も多量で集落の東側に偏在傾向が認められる。

また，土器焼成を裏付ける周辺の遺物の状況としては，集落内の他の遺構からも粘土塊，焼成破裂土器片，焼成破裂痕のある土器（田崎 2004，2005b ほか）が出土しており，焼土および粘土塊は遺構全体の約 30％から出土している状況がある。

以上の総合的な判断から当遺跡で土器焼成を行ったと推定している。

【小　結】

以上のように，考古学的事象から集落内での土器作りを想定するとともに，その実態について土器製作工程別に整理を行った。

通時的な視点から，遺跡出土土器の粘土選択の変化を考えた場合，中期中葉以降，比較的集中的に褐色系の胎土を使用していることが明らかとなった。この胎土の選択における前期から中期への変化は広い意味では中期における土器つくりの地域色の顕在化という，これまで列島規模で認められる現象の中で把握することができる。

この変化ははどちらかと言えば，色調／見た目であり，角閃石の含有やその量についてはそれほど意図された状況は認められない。それゆえ，太田下・須川遺跡の報告書の中で示された粘土採取地の候補も含め，近隣でかつ容易に確保が可能な粘土であったということが粘土選択の理由と考えられ，コスト面を重視すべきかもしれない。ただし，集落周辺の粘土（地山）を使用した場合は，既述の斑レイ岩などの混和材を付加しない限り，いわゆる褐色系胎土とは明らかに異なる仕上がりになることを考えると，先の中期中葉以降出現する角閃石を含む粘土の採取は，ある種，意図的であると考えざるを得ない。

中期後葉以降の粘土選択がどうであったかはやや資料不足であるが，中期を通じて，褐色系胎土（粘土）を使用していたものと考えられ，継続的な使用を想定している。中期の中で粘土採取が継続する点は，容易に獲得が可能であったこと，土器製作における粘土採取の行為がパターン化し，一定の規範や慣習となっていたことを示す。

その一方で，胎土が大きく２分でき，いずれの胎土の土器も当遺跡で製作している可能性が想定されること，後期のような意図的／限定的な胎土の選択ではないことなどから，それらの粘土選択における規範や慣習もそれほど厳密なものではなく，選択性が残されたものであっ

た可能性がある。これは，土器製作の流派が複数存在していたことを示すとともに，そのあり方も一定の幅が認められることが重要である。

非常に画一化するのは後期中葉以降であり，器種組成，製作技法の統一等から見た目（形や色調）との関係でさらに強く選択されるようになったと考えられる。

これまで，後期に突如として使用されるようになったと考えられてきた角閃石を多量に含む褐色系粘土（胎土1類）[註7)]は，以上の成果に基づいて考えるならば，中期の土器作りにおける粘土採取／素地作りの伝統（角閃石を含む褐色系粘土の選択）がより特化した（限定的な使用）ことで生じたと考えた方が適当である。

ただし，後期に特化する胎土選択を促した要因は，これまで大久保徹也氏（2003），濱田延充氏（2009）らが指摘しているように，高松市上天神遺跡における近畿系（生駒西麓型土器群）土器群製作者集団との接触が発端であったと考えられる。粘土選択が強い志向性をもって特化していく素地は，弥生時代中期の土器作りの伝統にあったことは本遺跡の資料が示すとおりである。

また，同時に本遺跡が所在する地域では，中期から後期にかけて土器作りの伝統が器種構成，製作技術を変えながらも，粘土採取・素地作りという中に保持されていたことは，居住域の流動性とは異なり，注目すべき点である。このことは農耕に関わる灌漑水路の維持管理，その管理単位などとも似た現象としても注目される。

加えて，近年明らかにされつつある集落ごとの特産品の存在とその交換の実態を考える上でも重要である（大久保2005など）。ただし，木製品，石製品などの製作やその交換が土器と同じ状況を示すかどうかは現状では不明な部分が多く，今後の検討を待たねばならない。

いずれにしても，本遺跡周辺では弥生時代中期から褐色系胎土を用いて土器作りを行っていたことが明らかとなった点は大きな成果と言える。

b）石器製作

本項では，当遺跡の遺構から出土した総数2390点の石器・石製品について，石器組成を第14表・第141図にまとめた。なお包含層出土の石器については検討からは除外している。

石材別の点数と重量は，サヌカイト2336点・9690.7ｇ（うち製品・未製品186点・2938.4ｇ），安山岩12点・1287.8g，凝灰岩2点・950.2ｇ，結晶片岩10点・283.6ｇ，泥岩1点・79.3ｇ，斑レイ岩3点・834.4ｇ，流紋岩2点・374.4ｇ，輝緑岩2点・284.7ｇ，砂岩22点・253411.1gである。

以下，遺構ごとの石器組成の特徴と，SH01での石器製作について検討を行う。

各遺構の石器組成の特徴

【SH01】

SH01からは，サヌカイト製石器・未製品71点，石器製作に関連する遺物であるサヌカイト製の石核，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップなど1277点，磨製石器・礫石器類が7点出土している。石器組成では，SH01は他の遺構に比べ多機種であり，当時の住居単位の機種構成の一端をうかがうことができる。

SH01から出土している石器は，1355点（総数に占める割合57%）で，SH01を含めたすべての竪穴建物となると1601点（67%）に及び，竪穴建物から半数以上の石器が出土していることになる。また石鏃と石鏃未製品についても，約半数がSH01からの出土である。出土石器のほとんどが剥片やチップ類であることから， SH01で石鏃生産が行われていた可能性が高く，のちに詳しく検討を行う。

【SH02】

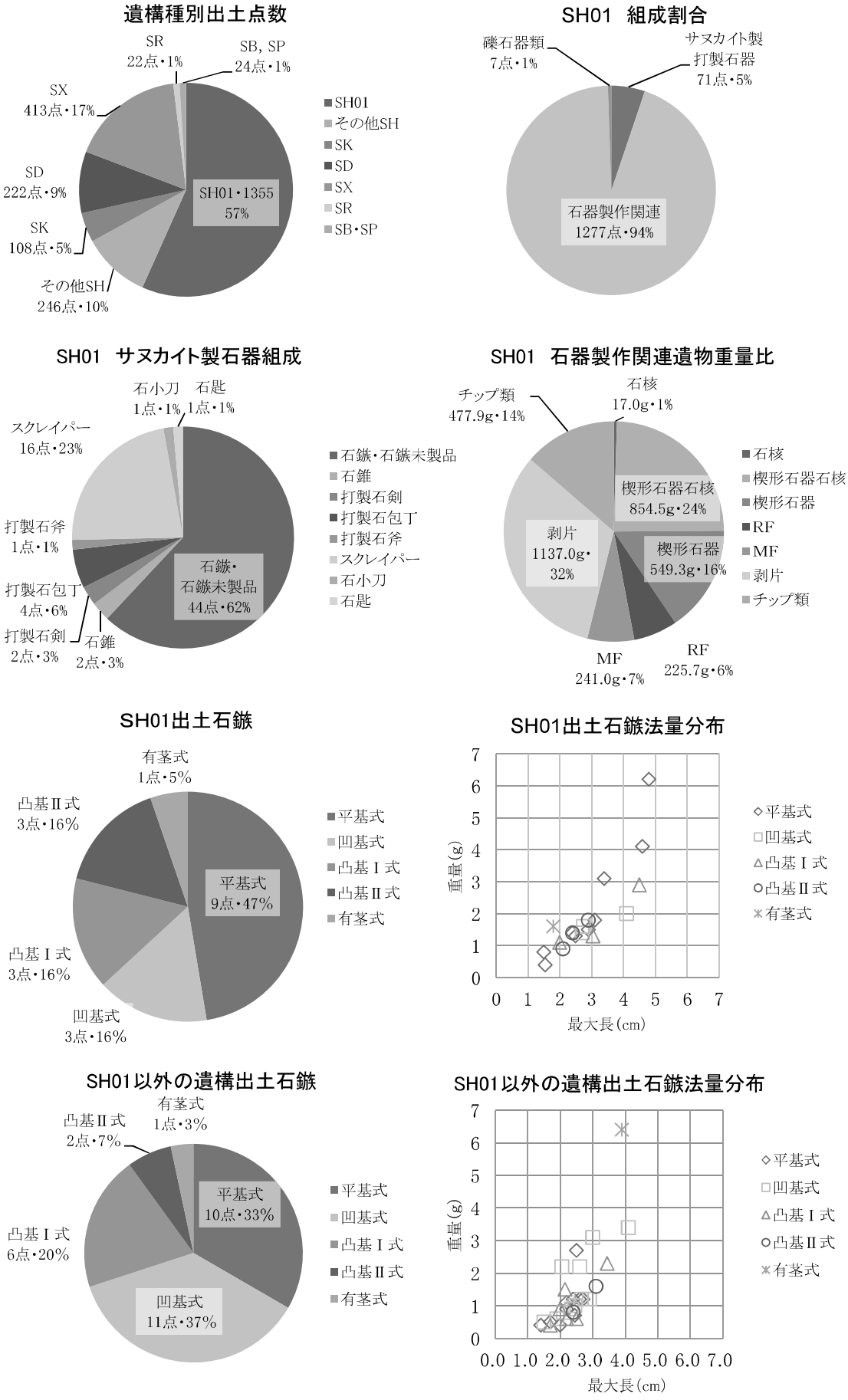
SH02からは，サヌカイト製石器5点，楔形石器，剥片，チップなどが35点出土している。SH01と比べ，石器の出土量が少ないが，石器組成については，SH01と同様の傾向がうかがえることから，この差は遺構の残存状況の差によるものと考えられる。

【SH03】

サヌカイト製石器14点，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップ類が186点，礫石器が2点出土している。石器は石鏃や石錐，石錐未製品のほか，石器製作に関連する遺物であり，数量の差はあるものの，SH01と同様の傾向が認められる。

【SX13】

サヌカイト製7点，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップ類が39点，磨製石器1点，礫石器が1点出土している。石器組成では，二次加工のある剥片と微細剥離痕のある剥片の割合がやや高い傾向にある。



第 141 図　石器の遺構別出土量と石器組成

第 14 表　出土石製品組成

	石鏃	石鏃未製品	石錐	石錐未製品	尖頭器	打製石剣	打製石包丁	打製石包丁未製品	打製石斧	磨製石斧類	石鋸	スクレイパー	石小刀	石匙	石核	楔形石器石核	楔形石器	RF	MF	剥片	チップ類	石棒	石錘	石皿	敲き石	砥石	くぼみ石・台石	磨石円礫	破片	素材	計
SH01	20	24	2			2	3	1	1			16	1	1	1	3	21	31	26	212	983			1	4					2	1355
SH02	3		1									1					2			9	24										40
SH03	6		1	1			1					4	1				3	7	1	17	158					1	1				202
SH04																				1	3										4
SB01									1												1										2
SK01																											3				3
SK04	1																1		1		1										4
SK11																					1										1
SK16																	1				2										3
SK21									1												1										2
SK26			1															2		7	75										85
SK27									1										1	1	1	1							1		6
SK34																					1										1
SK41																					3										3
SD03										1																					1
SD05	1																1				1										3
SD07	2	1	1						1			2					1	7	6	7	82										110
SD08	1																				4										5
SD10																				2	13										15
SD11	5	1										2	1				2	2	1	6	66										86
SD12	1																		1												2
SX01	2														1			1		1	1				1						7
SX02																					1										1
SX03	1											1									8										10
SX05	1					1	2										1			2	11										18
SX06		1	1		1				1		1	1								3								1		4	14
SX07	2	1										1								5	32							1			42
SX08		3	1				4			1							2		1	4	12							1	1		30
SX09																		1		3	10						1				15
SX10																	1		1	4	2										8
SX12																	1			3	5										9
SX13	1	1	1							1		3	1				1	3	3	8	24					1					48
SX13・14	1	3	1				1		1			1					3	6	6	15	47										85
SX14	1	1										4					1	1	1	3	24				1	1				2	40
SX16	2	1																1	2	8	33										47
SX16・17	1																														1
SX17																	1			2	7				1			1			12
SX18												1						2	1		2				4			1			11
SX19						1									1					3	2			1							8
SX20		1					1					2					1		1	1											7
SRO1		1							1	1		1			1		1	1	1	5			1							1	15
SRO2												2								3	2										7
SP07																					1										1
SP15																	1														1
SP27																	1			1											2
SP31												1						1		4	8						1				15
SP31・32・33	1																														1
SP36																					1										1
SP45									1																						1
計	53	39	10	1	1	4	12	1	9	4	1	43	4	1	4	3	47	66	54	340	1653	1	1	2	11	3	6	5	2	9	2390

【SX14】

サヌカイト製石器６点，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップ類が 30 点，礫石器が４点出土している。石器組成では，スクレイパーが４点出土しており，やや割合が高いほかは，竪穴建物と同様の組成の傾向がうかがえる。

【SX16】

サヌカイト製石器３点，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップ類 44 点が出土している。石鏃と石鏃未製品以外は，石器製作に関連する遺物の割合が高いことは，竪穴建物と同様の傾向である。

【SK26】

サヌカイト製石器１点，二次加工のある剥片，剥片，チップ類が 84 点出土している。他の遺構と比較して，製品の割合が低く，逆に石器製作に関連する遺物の割合が高いことから，別の地点の石器類をまとめて投棄した可能性が考えられる。

【SD07】

サヌカイト製石器７点，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片が 103 点出土している。SH02 を切る溝であることから，埋土内に竪穴建物の遺物が混入した可能性がある。

【SD11】

サヌカイト製石器９点，楔形石器，二次加工のある剥片，微細剥離痕のある剥片，剥片，チップ類が 77 点出土している。SH04 を切る溝であることから，埋土内に竪穴建物の遺物が混入した可能性がある。

SH01 の石器製作

SH01 の石器組成の特徴として，石鏃と石鏃未製品，およびチップ類が多量に出土している点があげられる。SH01 出土のサヌカイト製品の総量は 1348 点・4601.9ｇであるが，石核や剥片，チップ類などの石器製作に関連する遺物の割合は，点数で 1277 点（94％），重量で 3502.4ｇ（36.1％）におよぶ。このほかサヌカイト製石器以外にも，敲き石が４点出土している。石鏃未製品の比率が石器組成の中で非常に高いこと，多量のチップ類が出土していることから，SH01 では石鏃の生産が行われていたと考えられる。

次に石鏃の形態と法量について見ていきたい。石鏃は 53 点出土しているが，欠損等で形態が不明なものを除いた 49 点について，SH01 出土の石鏃 19 点と，それ以外の遺構出土の石鏃 30 点とに分けて，検討していきたい。SH01 では，平基式の割合が最も多く，９点・47％である。凹基式と凸基Ⅰ式，凸基Ⅱ式はともに３点・16％，有茎式は１点・５％という割合になる。対して，SH01 以外の遺構から出土している石鏃は，平基式が 10 点・33％，凹基式が 11 点・37％，凸基Ⅰ式が６点・20％，凸基Ⅱ式が２点・７％，有茎式が１点・３％となる。SH01 では平基式が優位であるが，SH01 以外の遺構では凹基式が優位になり，ほかに凸基Ⅱ式の割合が低下する傾向にある。

次に形態と法量の関係について見ると，最大長３㎝・重量２ｇを超える大型石鏃は，SH01 では５点中３点が平基式であるが，SH01 以外の遺構では平基式は４点中０点である。以上の点から，同じ集落内でも世帯ごとに生産する石鏃の形態に差が生じていた可能性が考えられる。

まとめ

SH01 出土石器を中心に，北山浦遺跡の石器組成と石器生産についてみてきた。北山浦遺跡には，数量は少ないがサヌカイト以外の石材の石器が出土しており，集落の活動を担っていたと考えられる。しかしサヌカイト以外の石材の石器は，遺跡内での生産の痕跡が確認できないことから，ほかの遺跡から持ち込まれた可能性が高い。北山浦遺跡で生産された石器は，石鏃や石錐といった小型の石器や，スクレイパーなど一部に限られると考えられるが，今回 SH01 という非常に良好な資料によって，集落内で同時に行われた石器生産にも，小単位ごとに差異が認められることが明らかとなった点は重要な成果である。（船築紀子）

第4節　弥生時代中期の高松平野における北山浦遺跡の位置

これまで，個別事象について当遺跡の発掘調査成果に基づいて考察を行ってきたが，最後に，それらの整理を踏まえて，弥生時代中期における本遺跡の歴史的位置づけを行っておきたい。

中期中葉の明確な居住域の調査は高松平野ではこれまでほとんどなく，弥生中期の社会像はそれほど明確に描かれていない。そのような中で本遺跡の調査によって中期中葉段階に旧河川に囲まれた微高地上に居住域を形成し，周辺環境を巧みに利用しながら，また影響を受けながら生活を営んでいた様相を明らかにすることができた。

その様相の具体的な例は木製品や土器製作，石器製作を挙げることができ，その状況から木材利用，粘土採取，剥片素材の獲得と製品の製作といった当時のムラにおける人々の行為を一定程度復元することができた。

一方で，石器製作に必要な石材，さらには石器の中には広域的な交換を伴うものもあり，完結的に自給的生活を営んでいたのではなく，自給自足と非自給自足的物資があったことは明らかであり，先学によって示されてきた土器や木製品における状況と同様である[註8)]。そのため，周辺集落および集団間の諸関係が暮らしを支えていたことは明らかである。石器以外には具体的に集団間の関係や交流を示すものは認められないが，既述した方形竪穴遺構がその候補として考えられる。

また，本書では弥生時代中期における当集落および周辺集落が周辺環境の一定の影響を受けながら，その居住地を頻繁に移していたことを述べた。これは集団の流動性として現れるとともに，中期から後期にかけての高松平野における特徴とも言える現象であり，本遺跡もそれにもれなく該当する。

この一方で，既述のとおり，特定の粘土という一定エリアという場の限定を前提とする土器作りの地域的な伝統の継続性が認められるとともに，大溝の溝浚えなどに認められる農耕に伴う一定の協業体制の継続性も想定される。

これらの相反する事象の存在を理解するものとして，集団間関係の不安定さと自然環境等の一定程度の影響による居住域の移動によって生み出される諸関係の再生産の可能性を第3節の中で述べた。これは，移動が引き起こす，人々（集団）への一定程度のリスクと変化による非安定化傾向と，それらの解決および回避のための諸関係における関係性の一定の安定化への志向が同時に進行することを示す。その結果，比較的類似した社会環境が再生産される状況が生み出されたのではないかと推測した。そして，これが中期社会のいわゆる安定した社会イメージを生み出したのではないかと考えられるのである。

本書では，ある種，環境要因を重視し述べてきたが，高松平野のように網目状に多数の旧河道が存在する地域では，居住における環境要因を一定程度見積もる必要がある[註9)]。ただその一方で，周辺環境や社会環境を活用しながら，生活を営んでいた状況をうかがい知ることもでき，それらが，集団間の安定化に一定の役割を果たしたと認識しておく必要もある。

ここで述べた理解が高松平野の中で普遍的に通用するか否かは今後の資料の蓄積をもって再検討を要すると考えられる。しかし，以上のような検討ができた点から言えば，少なくとも，弥生時代中期における人々の暮らしのみならず，その時代性や社会性を考える上で非常に重要な遺跡であることは間違いないと言えるのではないだろうか。

【註】

1）成重遺跡ⅡのⅤ区 SH12 資料は出土土器から後期中葉の年代が与えられているが，柱穴等の状況から中期になる可能性を想定しておきたい。

2）このほかにも干ばつ，飢饉，疫病など様々な環境的要因を想定する必要がある。

3）今回，未公開であった資料の実測を実施し，掲載している。資料化および掲載を許可していただいた瀬戸内海歴史民俗資料館には謝意を表する。

4）第4章の白石氏の註にもあるが，当初は想定していた。

5）濱田延充氏から生駒西麓型土器，上天神遺跡出土土器の胎土について御教示いただき，当遺跡との違いを認識した。記して謝意を表したい。

6）菅榮太郎氏や森下英治氏からご教示を受けた。記して謝意を表したい。また，『香川県自然科学館紀要』第2号所収の井上勝之「サヌカイト製石器の製作址」にも叩き石として斑レイ岩が紹介されている。

7）上天神遺跡の報告書では，太田下・須川遺跡出土土器が中期後葉が存在することから中期後葉を出現期としていた

が，その後，それらの土器群が後期に属することが判明し，現状では，香東川下流域産土器に特徴的な褐色系胎土の使用の開始時期は後期と考えられている（大久保 1995，2003 等）。

8）当遺跡とほぼ同時期の多肥松林遺跡における木器製作はまさに特化した状況を示す。

9）このような視点は，旧河道の伏流水と雨天に伴う伏流水の増大に伴う幾度に渡る調査区の水没状況を体験したことで，より強く認識したことを記しておきたい。

【参考文献】

井上勝之 1980「サヌカイト製石器の製作址」『香川県自然科学館紀要』第２号　香川県自然科学館

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会

大久保徹也 1993「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について-下川津Ⅵ式以降の様相-」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅰ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也 1995「基幹的潅漑水路と潅漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　上天神遺跡』香川県教育委員会

大久保徹也 1995「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『上天神遺跡』香川県教育委員会

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社

大久保徹也 2005「弥生時代の物資調達方式－共同体像の再検討のために－」『日本史の方法』第２号　日本史の方法研究会

大嶋和則・川部浩司 1999「高松平野における集落の様相」『みずほ』第 30 号　大和弥生文化の会

大嶋和則 1997「大空遺跡の竪穴住居と表採資料について」『香川考古』第６号　香川考古刊行会

川部浩司 2011「古墳時代開始期における大和地域と四国北東部地域の地域間交流」『研究紀要』由良大和古代文化研究協会

白石純 2004「宗高坊城遺跡出土土器の胎土分析―下川津Ｂ類土器の分析を中心に―」『宗高坊城遺跡』高松市教育委員会

白石純 2008「高松平野部出土の弥生時代後期から古墳時代前期土器の胎土分析」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集刊行会』岡山理科大学埋蔵文化財研究会

田崎博之 2000『遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剥離土器片からみた弥生土器の生産・供給形態』

田崎博之 2002「土器焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会

田崎博之 2004『土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』

田崎博之 2005a「土器焼成失敗品からみた生産体制」『土器研究の新視点』土器の技術・調理研究会

田崎博之 2005b「焼成失敗品からみた無文土器の生産形態」『松菊里文化を通じてみた農耕社会の文化体系』高麗大学校考古環境研究所編　書景文化社

田崎博之 2007「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点』六一書房

中山俊紀 2001「長方形竪穴住居状遺構と掘立柱建物の分類と機能」『年報　津山弥生の里』第８号津山弥生の里文化財センター

丹羽佑一・藤井雄三 1988『遺跡が語りかける　高松の古代文化』高松市立図書館

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年-凹線文期を中心として-」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

信里芳紀 2008「大溝の検討―弥生時代の灌漑水路の位置づけ―」『香川県埋蔵文化財センター　研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

乗松真也 2005「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」『調査研究報告』第１号　香川県歴史博物館

濱田延充 2009「褐色の弥生土器をめぐる諸問題」『考古学ジャーナル』No.582　ニューサイエンス社

松本和彦 2000「松並・中所遺跡竪穴　住居について」『都市計画道綿町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　松並・中所遺跡』香川県教育委員会

森下英治 1999「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『瀬戸内の弥生中期集落』古代学協会四国支部

【報告書】

石井健一編 2001『香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　白山３遺跡』三木町教育委員会

大久保徹也・森　格也編 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　上天神遺跡』香川県教育委員会

大嶋和則編 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　松林遺跡』高松市教育委員会

大嶋 和則編 2000『特別養護老人ホーム“さくら荘"建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　一角遺跡』高松市教育委員会

大嶋和則編 2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会

大嶋和則編 2004『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵

文化財発掘調査報告書第2冊　奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前　遺跡）』高松市教育委員会
大嶋和則編 2005『特別養護老人ホーム（なでしこ香川）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
大嶋和則編 2006『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5冊　奥の坊遺跡群Ⅴ（奥の坊遺跡Ⅰ・Ⅱ区）』高松市教育委員会
大嶋和則編 2007『高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊　奥の坊遺跡群Ⅵ（奥の坊遺跡Ⅴ区）』高松市教育委員会
大嶋和則・中西克也編 2001『都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊　木太中村遺跡』高松市教育委員会
小川　賢・山元敏裕編 2004『都市計画道路福岡三谷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊　宗高坊城遺跡』高松市教育委員会
小川　賢・高上　拓編 2009『国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　太田下・須川遺跡』高松市教育委員会
片桐孝浩編 2006a『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅱ』香川県教育委員会
片桐孝浩編 2006b『県道塩江屋島西線道路局部改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　竹元遺跡』香川県教育委員会
川畑　聰編 2001『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊　凹原遺跡』高松市教育委員会
川畑　聰編 2002『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊　天満・宮西遺跡～集落・水田編～』高松市教育委員会
川畑　聰編 2007『屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　屋島寺』高松市教育委員会
川畑　聰・末光甲正編 2000『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　上西原遺跡　附　汲仏遺跡』高松市教育委員会
川畑　聰・小川　賢 2004『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊　天満・宮西遺跡～旧河道編～　上西原遺跡～第2次調査～』高松市教育委員会
川畑　聰・小川　賢編 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
川畑　聰・山元敏裕編 2007『諏訪神社本殿移築・久米山墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　諏訪神社遺跡　久米山遺跡群-諏訪神社御旅所地区-』高松市教育委員会
北山健一郎・森下友子編 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会
木下晴一・三辻利一編 2002『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊　空港跡地遺跡Ⅴ』香川県教育委員会
蔵本晋司編 2001『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　汲仏遺跡Ⅱ』香川県教育委員会
蔵本晋司・松本和彦編 2003『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊　空港跡地遺跡Ⅵ』香川県教育委員会他
佐藤竜馬・濱野圭司編 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会
四国新聞社編 1988『香川県史　第1巻通史編　原始・古代』香川県
高上　拓編 2010『高松市立林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　林宗高遺跡』高松市教育委員会
西岡達哉・廣瀬常雄編 1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
西岡達哉編 2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊　空港跡地遺跡Ⅶ』香川県教育委員会
西岡達哉編 2007『三木郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　砂入遺跡』香川県教育委員会
西村尋文編 2008『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　鹿伏・中所遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
西村尋文編 2009『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　鹿伏・中所遺跡Ⅱ』香川県教育委員会
西村尋文編 2010『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　鹿伏・中所遺跡Ⅲ』香川県教育委員会
信里芳紀編 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第49冊　中間東井坪遺跡　正箱遺跡　八幡遺跡』香川県教育委員会
信里芳紀・山元素子編 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第53冊　中森遺跡　林・坊城遺跡Ⅱ　東山崎・水田遺跡Ⅱ』香川県教育委員会
乗松真也編 2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊　空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会
波多野　篤編 2010『高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8冊　奥の坊遺跡群Ⅷ（奥の坊遺跡Ⅶ区）』高松市教育委員会
波多野　篤編 2012『営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　空港跡地遺跡（本村地区）』高松市教育委員会
藤井雄三編 1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会
藤井雄三・入江武夫編 1985『南山浦古墳群』高松市教育委員会
廣瀬常雄・森　格也編 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　前田東・中村遺跡』香川県教育委員会
松田重治・二神希代江編 2003『西土居工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書　西土居遺跡群』三木町教育委員会

松本和彦編 2000『都市計画道綿町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　松並・中所遺跡』香川県教育委員会

松本和彦編 2001『国道 193 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　岡清水遺跡』香川県教育委員会他

宮崎哲治編 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　林・坊城遺跡』香川県教育委員会

宮崎哲治編 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 55 冊　前田東・中村遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

宮崎哲治 2006『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 56 冊　前田東・中村遺跡Ⅲ』香川県教育委員会

森格也編 2005『成重遺跡』Ⅱ香川県教育委員会

狭川真一編 2001『旧練兵場遺跡 - 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』（財）元興寺文化財研究所

森下英治・蔵本晋司編 2008『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　本郷遺跡・川原遺跡』香川県教育委員会

山下平重編 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　多肥松林遺跡』香川県教育委員会

山下平重・信里芳紀編 2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

山本英之編 1997『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡　発掘調査概報Ⅱ　第 2 次弘福寺領田図調査事業に伴う調査概要』高松市教育委員会

山本英之編 1998『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡　発掘調査概報Ⅲ　第 2 次弘福寺領田図調査事業に伴う調査概要』高松市教育委員会

山本英之・中西克也編 1992『讃岐国弘福寺領の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

山本英之・山元敏裕編 1993『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　さこ・長池遺跡』高松市教育委員会

山本英之・山元敏裕編 1994『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　さこ・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会

山本英之・山元敏裕編 1995『井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会

山本英之・中西克也編 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会

山元敏裕編 2000『市道林町 47 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　宮西・一角遺跡』高松市教育委員会

山元敏裕編 2003『史跡天然記念物屋島―史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ―』高松市教育委員会

山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ―史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ―』高松市教育委員会

山元敏裕編 2002『高松市川東団地住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　由良南原遺跡』高松市教育委員会

山元素子編 2003『インテリジェントパーク整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（K 地区）』香川県教育委員会

山元素子編 2007『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 11 冊　西浦谷遺跡』香川県教育委員会

山元素子・岡本　利編 1999『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　汲仏遺跡』香川県教育委員会渡邊誠編 2007『日暮・松林遺跡』高松市教育委員会

渡邊誠編 2009『高松市指定史跡　片山池窯跡群』高松市教育委員会

第 15 表　土器一覧表

（）は復元値

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
1	SH01	R006	弥生土器	壺		(12.7)	4.2+	-	
2	SH01		弥生土器	壺		(17.0)	8.9+	-	
3	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	壺		-	3.0+	-	
4	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	壺		-	2.8+	-	
5	SH01	炭化材検出面まで北	弥生土器	口縁部		-	1.6+	-	
6	SH01	畦中	弥生土器	壺		-	1.0+	-	
7	SH01・SX08	畦	弥生土器	壺		-	10.6+	(5.6)	
8	SH01	R007	弥生土器	壺　蓋		5.6	4.7+	-	
9	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	壺		-	5.0+	-	
10	SH01・SX06・08	畦	弥生土器	甕		(15.2)	5.4+	-	
11	SH01・SX08	畦	弥生土器	甕		(14.6)	5.8+	-	
12	SH01・SX08	畦	弥生土器	甕		(17.4)	4.3+	-	
13	SH01	R051床面直上	弥生土器	甕		(17.4)	9.5+		
14	SH01	R004	弥生土器	甕		-	6.8+	-	
15	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	甕		(15.8)	3.6+	-	
16	SH01	038	弥生土器	甕		(18.0)	5.2+	-	
17	SH01	R051	弥生土器	甕		(15.6)	10.4+	-	
18	SH01・SP12		弥生土器	甕		-	0.9+	-	
19	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	甕		-	2.9+	-	
20	SH01	焼け土⑩	弥生土器	甕		-	0.9+	-	
21	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	甕		-	3.4+	-	
22	SH01	炭化物撤去時東	弥生土器	甕		-	2.6+	-	
23	SH01	炭化物撤去時北	弥生土器	甕		-	0.9+	-	
24	SH01	畦中	弥生土器	甕		-	1.1+	-	
25	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	口縁部		-	1.3+	-	
26	SH01	炭化材検出面まで西	弥生土器	口縁部		-	1.1+	-	
27	SH01	R045床面直上	弥生土器	甕		-	0.8+	-	
28	SH01	炭化材検出面まで南	弥生土器	甕		-	1.4+	-	
29	SH01	R006	弥生土器	甕		-	1.4+	-	
30	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	甕		-	18.2+	-	
31	SH01	炭化材検出面まで北	弥生土器	壺		-	1.7+	-	
32	SH01	畦中	弥生土器	甕		-	3.4+	-	
33	SH01	炭化材検出面まで西	弥生土器	甕		-	4.1+	-	
34	SH01	炭化物撤去時北	弥生土器	底部		-	3.1+	-	
35	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	甕		-	5.2+	-	
36	SH01・SP07		弥生土器	底部		-	2.6+	-	
37	SH01	炭化物撤去時北	弥生土器	底部		-	2.8+	-	
38	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	底部		-	3.0+	(4.8)	
39	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	底部		-	3.1+	(6.0)	
40	SH01	R010	弥生土器	底部		-	4.1+	(5.4)	
41	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	底部		-	5.7+	(7.0)	
42	SH01		弥生土器	底部		-	2.5+	(11.0)	
43	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	底部		-	3.6+	(7.4)	
44	SH01	R047床面直上	弥生土器	底部		-	4.6+	(8.4)	
45	SH01	炭化材検出面まで北	弥生土器	底部		-	4.1+	(9.3)	
46	SH01	R005	弥生土器	底部		-	6.3+	11.0	
47	SH01	畦中	弥生土器	高杯		-	1.7+	-	
48	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	高杯		-	2.2+	-	
49	SH01	炭化物撤去時	弥生土器	高杯		-	3.4+	-	
50	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	鉢　杯部		-	2.0+	-	
51	SH01	炭化物撤去時西	弥生土器	脚部		-	3.8+	-	
52	SH01		弥生土器	脚部		-	5.9+	-	
53	SH01	炭化材検出面まで北	弥生土器	脚部		-	5.6+	-	
54	SH01	東側	弥生土器	脚部		-	4.8+	(10.0)	
55	SH01	東側	弥生土器	脚部		-	3.4+	(11.8)	
56	SH01	焼け土⑩	弥生土器	脚部		-	2.9+	-	
57	SH01	炭化材検出面まで北	弥生土器	脚部		-	3.8+	-	
58	SH01	炭化材検出面まで東	弥生土器	脚部			3.8+		
59	SH01	焼け土⑥	弥生土器	脚部		-	2.9+	-	
60	SH01	畦中	弥生土器	脚部		-	1.8+	-	
61	SH01	炭化材検出面まで西	弥生土器	脚部		-	2.0+	(14.5)	
165	SH02	西側一段下げ	弥生土器	底部		-	2.7+	7.6	
166	SH02	西側一段下げ	弥生土器	口縁部		-	2.0+	-	
174	SH03	土器 1	弥生土器	壺		-	24.9+	5.8	
175	SH03	埋土（床直上まで）	弥生土器	体部		-	5.1+	-	
176	SH03	埋土（床直上まで）	弥生土器	甕		(18.8)	6.9+	-	
177	SH03	埋土（床直上まで）	弥生土器	甕		-	5.0+	-	
178	SH03		弥生土器	甕		-	5.3+	-	
179	SH03	東西畦 中層～床面まで	弥生土器	甕		-	3.6+	-	
180	SX10		弥生土器	底部		-	4.0+	(5.4)	
181	SH03	埋土（床直上まで）	弥生土器	底部		-	3.6+	(6.8)	
182	SX10		弥生土器	底部		-	5.3+	8.4	
210	SB01	SP02	弥生土器	壺		(20.2)	8.8+	-	
211	SB03	SP04	弥生土器	脚部		-	2.3+	(10.6)	
212	SB01	SP03	弥生土器	高杯		(40.0)	8.4+	-	
214	SX03		弥生土器	壺		(12.0)	2.0+	-	
215	SX03	R006	弥生土器	壺		(11.6)	4.0+	-	
216	SX03		弥生土器	口縁部		-	1.4+	-	
217	SX03		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
218	SX03	R003	弥生土器	甕		(17.7)	10.1+	-	
219	SX03	R001	弥生土器	甕		(25.0)	9.0+	-	
220	SX03	R002	弥生土器	甕		-	5.0+	-	
221	SX03	R007	弥生土器	甕		-	3.7+	-	
222	SX03		弥生土器	甕		-	6.7+	-	
223	SX03		弥生土器	蛸壺		-	10.7+	(6.0)	
224	SX03		弥生土器	脚部		-	4.0+	-	
225	SX03		弥生土器	脚部		-	3.7+	(12.0)	
228	SX06		弥生土器	壺		(15.4)	6.4+	-	
229	SX06		弥生土器	壺		-	2.1+	-	
230	SX06	R001	弥生土器	壺		-	2.2+	-	
231	SX06		瓦器	椀		-	2.2+	-	
232	SX06	R001	弥生土器	甕		-	5.1+	-	
233	SX06		弥生土器	壺		-	1.3+	-	
234	SX06		弥生土器	底部		-	3.0+	(6.2)	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
235	SX06	R001	弥生土器	底部		-	7.7+	(6.3)	
244	SX07		弥生土器	壺		-	3.0+	-	
245	SX07	R002	弥生土器	壺		(11.0)	5.6+	-	
246	SX07	完掘時	弥生土器	高杯		-	1.9+	-	
247	SX07		弥生土器	甕		-	0.7+	-	
248	SX07		弥生土器	口縁部			1.6+		
249	SX07	完掘時	弥生土器	口縁部		-	2.0+	-	
250	SX07		弥生土器	口縁部		-	1.4+	-	
251	SX07		弥生土器	口縁部		-	3.4+	-	
252	SX07	完掘時	弥生土器	甕		-	0.8+	-	
253	SX07		弥生土器	甕		-	2.7+	-	
254	SX07		弥生土器	甕		-	1.5+	-	
255	SX07	R005	弥生土器	甕		-	7.2+	-	
256	SX07	完掘時	弥生土器	甕		-	7.7+	-	
257	SX07	R010	弥生土器	甕		-	6.7+	-	
258	SX07		弥生土器	甕		-	4.4+	-	
259	SX07	完掘時	弥生土器	底部		-	3.1+	(4.2)	
260	SX07	R006	弥生土器	壺		-	3.6+	(5.0)	
261	SX07		弥生土器	底部		-	2.8+	(6.6)	
262	SX07		弥生土器	底部		-	3.8+	-	
263	SX07	R006	弥生土器	高杯		(30.4)	3.5+	-	
264	SX07	R003	弥生土器	高杯		(28.0)	5.3+	-	
265	SX07	完掘時	弥生土器	高杯		-	3.1+	-	
266	SX07		弥生土器	脚部		-	3.4+	-	
267	SX07	完掘時	弥生土器	脚部		-	4.6+	-	
272	SX08	R009	弥生土器	壺		(10.8)	5.8+	-	
273	SX08	R026	弥生土器	壺		10.4	4.9+	-	
274	SX08	一段下げ	弥生土器	壺		-	4.1+	-	
275	SX08	R019	弥生土器	壺		-	5.4+	-	
276	SX08	R019	弥生土器	壺		-	7.5+	-	
277	SX08	R018	弥生土器	甕		(16.8)	7.1+	-	
278	SX08	R022	弥生土器	甕		(14.8)	8.3+		
279	SX08	一段下げ	弥生土器	壺		-	0.8+	-	
280	SX08	R020	弥生土器	甕		-	7.6+	-	
281	SX08	R012	弥生土器	甕		-	6.5+	-	
282	SX08	R012	弥生土器	甕		-	6.0+	-	
283	SX08	R019	弥生土器	甕		(13.6)	25.9	5.2	
284	SX08	R025	弥生土器	甕		(12.8)	27.9	5.2	
285	SX08	R020	弥生土器	甕		(17.6)	11.1+	-	
286	SX08	R023	弥生土器	甕		(25.6)	12.4+	-	
287	SX08	R020	弥生土器	底部		-	12.3+	6.8	
288	SX08	R021	弥生土器	底部		-	22.3+	9.8	
289	SX08	R013	弥生土器	底部		-	4.6+	5.0	
290	SX08	R021	弥生土器	底部		-	5.2+	5.9	
291	SX08	R008	弥生土器	底部		-	9.2+	(5.2)	
292	SX08	R001	弥生土器	底部		-	8.5+	-	
293	SX08	R012	弥生土器	底部		-	14.4+	4.5	
294	SX08	R011・013	弥生土器	壺		-	7.1+	-	
295	SX08	R013	弥生土器	底部		-	3.6+	(8.4)	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
296	SX08	R005	弥生土器	底部		-	8.1+	8.1	
297	SX08	R023	弥生土器	甕		-	21.4+	(6.0)	
298	SX08	R017	弥生土器	高杯		(18.2)	6.9+8.3+	11.4	
299	SX08	R020	弥生土器	高杯		(26.8)	22.3	14.2	
300	SX08	一段下げ	弥生土器	高杯		-	2.2+	-	
301	SX08	R020完掘時一段下げ	弥生土器	高杯		-	2.6+	-	
302	SX08	R010	弥生土器	底部		13.8	11.4+	-	
314	SX09	SX09	弥生土器	壺		-	32.4+	-	
315	SX09		弥生土器	壺		-	4.3+	-	
316	SX09	畦	弥生土器	壺？		-	1.0+	-	
317	SX09		弥生土器	壺		-	1.5+	-	
318	SX09		弥生土器	壺		-	5.4+	-	
319	SX09		弥生土器	壺		(12.8)	2.8+	-	
320	SX09		弥生土器	壺		-	3.6+	-	
321	SX09	R006	弥生土器	壺		-	9.3+	-	
322	SX09	R003	弥生土器	壺		-	19.6+	(6.0)	
323	SX09	R002	弥生土器	甕		15.5	8.9+	-	
324	SX09	R009	弥生土器	甕		(17.3)	12.8+	-	
325	SX09	R007	弥生土器	甕		14.9	28.0	5.9	
326	SX09	R005	弥生土器	甕		17.0	4.8+	-	
327	SX09	畦	弥生土器	甕		(18.0)	4.5+	-	
328	SX09	R009	弥生土器	甕		(18.2)	6.2+	-	
329	SX09	畦	弥生土器	甕		(14.4)	5.7+	-	
330	SX09	畦	弥生土器	甕		(14.0)	8.9+	-	
331	SX09	R007	弥生土器	甕		19.1	26.5+	-	
332	SX09	R010	弥生土器	甕		20.7	40.05	8.7	
333	SX09	R008	弥生土器	甕		16.4	10.0+	-	
334	SX09	R006	弥生土器	甕		-	19.0+	-	
335	SX09	R009	弥生土器	甕		-	6.1+	-	
336	SX09		弥生土器	甕		-	6.4+	-	
337	SX09・SP01		弥生土器	甕		-	4.5+	-	
338	SX09・SP01		弥生土器	甕		-	1.3+	-	
339	SX09・SP01		弥生土器	甕		-	0.9+	-	
340	SX09		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
341	SX09・SP01		弥生土器	甕		-	1.1+	-	
342	SX09		弥生土器	甕		-	1.1+	-	
343	SX09		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
344	SX09		弥生土器	甕		-	2.4+	-	
345	SX09		弥生土器	底部		-	1.3+	(6.2)	
346	SX09	畦	弥生土器	底部		-	2.7+	5.8	
347	SX09		弥生土器	底部		-	3.0+	(6.0)	
348	SX09		弥生土器	底部		-	3.2+	(7.0)	
349	SX09		弥生土器	底部		-	2.4+	(5.8)	
350	SX09		弥生土器	底部		-	2.1+	(6.6)	
351	SX09		弥生土器	底部		-	2.7+	(7.8)	
352	SX09		弥生土器	底部		-	2.1+	(9.0)	
353	SX09		弥生土器	底部		-	3.2+	(10.2)	
354	SX09・SP01		弥生土器	高杯		(25.6)	4.5+	-	
355	SX09	R001	弥生土器	高杯		(25.6)	4.3+	-	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
356	SX09		弥生土器	高杯		-	1.9+	-	
357	SX09		弥生土器	高杯		-	2.0+	-	
358	SX09	R001	弥生土器	高杯		-	3.0+	-	
359	SX09	畦	弥生土器	高杯		-	1.8+	-	
360	SX09	R004	弥生土器	脚部		-	15.8+	10.3	
365	SX13		弥生土器	壺		-	2.2+	-	
366	SX13	南西区検出時	弥生土器	甕		-	2.5+	-	
367	SX13	R003	弥生土器	壺		-	11.5+	-	
368	SX13	R001	弥生土器	甕		(16.6)	7.0+	-	
369	SX13		弥生土器	甕		-	0.9+	-	
370	SX13	R001	弥生土器	甕		-	8.5+	5.3	
371	SX13	R010	弥生土器	底部		-	4.3+	(8.0)	
372	SX13	R006	弥生土器	甕		-	4.0+	-	
384	SX14	中央土坑	弥生土器	壺		(8.2)	3.9+	-	
385	SX14	畦畔はずし	弥生土器	甕		-	3.2+	-	
386	SX14	中央土坑	弥生土器	壺		-	3.4+	-	
387	SX14	畦畔はずし	弥生土器	壺		-	1.9+	-	
388	SX13・14	検出中	弥生土器	壺		-	6.3+	-	
389	SX14	R009	弥生土器	底部		-	3.1+	6.4	
390	SX14	畦畔はずし	弥生土器	底部		-	6.5+	5.6	
391	SX13・14 SP3		弥生土器	底部		-	4.7+	(6.8)	
392	SX14	R006	弥生土器	底部		-	8.4+	6.3	
393	SX14	R001	弥生土器	壺		-	5.1+	(11.0)	
405	SX13・14	検出中	弥生土器	壺		-	3.7+	-	
406	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	5.3+	-	
407	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	7.5+	-	
408	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	2.0+	-	
409	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	1.0+	-	
410	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	1.0+	-	
411	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	1.4+	-	
412	SX13・14 SP6		弥生土器	甕		-	0.9+	-	
413	SX13・14	検出中	弥生土器	壺		-	4.6+	-	
414	SX13・14	検出中	弥生土器	甕		-	2.9+	(6.2)	
415	SX13・14	検出中	弥生土器	底部		-	5.2+	(5.2)	
416	SX13・14 SP3		弥生土器	底部		-	2.0+	-	
428	SX16		弥生土器	甕		-	5.5+	-	
429	SX16		弥生土器	甕		-	3.1+	-	
430	SX16		弥生土器	甕		-	1.1+	-	
431	SX16	畦出土	弥生土器	甕		-	1.0+	-	
432	SX16		弥生土器	甕		-	3.7+	-	
433	SX16		弥生土器	底部		-	6.6+	4.8	
442	SX17	R002	弥生土器	壺		-	5.8+	-	
443	SX17		弥生土器	壺		-	5.3+	-	
444	SX17		弥生土器	壺		-	3.8+	-	
445	SX17		弥生土器	壺		-	5.7+	-	
446	SX17	R006	弥生土器	甕		-	6.7+	-	
447	SX17	R001	弥生土器	壺		(11.8)	25.4	6.2	
448	SX17	R005	弥生土器	甕		(15.6)	25.5	6.4	
449	SX17	R010	弥生土器	甕		(23.6)	35.0	(6.6)	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
450	SX17	R006	弥生土器	壺		16.9	37.9	9.0	
451	SX17		弥生土器	甕		-	4.1+	-	
452	SX17		弥生土器	甕		-	5.2+	-	
453	SX17		弥生土器	甕		-	3.6+	-	
454	SX17	R006	弥生土器	底部		-	4.0+	-	
455	SX17		弥生土器	底部		-	2.7+	-	
456	SX17	R008	弥生土器	甕		14.0	30.9	8.2	
457	SX17	R014	弥生土器	鉢		(18.6)	16.9	6.6	
458	SX17	R009(R008下層)	弥生土器	壺		-	20.4+	12.1	
459	SX17		弥生土器	底部		-	4.4+	(9.0)	
460	SX17	R006	弥生土器	底部		-	6.8+	9.8	
464	SX18	R019	弥生土器	壺		12.6	23.0	7.8	
465	SX18	R009.021	弥生土器	壺		(13.4)	17.3+	-	
466	SX18	R018	弥生土器	壺		-	17.9+	-	
467	SX18	R018	弥生土器	壺		-	19.5+	-	
468	SX18	R004	弥生土器	壺		(16.3)	5.9+	-	
469	SX18	R010	弥生土器	壺		-	2.7+	-	
470	SX18	R017	弥生土器	壺		-	2.2+	-	
471	SX18	R018	弥生土器	壺		-	7.8+	-	
472	SX18	R018	弥生土器	壺		-	11.7+	-	
473	SX18	R018	弥生土器	底部		-	2.7+	(11.0)	
474	SX18	R004	弥生土器	底部		-	4.5+	-	
475	SX18	R006.007	弥生土器	壺		-	20.1+	8.2	
476	SX18	畦	弥生土器	鉢		16.3	10.7	7.4	
477	SX18	R019	弥生土器	甕		(20.6)	10.0+	-	
478	SX18	R019	弥生土器	甕		(21.8)	15.2+	-	
479	SX18	R020	弥生土器	甕		-	7.6+	-	
480	SX18	畦	弥生土器	甕		-	2.6+	-	
481	SX18	R010	弥生土器	甕		-	1.0+	-	
482	SX18	R018	弥生土器	甕		-	9.7+	-	
483	SX18	R019	弥生土器	甕		(21.3)	15.2+	-	
484	SX18	R019	弥生土器	甕		-	12.5+	-	
485	SX18	R012	弥生土器	甕		-	17.6+	-	
486	SX18	R014	弥生土器	底部		-	4.7+	(7.0)	
487	SX18	R004	弥生土器	底部		-	4.0+	(9.0)	
488	SX18	R001	弥生土器	底部		-	3.7+	(8.0)	
492	SX19	R009	弥生土器	甕		(16.2)	21.4+	5.4	
493	SX19	R007.011	弥生土器	甕		35.1	51.2	10.8	
494	SX19		弥生土器	甕		(17.5)	5.7+	-	
495	SX19		弥生土器	甕		(15.8)	4.1+	-	
496	SX19		弥生土器	甕		(17.0)	3.8+	-	
497	SX19		弥生土器	甕		(15.4)	5.0+	-	
498	SX19	R008	弥生土器	甕		-	8.9+	-	
499	SX19		弥生土器	甕		-	5.1+	-	
500	SX19	R011	弥生土器	甕		-	5.5+	-	
501	SX19		弥生土器	底部		-	5.4+	-	
502	SX19	R011	弥生土器	底部		-	5.0+	5.7	
503	SX19	R010③	弥生土器	口縁部		-	2.9+	-	
504	SX19	R010③	弥生土器	高杯		-	7.0+	10.0	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
509	SX20	R018	弥生土器	壺		(9.6)	11.7+	-	
510	SX20	R014	弥生土器	壺		(11.4)	5.3+	-	
511	SX20	R017	弥生土器	壺		-	17.6+	-	
512	SX20	R017	弥生土器	甕		(18.4)	6.6+	-	
513	SX20	R014	弥生土器	甕		(18.6)	10.5	-	
514	SX20	R011	弥生土器	甕		(22.1)	13.6+	-	
515	SX20	R023	弥生土器	甕		-	6.5+	-	
516	SX20	R005	弥生土器	甕		-	5.1+	-	
517	SX20		弥生土器	口縁部		-	0.7+	-	
518	SX20		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
519	SX20		弥生土器	甕		-	1.2+	-	
520	SX20	R004	弥生土器	甕		-	4.3+	-	
521	SX20	R018	弥生土器	壺		-	23.0+	-	
522	SX20	R026	弥生土器	底部		-	3.3+	(6.4)	
523	SX20	R007	弥生土器	底部		-	6.5+	7.6	
524	SX20	R014	弥生土器	体部		-	7.5+	-	
525	SX20	R002.006.009	弥生土器	高杯		-	8.4+	-	
526	SX20	R013	弥生土器	高杯		-	4.2+	-	
529	SX20	R004	弥生土器	壺		-	3.8+	-	
536	SX21		弥生土器	壺		-	5.2+	-	
537	SX21		弥生土器	壺		-	1.8+	-	
538	SX21		弥生土器	高杯　鉢?		(13.8)	4.6+	-	
539	SX21	R003	弥生土器	甕		(18.6)	4.8+	-	
540	SX21	R002	弥生土器	甕		(15.0)	7.4	-	
541	SX21		弥生土器	甕		-	0.7+	-	
542	SX21	R001	弥生土器	体部		-	8.8+	-	
543	SX21		弥生土器	底部		-	4.3+	(6.2)	
544	SX21	R003	弥生土器	甕		-	34.6+	8.6	
545	SK01		弥生土器	甕		-	7.3+	-	
546	SK05		弥生土器	甕		(30.0)	9.6+	-	
547	SK04	南東側一段下げ	弥生土器	高杯		-	1.3+	-	
548	SK06		弥生土器	高杯		-	1.0+	-	
549	SK16		弥生土器	壺		-	1.9+	-	
550	SK16		弥生土器	底部		-	1.4+	4.5	
551	SK16		弥生土器	底部		-	5.2+	(7.1)	
552	SK24		弥生土器	甕		-	3.8+	-	
553	SK30		弥生土器	甕		-	5.4+	-	
554	SK30		弥生土器	底部		-	4.6+	(7.0)	
555	SK30		弥生土器	底部		-	4.6+	(8.4)	
556	SK31		弥生土器	甕		-	1.9+	-	
557	SK34		弥生土器	脚部		-	3.0+	-	
558	SK39		弥生土器	甕		-	1.1+	-	
559	SK42		弥生土器	甕		-	5.0+	-	
560	SK42		弥生土器	甕		(22.9)	5.0+	-	
561	SK42		弥生土器	体部		-	4.3+	-	
562	SK43		弥生土器	底部		-	4.9+	(10.7)	
568	SK21	R008	弥生土器	高杯		-	5.1+	-	
569	SK21	R004	弥生土器	壺		(10.8)	4.0+	-	
570	SK21	R005	弥生土器	壺		-	12.0+	-	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
571	SK21	R004	弥生土器	甕		(16.4)	7.7+	-	
572	SK21	畦畔の南部	弥生土器	甕		(16.6)	6.7+	-	
573	SK21		弥生土器	甕		-	1.7+	-	
574	SK21		弥生土器	甕		-	2.0+	-	
575	SK21		弥生土器	甕		-	1.8+	-	
576	SK21	畦畔の南部	弥生土器	甕		-	1.7+	-	
577	SK21		弥生土器	口縁部		-	1.2+	-	
578	SK21		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
579	SK21		弥生土器	甕		-	1.0+	-	
580	SK21		弥生土器	甕		-	5.3+	-	
581	SK21		弥生土器	底部		-	2.6+	6.0	
582	SK21	R013	弥生土器	鉢		(11.3)	14.5	(7.6)	
583	SK21	R004	弥生土器	高杯		(20.0)	7.1+	-	
584	SK21	R002	弥生土器	高杯		(21.2)	19.9	(11.6)	
586	SK26	R001	弥生土器	壺		10.2	14.2+	-	
587	SK26	R002	弥生土器	壺		(8.6)	12.9+	-	
588	SK26		弥生土器	壺		-	7.3+	-	
589	SK26	R006	弥生土器	壺		8.3	14.6+	-	
590	SK26	R004	弥生土器	甕		(19.6)	4.8+	-	
591	SK26	R009	弥生土器	甕		(20.4)	13.8+	-	
592	SK26	R001	弥生土器	甕		21.8	7.0+	-	
593	SK26	R009	弥生土器	甕		(22.0)	6.3+	-	
594	SK26	R010	弥生土器	甕		(22.8)	6.4+	-	
595	SK26		弥生土器	甕		(20.4)	16.9+	-	
596	SK26		弥生土器	甕		-	3.5+	-	
597	SK26		弥生土器	甕		(18.0)	1.0+	-	
598	SK26		弥生土器	甕		(17.6)	5.2+	-	
599	SK26	R007	弥生土器	甕		(16.8)	6.3+	-	
600	SK26		弥生土器	甕		-	2.0+	-	
601	SK26		弥生土器	甕		-	1.4+	-	
602	SK26	R004	弥生土器	底部		-	2.4+	(5.2)	
603	SK26	R008	弥生土器	底部		-	6.8+	(7.6)	
604	SK26	R008	弥生土器	甕		-	12.1+	5.6	
605	SK26	R004	弥生土器	甕？　体部		-	29.3+	-	
606	SK26	R005	弥生土器	壺		-	16.4+	7.4	
608	SK26	R005	弥生土器	壺		-	4.3+	-	
614	SK27	R024	弥生土器	壺		(9.8)	5.4+	-	
615	SK27	R044	弥生土器	甕		-	6.6+	-	
616	SK27	R023	弥生土器	甕		(15.2)	13.2+	-	
617	SK27	R046.27	弥生土器	甕		(19.8)	4.6+	-	
618	SK27	R021上層	弥生土器	甕		(17.2)	5.8+	-	
619	SK27	R020	弥生土器	甕		(20.4)	5.3+	-	
620	SK27	R041	弥生土器	甕		(18.4)	13.2+	-	
621	SK27	R044	弥生土器	甕		-	1.2+	-	
622	SK27	上層	弥生土器	甕		-	1.1+	-	
623	SK27	R022	弥生土器	壺		-	16.9+	-	
624	SK27	R016	弥生土器	底部		-	3.1+	7.0	
625	SK27	R048	弥生土器	底部		-	2.6+	5.9	
626	SK27	R043	弥生土器	底部		-	3.7+	(6.0)	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
627	SK27	R046	弥生土器	底部		-	3.3+	(9.2)	
628	SK27	R005上層.006	弥生土器	底部		-	7.8+	6.2	
629	SK27	上層	弥生土器	底部		-	2.5+	-	
630	SK27	R004.017	弥生土器	底部		-	8.3+	(9.0)	
631	SK27	R46下層.46.13	弥生土器	底部		-	11.1+	(13.0)	
632	SK27	R011.019	弥生土器	壺		-	11.6+	7.4	
633	SK27	R045	弥生土器	口縁部		-	3.5+	-	
634	SK27	R051.002.003	弥生土器	高杯		23.2	10.0+	-	
639	SP03		弥生土器	口縁部		-	1.4+	-	
640	SP24		弥生土器	底部		-	4.1+	-	
641	SP30		弥生土器	壺		-	20.7+	-	
642	SP31		弥生土器	壺		-	13.0+	-	
643	SP31	R001	弥生土器	甕		-	5.1+	-	
644	SP31		弥生土器	底部		-	2.1+	(5.3)	
645	SP31	R001	弥生土器	底部		-	1.8+	-	
646	SP31		弥生土器	底部		-	5.1+	(6.4)	
647	SP31	R002	弥生土器	底部		-	5.9+	7.2	
648	SP31		弥生土器	底部		-	9.4+	8.6	
649	SP31～33	周辺一段下げ	弥生土器	口縁部		-	1.0+	-	
650	SP31～33	周辺一段下げ	弥生土器	甕		-	0.9+	-	
651	SP31～33	周辺一段下げ	弥生土器	壺？口縁部		-	2.0+	-	
652	SP31～33	周辺一段下げ	弥生土器	底部		-	4.1+	-	
653	SP37		弥生土器	甕？頸部		-	1.7+	-	
654	SP41		弥生土器	甕？体部		-	3.3+	-	
655	SP42		弥生土器	甕？口縁部		-	1.0+	-	
664	SD01		弥生土器	頸部		-	5.2+	-	
665	SD01		弥生土器	底部		-	3.9+	6.6	
666	SD03		弥生土器	体部		-	3.4+	-	
667	SD07		弥生土器	口縁部		-	0.7+	-	
668	SD07		弥生土器	底部		-	1.2+	-	
669	SD07		弥生土器	底部		-	1.7+	(3.5)	
670	SD07		弥生土器	底部		-	2.4+	(5.6)	
671	SD07		弥生土器	口縁部		-	1.0+	-	
672	SD07		弥生土器	甕		-	3.9+	-	
676	SD08	付近一段下げ	弥生土器	口縁部		-	1.2+	-	
677	SD08		弥生土器	体部		-	2.5+	-	
678	SD08.SK30	一段下げ	弥生土器	脚部		-	3.5+	-	
679	SD08	付近一段下げ	弥生土器	底部		-	2.3+	-	
680	SD08		弥生土器	高杯		(36.4)	5.3+	-	
681	SD09		弥生土器	口縁部		-	0.8+	-	
682	SD09		弥生土器	体部		-	2.6+	-	
683	SD10		弥生土器	口縁部		-	2.6+	-	
684	SD10		弥生土器	甕		-	4.0+	(7.0)	
685	SD11		弥生土器	甕		-	5.9+	-	
686	SD11		弥生土器	底部		-	4.9+	-	
690	SD12		弥生土器	底部		-	8.8+	(6.4)	
712	SR01	①	弥生土器	壺		(15.6)	1.1+	-	
713	SR01	黒色層	弥生土器	壺		-	1.1+	-	
714	SR01	検出時上層	弥生土器	壺		(14.8)	4.2+	-	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
715	SR01	①	弥生土器	壺		(27.0)	11.8+	-	
716	SR01	検出時上層	弥生土器	壺		-	5.7+	-	
717	SR01	①	弥生土器	頸部		-	2.2+	-	
718	SR01	検出時上層	弥生土器	壺		-	2.4+	-	
719	SR01	下層	弥生土器	甕		(17.0)	25.7	5.8	
720	SR01	①	弥生土器	甕		(18.4)	6.9+	-	
721	SR01	①	弥生土器	壺		(31.2)	5.6+	-	
722	SR01	東岸部	弥生土器	壺		-	2.6+	-	
723	SR01	①	弥生土器	甕？		-	3.5+	-	
724	SR01	①	弥生土器	甕		(26.2)	7.2+	-	
725	SR01	黒色層	弥生土器	甕		-	6.0+	-	
726	SR01	検出時上層	弥生土器	甕		(20.0)	7.7+	-	
727	SR01	検出時上層	弥生土器	甕		-	10.2+	-	
728	SR01	下層	弥生土器	甕		-	3.4+	-	
729	SR01	下層	弥生土器	甕		-	4.2+	-	
730	SR01	検出時上層	弥生土器	甕		-	5.8+	-	
731	SR01	検出時上層	弥生土器	甕		-	1.7+	-	
732	SR01	検出時上層	弥生土器	甕		-	1.7+	-	
733	SR01	検出時上層	弥生土器	高杯		-	4.0+	-	
734	SR01	東岸部	弥生土器	甕		-	4.2+	-	
735	SR01	①	弥生土器	体部		-	5.3+	-	
736	SR01	東岸部	弥生土器	甕		-	6.9+	-	
737	SR01	①	弥生土器	甕		-	4.6+	-	
738	SR01	東岸部	弥生土器	壺		-	13.0+	-	
739	SR01	東岸部	弥生土器	甕		-	5.4+	-	
740	SP01	①	弥生土器	体部		-	5.0+	-	
741	SR01	①	弥生土器	体部		-	6.7+	-	
742	SR01	①	弥生土器	体部		-	5.1+	-	
743	SR01	①	弥生土器	体部		-	6.1+	-	
744	SR01	①	弥生土器	体部		-	5.4+	-	
745	SR01	東岸部	弥生土器	甕		-	14.7+	-	
746	SR01	①	弥生土器	底部		-	4.8+	7.4	
747	SR01	①	弥生土器	底部		-	4.3+	(6.6)	
748	SR01	①西岸部精査中	弥生土器	底部		-	3.0+	(5.2)	
749	SR01	①	弥生土器	底部		-	3.1+	(5.8)	
750	SR01	①	弥生土器	底部		-	9.8+	(5.8)	
751	SR01	①	弥生土器	底部		-	3.7+	(6.0)	
752	SR01	検出時上層	弥生土器	底部		-	3.6+	(7.8)	
753	SR01	①	弥生土器	底部		-	3.0+	(8.8)	
754	SR01	検出時上層	弥生土器	底部		-	4.0+	6.7	
755	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	6.7+	5.6	
756	SR01	①	弥生土器	底部		-	4.5+	8.4	
757	SR01	①	弥生土器	甕？		-	7.1+	(5.8)	
758	SR01	検出時上層	弥生土器	底部		-	5.6+	(6.6)	
759	SR01	①	弥生土器	底部		-	4.0+	(8.0)	
760	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	5.7+	(7.2)	
761	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	5.7+	(7.4)	
762	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	5.9+	(8.6)	
763	SR01	検出時上層	弥生土器	底部		-	3.9+	(10.1)	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
764	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	6.0+	-	
765	SR01	東岸部	弥生土器	底部		-	10.6+	-	
766	SR01	①	弥生土器	体部		-	10.3+	-	
767	SR01	②	弥生土器	高杯		-	6.3+	-	
768	SR01	検出時上層	弥生土器	高杯		(22.5)	3.2+	-	
769	SR01	検出時上層	弥生土器	底部		-	3.8+	(15.0)	
771	SR01	上面精査中	須恵器	杯		-	1.2+	-	
772	SR01	上面精査中	須恵器	杯		-	1.6+	-	
773	SR01	上面精査中	須恵器	体部		-	8.8+	-	
784	SX01		弥生土器	器台		(24.0)	2.3+	-	
785	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	壺		-	1.7+	-	
786	SX01		弥生土器	壺		-	2.8+	-	
787	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	壺		-	3.6+	-	
788	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯		-	1.8+	-	
789	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	壺		-	11.8+	-	
790	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	甕		-	5.9+	-	
791	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	甕		-	1.6+	-	
792	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	甕		-	3.8+	-	
793	SX01		弥生土器	口縁部		-	1.0+	-	
794	SX01		弥生土器	甕？		-	1.1+	-	
795	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	甕		-	1.2+	-	
796	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	甕		-	0.6+	-	
797	SX01		弥生土器	甕		-	4.2+	-	
798	SX01		弥生土器	壺？		-	1.4+	-	
799	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	2.6+	5.4	
800	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	3.2+	6.0	
801	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	2.9+	(5.8)	
802	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	1.6+	(6.2)	
803	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	3.2+	-	
804	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	4.2+	-	
805	SX01	SR01東岸部	弥生土器	底部		-	5.6+	(5.2)	
806	SX01	SR01-3中洲	弥生土器	底部		-	7.6+	8.6	
807	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	底部		-	9.7+	(6.8)	
808	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯		-	4.7+	-	
809	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯		(13.8)	10.2	(10.4)	
810	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯		-	4.1+	-	
811	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯		-	4.3+	-	
812	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	高杯？		-	2.4+	(13.6)	
813	SX01	SR01-2東岸部	弥生土器	鉢		(6.4)	3.6	(2.8)	
814	SX01		弥生土器	鉢		29.8	14.5	8.2	
818	SX02	W005下層	弥生土器	甕		(24.2)	5.3+	-	
819	SX02	直下周辺	弥生土器	甕		-	0.9+	-	
820	SX02	集石中	弥生土器	甕		-	2.0+	-	
821	SX02	集石中	弥生土器	甕		-	3.6+	-	
822	SX02	直下.周辺	弥生土器	甕		-	3.2+	-	
823	SX02		弥生土器	壺		-	5.0+	-	
824	SX02	集石中	弥生土器	底部		-	3.8+	(5.8)	
825	SX02	集石中	弥生土器	底部		-	3.9+	(9.8)	
826	SX02	R013	弥生土器	底部		-	6.2+	-	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(cm)			備考
						口径	器高	底径	
827	SX02		弥生土器	底部		-	5.5+	-	
828	SX02	集石中	弥生土器	底部		-	5.0+	-	
829	SX02		弥生土器	脚部		-	2.6+	(13.6)	
835	SR02		弥生土器	壺		(10.9)	16.4+	-	
836	SR02		弥生土器	壺		10.4	21.8+	-	
837	SR02		弥生土器	壺		-	20.4+	-	
838	SR02	NO1.2.3	弥生土器	壺		(15.2)	22.0+	-	
839	SR02		弥生土器	体部		-	5.4+	-	
840	SR02		弥生土器	壺		-	3.4+	-	
841	SR02		弥生土器	壺		-	11.2+	-	
842	SR02		弥生土器	甕		(18.9)	8.0+	-	
843	SR02		弥生土器	甕		(24.8)	7.8+	-	
844	SR02		弥生土器	甕		(10.2)	5.5+	-	
845	SR02		弥生土器	甕		(10.8)	7.8+	-	
846	SR02		弥生土器	甕		-	3.5+	-	
847	SR02		弥生土器	体部		-	5.7+	-	
848	SR02		弥生土器	体部		-	7.0+	-	
849	SR02		弥生土器	底部		-	3.5+	(5.7)	
850	SR02		弥生土器	底部		-	5.2+	(5.4)	
851	SR02		弥生土器	壺		-	7.1+	(7.0)	
852	SR02		弥生土器	底部		-	3.9+	(10.4)	
853	SR02	検出時上層	弥生土器	底部		-	3.8+	(8.6)	
854	SR02		弥生土器	底部		-	4.7+	(6.6)	
855	SR02		弥生土器	高杯		-	5.1+	-	
856	SR02		弥生土器	高杯		(14.2)	7.9+	-	
857	SR02		弥生土器	口縁部		-	3.4+	-	
858	SR02		弥生土器	体部		-	6.4+	-	
861	SX04		弥生土器	深鉢		(39.2)	35.7+	-	
862	SX05.SK02		弥生土器	壺		-	2.7+	-	
863	SX05.SK02		弥生土器	壺		-	3.1+	-	
864	SX05.SK09		弥生土器	甕		-	1.8+	-	
865	SX05.SK11		弥生土器	甕		-	1.3+	-	
866	SX05.SK19		弥生土器	甕		-	2.0+	-	
867	SX05.SK02		弥生土器	蓋		1.8	3.8	11.8	
868	SX05.SK02		弥生土器	脚部		-	2.3+	(13.0)	
869	SX05.SK19		弥生土器	壺		-	2.7+	-	
870	SX05.SP06		弥生土器	壺		-	3.3+	-	
871	SX05.SK03		弥生土器	甕		-	6.1+	-	
872	SX05.SP06		弥生土器	底部		-	6.0+	-	
877		遺構検出時西壁土層	弥生土器	小形壺		-	8.7+	3.0	
878		遺構検出時	弥生土器	壺		-	4.0+	-	
879		遺構検出時	弥生土器	壺		(10.1)	3.8+	-	
880		遺構検出時	弥生土器	壺		-	1.7+	-	
881		遺構検出時	弥生土器	壺		-	3.4+	-	
882		遺構検出時	弥生土器	壺		-	2.2+	-	
883		遺構検出時	弥生土器	甕		-	2.6+	-	
884		遺構検出時	弥生土器	甕		-	1.7+	-	
885		遺構検出時	弥生土器	口縁部		-	1.2+	-	
886		遺構検出時	弥生土器	甕		-	1.3+	-	

No	出土遺構	層位等	種類	器種	型式	法量(㎝)			備考
						口径	器高	底径	
887		遺構検出時	弥生土器	壺		-	2.8+	-	
888		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	2.6+	-	
889		遺構検出時	弥生土器	甕		-	6.4+	-	
890		遺構検出時	弥生土器	甕		-	2.3+	-	
891		遺構検出時	弥生土器	甕		-	5.9+	-	
892		遺構検出時	弥生土器	甕		-	4.1+	-	
893		遺構検出時	弥生土器	甕		(15.4)	2.6+	-	
894		遺構検出時	弥生土器	甕		(13.2)	3.6+	-	
895		遺構検出時	弥生土器	甕		(16.0)	6.0+	-	
896		遺構検出時	弥生土器	甕		(20.0)	3.05+	-	
897		遺構検出時	弥生土器	底部		-	5.8+	(5.4)	
898		遺構検出時	弥生土器	底部		-	3.7+	8.7	
899		遺構検出時	弥生土器	底部		-	4.3+	-	
900		遺構検出時	弥生土器	底部		-	2.4+	-	
901		中央部一段下げ	弥生土器	底部		-	1.5+	(6.0)	
902		遺構検出時	弥生土器	高杯		(33.6)	6.3+	-	
903		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	4.0+	-	
904		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	3.1+	-	
905		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	2.4+	-	
906		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	5.0+	-	
907		遺構検出時	弥生土器	高杯		-	3.3+	-	
908		遺構検出時	弥生土器	高杯　脚部		-	5.0+	-	
909		遺構検出時	弥生土器	蓋		3.9	4.6+	-	
910		遺構検出時	弥生土器	脚部		-	3.4+	(9.0)	
911		遺構検出時	弥生土器	脚部		-	4.2+	-	
913		遺構検出時	須恵器	蓋		-	2.7+	-	
914		遺構検出時	須恵器	杯　口縁部		-	1.4+	-	
915		遺構検出時	須恵器	高杯底部		-	2.1+	-	
916		遺構検出時	須恵器	杯		(10.2)	3.0	(6.2)	
917		遺構検出時	須恵器	壺？		-	3.8+	-	
918		遺構検出時	須恵器	口縁部		-	0.8+	-	
919		遺構検出時	黒色土器	椀		-	2.0+	-	
920		遺構検出時	須恵器	口縁部		-	3.6+	-	
921		遺構検出時	須恵器	杯　底部		-	1.2+	(10.0)	
922		遺構検出時	須恵器	杯		-	1.8+	-	
923		遺構検出時	須恵器	脚部		-	2.1+	(9.6)	
924		遺構検出時	須恵器	口縁部		-	2.4+	-	
925		遺構検出時	須恵器	鉢		-	3.4+	-	
926		遺構検出時	白磁	皿		(10.8)	2.3	(5.6)	
927		遺構検出時	染付	碗		-	1.7+	-	

第 16 表　土製品一覧表

No	出土遺構	層位等	種　類	器　種	法量(cm)		
					長さ	幅	厚み
62	SH01		土製品	紡錘車	2.4+	3.9	0.4
183	SH03	埋土（床直上まで）	土製品	紡錘車	4.8	4.8	0.5
184	SH03	埋土（床直上まで）	土製品	紡錘車	2.9	2.9	0.5
185	SH03	埋土（床直上まで）	土製品	紡錘車	2.0+	1.8+	0.4
186	SH03	埋土（床直上まで）	土製品	紡錘車	2.2+	3.2+	0.4
187	SX10		土製品	紡錘車の未製品？	4.2	4.2	0.4
188	SX10		土製品	紡錘車	5.2+	5.6	1.0
361	SX09-SP01		土製品		3.0+	1.6+	1.1+
417	SX13・14	検出中	土製品	紡錘車	3.7	3.6	0.4
418	SX13・14		土製品	紡錘車	4.1+	4.1	0.4
434	SX16		土製品	紡錘車	4.0	4.2	0.45
505	SX19		土製品	粘土塊	8.9	6.6	3.2
527	SX20	R035	土製品	紡錘車	4.9	4.9	0.5
528	SX20		土製品	土器破片	4.0+	5.1+	0.4
530	SX20		土製品	土器破片	2.8+	4.9+	0.4
607	SK26		土製品	紡錘車	3.0+	4.7	0.4
673	SD03		土製品	不明	3.8	2.9	1.3
674	SD03		土製品	不明	4.2	2.2	1.3
675	SD03		土製品	不明	3.4	2.1	0.4
687	SD11		土製品	紡錘車	4.1	4.5	0.5
688	SD08･SK30	一段下げ	土製品	紡錘車	4.6	4.5	0.5
689	SD11		土製品	紡錘車 未製品	2.2+	2.6+	0.4
770	SR01	①	土製品	底部　円盤充填	4.3+	6.8+	1.5
774	SR01	下層	土製品	粘土塊	15.6	13.4	7.3
815	SX01･SR01	中洲	土製品	高杯　杯部	6.4	7.0	0.7
912		遺構検出時	土製品	不明	3.2+	2.3+	2.2+

第 17 表　木製品一覧表

No	出土遺構	層位等	種類	機種	法量(cm)		
					長軸	短軸	厚
161	SH01	SP01	木製品	柱材	45.4	11.4	8.5
162	SH01	SP02	木製品	柱材	45.6	18.7	12.3
163	SH01	SP03	木製品	柱材	18.0	16.8	14.1
164	SH01	SP06	木製品	柱材	17.7	10.0	9.8
781	SR01		木製品	建築部材？	114.6	12.7	9.8
782	SR01		木製品	建築部材？	71.6	12.2	8.9
783	SR01		木製品	棒材	48.5	4.2	3.1
816	SX01		木製品	棒材	136.2	2.8-5.3	2.0-2.5
817	SX01		木製品	建築部材？	73.7	8.3	3.5
834	SX02		木製品	棒材	15.7	3.05	3.2

第 18 表　石製品一覧表

No	機　　種	遺構名	出土地点	取り上げ番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　　材	備　　考
63	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.7	1.9	0.45	1.4	サヌカイト	凹基式
64	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.5	1.5	0.45	1.3	サヌカイト	平基式
65	石鏃	SH01	焼け土		2.75	1.55	0.36	1.6	サヌカイト	凹基式
66	石鏃	SH01	北区・炭化物検出面まで		1.5	1.25	0.4	0.8	サヌカイト	平基式
67	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		3.1	1.6	0.3	1.8	サヌカイト	平基式
68	石鏃	SH01			2.9	1.7	0.4	1.5	サヌカイト	平基式
69	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.4	1.65	0.4	1.4	サヌカイト	平基式
70	石鏃	SH01	畦中		1.55	1	0.2	0.4	サヌカイト	平基式
71	石鏃	SH01	床面直上		4.6	2.4	0.5	4.1	サヌカイト	平基式
72	石鏃	SH01			4.8	2.5	0.55	6.2	サヌカイト	平基式
73	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		3.4	2.3	0.5	3.1	サヌカイト	平基式（五角形）
74	石鏃	SH01	南区・炭化材検出面まで		3.05	1.2	0.45	1.3	サヌカイト	凸基Ⅰ式
75	石鏃	SH01	北区・炭化物撤去時		4.1	1.8	0.4	2	サヌカイト	凹基式
76	石鏃	SH01	上層・炭化材検出面まで		4.5	1.5	0.4	2.9	サヌカイト	凸基Ⅰ式
77	石鏃	SH01	東区・炭化物撤去時		2	1.1	0.5	1.1	サヌカイト	凸基Ⅰ式
78	石鏃	SH01	西区・炭化物撤去時		2.9	1.65	0.4	1.8	サヌカイト	凸基Ⅱ式
79	石鏃	SH01	SP12		2.4	1.4	0.4	1.4	サヌカイト	凸基Ⅱ式
80	石鏃	SH01	畦中		2.1	1.05	0.5	0.9	サヌカイト	凸基Ⅱ式
81	石鏃	SH01	北区・炭化物撤去時		1.8	1.5	0.55	1.6	サヌカイト	有茎式
82	石鏃	SH01	西区・炭化材検出面まで		2.25	1.6	0.35	1.2	サヌカイト	
83	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		3	2.2	0.55	3.3	サヌカイト	
84	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		2.4	1.05	0.2	1.3	サヌカイト	
85	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物検出面まで		2.25	1.7	0.35	1.5	サヌカイト	
86	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		3.1	1.9	0.45	2	サヌカイト	
87	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.6	1.75	0.35	2.1	サヌカイト	
88	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.85	1.4	0.4	1.5	サヌカイト	
89	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		3	1.7	0.4	1.7	サヌカイト	
90	石鏃未製品	SH01	焼け土		2.7	2	0.65	3.2	サヌカイト	
91	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物撤去時		2.1	1.8	0.3	0.9	サヌカイト	石鏃の可能性あり
92	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物検出面まで		2.3	2.4	0.45	3	サヌカイト	
93	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		2.65	1.9	0.6	2.8	サヌカイト	
94	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		2.4	1.05	0.35	0.9	サヌカイト	
95	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		3	1.5	0.5	1.3	サヌカイト	
96	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物撤去時		2.95	1.45	0.55	2.3	サヌカイト	
97	石鏃未製品	SH01	東区・炭化物撤去時		4.8	2.9	0.7	7.3	サヌカイト	
98	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		3.6	1.4	0.7	2	サヌカイト	
99	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		4.2	2.75	0.5	6.1	サヌカイト	
100	石鏃未製品	SH01	上層・炭化材検出面まで		4.8	2.65	0.7	8.3	サヌカイト	
101	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物撤去時		3.75	2.3	0.7	5.3	サヌカイト	
102	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物撤去時		2.05	2.35	0.6	4.2	サヌカイト	
103	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物検出面まで		4.55	3.85	1.05	19.6	サヌカイト	
104	石鏃未製品	SH01	北区・炭化物撤去時		2.1	2.3	0.4	2.3	サヌカイト	
105	打製石剣	SH01	西区・炭化材検出面まで		3.1	3.25	0.8	6.9	サヌカイト	107と同一固体か
106	打製石剣	SH01	西区・炭化材検出面まで		5.6	3	0.9	10.9	サヌカイト	108と同一固体か
107	打製石剣	SH01	東区・炭化物撤去時		3.5	2.9	1.15	16.2	サヌカイト	105と同一固体か
108	打製石剣	SH01	西区・炭化材検出面まで		4.7	3.4	1.5	24.1	サヌカイト	106と同一固体か
109	打製石剣	SH01	東区・炭化物検出面まで		3.9	3.3	0.95	14.5	サヌカイト	
110	石錐	SH01	上層・炭化材検出面まで		4.15	2.5	0.45	2.8	サヌカイト	
111	石錐	SH01	焼け土		3.6	2.1	0.6	2.2	サヌカイト	
112	石匙	SH01	上層・炭化材検出面まで		5.2	4.2	0.8	18.1	サヌカイト	
113	石小刀	SH01	焼け土		4.6	2.5	0.8	9.9	サヌカイト	
114	打製石斧	SH01		R025	9.8	3.6	1.4	65.8	サヌカイト	
115	打製石包丁	SH01	畦中		9.45	4.55	12.5	48.1	サヌカイト	
116	打製石包丁	SH01		R012	5.55	3.9	0.9	21.7	サヌカイト	
117	打製石包丁	SH01			9.05	5.1	1.05	41.3	サヌカイト	
118	打製石包丁未製品	SH01	畦中		6.95	5.7	1.2	47.5	サヌカイト	
119	スクレイパー	SH01		S019	11.45	8.6	1	164.7	サヌカイト	
120	スクレイパー	SH01	畦中		10.2	8.15	1.75	97	サヌカイト	
121	スクレイパー	SH01	畦中		8.5	6.2	1.45	54.9	サヌカイト	
122	スクレイパー	SH01	床面上	R48	10.75	7.25	2.05	99.1	サヌカイト	
123	スクレイパー	SH01		R013	5.5	5.5	0.95	35.8	サヌカイト	
124	MF	SH01	畦中		8.2	6.55	1.35	64.4	サヌカイト	
125	スクレイパー	SH01	西区・炭化材検出面まで		4.2	5.8	1.3	20.1	サヌカイト	折損著しい
126	スクレイパー	SH01	東区・炭化物撤去時		4.5	3.4	0.75	12	サヌカイト	
127	スクレイパー	SH01	上層・炭化材検出面まで		6	3.4	0.5	14	サヌカイト	
128	スクレイパー	SH01	東区・炭化物撤去時		5	3.7	1	16.2	サヌカイト	
129	スクレイパー	SH01	上層・炭化材検出面まで		5.5	2.6	0.7	10.1	サヌカイト	
130	スクレイパー	SH01	上層・炭化材検出面まで		5.1	2.7	0.9	9.5	サヌカイト	
131	スクレイパー	SH01	上層・炭化材検出面まで		5.5	2.5	1	8.5	サヌカイト	
132	RF	SH01	畦中		4.65	5.8	1.35	29.2	サヌカイト	
133	スクレイパー	SH01	焼け土		5.05	4.6	1.45	37.9	サヌカイト	
134	楔形石器石核	SH01	壁		9.4	6.75	2.45	162.1	サヌカイト	
135	楔形石器	SH01		R009	6.6	5.25	1.5	49.8	サヌカイト	
136	楔形石器	SH01	西区・炭化物撤去時		8	5.25	4.15	146	サヌカイト	
137	RF	SH01	北区・炭化物撤去時		4	3.65	1	16.1	サヌカイト	
138	楔形石器	SH01	西区・炭化材検出面まで		4.15	4.9	1.55	35.7	サヌカイト	
139	楔形石器	SH01		R011	5.2	3.7	1.4	31.4	サヌカイト	
140	楔形石器	SH01	北区・炭化物撤去時		2.4	2.95	1.2	12	サヌカイト	
141	楔形石器	SH01	西区・炭化物撤去時		3	2.7	2.8	17.8	サヌカイト	

No	機　種	遺構名	出土地点	取り上げ番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
142	楔形石器石核	SH01		R001	12.8	9.68	4.35	557.7	サヌカイト	
143	楔形石器石核	SH01	床面上	R50	6.5	8.5	2.7	134.7	サヌカイト	両極技法使用
144	剥片	SH01		R012	12.75	5.55	0.8	56.7	サヌカイト	
145	MF	SH01		R012	5.55	6	1.45	36.8	サヌカイト	
146	MF	SH01	畦		5.45	4.1	0.6	9	サヌカイト	
147	MF	SH01	焼け土		4.55	4.1	0.7	15	サヌカイト	
148	RF	SH01	北区・炭化物検出面まで		3	3.1	0.7	7.3	サヌカイト	
149	MF	SH01	焼け土		4.7	2.55	0.6	6.4	サヌカイト	
150	剥片	SH01	上層・炭化材検出面まで		3.2	1.5	0.6	2	サヌカイト	
151	剥片	SH01	上層・炭化材検出面まで		3.4	2.2	0.45	2.3	サヌカイト	
152	剥片	SH01			1.7	2.35	0.4	1.4	サヌカイト	
153	楔形石器	SH01	SP12		2.4	2.9	0.65	6.5	サヌカイト	
154	石皿	SH01		S026	17.8	23.7	9.1	4900	砂岩	
155	敲き石	SH01	畦中		11.3	5.8	4.1	359.2	砂岩	
156	素材	SH01		S023	7.85	7.15	6.1	566.6	斑レイ岩	
157	素材	SH01	O51	R015	6	5	4.5	242.8	斑レイ岩	
158	素材	SH01		S042	9.7	5.8	4.9	345.4	流紋岩	
159	敲き石	SH01		S020	7.9	6.6	3.4	208.9	砂岩	
160	敲き石	SH01		S024	13.15	6.4	5.55	598.8	砂岩	
167	石鏃	SH02	P-2		1.4	1.1	0.2	0.4	サヌカイト	
168	石鏃	SH02	SK08		2.05	2.4	0.4	2.2	サヌカイト	凹基式
169	石鏃	SH02	D-1		2.9	1.6	0.25	1.2	サヌカイト	凹基式
170	石錐	SH02	SK08		3.35	0.9	0.5	1.3	サヌカイト	
171	スクレイパー	SH02	SK08		3.1	3.6	0.9	12.1	サヌカイト	
172	楔形石器	SH02	SK08		3	3	0.65	6.1	サヌカイト	
173	楔形石器	SH02	SK08		2.55	3.8	0.95	12.3	サヌカイト	
189	石鏃	SH03	埋土（床面直上まで）		1.5	1.2	0.35	0.5	サヌカイト	凹基式
190	石鏃	SH03	埋土（床面直上まで）		1.9	1.2	0.25	0.6	サヌカイト	凹基式
191	石鏃	SH03	SP12		4.1	2.15	0.6	3.4	サヌカイト	凹基式
192	石鏃	SH03	埋土（床面直上まで）		1.7	0.8	0.25	0.4	サヌカイト	凸基Ⅰ式
193	石鏃	SH03	埋土（床面直上まで）		2.2	1.25	0.25	0.6	サヌカイト	凸基Ⅰ式
194	石鏃	SH03	埋土（床面直上まで）		3.1	1.25	0.45	1.6	サヌカイト	凸基Ⅱ式
195	石錐	SH03	埋土（床面直上まで）		3.25	0.8	0.5	1.3	サヌカイト	
196	石錐未製品	SH03	埋土（床面直上まで）		4	2.95	0.5	6.3	サヌカイト	
197	打製石包丁	SH03	埋土（床面直上まで）		8.3	4.1	0.65	27.8	サヌカイト	
198	石小刀	SH03	東西畦 中層（床面まで）		3.3	2.3	0.55	5.4	サヌカイト	
199	スクレイパー	SH03	埋土（床面直上まで）		5.9	8.5	1.2	64.2	サヌカイト	
200	スクレイパー	SH03	埋土（床面直上まで）		5.8	8.7	0.9	41.1	サヌカイト	
201	スクレイパー	SH03	埋土（床面直上まで）		4.5	5.55	0.65	22.4	サヌカイト	
202	スクレイパー	SH03	周溝		4.9	5.3	0.7	17.7	サヌカイト	
203	楔形石器	SH03	埋土（床面直上まで）		12.2	11.3	2.8	556.8	サヌカイト	
204	RF	SH03	SK-1		4.2	2.35	0.6	4.3	サヌカイト	
205	楔形石器	SH03	埋土（床面直上まで）		5.3	3.2	0.9	15.7	サヌカイト	
206	MF	SH03	埋土（床面直上まで）		2.9	3.7	0.4	4	サヌカイト	
207	RF	SH03	埋土（床面直上まで）		2.5	3.6	0.7	5.4	サヌカイト	
208	砥石・台石	SH03		R002	15.65	11.3	5	959.2	砂岩	
209	台石	SH03		R003	19.6	14.5	8.4	2250	砂岩	
213	打製石斧	SB01	P-1		2.98	3.5	0.8	7	サヌカイト	
226	石鏃	SX03			2.7	1.4	0.3	1.2	サヌカイト	平基式
227	スクレイパー	SX03	周辺一段下げ		5.85	10.75	0.95	46.1	サヌカイト	
236	石鏃未製品	SX06			3.95	2.2	0.6	5	サヌカイト	
237	尖頭器	SX06			6.9	2.75	0.8	141.1	サヌカイト	
238	スクレイパー	SX06			3.05	4.5	0.9	13.9	サヌカイト	
239	スクレイパー	SX06			4	5.1	0.9	21.3	サヌカイト	
240	石鋸	SX06			7	2.7	0.9	20.1	結晶片岩	
241	石錐	SX06			3.75	3.2	0.7	7.8	サヌカイト	
242	打製石斧	SX06			9.35	7.25	2.25	209	安山岩	
243	円礫	SX06			3.8	3.75	0.8	17	砂岩	
268	石鏃	SX07			2.45	1	0.35	0.7	サヌカイト	平基式
269	石鏃	SX07			2.6	2.05	0.45	2.2	サヌカイト	凹基式
270	石鏃未製品	SX07			2.45	1	0.35	0.6	サヌカイト	
271	スクレイパー	SX07			5.75	8.6	1.25	53.3	サヌカイト	
303	石鏃未製品	SX08			2.6	1.8	0.6	1.6	サヌカイト	
304	石鏃未製品	SX08			3.65	2.1	0.75	3.5	安山岩	
305	石鏃未製品	SX08	一段下げ		3.9	2.45	0.5	3.8	サヌカイト	
306	打製石包丁	SX08		R016･024	11.6	4.5	1.5	78.5	サヌカイト	
307	打製石包丁	SX08		R025	10.2	5.1	1.45	64.2	サヌカイト	
308	打製石包丁	SX08			3.6	4	0.75	10.4	サヌカイト	
309	打製石包丁	SX08			4	4.3	0.95	20.2	サヌカイト	
310	楔形石器	SX08	一段下げ		4.05	2.6	1.2	17.6	サヌカイト	
311	楔形石器	SX08			2.95	5.45	0.85	12.4	サヌカイト	
312	焼け石	SX08		R012	5.2	8	6.6	397.5	砂岩	
313	太型蛤刃石斧	SX08		R015	16.3	7.65	4.9	117.9	輝緑岩	
362	RF	SX09			2.4	3.75	0.7	6.2	サヌカイト	
363	楔形石器	SX10			4.75	4.4	1.3	30.4	サヌカイト	
364	MF	SX10			8.9	5.65	0.9	42.2	サヌカイト	
373	石鏃	SX13			2.5	1	0.3	0.6	サヌカイト	凸基Ⅰ式
374	石鏃未製品	SX13			2.2	1.85		0.9	サヌカイト	
375	石小刀	SX13			6.35	2.7	0.55	9.4	サヌカイト	Ⅲ類

No	機　種	遺構名	出土地点	取り上げ番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
376	スクレイパー	SX13	南西区検出時		3.3	5.35	0.6	9	サヌカイト	
377	スクレイパー	SX13			2.35	4.9	0.8	9.2	サヌカイト	
378	スクレイパー	SX13			3.25	4.2	0.95	9.7	サヌカイト	
379	楔形石器	SX13	北西区検出時		3.3	2.5	0.7	8.8	サヌカイト	
380	石錐	SX13	北西区検出時		2.7	2.8	0.7	2.9	サヌカイト	
381	RF	SX13	北西区検出時		1.95	3.9	0.5	3.2	サヌカイト	
382	磨製石斧	SX13		R008	12.2	6.75	4.5	552.2	凝灰岩	
383	砥石	SX13		R007	42.5	20.7	15.8	1880	砂岩	
394	石鏃	SX14		S-1	1.05	0.8	0.2	0.1	サヌカイト	
395	石鏃未製品	SX14		S-1	2.1	1.5	0.45	1.3	サヌカイト	
396	スクレイパー	SX14		S-1	4.7	4.8	0.9	15.6	サヌカイト	刃部未加工
397	スクレイパー	SX14	北西区検出時		3.6	3.8	0.65	9.8	サヌカイト	
399	スクレイパー	SX14		R012	4	7.3	0.75	20.4	サヌカイト	
398	スクレイパー	SX14		S-1	1.7	5.8	0.65	5.3	サヌカイト	
400	楔形石器	SX14			3.2	5.4	1.1	20.7	サヌカイト	
401	MF	SX14		R008	5.1	7.1	1.3	25.6	サヌカイト	
402	機種不明	SX14		S-2	8.75	8.2	1.4	128	安山岩	
403	機種不明	SX14	畦畔はずし		16.55	12.05	2.25	756.3	安山岩	
404	台石	SX14		R007	33.6	23.1	8.65	9200	砂岩	
419	石鏃未製品	SX13・14	検出中		3.6	2.1	3.5	2	サヌカイト	
420	石鏃未製品	SX13・14	検出中		3.8	1.9	0.5	3.3	サヌカイト	
421	石鏃	SX13・14	検出中		2.1	1.3	0.3	0.9	サヌカイト	
422	打製石包丁	SX13・14	検出中		8.25	4.1	1.1	42.2	サヌカイト	
423	石錐	SX13・14	検出中		3.2	0.9	0.55	1.3	サヌカイト	
424	スクレイパー	SX13・14	検出中		5.1	9.85	2.2	70.2	サヌカイト	
425	MF	SX13・14	検出中		2.4	4.6	0.5	4.2	サヌカイト	
426	打製石斧	SX13・14	検出中		5.8	4.3	1.5	31.9	サヌカイト	
427	RF	SX13・14	検出中		3	3.6	0.5	5.1	サヌカイト	
435	石鏃	SX16・17	検出中		2.2	1.55	0.3	1.1	サヌカイト	平基式
436	石鏃	SX16			2.4	1.1	0.25	0.8	サヌカイト	凸基Ⅱ式
437	石鏃未製品	SX16			2	1.7	0.6	1.3	サヌカイト	
438	石鏃	SX16			2.15	1.35	0.5	1.5	サヌカイト	凸基Ⅰ式
440	RF	SX16			3.8	4.9	1	15.5	サヌカイト	
439	MF	SX16			2.2	2.5	0.4	2.2	サヌカイト	
441	MF	SX16			4	3.85	0.7	7.4	サヌカイト	
461	楔形石器	SX17			3.4	2.7	1	11.9	サヌカイト	
462	擦り石	SX17		R011	11.6	9.3	5.15	735.9	砂岩	
463	台石・敲き石	SX17		R012	18.95	13.3	6.15	220	砂岩	
489	スクレイパー	SX18	畦		7.3	5.3	1.5	64.5	サヌカイト	
490	RF	SX18			2.4	2.4	0.35	2.3	サヌカイト	
491	RF	SX18		R016	4.9	4.3	1.3	15.1	サヌカイト	
506	打製石剣	SX19			7.85	3.55	0.8	28.5	サヌカイト	
507	石核	SX19		R001	7.4	9.7	2.8	141.3	サヌカイト	
508	石皿	SX19		R012	24.15	22.75	7.2	4800	砂岩	
531	石鏃未製品	SX20	土器撤去後清浄時		2.3	1.35	0.25	0.9	サヌカイト	石鏃の可能性あり
532	打製石包丁	SX20		R025	10.8	4.55	0.9	57.8	サヌカイト	
533	スクレイパー	SX20			3.9	3.3	0.65	9.1	サヌカイト	
534	剥片	SX20			4.35	4.25	0.55	6.9	サヌカイト	
535	スクレイパー	SX20			4.9	4.9	0.75	23.6	サヌカイト	使用痕あり
563	石鏃	SK04	東南側段下げ		2.2	1.65	0.4	0.9	サヌカイト	平基式
564	楔形石器	SK04			4.4	3.9	1.1	21.5	サヌカイト	
565	打製石包丁	SK09		S001	12.35	4.95	1.2	80.2	サヌカイト	
566	打製石包丁	SK09		S003	11.9	5	0.95	67.6	サヌカイト	
567	打製石包丁	SK09		S002	12.45	4	1.15	63.8	サヌカイト	
585	打製石斧	SK21		R003	9.7	4.2	1.3	51.5	サヌカイト	
609	石錐	SK26			2.65	0.8	0.5	0.9	サヌカイト	Ⅲ類
610	RF	SK26			2.8	3.2	0.55	3.7	サヌカイト	
611	RF	SK26			10.1	5.75	0.95	63	サヌカイト	
612	剥片	SK26			7.95	3.9	0.7	16.1	サヌカイト	
613	剥片	SK26			10.6	5.45	0.95	45	サヌカイト	
635	打製石斧	SK27		R055	5.8	4.2	1.65	39.9	サヌカイト	
636	剥片	SK27			7.05	4.1	1.15	21.8	安山岩	
637	MF	SK27		R028	9.2	8.15	1.25	113.8	サヌカイト	
638	石棒	SK27		R050	9.7	3.6	2.6	189.4	珪質結晶片岩	
656	石鏃	SP31			3	2	0.65	3.1	サヌカイト	凹基式
657	石鏃	SP31・32・33付近	一段下げ		1.7	1.3	0.3	0.5	サヌカイト	平基式
658	石鏃	SP31			3.9	2.95	0.7	6.4	サヌカイト	有茎式
659	RF	SP31			2.1	3.1	0.5	2.7	サヌカイト	
660	スクレイパー	SP31			2	3.9	1	7	サヌカイト	
661	打製石斧	SP45			5.4	4	1.05	21.1	サヌカイト	実52・22と同一固体
661	打製石斧	SP45			3.5	4.9	1.5	28.1	サヌカイト	実51・22と同一固体
661	打製石斧	SP45			5.4	4.5	1.65	38.9	サヌカイト	実51・52と同一固体
662	楔形石器	SP27			5.3	4.1	1.25	20.7	サヌカイト	
663	楔形石器	SP15			3.1	3.85	1.35	16.1	サヌカイト	
691	石鏃	SD05			1.3	1.05	0.3	0.3	サヌカイト	
692	石鏃	SD07			2.5	2.2	0.6	2.7	サヌカイト	平基式
693	石鏃	SD07			3.45	1.6	0.4	2.3	サヌカイト	凸基Ⅰ式
694	石鏃	SD08			2.6	1.5	0.3	1.2	サヌカイト	平基式
695	石鏃	SD11			2.45	1.5	0.4	1	サヌカイト	凹基式

No	機　種	遺構名	出土地点	取り上げ番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
696	石鏃	SD11			1.4	1	0.25	0.4	サヌカイト	平基式
697	石鏃未製品	SD11			2.7	1.7	0.35	2	サヌカイト	
698	石鏃	SD11			2	1.2	0.45	0.9	サヌカイト	凸基Ⅰ式
699	石鏃	SD11			2	1.2	0.25	0.4	サヌカイト	平基式
700	石鏃	SD12			2.4	1.3	0.5	1.2	サヌカイト	平基式
701	石錐	SD07			4.25	3.45	0.55	5.2	サヌカイト	
702	打製石斧	SD07			4.7	9.8	1.2	23	サヌカイト	
703	扁平片刃石斧未製品	SD03	上層		7.3	5.55	1.4	79.3	珪質泥岩	
704	スクレイパー	SD07			2.7	5.3	0.95	7.8	サヌカイト	
705	スクレイパー	SD11			3.75	4.5	1.05	16.3	サヌカイト	
706	スクレイパー	SD11			3.3	5.7	0.6	9.6	サヌカイト	
707	石小刀	SD11			6.1	3.35	0.65	15.1	サヌカイト	
708	楔形石器	SD05			4.1	3.4	1.1	20.6	サヌカイト	
709	楔形石器	SD11			3.8	3.9	1.3	18.1	サヌカイト	
710	MF	SD07			4.7	9.8	1.2	38.5	サヌカイト	
711	RF	SD07			3.8	2.9	0.5	4.7	サヌカイト	
775	打製石斧	SR01	NW区②・東岸部集石		8.6	4.4	0.9	47.8	サヌカイト	
776	石錐未製品	SR01？	旧河道上層		3.6	2.7	0.9	9.1	サヌカイト	
777	スクレイパー	SR01	NW区②		8.05	3.5	0.95	26.7	サヌカイト	
778	MF	SR01	SW区・検出時上層		4.5	4.8	1.1	28.3	サヌカイト	
779	剥片	SR01	SE区・黒色層		4.5	3.5	0.95	16.1	砂岩	
780	石錘	SR01	東岸部		6.1	4.75	3.9	166.8	輝緑岩	
830	石鏃	SX02			2.35	1.8	0.35	0.9	サヌカイト	凹基式
831	石鏃	SX02			2.1	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	凹基式
832	RF	SX02	直下周辺		3.7	2.8	0.7	6.7	サヌカイト	
833	敲き石	SX02	直下周辺		13.6	9.55	5.2	933.6	砂岩	
859	スクレイパー	SR02	SE区		5.2	9.85	1.9	9.85	サヌカイト	
860	スクレイパー	SR02	NE区		4.5	8	1.05	30.7	サヌカイト	
873	石鏃	SX05・SK18			2.65	1.75	0.3	1.2	サヌカイト	凹基式
874	打製石剣	SX05・SK19			3.35	2.9	0.7	5.7	サヌカイト	
875	打製石包丁	SX05・SK24			4.35	3.65	1.2	17.1	サヌカイト	
876	打製石包丁	SX05・SK10(SK54)			8	4.25	1.1	45	サヌカイト	
928	石鏃	SE区	表採掘削		2.5	1.65	0.4	1	サヌカイト	凹基式
929	石鏃	SE区	検出状況		2.4	1.2	0.2	0.9	サヌカイト	凹基式
930	石鏃	SE区	表採掘削		1.8	1.3	0.35	0.6	サヌカイト	平基式
931	石鏃	SE区	検出状況		2.6	1.6	0.5	1.8	サヌカイト	平基式
932	石鏃	SE区	表採掘削		2	1.1	0.2	0.8	サヌカイト	凸基Ⅰ式
933	石鏃	SE区	表土掘削		1.8	1.3	0.2	0.4	サヌカイト	平基式（五角形鏃）
934	石鏃	SE区	畦中		3.3	1.15	0.5	1.4	サヌカイト	凸基Ⅱ式
935	石鏃	SE区	検出状況		4.1	1.7	0.55	3	サヌカイト	有茎式
936	石鏃未製品	SE区	表採掘削		2.05	1.35	0.3	0.8	サヌカイト	
937	石鏃未製品	SE～SW区	遺構検出時		3.35	2	0.5	3.1	サヌカイト	有茎式
938	石錐	SE区	畦中		3.5	2.3	0.55	4.7	サヌカイト	
939	打製石剣	NE区	機械掘削～遺構面		9.8	3.4	0.9	33.4	サヌカイト	打製石包丁の転用
940	打製石斧	NE区	機械掘削～遺構面		9.1	4	1.5	62.5	サヌカイト	
941	打製石包丁	SE区	表土掘削		12.45	4.55	1.5	92.7	サヌカイト	
942	機種不明	NE区西壁	土層・土器1		3	2.3	0.5	7.3	サヌカイト	打製石包丁？
943	スクレイパー	SE区	表土掘削		4.6	8.3	1	28.4	サヌカイト	
944	スクレイパー	NE区	機械掘削～遺構面		4.1	7.65	1	28.7	サヌカイト	
945	スクレイパー	SE区	表土掘削		5.45	5.6	1.5	56.9	サヌカイト	打製石斧の可能性もあり
946	スクレイパー	SE区	表土掘削		4.05	3.2	0.5	9.2	サヌカイト	
947	スクレイパー	SE～SW区	遺構検出時		5	2.3	1	8.4	サヌカイト	
948	MF	NE～NW区	遺構検出時		3.4	7	1.15	18.8	サヌカイト	
949	楔形石器	SE～SW区	遺構検出時		4.9	4.15	1	28.4	サヌカイト	
950	楔形石器	NE～NW区	遺構検出時		5.1	4.4	0.8	14.9	サヌカイト	
951	楔形石器	SE～SW区	遺構検出時		4.75	1.9	1.2	14.7	サヌカイト	
952	楔形石器	NE～NW区	遺構検出時		4.5	5.35	1	14	サヌカイト	
953	楔形石器	SE区	検出状況		3.1	3	0.8	9.6	サヌカイト	
954	機種不明	NE区	機械掘削～遺構面		6.4	5.2	2.8	111.2	ハリ質安山岩	
955	MF	NE区	機械掘削～遺構面		4	2.4	0.55	5.3	サヌカイト	
956	RF	NE区	機械掘削～遺構面		3	2.4	0.6	5	サヌカイト	
957	磨製石斧	NE区	機械掘削～遺構面		11.3	5.8	3.9	398	凝灰岩	
958	柱状片刃石斧	SE区	表土掘削		9.55	3.2	1	51.2	結晶片岩	

第 19 表　未掲載石製品一覧表

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
	SH01	SP01	チップ類				0.6	サヌカイト	1点
SH1-1	SH01	SP02	剥片	1.9	3.3	0.4	2.3	サヌカイト	
SH1-2	SH01	SP02	剥片	2.1	3.9	0.7	3.2	サヌカイト	
SH1-3	SH01	SP02	MF	3.0	2.8	0.4	4.3	サヌカイト	
SH1-4	SH01	SP03	剥片	2.7	4.7	0.5	5.7	サヌカイト	
SH1-5	SH01	SP03	剥片	1.8	3.1	0.6	2.4	サヌカイト	
SH1-6	SH01	SP03	剥片	2.4	2.4	0.3	2.0	サヌカイト	
SH1-7	SH01	SP06	剥片	3.2	2.3	0.9	4.9	サヌカイト	
	SH01	SP06	チップ類				0.7	サヌカイト	1点
SH1-8	SH01	SP05	剥片	0.8	5.7	0.5	5.7	サヌカイト	
SH1-9	SH01	SP05	剥片	2.6	3.8	0.4	3.3	サヌカイト	
SH1-10	SH01	SP07	剥片	2.4	1.0	0.7	1.5	サヌカイト	
SH1-11	SH01	SP07	剥片	1.6	3.2	0.4	1.9	サヌカイト	
SH1-12	SH01	SP07	剥片	1.6	2.2	0.8	2.9	サヌカイト	
SH1-13	SH01	SP09	剥片	2.1	2.8	0.3	1.7	サヌカイト	
SH1-14	SH01	SP10	剥片	2.2	2.7	1.0	9.0	サヌカイト	
SH1-15	SH01	SP10	剥片	2.6	4.3	0.4	3.8	サヌカイト	
SH1-16	SH01	SP10	剥片	2.7	2.3	1.1	5.7	サヌカイト	
SH1-17	SH01	SP10	剥片	1.8	2.5	0.7	3.5	サヌカイト	
SH1-18	SH01	SP10	剥片	1.6	3.4	0.3	1.6	サヌカイト	
SH1-19	SH01	SP10	剥片	1.7	2.4	0.6	1.6	サヌカイト	
SH1-20	SH01	SP10	剥片	3.3	2.3	0.4	2.3	サヌカイト	
SH1-21	SH01	SP10	剥片	2.5	1.5	0.3	1.1	サヌカイト	
SH1-22	SH01	SP10	剥片	2.3	1.5	0.3	0.9	サヌカイト	
	SH01	SP10	チップ類				1.9	サヌカイト	4点
SH1-23	SH01	SP11	剥片	3.2	4.2	0.7	7.2	サヌカイト	
SH1-24	SH01	SP11	剥片	2.3	3.0	1.0	4.0	サヌカイト	
SH1-25	SH01	SP12	剥片	1.4	3.2	0.3	1.4	サヌカイト	
SH1-26	SH01	SP12	剥片	1.8	3.0	1.0	3.8	サヌカイト	
SH1-27	SH01	SP12	剥片	2.5	3.2	0.4	2.0	サヌカイト	
SH1-28	SH01	SP12	剥片	1.6	1.9	0.2	0.9	サヌカイト	
SH1-29	SH01	SP12	剥片	2.3	1.9	0.5	1.7	サヌカイト	
SH1-30	SH01	SP12	剥片	2.5	3.6	0.9	10.4	サヌカイト	
	SH01	SP12	チップ類				1.3	サヌカイト	4点
SH1-31	SH01	SX06・08の畦	剥片	3.2	2.4	0.6	3.5	サヌカイト	
SH1-32	SH01		剥片	2.4	1.9	0.3	1.6	サヌカイト	
SH1-33	SH01		剥片	3.0	3.2	0.4	3.3	サヌカイト	
	SH01		チップ類				0.8	サヌカイト	3点
SH1-34	SH01	東側	剥片	2.2	3.5	0.3	1.7	サヌカイト	
	SH01	東側	チップ類				0.5	サヌカイト	1点
SH1-35	SH01	中央土坑	剥片	4.7	5.1	2.1	56.3	サヌカイト	
SH1-36	SH01	中央土坑	剥片	3.2	1.6	1.2	4.9	サヌカイト	
SH1-37	SH01	中央土坑	スクレイパー	5.3	4.8	0.8	15.1	サヌカイト	
	SH01	中央土坑	チップ類				4.1	サヌカイト	6点
SH1-38	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	2.6	6.5	0.5	9.9	サヌカイト	
SH1-39	SH01	南区炭化材検出面まで	RF	1.5	4.3	0.4	3.3	サヌカイト	
SH1-40	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	2.1	4.4	0.3	3.2	サヌカイト	
SH1-41	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	2.4	3.9	0.8	6.4	サヌカイト	
SH1-42	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	2.1	2.4	0.7	2.8	サヌカイト	
SH1-43	SH01	南区炭化材検出面まで	MF	2.1	3.8	0.7	3.8	サヌカイト	
SH1-44	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	3.7	1.9	0.7	3.2	サヌカイト	
SH1-45	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	2.6	3.6	0.5	2.6	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
SH1-46	SH01	南区炭化材検出面まで	剥片	1.9	3.0	0.5	2.1	サヌカイト	
	SH01	南区炭化材検出面まで	チップ類				13.7	サヌカイト	39点
SH1-47	SH01	壁	剥片	5.4	4.2	0.7	9.8	サヌカイト	
	SH01	壁	チップ類				0.4	サヌカイト	1点
SH1-48	SH01	焼け土①	楔形石器	3.4	2.6	1.7	14.3	サヌカイト	
SH1-49	SH01	焼け土①	剥片	6.4	1.8	1.2	18.2	サヌカイト	
SH1-50	SH01	焼け土①	剥片	3.1	3.6	0.5	4.6	サヌカイト	
SH1-51	SH01	焼け土②	剥片	2.5	3.4	0.6	4.0	サヌカイト	
SH1-52	SH01	焼け土③	剥片	2.7	3.8	0.9	10.0	サヌカイト	
SH1-53	SH01	焼け土③	剥片	2.9	2.2	0.4	2.8	サヌカイト	
SH1-54	SH01	焼け土③	剥片	1.2	3.4	0.4	1.4	サヌカイト	
	SH01	焼け土③	チップ類				2.3	サヌカイト	7点
	SH01	焼け土⑤	チップ類				1.6	サヌカイト	5点
	SH01	焼け土⑥	チップ類				0.7	サヌカイト	2点
SH1-55	SH01	焼け土⑦	剥片	2.9	1.8	0.6	2.8	サヌカイト	
SH1-56	SH01	焼け土⑦	剥片	1.6	4.0	0.4	2.3	サヌカイト	
SH1-57	SH01	焼け土⑦	RF	3.9	2.9	0.6	9.4	サヌカイト	
	SH01	焼け土⑦	チップ類				3.0	サヌカイト	6点
SH1-58	SH01	焼け土⑧	剥片	3.2	2.8	0.7	2.5	サヌカイト	
SH1-59	SH01	焼け土⑧	MF	2.4	2.8	0.4	1.7	サヌカイト	
SH1-60	SH01	焼け土⑧	剥片	2.5	2.5	0.2	1.3	サヌカイト	
	SH01	焼け土⑧	チップ類				5.3	サヌカイト	7点
	SH01	焼け土⑨	チップ類				0.9	サヌカイト	1点
SH1-61	SH01	焼け土⑩	剥片	1.8	6.3	0.4	4.8	サヌカイト	
SH1-62	SH01	焼け土⑩	剥片	2.3	1.9	0.3	1.4	サヌカイト	
	SH01	焼け土⑩	チップ類					サヌカイト	3点
SH1-63	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.2	3.5	0.5	4.3	サヌカイト	
SH1-64	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.9	2.3	0.5	3.4	サヌカイト	
SH1-65	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.5	3.6	0.9	7.4	サヌカイト	
SH1-66	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	1.6	4.4	0.5	3.2	サヌカイト	
SH1-67	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	4.3	4.9	0.6	12.7	サヌカイト	
SH1-68	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	3.4	3.3	0.5	5.2	サヌカイト	
SH1-69	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	3.1	3.2	0.4	3.2	サヌカイト	
SH1-70	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.8	2.0	0.4	2.1	サヌカイト	
SH1-71	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.4	2.4	0.5	2.6	サヌカイト	
SH1-72	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.1	2.0	0.6	1.9	サヌカイト	
SH1-73	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	1.9	2.3	0.5	1.8	サヌカイト	
SH1-74	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.3	1.9	0.5	1.7	サヌカイト	
SH1-75	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	1.9	2.8	0.3	1.2	サヌカイト	
SH1-76	SH01	南区炭化材撤去時	剥片	2.1	1.9	0.5	1.5	サヌカイト	
	SH01	南区炭化材撤去時	チップ類				19.9	サヌカイト	49点
SH1-77	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.4	6.1	1.0	18.6	サヌカイト	
SH1-78	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	6.1	2.7	1.6	17.9	サヌカイト	
SH1-79	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.9	2.2	1.0	8.8	サヌカイト	
SH1-80	SH01	西区炭化物撤去時	RF	3.0	2.3	0.4	2.8	サヌカイト	
SH1-81	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	4.0	2.9	0.9	9.1	サヌカイト	
SH1-82	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	2.6	3.1	0.9	6.1	サヌカイト	
SH1-83	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.4	2.3	0.6	4.8	サヌカイト	
SH1-84	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	1.8	3.1	0.6	3.0	サヌカイト	
SH1-85	SH01	西区炭化物撤去時	RF	2.8	2.3	0.6	3.7	サヌカイト	
SH1-86	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.4	1.9	0.5	3.6	サヌカイト	
SH1-87	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.2	1.9	0.6	3.6	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
SH1-88	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	3.3	1.2	0.6	1.9	サヌカイト	
SH1-89	SH01	西区炭化物撤去時	MF	2.2	3.5	0.6	3.6	サヌカイト	
SH1-90	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	2.5	2.2	0.3	1.6	サヌカイト	
SH1-91	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	1.7	2.5	0.5	1.4	サヌカイト	
SH1-92	SH01	西区炭化物撤去時	MF	2.2	3.3	0.3	2.5	サヌカイト	
SH1-93	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	2.8	1.9	0.5	2.2	サヌカイト	
SH1-94	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.8	0.3	1.7	サヌカイト	
SH1-95	SH01	西区炭化物撤去時	RF	3.3	2.0	0.6	2.9	サヌカイト	
SH1-96	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	1.4	1.3	1.6	2.3	サヌカイト	
SH1-97	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	1.8	2.6	0.3	2.1	サヌカイト	
	SH01	西区炭化物撤去時	チップ類				50.4	サヌカイト	186点
SH1-98	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	3.8	4.3	0.6	9.7	サヌカイト	
SH1-99	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	3.0	2.0	2.9	11.7	サヌカイト	
SH1-100	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.1	3.3	0.4	3.0	サヌカイト	
SH1-101	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.3	3.6	1.6	8.8	サヌカイト	
SH1-102	SH01	北区炭化物撤去時	RF	3.9	2.9	0.3	3.0	サヌカイト	
SH1-103	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.2	1.7	0.5	1.9	サヌカイト	
SH1-104	SH01	北区炭化物撤去時	楔形石器	2.5	2.3	0.6	4.8	サヌカイト	
SH1-105	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	1.7	2.4	0.7	2.7	サヌカイト	
SH1-106	SH01	北区炭化物撤去時	RF	3.3	2.2	0.5	2.5	サヌカイト	
SH1-107	SH01	北区炭化物撤去時	楔形石器	3.7	1.8	1.0	6.0	サヌカイト	
SH1-108	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.0	3.9	0.5	4.0	サヌカイト	
SH1-109	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	1.8	2.0	0.6	2.5	サヌカイト	
SH1-110	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.9	3.5	0.4	3.6	サヌカイト	
SH1-111	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.4	3.2	0.4	3.5	サヌカイト	
SH1-112	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.1	2.6	0.4	2.2	サヌカイト	
SH1-113	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.0	3.0	0.4	2.2	サヌカイト	
SH1-114	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.5	2.7	0.2	1.5	サヌカイト	
SH1-115	SH01	北区炭化物撤去時	楔形石器	2.0	3.0	0.9	3.8	サヌカイト	
SH1-116	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	1.9	2.4	0.7	2.2	サヌカイト	
SH1-117	SH01	北区炭化物撤去時	MF	2.2	2.4	0.3	1.1	サヌカイト	
SH1-118	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	1.8	3.4	0.4	1.7	サヌカイト	
SH1-119	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	1.2	2.4	1.4	2.4	サヌカイト	
SH1-120	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.6	3.0	0.7	4.3	サヌカイト	
SH1-121	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.1	2.6	0.4	1.9	サヌカイト	
SH1-122	SH01	北区炭化物撤去時	剥片	2.3	2.3	0.5	2.1	サヌカイト	
SH1-123	SH01	北区炭化物撤去時	石鏃未製品	2.3	1.9	0.4	2.0	サヌカイト	
	SH01	北区炭化物撤去時	チップ類				75.9	サヌカイト	206点
SH1-124	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	3.3	4.3	0.9	16.3	サヌカイト	
SH1-125	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	3.6	2.7	0.9	10.1	サヌカイト	
SH1-126	SH01	東区炭化物撤去時	MF	3.1	4.6	0.7	7.9	サヌカイト	
SH1-127	SH01	東区炭化物撤去時	RF	2.3	3.6	0.4	3.0	サヌカイト	
SH1-128	SH01	東区炭化物撤去時	RF	2.3	3.8	0.6	5.2	サヌカイト	
SH1-129	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.8	2.7	0.9	6.2	サヌカイト	
SH1-130	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.1	4.2	0.7	4.1	サヌカイト	
SH1-131	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	1.3	3.8	1.9	5.8	サヌカイト	
SH1-132	SH01	東区炭化物撤去時	RF	3.4	3.0	0.7	6.2	サヌカイト	
SH1-133	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	3.6	2.7	1.1	7.7	サヌカイト	
SH1-134	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.0	4.0	0.8	4.3	サヌカイト	
SH1-135	SH01	東区炭化物撤去時	MF	2.8	3.5	0.5	4.9	サヌカイト	
SH1-136	SH01	東区炭化物撤去時	RF	3.3	2.1	0.6	4.5	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
SH1-137-1	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	5.0	2.1	0.5	3.4	サヌカイト	
SH1-137-2	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.1	3.9	0.3	2.6	サヌカイト	
SH1-138	SH01	東区炭化物撤去時	MF	2.6	4.1	0.4	2.1	サヌカイト	
SH1-139	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.3	0.8	3.2	サヌカイト	
SH1-140	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.6	0.6	3.4	サヌカイト	
SH1-141	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.4	3.2	0.3	2.2	サヌカイト	
SH1-142	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.7	2.8	0.4	2.5	サヌカイト	
SH1-143	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.4	2.5	0.4	2.0	サヌカイト	
SH1-144	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.1	0.4	1.8	サヌカイト	
SH1-145	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.1	2.6	0.4	1.5	サヌカイト	
SH1-146	SH01	東区炭化物撤去時	RF	2.2	3.1	0.3	2.0	サヌカイト	
SH1-147	SH01	東区炭化物撤去時	RF	2.0	3.5	0.4	2.8	サヌカイト	
SH1-148	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.9	0.6	2.6	サヌカイト	
SH1-149	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	3.8	1.3	0.6	3.0	サヌカイト	
SH1-150	SH01	東区炭化物撤去時	RF	2.0	2.7	0.5	2.0	サヌカイト	
SH1-151	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.6	2.1	0.5	2.7	サヌカイト	
SH1-152	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	1.7	2.8	0.3	1.5	サヌカイト	
SH1-153	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	1.5	2.7	0.4	1.3	サヌカイト	
SH1-154	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	1.2	2.9	0.4	1.3	サヌカイト	
SH1-155	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.2	2.4	0.4	2.0	サヌカイト	
SH1-156	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.5	1.9	0.2	0.9	サヌカイト	
SH1-157	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.1	2.8	0.3	1.4	サヌカイト	
SH1-158	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	2.9	1.4	0.4	1.9	サヌカイト	
	SH01	東区炭化物撤去時	チップ類				48.0	サヌカイト	84点
SH1-159	SH01	畦中	剥片	3.0	5.6	0.5	7.0	サヌカイト	
SH1-160	SH01	畦中	楔形石器	2.0	3.3	2.4	18.3	サヌカイト	
SH1-161	SH01	畦中	剥片	4.3	4.0	0.6	15.7	サヌカイト	
SH1-162	SH01	畦中	楔形石器	3.4	4.0	1.0	16.9	サヌカイト	
SH1-163	SH01	畦中	剥片	4.9	4.4	1.5	24.1	サヌカイト	
SH1-164	SH01	畦中	剥片	3.4	2.8	1.1	8.8	サヌカイト	
SH1-165	SH01	畦中	楔形石器	3.1	3.3	0.6	8.8	サヌカイト	
SH1-166	SH01	畦中	MF	2.9	3.3	0.5	3.7	サヌカイト	
SH1-167	SH01	畦中	剥片	3.5	3.0	1.2	9.9	サヌカイト	
SH1-168	SH01	畦中	楔形石器	3.2	2.8	1.0	9.9	サヌカイト	
SH1-169	SH01	畦中	剥片	3.1	2.3	0.7	4.5	サヌカイト	
SH1-170	SH01	畦中	剥片	2.4	3.1	0.6	4.7	サヌカイト	
SH1-171	SH01	畦中	剥片	3.6	3.5	0.4	5.6	サヌカイト	
SH1-172	SH01	畦中	剥片	2.1	4.2	0.4	4.0	サヌカイト	
SH1-173	SH01	畦中	剥片	2.1	3.7	0.5	2.8	サヌカイト	
SH1-174	SH01	畦中	剥片	3.0	3.5	0.3	2.2	サヌカイト	
SH1-175	SH01	畦中	RF	2.6	2.5	0.6	3.2	サヌカイト	
SH1-176	SH01	畦中	RF	2.9	2.7	0.4	3.9	サヌカイト	
SH1-177	SH01	畦中	RF	2.8	2.4	0.5	2.1	サヌカイト	
SH1-178	SH01	畦中	MF	2.6	3.0	0.4	3.3	サヌカイト	
SH1-179	SH01	畦中	剥片	3.6	1.8	1.1	4.1	サヌカイト	
	SH01	畦中	チップ類				45.6	サヌカイト	54点
SH1-180	SH01	北区炭化材検出面まで	楔形石器	5.5	4.5	1.2	32.6	サヌカイト	
SH1-181	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.8	4.8	1.0	12.8	サヌカイト	
SH1-182	SH01	北区炭化材検出面まで	MF	4.7	3.2	0.9	13.0	サヌカイト	
SH1-183	SH01	北区炭化材検出面まで	RF	5.2	3.4	1.0	17.4	サヌカイト	
SH1-184	SH01	北区炭化材検出面まで	MF	3.0	5.5	0.4	7.2	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
SH1･185	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	4.3	2.3	0.5	4.4	サヌカイト	
SH1･186	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.7	4.2	0.8	11.2	サヌカイト	
SH1･187	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.6	5.9	0.7	13.8	サヌカイト	
SH1･188	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.7	4.0	0.5	6.9	サヌカイト	
SH1･189	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.6	4.3	0.6	6.6	サヌカイト	
SH1･190	SH01	北区炭化材検出面まで	RF	3.6	4.7	0.6	11.4	サヌカイト	
SH1･191	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.2	2.9	0.6	4.7	サヌカイト	
SH1･192	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.6	4.2	0.7	7.0	サヌカイト	
SH1･193	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.1	5.2	0.4	6.4	サヌカイト	
SH1･194	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.8	4.5	0.7	6.8	サヌカイト	
SH1･195	SH01	北区炭化材検出面まで	MF	3.4	2.5	0.5	4.4	サヌカイト	
SH1･196	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.9	2.9	0.6	4.3	サヌカイト	
SH1･197	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	1.9	2.8	1.0	4.8	サヌカイト	
SH1･198	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.9	2.1	0.8	5.5	サヌカイト	
SH1･199	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.1	2.4	0.8	5.1	サヌカイト	
SH1･200	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	1.7	2.2	0.9	3.0	サヌカイト	
SH1･201	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	3.1	2.8	0.5	3.8	サヌカイト	
SH1･202	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	1.7	4.9	0.4	3.6	サヌカイト	
SH1･203	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	1.7	3.5	0.4	2.1	サヌカイト	
SH1･204	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	2.0	3.2	0.6	3.8	サヌカイト	
SH1･205	SH01	北区炭化材検出面まで	RF	1.8	4.0	0.6	3.6	サヌカイト	
SH1･206	SH01	北区炭化材検出面まで	剥片	1.9	3.1	0.7	3.0	サヌカイト	
SH1･207	SH01	北区炭化材検出面まで	MF	3.5	2.6	0.4	2.7	サヌカイト	
SH1･208	SH01	北区炭化材検出面まで	石鏃未製品	2.1	2.0	0.3	1.4	サヌカイト	
	SH01	北区炭化材検出面まで	チップ類				62.0	サヌカイト	95点
SH1･209	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	5.0	4.9	0.7	21.0	サヌカイト	
SH1･210	SH01	東区炭化物検出面まで	楔形石器	4.3	3.0	1.5	22.6	サヌカイト	
SH1･211	SH01	東区炭化物検出面まで	楔形石器	4.7	3.8	0.9	18.0	サヌカイト	
SH1･212	SH01	東区炭化物検出面まで	RF	6.5	3.7	0.9	18.3	サヌカイト	
SH1･213	SH01	東区炭化物検出面まで	MF	3.1	4.8	0.9	10.7	サヌカイト	
SH1･214	SH01	東区炭化物検出面まで	RF	3.3	4.4	0.7	10.9	サヌカイト	
SH1･215	SH01	東区炭化物検出面まで	RF	2.5	4.7	0.9	13.2	サヌカイト	
SH1･216	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.7	3.1	1.0	9.3	サヌカイト	
SH1･217	SH01	東区炭化物検出面まで	楔形石器	2.6	4.8	1.0	13.6	サヌカイト	
SH1･218	SH01	東区炭化物検出面まで	RF	4.1	2.8	0.7	8.8	サヌカイト	
SH1･219	SH01	東区炭化物検出面まで	RF	2.1	4.3	0.8	6.6	サヌカイト	
SH1･220	SH01	東区炭化物検出面まで	MF	3.2	4.1	0.7	7.9	サヌカイト	
SH1･221	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	3.0	3.8	0.6	4.8	サヌカイト	
SH1･222	SH01	東区炭化物検出面まで	MF	3.4	2.1	0.7	4.3	サヌカイト	
SH1･223	SH01	東区炭化物検出面まで	MF	3.7	2.2	0.6	4.5	サヌカイト	
SH1･224	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.6	3.6	0.6	3.7	サヌカイト	
SH1･225	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	3.3	2.3	0.5	4.8	サヌカイト	
SH1･226	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.1	2.9	0.4	3.3	サヌカイト	
SH1･227	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	3.2	3.5	0.3	2.9	サヌカイト	
SH1･228	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.0	3.8	0.5	3.1	サヌカイト	
SH1･229	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.7	3.5	0.3	2.7	サヌカイト	
SH1･230	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.5	2.2	0.4	2.6	サヌカイト	
SH1･231	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	1.8	3.1	0.6	3.2	サヌカイト	
SH1･232	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.6	3.3	0.5	3.6	安山岩	
SH1･233	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.5	2.8	0.4	2.3	サヌカイト	
SH1･234	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.1	3.2	0.4	2.1	サヌカイト	
SH1･235	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.1	3.2	0.3	2.1	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
SH1･236	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	2.2	3.3	0.3	1.5	サヌカイト	
SH1･237	SH01	東区炭化物検出面まで	剥片	3.2	2.1	0.3	1.7	サヌカイト	
	SH01	東区炭化物検出面まで	チップ類				63.6	サヌカイト	124点
SH1･238	SH01	西区炭化物検出面まで	楔形石器	6.2	5.1	1.9	58.3	サヌカイト	板材素材
SH1･239	SH01	西区炭化物検出面まで	石核	2.5	3.1	2.7	17.0	サヌカイト	
SH1･240	SH01	西区炭化物検出面まで	楔形石器	2.0	4.2	2.7	22.2	サヌカイト	
SH1･241	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	3.1	3.5	0.8	5.8	サヌカイト	
SH1･242	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	1.5	2.9	2.5	7.0	サヌカイト	
SH1･243	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.2	4.3	0.7	4.7	サヌカイト	
SH1･244	SH01	西区炭化物検出面まで	RF	3.3	3.4	0.9	8.2	サヌカイト	
SH1･245	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.1	5.4	0.6	6.2	サヌカイト	
SH1･246	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	4.0	4.5	0.7	7.9	サヌカイト	
SH1･247	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	3.4	2.3	1.0	6.8	サヌカイト	
SH1･248	SH01	西区炭化物検出面まで	MF	3.8	4.5	0.6	9.5	サヌカイト	
SH1･249	SH01	西区炭化物検出面まで	RF	1.9	4.3	0.6	5.4	サヌカイト	
SH1･250	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.3	3.3	1.1	4.7	サヌカイト	
SH1･251	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.3	4.4	0.8	6.1	サヌカイト	
SH1･252	SH01	西区炭化物検出面まで	MF	2.7	3.0	0.9	6.3	サヌカイト	
SH1･253	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.3	3.3	1.2	5.7	サヌカイト	
SH1･254	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	3.3	4.9	0.8	7.7	サヌカイト	
SH1･255	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.6	3.1	0.5	5.0	サヌカイト	
SH1･256	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.8	3.0	0.5	4.0	サヌカイト	
SH1･257	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.3	4.6	0.5	4.3	サヌカイト	
SH1･258	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.5	3.8	0.3	3.0	サヌカイト	
SH1･259	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	1.8	3.7	0.3	1.9	サヌカイト	
SH1･260	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.0	4.4	0.4	2.8	サヌカイト	
SH1･261	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.7	5.0	0.4	4.4	サヌカイト	
SH1･262	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.2	3.6	0.3	2.4	サヌカイト	
SH1･263	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.2	4.5	0.3	3.8	サヌカイト	
SH1･264	SH01	西区炭化物検出面まで	RF	2.9	3.4	0.6	6.8	サヌカイト	
SH1･265	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.7	4.3	0.9	6.6	サヌカイト	
SH1･266	SH01	西区炭化物検出面まで	剥片	2.3	3.9	0.6	3.0	サヌカイト	
	SH01	西区炭化物検出面まで	チップ類				74.7	サヌカイト	94点
SH1･267	SH01	北区炭化物撤去時	RF	4.9	5.9	1.3	42.3	安山岩	
SH01･014	SH01		剥片	3.8	4.5	0.8	14.1	サヌカイト	
SH01･012	SH01		スクレイパー	4.5	9.1	0.8	30.8	サヌカイト	
SH01･011	SH01		剥片	2.3	5.6	0.8	8.5	サヌカイト	
SH01･004	SH01		剥片	1.8	3.4	0.5	2.1	サヌカイト	
SH01･004	SH01		剥片	2.1	3.0	0.2	1.0	サヌカイト	
SH01･029	SH01		スクレイパー	4.8	5.7	0.8	19.7	サヌカイト	
SH01･013	SH01		剥片	3.8	4.2	0.7	10.6	サヌカイト	
SH01･013	SH01		剥片	2.3	4.6	0.5	5.2	サヌカイト	
SH01･036	SH01		剥片	6.5	9.8	1.1	67.5	サヌカイト	
SH01･049	SH01	床直上	敲き石	7.8	8.8	5.2	381.0	砂岩	
	SH01	西区炭化物撤去時	剥片	2.7	0.9	0.4	0.8	サヌカイト	縦長剥片
	SH01	東区炭化物撤去時	剥片	3.7	1.6	0.6	2.6	サヌカイト	縦長剥片
SH2･1	SH02	周溝	剥片	1.3	2.3	0.4	1.1	サヌカイト	
SH2･2	SH02	周溝	剥片	1.3	1.8	0.4	0.8	サヌカイト	
SH2･3	SH02	SD１（周溝）	剥片	3.9	2.9	0.9	5.9	サヌカイト	
SH2･4	SH02	SD１（周溝）	剥片	2.3	3.4	0.3	2.1	サヌカイト	
SH2･5	SH02	SD１（周溝）	剥片	1.9	3.0	0.5	2.1	サヌカイト	
SH2･6	SH02	SD１（周溝）	チップ類				0.9	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
SH2･7	SH02	SD１（周溝）	チップ類				1.2	サヌカイト	
SH2･8	SH02	SD１（周溝）	チップ類				0.6	サヌカイト	
SH2･9	SH02	SD１（周溝）	チップ類				0.5	サヌカイト	
SH2･10	SH02	SD１（周溝）	チップ類				0.7	サヌカイト	
	SH02	SD１（周溝）	チップ類				3.4	サヌカイト	９点
SH2･11	SH02	SK０８	剥片	2.2	2.6	0.3	1.9	サヌカイト	
	SH02	SK０８	チップ類				1.5	サヌカイト	２点
SH2･12	SH02	SP０１	チップ類				0.7	サヌカイト	
SH2･13	SH02	SP０３	剥片	3.0	2.8	0.3	2.4	サヌカイト	
SH2･14	SH02	SP０３	剥片	2.5	4.0	0.3	3.0	サヌカイト	
SH2･15	SH02	SP０４	チップ類				1.1	サヌカイト	
SH2･16	SH02	SP０４	チップ類				1.2	サヌカイト	
	SH02	SP０４	チップ類				0.2	サヌカイト	２点
SH2･17	SH02	西側一段下げ	剥片	1.8	3.1	0.3	1.8	サヌカイト	
	SH02	SP０２	チップ類				1.2	サヌカイト	２点
	SH02	一段下げ	チップ類				0.7	サヌカイト	１点
SH3･1	SH03	SP０９	剥片	3.2	4.0	0.5	5.5	サヌカイト	
SH3･2	SH03	SP１２	剥片	3.3	2.9	0.4	3.1	サヌカイト	
SH3･3	SH03	SP１２	剥片	1.8	3.2	0.5	1.8	サヌカイト	
	SH03	SP１２	チップ類				1.1	サヌカイト	２点
SH3･4	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	5.0	5.4	0.9	11.7	サヌカイト	
SH3･5	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	5.0	4.0	1.2	18.3	サヌカイト	
SH3･6	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	3.1	5.1	0.5	6.4	サヌカイト	
SH3･7	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	2.7	4.7	0.8	8.3	サヌカイト	
SH3･8	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	1.9	3.9	0.4	3.8	サヌカイト	
SH3･9	SH03	埋土（床直上まで）	RF	3.6	2.6	0.8	8.4	サヌカイト	
SH3･10	SH03	埋土（床直上まで）	楔形石器	3.7	2.0	1.2	8.5	サヌカイト	
SH3･11	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	3.0	2.6	0.4	3.0	サヌカイト	
SH3･12	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	3.2	2.0	0.6	3.1	サヌカイト	
SH3･13	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	2.4	4.2	0.3	3.4	サヌカイト	
SH3･14	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	2.4	5.2	0.4	3.9	サヌカイト	
SH3･15	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	3.1	2.7	0.3	2.4	サヌカイト	
SH3･16	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	2.4	3.9	0.4	4.9	サヌカイト	
SH3･17	SH03	埋土（床直上まで）	RF	2.4	3.1	0.4	3.2	サヌカイト	
SH3･18	SH03	埋土（床直上まで）	RF	3.2	1.9	0.5	3.7	サヌカイト	
SH3･19	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				3.1	サヌカイト	
SH3･20	SH03	埋土（床直上まで）	RF	4.5	1.5	1.0	5.4	サヌカイト	
SH3･21	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.7	サヌカイト	
SH3･22	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･23	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.2	サヌカイト	
SH3･24	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				3.8	サヌカイト	
SH3･25	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.7	サヌカイト	
SH3･26	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.7	サヌカイト	
SH3･27	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.6	サヌカイト	
SH3･28	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.8	サヌカイト	
SH3･29	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.2	サヌカイト	
SH3･30	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.8	サヌカイト	
SH3･31	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				3.5	サヌカイト	
SH3･32	SH03	埋土（床直上まで）	RF	2.8	2.0	0.7	3.2	サヌカイト	
SH3･33	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.6	サヌカイト	
SH3･34	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.2	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
SH3･35	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.6	サヌカイト	
SH3･36	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.8	サヌカイト	
SH3･37	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.1	サヌカイト	
SH3･38	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.3	サヌカイト	
SH3･39	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･40	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				2.1	サヌカイト	
SH3･41	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･42	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				0.9	サヌカイト	
SH3･43	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.3	サヌカイト	
SH3･44	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.5	サヌカイト	
SH3･45	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				45.0	サヌカイト	
SH3･46	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.3	サヌカイト	
SH3･47	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･48	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.6	サヌカイト	
SH3･49	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.6	サヌカイト	
SH3･50	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･51	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.9	サヌカイト	
SH3･52	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.6	サヌカイト	
SH3･53	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.4	サヌカイト	
SH3･54	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.0	サヌカイト	
SH3･55	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.0	サヌカイト	
SH3･56	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				0.6	サヌカイト	
SH3･57	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.2	サヌカイト	
SH3･58	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.1	サヌカイト	
SH3･59	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				0.9	サヌカイト	
SH3･60	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				1.5	サヌカイト	
	SH03	埋土（床直上まで）	チップ類				53.6	サヌカイト	156点
	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	1.4	1.9	0.4	1.1	サヌカイト	
	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	2.6	2.7	0.6	3.3	サヌカイト	
	SH03	埋土（床直上まで）	剥片	1.5	3.2	0.5	2.2	サヌカイト	
	SH04	SP２	チップ類				0.1	サヌカイト	３点
SH4･1	SH04	SP１	剥片	2.5	3.2	0.6	2.9	サヌカイト	
	SB01	SP03	チップ類				0.3	サヌカイト	１点
	SK04		MF	3.7	6.4	1.6	29.3	サヌカイト	
	SK04		チップ類				2.4	サヌカイト	１点
	SK11		チップ類				0.7	サヌカイト	１点
	SK16		チップ類				1.7	サヌカイト	２点
	SK16		楔形石器	2.5	3.1	0.9	7.8	サヌカイト	
	SK21		チップ類				0.7	サヌカイト	１点
	SK26		チップ類				24.1	サヌカイト	75点
SK26･1	SK26		剥片	3.9	5.2	0.7	8.8	サヌカイト	
SK26･2	SK26		剥片	2.7	3.8	0.4	3.6	サヌカイト	
SK26･3	SK26		剥片	2.9	3.4	1.0	5.7	サヌカイト	
SK26･4	SK26		剥片	2.5	1.5	0.6	2.9	サヌカイト	
	SK27		チップ類				0.4	サヌカイト	１点
	SK27	完掘時	破片				0.4	結晶片岩	１点
	SK34		チップ類				2.2	サヌカイト	１点
	SK41		チップ類				1.5	サヌカイト	３点
	SD05		チップ類				1.8	サヌカイト	１点
	SD07		チップ類				68.5	サヌカイト	82点
SD07･1	SD07		スクレイパー	2.8	3.4	0.9	10.4	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
SD07-2	SD07		RF	3.6	4.6	1.2	14.8	サヌカイト	
SD07-3	SD07		剥片	2.3	3.6	0.7	5.3	サヌカイト	
SD07-4	SD07		RF	2.5	3.4	0.6	6.4	サヌカイト	
SD07-5	SD07		剥片	3.9	1.9	0.8	5.5	サヌカイト	
SD07-6	SD07		RF	2.6	3.8	0.6	6.4	サヌカイト	
SD07-7	SD07		剥片	3.9	1.4	0.7	3.3	サヌカイト	
SD07-8	SD07		剥片	3.3	4.7	0.8	10.7	サヌカイト	
SD07-9	SD07		剥片	2.1	3.5	0.6	3.8	サヌカイト	
SD07-10	SD07		剥片	3.2	2.4	0.5	4.8	サヌカイト	
SD07-11	SD07		MF	2.1	2.9	0.6	2.8	サヌカイト	
SD07-12	SD07		MF	2.4	3.4	1.2	5.9	サヌカイト	
SD07-13	SD07		MF	2.7	2.4	0.4	3.3	サヌカイト	
SD07-14	SD07		RF	2.2	2.7	0.5	2.7	サヌカイト	
SD07-15	SD07		石鏃未製品	2.5	1.7	0.3	1.2	サヌカイト	
SD07-16	SD07		RF	2.0	1.8	0.5	1.4	サヌカイト	
SD07-17	SD07		RF	1.7	2.3	0.5	1.3	サヌカイト	
SD07-18	SD07		楔形石器	4.5	5.0	1.0	24.6	サヌカイト	
SD07-19	SD07		MF	2.5	3.6	0.5	3.7	サヌカイト	
SD07-20	SD07		MF	2.1	3.0	0.3	1.9	サヌカイト	
	SD07		剥片	2.7	4.3	0.8	7.0	サヌカイト	
	SD08		チップ類				3.7	サヌカイト	3点
	SD08	付近一段下げ	チップ類				0.1	サヌカイト	1点
	SD10		チップ類				7.9	サヌカイト	13点
	SD10		剥片	5.5	2.8	0.6	9.3	サヌカイト	
	SD10		剥片	2.0	3.4	0.5	2.5	サヌカイト	
	SD11	畦畔はずし	チップ類				1.5	サヌカイト	1点
	SD11		チップ類				48.6	サヌカイト	65点
SD11-1	SD11		MF	2.9	2.6	0.4	4.2	サヌカイト	
SD11-2	SD11		RF	3.0	5.4	0.8	12.8	サヌカイト	
SD11-3	SD11		剥片	2.6	2.9	0.8	4.8	サヌカイト	
SD11-4	SD11		剥片	4.2	1.8	1.1	8.8	サヌカイト	
SD11-5	SD11		楔形石器	2.1	3.8	1.3	10.6	サヌカイト	
SD11-6	SD11		石鏃	1.9	2.2	0.8	2.7	サヌカイト	
SD11-7	SD11		剥片	1.8	3.5	0.8	3.4	サヌカイト	
SD11-8	SD11		RF	2.3	2.0	0.4	1.8	サヌカイト	
SD11-9	SD11		剥片	2.5	3.7	0.4	4.2	サヌカイト	
SD11-10	SD11		剥片	4.7	2.5	0.6	6.0	サヌカイト	
	SD11		剥片	1.4	1.3	0.2	0.6	サヌカイト	
	SD12		MF	1.7	2.3	0.4	1.2	サヌカイト	
SX01-1	SX01	SR01中	石核	6.4	6.2	2.4	87.8	サヌカイト	
SX01-2	SX01	SR01中	剥片	4.1	6.6	1.2	22.7	サヌカイト	
	SX01	SR01中	チップ類				1.5	サヌカイト	1点
	SX02		チップ類				0.5	サヌカイト	1点
	SX03		チップ類				12.5	サヌカイト	8点
	SX05	SK09	楔形石器	3.9	2.8	1.7	18.9	サヌカイト	
	SX05	SK09	チップ類				2.8	サヌカイト	3点
	SX05	SK25	チップ類				0.4	サヌカイト	1点
	SX05	SK04	剥片	2.3	2.9	0.7	3.9	サヌカイト	
	SX05	SK11	チップ類				0.2	サヌカイト	1点
	SX05	SK19	チップ類				4.6	サヌカイト	2点
	SX05	SP02	チップ類				0.6	サヌカイト	1点
	SX05	SP09	剥片	2.2	3.7	0.7	5.0	サヌカイト	
	SX05	SP10	チップ類				0.2	サヌカイト	1点

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
SX06-1	SX06		RF	4.0	4.2	1.1	12.0	サヌカイト	
SX06-2	SX06		剥片	3.3	4.2	0.7	6.8	サヌカイト	
SX06-3	SX06		楔形石器	4.0	3.4	1.4	17.0	サヌカイト	
SX06-4	SX06		RF	2.1	3.4	0.8	6.1	サヌカイト	
SX06-5	SX06		剥片	3.1	2.3	0.8	7.6	サヌカイト	
SX06-6	SX06		剥片	2.9	3.7	0.6	4.9	サヌカイト	
SX06-7	SX06		RF	3.2	2.8	0.4	3.4	サヌカイト	
SX06-8	SX06		RF	4.3	3.5	0.5	7.2	サヌカイト	
SX06-9	SX06		MF	1.7	2.8	0.3	1.6	サヌカイト	
	SX06		チップ類				8.6	サヌカイト	11点
	SX06		砕片				7.3	結晶片岩	4点
	SX06		剥片				12.1	安山岩	4点
	SX07		剥片	1.7	2.3	0.4	1.2	サヌカイト	
	SX07		剥片	2.3	4.9	0.4	3.1	サヌカイト	
	SX07		チップ類				20.6	サヌカイト	28点
	SX07	完掘時	チップ類				2.9	サヌカイト	4点
	SX07	完掘時	磨石	4.7	3.5	1.5	29.0	流紋岩	
SX07-1	SX07	完掘時	剥片	3.1	2.3	0.5	4.5	サヌカイト	
SX07-2	SX07	完掘時	剥片	2.6	3.6	0.5	3.6	サヌカイト	
SX07-3	SX07	完掘時	剥片	4.7	1.9	0.8	6.8	サヌカイト	
	SX08	一段下げ	磨石	7.7	5.0	3.7	188.7	砂岩	
	SX08	一段下げ	砕片				4.5	結晶片岩	1点
	SX08	一段下げ	チップ類				3.6	サヌカイト	4点
	SX08	一段下げ	MF	3.4	3.5	1.2	15.2	サヌカイト	
SX08-1	SX08		剥片	2.4	6.0	0.7	9.2	サヌカイト	
SX08-2	SX08		剥片	2.9	4.4	0.7	5.9	サヌカイト	
SX08-3	SX08		剥片	2.2	2.9	0.4	2.0	サヌカイト	
SX08-4	SX08		剥片	1.8	3.8	0.5	3.4	サヌカイト	
SX08-008	SX08		チップ類				0.9	サヌカイト	1点
SX08-019	SX08		チップ類				0.9	サヌカイト	4点
SX08-020	SX08		石錐？	2.5	2.1	0.6	1.5	サヌカイト	
SX08-022	SX08		チップ類				0.2	サヌカイト	2点
SX08-025	SX08		チップ類				2.0	サヌカイト	1点
SX09-	SX09		剥片	2.1	3.2	0.9	6.0	サヌカイト	
SX09-1	SX09		剥片	2.0	3.6	1.2	5.7	サヌカイト	
SX09-2	SX09		剥片	2.6	2.7	0.3	3.0	サヌカイト	
	SX09		チップ類				9.2	サヌカイト	7点
	SX09	畦中	チップ類				5.6	サヌカイト	3点
SX09-011	SX09		くぼみ石	168.0	114.0	75.0	1651.0	砂岩	半分欠損
SX10-1	SX10		剥片	4.2	2.1	1.0	9.4	サヌカイト	
SX10-2	SX10		剥片	2.6	3.1	0.5	3.2	サヌカイト	
SX10-3	SX10		剥片	3.2	2.2	0.7	4.2	サヌカイト	
SX10-4	SX10		剥片	2.0	3.3	1.2	6.3	サヌカイト	
	SX10		チップ類				1.1	サヌカイト	2点
SX12-1	SX12		楔形石器	5.0	5.0	1.5	34.0	サヌカイト	
SX12-2	SX12		剥片	1.9	4.0	0.5	4.2	サヌカイト	
SX12-3	SX12		剥片	1.3	3.5	0.8	3.8	サヌカイト	
SX12-4	SX12		剥片	2.6	2.5	0.8	5.6	サヌカイト	
	SX12		チップ類				6.4	サヌカイト	5点
SX13・14-1	SX13・14	検出中	MF	4.0	4.6	0.8	15.5	サヌカイト	
SX13・14-2	SX13・14	検出中	楔形石器	3.3	3.5	1.4	15.8	サヌカイト	
SX13・14-3	SX13・14	検出中	剥片	3.2	4.4	0.9	14.0	サヌカイト	
SX13・14-4	SX13・14	検出中	剥片	5.1	2.6	0.9	16.2	サヌカイト	

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
SX13・14-5	SX13・14	検出中	楔形石器	2.2	3.4	0.8	6.6	サヌカイト	
SX13・14-6	SX13・14	検出中	剥片	4.7	3.9	0.7	13.1	サヌカイト	
SX13・14-7	SX13・14	検出中	剥片	2.8	3.7	0.6	7.6	サヌカイト	
SX13・14-8	SX13・14	検出中	MF	4.0	4.7	0.7	12.6	サヌカイト	
SX13・14-9	SX13・14	検出中	RF	4.0	3.1	0.4	6.1	サヌカイト	
SX13・14-10	SX13・14	検出中	RF	2.3	3.2	0.9	5.5	サヌカイト	
SX13・14-11	SX13・14	検出中	MF	2.0	4.2	0.6	5.3	サヌカイト	
SX13・14-12	SX13・14	検出中	楔形石器	2.6	3.0	0.8	5.5	サヌカイト	
SX13・14-13	SX13・14	検出中	剥片	2.9	2.8	0.6	3.1	サヌカイト	
SX13・14-14	SX13・14	検出中	剥片	2.2	3.7	0.5	3.7	サヌカイト	
SX13・14-15	SX13・14	検出中	MF	2.0	4.3	0.5	3.4	サヌカイト	
SX13・14-16	SX13・14	検出中	RF	3.2	3.4	0.7	7.5	サヌカイト	
SX13・14-17	SX13・14	検出中	剥片	2.9	2.8	0.7	5.0	サヌカイト	
SX13・14-18	SX13・14	検出中	RF	3.2	1.6	0.5	2.8	サヌカイト	
SX13・14-19	SX13・14	検出中	剥片	1.8	5.0	0.4	3.4	サヌカイト	
SX13・14-20	SX13・14	検出中	RF	2.3	3.4	0.3	2.1	サヌカイト	
SX13・14-21	SX13・14	検出中	剥片	2.6	2.6	0.4	2.2	サヌカイト	
SX13・14-22	SX13・14	検出中	石鏃未製品	3.4	2.1	0.6	4.4	サヌカイト	
SX13・14-23	SX13・14	検出中	剥片	2.1	3.1	0.7	3.8	サヌカイト	
SX13・14-24	SX13・14	検出中	剥片	2.1	4.1	0.4	3.3	サヌカイト	
SX13・14-25	SX13・14	検出中	MF	2.2	1.8	0.3	1.1	サヌカイト	
SX13・14-26	SX13・14	検出中	剥片	2.2	2.7	0.5	4.2	サヌカイト	
SX13・14-27	SX13・14	検出中	剥片	3.7	2.2	0.5	2.9	サヌカイト	
	SX13・14	検出中	チップ類				35.3	サヌカイト	42点
	SX13・14	検出中	剥片	2.4	1.0	0.5	0.8	サヌカイト	
	SX13・14		チップ類				4.8	サヌカイト	5点
	SX13・14	P-6	剥片	1.5	3.8	0.3	2.4	サヌカイト	
	SX13	北端部トレンチ内	チップ類				1.7	サヌカイト	2点
SX13-1	SX13		チップ類				14.0	サヌカイト	13点
SX13-2	SX13		剥片	3.7	3.7	0.7	11.2	サヌカイト	
SX13-3	SX13		MF	3.0	3.9	0.6	7.5	サヌカイト	
SX13-4	SX13		MF	1.6	2.7	0.4	1.3	サヌカイト	
SX13-5	SX13	北西区　検出時	RF	2.9	2.8	0.5	3.3	サヌカイト	
SX13-6	SX13	北西区　検出時	剥片	2.9	3.9	0.4	3.2	サヌカイト	
SX13-7	SX13	北西区　検出時	剥片	4.4	1.2	0.9	3.7	サヌカイト	
SX13-8	SX13	北西区　検出時	剥片	2.1	3.0	0.7	3.0	サヌカイト	
SX13-9	SX13	北西区　検出時	剥片	2.0	3.4	0.7	4.7	サヌカイト	
	SX13	北西区　検出時	チップ類				5.4	サヌカイト	6点
	SX13	南西区　検出時	チップ類				3.8	サヌカイト	3点
SX13-10	SX13	南西区　検出時	剥片	2.7	3.4	1.1	6.9	サヌカイト	
SX13-11	SX13	南西区　検出時	剥片	3.9	3.9	0.4	5.8	サヌカイト	
SX13-12	SX13	南西区　検出時	剥片	2.6	3.2	0.4	3.2	サヌカイト	
SX13-13	SX13	南西区　検出時	MF	1.7	4.2	0.4	2.5	サヌカイト	
SX13-14	SX13	南西区　検出時	RF	1.4	2.2	0.4	1.4	サヌカイト	
SX14-1	SX14	S-1	剥片	2.9	3.7	0.6	7.2	サヌカイト	
SX14-2	SX14	S-1	RF	1.5	1.8	0.4	1.1	サヌカイト	
	SX14	S-1	チップ類				12.6	サヌカイト	18点
SX14-3	SX14	畦畔はずし	剥片	2.6	2.1	0.6	3.4	サヌカイト	
	SX14	畦畔はずし	チップ類				5.0	サヌカイト	5点
	SX14	畦畔はずし	剥片	2.9	4.9	0.5	5.2	サヌカイト	
	SX14	中央土坑	チップ類				1.8	サヌカイト	1点
	SX14	畦畔	敲き石	4.8	4.2	3.1	82.3	砂岩	
	SX16	SP21	チップ類				0.2	サヌカイト	1点

№	遺構名		機種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
	SX16	畦	チップ類				1.6	サヌカイト	4点
SX16-1	SX16	畦	剥片	2.1	3.3	0.8	4.1	サヌカイト	
SX16-2	SX16	SK1	剥片	2.9	4.7	0.6	7.4	サヌカイト	
	SX16	SK1	チップ類				1.5	サヌカイト	1点
	SX16		チップ類				22.0	サヌカイト	27点
SX16-3	SX16		剥片	4.7	2.6	0.7	7.8	サヌカイト	
SX16-4	SX16		剥片	3.3	4.0	1.0	11.3	サヌカイト	
SX16-5	SX16		剥片	2.2	3.1	0.3	3.1	サヌカイト	
SX16-6	SX16		剥片	2.2	4.1	0.4	2.5	サヌカイト	
SX16-7	SX16		剥片	2.4	2.9	0.4	3.2	サヌカイト	
SX16-8	SX16		剥片	3.0	2.6	0.6	3.9	サヌカイト	
	SX17		剥片	2.8	3.9	1.8	10.6	サヌカイト	
	SX17		剥片	1.7	3.9	0.5	3.4	サヌカイト	
	SX17		チップ類				0.9	サヌカイト	3点
	SX17	008	チップ類				0.9	サヌカイト	3点
	SX17		チップ類				0.2	サヌカイト	1点
	SX18		MF	2.5	3.6	0.6	5.6	サヌカイト	
	SX18		チップ類				3.2	サヌカイト	2点
SX18-1	SX18		敲き石	9.3	7.9	5.2	495.0	砂岩	
SX18-2	SX18		敲き石	126.0	6.9	5.6	551.0	砂岩	
SX18-3	SX18		敲き石	10.9	5.3	4.9	400.0	砂岩	
SX18-003	SX18		敲き石	140.0	7.9	7.0	1031.0	砂岩	
SX18-016	SX18		磨石	3.2	2.8	3.0	35.1	砂岩	
	SX19		チップ類				2.4	サヌカイト	2点
SK19-1	SX19		剥片	4.0	7.6	1.5	45.1	サヌカイト	
SK19-2	SX19		剥片	4.2	2.5	2.5	13.0	サヌカイト	
	SX19		剥片	2.1	2.9	0.4	2.1	サヌカイト	
	SX20		楔形石器	1.5	4.1	0.9	5.1	サヌカイト	
	SX20		MF	3.5	4.1	0.6	8.7	サヌカイト	
	SK26		剥片	1.8	1.8	0.4	0.6	サヌカイト	
	SR01	②東岸部集石	剥片	3.1	4.9	0.5	10.7	結晶片岩	
SR01-1	SR01	②東岸部集石	RF	3.0	3.3	0.6	4.9	サヌカイト	
SR01-2	SR01	②東岸部集石	剥片	2.8	1.8	0.8	4.9	サヌカイト	
SR01-3	SR01	②東岸部集石	剥片	1.8	3.6	0.4	2.5	サヌカイト	
SR01-4	SR01	②東岸部集石	剥片	2.7	3.6	0.9	6.2	サヌカイト	
	SR01	上面精査中	楔形石器	3.7	4.4	1.1	19.4	サヌカイト	
	SR01	①	剥片	2.6	6.1	0.4	6.3	サヌカイト	
	SR01	①	磨製石斧？	4.1	5.7	1.3	25.0	斑レイ岩	破片
	SR01	①西岸部精査中	石核	7.2	3.0	3.9	73.9	サヌカイト	
	SR02		剥片	3.0	3.7	0.4	3.5	サヌカイト	
	SR02		剥片	2.6	2.8	0.7	4.4	サヌカイト	
	SR02		チップ類				0.9	サヌカイト	2点
	SR02	SE区	剥片	2.7	3.5	0.4	0.4	サヌカイト	
	SP07		チップ類				2.6	サヌカイト	1点
	SP27		剥片	2.6	4.5	0.6	6.6	サヌカイト	
SP31-1	SP31		剥片	4.1	5.0	0.7	14.0	サヌカイト	
SP31-2	SP31		剥片	2.2	3.5	1.0	6.1	サヌカイト	
SP31-3	SP31		剥片	4.3	1.7	0.7	3.1	サヌカイト	
	SP31		チップ類				3.3	サヌカイト	8点
	SP31		くぼみ石・凹石	17.5	7.9	6.1	1120.0	砂岩	半分欠損
	SP31		剥片	4.8	1.9	1.4	12.6	サヌカイト	
	SP36		チップ類				0.3	サヌカイト	1点

写　真　図　版

鶴尾神社４号墳からみた北山浦遺跡

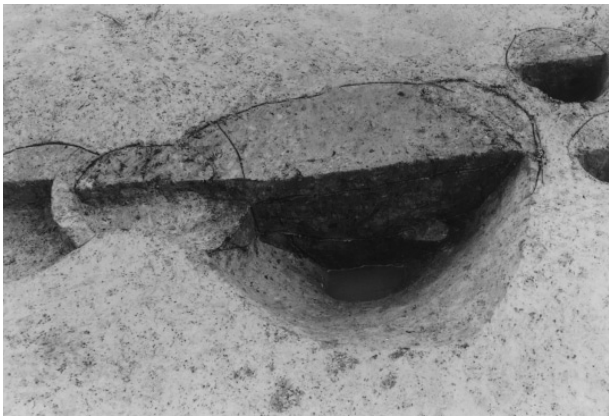
1　SH01 周辺完掘状況（北東から）

2　SB03 周辺完掘状況（北東から）

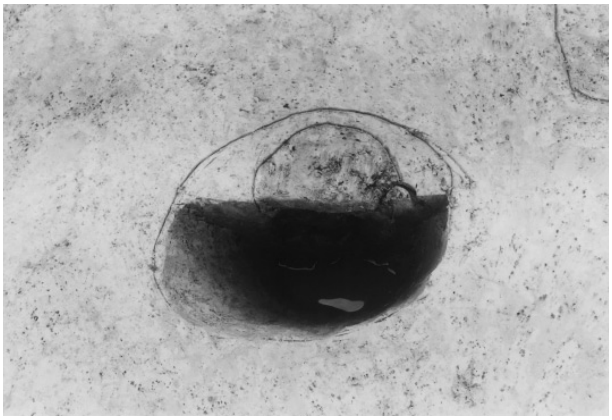
1　SH01 炭化材検出状況（北から）

2　SH01 炭化材撤去状況（北から）

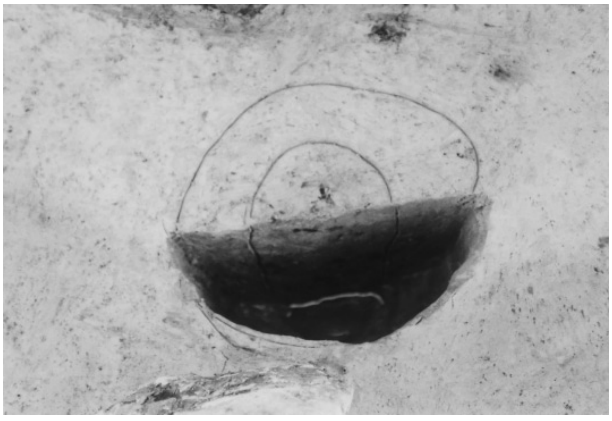
3　SH01 完掘状況（北から）



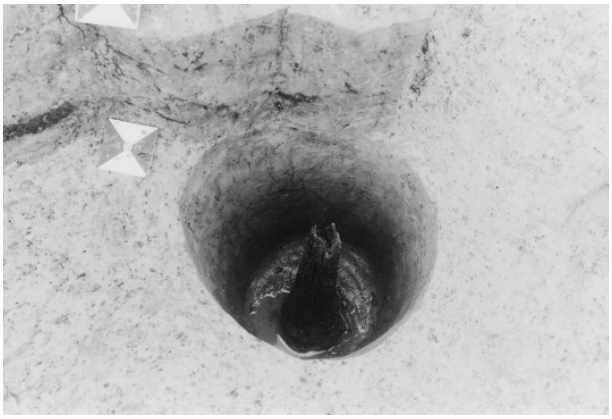
1　SH01 中央土坑半截状況



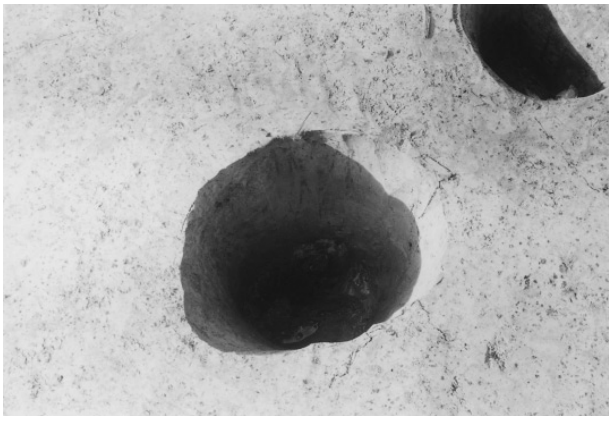
2　SH01-P3 半截状況



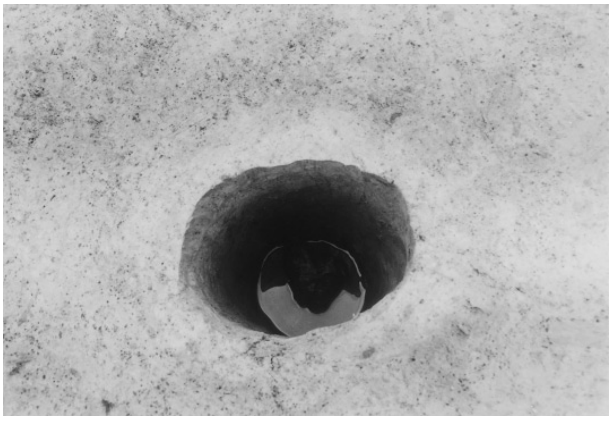
3　SH01-P6 半截状況



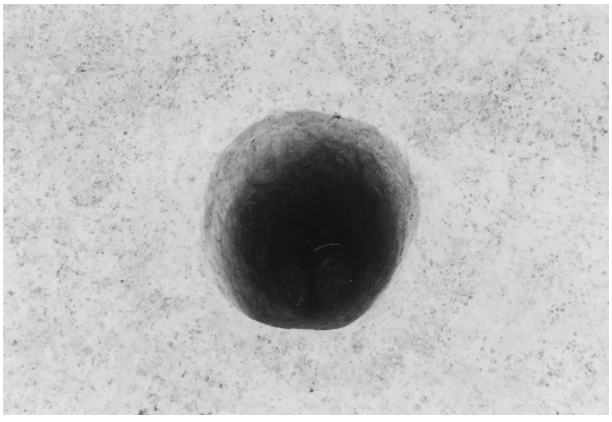
4　SH01-P1 完掘状況



5　SH01-P3 完掘状況



6　SH01-P4 完掘状況



7　SH01-P5 完掘状況

8　SH01-P6 完掘状況

1　SH02 完掘状況（北西から）

2　SH03 完掘状況（南から）

1　SH01-P1　柱材①

2　SH01-P1　柱材②

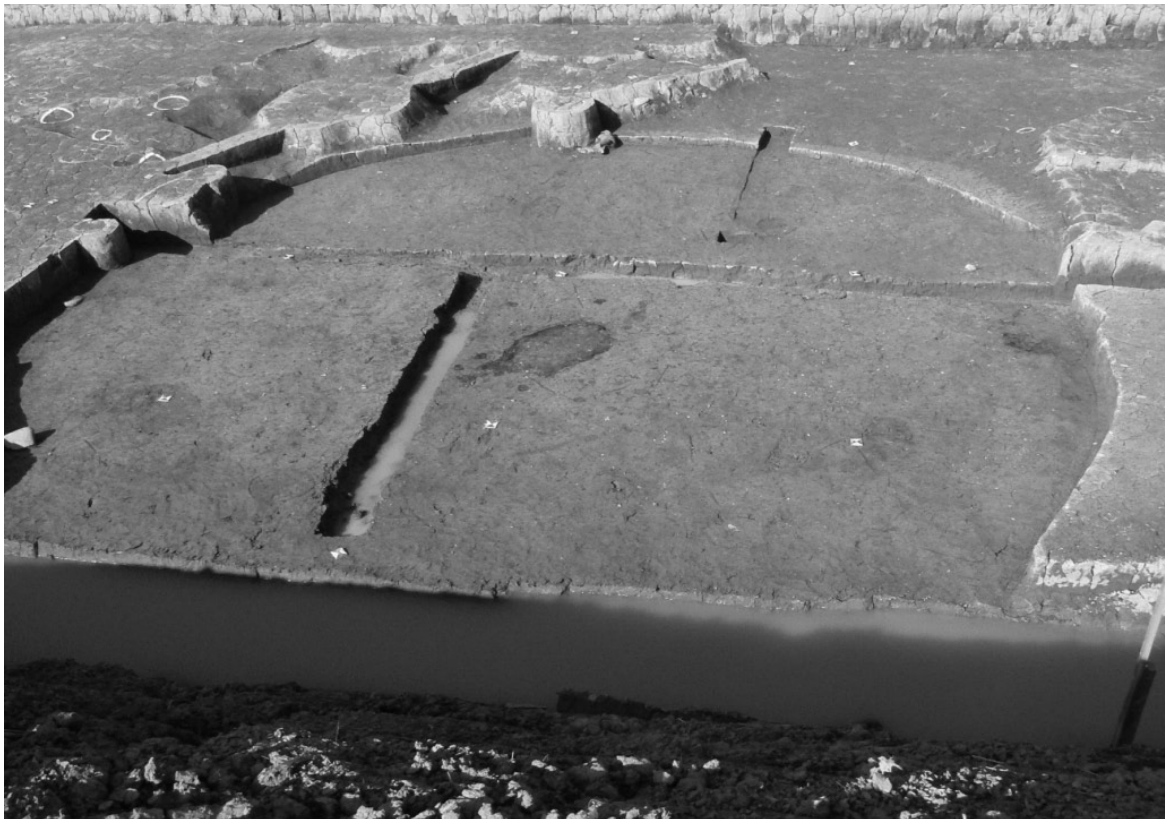
3　SH01-P6　柱材①

4　SH01-P6　柱材②

5　SH01-P2　柱材①

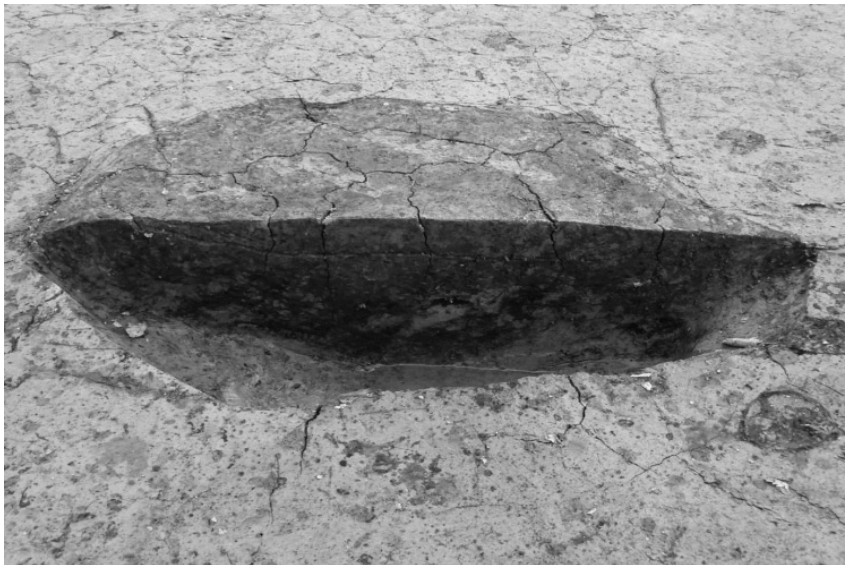
6　SH01-P2　柱材②

7　SH01-P3　柱材①



1　SH03 床面検出状況（南から）

2　SH03 中央土坑・柱穴半截状況（南から）



1　SH03 中央土坑半截状況（北西から）

2　SX10（南から）

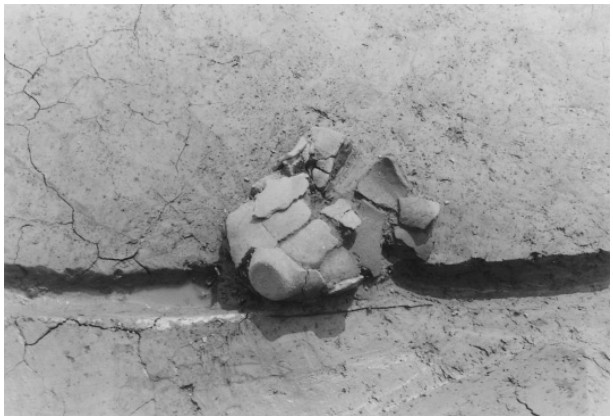
3　SX10 完掘状況（北西から）

1　SH03-P1 半截状況

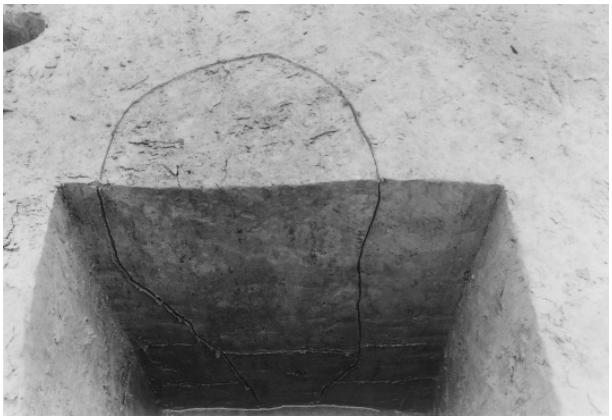
2　SH03-P2 半截状況

3　SH03-P7 半截状況

4　SH03-P8 半截状況

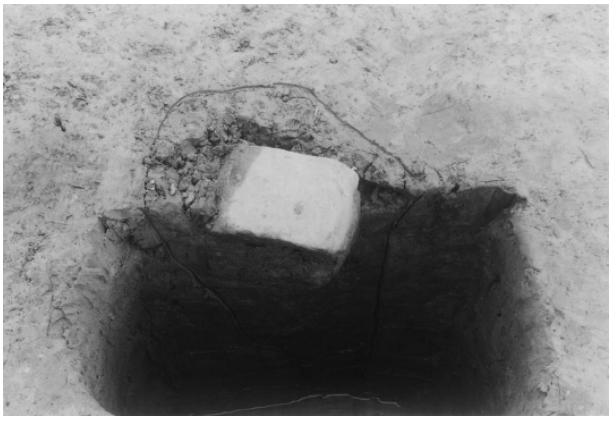


5　SH03 土器出土状況



6　SB01-P1 半截状況

7　SB01-P2 半截状況



8　SB01-P3 半截状況

1　SH03 土層（南東から）

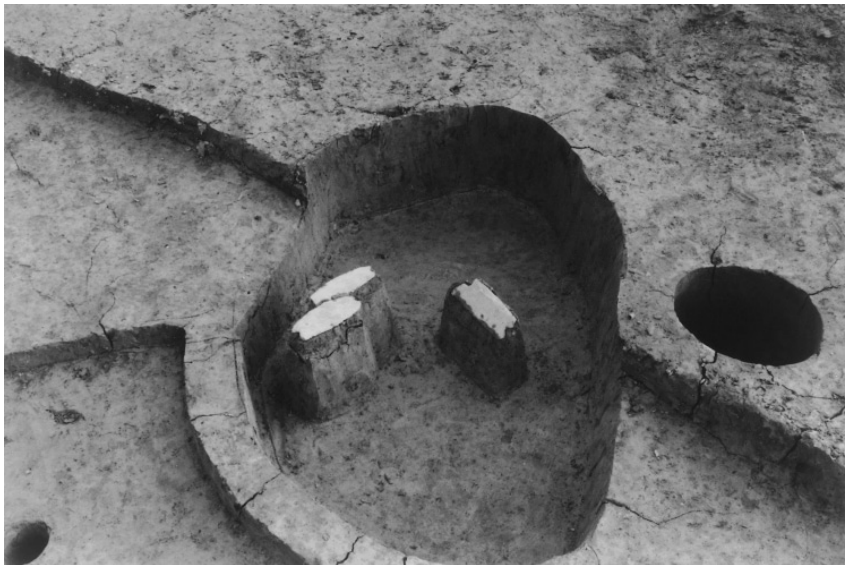
2　SB01 完掘状況（北西から）

3　SB02 完掘状況（北西から）

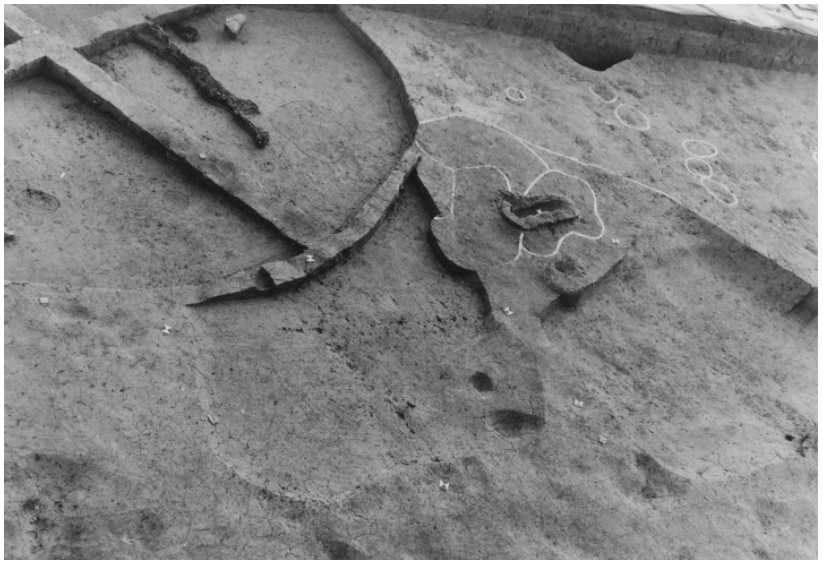
4　SB03 完掘状況（北東から）

1　SX03（北から）

2　SX03 完掘状況（北から）



3　SK09 石包丁検出状況（北から）



1　SX08 完掘状況（北から）

2　SX07 完掘状況（東から）

3　SX08 土器出土状況（西から）

4　SX08 完掘状況（北から）

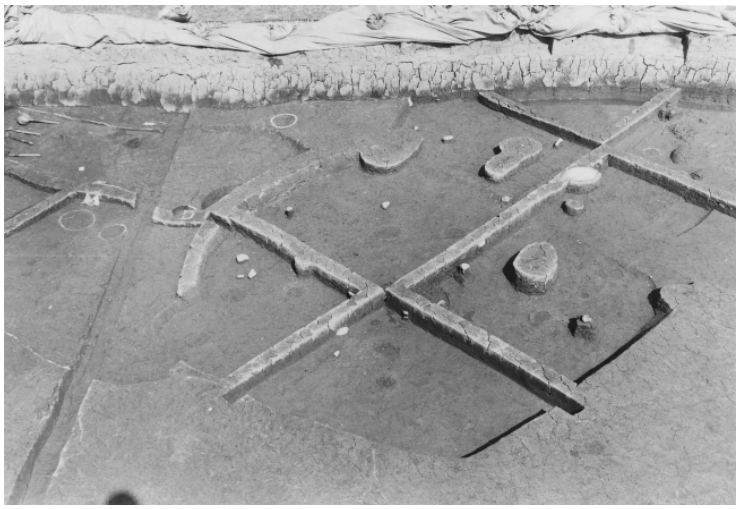
1　SX09 周辺状況（北から）

2　SX09 完掘状況（北から）

3　SX09 完掘状況（北西から）

1　SX13・14 完掘状況（南から）

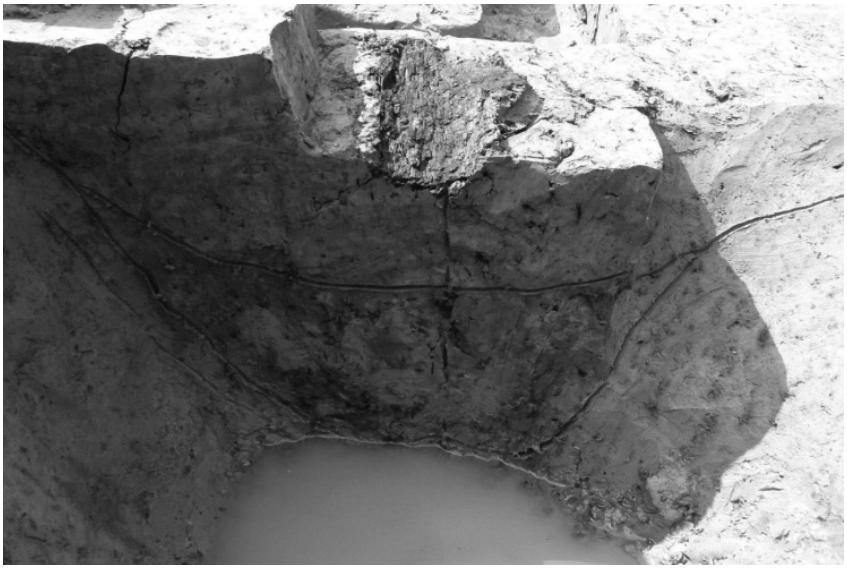
2　SX09 土器出土状況（北から）



3　SX13・14 周辺状況（南から）

1　EN 区完掘状況（南東から）

2　SX19 周辺完掘状況（南から）



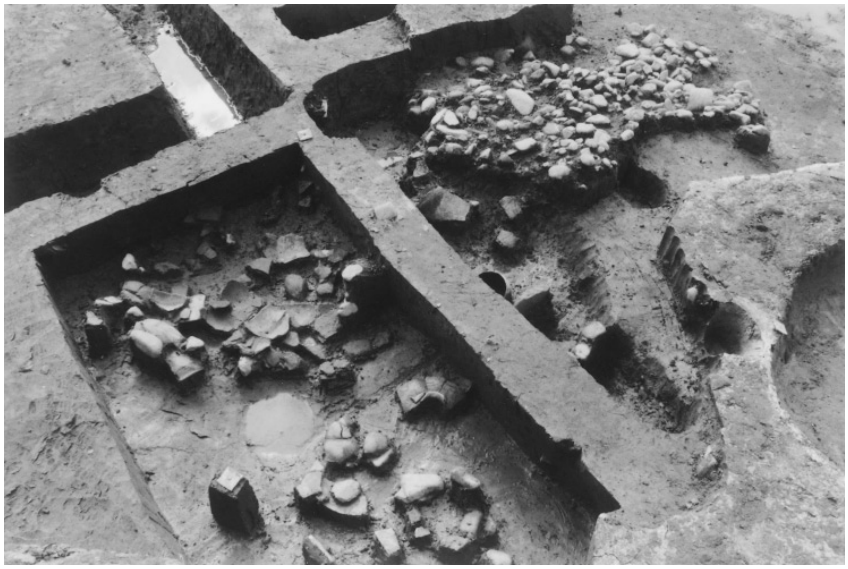
1　SH04 中央土坑（西から）

2　SX16 中央土坑（南から）

3　SX14 中央土坑（東から）

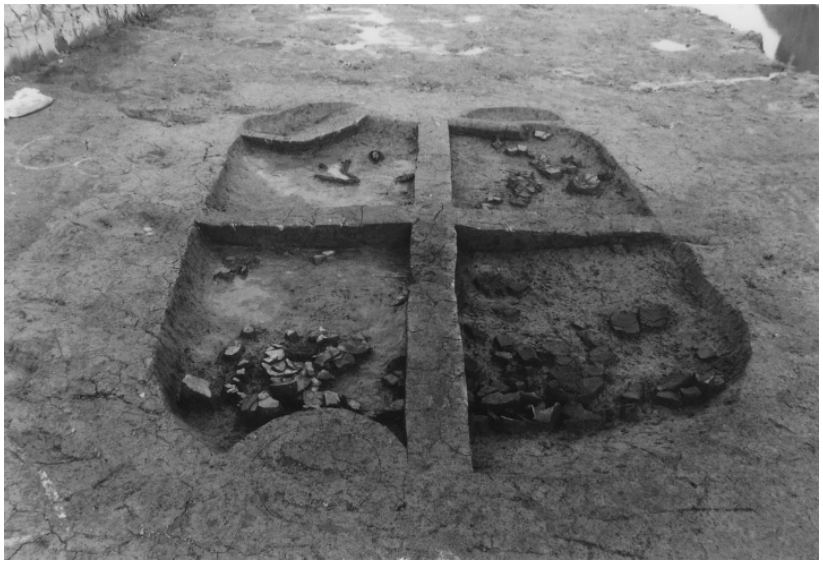
1　SX17 完掘状況（北から）

2　SX17 土器出土状況（北から）



3　SX18 土器出土状況（北から）

1　SX15・16 完掘状況（南から）



2　SX20 土器出土状況（西から）

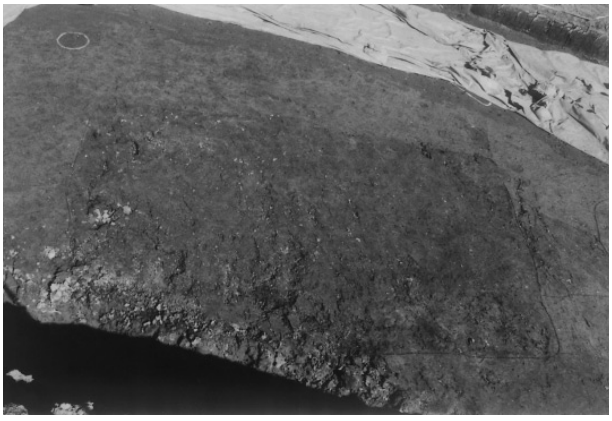
3　SX15・16 周辺・EN 区北壁土層（南から）

4　SX20 完掘状況（東から）

1　SX11　最下層状況（北から）

2　SX17　土器出土状況（東から）

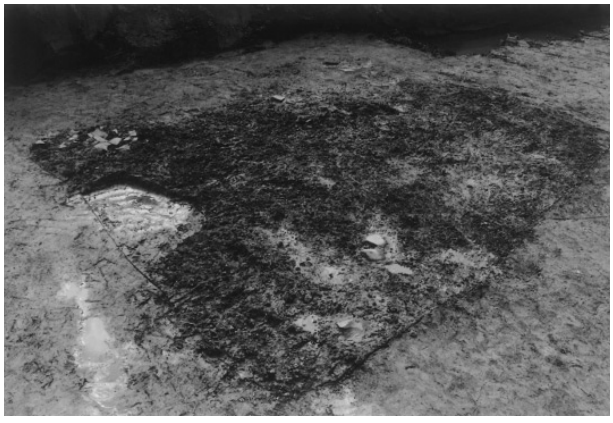
3　SX18　土器出土状況（東から）



4　SX19　検出状況（南から）

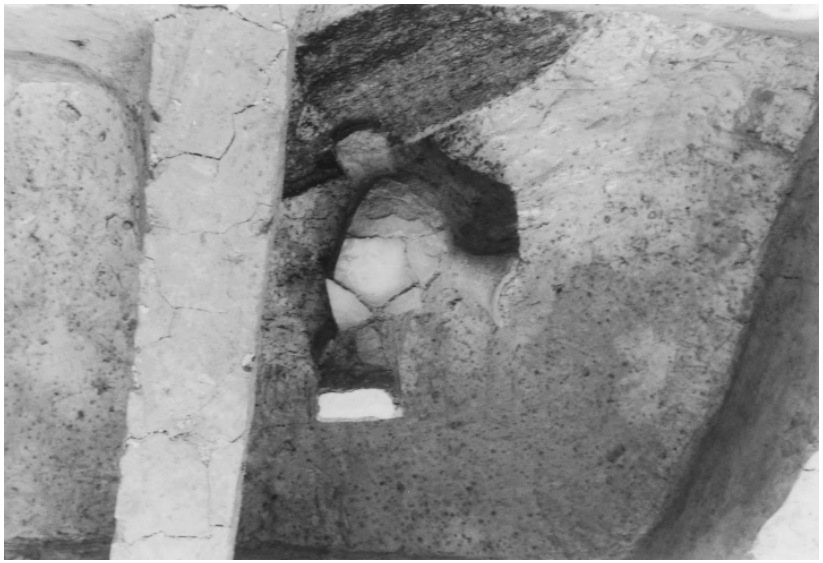
5　SX19　焼土検出状況（北から）

6　SX20　検出状況（南から）

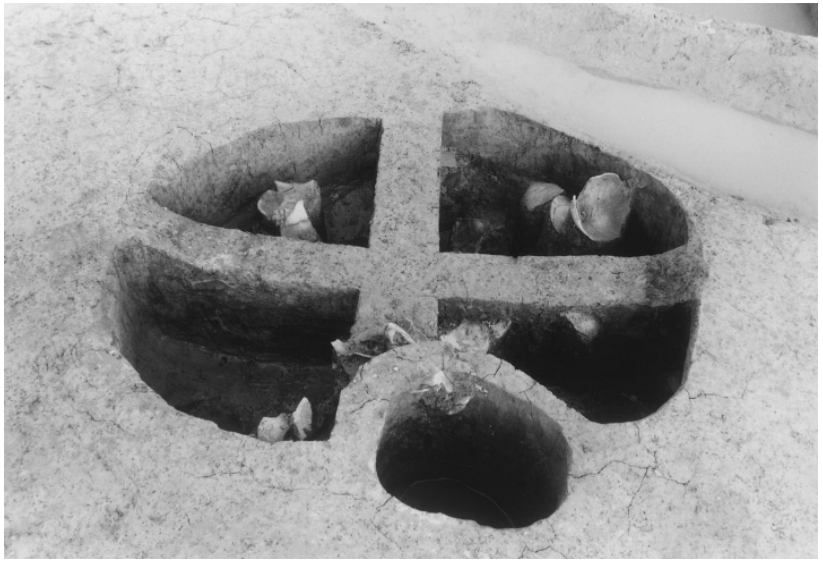


7　SX20　検出状況（北から）

1　SK21 土器出土状況（南から）



2　SK21 土器出土状況（南から）



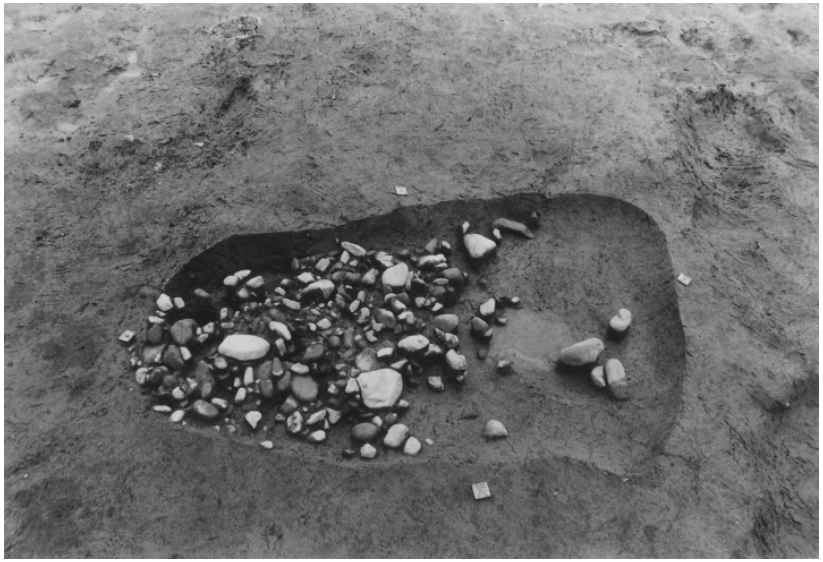
3　SK26 土器出土状況（西から）

4　SK26 完掘状況（南から）

1　SK27 土器出土状況（南西から）

2　SK27 土層（東から）

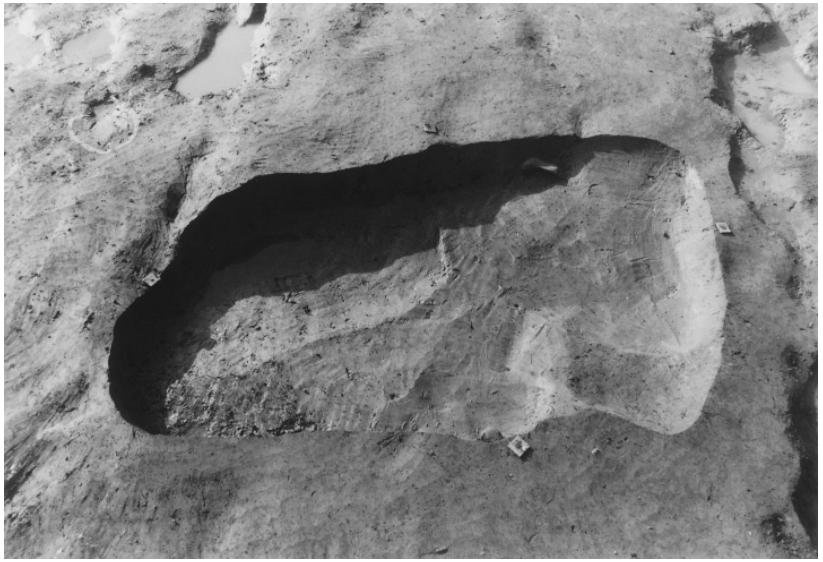
3　SK27 完掘状況（南から）



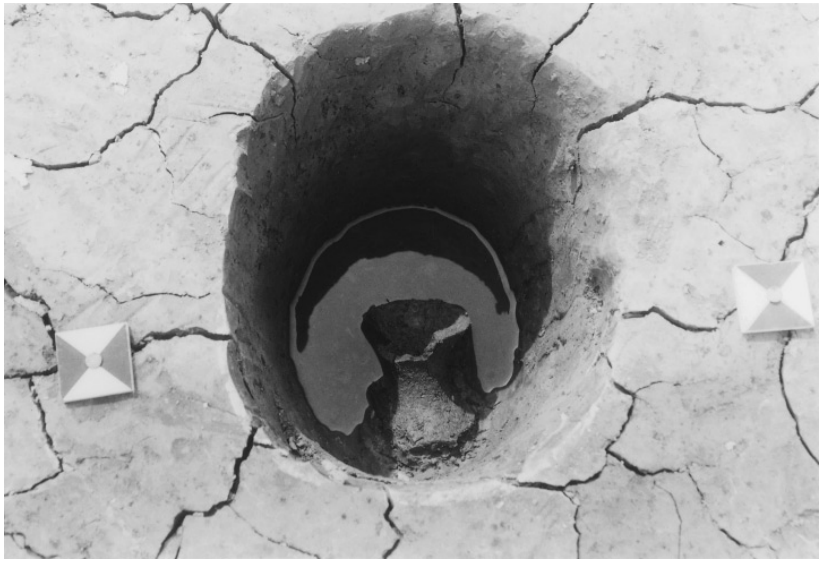
4　SK32 完掘状況（北から）

1　SK32 半截状況（西から）

2　SK32 土層（南から）



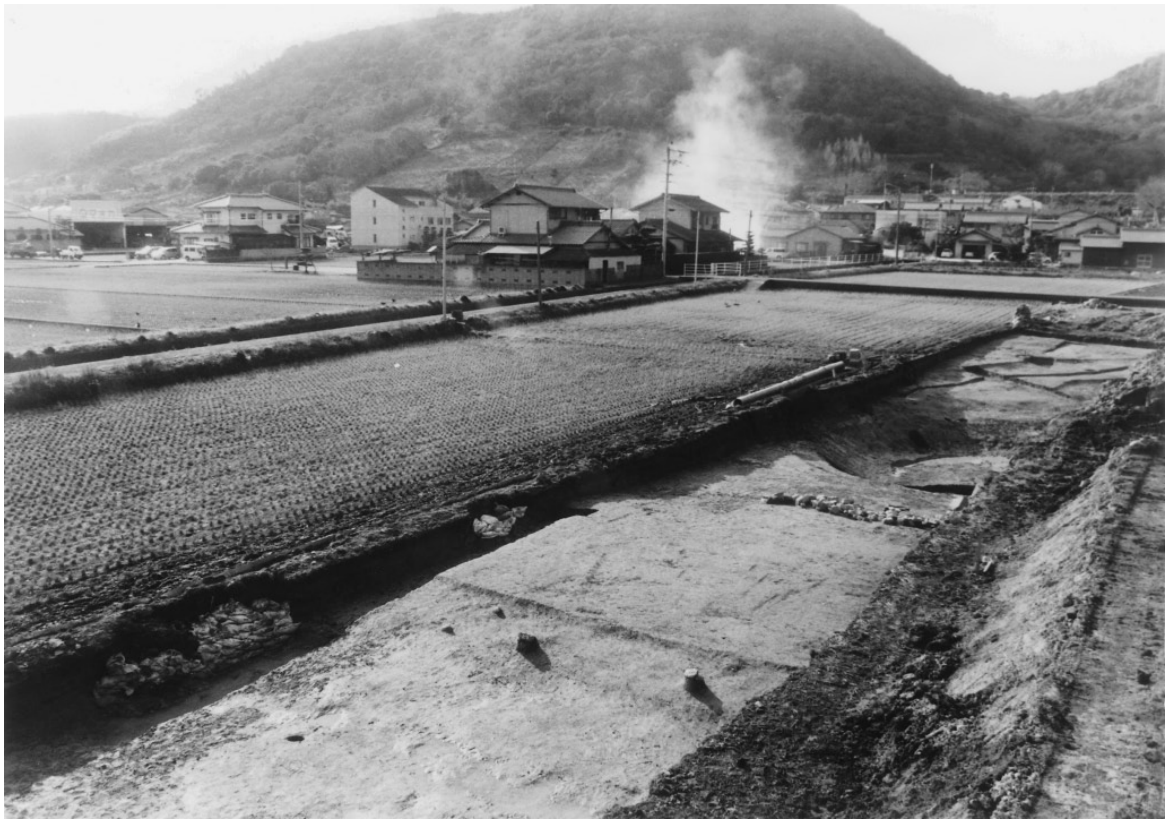
3　SK32 完掘状況（北から）



4　SX05-P05（南から）

1　ES 区 SR01 南側完掘状況（北東から）

2　ES 区 SR01 北側完掘状況（南東から）



1　ES 区 SR01 南側全景（北東から）

2　EN 区 SR01 北側全景（南東から）

1　EN 区 SR01 完掘状況（南から）

2　SR01 西岸断ち割り状況（南から）

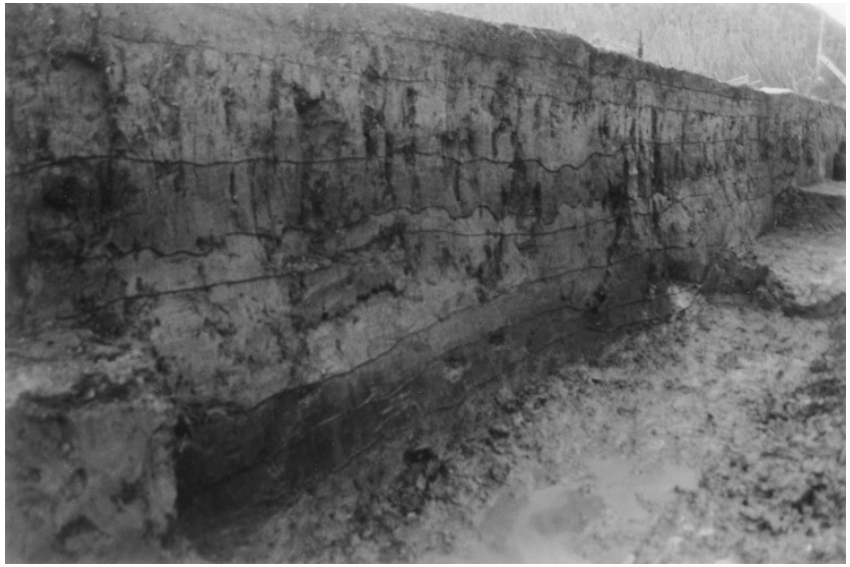
3　EN 区 SR01 土層（南東から）

4　SR01 中州断ち割り状況（南から）

1　ES 区 SX01 南側木製品等検出状況（南東から）

2　ES 区 SR01 南側土層（西から）

3　ES 区 SX01 南側木製品等検出状況（南から）



4　WS 区 SR02 土層（北から）

1　ES 区 SX02 検出状況

2　SR01 木製品出土状況（南から）

3　SR01 土器（715）出土状況

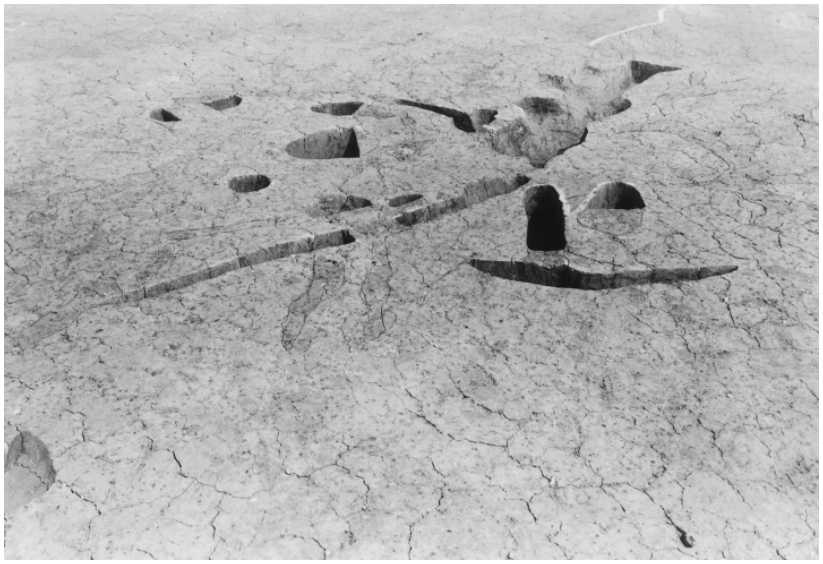
1　ES 区東側完掘状況（北西から）

2　ES 区 SR02 完掘状況（東から）

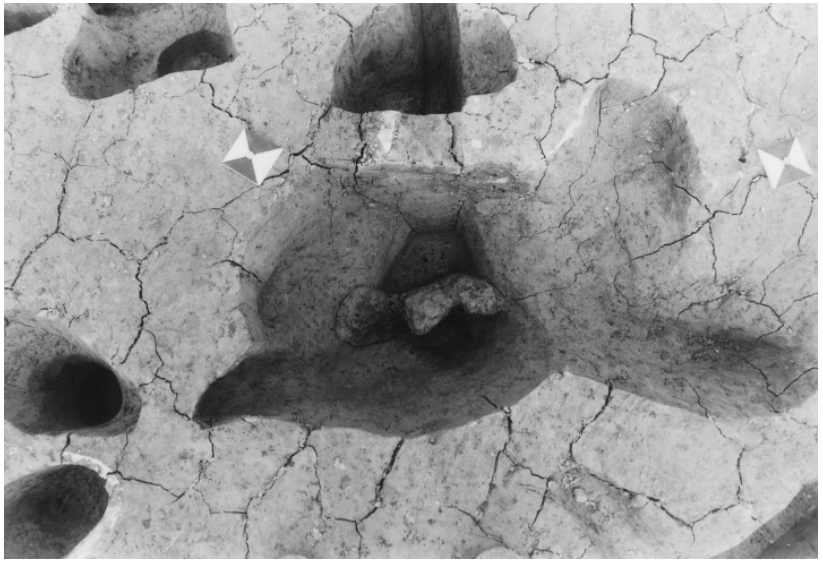
1　SX05 完掘状況（南西から）

2　SX05-SK12 完掘状況（北東から）

1　SX05-SK14 周辺完掘状況



2　SX05-SK12 周辺（南から）



3　SX05-SK14 詳細状況

4　SX04 周辺土層 EN 区西壁

1　WS 区東側完掘状況（北から）

2　WN 区東側完掘状況（南西から）

1　SX19 周辺完掘状況（南西から）

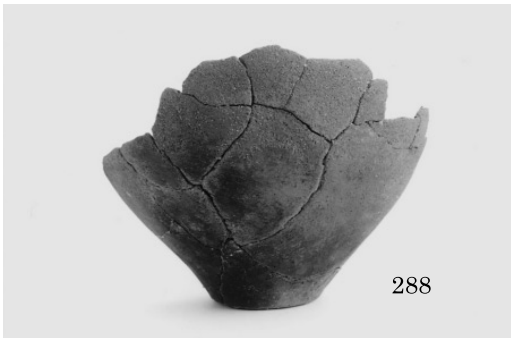
2　EN 区 SR02 周辺完掘状況（南東から）

17

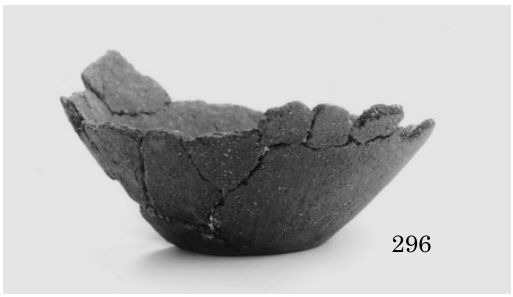
174

283

284


288

287

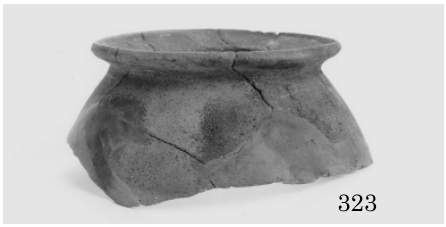

296

293

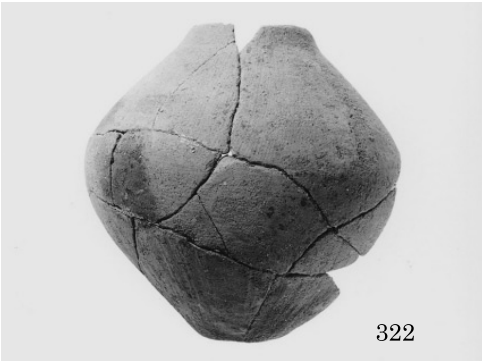
302

SH01,SH03,SX08 出土遺物

333


323

321


322

182

360

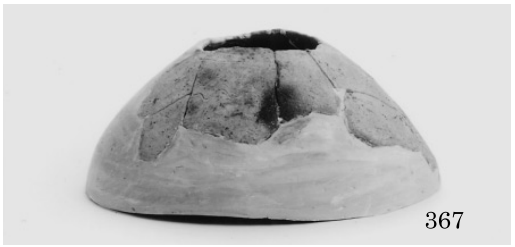
314

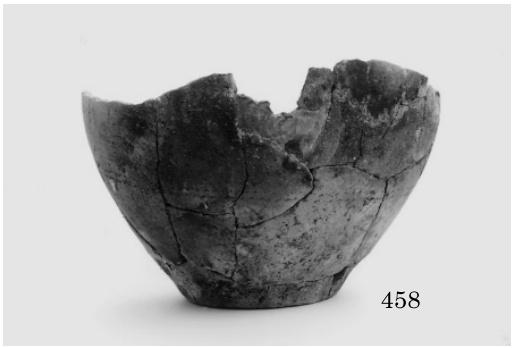
331

325

332

SX09,SX10 出土遺物


367


458

450

457

448

447

449

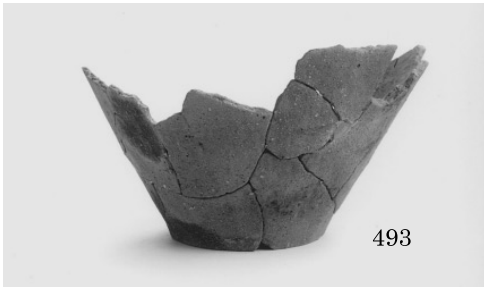
456

SX13,SX17 出土遺物

464

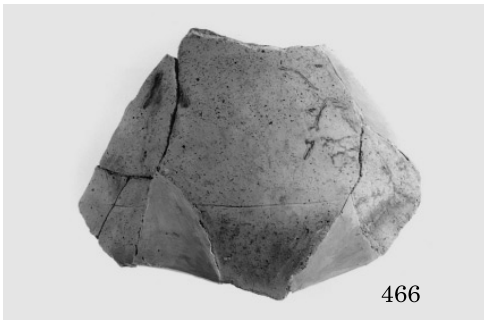
483

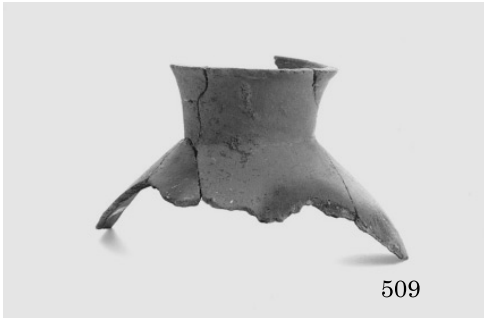
492


493

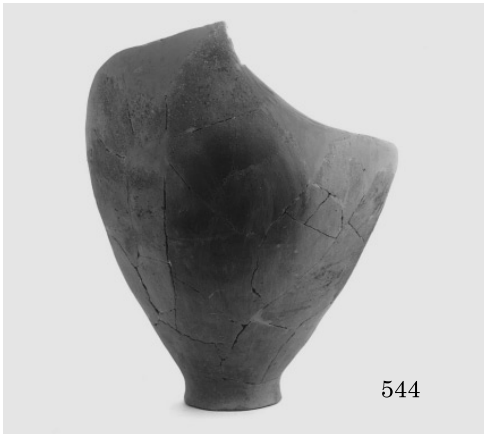
476

465


466


509

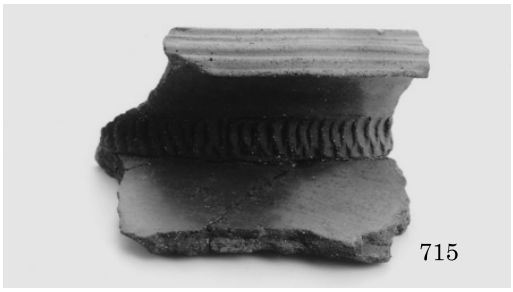
475


544

SX18,SX19,SX20,SX21 出土遺物

835

836


715

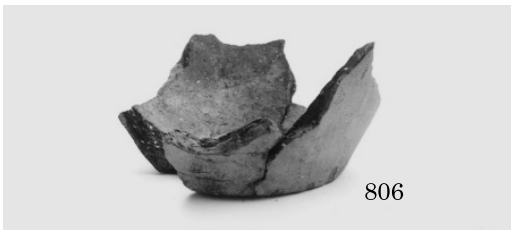
837

647

838

648

719


806

714

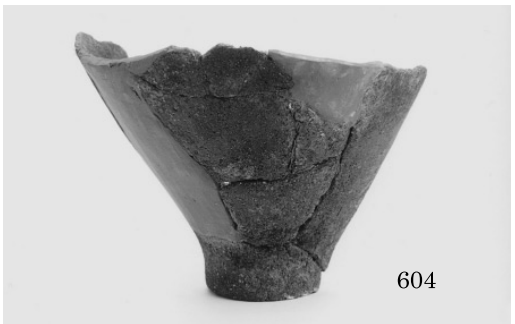
SR01,SR02,SX01,SP31 出土遺物

586

589

634

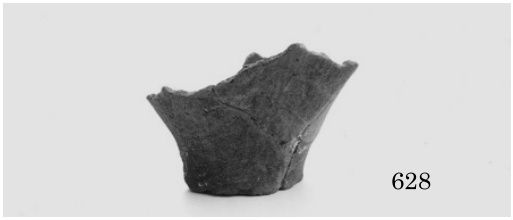
582


604

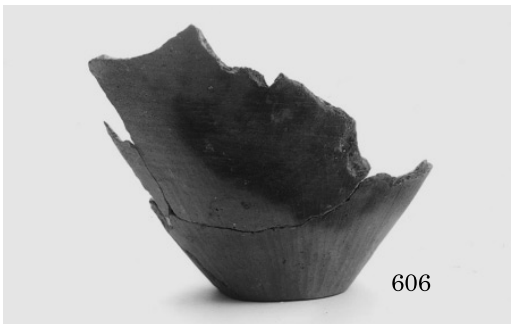
680

584

642

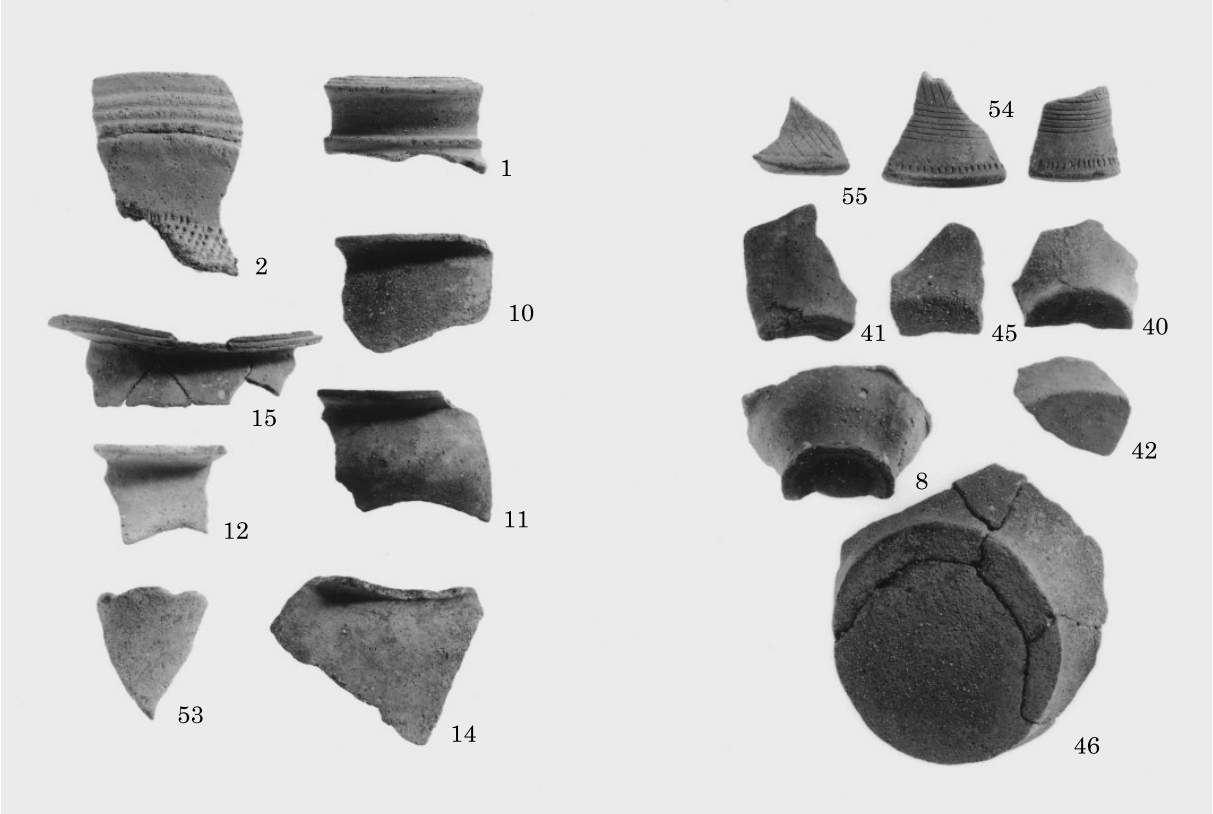

628

632


606

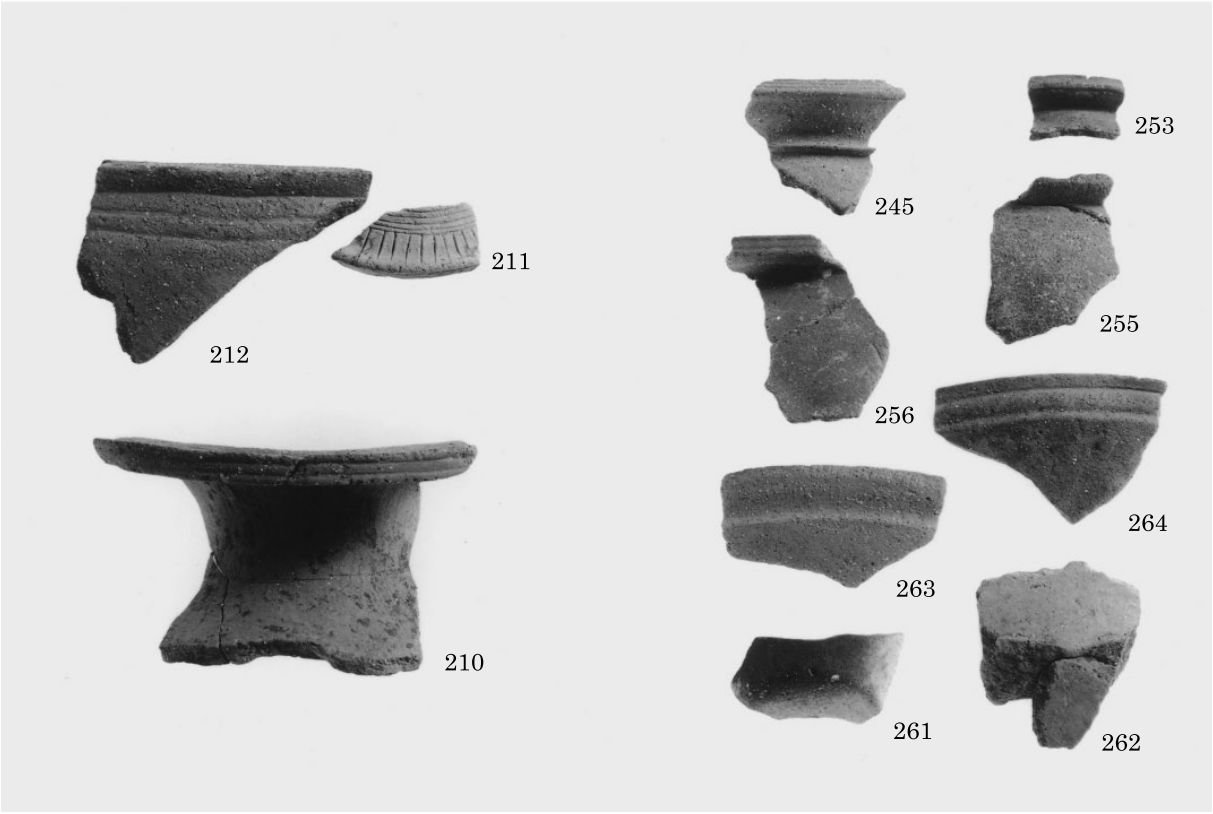
SK21,SK26,SK27,SD08,SP31 出土遺物

SX04,SX05-SK02,遺構検出時　出土遺物



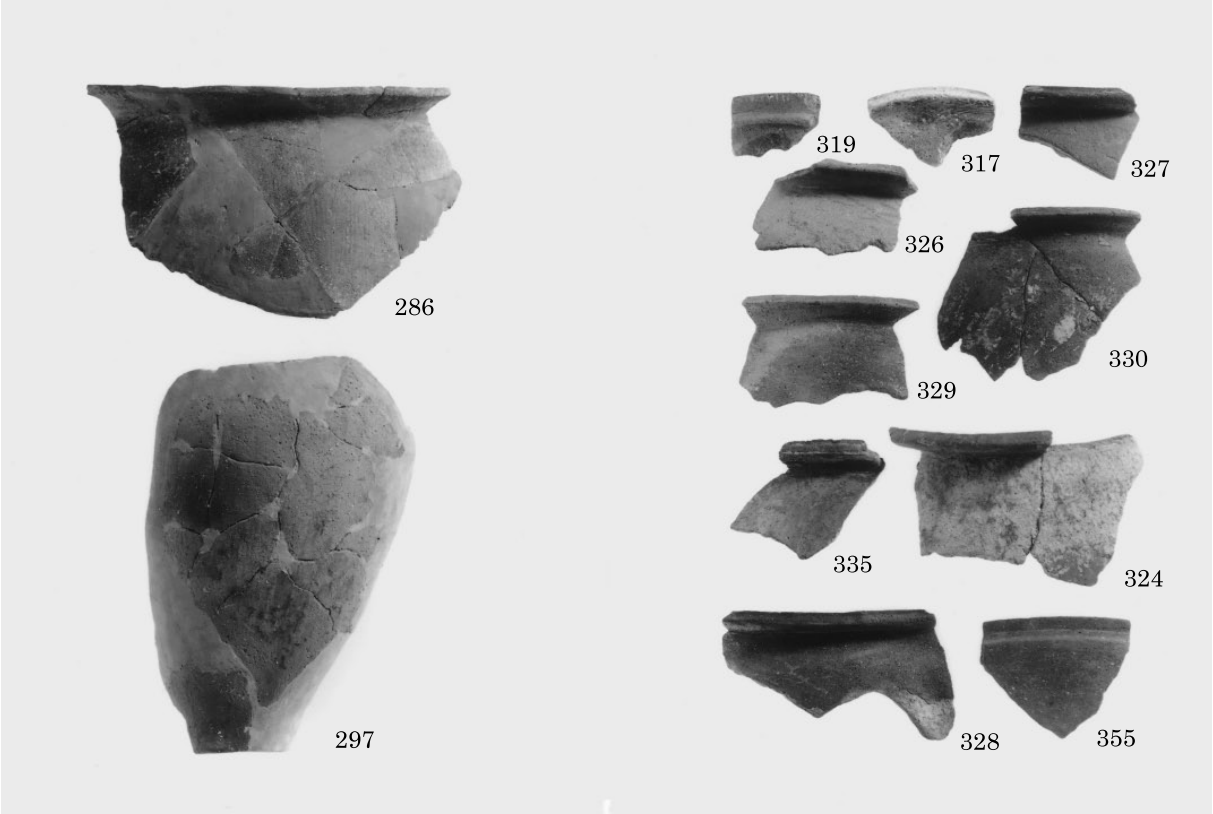
1 SH01,SX06・08 出土遺物

2 SH01 出土遺物



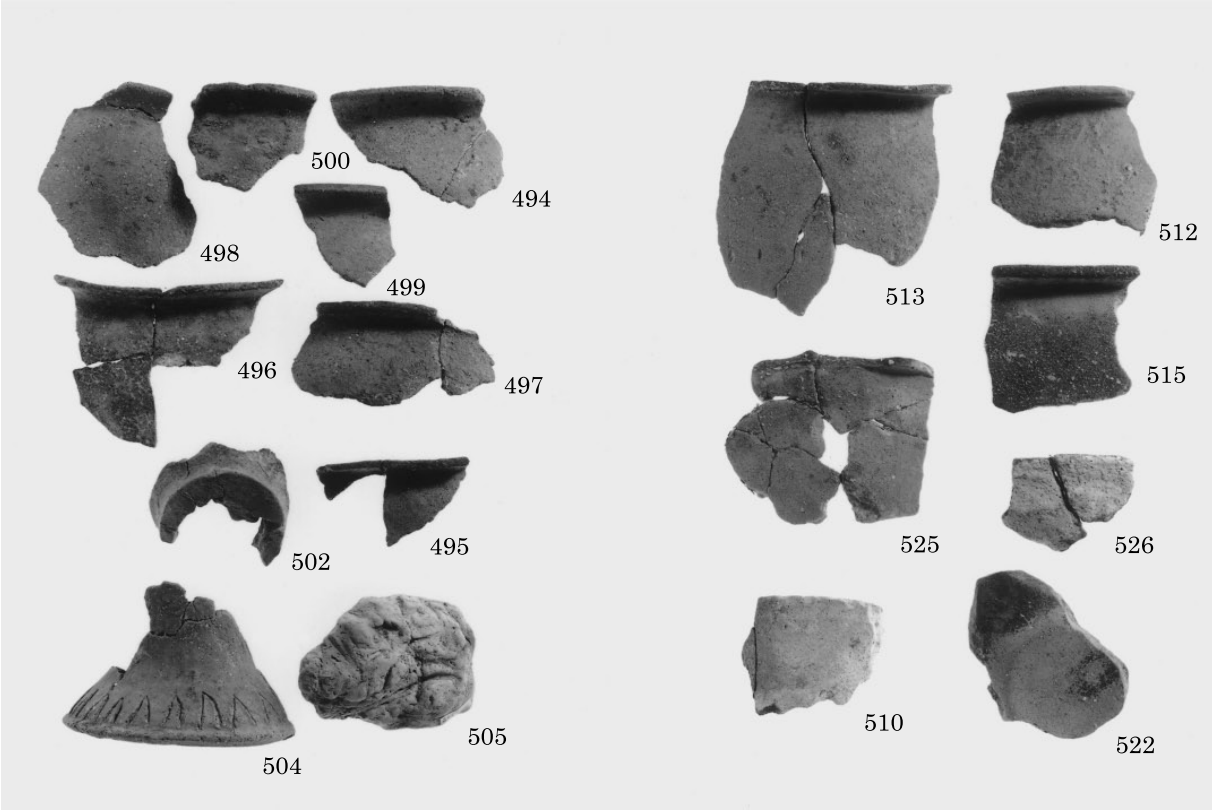
3 SB01,SB03 出土遺物

4 SX07 出土遺物



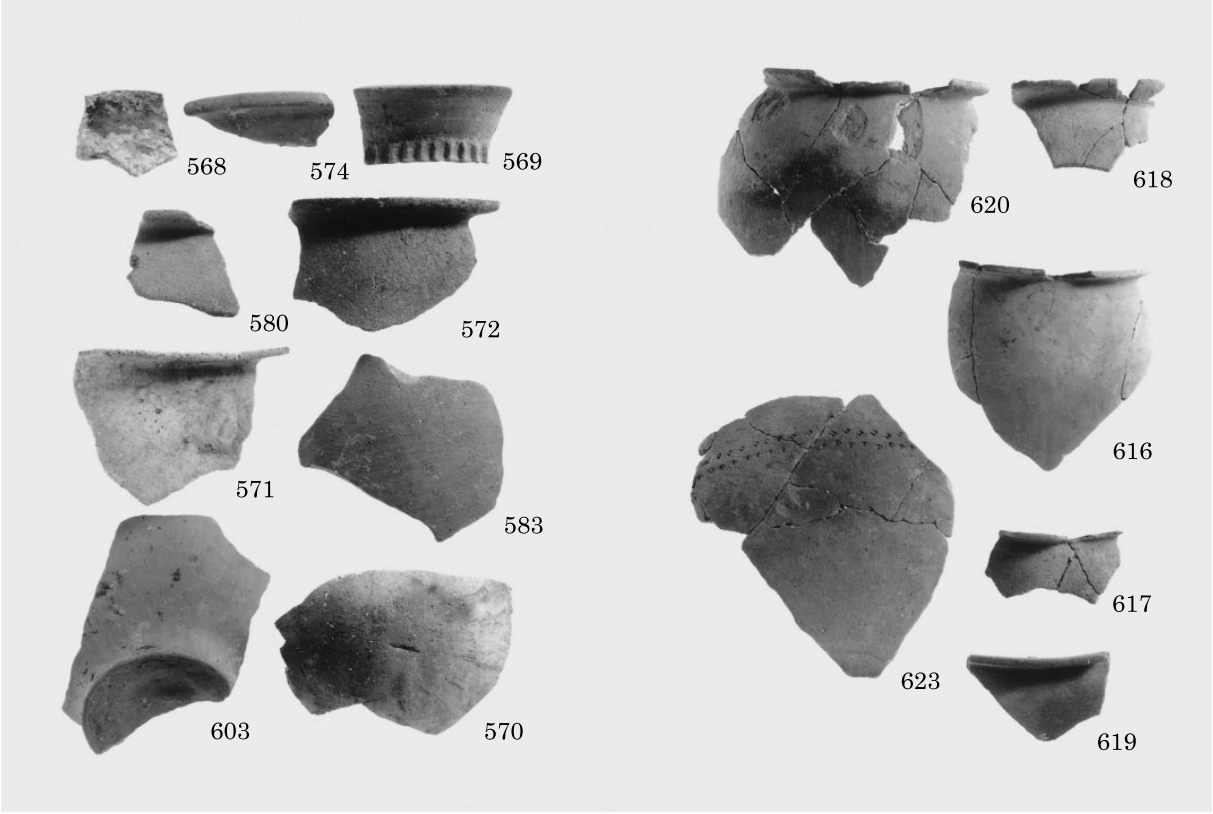
1 SX08 出土遺物

2 SX09 出土遺物



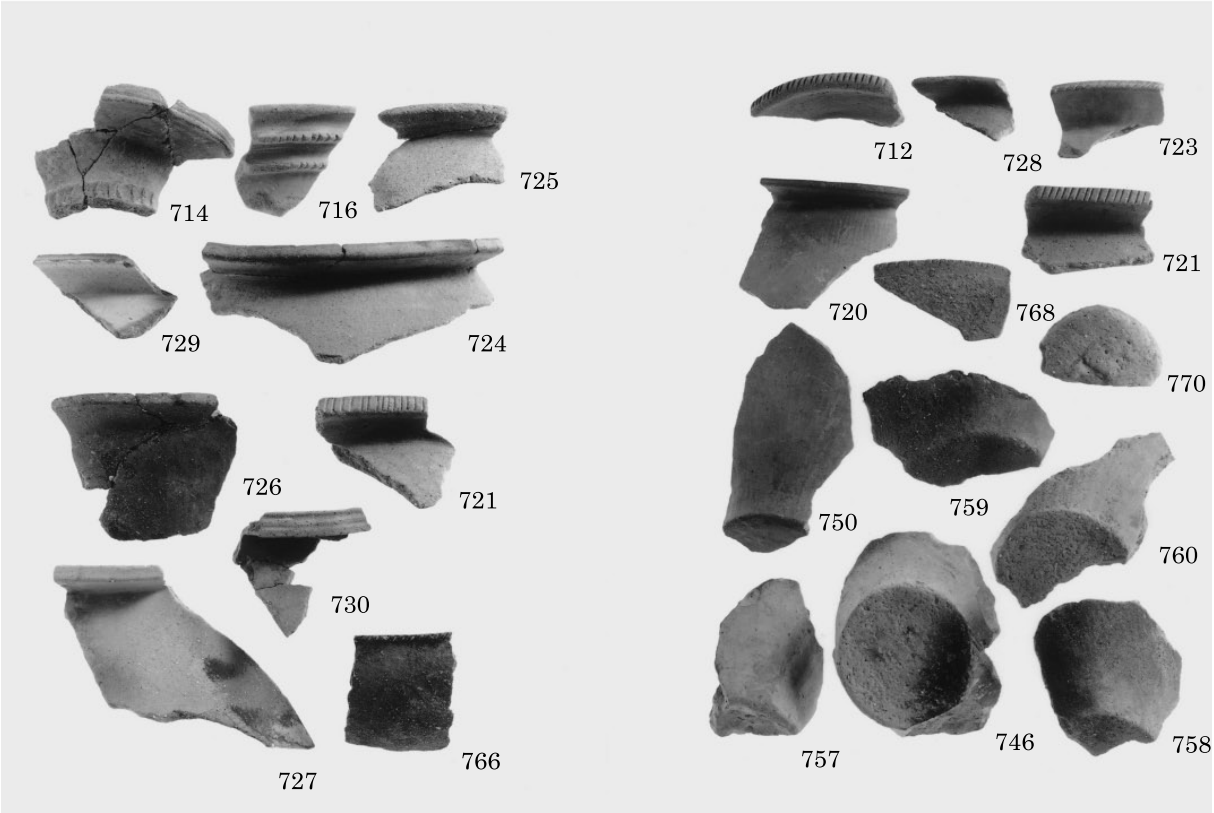
3 SX19 出土遺物

4 SX20 出土遺物



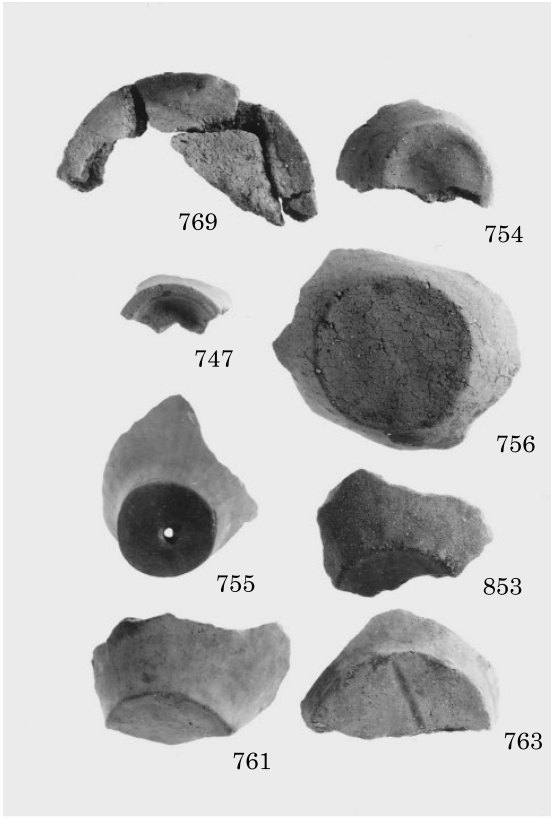
1 SK21,SK26 出土遺物

2 SK27 出土遺物

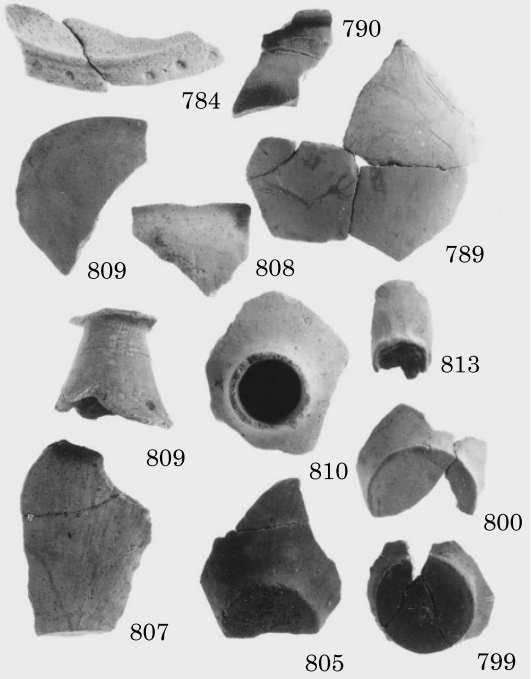


3 SR01 出土遺物

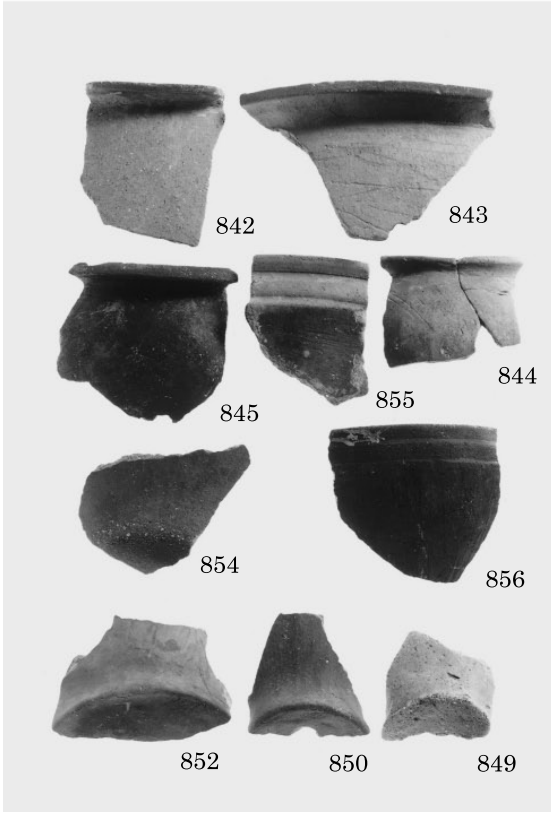
4 SR01 出土遺物



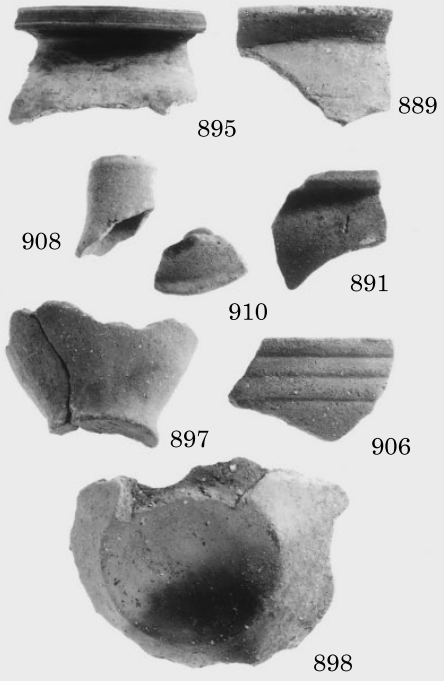
1 SR01,SR02 出土遺物



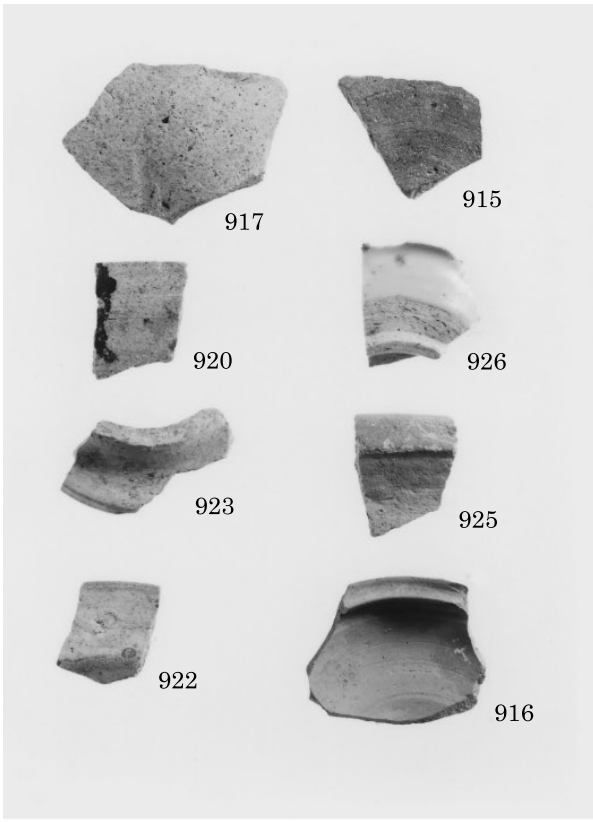
2 SX01 出土遺物



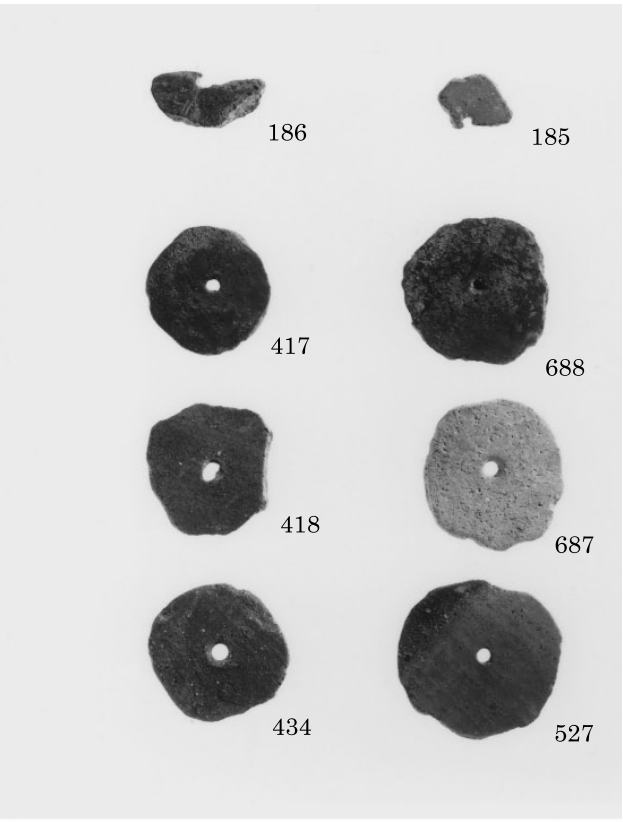
3 SR02 出土遺物



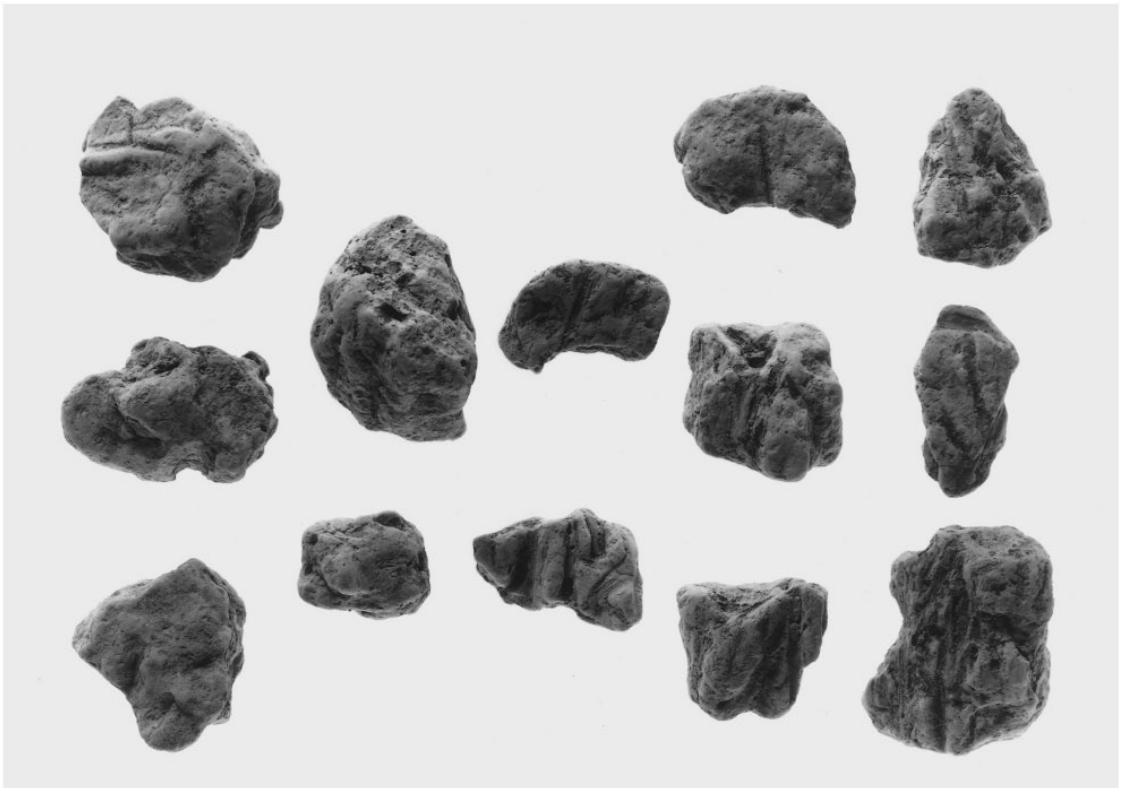
4 その他 出土遺物



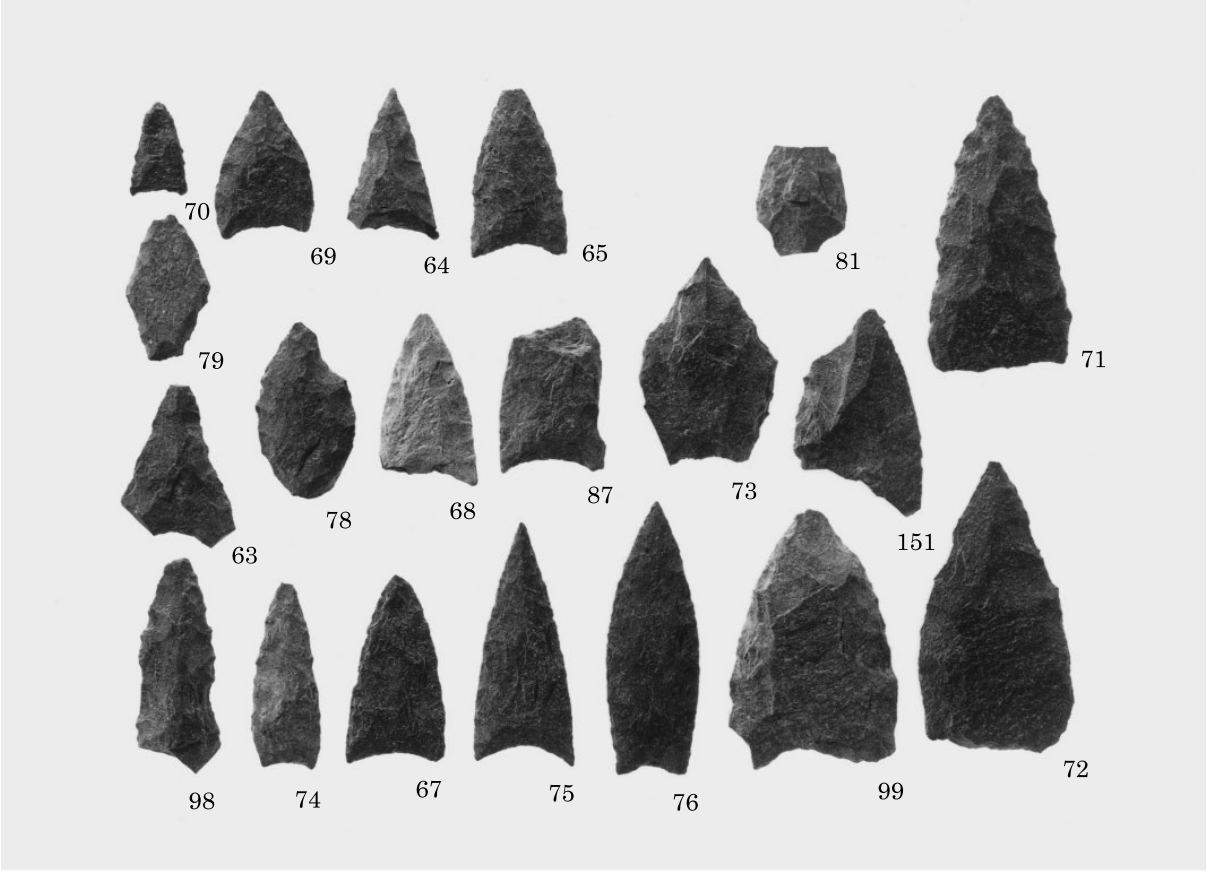
1 その他 出土遺物



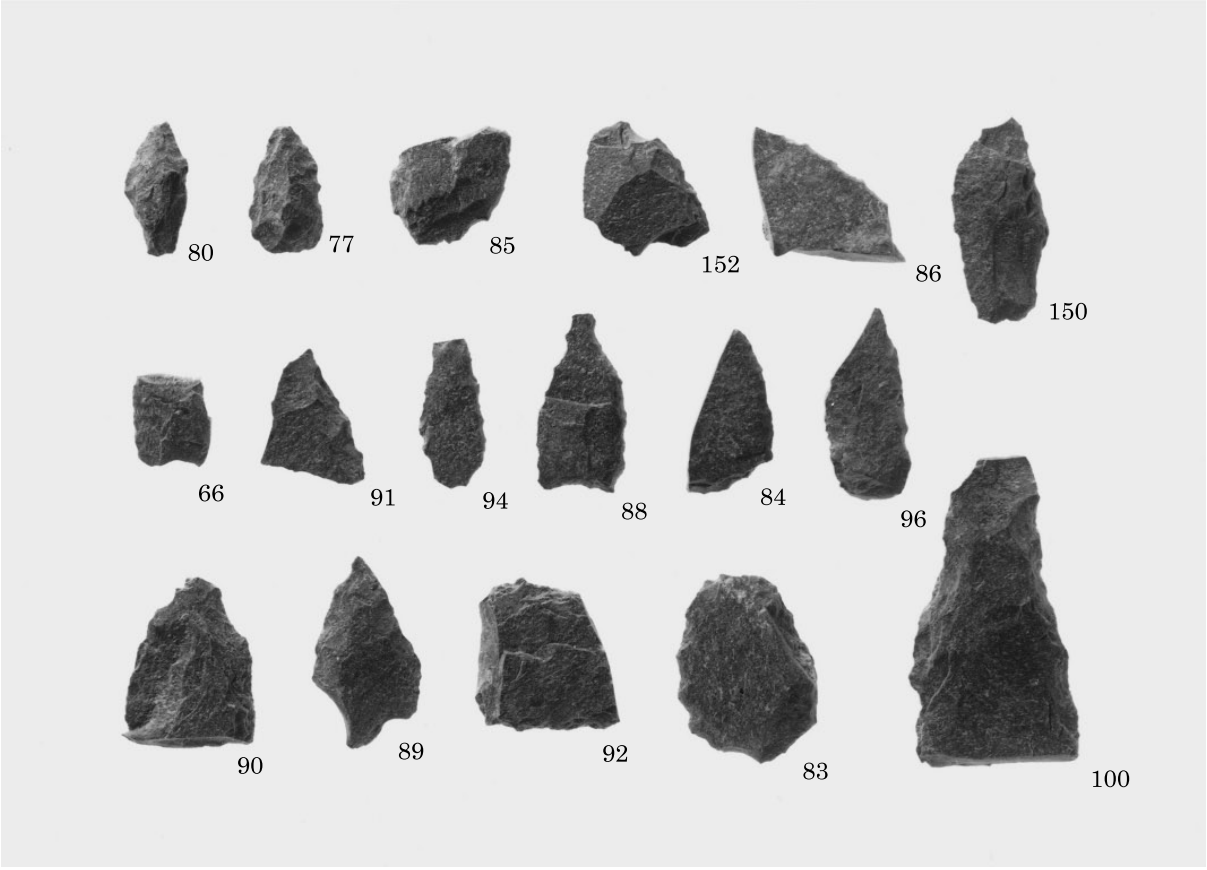
2 SH03,SX13・14,SX16,SX20,SD08・SK30,SD11
出土遺物



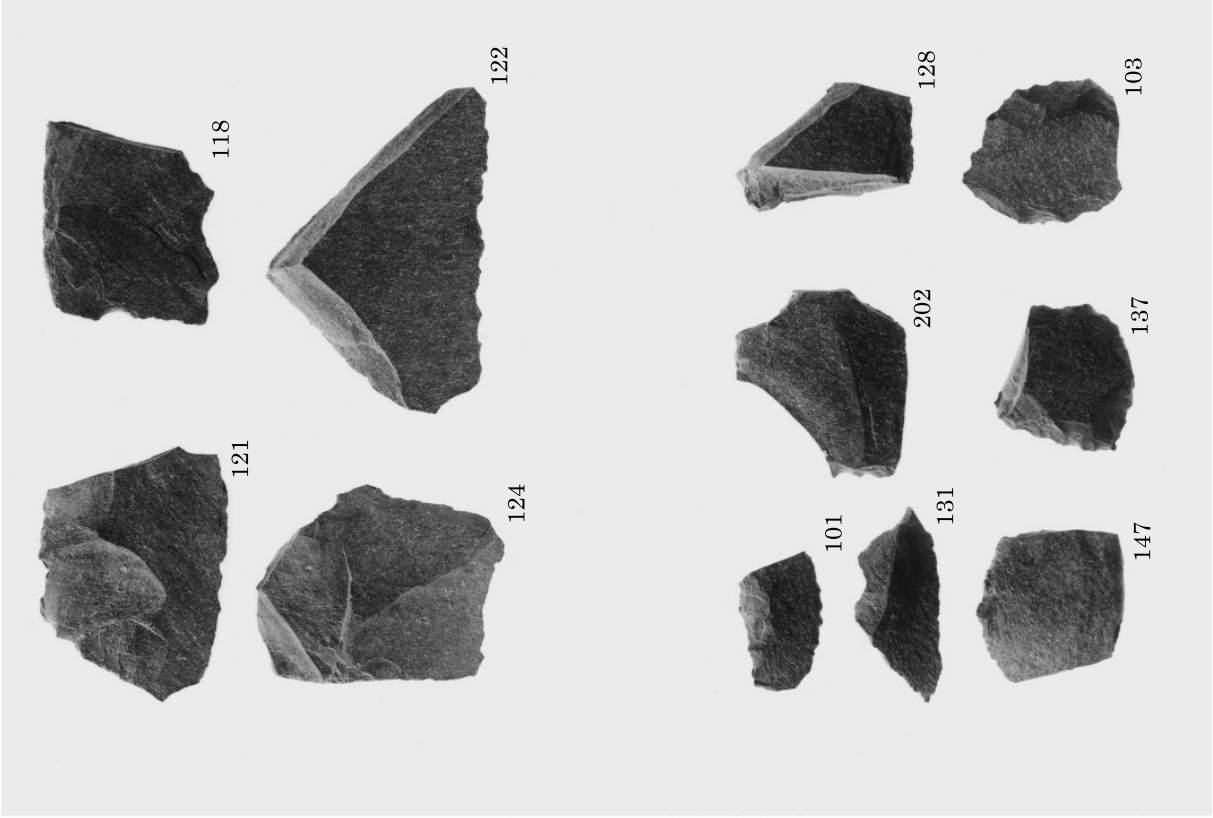
3 粘土塊



1 SH01 出土遺物

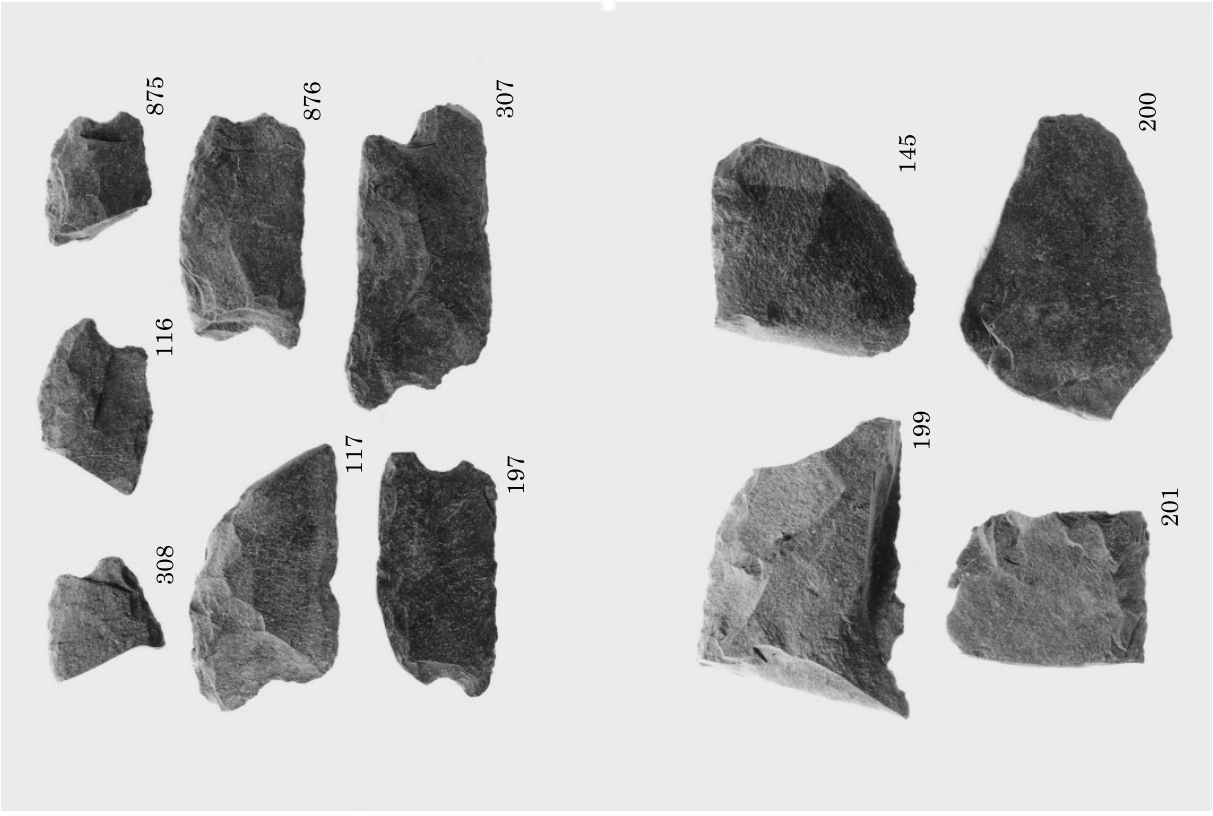


2 SH01,SX06 出土遺物



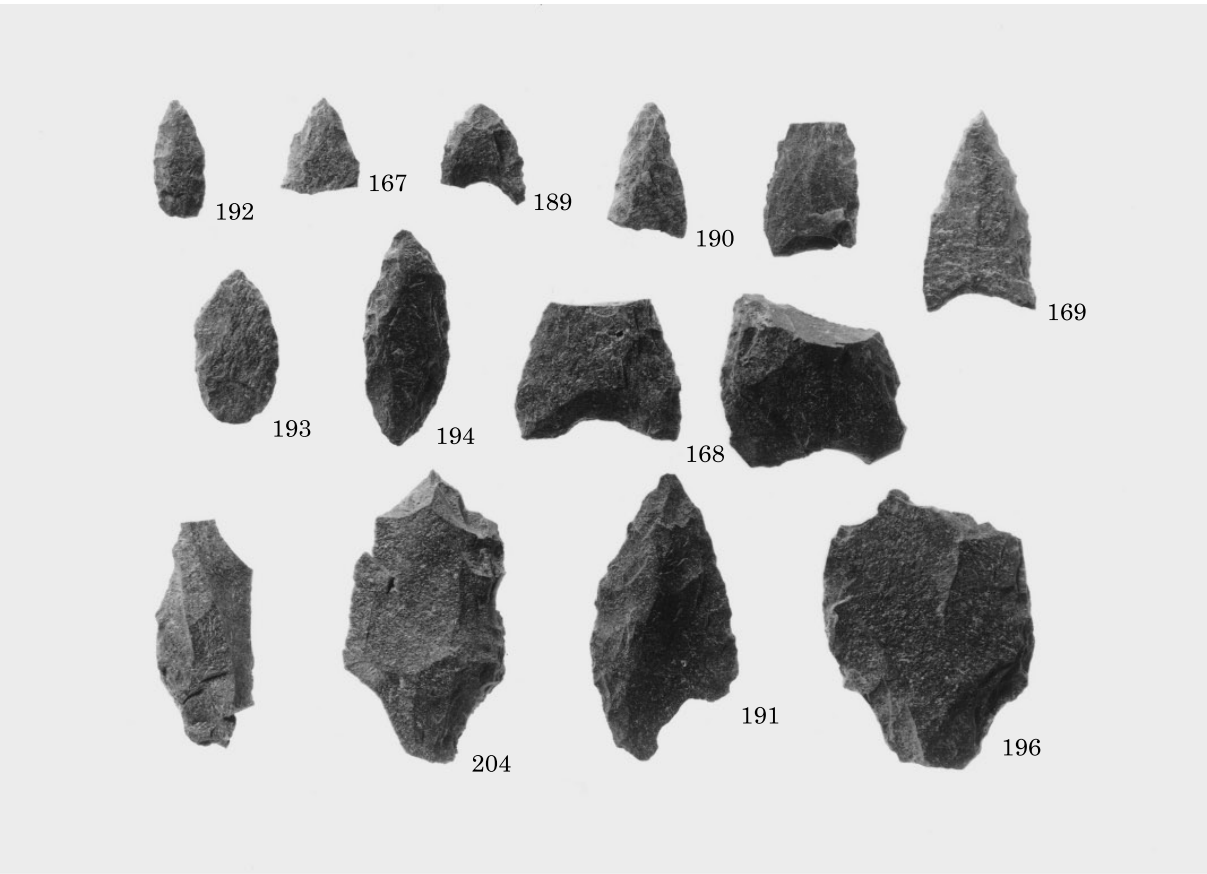
1 SH01 出土遺物

2 SH01,SH03 出土遺物

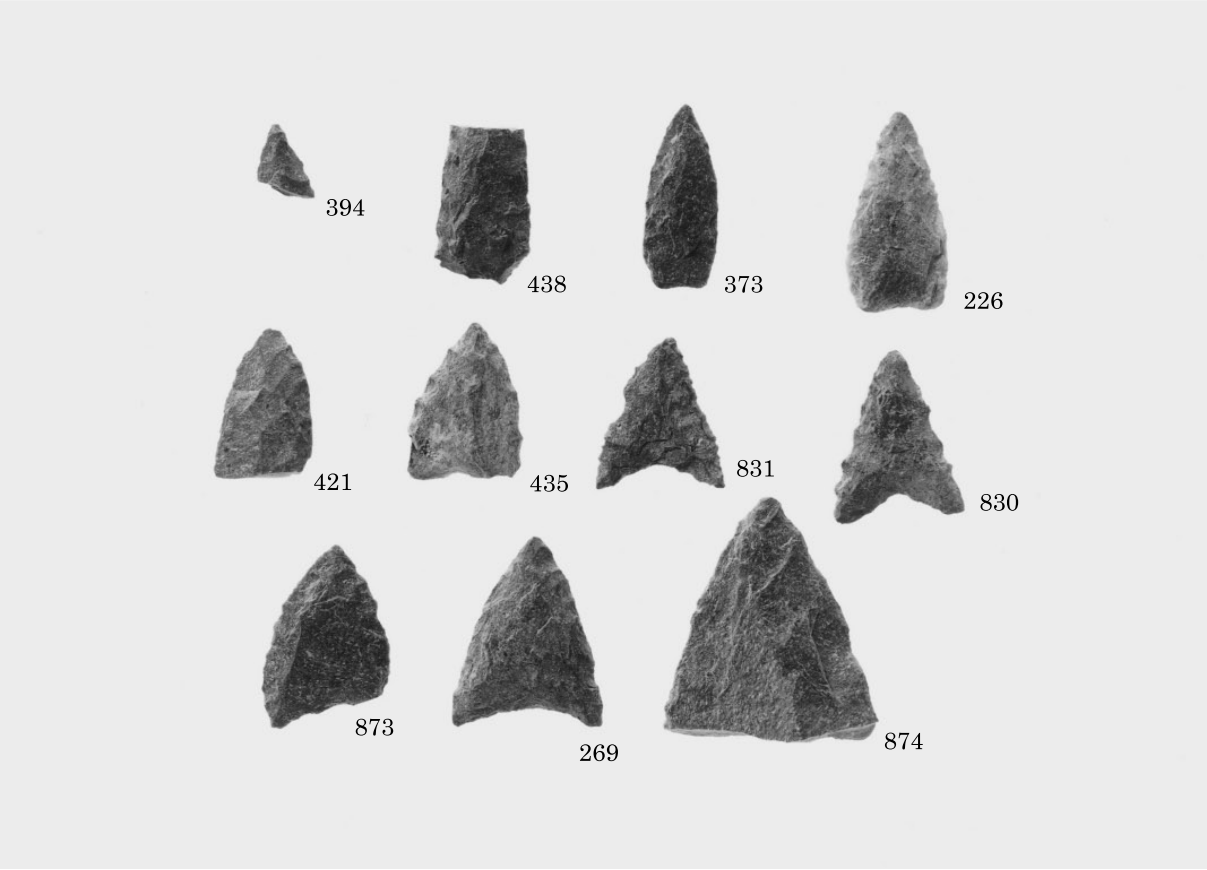


3 SH01,SH03,SX05-SK10,SX08 出土遺物

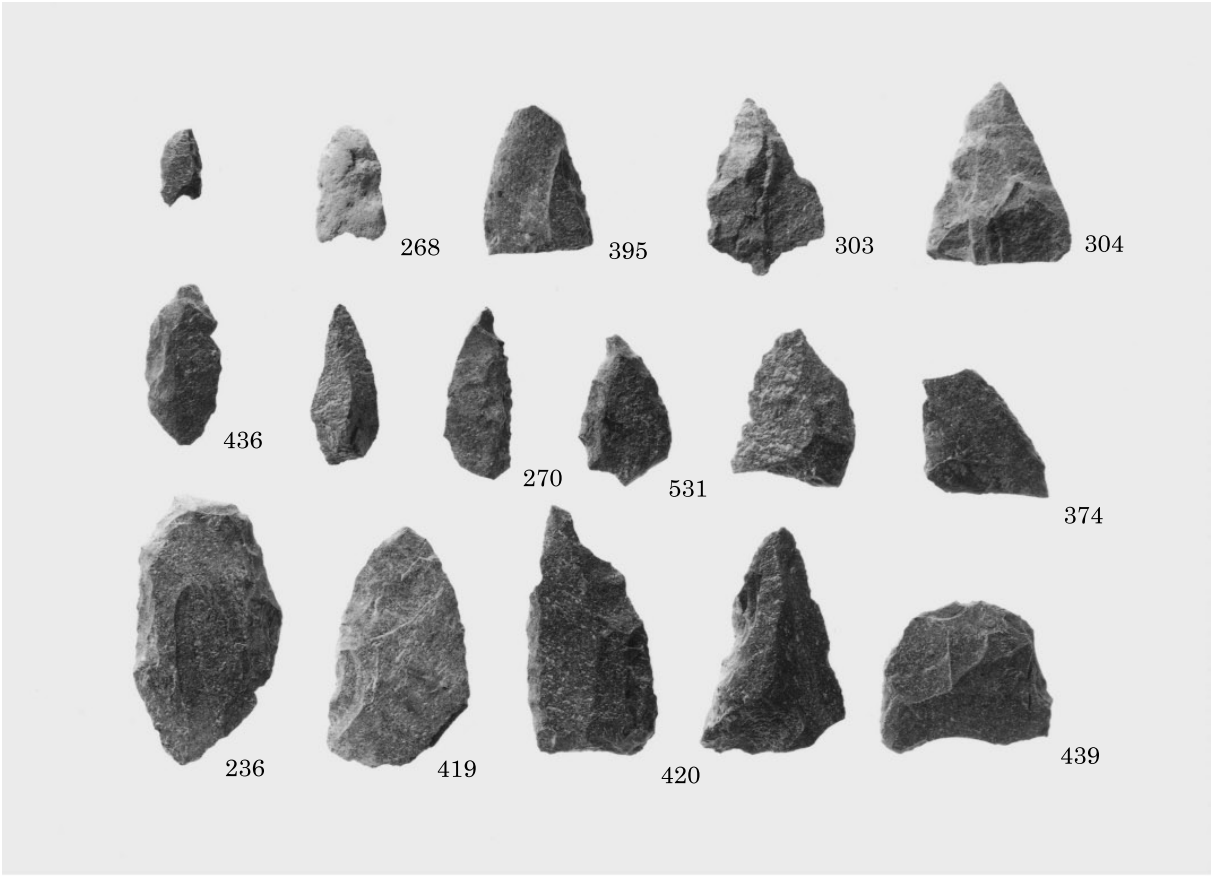
4 SH01,SH03 出土遺物



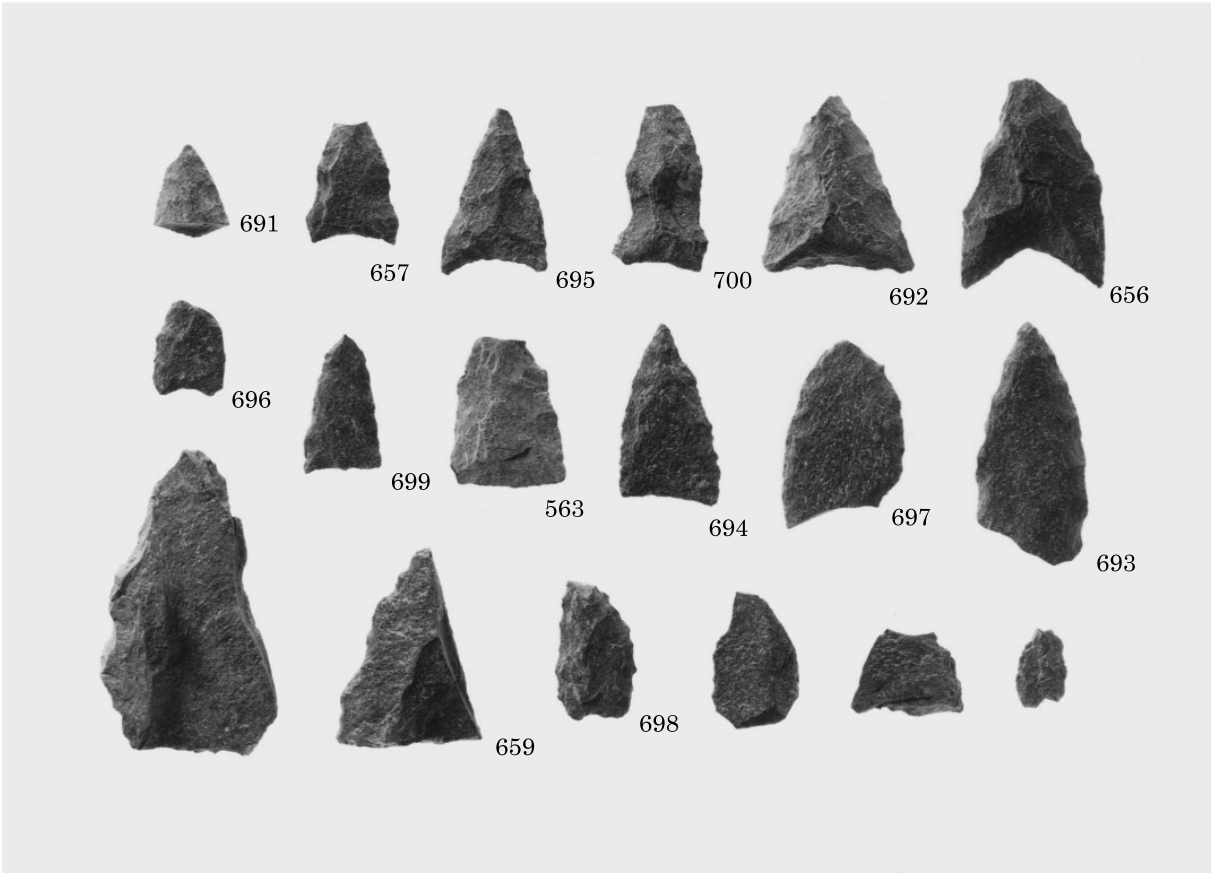
1 SH02,SH03 出土遺物



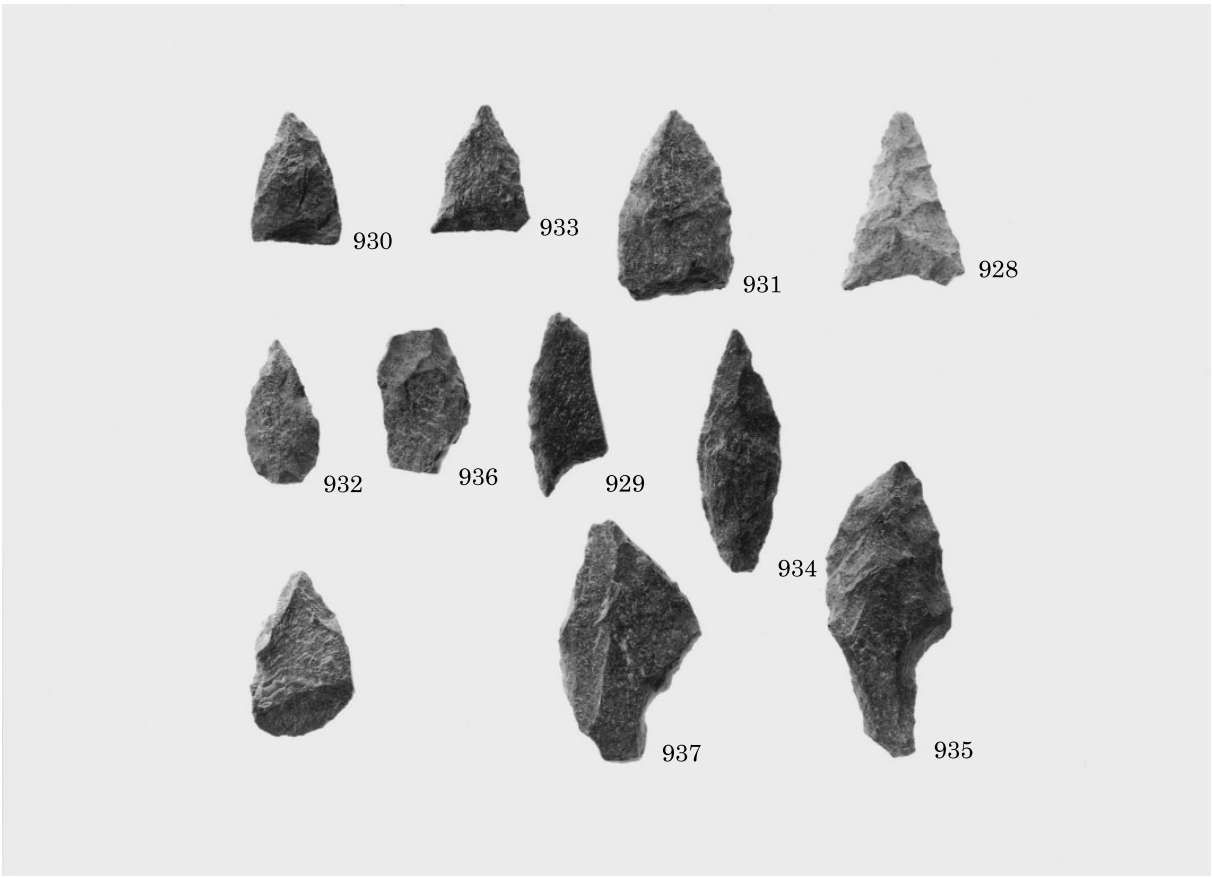
2 SX02,SX03,SX05-SK18,SX05-SK19,SX07,SX13,SX14,SX13・14,SX16,SX16・17 出土遺物



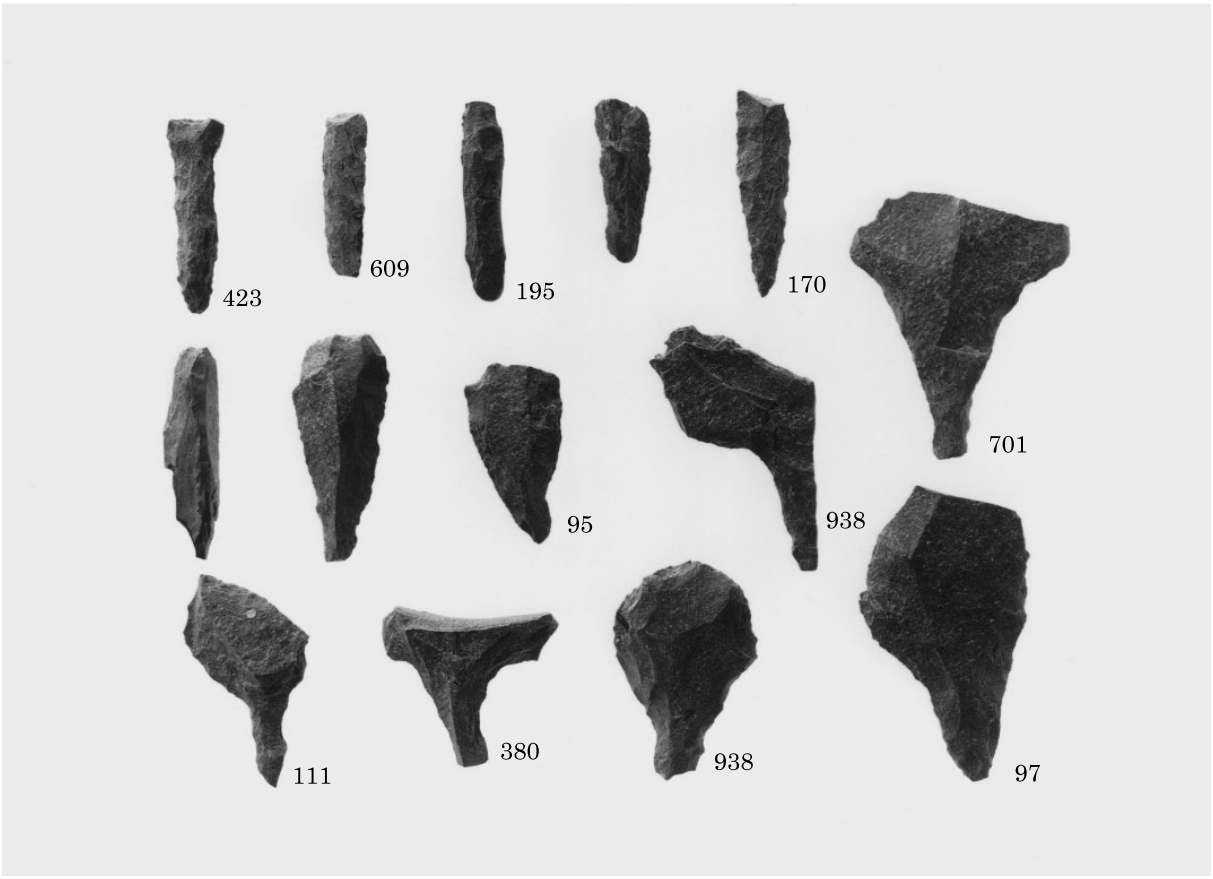
1 SX06,SX07,SX08,SX13,SX14,SX13・14,SX16,SX20 出土遺物



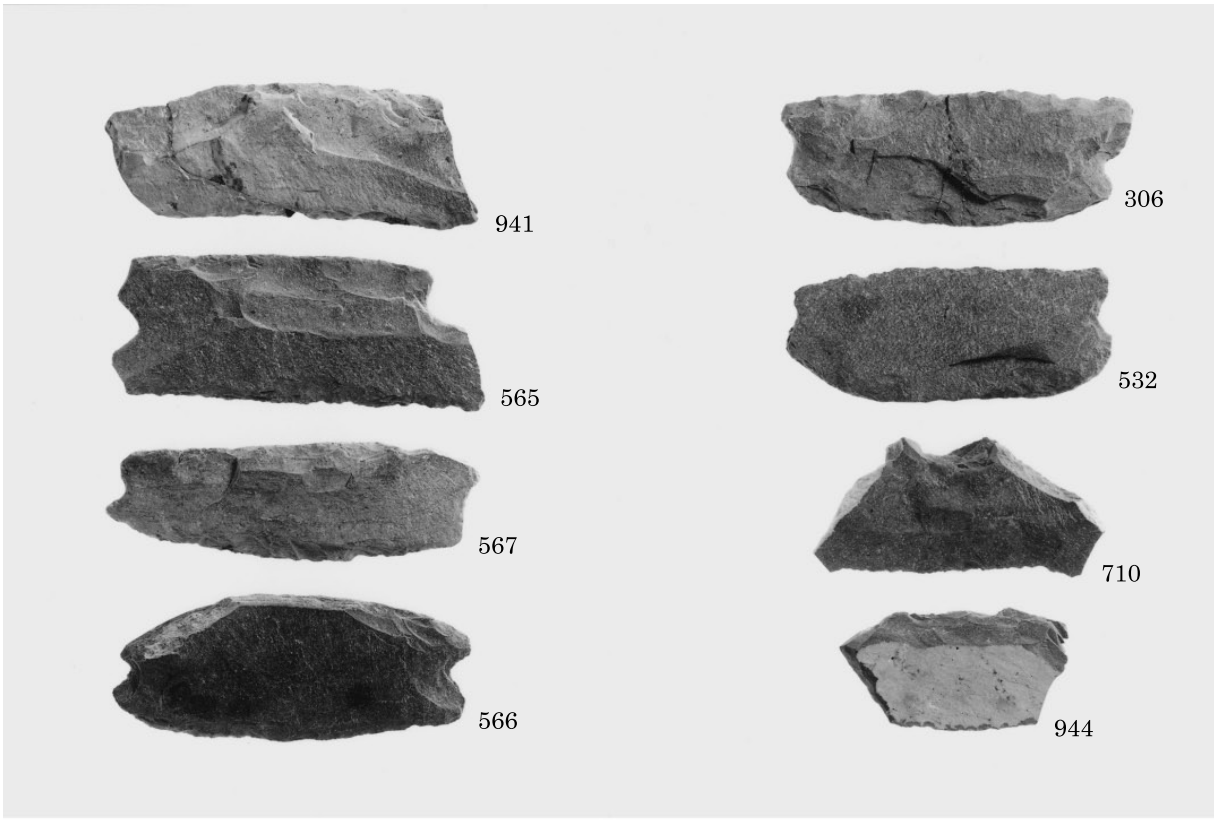
2 SK04,SP31,SP31・32・33,SD05,SD07,SD08,SD11,SD12 出土遺物



1 その他 出土遺物

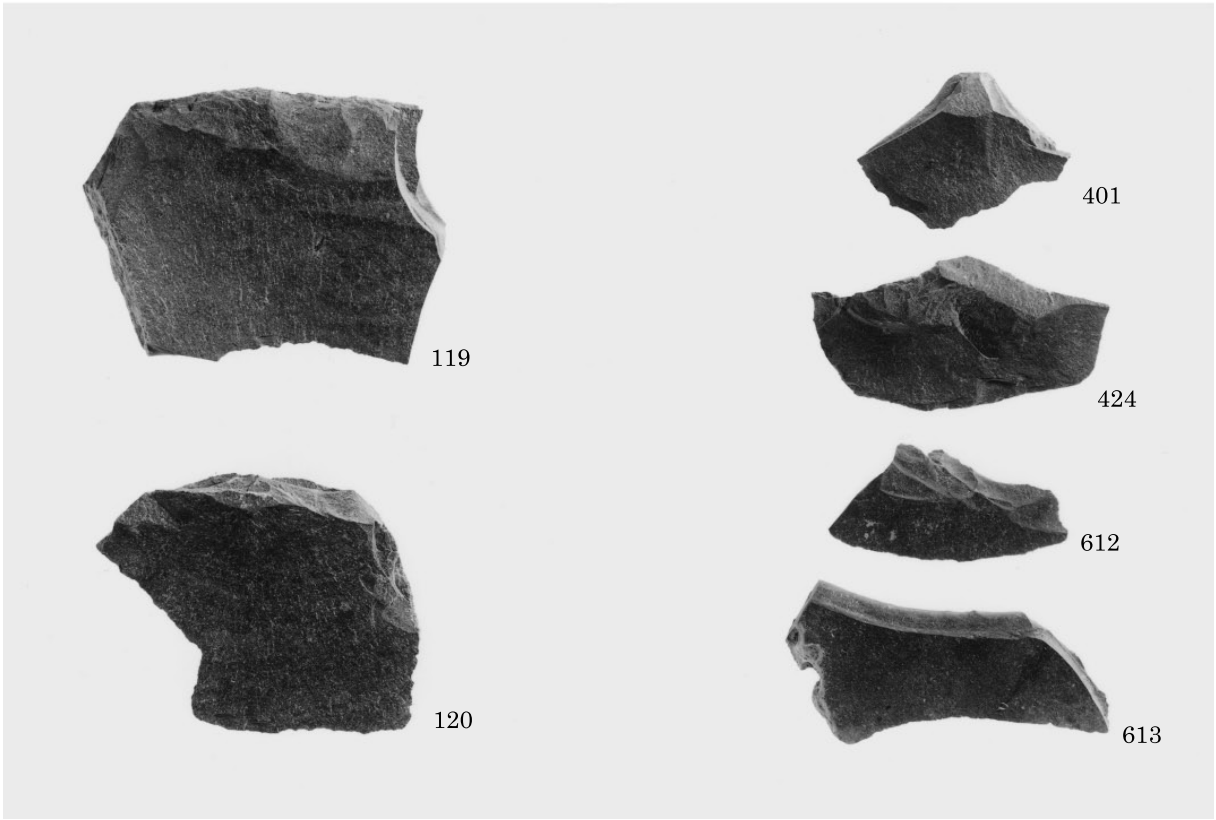


2 SH01,SH02,SH03,SX13,SX13・14,SK26,SD07,その他 出土遺物



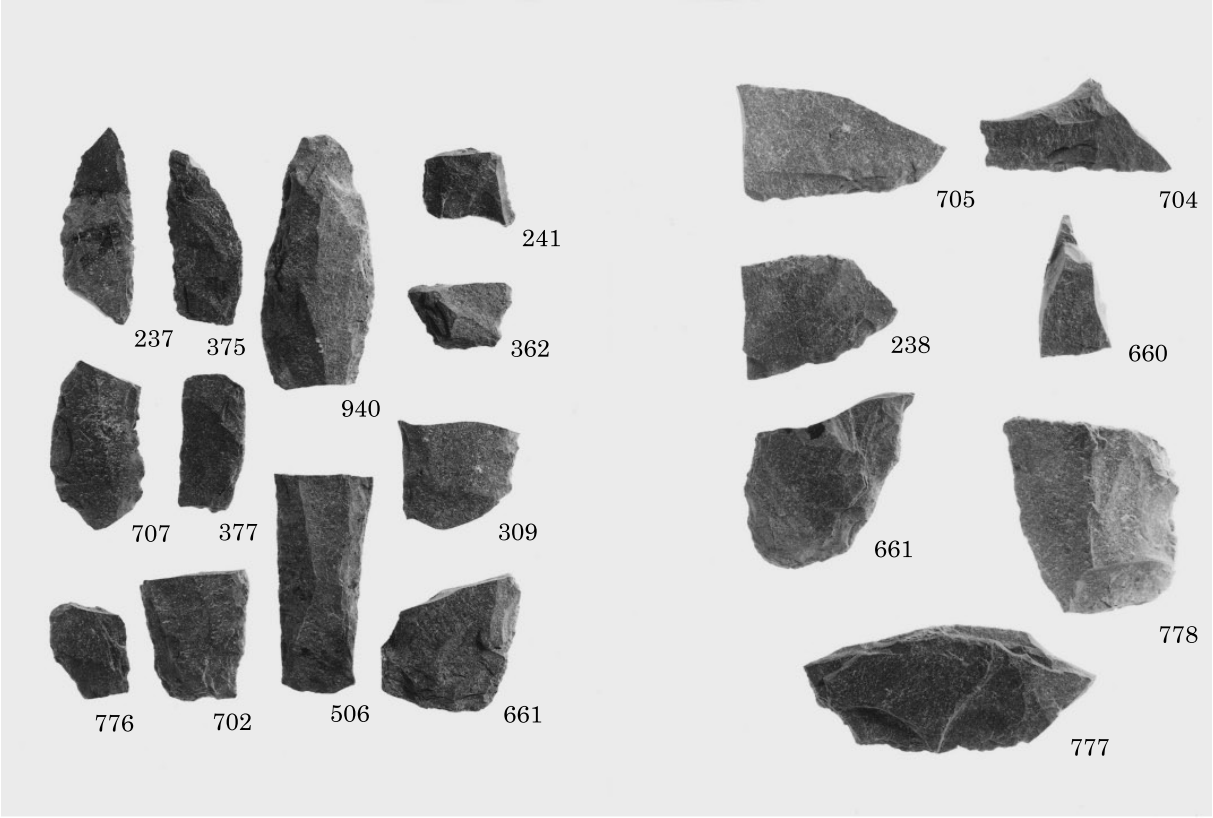
1 SK01,その他 出土遺物

2 SX08,SX20,SD07,その他 出土遺物



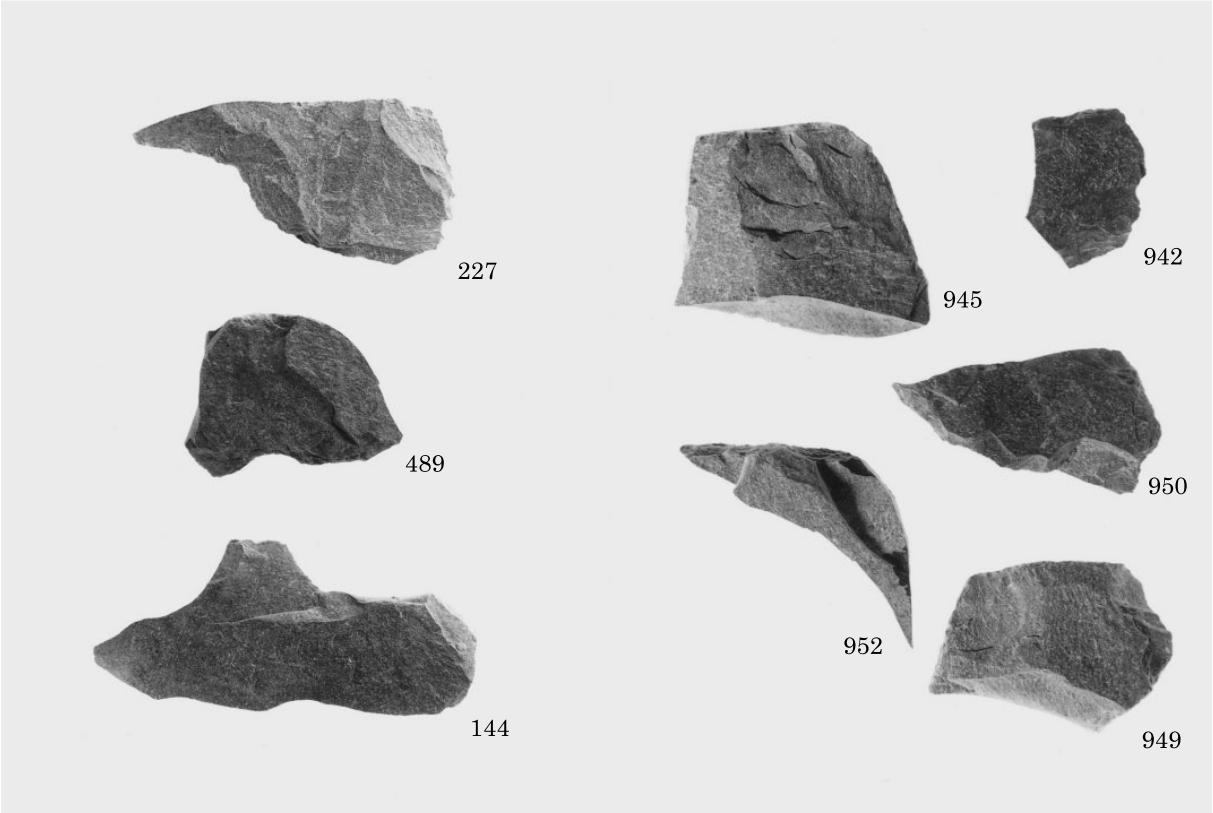
3 SH01 出土遺物

4 SX14,SX13・14,SK26 出土遺物



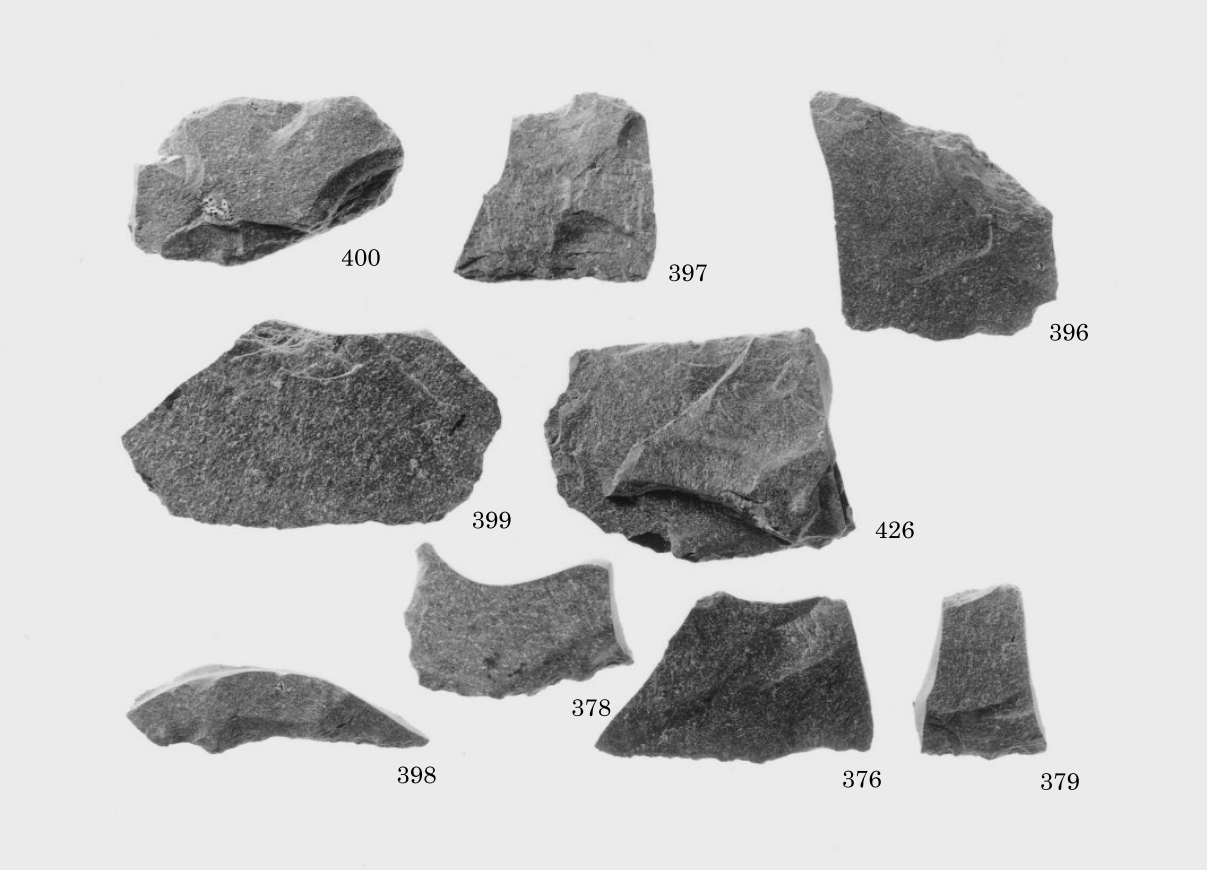
1 SX06,SX08,SX09,SX13,SX19,SP45,
SD07,SD11,SR01,その他 出土遺物

2 SX06,SP31,SP45,SD07,SD11,SR01 出土遺物

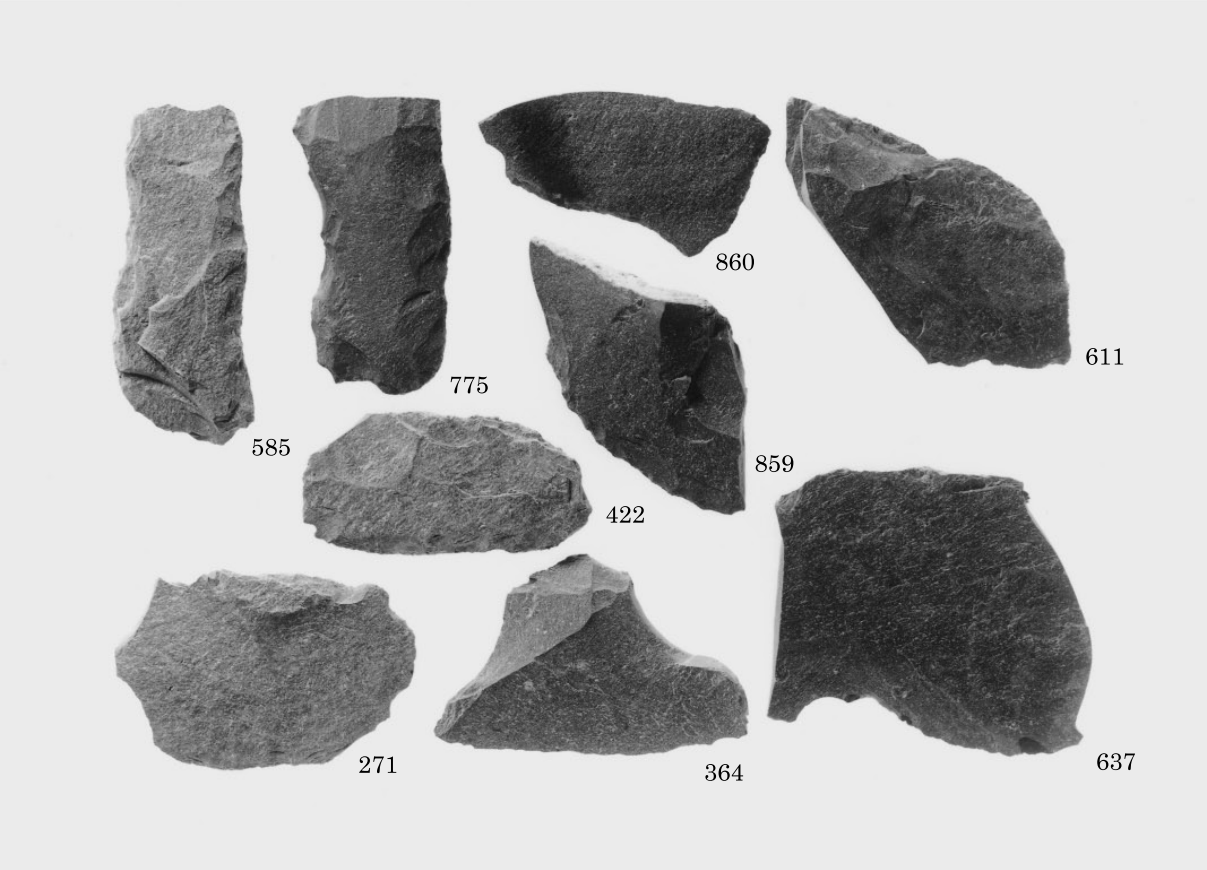


3 SH01,SX03,SX18 出土遺物

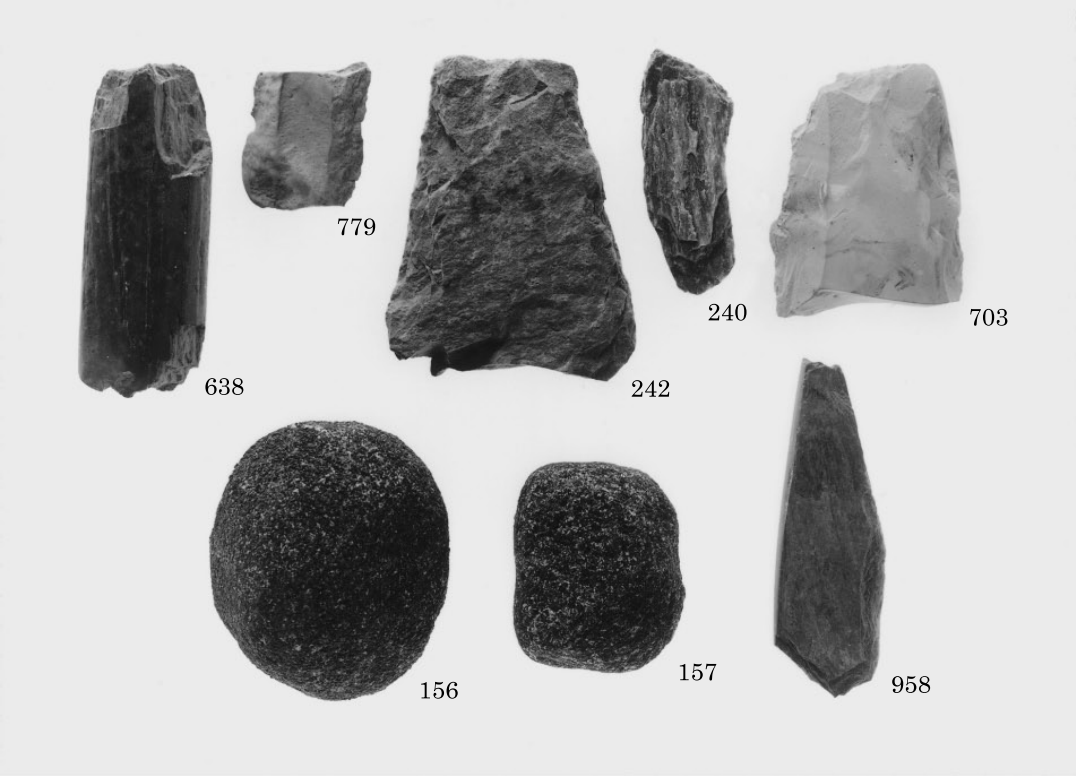
4 その他 出土遺物



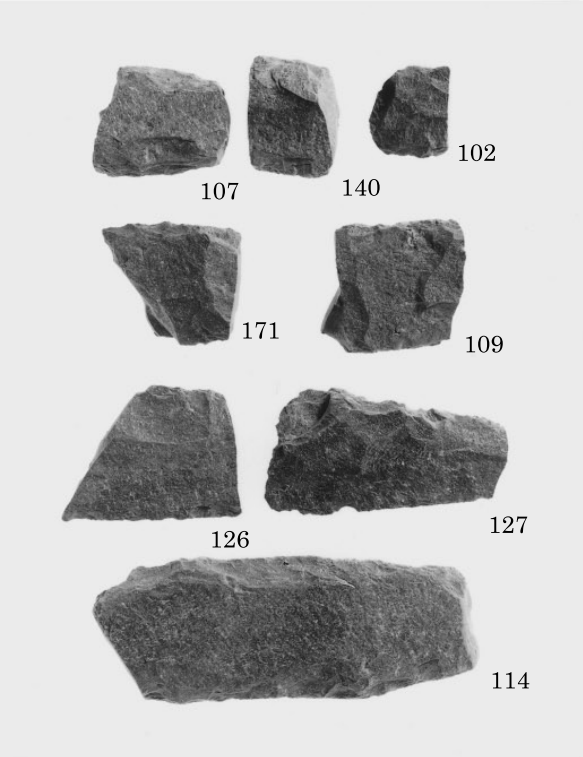
1 SX13,SX14 出土遺物



2 SX07,SX13・14,SK21,SK26,SK27,SR01,SR02 出土遺物

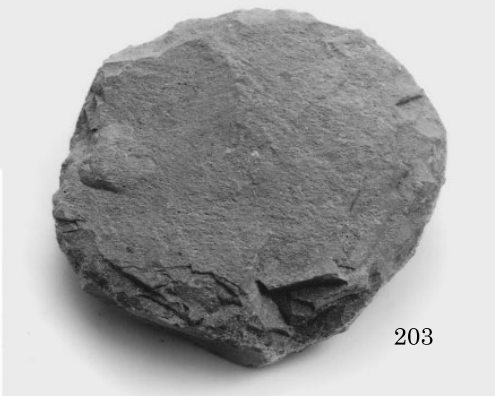


1 SH01,SX06,SK27,SD03,SR01,その他 出土遺物

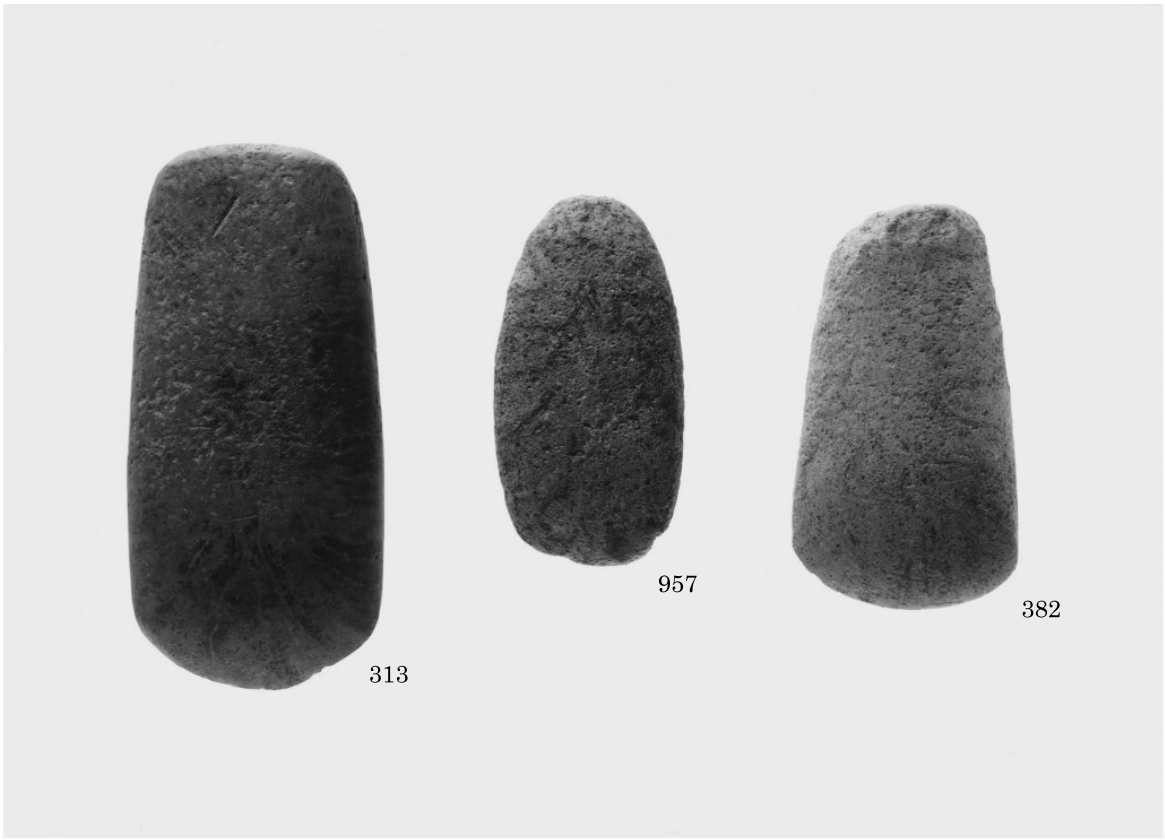


2 SH01,SH02,SH03,その他 出土遺物

3 その他 出土遺物



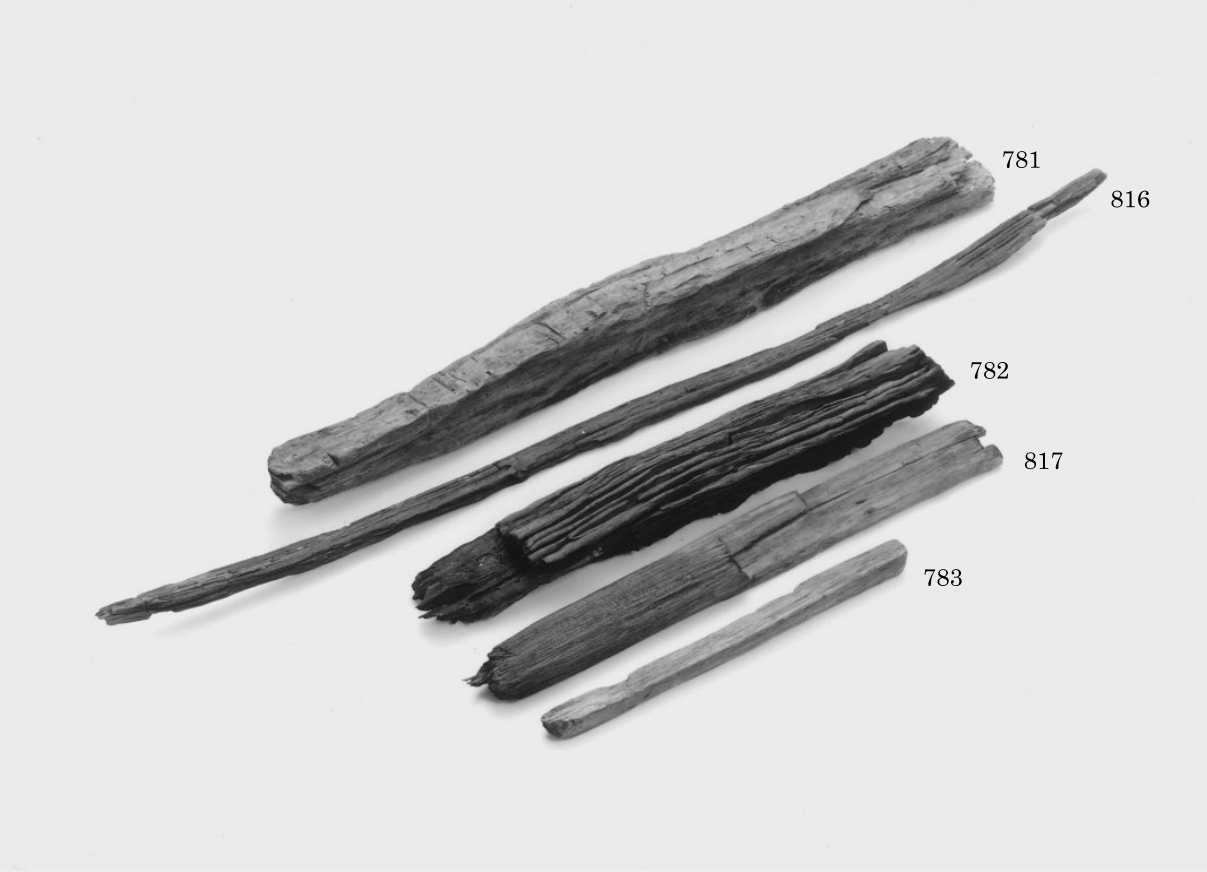
4 SH03 出土遺物



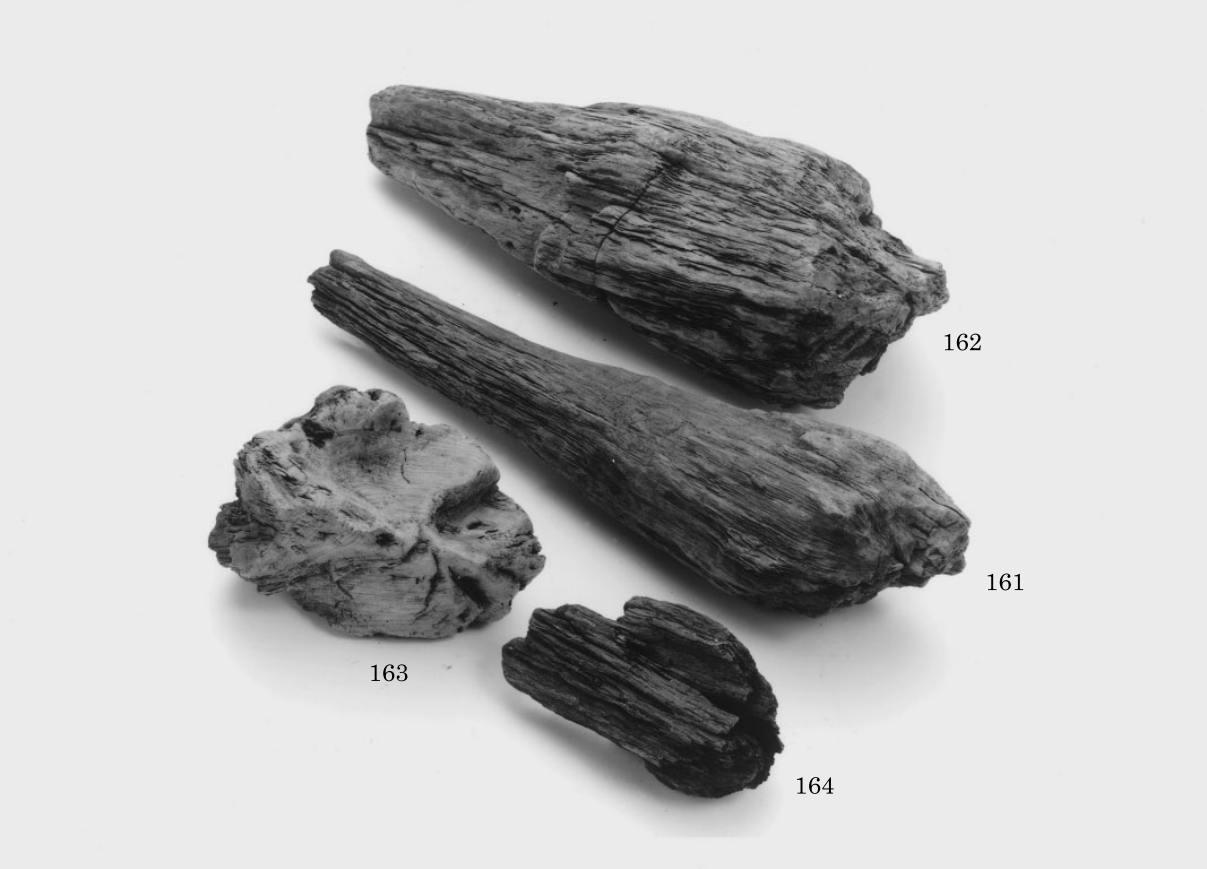
1 SX08,SX13,その他 出土遺物

2 SR01 出土遺物

3 SH03,SX14 出土遺物



1 SX01,SR01 出土遺物



2 SH01 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きたきなしせんがいろじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ　だい２さつ　きたやまうらいせき
書　　名	木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　北山浦遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 137 集
編 著 者 名	渡邊　誠・船築紀子・池見　渉
編 集 機 関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760-8571　香川県高松市番町一丁目８番 15 号　TEL087-839-2660
発行年月日	西暦 2012 年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
きたやまうらいせき 北山浦遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 にしかすがちょう 西春日町	37201		34° 19′ 25″	134° 01′ 43″	2007.11.14 ～ 2008.3.24	3,000㎡	都市計画 道路木太 鬼無線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北山浦遺跡	集落	縄文時代 弥生時代	不明遺構 竪穴建物 掘立柱建物 土坑・溝 土器焼成遺構 ピット 旧河道	縄文土器 弥生土器，土製品，石器， 木製品，粘土塊	

要　　約	北山浦遺跡は縄文時代晩期から弥生時代中期中葉にかけての集落跡である。特に，中期中葉に最も人々の居住の痕跡が認められ，土器製作，石器製作にかかわる遺構および遺物を確認することができた。また，香川県域では非常に珍しい中期の方形の竪穴遺構を多数確認し，今後集落構造を考える上で非常に貴重な成果を得た。 このように，高松平野では貴重な中期の集落跡を良好な形で確認でき，高松市域の弥生時代を考える上で，今後，重要な資料となるであろう。

2012年3月30日　印刷
2012年3月30日　発行

高松市埋蔵文化財調査報告第137集
都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊
北山浦遺跡

発　行　者　　高松市番町一丁目８番15号
高松市教育委員会
印　刷　者　　高松市成合町７４２－１
（株）中央印刷所